



振り回される夏

青潟大学附属シリーズ
高校編
第五シーズン 3

舞夜じよんぬ

——またかよ。

電話が鳴るたびに起き上がるのが億劫だ。もう夜の九時過ぎだというのに何が楽しくて居間でごろごろしてはならないのだろう。父が部屋に引っ込んでくれたのが救いではあるけれども、また延々と続く電話の嵐に耐えねばならないのはやはりしんどい。

「はい、立村です」

——霧島です。夜分恐れ入ります。

もちろん野郎の声だ。何度聞いたんだ今日は。こちらもそろそろ堪忍袋の尾が切れる。

「あのさ、霧島、今日何度目か数えているよな？ 確か一時間前にもかけてこなかったか？」

——おっしゃる通りです。ただ追加の用事がございますもので。

いったい何を言いたいんだ。おちおち風呂にも入れやしない。真夏だから湯船に入らずシャワーで良いじゃないかといわれればそれまでだが、こちらだって気分というものがあるのだ。いろいろすっきりしたいことだってあるというのに。

「明日だと問題あるのかな」

——もちろんです。先輩、お時間よろしいですか？

「できれば明日に回してほしいな。親にかかってくる電話もあるしさ」

嘘ではない。父に母が連絡をよこしてくることは多々あるし、うっかり長電話にひっかかろうものならどんな罵倒が待っているかしれやしない。被害者としてできれば避けたいところなのだ。それを伝えたくとも霧島の耳には全く届かないようだった。

——それではすぐに終わらせます。よろしいですか？ 杉本先輩のことですが。

息が詰まる。のどもとにたまるものはなんなのか。背中が急に冷える。身体が少しだけしびれる。コントロールできないこの感覚が上総にはいまだにわからない。

「杉本のことって？」

しくじった、またあいつの思う壺だ。こういうところが自分の間抜けなところなのだ。二歳も下の後輩にさんざん自分の感情をゆらゆらさせられて、ついひっかかってしまう。もし霧島が例の陰悪な関係の姉に対してくどくど愚痴るようであれば、あっさり突っ放してやってもいいと思っていた。生徒会事情について、とっくに決着がついたはずの問題を引っ張り出すようであればいい加減にしろと怒鳴ったっていい。しかし。

——立村先輩であれば、これは必ずお知りになりたい内容ではと思いましたので、一刻も早くお伝えしたいかなと。ということです。

青大附中二年、生徒会副会長。実質的なナンバー1と呼ばれている次期生徒会長確定者。

すでに評議委員会から権力を奪い取り、学校行事はもちろんのこと、他中学との交流活動も積極的に行き、まれに見る輝ける世代として現在、教師たちからの覚えもよいようだ。その理由がトップに立つ佐賀はるみ生徒会長のそつのなさ、陰で支える霧島生徒副会長の名コンビぶりとあっては誰もぐうの音が出やしない。かつては青大附中歴代最悪の評議委員長として冷笑された立村上総には何も言い返すことなどないはず、なのだ。

少なくとも霧島に上から何か申し渡したりすることのできる立場になんて、絶対なるわけがなかったはずなのだ。決して。

もっと言うなら、

「あのさ、霧島。早速連絡してくれたのはありがたいんだ。けど、本当にいいのか？ お前、あいつのことに興味なんかないだろ？」

——ご興味をお持ちなのは立村先輩の方でございますしね。

世の中に「慇懃無礼」の実例があるとすれば、霧島真、奴が最強のモデルに違いない。しかも全く言い返せないときている。

「霧島、一応、先輩に対する言い方考えような、俺もあまり細かいこと言いたくないけどさ」

——価値のある方々にはもちろん、僕もそのような話し方をいたします。ただ立村先輩に対しては、もう言うまでもないことですから。

「わかったわかった。よくわかったから、さっさと用件話してくれないかな」

もう霧島に、先輩を敬うべき礼儀を教え込むなど考えない方がいい。とっくの昔にあきらめていることだ。上総が何もしなくても時間に任せておけば必ず何か起こるだろう。時間がすべて解決してくれる。ああきつと、そうさ。そうに決まっている。

——少し混み入った話ですがよろしいですか？

やはり長話になりそうだ。上総はそのまま受話器を握り締めたままソファの背の上に座った。霧島真の話はとにかく長すぎる。女子だってこういう奴はそうそういなかった。

——昨日まで青大附中生徒会合宿がありまして、一泊二日でしたが青瀬青年の家にてひたすら語りつくしてきたのですが、その時に興味深い情報を入手いたしました。

やたらとしゃちほこばったしゃべり方をする霧島。一学期の出来事で十分過ぎるほど慣れたし嫌悪感はない。免疫はある。黙って促すのが勝ちだ。

——最近、杉本先輩に殿池先生がずいぶんと接触しているとのことですよ。

「殿池先生がか？」

ぴんどこない。もちろん殿池先生が上総の代でC組の担任だったこと、四十台独身だが顔と比例して子どもっぽいしゃべり方をする不思議なキャラクターの持ち主だということは知っている。ついでに言えば、殿池先生は霧島にとって憎っくきあの……。

——そうです。姉の担任だった、あの殿池先生です。

積極的に接したことはないけれども、もちろん隣のクラスの担任だったこともあるので礼はきちんとする。上総の聞き知る限りのんびりした雰囲気、C組の元気な女子たちも反抗せずむしろ「頼りないおばちゃんだし私たちが支えなくちゃ！」といったムードに持っていったようだ。姉嫌いはなはだしい霧島には悪いが、そのはつらつムードをこしらえたのが、言わずとされたかの方であることは間違いない。

「だが接触たって、教師なんだからそりゃあ話くらいするだろう」

——いえ、しかし、担任でもないのに家庭訪問など積極的に行うものでしょうか。

「する、結構当たり前顔ですよ」

もちろんこれは実体験である。狩野先生の静かな横顔がちらと浮かぶ。そういえばあさっては狩野先生に青大附中に呼び出されているのだがそんなこと言う必要なんてない。

——立村先輩のような問題児ならともかくも。いや、そうか、そうですね。

「お前何一人で納得するんだよ」

がつつり否定ができないのがわが身の脛に傷のある身ゆえ。なんだか霧島としゃべっていると二年後輩の相手に頭を下げねばならない場面が多々出てくる。はっきり言おう、ものすごく悔しい。

——特殊な例はさておき、通常は担任外の、しかも担当なさる学年も異なる先生が出入りするなど、めったにないことではないでしょうか？ 少なくとも僕は耳にしたことがございません。

「まあ確かにな。E組がらみで何かあったのかな」

独り言がもれる。青大附中が杉本梨南に対して行ってきた多々の屈辱的扱いは、上総から見ても許しがたいものがある。そのひとつがつい一週間前まで引きずっていたものであり、上総はいまだにその結末を受け入れていない。肝心要の杉本が大人の判断で受け入れて一件落着……と持っていきたいところなのだろうが、上総からしたら「杉本梨南の単純で素直すぎる発想の結末」に過ぎない。一言で片付ければ「賢い奴らに乗せられた」だけである。いい加減気づけと言いたいところだが、肝心の杉本を捕まえて説教する機会がまだない。電話してもなかなかつかまらない。しつこくし過ぎたら電話自体拒否されてしまうかもしれない。こういう時、異性の先輩の立場を呪う。

電話の向こうに聞こえる霧島の声は相変わらず甲高い。耳に響きすぎる。鼓膜に稲妻走ってそうだ。

——杉本先輩はすでに、B組をメインになさってらっしゃると伺いましたが。二学期以降はあの、最低な女子が通うことになりそうですが。

「その言い方はよくない、話を続けてくれ」

素直に霧島は続けた。珍しい。

——僕の記憶によりますと、姉の進学先でもめ始めたのも今思えばその頃でした。もちろん殿池先生は姉の担任でしたから、何かにつけて家庭訪問を行うことに違和感はありません。母は食べるものものどに通らず夏風邪で伏せておりました。

「そうだろうな、大変だったろうな」

姉・ゆいの進学問題ももちろんだが、霧島姉弟の諍いの激しさを思うにそちらもかなり神経すり減らしていたのではないかと思う。当事者を前にさすかにそれば言えない。霧島家の複雑な事情を本人経由で聞かされてはや二ヶ月近く経つ。

——そこで思い出したのです。

霧島は言葉を切り、思わせぶりに黙った。

「何を？」

——お知りになりたいのでしょうか？

「だって教えてくれるって言ってたから、知りたいさ。聞いてなかったらそれほどでないかもしれないけど」

——立村先輩は正直な方ですね。

もういい、何言われようがかまわない。もう上総は自分が超極上の飾り釣り針にひっかかってしまったものだと覚悟している。最初に「杉本先輩」などと言われていなかったら早く電話を終わらせる言い訳も見つかっただろう。すでに青大附中卒業式英語答辞の事件をきっかけに、上総は霧島を含む多くの全校生徒および教師たちからお笑いの種となることを義務づけられてしまったのだから。事実ではなくても、受け入れる覚悟はある。

「それで、何を思い出したんだよ」

——この時期にいらした殿池先生が、母に何を薦めにきたのか。です。少なくとも絹の着物を新調とか、花火大会のために浴衣を一枚などと考えたわけがございません。

「浴衣はともかく、今から絹を作るってのはないだろ、いくらなんでも時期選ぶし」

——立村先輩さすがです。そこのところだけは褒めて差し上げます。

「ああわかった、褒められてうれしいよ」

投げやりに答えるしかない。夏の暑い盛りに身にまとうならやはり絹の着物だろう。そのくらいの知識は持っている。母に植え付けられた、とも言う。ただ今から緊急で新調するのならば恐らく、殿池先生に縁談でも……いや、そういう話ではない。

——おそらくですが、進路のお勧めではないではないか、ということです。

この一言さえ最初に口にしてもらえれば、こんなくどくどしい話を続けなくてすんだのに。上総は片手で首筋を軽くもんでみた。どうも、血のめぐりが悪い。めまいがする。水分補給しなくてはならないようだ。

「そうか、進路か」

思い当たる節がないわけではない。杉本の進路については上総の方が圧倒的に詳しいはずだ。でなければ自分が許せない。一年時に起こしたさまざまなクラスとの不協和音がきっかけで、杉本の青大附高推薦は現段階で消えたはずだ。現在三年B組の担任である桧山先生の強い説得で、現在は公立の青潟東高校進学のため、今日も学校で特別授業を受けているはずと聞いているが……？

「たぶん、公立の受験勉強やってるんだらうな。その関係かな。でも殿池先生というのが謎だよな、確かに」

——そうです。僕も杉本先輩の進学先が青潟東ということは耳にしておりました。ですからなおのこと違和感があるのです。

「殿池先生、家庭科の先生だったよな。そのあたりかな。杉本は一般的な家事とか手芸とかそういうの得意だから」

——さすが、よくご存知ですね。

殿池先生に対してか、杉本に対してかによって張り手を一発かましてやりたくなるかが分かれる。不必要にヒートアップは避けたい。上総は深呼吸をひとつして、尋ね返した。

「ただ、進学といってもとっくの昔に公立高校受験は決まっているし、考えねばならないとすると滑り止めくらいか。公立落ちてしまったら行くところなくなってしまって困るし、うちの学校でも引き取ってもらえそうにないし、となると選ぶことは必要だらうな」

——立村先輩、非常に近いのですが、違います。

またいやみったらしく甲高い声が受話器から響く。

「なんだよ、答えわかっているなら早く言ってほしいんだけど」

——ヒントは、姉がどのようにして、あの女子刑務所と噂される可南女子に進学したかです。お分かりですか？

「それはもちろん、受験したからだろう？」

謎かけのようなことを言う霧島。ここでいらいらしてはならない。何せ杉本のことなのだ。杉本に関して入ったちょっとした情報が大事件に発展したことが多々あるわけだ。そのひとつにかかわった霧島だてわかっているだろう、そのことは。

——それではもうひとつヒントを差し上げましょう。

満足げに微笑んでいるであろう電話先の霧島、気品ある王子顔していながら、おそらく今の格好はしゃれっ気もないTシャツに短パン姿ではないだろうか。想像するだけでも笑える。

——受験には、一般受験ともうひとつ、別の方式がございますね？

「……まさか」

——先輩の想像なされた通りです。

無言で受話器を握り締める上総を、霧島の声が楽しそうにいたぶってくる。本人に悪気がないのはわかっている。ただ結論につながりたくない。

——推薦か。

一般受験では名前を書くだけで合格できるのではと噂された可南女子高校。

さすがに青大附中評議委員を三年務めた霧島ゆいが一般試験を受けても落とされるとは考えづらい。しかし、万が一ということもある、と殿池先生が霧島親を説得し、私立単願を選ばせたと聞いている。

それが、この時期ということか。

「でもまさか、あの杉本だぞ？ 今でも学年トップを譲らない杉本がまさか」

——立村先輩、僕が申し上げたいのはそこではありません。僕もまさか杉本先輩が可南女子に推薦入学を希望しているなぞとは思っておりません。もちろんです。ただ、時期と殿池先生が絡んでいるということはなんらかのつながりがあるのでは、と思うのですがいかがでしょうか？

「霧島、連絡ありがとう。だがたぶん、少し違っているんじゃないかな……」

耳をひっぱり、髪の毛をかき回し、片手は受話器から離さず上総はまず礼を言うことにした。確かに気になる情報ではある。杉本と殿池先生とのつながりがそんなにあるとも思えないし、周りが違和感を感じるのもわからなくはない。ただ、いくらなんでも女子の底辺高校に無理やり推薦を出すよう説得するとは、現実味なさ過ぎる。

「青潟には私立の女子高がまだまだあるしさ。俺もあまり詳しいことわからないけど、私立の高校にはそれぞれ校風があってそれに見合った学校を選ぶのならまだわかるよ。ただ、杉本の場合可南の校風には、あまり合わなさそうな気がするしさ」

——僕もそう思います。少なくともお嬢様学校の雰囲気ではないですね。

さすがに霧島も上総の機嫌を損ねたいと思ったのか、その辺はあわせてくれたようだ。もちろんだ。杉本が万が一私立高校に進学するとしたら、それなりのレベルでかつ、良妻賢母をモットーとするような学校でないと耐えられないのではないかと思う。音楽の授業でオペラを聴いたり、手芸は一針ずつ縫い取っていく クロスステッチ、料理の授業ではマドレーヌに色のよく出た紅茶がセット。そんな雰囲気为学校でなくては。

——ただ、そういう雰囲気ではないのが青潟東という学校ではないのでしょうか？

「それとこれとは別だよ、公立は別」

あさっては本条先輩にも会えるのだ。青潟東の噂もちゃんと聞いてくる。杉本に会った時にはしっかり伝えられるようにしておかないとならないことだから。本条先輩のことを思い出ただけで心が落ち着く。狩野先生たちをはさむ形にはなるけれども、いいさ、いろいろ聞いてもらいたいことだってたくさんある。例えばこんなしょうもないことをべらべらしゃべられてどう対処すればいいのかとか、ほんとにたくさんあるったらない。

——ただ、やはり気になることがまだありまして。ただ実は、今後ろで。

「後ろ？」

思わず振り返って見るが誰もいない。父も降りてきていない。

——姉がどうも僕の後ろで、様子を伺っているようです。残念ながらここでいったんお電話を置かねばなりません。

思わず心でつぶやく。「霧島さんありがとう」と。もちろん、姉の方である。

——ですが、先ほど僕がお伝えしたかったことは、まだお話できておりません。

「いいよ、明日で。また電話くれればいいよ。俺の方からかけるか？」

——いいえ、このことは機密事項ですので、先輩、明日のお時間はいかがでしょうか？

「明日？ 一応暇だけど」

——それであれば、僕のほうからお伺いいたします。先日お伺いした際に道はきっちり覚えましたから、先輩のように道に迷わないでもたどり着けます。

「俺がいつ道に迷ったっていうんだよ。すごく失礼だな」

——とにかく、お伺いします。朝、十一時ごろに。それでは失礼します！

突然ぶつりと切れた。上総の脳裏には、弟の片手に握り締められた受話器を姉が勢いよくひったくり、毎度の姉弟喧嘩に突入している光景がありありと浮かんだ。ふたりとも同じ顔しているから、さぞ見ものだろう。誰が仲裁するのかなんて、さすがに品山からそんな心配する気なぞない。まあ、難波がいればまた別の展開があるかもしれないが……。

——けど、なんだよあいつ、この前来たばかりなのにまた来るのかよ。

再度電話がかかってこないうちに急いで湯船に浸かった。入った時は熱くとも、汗が気持ちよく流れるせいか身体がほぐれるような感覚がある。麦茶をペットボトルに入れて飲み続けていれば夏の長風呂も多少は楽に過ごせそうだ。

夏休みが始まり一週間が経つが、霧島から電話の来ない日など一日もない。もっと言うなら一回で終わることもない。たまたま今は上総が家にいるから問題も起きないが、今後留守番電話に

残ろうもんならどうなるだろう。父にも、下手したら母にも怪しまれるかもしれない。いや、母にばれたらもっと面倒だ。美里に対してだってかなり勘の鋭いところを発揮していた母のこと、霧島の家庭事情を知ったりしたらどうなるだろう？ 面倒なことになりそうだ。

——まあいっか。明日は誰もいないし、どうせ俺も寝て過ごすつもりだったし。あさってのために。

本条先輩、および狩野先生、それぞれと青大附中校舎で語る予定がすでに明後日入っている。多少霧島に訳のわからないことを言われても、本条先輩にぶちまければなんとかかなりそうだ。狩野先生にも、実は少し数学がらみのことで相談したいことがあるのだが、それはそれでまたその時だろう。

上総は湯船で何度か顔を洗った。半分麦茶を飲み干した後、天井を見上げた。湯船で両足を伸ばしてぐんと反り返って目を閉じた。

——杉本と連絡とらなきゃな。

今頃杉本は、わき目も振らずに青潟東高校進学を目指して受験勉強に没頭しているはずだ。もしかしたら友だちの桜井愛子あたりと仲良く遊んだり、花森なつめに長い手紙を書いたりしているかもしれないが。目標が青潟東高校入学ならば言うことはない。どうせ本条先輩と同じ高校なのだ。上総が二年以降でも足を運ぶ機会はいくらでもある。今のうちに青潟東の詳細情報も得ておけば鬼に金棒だろう。

——他の高校行ったらって青潟から出て行くわけじゃないし、それに青潟東高校ならそんな遠くないしな。殿池先生が杉本に家庭訪問攻撃かけているとしたら、やはり、秋の学校祭で喫茶店企画用意されているとか、そういうほうが可能性高いと思うけどな。関係ないけど、駅前の「アルベルチーヌ」とかいう紅茶のまですぎる店に比べたら、杉本の入れてくれた紅茶の方が確実においしいに決まってるし。それとも手芸かな？ 霧島もずいぶん大げさなこと言ってたけど、結局は霧島さんの推薦入学を馬鹿にしたかっただけなんじゃないかな。いくらなんでも「女子刑務所」っていうのは失礼だよな。明日家に来るようなら、それきっちり言った方がいいんだろうか。どうしようかな。

両手を頭の後ろに組んで、もう一度上総は目を閉じた。

——そう、青潟から出て行くわけなんて、ないんだからさ。

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々（1）

高校一年・夏休み八日目 立村上総の霧島真に振り回される日々

「上総、今日はどこか行くのか」

「行かない。後輩遊びに来るから、部屋にいる」

社会人は七月なんて休みなんてことそうそうない。父がコーンフレークと温野菜のセットで朝食を終え、台所に下げた後上総に尋ねてきた。当然そう答えるしかない。

「後輩か？ お前にしては珍しいな」

どうせ「お前なんか慕ってくれる物好きな後輩がいたのか、ほうめでたい」程度の認識に違いない。上総なりに父の発想は予想ついていたけれどできればそれは個人の判断にとどめてほしい。頼むから。

「母さんも喜ぶだろうな」

「どこがだよ」

すっかりふやけたコーンフレークをつつきながら上総は言い返す。やっぱりそうだ。こうくるんだ。どうせ自分との会話は母に筒抜けに違いない。用心してはいるけれども敵もさるもの、ありとあらゆる手段で上総のプライバシーに忍び込んでくる。

「まあいい、あんまり羽目はずさないならのんびり過ごしなさい。サイダーも紅茶も地下室に箱ごと置いてあるからな。昼はひやむぎでもゆでて食べなさい。おやつは、まあそれなりにあるだろうし」

「わかった。いってらっしゃい」

話を強引に終わらせるため、すぐに台所へ立つ。水で流すのが一番だ。父は白いシャツにネクタイをしっかりと締め、サスペンダーの緩みを指先で確かめた後背広に腕を通した。麻布の涼しげなタイプかもしれないがかなり暑そうではある。ご愁傷様だ。

「まあ、早めに宿題は片付けておけば夏休み後半楽になるぞ。せっかく後輩君が来るのなら、先輩としていいところも見せてやりなさい。ああ上総、忘れてたがその後輩君は、男子なんだろうな？」

——古傷かよ。

いたって平然を装い答える。

「当たり前だろ」

「いや、当たり前じゃないこともあるからな」

言い返せないのをいいことに父はさっさと玄関から出て行った。車庫から車を出す音が部屋の中にも響く。父の愛車のエンジンだけは上総もなんとなくその音が聞き分けられる。

——二年前のことまだ覚えてるのかよ。

上総はまず、父と自分の食器を真っ白く洗い、水気を取ってすぐに食器棚へしまいこんだ。戸をしっかりと閉めた。ついでに生ごみをまとめて地下室に運び込み、客がいつきても恥ずかしくないよう整えた。台所にまで入ってくる奴が友だちでそうそういるとは思えない。あくまでも「友

だち」ならば。ただ、

——あいつだけは、予想つかない。

部屋の掃除、玄関のたたきの水拭き、窓ガラスの乾拭き、いわば主婦業と呼ばれることをさっさと済ませ、上総はもう一杯牛乳を汲んで飲み干した。これで少しは夏休み中、背が伸びるだろうか。切なる願いである。

夏休み初日、押し切られる形で霧島に品山の我が家へ押しかけられた午後。

立村上総の人生においてあれだけ強烈な訪問客はあまりいなかったと思う。

もちろん友だちが今まで来なかったわけでは全くない。貴史も、南雲も、本条先輩も、評議男子トリオも。父がたまに皮肉る相手だってそれはきた。そうだ、清坂美里とふたりきりで過ごした冬の午後も忘れちゃいない。絶対に。

本条先輩を除けばみな同級生で、ちゃんと友だち同士の付き合いをわきまえた連中ばかりだ。少なくともいやな思いをしたことは一度もない。まあ、終業式後に押しかけてきた関崎のような例もなくはないが、決して嫌っているわけではない。先日たっぷり仕返ししてやったのでこれで落ち着いてほしいと思うのだが、どうなることだか。

だが、あいつだけは。

——信じられないよな。あいつ本当に「霧島呉服店」の跡取り息子なのかよ？

いや違う。上総は書棚に並んでいる「和服の着付け方」という写真本を取り出した。

——いや、青大附中の敏腕生徒会副会長なのかよ？

肩書きや環境ばかりが派手すぎて訳がわからない。上総からしたらあれば、

——犬や猫を飼ったらあんな感じなのか？

ちなみに上総は今まで動物を飼ったことなどない。リアルな想像ではない。

まだ九時半を回ったところだ。父の部屋と自分の分を合わせて洗濯機にぶちこみすぐまわす。乾燥機に押し込んで乾かすところまでは終わらせたい。普段ならそれからもう一度日に当てるようにしたいが今日だけはそうもいかないだろう。見落としがないかどうか確認をした後、上総はすぐに自室へ戻った。

もともと精神的に落ち着いている時であれば部屋は片付いている。いきなり霧島が押しかけると騒いだ時も部屋だけは見せられる状態だった。ただ、まさか。

本棚および机の引き出し、すべてをチェックする。見られてまずいものはもちろん参考書やカバーの陰に隠す。ドイツ語とフランス語のちゃんぽんで書いた日記についてはもちろん机の奥深くに押し込むのは言うまでもない。

——あとはないよな、まずいものって。

年賀状も手紙も、特にないはずだ。

——頼むからおとなしくしてくれよ、霧島。

部屋に掃除機をかけ、もちろん窓を開け放ち、机を水拭きした。ついでに部屋のおい消しも思い切り吹いた。薔薇のおいなのさそうさ。すっきりしたろうか。

ここ一週間ほどの熱帯夜を乗り越え、上総なりにもだいぶ慣れてきたこの頃だった。毎年七月から八月にかけて上総の体力は限界を向かえ、夏休みをよいことに半分干からびた状態で過ごすのが常だ。それでも薬を飲んだり体調を整えるテクニックを身に着けたりして、以前のように貧血で即倒れることは少なくなった。全くないとは言わないが、「がまんできる」ようにはなってきたんじゃないかと思う。

ベットにカバーをきっちりかけ、次に飲み物を用意するため地下室に下りる。

自分ではさほど珍しいと思わないのだが、「地下室」という響きを聞くと友だちすべてが一瞬引いたような表情で上総を見る。地下室においておけば無理に冷蔵庫へ押し込まなくても飲める状態には冷えるしただそれだけなのだが。どこか上総の感覚は友だちとずれているのかもしれない。今に始まったことではない。気にしていたら日が暮れる。

——まだ飲み物用意するのは早いか。でも、冷麦かよ。どうしようかな。

もちろん料理は日常でお手の物、かんたん過ぎる部類には入る。しかし、今日は相手があいつだ。あの霧島だ。しつこいようだが「犬か猫」だ。ペットに近い。台所に入られるかもしれない。それは避けたい。上総の部屋に押し込めたいのだがそうもいかないだろう。想像すると頭が痛くなる。

考えたくない。まずは机の前に座る。改めて引き出しから日記用ノートを取り出す。先日、夏休み一日目のページを読み直して見る。



今まで後輩を家に呼んだことはないので、どう扱っていいかわからなかったのは確かだ。ふつうの友だちを招くのと同様に連れてきたつもりだ。普通に部屋の中で話をするだけでいいと思っていた。しかし、彼の場合は今まで自分が経験した客としての態度と全く異なっていた。正直、カルチャーショックを受けている。

礼儀作法が間違っているわけではない。むしろ中学生にしては礼儀正しすぎることもある。家庭のしつけが徹底しているのだろうと推測される。連れて行く途中で手土産代わりに和菓子屋へ寄り道されたし、いわゆる立ち振る舞いはきちんとしている。

ただそれは、家に到着するまでのことだ。

玄関できちんと靴を脱ぎ、部屋に入ってきたとたん態度はがらりと変わった。まず部屋の書棚に目をやり、不思議そうに眺めやる。最初僕の部屋に入ってきた人のほとんどはそれをするのでさほど驚きはなかった。中には本を手取る奴もいるが彼だから珍しいというわけではない。問題は次だ。

いきなり洋服筆筒を開けて、まじまじと僕の服を眺めやるのはなんでだろう？

たまたま夏のスーツ類を全部かけていたのが珍しかったのだろうか？

夏休みに入ったら、例のイベント関係できちんとした格好をしなくてはならないこともあって、いつでも着られるようにかけておいたのだが、そんなに普通ありえないことなんだろうか？

しかも、断りもしないで引っ張り出してきて生地をさわって、その質についていまひとつだとか

、もっとよいものでなぜ作らなかったのかとか、手入れがなってないとか、一方的になぜ説教し始めるのだろう。まがりなりにも彼は僕より二歳下なのだ。何を考えているのか正直全くわからない。

その後、彼がわざわざ立ち寄って用意した和菓子を食べながら話をしたのだが、全く持って落ち着かない態度の数々に僕は呆然とするばかりだった。机の引き出しを興味ぶかそうに覗きこもうとするし、本棚にいたっては一冊ずつ数えてはすべて読んだかどうかを試験しようとする。音楽テープにいたっては一本ずつ用意して、軽薄な音楽ばかりだとかだたらと批判ばかりする。部屋をきちんと掃除しておいてよかった。下手に汚れ物がたまっていたりしたら何を言われるか想像がつかない。

それでも、最後は機嫌よく帰っていったのでそれなりに楽しかったのだろうとは思う。彼はいったい僕に何を求めているのか、やっぱりいまだにつかめない。



過去の経験で両親に読まれても問題のない程度の内容を書きとめておいた。

実際は違う。霧島の暴走振りとはとてもだが人には言えそうにない。

もちろん洋服に興味深々で一着ずつ筆筒から出し、

「この生地は高いように見えてかなりコスト抑えてますね」

とか、

「この染みなぜ早くクリーニングで落としてもらわないんですか」

とか、

「第一、この色のどこがよくて選んだというんですか。趣味が悪すぎます」

とか言い放ったのは事実だった。霧島がなぜ洋服に対してそこまで拘るのか、想像は若干つく。「霧島呉服店」の総領息子なのだし、いろいろとよいものに触れる機会が多いおだろう。しかし、仮にも二年年上の先輩宅にあがっていきなりする行為ではないだろうと上総は思う。

いや、洋服についてはまだ笑って許せる。職業病なのかもな、と流せるところもある。

問題はここから先だ。

——あの、いくらなんでも昼間からあんなことべらべらしゃべるって、いくらふたりきりで、男子同士だからって、あのさ、いくらなんでも。

上総もそれなりに下ネタに対する耐性はある。いや、人並み以上に興味を持っているほうかもしれない。かつては淡白だと分析していたが今ではとてもだが否定できない。一時期は病気じゃないかと真剣に悩んだこともあるが、友だちの本音を鑑みてまあ、十五歳の男子としてはごく普通の反応なのではと認識している。本条先輩というきわめて極端なロールモデルがいることもあって、今は冷静に受け止めるようにはしている。

だが常識としてその手のネタは、カーテン閉めてからのものだろう。

軽く「お前、あいつに立たねえのかよ?」「お前巨乳好きだろ?」「初体験はいつなんだよ

おい」程度の突っ込み合い程度ならまだわかる。貴史や南雲、その他評議三人組とも主に受ける形で話すことも多々ある。しかし、

——いきなり部屋の中で、まじめな顔して、あんなこと言い出すことないだろう？

想像するのも上総としては恥ずかしくなる。ふたりきりで気を許したのだろうと好意的に受け止める努力はする。しかし、いくらなんでもあれはないだろう……。

——いくら仲のいい友達にだって普通隠すぞ。そういう気持ちがないとは俺も口避けても言えないけど、でもさ、リアルにだよ。あんな妄想を、特定の人の名前出して話すのはちょっとまずいよ。それに俺だってそんな霧島のこと、詳しいわけじゃないしさ。

いや、詳しいといえば詳しい。すでに一学期の段階で、上総は霧島の家庭事情を一通り聞き知っている。根掘り葉掘り聞き出したわけではない。例のごとく一方的に話すのを聞くだけなのだ。

いわゆる健康な思春期の男子である以上、否定ができない感情ではある。

気持ちを汲み取れなくもない。

ただいくらなんでも。

上総は薄いアルバムを開いた。二年の評議委員宿泊研修の際に撮影した記念写真だった。

——俺もいくらなんでもここまではな。

無表情で、凍った眼差しの女子ひとりを探す。半そでで襟のリボンが品よくまとまっていたその女子。写真写りはぶっくらしているように見えるが、それは上半身のみ妙に膨れて見えるだけ。実際は限りなく細く、壊れそうなのに。上総はその女子がどれだけもろいか、触れたらやわらかいか、震えているかをよく知っている。もっとも「触れた」のは一度だけだ。名誉のために強調しておく。霧島に気づかれたら何妄想されるかわからない。

——けどさ、なんであいつ、俺にそんなこと話すんだ？ 相手が誰だかわかってるだろ？ 俺があいつの大好きな、その、あの、彼女と対立している相手と親しいなんてこと、承知しているはずだろ？ 普通だったら軽蔑したっていいだろ？ 一体なんで、俺にわざわざ逐一報告したがるんだ？ それも、そんな、普通男子同士でも話しそうにないことをだぞ？

すぐにアルバムを片付け、ノートもしっかり机奥にしまった。前回の例からするとおそらくだがあいつは、野獣のごとく部屋をあさりまくり、ひとつひとつひっぱりだしては無理やりその手のネタにつなげようとするに違いない。部屋に呼ぶ以上は覚悟している。話とことん聞く覚悟もある。ただ、できるだけ火の粉が飛ぶのは避けたい。

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々 (2)

十一時に来るとかぬかしていたが最初からそんなの信じちゃいない。

十時半前にしっかりチャイムが鳴ったではないか。

——やっぱりな。

すでに準備は整っている。いつでもかかってこい。すぐに玄関に向かう。鍵をはずしてまずは出迎える。

「先輩、おはようございます」

珍しくも今日の格好はいたってまっとうだ。上総からして夏のすっきりした服装とは、すなわち「ポロシャツか布帛のシャツにチノパンあたり、できれば薄いベストを羽織る」といったコーディネートのこと。個人的な好み出しまくりだが、別に口に出すわけではないし勝手に決め付けておく。今目の前にいる奴は、上総個人のドレスコードをしっかりと守っている。白地に細い紺の縦ストライプが入ったシャツに網のベスト、ウエストはきっちりとベルトで決めている。細い体系がますます削られて見える。手には菓子折りの入っている紙の手提げ袋、腰にはウエストポーチときた。

「自転車？それとも自動車？」

「自動車です。この暑い中とてもですが自転車に乗る気にはなれませんので」

気持ちはわからなくもない。品山駅の電車本数を考えれば早く着くのもいたしかたあるまい。まずは部屋に上げることにした。

「ほんとに道覚えるの早いよな。迷わなかったんだ？」

「昨夜お話した通り、僕は記憶力よいので」

髪型もきちんと整えられている。乱れていない。靴をきちんと揃え、しずしずと上総の後について来る。まずは居間に通すことにする。

「今日は親もいないから、まずは飲むもの持って来るよ。ラムネでいいか？ ジュースとかも一応あるけど」

「お構いなく」

そんなわけいかないので地下室から用意しておいたラムネをそれぞれ一瓶ずつ並べた。ガラステーブルをレースで被い、その上から薄いビニールを重ねてある。さらにコースターも竹製のあっさりしたものを用意済み。ガラスには先日お中元で父がもらったらしい巨大なみかんゼリーを封じた状態で載せて持っていく。霧島を迎える準備は一通り終わっているはずだった。

「まだ昼には早いだろ？ あとで何か作って食べようか。それと、とりあえずうちにあるものだけど、冷たいうちに」

「ずいぶん大きいゼリーですね」

「うん、よくわからないけど結構有名な店のものらしいよ」

霧島がゼリーのパックをひっくり返し、賞味期限やメーカーなどを丹念に確認している。

「どうした？ 何か気になるのか？」

「いえ、どこの店のものなのか、覚えておきたいので」

——物好きな奴だ。

一通り目を通した後すぐにパックのフィルムをはがし、ガラスの入れ物にまるく載せる。ぷるんと震える。黄色いゼリーがゆるゆると動く。

「いただきます」

一口、スプーンで流し込み、大きく頷いた。

「これはおいしいですね」

「そうか？ じゃあ俺も食べてみるよ。そうなんだ」

上総が返事すると、霧島はいったん食器を置いてウエストポーチからメモ帳を取り出した。白いビニールの表紙がかかった手のひら大のノートだ。空になったゼリーのパックをまたひっくり返し、何かをメモにとっている。

「何してる？ 気になることでも、あるのか？」

「はい。今後のために役立つので。ここの洋菓子の店を覚えておけば、これから先いろいろとつかえる時もあると思います」

「何に使うの」

口に運びながら上総も尋ねた。確かに甘ったるくなくてさっぱりしていて、涼しく食べるには十分満足できる品だった。ただ霧島が一口しか食べていないのにメモ帳を取り出すのがなぜなのか、ぴんどこなかった。

「立村先輩、やはり評議委員会から離れてらっしゃるので勘が鈍ってますね」

冷ややかに微笑みつつ、霧島はすぐに答えた。

「誰かの家を訪問する際に、僕なりに手土産を選ぶ場面が出てきます。一回程度なら何でもいいですけど、二回、三回と足を運ぶ際にはいつも同じものではまずいでしょう。そのために僕個人の手土産用候補先店リストを作成しております」

「なるほどそうか」

手を軽く拳固で打った。そうそう、その通りだ。本条先輩にも別の表現でよく言われていた。挨拶代わりにプレゼントが必要な時、ダブらないようにするための対策ということでだった。霧島の皮肉は痛い、正論でもある。素直に認めることにする。

「ということは、このゼリーの店も候補に入るといことか。誰かに持っていく予定でもあるのか？ 友だちの家とか親戚とか？」

「いえ、今ではなく、近い未来です」

霧島は冷ややかに笑う。

「これから先、僕が長いお付き合いのお客様にご挨拶する時などに必要なはずですよ」

「そんな先のことまで考えているのか」

「当たり前です。今でも本当は遅すぎるくらいですよ。立村先輩はずいぶん気楽にお過ごしなのですね。いただきます」

いやみっただししい台詞を残し、すぐに霧島は残りのゼリーを平らげた。

——これを他の奴の前で言ったらどうなるんだ、こいつ。

霧島真言動対策予防接種は十分受けている。もう怒る気もない。大物なのか単純に常識知らずなのか判断に迷うがあまり深いことは考えないようにしている。この程度でかっかしていたら、午前中で噴火してしまうに決まっている。そんな無駄なエネルギーを使う気もさらさらしない。上総としてはむしろ霧島本人の精神状態や不安な状況を把握するために気を遣いたいと思う。前から感じていた通り、霧島の意識は将来呉服屋の若旦那として切り盛りするための顧客おもてなしに向いているのだろう。まだ十四歳だというのに将来への意識が高い。もともと青大附属の連中は自分自身の未来図をリアルに持っている奴が比較的多い。まだ将来の職業すらあいまいな上総にとっては、肩身狭いことに違いはない。

——この前も言ってたな。俺の服を散々さわり倒した挙句、「指先で生地のよしあしを見分けられなくては将来困りますからね」とかなんとか。あれも今の話につながっているんだろうな。人に薦めるなら着物について細かく説明しなくてはならないだろうし。

「霧島はいつもこんな風に、将来の仕事を意識していろいろ勉強しているの」

ふたつめのゼリーパックを開いて口に運びながら上総はさらに尋ねた。

「もちろんです。誰でもそうではないのですか」

「いや、俺はまだそこまで考えてないし」

もごもごまかす。霧島はゼリーの入れ物をテーブルに置きなおし、振り返った。

「まあそうですね、僕の同級生たちを見ても、将来に対していい加減な奴らばかりですからね。社会に出たら力関係がひっくりがえるかもしれないのに、いばりくさる奴とか多いですね」

——それをお前が言うのか？

突っこみたいががまんする。ただ、すべての連中とは言われたくないので言い訳だけはしておく。

「俺の知っている人で、中学一年卒業段階で退学して将来のために修行に出た人もいるし、その他にも画家を目指して今から大学の授業受けている奴とか、青大附高の推薦を蹴って医学部入学に有利な大学目指した人とか、結構いるよ。言いふらすわけではないけど、それなりに将来のことを意識している生徒がうちの学校、かなり多いと思うけどな」

「先輩の仰る方々はだいたい把握できました」

確かに、目立つ奴ばかりではある。霧島も納得はしているらしくさらに二口ゼリーを片付けた。

「ですが、僕のように将来を見定めて日頃の行動をコントロールしている人間は少ないのではないのでしょうか。僕は小学生の頃からこれをしてたら将来プラスになるかどうかを見極めて行動してきました。商売に関してのノンフィクションや、和服についての基礎知識をまとめた本や、お得意様の世代に合った女性雑誌を中心に読書したり、などです」

「それ、面白いのか？」

「はい。僕が将来どのような店主になるかを想像するには役立ちます」

まあ、和服に関する勉強は必要だろう。呉服屋の跡取り息子なのだから。実体験をまとめた本があるのならそれを参考にするのもわからなくはない。ただ、女性雑誌とはどういうことだろう？ 話の内容からしてどう考えても「週刊アントワネット」のような娯楽雑誌とは考えづらい。

「その雑誌ってどういうこと書いているのかな」

「たとえばお得意様が日々どんな生活を送っているかということですね。具体的に言いますと、ええと、着物を購入するお客様は休みの日にどういうところに着ていくのかとか、レストランとか美術館とかお茶席とかお見合いとか、いろいろイメージするわけです。またどんなものを買っているのかとか、どんな芸能人に興味があってどんなファッションに影響を受けるのかとか、そういった内容です」

「そうか、イメージしておけばこれから先、どういうものを薦めたりできるかわかるもんな。鋭いよ」

霧島は満足げに笑った。一気にゼリー二個目を平らげた。

「それだけではありません。お客様は店にいらした時にいつも買ってくれるわけではないのです。暇つぶしにおしゃべりをしたりもするのです。その時に会話の糸口を増やしておくために、共通する情報を仕入れておくことも必要なのです：

ごもつとも、ごもつとも。これも本条先輩から言われたことだ。上総が近い将来誰かに惚れて口説こうとした場合、相手の情報を集めることももちろんだが興味のある雑誌を調べておくのも有効だ、といった内容だった。

——本条先輩すごいよな。明日、会えるんだよな。

「立村先輩、何笑っているのですか」

「いや、なんでもない」

本条先輩のことを考えるだけでわくわくするなんてそんなこと言えやしない。

「とにかく僕は、すべての生活を将来のために費やしているというわけです。どうして他の連中は自分の未来を考えずに無駄な日々を送っているのでしょうか。理解しかねます」

ならなぜ、今、ここにいる？ 問いかけたいのだが、また強烈な言い返しが待っているだろうからあきらめる。それにしても霧島のものの言い方、上総がよく知るある人間によく似ている。もしかしたら免疫ははるか前から身につけていたものなのかもしれない。

「先輩は明日どうなさるのですか？」

迷う。短く答えた。

「用事があるんだ」

「何の用事ですか？」

「知り合いに会うんだ。だから外に出る」

ふうん、とばかりに霧島も頷き、組んだ手を膝に乗せた。

「羽飛先輩と清坂先輩ですか」

「いや、違う」

本当のことをあっさり答えてもいいのだが、何となく制するものがある。

「あのふたりとは別の日に会うつもりなんだけどさ。自由研究一緒にやるから」

「自由研究のテーマとは？」

ずいぶん食い下がる。まあいいか。明日の予定に触れなければ。

「アメリカの有名な画家がいるらしいんだけど、その人についての研究。美術については全然わからないからあの二人に任せておいて、俺がやることはその評論集を訳することくらい。結構量があるらしいから時間もかかるだろうな。間に合えばいいんだけどさ」

「美術はお嫌いなのですか」

「嫌いってわけじゃないけど、詳しい話されてもわからない。あのふたり、いわゆる前衛芸術大好きだから趣味はちょっと合わないな。きれいな風景画とか見ていいな、くらいは思うけど」

美術についてはいまだに謎の部分が多すぎる。羽飛と美里のふたりが選んだ前衛画家……いまだに名前は聞いていない……の歴史を紐解くにあたり、日本ではまだ翻訳されていない資料が図書館に埋もれているのだそうだ。それを探すところまではふたりにまかせておき、原文が到着した段階で一気に片付ける予定でいる。麻生先生の嫌がらせにも似た「複数人での自由研究」だがそんなことでめげる上総ではない。あくまでも自分の得意分野に問題を引き寄せて勝負をしようと決めている。ざまあみろというところだ。

「僕も美術については自分で勉強しておりますが、奥が深いですね」

軽く留めた後、霧島は詳しい日取りを尋ねてきた。

「いつ頃お会いするのですか」

「向こうの状況待ちかな」

事実なのだから仕方ない。

「委員会やっていた頃は毎日学校に通っていたからしょっちゅう顔を合わせていたけど、今は夏期講習も八月に入るまで休みだしせっかく休みなら楽しみたいから、無理には行かない」

部活動、委員会活動している奴らは今日も学校に向かっているだろう。珍しく休み中は何もしなくてすむ現在、有効活用もちろんしたい。

「そうですか」

これ以上霧島は突っ込んでこなかった。胸、なでおろすのみ。こいつが上総の夏休みスケジュールについて興味津々なのは、この前家に遊びに来たときから気づいていた。

「それはそうと、忘れておりました。こちら、うちの母よりこちらをぜひ、お昼に召し上がるようにとの託でした。ぜひ、召し上がっていただけますよう」

「そんな気、遣わなくてもいいのに」

紙袋の中身を取り出し、意味ありげに唇をゆがめる霧島。ぴりりとくる何かを感じる。どこぞの有名和菓子店の高級ようかんかそれともバターのくっつき聞いたクッキーか。あれだけ手土産に拘る霧島のことだから、それなりのものなのだろう。

取り出されたものを見た。

何度も目を疑った。

——なんだこれ？

ホワイトソースの缶詰、たまねぎ、ほうれん草、ベーコン。そして大袋のスパゲティ。

ベーコンと野菜類にはご丁寧にも巨大なドライアイスがくくりつけられている。誰かが持たせ

たものであろうことは予想がつく。

「これ、もしかして、作るための材料、か？」

唇をくい上げ、霧島は笑顔を満面に浮かべて答えた。

「見ての通りです。先日お伺いした際に先輩がご馳走してくださったリゾットと野菜スープが非常においしかったということもありまして。母と相談し、せっかくならばここでホワイトソースのスパゲティを作っていたらと思っただけ次第です」

「作るって、俺が、か？」

感謝しなくてはならない、わかっているのだが、霧島の発想に頭がついていけない。

「もちろん、僕もお手伝いさせていただきます。そのつもりで参りました。台所はどちらでしょうか？」

きょろきょろしながらさらに畳み掛ける霧島。目の前で上総がドライアイスにくるまれたベーコンを手にとっているのに気づいたのか、

「冷やしてありますのでご安心ください。そのために車でまいりました。車なら冷房が入っていますから、生ものもさほど悪くならないのではないのでしょうか。かなり冷えていますよね」

「ああ、凍ってる」

夏のさらりとした風が部屋をすり抜ける。扇風機が回っているだけで汗は引く。たぶん腐ることはないだろう。ただ、いくらなんでも、しかし。

「ありがとう、でも霧島、お前は手伝わないでいいから。俺ひとりで大丈夫、ふたりぶんなら問題なく作ることができるし」

「いえ、立村先輩。もうひとつ我が家オリジナルの調理方法も母直伝のものを預かって参りました。その説明もしなくてはなりません。先輩、重ね重ね申し訳ございませんが、台所はどちらですか？」

勝ち誇ったかのように質問を繰り返す霧島に、上総は無言のままスパゲティ材料一式を抱えて台所に向かうしかなかった。まずは冷蔵庫にベーコンだけでも入れておかねば。ちょろちょろと霧島も上総の後ろについて来る。犬か猫、ペットとはこういうものなのだろうか。わからない。今はっきりしているのはひとつだけ。

——やっぱりこいつ、台所まで押しかけてくる気だったんだ……！

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々 (3)

全部予想していた通りの展開だった。まず食器棚から頼みもしないのに皿を選んで運んでくる。フォークとスプーンも掘り出す。わざわざマグカップを引っ張り出してきたのはいったいどこからつけてきたのかわからない。全部霧島の仕業である。

「先輩、そろそろできましたか」

「ああ、もう少しな」

お手製のレシピなど見てはいない。スモークサーモンが少しだけ残っていたのでベーコンと一緒にオリーブ油で炒めた。缶入りホワイトソースは牛乳で少し伸ばしてみた。あまりべたべたしたものを食べたくない。スープスパゲティに仕上げることにした。

「先輩はどうして料理を覚えたのですか」

「そうしないと食べていけないから」

茹で上がったスパゲティをボールにあけてさっとオリーブ油をまとわせる。煮立ったホワイトソースにスモークサーモンとベーコン、および野菜を絡める。あまり癖のない味が上総の好みだ。文句は言わせない。霧島の味覚など知ったことか。

「もう少し深い皿、取ってくれないかな」

「はい、ただいま」

手伝うと言っておきながら実は全く役立たずだった霧島をほっといて、上総ひとりで結局作り上げたホワイトソース味のサーモン&ベーコンスパゲティ。量はたぶんふたり分で足りると思う。具が多すぎるのが失敗かもしれないがまあいい。気にしない。たっぷりホワイトソースならぬホワイトスープでひたひたにして盛り付けた。

「それにしてもよい食器がたくさんありますね」

「そうか？ 全然検討つかないけど」

そんなことでひっかかっていたら日が暮れる。上総がフライパンで香ばしく炒め物している間に霧島は茶碗をひっくり返したりティーセットを弄繰り回したりしていたようだ。

「うちの親が拘る人だったからそうなのかもな。とりあえずは食べられればそれでいいかな」

「運びます」

そのくらいは働けよ、そう思う。

十一時半過ぎ。ふたりでまずは熱いうちにいただくことにする。日が昇りだいぶ暑苦しくなってくる時間帯だが、部屋の中はなぜか心地よいぬくもりのみ。一台の扇風機だけで十分涼しく過ごせる我が家は天国だ。

ふうふう言いながらまず、無言で麺を巻き取る。サーモンとベーコンを最優先で口に放り込む。わりと味付けはよかったのではと自画自賛したいがもちろん黙る。

「先輩よろしいですか」

「何？」

「サーモンください」

——何？

上総が答える間もなく、霧島がすばやく麺に絡まったサーモンとベーコンをつまんでいく。野菜を混ぜないで拾い上げるところがみそである。留める間もない。

「霧島、お前さ。せめて俺が返事するまで待てよ」

「もう食べたんで」

もごもご言いながら、あっという間に平らげた。霧島の食事スピードは想像以上に早い。上総がまだ半分しか食べていないのに。しかも食欲も比例しすぎている。

「先輩、もう少し食べたいんですけど、作ってもいいですか」

「お前作るのか？ もったいないだろ。食べるか残り？」

冗談で言ってみただけなのだが、甘かった。

「それでは全部いただきます」

他人が口をつけたものを全く抵抗なく食いまくる霧島。あきらめて上総は珈琲をマグカップにたっぷり入れて飲んだ。もちろん、熱いものを啜る。アイス珈琲にしてもよかったのだが、霧島にまた奪われることを予測して避けたのは賢い手だったと思う。

——それにしても、やりたい放題だなこいつ。

気品ある貴公子で、中学の女子たちからも熱い視線を送られていると聞く。成績優秀なのは言うまでもない。しかしいまだに彼女らしき存在はなしとも聞く。そりゃそうだろうと納得してしまうのはこいつの性格をよく観察した結果。からかう気はないが、ファンの女子たちがこの姿を見ようもんならどんな失望を味わうのか、哀れでならない。

「あのさ霧島」

「なんでしょうか」

「昨日まで合宿だったんだろ。生徒会の。楽しかった？」

さすがにしばらくは食べたくないだろう。皿を台所に運んで水洗いだけした後……もちろん霧島は一切手伝う気もないらしく客人に徹している……上総は尋ねてみた。

「まあ、まあですね」

「奥歯にももの挟まった言い方するね」

「それなりに、有意義ではありました。他中学の生徒会と交流もありましたし。水鳥中学のみなさんとも会いました」

——関崎の学校だな。

そんなことは霧島も承知しているだろう。あえて無視して続けた。

「生徒会運営の実情について熱く語りましたが、やはり公立の話とは違いすぎて、ずれがありますね。正直退屈でした」

「学年が一年ずれてしまうものな。しょうがないよ。高校入試優先しなくちゃならないしね。公立の人たちは」

そう、関崎とも話をよくしたものだ。麗しき蜜月時代。

「それはそうなのですが。まあいいです。ところで僕が今日話したいということをご存知ですか

？ 立村先輩」

忘れていないわけがない。タイミングを狙っていただけだ。

「ごめん、そうだった。霧島、たしか杉本のことだったよな」

ここはフェイントだった。霧島のことだ。もしかしたら忘れた振りして夕方までシカト決め込むつもりなんじゃないかと思っていた。午前中の段階で話が飛び出すならこれはありがたい。上総は珈琲を手元に引き寄せた。少し熱いが、かえって心地いい。

「ここなら盗み聞かれる心配もございませんので、はっきり申し上げます」

霧島はアイス珈琲……わざわざ氷を十個詰込むようリクエストして注ぎ込んだ代物……をガラスのマグカップでストローさしつつ啜っていた。何を思ったのか、椅子から降りてじゅうたんの上に正座した。

「先輩も、いらしてください」

「え、椅子に座ってもいいのに」

「いえ、先輩いいですか。壁に耳あり障子に目ありと言うではないですか。確かに品山までわざわざスパイする物好きがいるとは思えませんが念には念を入れる必要があります」

仕方ない。上総も付き合った。霧島と真正面に向かい合った。

「まず、ご存知でしょうが殿池先生の役割ですが」

もったいぶった言い方で霧島は語り始めた。

「うちの馬鹿姉ばかりがクローズアップされますが、実際あの人は陰でいろいろ動いているとの噂です。何も知らない人たちは、単純に非論理的な風習愛好家と笑っていますが、実は他の生徒たちをも仕分けするという仕事を担っているようです」

「何それ、その動きって」

ぴんとこない。そもそも殿池先生がそんなに大きな権力を持っているとは全く思えない。

「うちの姉を例に申し上げますと殿池先生はまずご自身から、青大附属から出すようにと提案なされたそうです。当たり前ですよ。ろくに漢字も読めず、計算もできない姉が、このまま青大附属の高校に進学しても落ちこぼれるのが目に見えています。早い段階でその提案はなされていたようですが。試験を受けずに、青大附属出身のめっきをを活用し、迎えてもらえる学校を選んだ結果があのか南というのが情けないのですが。しかも、姉はか南でなんと、特待生になり損ねているんですよ！ 青大附属出身者がなれないなんて笑いものじゃないですか」

「霧島悪い。話を戻してくれ」

「失礼しました。とにかく僕が言いたいのは姉以外にもいろいろ問題を起こしたみなさまたちがいらっしやいまして、そのほとんどは殿池先生の手によって振り分けられたということです。僕の知る限りですとあとはそうですね、姉の友だちだったあの西月先輩です」

「西月さん？」

もちろん知っている。卒業二ヶ月前に起きた傷害未遂事件。上総が聞いた限りでは小競り合い程度で片付けられたと聞いていたが、それでも西月小春が即、実質的退学としか思えない形で転校させられたはずだ。自分自身のごたごたも関係して、あれ以来上総は西月小春の姿を見たこと

はない。あえて言うなら、現クラスメートの片岡経由でちらちらと噂を耳にするがそれ以上は何もない。

「西月先輩がなぜ、あんなにあっさり、転校できたかということですが。ご存知ですよ」

「だいたい」

確か、片岡の親が神乃世町と呼ばれる田舎町に住んでいて、たまたま西月小春とも家族ぐるみの付き合いだったと聞く。事件後、片岡の両親より申し出があってすぐに神乃世の中学に転校したというところまでは知っている。

「先輩もご存知でしょうが、『迷路道』の後継者に当たる方が現在英語科にいらっしゃるとか」

「ああ、片岡のことだろ。知ってるよ」

「僕の聞いた限り、事件から転校までの間、あまり間がなかったはずですよ。あまり騒ぎにもならず片付いたという記憶があるのですが、その理由が殿池先生の手際によさだそうですね。事がおきてからまず殿池先生はすぐに『迷路道』のオーナーと交渉して西月先輩を転校させるよう手続きを行ったそうですね。いくばくかのお金が動いた可能性もありますが知ったことではありません。通常なら大混乱の中でごたごたした挙句、西月先輩はつるし上げに遭い下手したらゴシップ誌にスクープされ、青大附中の腐敗ぶりが暴露されるという情けない展開が繰り広げられていたはずですよ。それを学校内だけで食い止め、かつ丸く治めたのは殿池先生のおかげでもあります」

「霧島、お前どうしてそんなこと知ってる？」

「常識ですよ」

憎たらしくも霧島は言い切った。そうかそうか。

「その他にも殿池先生は青大附属にいてはならない生徒たちを、もっともベストな形での進学をさせるべく努力を重ねておられたそうですね。僕が知る限りはそのあたりですが、他にもあるようです。そこで、今日の本題に入るわけですが」

「杉本のことか」

大きく頷いた。

「そうですね、殿池先生が杉本先輩に接近しているのは一学期に入ってかららしいとも聞いています。先輩が卒業なさってからですね。その後、例の修学旅行事件が起きたわけですが杉本先輩の判断によりこれもまた、大事を丸く収める方向にすすんだと、いうわけです」

——ああそうだな。あれで丸く収まったというのかよ。

突っ込めない。痛すぎる。

「学校側ではひれふして感謝しなくてはならないわけです。ひとり、自殺者が出るかも知れなかったのに、濡れ衣を喜んで着てくれる生徒がやってきたわけですから。人の命が重たいのならばなおのこと、学校を救ってくれた相手にそれなりのお礼をしなくてはなりません」

「霧島、杉本に学校側が何のお礼を用意する必要あるんだ？」

少し胃が重たくなってきた。決してベーコンやスモークサーモンのせいではない。

「簡単です。中学三年で青大附高に進学できない生徒に対してのギフトはやはり進学先でしょう」

「でもそれは」

杉本は一年の時から青潟東受験を考えていたはずだが。

「公立入試は水物です。風邪を引くかもしれませんし、さらに言うなら運もあります。いくら杉本先輩が学年トップの才媛だったとしても、百パーセントということはありません」

「それはそうだな」

「学校側としては、やはり『安心』を用意したいでしょう。そのために今、殿池先生はさまざまな情報をかき集めて、杉本先輩のお宅に届けているようです。その情報が実は入ってきました」

霧島の姉経由だろうか。杉本のことを優しくかわいがってくれた人だった。

「なずな女学院、ご存知ですか？」

「知らない」

さすがに上総も青潟の公立私立高校はすべて知っている。聞いたことなどない。

「僕も初耳でしたが、どうやら事実のようです」

「何が事実なわけ？」

霧島は腰のウエストポーチから四つ折りの紙を取り出した。

「青潟から百キロ離れた、山奥です」

山の上に小さく赤い点が打たれた地図だった。青潟市が掲載されていない。

「青潟の地図だと載っておりませんでしたので、図書館でコピーしておきました」

受け取り、そっと見据える。

地図を読むのは苦手だ。

青潟市の概況すら載っていない町に存在する女子高校か。

「なずな女学院って、最近開校したのか？」

霧島に尋ねても埒があくわけがないのに聞いてしまう。だいぶ珈琲がぬるくて飲みやすくなったようだ。そっとどけて地図に場所を譲った。

「この、赤い点がそこなのか？」

「はい。ごらんの通り、山頂近くと言ってもよいでしょう」

「こんなところに学校なんてあるのか？ それ以前に人、いるのかよ」

「僕もわかりません。ただはっきり言えるのは、ここが全寮制女子高校だということです。こんな山奥に寮を作る必要のある学校がそうそうあるとは思えません」

ここで言葉を切り、言いづらそうにつぶやいた。

「隔離、に近いんじゃないでしょうか」

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々（4）

上総が黙り込むのをしばらく霧島はおもしろげに眺めていた。アイス珈琲がまだ残っている。氷が溶けてどんどん薄くなっていくのが色を見るだけでわかる。

——青潟から約百キロか。

当然、汽車を使わねばたどり着けない場所だろう。最寄の駅はどのあたりだろう。地図の中から、黒い太線を探してみる。指でなぞると、

「里美那駅から徒歩一時間、バスで三十分と聞きました」

「よく調べたな」

「常識ですから」

礼を言う余裕も実はない。上総はしばらくぬるい珈琲をなめながら、地図の赤点を指で押さえてみた。親指で押して、小指で空を切ってみる。青潟の文字が載っていない以上届かない。

「でもまあ、まだこれ、推測だろ？」

「そうですが、時間の問題でしょう。出所を考えるとあいまいではあります」

「姉さんからか」

「ご想像通り」

これ以上霧島の姉についてしつこく聞くと、例のごとく一方的な姉罵倒演説が始まる。人の悪口を聞かされるのはできれば今は避けたい。エネルギーが持たない。それ以前に床にどんどん力が流れ落ちていきそうだ。

「飲み物足りるか？」

「できればもっと」

遠慮という言葉、霧島は反物の山に押し込んでここに来たらしい。もうしょうがない。上総は地下室に下りた。確か手付かずのぶどうジュースが贈答品の中にあっただはずだ。飲みきってやろう。

くすんだにおいと、めっきり冷えたコンクリート張りの地下。

上総の家は平屋だが、車庫だけが地下に設置されている。その関係で二部屋ほど余裕があり、一応は移住スペースとして利用できる状態となっている。もっともそこで寝ることは全くなくあくまでも倉庫の利用のみだ。

半畳ほどの冷蔵庫を開いて、お目当てのぶどうジュースを取り出す。また霧島がメモし出すだろう。母が言うにはかなりの名店とのことだ。冷蔵庫のふたを閉めてから一度ジュースの底をその上に載せる。

——青潟市外の学校か。

なずな女学院。全く聞いたことのない学校名。

——あんな山の中に学校があるのかよ。

ジュースの瓶を両手で握り締めて見る。手のひらが冷えていく。心地いい。

——女子高だよな。学校のレベルどのくらいなんだろう。普通科なんだろうか。それとも女子

向けの学部なんだろう。どんな制服なんだろう。そもそもその学校ってきちんとした学校法人なのかな。塾とかそういうところの間違いなんじゃないか？ 話の出所が霧島さんということだと、どうなんだろう噂話どまりのような気もするしな。杉本もそんな話があったらもっと早く俺に話すよな。

ここまで考えて気づいた。

——夏休み始まってから、まだ杉本と話、してないよな。

一週間あれば十分、進学の話が進むだけの余裕があるはずだ。

上総はジュースを抱え部屋に戻ることにした。ひんやりした地下から玄関に出るともわりとした空気が身体にまとわりつく。暑くても、この瞬間はほっとくつろげる。

「先輩。遅かったですね」

「いいジュースがあったからさ、これ飲もうか」

「アルコールですか？」

「そんなわけないだろう。昼間だし、それ以前に未成年だろ」

冗談めかして答え、すっかり空になったグラスを台所に下げた。手伝ってもらおうなんて思っていない。すぐに洗ってコルク抜きごと持って言った。コルクタイプなので見た感じ、ワインにも見える。

「先輩、ワインと間違えてませんか」

「それ心配だったんで確認したよ。ほら、ラベル、百パーセントぶどうって書いてある」

「残念ですね」

霧島は上総からコルク抜きを受け取ると、すぐに指して引っこ抜いた。

「先輩が酔っ払うところ、見てみたかったのですが」

——こいつ、完全に頭の中のコルク抜いてここに来てるな。

飲んでみてやっぱりジュースだと確認し、まずは一息ついた。まだ昼過ぎ、静かなまま。もともとテレビは一切つけずに過ごすのが日常だった。ただ霧島も客人だし聞いてはみた。

「何か見たい番組ある？」

「いいえ、テレビを見るのが惜しいので。時間がもったいないですし、本日はお話する方がいいのでお構いなく」

本当にいいのかわからないが、うるさいのも苦手なのでそのままにしておく。

「それはそうと、立村先輩にお伺いしたかったのですが」

「どうした？」

話を逸らしてくれるのはありがたい。上総が答えると霧島はいきなりまじめな顔をした。

「新井林先輩について、少々気になる話を耳にしたのですが」

「新井林ってあの、三年のか」

同姓同名なんていやしない。念のために確認しただけだ。

「当たり前です。お忘れですか」

「忘れるわけなだろう？ 現評議委員長忘れるわけないだろうに。俺の立場からしても」

さらっと流すがどうもこの言い方気にかかる。霧島の立場からしたら、現評議委員長の新井林健吾が目障りでないわけがない。特に生徒会長である佐賀はるみとの付き合い相手であることは明白。もともと佐賀への敬愛の念深い霧島が、何も考えていないわけがない。

「それで、何なんだ？ その、気になる話って」

「実は先日の合宿で、佐賀先輩が新井林先輩について少し気になることをお話されたのです」

「相当気になっているみたいだな」

口に出して言ってやった。そうでもしないと意識しないだろう。霧島は口をつぼめて、すぐに続けた。

「一泊二日も一緒にいますとやはり、いろいろ語ることも多くなります。その際に、佐賀先輩は新井林先輩がもしかしたら、他の女子を意識しているのではといった不安を口にされたのです」

「他の女子？」

尋ね返すと、霧島はこれまた大真面目な顔で頷いた。つんと澄ましているくせに、いきなり目が潤みかけている。それを押さえているのが見え見えなのが笑えるが、笑っちゃいけない。こいつは本気で惚れているのだから。

「つまり、新井林先輩が別の女子に対してアプローチしすぎなのではと気になさってらっしゃるようです。以前からそのことについてお気づきのようでしたが、学年代わってからは特にその傾向が強まったらしいとも伺いました」

「そうなんだ、で、相手は特定できているのかな」

別に知らなくてもいいことだけど、霧島が言いたくてうずうずしているのが見え見えなので促してみる。ごくごく飲み続けるのもう一杯注いでやった。

「はい、実は」

また一口ごっくり飲みこみ、

「清坂先輩らしいのです」

「まさか」

笑いたくなる。それはない、絶対ない。

「霧島、念のため確認するけど、その清坂さんは、俺と同じ学年にいる清坂さんだろ？ 間違いないだろ？」

「もちろんです！」

もうだめだ、笑うしかない。上総は思いっきりテーブルに突っ伏して笑いこけた。

「先輩、なぜ笑うんですか！ 僕を、僕を馬鹿にしてるんですか！」

「だってさ、ありえないって」

自分でもなんでこんなに受けるんだかわからないが、まずはのどを潤す。

「以前からって言うけど、その頃清坂氏と付き合ってたの俺だよ。もし新井林がそんなにちょっかいかけていたら、俺が何も気づかないわけないだろ」

「ですが先輩、先輩は」

「そりゃ、同じ評議委員同士だったんだからさ、話はするよ。男女仲良く帰ることもあるかもし

れないさ。でも、考えてみるよ。もしそういう気持ちがあれば新井林の性格上無理にでも奪い取ると思うよ。しかも当時の相手は俺ときたら、もう怖いものないしな。余裕でくどいて、ものにしてるんじゃないかな。現実はそのことなくて、現在に至るわけだからまずありえないって」「先輩。それ正気でおっしゃってますか？」

「もちろんだよ。それに清坂氏も、長年の付き合いだけど、好き嫌いはっきりしているから新井林のことを気に入ったら佐賀さんなんて気にせずにそっちに走るよ。その点きっぱりしているよ、あの人は。それもなかったってことは、どう考えたって佐賀さんの被害妄想なんだと思うよ」

ここまで言い切って、霧島の顔を覗き込んでみる。ずっと気になっていたのは新井林でも佐賀でも美里でもない、こいつの面だ。

「どうした、霧島……？」

やはりだ。

「泣いてる、のか？」

「泣いてません！」

口をゆがめる。せっかくの端正な顔立ちが崩れていくのがよくわかる。もともと霧島は黙っていれば気品のある王子の雰囲気なたたえている。実際女子たちにちやほやされるのはその外見にあるとも言える。だが、うっかりつついてはならない部分にうっかり触れると、ぷちんと何かはじけてぐにゃぐにゃ溶けていく。その部分がどのあたりなのか、というのは霧島と深く話すようになりだいたい検討がつくようにはなってきた。だが、まだまだわからない。恐らく、たぶん、あのあたりか。こいつの急所は。

鼻水が今度は流れ出した。すぐテレビの上に置いてあるティッシュケースを箱ごと持っていく。レースで覆われたいかにも女性向けの雰囲気のものをもそのまま膝に置いてやった。

「ほら、顔拭いて」

「なんでもないんです！」

無駄に意地っ張り。霧島の原点はそこにある。思えばこいつの姉・ゆいもタイプとしてはよく似ている。口に出せばさらにぶちぎれるだろうから飲み込むが。

「でも、佐賀先輩はそう仰ってました。最近是一緒に帰ることも、待っててくれることもなくなったとか、最近用もないのに高校に通いつめているとか、清坂先輩とよくふたりで歩いているとか、いろいろです。現場も見ているようです」

「で、お前は見たの？」

問いかけてみる。

「実際、霧島は新井林と清坂氏が一緒に歩いているところ、観たことあるの？」

「いえ、ないです。でも、それは僕も例の事件で忙しかったこともあるので見逃していただけです！」

「生で観たことないんだったら、それは断言できないことだよ。もちろん佐賀さんは、その、つきあい相手だし気になることもあるかもしれないけど、新井林だって評議委員長なんだからそれなりに用事もあるはずだよ。高校に顔出しているとか言うけど、俺はあいつの顔、学校の中で見

たことないな。生協とか学食ではたまに見かけるけど」

「ほんとですか」

大きく頷いてやった。事実なのだ。やましくもなんともない。

「そうだよ。俺も清坂氏と帰る時、たまにあるけど変なことないしさ。ああそうだ、もしかしたら新井林、高校のバスケット部で何かあるんじゃないのかな。ほら、あいつ中学バスケット部のキャプテンだろ。そのところもあって自分なりに相談しにいったりとか、練習の参考にしようとしたりとか、そういうところもあるんじゃないかな」

なだめているのか説明しているのか、自分でも頭の中がごっちゃになってきた。今、目の前で霧島の顔はどんどん変貌を遂げていく。涙、鼻水が交じり合い、せっかく用意したティッシュも顔を拭くだけ、無駄に消費するだけ。肩をあげてしゃくりあげ始めた様には言葉を失うしかない。だがここは上総のがんばりどころでもある。何とかなだめねば。

「バスケット部についてももう少し詳しく知りたかったら、羽飛に聞いてみようか？ いや、絶対お前の名前出さないから安心して。羽飛も最近部活やめたけど、もし新井林がバスケット関係の相談に来ているだったら少くらは知っているかもしれないし。それにしてもなんで佐賀さん、そんなことお前に愚痴るんだらうな。俺もよく女子の事情わからないんだけど、こういうこと女子同士で相談しあうもののような気、するんだけど。なんであえて霧島になんだらう？ どういう状態でそういう話になったんだ？ よければ話してくれないかな」

しゃべれば少しは落ち着くだろう。どうせささいなことを耳にして、勝手に霧島が期待を膨らませただけだろう。もともと霧島は佐賀に想いを寄せすぎて、そのために生徒会書記の女子をずたずたに傷つけて幽霊書記扱いにしてしまった前科を持つ。極端に崇拝するくせに、嫌いな相手はとことん憎む。その気持ちが変わらないわけではないけれども、佐賀はるみの持つ気質と過去……上総の立場は杉本梨南びいきである以上公平とは言えないかもしれないが……を考えると、できれば、あきらめたほうがいいのではと思わずにいられない。とりあえず霧島と佐賀が恋愛沙汰でもめた時はためらうことなく霧島の味方に立つことは確実だ。

鼻をすすり上げ、やんちゃ坊主のように手の甲で口の周りをこすり、霧島はその手で前髪をかきあげた。一度大きく深呼吸をした。

「たまたま、風呂上がりですれ違って、ロビーでお話したんです……」

「どっちが？」

「僕も、先輩も」

なんというシュチュエーションか。顔が燃え上がったのを隠せてよかったんじゃないだろうか。その点は運がよい奴だ。

「先輩も一緒に、ジュース飲んでて、それで」

「ロビーで一休みしたんだな」

「そしたら、『霧島くんがいるから私救われてるの』とか言うし」

涙ぐみつつも続ける霧島には悪いが、どこかふっと笑いたくなる。

「それで？ 何でって聞いたのか？」

「はい、そしたら、『生徒会長になってから、周りの人たちがどんどん変わってしまって寂しい

』とおっしゃいました」

かなり無理して敬語使っている。また涙が滂沱のごとく流れる。汗なんだと見ぬ振りしてやる。

「『生徒会長になったからといって、私が変わったわけではないのに、どうしてなのかわからない』とつぶやいてらして、その後、新井林先輩もすっかり態度が変わったと」

「向こうから一方的にそういう話をしたのか？」

「はい。そうです。僕がたまたま側にいたんで、ほっとしたんだと思います」

何か違和感ちりちりとする。話を続けさせた。

「それで、僕が具体的にどんなことを、と聞いたら、清坂先輩のことを話されたんです」

「さっきお前が話していたようなことか。一緒に帰ることが多いとか高校に通いつめることがあるとか、そんな感じで」

「いえ、それだけじゃなくて、それだけじゃないですよ！ 佐賀先輩はそれ以上言葉をにごしておられましたが、手を握り合ったとか、キスしたとか、抱き合ったとか」

「霧島、それ、いつの話？ 佐賀さんそんなふたり、いつ見たとか言ってたのか？」

申し訳ないがここまで大嘘オンパレードだと別の問題を疑わざるを得ない。

「夏休み入る直前だそうです。ショックで、口利けないくらいで、佐賀先輩、涙ぐんでました、それで、それで」

完全に崩壊した顔の筋肉。霧島はそこまで叫ぶように言い切り、ティッシュを顔全体に覆うようにし、ソファーに顔を押し付けた。あとでソファーにかけたクッションカバーを洗わないとまずいだろう、そう思わざるを得ない激しさだった。

そうだ。別だ、この件は。

——百パーセントこれは嘘だ。

ある程度甘く見て、一学期最初の頃に新井林のアプローチがあったとする。考えづらいが、美里が上総といわゆる「付き合い相手」のつながりを解消し「親友」として切り替えた時期は確かに空白期間だ。その頃、一緒に帰ったとかなんらかの親しげな展開が全くないとは言い切れない。正直、新井林と美里が付き合っているというのを考えるのは気持ちいいものではないけれど、可能性がゼロとは考えられない。

だが、ある時期を境に美里は、関崎一筋につっぱしるようになったはずだ。一度好きになれば美里は無我夢中で突進する。わき目も振らない。その姿を上総は粒さに見守ってきた。その時期に、仮に新井林が色目使ったとしても美里の性格上まず無視するだろう。

——いや、それだったらむしろ、羽飛が黙っちゃいない。

先日の一件をきっかけに、羽飛が美里を宝として見守っていることに気づいた。遅すぎたといえればそれまでだが、もし新井林が美里に手を出そうとしたものなら、羽飛がなんらかの形で制裁を下した可能性がある。実は三年の頃にもちらと「新井林が美里にほの字」らしいと羽飛から告げ口されたことがある。その時は上総が美里の付き合い相手だったのだから、対応するのは自分の役割だ。だが今は違う。羽飛は美里のありもしない噂にわざわざ立ち向かうべく、東堂にも

談判しようとしているくらいだ。新井林がよってこようものなら、どう出るかは目に見えているではないか。

よって、考えられない。ありえない。

なのになんで佐賀はるみはそんな妄想めいたことを霧島に吹き込んだのだろう。実際見たと言ったとしても、美里の態度からしてせいぜいふたりで帰るのが関の山だろう。手をつないだり、キスしたりって、どうひっくり返ってもありえない。第一三年間付き合っていた上総と違って一切したことない。手をつなぐにしてもいわゆる「フォークダンス」レベルで止まっている。まあ修学旅行でいろいろ悪さはしたが、万が一透視されたとしてもやましくない。自信はある。

「霧島、ひとつ聞きたいんだけどいいか？ あの、佐賀さんはお前のその、気持ち、知ってるのか？」

背中に呼びかけてみた。しゃくりあげたまま、うなづくようなしぐさをした。愚問だった。これだけ上総に対して佐賀はるみ礼讃を続けている霧島が、本人前で隠せるとは思えない。当然、佐賀も気づかないわけがない。

「それで、そんなこと言ったのか？」

返事はない。ただ泣きじゃくるだけ。よく響く。

——新井林とうまくいっていないというのはあるのかもなし。

しばらく霧島を泣かせておき、上総は片膝を立てて考えた。

杉本梨南をさっさと見捨てて、新井林をナイトに、霧島を僕に。まさに完璧な構図だ。

ただ、評議委員長の新井林としても複雑なところがあるに違いない。卒業間際の大もめ事件も、上総は大混乱を演出しただけで退出したので伝聞でしか知らないが、

——轟さんに頭下げて、佐賀さんの追求をやめてもらうよう頼んだらしいものな。

上総の判断としては、十中八九新井林は佐賀はるみの秘密を見抜いているはずだ。いわゆる水鳥中学の奴のことも、もしかしたらそれ以上のことも把握しているのかもしれない。それでも幼馴染の恋人をあっさり捨てる気などさらさらなく、ただ一途に想い続けている。そのひたむきさがそうそう崩れるとは思えない。ただ、佐賀本人が別の男子に想いを寄せていることを知っていてそのままナイトでい続けるというのも、そうかんたんにできることではないだろう。それでつい、気の合う先輩である美里にふらふらっとする、それならありうる範囲だ。心の慰め程度に話をしたいと考えるならそれもあり。

しかし、佐賀の言葉はそれ以上の可能性を含めているようだ。

まるで新井林が、佐賀はるみ以上の浮気もののようなにおいをさせている。

——霧島みたいに佐賀さんに夢中な奴がいて、しかも風呂上がりのタイミングでもって、そんな愚痴をたらたら言ったらどういう展開になるかってことくらい、予想つかないのかよ？ 霧島見てたらわかるだろ？ ちらっと気を持たせただけでほら、こんなに泣いたり笑ったり大騒ぎしたり、大変なんだからさ。それとも霧島は必死にポーカフェイス保っているのか？

忘れていた。霧島がこんなペット状態になるのは、上総の前だけということ。

「霧島、ほら、落ち着いたか」

背中をさすってやった。肩をた叩いて耳元に話しかけた。

「佐賀さんもきっと、疲れているんだよ。生徒会長はなかなか大変だから。そういう時に副会長のお前がいるから、少し甘えたかったんだと思うよ。ほら、霧島 だったら他の男子と違って無碍にいやな顔したりしないだろ？ そういう奴がいると、女子は、よくわからないけどほっとするみたいなんだよ。そう、清坂氏も 言ってたし、たぶん佐賀さん感謝していると思うよ」

あまり心にないことを言うてしまう。霧島がはっと顔を上げた。涙顔がさらにパワーアップしている。新しいティッシュを渡してやる。

「ほんとですか？」

「ああ、きっとそうだよ」

頷いてみせるとふたたび霧島は上総の顔を真正面から見つめて、確認するように、

「先輩、本当に、本当にですか？」

「ああ、たぶん」

あいまいな語尾にならざるを得ないけど、言うしかない。

「そうですか。そうですよね、そうに決まってる！」

さっきまで涙でぬれていた瞳が輝くようだ。光こそ出てこないが黒目が豊かに見える。

「佐賀先輩をおっぼりだして誤解招く行動とっている奴なんて信じるべきじゃないんです！ そうですよね、立村先輩！ きっと佐賀先輩は新井林先輩なんてもう見捨てはじめていますよね！ 絶対そうです、そうに決まっています！」

霧島は残っているジュースを一気に自分のグラスに空けた。結局、上総が飲んだのは一杯のみ、残りはすべて霧島の腹に流れ込んだというわけだった。奴が投げ散らかしたティッシュを拾い集めてごみ箱に入れながら、上総はひとつ、記憶に留めることにした。

——関崎経由で佐川の動き、つかめないかな。いい方法、ないかな。

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々 (5)

間が持たないのでテレビでも見ようかとスイッチを入れるが、

「そんなうっとおしいもの、見たくないです！」

などとヒステリックに叫ぶ霧島をもてあましていた。まだ佐賀はるみに関する想いを整理できていないのだろう。上総の知る同年代男子たちにはめったに見ない言動だった。

「わかったわかった、どうする？ どっかその辺歩いて見るか？」

まだ一時になるかならないか。いったいどう子守すればいいんだか。

——本条先輩……！

すっかり地べたに座り込む形で珈琲を飲みなおす。本条先輩だったらこういう時どう対応するんだろうか。自分も相当本条先輩に迷惑かけてきた後輩だったが、ここまでみっともないところをさらけ出すことはほとんどなかったような気がする。いや、なくはないかと思わなくもないけれど。

「先輩。お伺いしたいのですが」

いきなり霧島が正座して上総に向き直る。この切り替えの早さもやはり奴の持ち味だ。

「どうした？」

「先輩は、佐賀先輩のことをどうお思いですか？」

何をいきなり言い出すのだから。あっさり答える。

「関心ないよ。俺のタイプじゃもともとないし。卒業前にいろいろトラブルもあったから、正直苦手なタイプの人だけだ。ただ頭はいいよな」

かなりオブラートかけて話をしているけれど、これは霧島のショックを和らげるため。——あれだけ杉本にひどいことした人をさ、興味持つってこと自体不可能だろうに。

「それはわかっています。僕が伺いたいのは客観的に見て、あの方が未通かどうかということですよ」

「みつう？」

ぴんとこない。学校で何か新しい資格のようなものこしらえたのだろうか。

「そんなのないと思うけど、それが何か？」

真正面から目を逸らさず、霧島は言いなおした。声ももちろんまっすぐに。

「あの方は、一線を越えたかどうかということですよ」

——霧島、お前、今何言った？

照れも何もない。さすがに「一線を越える」の意味くらいわかる。しかし時計を見ろと言いたい。しつこいようだがまだまだ午後一時を過ぎたばかり。太陽は燦燦と照り続けている。部屋の中こそ扇風機で十分冷やされているけれども、カーテンを閉めずに話すような内容ではない。

「霧島、そんなこと俺に聞いてどうする？ わかるわけないだろ。直接聞けばいいだろ本人に」

「そんなことできるわけありません！」

それはそうだ。上総はため息を吐く。霧島の対応しづらい点というのはまさにここだ。この前も部屋の中でひたすら、佐賀はるみに対しての男子特有の視点観察をばりばり演説しまくったしまくった。黙って聞いていたけれども、霧島の妄想は止まることを知らずあまりにもえげつない内容に突入した際には、さすがに止めたものだった。こりていないのかこいつは。

また端正な王子顔に戻し、霧島は背をすっと伸ばした。正座はもちろん崩さない。

「僕は一瞬たりともあの方が純潔であることを疑っておりません。しかし、周囲のおろかな女子たちからは執拗な噂を耳にしております」

「なんだよその噂って」

佐賀はるみが純潔かどうかは知ったことじゃないが、「噂」によっては確認する必要がある。影響が多分に杉本梨南へ及ぶかもしれない。これは過去の痛い経験で学んできていることだった。

「今年に入ってから、佐賀先輩のいわゆる体型がいわゆる純潔を失ったものと同様に見えるとのことでした。もちろん無責任な噂ということは承知しております。ですが、合宿で観察した限り、確かにそれらしきものは見受けられました」

面白い。詳しく聞いてやろう。促した。

「それらしきもの、って何それ。想像つかないな」

「例えばその、女性特有の部分とかでしょうか。いわゆる丸みを帯びた部分などが、限りなくふくよかになられたとか、などなどです」

「お前そんなのよく観察してるな」

あまりにも他愛無い。結局そこに行き着く。この前も霧島は佐賀の上半身下半身について華美なまでの形容詞でもって褒め称えていたのだが、それに「純潔の有無」という古臭いテーマが入るとまた別のものになるらしい。上総からしたら悪いがそんなことで見分けられるほどちゃんなものではないと思う。第一、こいつが蛇蝎のごとく嫌っている渋谷名美子だって上総の目から見たらさほど肉感的には見えない。それでも彼女はあの藤沖と……いや、考えてはならない。忘れたいこと引っ張り出してはならない。

「あのさ、霧島。もしかしてその風呂あがりの会話でそういうところ観察して、お前が勝手に決め付けているだけなんじゃないのかな。俺も女子とそう深く付き合ったことないからわからないけど、体質にもよるしさ。そんなのわからないよ。お前が佐賀さんのことまじめな人だと思っているんだったらきっとそうに違いないし、そう考えておけばいいのに。そんなに重要なことなのか？」

「当たり前です！」

ヒステリックにまた叫ぶ霧島。また始まったよ、ほんとそう思う。上総は立ち上がり、クッキーの箱を探しに行くことにした。もちろん、地下室だ。

——そんな胸の大きさとかなんかで判断されたらたまったものじゃないよな。どうするんだよ杉本とか。

無意識に浮かび上がった名前に足がすくむ。すぐに地下へ降り冷蔵庫を開ける。クッキーが入

っているわけではない。顔に冷気を当てて一呼吸した。よくよく覗き込むと凍りついたシュークリームのお包みが入っている。母がこの前遊びに来たときあまったものを押し込んでくれたのだろう。シュークリームは凍りついたものをそのままかじるものおいしいし、これにしよう。

ビニール袋から四個取り出し、冷蔵庫のふたの上に乗せる。なに、すぐに溶けたりしない。

——あいつどうしてそんなに佐賀さんに拘るんだろうな。真剣に好きでならないのは見ていてよくわかるけど、妄想しすぎだぞ。さっきの新井林浮気疑惑にしろ、経験者かどうかとか。そんなことばかり考えて生徒会副会長の仕事しているなんて、あいつに熱上げている女子たち知ったら立ち直れなくなるような気、するけどな。

もちろん、上総も女子のいわゆる独特の体型に関心がないとは口が裂けても言えない。霧島に気づかれるわけにはいかないが、杉本梨南と会うときどうしても特定の部分に目がいくことを認めないわけにはいかない。こちらでも努力はしているのだ。できる限り本人目を見て話すようにしているし、顔以外には視線を向けないようにしている。

ただ、頼むからその部分を揺らすようなしぐさは避けてほしいと切に願っている。

古川こずえの意見によれば、

「たぶんブラが小さすぎて入りきらないのよ。必然的にノーブラにせざるを得ないみたいねえ。杉本さんのお母さん、そういうことにあまり気遣いないみたいなのよね。今度私、あの子をスーパーに連れてって、サイズぴったりのもの選んでくるから。そうしたらあんたもそう目を泳がせて鼻血こらえないですむでしょ」

とか。もっとも杉本自身はその胸のふくよかさを意識するどころか単純な「贅肉の一種」として認識しているだけのようだ。ある時「こういう贅肉がお好きでしたら、いくらでも触らせてあげますがそんなに気持ちよいものなのですか」と真顔で言われてしまった。さらに言うなら、

——向こうからああいうことするからだよ、ったく。

杉本自身から「ごほうびの一環」として、羽飛や美里が並んでいる前で片手を取り、ぎゅっと胸に押し付けられた瞬間がいまだにありあり蘇る。三年前のこととはどうしても思えない。

——俺が自分でしたことじゃないんだから、あれは、事故というか、杉本の感謝というか、挨拶の一種なんだから、何もやましいことじゃないんだ。だから。

身体がほてってくるようだ。すぐにビニール袋をぶら下げて居間へと急いだ。

シュークリームをそのままがりがりかじりながら、霧島は女子の純潔に関する持論を一くさりはじめだした。

「僕は古風な人間と呼ばれるかもしれませんが、女子にはそれなりの常識とたしなみが必要だと感じております。うちの姉のように、やさしくされればすぐ擦り寄って下着を下ろすようなことを、破廉恥といわずになんと申しませうか。佐賀先輩のように美しくさら誇りを持ち教師を含む男子たちの前でもしとやかに振る舞い、そして強引な行為にはきちんと拒否をなさるその姿勢。それが本来女子たちのあるべき姿ではないでしょうか」

——相当、お姉さんのことが堪えているんだな。

霧島の小学校時代の事情を想像すれば、そう思わざるを得ない。

「ですがご存知の通り、青大附中の男女交際は乱れる一方です！ 僕は決して男女交際を否定するわけではなく、中学生らしいものであれば互いを高めあうために必要なのではと考えています。校則で禁止するなんてもってのほかでしょう。しかし、その一線を越えてはいけないものがあるはず。先輩、お分かりでしょうか、中学で交際した男女のどのくらいがそのまま結婚に行き着くのでしょうか？」

「結婚？ ほとんどいないだろ。いたとしたら高校、大学とそのまま順調に進んでというパターンかもしれないけど」

中学の段階でばたばたしてしまうのだから、高校で続くとは思えない。ただ、霧島のロマンチズムも上総は共感できないわけでは、決してない。

「そうですね。つまり中学の男女交際とは、先のないものです。結婚というゴールが存在しないものです。もしその段階ですよ？ いわゆる接吻や抱擁、そして一線を越えるなどした場合、次回付き合った相手はどういう思いをなさるか想像がつかますか？ 立村先輩？」

「まあ、確かに、複雑だろうな」

「当たり前です！ 先輩、たとえば結婚指輪をふつう、質屋で購入すると思いませんか？」

「事情にもよるかもしれないけど、普通はしないかもな」

「当然ではないですか！ 僕も呉服屋の端くれなのでさらに申し上げますが、一般的にお宮参りの際は着物を新調するのが普通です。成人式、謝恩会、もちろんそのような時も本来であればご自身のために作っていただきたいのですがご事情もあるでしょうからしかたないこともあります。しかし、お宮参りの際だけは別です。お宮参りで借り物を使うと、将来その子どもはずっと着るものを借り物で済ませねばならないといわれているのです」

「それとこれとはかなり話が違ふと思うんだけどさ、霧島。子ども育てるのってすごくお金かかると言うから節約する人もいると思うしさ。お宮参り自体を無駄なものとする人もいるし、ほんと人それぞれだよ」

修正を賭けてみるが無駄だった。

「いえ、僕が申し上げたいのは、結婚という第一段階において、レンタルや古着をまとうべきではないということです。衣装は借り物、それでもかまいません。ですが、その花嫁に当たる方は決して他人の手がついたものであってはならないのです。相手に古着を渡すなんて、失礼にあたると思いませんか？」

「ごめん、頭の中が混乱してるんだが、霧島」

上総は一言でまとめることに成功した。

「女性は『純潔』なままで結婚すべきと言いたいんだろ？」

鼻でふふっと笑い、霧島は

「当然です」

そう言い放った。

「それなら男はどうなんだろう？ やはり全く経験なしで結婚すべきなのかな」

当然頭の中には、本条先輩の姿あり。

「いいえ、昔は男性の筆卸を行う機関として吉原を代表とする色町が存在しました。現在合法的

なものはありませんが、男性は義務としてそのことを学ぶ必要があります」

「お前そういうの、誰から習った？」

「父です」

霧島は短く答えた。

——こいつ、女子に勝手な純潔妄想繰り広げているけど、現実見たらどうなるんだろうな。古川さんとしょっちゅう話、しているはずなのに全然感じてないのかな。

古川こずえが「第三の弟」……第一は実の弟、第二は上総としているようだ……と呼び習わしている霧島に、強烈な色事指南を行っていないとはまず思えない。それでいてこのかたくなな考え方、もし他の女子たちにはばれたら総すかん買うのは目に見えている。

もちろん上総も、全く共感できないわけではない。正直、経験済みの女子と初めての夜なんて迎えたら、自分でもどうしていいかわからないんじゃないかと思う。こういっては何だが、いわゆる「比較対照」されそうで怖い、というところもある。いやいやもっと言おうか。手の握り方、口づけの仕方、すべてにおいて比較対照される関係というのは、ものすごく緊張感がありそうだ。上総には未知すぎる。

——友だちになるのだって、大変なことなのにそれ以上どうやってって。

中学入学の時だってそうだ。羽飛や美里と仲良くおしゃべりしている時も、

——きっと俺より楽しく話せる奴いるんだろうな。つままないだろうな。

とかいつも思っていたし、本条先輩の側にくっついている時も、

——俺より天羽の方が仕事できるし信頼できるしって思っているんだろうな。

いつもびくびく比較されることにおびえていた。美里に対しては、

——どうせ羽飛だろ？ どうして俺なんかと付き合ってくれるんだろう？

これである。

「霧島、俺もあまり詳しいこと言える立場じゃないけど、人によってやはりいろいろ事情があるとは思うんだ。本人が望んでなくて、その、いわゆる、そういうことになってしまった人もいるだろうし、それをひっくるめてしまうのはまずいと思うよ。それに、中学時代は悪いことしていたかもしれないけど、高校時代に反省してまっすぐに生きようとした人だっているだろうし。人さまざまだよ。もし純潔じゃなくても、その人なりの生き様があると思うし」

「それなら立村先輩、お聞きしますが」

つんと澄ました狐顔、霧島は問いかけてきた。

「杉本先輩がもし、いわゆる純潔でなかったらどうなさいますか？」

一瞬、真顔になってしまった。しくじった。

「ああ、それありえないから。絶対に大丈夫。お前も知っての通り、杉本は青大附中全校男子に嫌われているから、そんなこと考えている奴いないよ」

「それは存じてますが」

霧島はさらに推し進めてきた。

「先輩、ご存知でしょうか。杉本先輩の体型をもとに、妄想している男子たちがたくさんいるこ

とを」

「妄想している？」

すぐに把握できない。じっと見返した。霧島の頬に笑みが浮かんでいる。

「顔がなくても胸があれば、それなりにすることも出てくるでしょう」

——なんだと、それ。それなりにすること、それって。

言葉が出てこない。熱が出てきたような重さ、手の平に汗をかいているのがわかる。

そのくせ肩から下が冷えてくる。震えてくる。

霧島の冷静沈着な説明は続く。

「同級生たちからの会話です。もちろん杉本先輩の評判が著しく悪いのは存じているようですが、身体づくりについては全く関係のないことのようにです。またあの馬鹿な女子のとばっちりを受けてしまわれたので大変不名誉な噂までございます。それらもひっくるめて、みなは杉本先輩のことをある種のおもちゃのようにして眺めているようです。僕も男子の端くれゆえ、その話題をちらりと耳にしたことがあります」

「言いたいことはだいたいわかった」

息を飲み込み、何度か深呼吸をした。手元のぬるくなった珈琲を飲み干した。そろそろ自分の分、飲み物がほしい。

「別に杉本の前で妙なことしているわけではないんだし、それはそれ、これはこれだろう」

「立村先輩、それで平気でいられますか？」

「平気？」

「そうです。僕が申し上げましたのは氷山の一角とも申します。僕が見る限り杉本先輩は立村先輩の仰る通り純白、純潔そのものでしょう。しかし、男子たちはその純白を彼らの妄想によって汚そうとしているのです。近づかないだけでしょせんすることは一緒です。そうされていることを、立村先輩はお感じなのかを知りたかったのです」

「感じるものにも、それは」

口ごもる。霧島が上総をからかおうとしているだけなのはわかる。ただ、杉本のことをそのような対象にしている男子がいる、その事実を受け入れるのに時間がかかっている。かかりすぎるくらいだ。性格をとことん蛇蝎のごとく嫌っているくせに、女性らしいそのフォルムだけは身勝手に利用しようとする。男子の生理がどんなものだから十分わかりすぎるくらいわかっているけれど、その対象があつ杉本であることがどうしても受け入れられない。

「プライバシーに関することをなぜ口出ししなくちゃいけないんだ。お前こそどうなんだよ。もし佐賀さんが同じように扱われていたとしたら」

「それはありえません。佐賀生徒会長は天使です。汚してはならない存在として男子たちからも見守られています」

——思い込みもはなはだしいな。それでいて、もしかしたらすでに経験済みなんじゃないかって妄想してるのかよ。霧島の思考回路、俺には到底想像つかないよ。

「僕は思うのですが」

とうとう何も言い返せなかった上総をせせら笑うようにして、霧島は唇をふわりと広げた。「明らかに性的対象にするには尊すぎる佐賀先輩が、僕に対してだけあのようなしぐさをなされたということに意味があるのではと思います」

「尊すぎる？」

——杉本は尊くないってことだな、わかったよ。

「周りの無神経な女子たちが騒ぐように佐賀先輩の姿に変化が出てきたとすれば、それは僕の存在からなるものではないかと、どうしても思えてならないのです」

「お前の？　なんで？　だって何もしてないんだろ？」

新井林の効果ということは考えないのだろうか？

「つまり、今まで新井林先輩の存在がありながらその誘惑すべきオーラが一切出てこなかったにもかかわらず、生徒会に携わるようになってからどんどん変わってこられたということであれば、それは僕に特別な想いを感じてくれているからではないかと、そんな気がしたのです」

「特別な想いって、つまり、お前のことを佐賀さんが、か」

照れることもなく堂々と「はい」と言い切る霧島。

「もちろん僕は彼女が穢れなき存在かを直接確認することはできません。ですから立村先輩に第三者の目でご意見を請いました。ですが、お話しているうちにそれは、彼女の心からくる想いから伝わってきたものではないかと感じたのです。つまり、純潔はもちろん守られていたとしても、その心の中にある一途な想いによって体型にも影響が出てくるとか、その気持ちが向けられている相手の前であればそのような姿に変わるようなものがあるのではとか、そういうことです」

——カメレオンかよいったい……！

「何度も申し上げますが、男子の間では杉本先輩のように欲望解消の対象として見られてない方です。だからこそ、その美しいオーラが僕に伝わってくるのは答えはひとつ、僕をそのような存在として認めているからではないでしょうか。立村先輩、どうぞ判断なさいますか？」

霧島の瞳には何が映っているのだろうか。

輝くばかりの天使、佐賀はるみなのか。

「ごめん、霧島。俺はそういう問題が苦手なんだ。たぶん霧島がそう感じるんだったらある程度は事実かもしれないけど、ただ佐賀さんは現在、新井林と付き合っているんだよな。別に別れたわけじゃないだろ？」

「ですが、ああいった噂が存在することも事実です」

「そうかもしれないけど、新井林と付き合っているのって入学前からだろ？　三年も経っているんだし、さらに言うなら幼馴染だよあのふたり。俺が思うに、むしろあのふたりそろそろ何かがあっても不思議はないんじゃないかなって気がする。ふたりきりになる機会もそれなりだろうし、互いの両親公認だし」

すべて杉本情報である。

「いえ、佐賀先輩は不実な相手を受け入れることはありません！　中学生らしい付き合いを正し

いとして、ずっと新井林先輩とも清らかな交際を続けてこられたそうです」

「まあ、それは当然だけども。一応は中学生なんだし」

ジュースが切れた。今度は麦茶にする。上総は台所に立った。

——霧島をこれだけ舞い上がらせるのって、何か目的あるのかな？

ずっと気にかかる。思わせぶりなことをささやかれ、しかも独特の色っぽいムードを振りまいたという。上総からしたらそのイメージが全く湧かないのだが、片思いを覚悟していた霧島にとってはまさに媚薬だったのだろう。恋は盲目、とはまさにこのこと。周りの冷ややかな声もすでに入らない。もちろん霧島の甘ったれぶりは上総の前でしか解放されないはずなので、外にはばれていない可能性も高い。

ただしかし。上総は冷えた麦茶ポットを取り出した。

——副会長としてよくやってくれる、ありがとう程度ならいいけどな。それにもしも、佐賀さんがその一線超えているとしたら、もしかしてあいつかもしれないし。そのあたりのややこしい事情、まさかと思うけど霧島が気づいているとは思えないしな。

新しいグラスを用意し、お盆に載せる。決めた。

——あいつが帰ったら杉本に連絡入れよう。

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々 (6)

麦茶の消費も激しくなり、とうとう上総はラムネをもう一本出す羽目になった。いったい今日、霧島の奴どのくらい水分取っているんだろう。下手したら飲みつくされるんじゃないだろうか。もっとも話の内容はだいぶ色事ネタから離れてきたので上総も少しほっとしていた。延々とクラス女子のレベルの低さと醜さなどを論じられてはたまったものではない。前回たっぷりきかされたのだからもうおなか一杯だ。

「それはそうと、お前の担任誰だったっけ」

何気ないが実は確認していなかった情報を探りに行く。

「絹先生でしたがたぶん二学期からは別の先生になるでしょう」

「え、そうなのか？」

「ご存知ないのですか立村先輩」

「知らないよ。第一絹先生って四月に転勤してきた先生だろ？」

上総が尋ね返す。ちょうど入れ替わりらしいが詳細は不明だ。

「はい、ただ諸事情でまた休職なさるそうです」

「休職たって早いな。身体でも壊したのかな」

「いろいろあるということでしょう。少なくとも僕のクラスメイトたちは先生をいじめたりなんなりはしなかったはずです。生徒会副会長を擁するクラスなんですから当然ですが」

「それ自分で言うなよ」

さすがにこのくらいは突っ込んでいいだろう。霧島は動じず静かにラムネを飲んだ。ちゃんと瓶ののどもとに玉を落として上手に飲んでいる。

「でもそうか、次の担任誰になるんだろうな。さすがに休職とでもなったら、誰か入らなくちゃならないだろうし」

「そうですね。一応僕なりに情報は把握しておりますが」

「次の担任を、か？」

早いものだ。生徒会、評議委員会ともに情報は迅速に流れてくるものではあるけれど。生徒会合宿の際にでも仕入れたのだろうか。

「はい。今のところ、話によると担任から離れてらっしゃる狩野先生が有力とも伺ってます」

——狩野先生が？

少し戸惑う。上総もラムネで自分の口をふさぐ。

「そうか、俺たちの代でA組三年間持ってたもんな。本当は担任外れる予定だったんだな。知らなかったよ」

卒業してから数回、狩野先生と話す機会はあったけれども、詳しい話を聞いているわけではなかった。自分の相談ばかりだったので相手のことを気遣わなかった自分が情けない。

「となると、二学期から正式に担任となるわけか」

「おそらくは。絹先生が復職すればまた状況は変わるかもしれませんが、無理なような気がします」

いろいろな事情があるのだろう。霧島にもう少し突っ込んで聞けば詳しい話が聞き出せるのかもしれないが、あえてそれはしたくなかった。

「そうなんだな。でも狩野先生はいい先生だよ。きっとよくしてくれると思う」

「僕には想像つきませんが」

霧島は声を潜めた。

「数学の教え方は非常にわかりやすいと聞いたことがあります。古川先輩や難波先輩にも」

「ああ、俺もそう思う。初めて因数分解理解できるようになったし」

冷ややかな視線が飛んでくる。悪かったな、学年トップの秀才様。

「ひとつひとつ、丁寧に説明してくれるんだ。小学生でもわかるだろうってこと、聞いても馬鹿にしないで教えてもらえるから助かるよ。あの先生のおかげで俺は数学あれ以上落とさないで卒業できたようなもんだし」

大げさではない。上総が数学を人並みとまではいかなくとも、小学生高学年程度の内容をなんとなく……完璧にではない……把握できるようになったのはひとえに狩野先生のおかげだ。

「ただ、いろいろよくないお噂は耳にしますね」

「たとえば？」

全く思いつかない。霧島は顎をガラステーブルにくっつけて、にらむように上総を見た。子どもじゃないんだからとはたきたくなる。

「まず、西月先輩に対する処置です。あの件については僕の姉も関係者でしたしある程度の事情は把握しております。ある意味西月先輩はうちの姉のとぼっちりを受けたとも言えます。もちろん傘を振り回して近江先輩を叩きのめそうとしたことは決して褒められたことではないのですが、ただあの件についてはどうでしょうか」

「これ、お前から聞いていい内容なのかな。もし事情が事情ならこれ以上聞かないけど」

気にはなっている。ただしあまりにも近い関係者だし口いは出さないよう控えてはいた。

「いえ、もう公になってもよいことでしょう。つまり、狩野先生は義理の妹でらっしゃる近江先輩を守るために公私の分別なく西月先輩を退学同然の転校扱いにしたわけですから」

——やはりそうなのか。

義理の妹が傷害事件の被害者になりかけたからといって、一方的に教え子を転校させるというのは正直考えづらい。似たようなことを天羽も話していたが、それが事実なのかと考えると首をひねるところもある。ただ、霧島がそう判断しているということはその見方がかなりの層に広がっていると見ていいのだろう。上総はそれでもいいと思う。もうすでに西月小春は神乃世という町に、片岡の実家に静かに住まっていると聞く。少なくとも不幸ではないと信じたい。

「たまたま『迷路道』の社長と殿池先生の迅速な行動により、狩野先生のしたたかな行動は隠されたわけですが、これから先このようなことが続いたらどうなるというんでしょうか。少なくとも僕は、胡散臭さを感じずにはられません」

「確かにな」

霧島がこくこくラムネを飲み干しているのを見ながら、上総は頬杖をガラステーブルの上でついた。明日、狩野先生には会う予定だ。青大附中のかつてのE組教室にて挨拶するつもりだ。メ

インゲストが本条先輩であることは上総の中で絶対だけでも、狩野先生にはまた別の意味で話を聞いてもらいたいことがいくつかある。卒業後に学校外でじっくり話をしたことがないわけではないのだが、状況がだいぶ変わってきているのもまた事実だ。本条先輩にはさすがに、数学の今後の補習でげんなりしているなんてことを言えはしない。

「それに、これも噂ですが」

上総以外誰もいないっていうのに、さらに秘密めかしてささやきかける霧島。

「他の先生たちとも狩野先生はあまり折り合いがよくないとか聞きます。職員旅行とか、その他のいろいろなイベントなどで狩野先生は一步引いた態度を崩さず、積極的に他の先生たちと接しようとしないうような話も伺います。特に、菱本先生とは犬猿とまでは申しませんが」

テーブルを拳で思わず叩いた。喝采だ。ブラボーだ。大向こうかけてやりたい。

「さすがだ！ 見る目あるよ！」

「立村先輩……？」

きょととした目で霧島は上総を見やった。驚いているのだろうが知ったことじゃない。上総は立ち上がった。ラムネ瓶を持ったまま霧島に呼びかけた。

「ああ、霧島、もう二学期は安心しなさい。大丈夫、狩野先生だったらまっとうなクラスになるに決まってるからさ！ いいよあの先生。しつこく話しかけてこないし、聞きたいことには静かに答えてくれるし、何よりもうっとおしい情熱ぶつけて絶叫したり、しつこく心を開けとか騒がないし、お前の大好きなだれだれだとか、お前の女房はいい女だとか、中学生に対して言うべきじゃないことを延々とわめきちらしたりしない人だから！ わかるか霧島、そうされないで静かに過ごせることがどれだけありがたいかって。よかったな、ほんと。いい先生にあたったよな」

「立村先輩、それ、されたんですか？」

「ああ、あの野郎にな」

当然、目指す先は、カンガルーのふくろに赤ちゃん詰込んでにやにやしているあの男に向くわけだ。ファミリーレストランでやたらと噛み切れないステーキをご馳走になり、余計な裏話を開かされたりなんぞして、拳骨を握り締めたまま下ろす先に迷った記憶を忘れてはいないのだ。

「それ、先輩、誰ですか」

「狩野先生とおない歳で、しかも俺の三年間担任だったっていうあいつだよ！」

窓に向かって吐き捨てた。品山からいくら怒鳴っても奴には聞こえないのが幸いだ。ざまあみろ。

われを忘れかけたのはさすがにみっともない。もう一度じゅうたんに座り込み、ラムネをまた一口飲んだ。だいぶぬるくなっている。すでに時計は二時半を回っている。昼下がりという奴だ。たらたらしゃべっているだけでも時間は自然と経ち、退屈もせずにする。霧島の様子を時々伺うが、飽きている様子もなく、時々威張り、時々ベそかきながらそれでも上総の隣に陣取ってしゃべり続けている。

「あのさ、霧島」

何度か問いかけた言葉をもう一度投げた。

「なんですか、先輩？」

「学校ではさ、誰と遊ぶことが多い？ 例えばクラスの連中とか、それから小学校の時の友だちとか」

「僕はほとんど、生徒会室におりますのでクラスの連中とはあまり話をすることがございません」

きりりと言い切る。予想はしていた。クラス連中からもお断りだろう、こんな高飛車でかつ勘違いしたプライドの持ち主は。第二のだれだれじゃないかとひそかに心配していたのだが、本人は意にも介せずといった風情だ。

「それなら生徒会役員同士か？」

「まさかそんなことはありません。馴れ合いは嫌いです」

——じゃあ今何してるんだよ。

隣で足をだらんと伸ばして。頭をソファの座席にもたれて、だらだらしゃべっているこいつが。

「じゃあ、放課後は」

「生徒会室にずっとぱりです。そうでなければ父について家業の修行でしょうか」

「修行？」

呉服屋の跡取りとしてどういうことをするんだろうか。興味はある。霧島は上総にあどけなく笑いかけた。たまにこういう子どもっぽいかわいところを見せることがある。

「そうです。もちろん勉強優先ではありますが、お得意様のお宅に反物を運ぶなど男手として手伝いに行くこともありますし、夜いらっしゃるお客様の接客を隣の部屋で聞いていることもあります」

「隣の部屋で聞くてどういうこと？ 盗み聞きじゃないだろうし」

「厳密に言いますとそれに近いことです」

霧島は悪びれず答えた。

「いわゆる店での接客とは違いますが、お客様が自宅の客間にいらっしゃって、両親と語らっていることがあります。もちろん僕は自室にありますが、実はその部屋が居間に直でつながっている場所なのです」

「客間につながっているって、例えば襖で区切られているとかそういう感じか？」

「はい、客間は洋室ですが、ちょうど六畳の和室が僕の部屋になり、襖で仕切られています。いやおうなしにお客様と両親の会話が聞こえてきます」

「それってちょっと、かなりプライバシースペースきついんじゃないか？」

上総なりに部屋のイメージを膨らませてみる。指先でまず霧島邸の客間をこしらえてみる。次にその隣、襖で仕切られた霧島自身の部屋。襖だとまず物音ははっきりくっきり聞こえるだろうし、互いの物音も気にかかるだろう。

「そうです。僕が中学二年の四月より両親の指示でそこで寝起きすることになりました」

まあ、六畳の部屋なのだから狭くはないだろう。しかし、客間が隣というのは、結構神経使う

のではないだろうか。

「僕はテレビもラジオも見たり聞いたりしませんし、することといえば勉強か本を読むかのどちらかです。ただ、お客様がいらした時にはできるだけその会話を聞いて様子を伺うようにと両親より言いつかっております」

「盗み聞き、ってことかそれが」

「はい。僕なりに耳学問しなくてはということです。将来のためにも。それに」

霧島は仰向けになり天井を見上げた。小声で「あ、でかいシャンデリア」とつぶやき、話を続けた。

「何かがあると僕を呼び出して、ご挨拶するようになると言われることも多々あります。そのことでもあるのであまりふざけた格好はできません。制服を脱ぐのは寝るときですね」

——で、普段着があれか。

「そうか、お客さまって帰るのは何時頃？」

「夜十二時過ぎのこともありますが大抵は九時頃ですね」

「その間、ずっと正座して、襖越しに耳済ませているわけなんだな。想像するとかなり大変だよな。察するよ」

「まあ、確かに、自由になる時間は少ないですね。もっとも僕も友だちを呼んでしゃべるわけではなくて、部屋にいてもすることないですし、それは仕方ないことかもしれません」

「お客様が帰った後だけど、さすがにそこから先はプライベートタイム過ごせるだろ」

「はい、両親が二階に上がって休めば、あとは僕がこっそり部屋から抜け出しても気づかれることはありません。服を着替えて目立たない格好で窓から抜け出すことくらい簡単です。慣れてます」

——だからあんな格好いつもしてたのか。

上総は霧島を横目で見た。思わず目が合った。なぜか笑みを交わしたくなった。

霧島の家庭事情をべらべら聞かされているうちは、

——霧島さんもこんな弟いたら気、休まらないだろうにな。

いろいろと同情していたものだった。しかし、訴えるわけでもない日常の一コマを拾い上げていくうちに、それなりの輪郭が浮かび上がるのを見た。

——自分の部屋が襖一枚で仕切られていて、しかもいつでも公開して大丈夫な状態にしておかねばならないということか。

いつお呼び出しが来るかわからない緊張感のもと、青大附中の制服を着たまま過ごす霧島。もちろんひとりでベッドかふとんかどちらかにねっころがるわけにも行かない。将来の自分の仕事を膨らませるために日々、耳を済ませるのみ。夜中に客人が帰った後、こっそり羽を伸ばしに真夜中の街に繰り出す。ジーンズとトレーナー、今の時期であればよれよれのシャツで外に出て、こっそりピンクチラシの店に潜ってエロ本を楽しむ。

「あのさ、霧島。外に出るたって、いわゆるディスコとかそういうところに行くわけじゃないだろ」

「行くわけありません。補導されたらどうするんですか。せいぜいコンビニで食べるもの買ったり、雑誌読んだり、その程度です。群れるのは嫌いです」

やはりそのところはまじめだ。南雲とは違う。上総は霧島の仰向けにした顔を覗き込み深くため息を吐いた。やれやれ気分ではない、別のものがふっともれた。

——だからあの本を持って帰れなかったんだな。

霧島呉服店の跡継ぎとして、日々強く意識を持って自分の行動を制している霧島。

かつて姉のゆいが激しく「私だってちゃんと跡継ぎになれるのに弟ばかり評価してひどい！」とか叫んでいたが、かえって彼女の場合はそれでよかったのかもしれない。学校ではひとりぼっち、生徒会でも仲良しを作ることなくただひたすら自分を貫くのみ。女子たちからの憧れ視線すらも「おろかな女子」として切り捨てている。

それもすべては将来の自分のため。そう割り切っている。

霧島なりに総領息子なりの意地もあるのだろう。姉に対する過去からの怒りも混じっているのだろう。ただ、話を聞いている限り自由はかなりの部分制限されているように見える。

——部屋にあの、縛られたお姉さんの写真集なんてあろうもんならどうなってしまおうんだらうな。

いつでも客間から見られる襖一枚の部屋には、いわゆる写真集なんて隠すことも難しいだろう。霧島が前話してくれた内容によると、部屋はいつも母親が掃除してくれると聞く。それもかなり、引き出しやら筆筒やらすべてと聞く。隠し場所にも不便しているんじゃないだろうか。出来のよすぎる息子が、ひそかにあんな激しい写真に興味津々と知ったら、霧島の母はどういう反応を示すだろうか。ただでさえかなりのマザコンと噂されている霧島だ、母も溺愛する息子の闇の部分など知りたくもないだろう。

——先輩のうちに遊びに行くなら、って材料一セット用意する親だからな、霧島の家は。

家で本性を出さず、両親の求める賢い跡取息子として過ごし、夜中だけだらだらした格好でコンビニに繰り出すのが関の山。しかも派手な街に行く度胸も実はない。

——俺もかなり変わった家庭で育っているって言われているけど、霧島ほどではないな。少なくともひとりで写真集見る分には不便ないし、母さんに部屋かき回されることもあるけど基本的には隠せるし。ひとりでいる時に邪魔されることは、あんまりないしな。

「霧島、俺の部屋来るか？」

勢いつけて立ち上がり、上総は霧島に尋ねた。ぼんやりした顔で霧島は上総の顔を見上げた。

「え、先輩の部屋ですか？」

「そう。もしかしたらうちの親が来るかもしれないし、ここで散らかしているより落ち着くだろうし。飲み物は持ってくよ」

言い終わる前に霧島は飛び上がり、上総をあっさり追い越して目的地へまっしぐら、走りぬけた。すでに上総の部屋がどこにあるかはよく覚えているらしい。もちろん何も持っていこうとはしなかった。ガラステーブルのグラスをシンクに運び、軽く洗ってふき取った後、本日何本目

か忘れたラムネ瓶を持っていくことにした。

——もう時間も時間だし、好き勝手させてやるか。

午後二時半。そろそろ下ネタが混じってもぎりぎり許せる時間帯に突入だ。

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々（7）

霧島が上総の前では本能に準じた行動しかしないのは明白だった。

部屋に入りまずやりだしたのは本棚いじりだった。世界文学全集なわけがない。

「先輩、本、これだけですか？」

「わかってる、ちょっと待ってる」

上総も完全にあきらめの境地にいる。こうなることを予想して引き出しの奥に袋詰めしておいた雑誌一式を出さざるを得ない。勝手に引き出しかき回されるよりましだし、なにしろ霧島の嗅覚は半端でなく強すぎる。隠しても無駄だろう。掘り出される前にこちらから用意する。もっとも、露骨にエロティックなものは避けたい。友達からまわしてもらったいわゆるグラビア雑誌程度にしておく。

思った通り、霧島はベットの上に座り込み、膝を抱えてめくりだす。礼のひとつも言いやしない。五冊程度脇においてやると、一ページずつ丁寧に繰り出す。ちなみにその雑誌は、お姉さんたちのグラビアだけではなく、十代後半～二十代全般の男子向けに編集されているものらしく、下ネタだけではなくけっこうまじめな内容も掲載されている。言い訳ができる内容ではある。

しばらく静かに読みふけている霧島だが、ふと本を開きっぱなしにして問いかけてきた。

「立村先輩、いいですか」

「どうした」

「この年代しか写真ないんですか」

絶句する。どれどれと覗き込んでみる。霧島が読みふけている雑誌のグラビアには、二十歳前後のお姉さんが水着姿で横たわっている。ちゃんと着るものは着ている。

「どの年代ならいいんだよ」

「もう少し上の世代とかないんですか」

——そうだった、こいつの好みは断然年上なんだ。

霧島と知り合うきっかけとなった例の写真集を思い浮かべれば想像はつく。こいつは究極の年増好みと見た。更科と顔つき合わせてやれば話が合うんじゃないだろうか。

「俺の好みじゃないからないよ、そんなの」

「こんな若い子なんてどこがいいんですか」

あっけらかんと言っている霧島。人の好みに口出しする気はないが、お世辞にも人様にさらけ出せる趣味とは思えない。上総なりに無言で流すことにした。

「しかし不思議なものですね。先輩」

しみじみとつぶやきながらページをめくり続けていく。

「この程度の品のない女性たちに興奮するとは、いかにみな見る目ないということでしょうか」

「見る目たっていったいなんだよそれ」

少なくとも、霧島のように佐賀はるみを盲目的崇拝する奴に言われたくはない。

「世の中には本物を知る者が少なすぎるということです。よく見てください。この女性はただ薄い布でもって自分の肉体を申し訳程度に隠し、下品に見せびらかしているに過ぎません。せめて

僕としては、きちんと服をまとった状態で」

「紐で縛られているというわけか」

さらっと言い返してやる。

「違います！ 僕が言いたいのは、ただ生身をさらけ出してはしゃいでいる女子よりも、気品ある格好で色香を漂わせる女性こそ本物ということです！」

「そんな人いるのか？」

上総からしたら霧島の趣味は到底理解しがたいものだった。そんな細かいこと考えずに使うだけ使えばいいだろうに、程度のものしかない。もっとも上総自身も好みはうるさいほうだと自覚はしていて、その手の本を手に入れるにはかなり吟味する。確かにそうなのだ、はしゃいでいるような水着グラビアはあまり好きではないし、どちらかというと清楚で品のよい女性の方が……

いや、それ以前にそういう人はあまりこういうグラビアに出てこないような気がするが。

「だから探さざるを得ないのです。今の時代はつまらぬものばかりです」

古臭い言い方をしつつ、それでも霧島はじっくり読みふけていた。

こうやって集中して女性のグラビア写真をめくるなんて事、我が家ではきっと許されないのだろう。霧島の家庭事情を聞いていればだいたい想像はつく。部屋には何も隠せない環境下、せいぜいコンビニの立ち読みで飢えを満たすしかないし、過激な本を見たければ例のピンク書店に足を向ける程度だろう。

——十四歳、十三歳、どっちだろう。

霧島の誕生日を確認してはいないが、どちらにしてもこういう本に興味湧きすぎて困る時期だろう。自分の経験からしてもそれは感じる。ただ霧島の場合、クラスの男子たちとその手の話題で盛り上がりたりとか、仲のよい友だちとこそそそしゃべったりとか、せめてひとりで思う存分妄想にひたったりとか、そういうことが簡単にできる環境にはいなさそうだ。せいぜい、上総の部屋で言いたい放題わめき散らす程度に過ぎない。

——ほんと俺は恵まれてたよな。本条先輩もいたし。

人のことは言えないし、友だち……主に羽飛や南雲、評議男子連中……とその手の話が自然に持ち出せるようになったのもつい最近になってからだ。ただ上総の場合は本条先輩がいて、自分自身が興味ない振りしていてもすぐにフォローに回ってくれた。当時は気づかなかったけれども、本条先輩からしたら丸見えだったのだろう。今、霧島を見ている時のように。

上総は黙って手帳を取り出した。とりあえずは明日、本条先輩に会って霧島のことを相談してみよう。本条先輩も霧島ゆいを知っているしその弟キリオとしての情報も把握しているはずだ。もう少し、自分自身霧島のために何かできることがあるかどうかを探ってみたかった。こうやってグラビア雑誌をえさ代わりにやっているだけではなくて。

いきなり電話が鳴り響いた。居間の窓も開け放していたので外からも響く。

「誰だろうな」

一声かけて居間に戻り、まずは受話器を取った。母の可能性が多分にある。

「はい、立村です」

「……霧島です」

かすかに甘い響きがある。女子の声であることには変わりなし。ただ上総の記憶するその女子とはうまく重ならなかった。力がほんの少し、弱まっているようだった。

「霧島さん？」

同じ苗字でありながら、呼び捨てと「さん」付けとでは大きな違いがある。上総は小声で答え、居間の戸を閉めた。窓も閉めたいが手が届かない。

——霧島さんか、どうしたんだろう？

姉の霧島ゆいとは評議委員会で三年間一緒だった。人呼んで「C組の美少女アマゾネス」とささやかれてきた女傑だが、諸事情で青大附高への推薦を受けることなく、可南女子高校に進学した人だった。弟からは「最低女、いつでも下着を平気で脱ぐ女」などと聞くも耐えがたい罵倒を受けているがこれは立場からすると仕方ないことかもしれない。もともと子どもの頃犯罪に巻き込まれ、そのことの後遺症が響いて現在にいたるとも聞く。もっとも上総はそのことを美里や難波から聞いたことでしか把握していない。弟の霧島から聞いた限りでは一方的な恨みつらみの羅列なので、話半分に流している内容だ。

「お久しぶりね、立村くん」

「こちらこそ、元気だった？」

もともと一対一で話す機会のない女子ではある。もちろん同期の評議女子なのでそれなりの会話は成り立っていたけれど、話す際にはいつも美里がいたし、他の男子連中も混じっていた。連絡するのもすべて美里に任せていた。電話線一本でつながるのはやはり、電波がぴりぴりして落ち着かない。

霧島ゆいの口調は、青大附中にいた時とは異なり、ほんの少し柔らかかった。

「うちの弟が行ってるって聞いたけど、今いる？」

「いるよ」

「側に、いる？」

「いや、部屋にいるから話は聞かれてないよ」

なぜ回りくどい返事をしてしまったのか、実は自分でもよくわからない。

「そう、なら伝えてもらえない？」

「いいけど何を」

「今日の六時にお得意様と食事するから、五時までにうちに戻りなさいって。それだけ言ってもらえたらあいつわかるはずだから」

「わかった、いいよ、伝えておくよ」

今はちょうど三時過ぎ。そろそろ追い出さねばなるまい。品山駅から出る汽車は確か四時二十五分発の青潟駅行きだとちょうどよさそうだ。

「ありがと。それと、この前美里から聞いたけど」

やはり静かな口調で霧島は言葉をつないだ。

「うちの弟のこと、いったいなんで興味もったの？ 美里も不思議がってたけど」

「いや、なんとなく。けど霧島さんのこと陰口言ったりはしてないから、それは大丈夫」

「無理しなくていいのにね」

やはり、卒業してからの霧島ゆいの様子には違和感がある。アマゾネスである以上、クラスの女子たちを守るために過激に叫び、いざという時には身体を張って戦おうとする姿が強烈だった人なのに。青大附属から可南に旅立ってからはいろいろ思うこともあったのかもしれない。弟が全く気づかぬ間に、彼女なりの道をたどっているのだろう。

「一応伝えておくけど、うちの弟が男子の友だちのうちに遊びに行くなんてこと、今までめったになかったことなの。ずっと大人の世界ばかり見てきたガキだから、失礼なことしでかしてるんじゃないかって思うけど、今のうちに謝っておくわ。ごめんなさい」

——やっぱりわかってるじゃないか。

もちろんそんなことは口に出さず上総は答えた。

「そんなことないよ。中学二年にしては将来の意識高すぎるよな」

「うちの母も、最近立村くんがあいつのことを気にかけてくれていると知って喜んでるわよ。真が友だちを作ろうとするなんて信じられないって。大丈夫よ、私も立村くんのこと全く知らないわけじゃないし、それなりにいいように言ってあるから。そうそう、お土産役立った？」

笑いを含んだ声で霧島ゆいはささやいた。

「土産って、ああ、昼ごはんの Pasta セットか。ありがとう、全部ふたりで食べたよ。びっくりしたけど」

小声でくすりと笑う声。もうかつてのアマゾネスの気配はなし。

「前、美里から聞いたことがあるのよ。二年のクリスマスに立村くんのうちにおよばれして、豪華なご飯でもてなされたって。しかも全部立村くんが作ってくれたらしいって」

「そんなことあったなそう言えば」

かすかな記憶。まだ美里と付き合いが深まろうとした頃のほのかな思い出。その後の父による不要な留めには蓋をしておきたい。

「それなら、変に外で食事してお金使うよりも、うちでおいしく作ってもらったほうがいいんじゃないって母に言っておいたのよ。母は真が外で何かするんでないかって心配でならないから。それなら役立ったのね」

「うん、ありがとう。豪華なランチになったんじゃないかな」

思わず微笑みが溢れる。そうか、あれは姉の思いやりだったというわけか。霧島自身は気づいてないだろうが、家族はそれなりにあいつのことを見守っているというわけだ。

「それじゃ、さっきのことだけど伝えておくよ」

「うん、それと」

また静かな、深い声で霧島ゆいの声が、電話奥で響いた。

「杉本さんのことも、どうかよろしくね」

ことりと電話の切れる音がした。

——あれがああ、霧島さんだろうか？

すぐに部屋へ戻り、「お前早く帰る準備しろ」とか言って霧島の尻を叩かねばならないはずだ。ただどうしても頭が働かない。なぜ、霧島ゆいは穏やかに微笑んでいるのだろう。きんきんとうるさいほど叫びちらし、男女平等を激しく訴えていた姿とは違う。

上総はソファーに座った。ほんの少しだけ休みたかった。

——いや、可南に進学決まってから、ずっとああだったかもしれない。

自分には一切価値がなくなってしまった、この世に存在する価値などない。何度も彼女は「価値」がほしいと訴えていた。青大附高に、たとえ生徒でなくてもいいから残してほしいと殿池先生にぶつけていた。学業不振というまっとうな理由により霧島ゆいは、いわゆる「女子刑務所」とささやかれるような底辺私立女子高校に進学せざるを得なかった。美里たちは今でもそうだった彼女のことを思いやりため息をついている。

——でも、残酷なようだけど、彼女が打ちのめされてから始めて霧島さんのよさを認識した奴らも、たくさんいたな。

上総は決して口には出さない。ただ、がむしゃらに男子たちとぶつかり合い戦い続けている姿よりも、おとなしくうなだれてE組で杉本を囲み語らっている姿の方が何千倍も美しいと見る者の方が断然多い、それが現実だ。

——霧島さんは、すべての戦いに敗北してから、初めて男子たちから認められた人なのかもしれない。最初からこうやって静かに、ぶつからずに過ごしていれば、もっとたくさんのもので得られたかもしれない人だったのかもな。

電話ごしで語らった霧島ゆいとのはじめは、今まで彼女に感じたことのない不思議な安らぎが含まれていた。それがどういう成分なのか、上総には全く見当がつかなかった。

「霧島、お前いったい何してるんだ？」

たぶん部屋の中はとんでもないことになっているだろうと思っていた。本棚はかき回され、へたしたら引き出しの中もひっぱりだされているのではないかと最悪のパターンも頭の中には残っていた。そのパターンから考えれば、ベットの上で完全にくつろぎきって、カセットテープを引っ張り出してラジカセで聞いている姿はまだまだ。

「人のテープを持ち出すなよ。だいぶ伸びているのもあるんだからさ」

「先輩はもっとロックとかパンクとかそういうのは聴かないんですか。全然ないですね」

「ないわけじゃないよ。海外の放送局で録音しているものは結構あるし。ただあまりうるさい曲が苦手なだけなんだ」

南雲とよく「全米チャート」「全英チャート」からはじまり「全独」「全伊」「全仏」といった風に海外のベストチャート楽曲を録音してやりとりするのもしょっちゅうだ。面倒なのでそれは言わないでおいた。

「イージーリスニングがほとんどなんですね。なんか個性がないというか」

「悪かったな。だったら早くしまえよ」

「何本か借りてっていいですか」

ほしいのがあれば持って行けばいい。許可は頷いて出し、上総は霧島にまずは呼びかけることにした。

「さっきお前の姉さんから電話があったよ」

「あの存在価値のない女からですか」

「その言い方よせ。六時からお得意様と食事するから、五時までに戻れとのご通達だから、品山発十六時二十五分の汽車に間に合うよう準備しろよ」

「まだ一時間ちょっとありますね。十分間に合います」

グラビア雑誌は一冊しか手をつけていなかったらしい。霧島はラジカセに一本カセットテープを押し込み、我が物顔で再生ボタンを押した。流れてくるのは霧島曰く「個性のないイージーリスニング」楽曲で、偶然にも上総の一番好きなメロディだった。

真顔で一瞬天井を見上げ、また霧島は目を閉じつぶやいた。

「先輩、ちょっとだけ寝させてください。時間がきたら起きます」

その二 高校一年夏休み八日目・立村上総の霧島真に振り回される日々 (8)

霧島が寝付いたわずかの時間を利用して、部屋を片付けたり居間を整えたりしているうちに四時過ぎとなった。徒歩で十五分程度なのでそろそろ起こした方がいいだろう。そう思いきや、

「先輩、どうもお世話になりました」

気づかぬうちに身支度をした霧島が涼やかな顔して立っている。

「いや、たいしたことでもできなかったけど。なら行こうか」

言いかけて思い立つ。地下室に飛んでいって冷蔵庫から羊羹を箱ごとくすねる。これも母の話だとかなり高級な店のものらしいので、手土産には最適だろう。

「重たいけど、家族の人たちと分けてくれないかな」

「ありがとうございます。それにしてもずいぶんありますね」

「うちにはやたらといただきものばかりあるんだ」

野郎友だちに土産なんてめったに持たせないのだが、今日はさすがに霧島家のみなさまの気遣いを考えると何もしないわけにはいかないだろう。靴を履いて、財布を確認しふたり連れ立って駅までの道を歩き始めた。帰りのために自転車を引き出した。見咎めて霧島が口を尖らせた。

「先輩だけなぜ自転車ですか」

「いや、やはり帰りは早く着きたいから」

「それじゃ、僕だけ不公平じゃないですか」

「不公平だったって」

別に霧島をほったらかしにして駅に向かうわけではない。ちゃんと押していくつもりでいる。何が癪に障ったのだろう。機嫌取るため顔を覗き込む。

「二人乗りって方法だってあるのに、なぜそれをおっしゃっていただけないのですか」

「ちょっと待てよ。二人乗りってまずいだろう？」

法律に触れるんじゃないだろうか。さすがにそれはまずい。いや、全くやっていないとは言えないけれども、品山で顔の割れているところでそれをするのはできれば避けたい。

「だってずるいですよそんなの」

本日何度目かのため息かわからない。しかたない。裏道通っていこう。

「わかった。それなら乗れよ」

なんとか駅まで着いて霧島を下ろした。幸い誰にも顔をあわせないですんだのと、いわゆる道路は走らずにきたのでぎりぎりセーフというところだろうか。

「どうもありがとうございます。まだ余裕ですね」

時刻を確認すると、四時十七分。あと十分程度は待ちそうだ。人の少ない待合室に入ってまずは汗をぬぐう。

「なんか飲むか」

「コーラ飲みます」

当然のごとくリクエストする霧島。もう何も考えずに缶コーヒーを一本自動販売機で買って

きた。おいしそうに飲んだ。いったい何杯飲んだというんだろう。

「うちではコーラとか飲めないですよ」

照れくさそうに霧島は笑った。

「親の方針で添加物の入った食べ物飲み物は一切禁止です。珈琲も表向きはカフェインが入っているから決して口にしてはならないと言われてます。そんなの知ったことじゃないですが」

「現実問題それってかなり、厳しそうだな」

「将来のためですから」

霧島は膝に片手を置き、一気に飲み干した。

「僕があのお店を継ぐにはたくさんのハードルがあります。とりあえず身内との戦いには勝ちましたが、僕自身がレベルを高めていかないとどうなることかわかりません」

「身内、か」

姉との後継者争いのことだろう。頭脳明晰さも含めて考えれば、弟に軍配が上がるのも当然のような気は確かにする。

「それに、あの愚かな姉が誰か馬鹿な男をたらしこむ可能性もあります。たまたまそいつが家をのっりにきてしまう可能性だってゼロではありません」

——難波、元気かな。

全く関係なく、青大附属のシャーロック・ホームズを思い浮かべた。

「とにかく、僕は一瞬たりとも、気を抜くわけにはいかないのです」

「それなら将来は、青潟大学に進学するつもりなのか？」

なんだかそれはもったいないような気がしてきた。どこか別の大学の、それこそ商学部か経済学部か、仕事に役立ちそうな学部を目指したほうがいいんじゃないだろうか。

「たぶん青潟大学に進学せざるを得ないでしょう。他の地域に出たらたぶん親が苦しむ羽目になります。ただできれば短期でもいいので留学はしたいですね」

親の面倒を見るというのは確かに重たいことだろう。霧島家の事情を考えるとそれも仕方がないのかもしれない。

「立村先輩はどうなさるおつもりですか？」

「俺の頭だと他の大学は受け入れてもらえそうにないから、青潟大学の英文科を目指すつもりだけどどうなるかな。そこすら推薦もらえないかもしれない」

現在の英語科ではなんとかトップを……例外一回あるが……保っている。ただし、大学推薦の基準が理数科目もかねてということであれば、厳しい現実が待ち構えていることは承知している。そのこともあって、明日、狩野先生に相談をしたかったのだ。

「将来のお仕事も考えてないのですか」

「そうだな、今はまだ、はっきりしたものはないよ。語学関係で何か仕事があればいいんだけどな。通訳とか、翻訳とか」

将来の夢と問われて何も答えられなかった自分。どのような仕事につくか、そのこと自体があいまいだ。上総なりに自分の得意分野は把握できているけれども、その内容と仕事が結びつくかどうかとも判断できない。とりあえずは英文科、ここまでの到着駅はよしとしてもそれ以上の路が

見えずにいる。どんな駅が待ち構えているのか、予想がつかない。

「だから霧島はすごいと思うよ。もうこの時期に自分のすべき路を見極めているんだから。そのために目標たててきちんと勉強しているなんて、ふつうじゃないよな」

「それが僕の義務ですから。そうしないといけません」

缶コーラを空にして、ゴミ箱に捨てて霧島はまた上総の隣に腰掛けた。まだ日の暮れる気配はない。まだまだ遊んでいても怒られない時間帯のはずだった。

「先輩、明日はお忙しいと伺いましたが」

「そうだよ、用事あるし」

「あさっては？」

「わからないけど、自由研究とかそのあたりもあるしな」

やんわりと制したつもりだった。

「霧島は夏休み、八月に入ってから講習とかあるだろ？ それから生徒会関係の、ほら学校祭関係の準備とか」

「はい」、そうですね」

霧島はそれ以上しつこく迫ってこなかった。青瀧行きの切符を買い、軽く角をはじいた。

「そろそろ参ります。本日はおもてなしいただきありがとうございました」

かすかに汽車のきしむ音が聞こえてきた。霧島は一礼した後、改札口に消えていった。

西陽もまだ射さない空のもと、上総は自転車のペダルを強く踏み直した。徒歩なら十五分程度、自転車なら五分で自宅に着く。霧島が部屋で居眠りした間に部屋も片付け終わったので、とりあえずはゆっくりできる。

鍵を開けてすぐ部屋の空気を入れ替え、冷蔵庫から氷を拾って口に放り込む。思いっきりかじると、水よりもずっと喉が冷えた。

届いていた夕刊のチラシをテーブルの隅に寄せ、社会面からじっくりと読み込んだ。つい三十分前の霧島が運んできた喧騒が嘘のようだった。夏休みはたいてい、いつも静かなはずだった。

——今日は特に載ってないな。

霧島と知り合ってから、新聞広告をさりげなくチェックするようにしていた。霧島呉服店の広告はでかでか的一面を埋めるほどではない。むしろ、週に一度程度、死亡広告の隣あたりに店名と電話番号だけ細く挟み込まれている目立たないものだ。結構青大附属関係者の関係している企業が掲載されることが多い。

——それにしてもあいつの生活、ほんと、大変なんだな。

最初のうちは姉とのトラブルが一因かと想像していた。その後、生徒会関係のいざこざ、そして最近「跡取息子」としての巨大なプレッシャー。上総には想像できないほどの重荷を背負っていると見た。今日だってそうだ。せっかく休みの日、合宿終了の次の日に、親同伴でお得意様との会食があると聞く。たぶん大人相手だろう。いくら後継者といっても上総相手の時のように言いたい放題なわけがない。きつときりりとしたスーツをまとい、品のいい貴公子面して物静かに微笑んでいるに違いない。大人をだますのは慣れっこにきまっている。クラスの連中とは浮

き上がった関係だったとしても。

あと十分で五時だ。上総は夕刊をチラシはさんでたたみ直しテーブルに置いた。父が帰ってきたらすぐに手に取りたがるから、こうやって放置しておく。母に見られたらどやされるんだがそこが男二人暮らしの気楽さだった。立ち上がり、受話器を取った。忘れないうちに、できれば陽が落ちないうちにしておくべきことがある。

手帳に書き込んだ電話番号をひとさし指でゆっくり押す。プルル音が流れるのを待つ。

——はい、杉本でございます。

「立村です、ええと、杉本か？」

声だけですぐにわかる。杉本梨南の一本調子なささやき声が受話器の向こうから聞こえてきた。はっきりと、耳に届く。

「立村先輩、こんばんは。何か御用ですか？」

全く感情の感じられない機械的な言い方で杉本は返事してくれた。

「私のいない間に何度もお電話をいただいたと母から伺っておりますが、急ぎの御用でしょうか？」

「急ぎじゃないけど、しばらく連絡取れなかったからどうしたのかなと思って、それだけだけど」

「お暇なのですね。その時間をもっと有意義にお使いになろうとはお考えではなかったのですか」

「いや、だから有意義なこととか思って、杉本に連絡してみたんだけど、まずいかな」

「相変わらず先輩は幼児化してらっしゃるのですね」

きつい言葉ではあるけれども、いつもの杉本の調子だと確認が取れただけで十分だ。すぐに次の展開を急ぐ。

「あのさ、杉本、突然なんだけどあさって、一日暇か？」

——一応、空いております。

飛びつくのは危険だ。まずは様子を伺うため別の質問を投げかける。

「塾の夏期講習とか、学校の講習とかは行かないのか？」

青大附中でも公立入試のための準備を行わないわけがないだろう。そっと探りを入れてみる。杉本の口調は変わらなかった。

——はい。主に自宅で勉強いたします。ただ、この一週間ほどは友だちの勉強を手伝うため忙しくしておりました。

「それ何？ 友だちの勉強って？ もしかしてあの桜田さんと？」

——それもあります。ただ桜田さんは成績がよろしいので私が手伝うまでもありません。先入観で決めることは許されざることです。

確かに。不良だからといって成績悪いとは限らないというわけだ。東堂にあとで半殺しにされる場所だった。

「でも、それだったら何か予定でもあったのか？」

——はい、いろいろとございます。人に教えると自分のあいまいだった部分がよくわかります。非常に自分のためになります。友だちも大変喜んでくれます。青大附中の愚かな男子連中とは大違いです。感謝していただけるという、素晴らしい経験ができます。

いや確かにそうなのだが、杉本にしてはずいぶん的をはずした返事をする。上総が知りたいのは、この一週間ほど連絡が入らなかったのはなぜなのか、なぜ、杉本は毎日出歩いていたのか、塾とか学校の講習でなければいったいどこにほつつきあるいていたのかという一点にある。

「誰に教えてたんだよ」

——立村先輩には関係ないこととございます。私には私のプライバシーがございます。それとできれば、東堂先輩にも同様のことをお伝えいただけると助かります。桜田さんは東堂先輩の所有物ではないとお伝えくださいませ！

これはかなり、夏休み中東堂の奴、付きまといまくっているとみた。できれば上総も東堂に接触して、杉本たちが何をたくらんでいるのか確認したいところだ。

「わかったよ杉本。それなら聞かない代わりに教えてほしいんだけど、あさって本当に暇なら、青潟東高の下見に行くとかさ」

口走った瞬間後悔した。杉本の反応が怖い。言葉を切って様子見するしかない。

——それはよいかもしれません。

棒のような言葉が続いた。感情の揺らぎが微塵もない響きだった。

——お付き合いいたします。それでは待ち合わせ、どちらにいたしましょうか。立村先輩が迷わないですむように、まずは駅前にいたしましょうか。

しごくあっさり夏と夏の散歩予定は組み込まれた。手帳に書きこみながら上総は、霧島の持ち出した極秘情報の記憶をまずは封印することに決めた。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々

十一時二十分。まだ本条先輩は来ていない。

「立村くん」

教師研修室……いわゆる「E組」の教室に、机を寄せて向かい合わせにし、椅子に腰掛けて待っていたのは狩野先生だった。

「おはようございます。お久しぶりです」

心込めて礼をする。中学を卒業してからまだ四ヶ月少し。空気がさらりとして心地いいのはこの教室に人がほとんどいないからか。かすかにグラウンドと体育館あたりから運動部の練習および吹奏楽部の演奏が聞こえる以外はきわめて静かだった。

わざわざ立って礼を返してくれた狩野先生は、ワイシャツにネクタイを締めていた。夏休みだからといって、生徒と一緒に丸ごと遊びほうけるわけがないと聞いたのはつい最近のことだ。先生によっては部活の指導で忙しい人もいるし、夏の夏期講習だってある。極めつけがこうやって卒業生のアフターフォローまで行われているという有様だ。忙しくないわけがない。

「夏期講習は」

「僕の担当分はすでに二時間で終わりました。今は古文の授業のほうです」

一応、別教室で授業が行われているはずだった。上総が中学生だった頃も同様だった。もちろんほぼ全員参加が義務付けられている。もっとも上総の場合は数学が言うまでもない状態なので、ついていけるわけもなく規模を一人に狭めた形での個人授業と相成ったわけだが。学校に来ることと授業とはイコールではない。午後からの委員会活動以上の目的なんてない。そんな三年間だった。

「これから駒方先生もいらっしゃいますが、用事がありとのことなので十二時過ぎと伺ってます。本条くんも」

「はい、そのくらいと」

まずは狩野先生の向かいに席を取って腰掛けた。「失礼します」と一声かけて、薄い麻のジャケットを脱いだ。背もたれにかけておく。

「そろそろ今日あたりが暑さのピークかもしれませんね」

「え、少し早いんじゃない」

「蝉が鳴き始めました。それほど目立ちませんが、やはり鳴き方の響きによって暑さの段階を図ることができます」

——よくわからないけど、そうなのかな。

今日の集いは駒方先生からの提案だった。結論から言えば本条先輩ありきの内容だ。

——上総もそろそろ高校に慣れてきた頃だろうし、里希もいろいろと向こうの学校で学ぶことも多いだろうしな。よい機会だからお前たちふたりを呼んでじっくり話をしたいんだが、予定はいかがかな？

もともと評議委員会でお世話になり、特に上総は三年時「E組」通いでいろいろと迷惑をかけ

た過去がある。本条先輩の担任が駒方先生だったということもあるだろう。ちらっと聞いた限りでは、上総がかけた迷惑どころの問題ではなかったようなので、それなりにつながりも強いに違いない。

——おおそうだ、せっかくだから狩野先生、貴方もいらっしゃい。十代の若者を年寄りがひとりで面倒をみるのはやはり、体力が持たないよ。二十代の体力は必要だよ。

夏休み三日目に突然駒方先生から電話がかかってきて、何も考えずにOKしていた。相手があの……名前は言いたくないが……元担任だったら一瞬のためらいもなく拒否するか電話を叩き切っていただろうが、さすがに恩義を忘れはしない。それに一緒にいるのが狩野先生ならば、やはり少し話したいこともある。少し早めに来たのはそのこともあった。

「立村くん、高校では数学、調子はどうですか？」

すぐに狩野先生は話を切り出した。

「正直、厳しいです」

短く答えた。

「英語科だと数学の分量がもう少し減るかと思ってましたが、やはり甘かったと思います」

「そうですね、ここから国公立大学を目指す人もいるはずですから、数学の授業はかなり念入りに行われるはずですよ。補習も参加してますか？」

「はい、週に三回ほど」

唇を噛む。狩野先生の顔を見るのが辛い。今日、あえて早く到着したのはこの部分で胃の痛みが耐えられなくなったからだった。数学の苦手な生徒たちが十人程度集められて、特別なプリントを解くよう指示される。小学校の数学すらぎりぎりなんとか過ごしてきた上総にとって、高校の数学Ⅰがそう簡単についていけないわけもない。自分なりに格闘はするのだが、時間をかけた割に他の生徒たちとの差が格段違いすぎる答案を出さなくてはならない。

「最初はなんとかかなるかとかかをくくっていましたが、やはり」

「数学科の皆さんは説明を熱心してくれますか」

これも言葉を飲み込むしかない。あまりにも着いていけなさのレベルが違い過ぎることもあり、たいてい上総を担当した数学関係の先生たちはあきれはてる。いや、とりあえずは教師ならまだいい。問題は青潟大学の学生たちがボランティアでつききりの説明をしてくれる時だ。

「きっと、みな、教えようがないと思っているんだと思います。いわゆる、ふつうの、常識がわからないから」

「そうですか、大学生の方々ですか」

今まで罵倒された言葉が耳に焼き付いて離れない。「この程度、常識だろ？」「えー、本当にこれ、わからないの？ 中学生でもわかるよこんなの」「いったい三年間青大附属で何やってきたんだよ、まったくさっき言っただろ？ 俺に何回同じこと言わせるんだ？ いい加減自立しろよ」エトセトラ、エトセトラ。

「そういうことだったのですね」

狩野先生はしばらく頷きながら上総の言葉に耳を傾けていた。上総は決して自分に同情してほ

しいとは思わない。ただ、何とかしないと先の問題が待ち構えてるという現実を、なんとかしたかっただけだった。

「英語科だからといって数学を勉強しなくてもいいとは思ってません。ただ、このままだと、青澗大学への内部生推薦が受けられないかも知れないというのがあって」

上総が中学入学した頃は、青大附高の英語科にもぐりこめば最低でも青澗大学英文科への路は確保されたように言われてきていた。母もそれを狙ってスパルタしたのだと聞いている。しかしここ数年で方向性がだいぶ変わってきたらしく、一芸に秀でるよりもバランスの取れた成績を優先したいという考え方にシフトしているようだった。生徒たち同士の会話でもその噂は流れていて、かつてのように「英語科＝英文科」のイコールは外れつつある。

「確かに、推薦に関してはいろいろな噂を耳にしますからね。ただ、立村くんは英語の成績が優秀ですし、このまま苦手科目にも努力を続けている姿を見せていけば、それほど悲観することはないと僕自身思います。一番まずいのは、苦手だからといってあきらめてしまうことです。精神論ではなく、周囲に手を抜いたことが気づかれてしまいますと、かえって悪循環になります。好きになれない授業に力を入れるのはきっと辛いでしょう。ただ、苦手なものに取りくむという姿勢を見せる、ということは何よりも重要なことです」

——という、姿勢を、見せる、か。

なんとなく狩野先生は、意図的に言葉を選んでいるような気がした。苦手科目……もちろん狩野先生担当の数学だが……に対して最後まであきらめない、これが大切なことは承知している。だが「姿を見せる」というのはどういうことだろう？ いかにも「がんばっています」といったムードを作り上げて見せ付けろということか。演じる、ということか。

上総は何も言わず、ただ頷いた。狩野先生の言葉は穏やかで、静か、それでいてまっすぐだった。

「ただ、今の補習形式は立村くん向けではないかもしれませんが。この点については高校の先生たちも気づいていないとは思えません。なんらかの形で二学期以降は立村くんにふさわしいフォロ一体制が整うはずです。その点は安心してください。中学と高校ではきちんと連携が取れていますから。場合によっては僕もお手伝いできることがありますかもしれません」

「その時はお願いします」

思わずほっとした声もれてしまった。まずい、そういえば狩野先生は二学期から担任を持つはずじゃないのか。担任を持つということは壮絶に忙しいはずだ。しかもクラスは二年のあいつ率いるあの……。

——まずい、まだこれは霧島の勝手な想像なんだ。外れてたら赤っ恥だ。

担任の件について聞いて見たかったのだが、あえて飲み込んだ。まずいまずい。

「そういえば、僕も立村くんにごとつ、相談事があったのです。今日早く来てくれて本当によかったと思っています」

「何かありましたか」

評議委員がらみのいろいろな人間関係。元A組縁故クラスのトラブル。頭の中を駆け巡る。上

総は狩野先生に真正面から向き直った。狩野先生も穏やかに受けてくれた。風の糸がすり抜けているようだった。

「最近、二年の霧島真くんとよく話をする機会が多いようですね」

いきなり直球できた。ごくっ空気を含み込んでしまった。どこで見たのだろう。

「え、それはどうして」

「立村くんは自然に受け入れているかもしれませんが、霧島くんが毎日のように高校へ通い、英語科の教室を訪ねているという話はすでに先生たちの間でも話題です。決して悪い意味での噂ではありません。ただ、どうしても教師の立場からすると上級生と下級生の友情には気を遣わねばならないことも多くなるのです」

「気、遣うのですか？」

戸惑う。中学の教師連中がいつのまにか霧島を通じて上総の情報を得てにやついているというのが気持ち悪すぎた。きっとその中にはあのカンガルー男もいるに違いない。せっかく穏やかな気分で昼に向かおうとしていたのにげんなりしてくる。

「大人たちに関心をもたれていることに抵抗を感じる気持ちもわかります。僕があえてこの話を持ち出したのには、それなりに理由があります。わかりますか」

「理由、ですか？」

やはり二学期以降霧島の担任教師になるであろうことは確実と見た。上総の元へ霧島がしつこくご注進に訪れるのは高校側からしたら実に目立つことだろう。中学生徒会副会長で秀才、かつ黙っていればあの気品ある貴公子ぶり。そんな完璧野郎がなぜ、一応は評議委員長を務めたとはいえさんざん立つ鳥後をどろどろ状態で逃げ出した奴に張り付くのか。特に中学教師側からしたら疑問符であふれ返っても当然だろう。今、目の前にいる狩野先生も恐らくその一人であろうが。

上総はしばらく考え首を振った。ポジティブな理由が見つからない。

「すでに霧島くんとも語り合う機会が多いでしょうし、彼の人となりも少しずつ把握していることではないでしょうか。正直、戸惑うことも多いでしょうが」

「はい、ただ霧島くんのお姉さんがあの霧島さんだったので、全く知らないわけではありません」

無言で狩野先生は頷いた。特に追いはしなかった。

「霧島くんの行動は少し独特なところがありますが、受け入れられましたか？」

「最初はかなり戸惑いましたが、悪気があってしていることではないですし僕はそれほど苦手には感じていません」

昨日の今日だし、さすがに「下手したら犬猫よりもひどいんじゃないかあの言動って」と突っ込みたくなっただけでことは言わない。ただ、周囲から思われているほど霧島に手を焼いているわけではない。飲み物がばがば飲みまくるわ勝手に人の本棚を漁るわ、いきなりベそかくわでのびのび振舞っている霧島を、どう扱えばいいのかで試行錯誤しているだけだ。

「それは素晴らしいことです。ありのままの彼を受け入れているのですね」

「ありのままというよりもむしろ」

言葉を切って、つい一週間前美里と羽飛の前で伝えた言葉を改めて告げた。

「僕は、本条先輩になりたいだけなんだと思います」

しばらく狩野先生は上総をじっくりと見据えていた。何かを確認したさそうだった。やがて口をゆっくりと開いた。

「立村くん、今のうちにお願ひがあります。霧島くんのことです」

「僕にできることでしょうか？」

問かけると、狩野先生は頷いた。

「君たちの年頃で得る友情は特別なものです。君もそれは十分感じ取っていることでしょう。これから来る本条くんと培った縁もそうですし、クラスメートや評議委員会の友だちも含めて一生の財産となることでしょう。君は今のところ霧島くんもそのひとりとして受け入れようとしています。ぜひ、そうしてほしい、そう願っています。ただ、これだけは心がけてほしいのですが」

間が長い。ふっと耳が熱い。

「これから先霧島くんに対して、受け入れるだけではなく間違っただけには全力で拒否をするだけの力を、立村くん持ってほしいのです」

「拒否ですか、そんな大げさなこと考えたことないんですけど」

「君は霧島くんの言動について、すべてにおいて賛成できますか？」

反対に問かけられ絶句するしかない。まず姉の罵倒はもうやめろ、そう言いたい。首を振る

。

「そうですか。そのことを注意できますか？」

「内容にもよりますが、聞きたくないことは話すのをやめるようにとは言います」

——頼むから「あの馬鹿女」ってのはやめろよ。俺だってあの人同期の評議委員なんだから。

「一緒に悪口の言い合はしたくないです」

「そうですか。ですが立村くん、これから先霧島くんと語り合っていくうちに、明らかにこれではまずいであろうと思うことが出てきた時のことを、今から少しだけ心に留めておいてほしいのです。具体的に何がとは言わずらいのですが、弱い人に対して冷ややかな見方をしてみせたり、プライドの使い方を間違えたりとか、まあ、誰にでもあることです。そういう時に立村くんにはしっかりと、その考えは間違っていると、自分自身のものさしで判断して言い聞かせるだけの力を持ってほしいのです」

「そんな人のこと、言える立場じゃないし、そんな先輩後輩というようにつながりとも」

どもりかけながら上総が言い返すのを、狩野先生は静かに制した。

「いいえ、さっき立村くんは、本条くんのような立場に立ちたいと言いましたね。そういうことです。偶然ですがお互いの間には二年の違いが横たわっています。いわゆる先輩であり後輩であり、ということです。同時に立村くんと本条くんとの間にも、一年という河が流れています。たかが一年、二年といえはそれまでですが。霧島くんが過ごしている十四歳の日々を、立村くんは二年前に済ませてます。同じものではないにしても、痛みの記憶はまだ残っているでしょう。いろいろな面で」

夏の、宿泊研修の記憶。オブジェ、美術館、狩野先生とその奥さん

「これから立村くんは、霧島くんを通じて自分自身が年上の人たちからどう見えていたかを実感することになるでしょう。貴重な体験です。しかし、かつての自分を外から見直すことは立村くんにとっても、非常に辛い可能性もあります。場合によっては受け止めきれないこともあるでしょう。その時にはどうか、僕を頼ってほしいのです」

「狩野先生？ですか」

やはりこれは、担任説確定だ。恐る恐る伺う。

「そうです。君はまだ、人に頼ってかまわない年頃です。共倒れにならないように、ふたりがゆっくりとそれぞれのペースで大人になれるように、きちんとフォローし続けます。どうか、煮詰まってしまった時にはひとりで悩まないで、まずは僕のところに電話なり学校に来るなりなんらかのアクションを起こしてください。僕はできる限りのことをします。それだけは忘れないでください。僕が伝えたかった大元はそこです」

——霧島とつるんで遊ぶってそんなに大げさなことだったのか？

「はい、そうします」

もっとも狩野先生に霧島の愚痴なんてこぼす気なぞない。「共倒れ」だとか「受け止め切れない」とか、男子同士の友情はそこまで面倒なものなんだろうか。

上総は大きく頷いた。霧島の担任かどうかについてはあえて、聞かずにおいた。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (2)

「何か飲み物買ってきましょうか？」

上総なりに気を利かせたつもりだったが、

「いえ、いいですよ。駒方先生がいらっしゃったら大学の教職員食堂に場所を移しましょう。多分空いているでしょう。落ち着いて話ができますしね」

狩野先生に制された。

「学生は基本として利用を禁じられていますが、引率者がいれば特別に入ることを許されます。主に大学の卒論指導などでよく利用されますね」

「どこにあるんですか？」

「ちゃんと案内しますから安心してください」

今だに青潟大学の校舎地図が頭に入らない。特に大学に至っては今だに迷うことがある。

「英語科のみなさんとはなじめていますか？ 成績のことは確認するまでもないのですが」

「よくしてもらってます」

あいまいにごまかした。麻生先生をはじめクラスメイトたちとのどたばた劇を説明するまでもない。ただ、男子限定でいえば一部をのぞいて……片岡とか……はうまくやっているのではないかと自負している。とりあえずはいじめられてはいないしはぶられてもいない。

「安心しました。立村くんならもう大丈夫だろうとは思っていたのですが。それはそうと、夏休みの自由研究も大変でしょうね。話に聞きますと、グループで研究することを義務付けられているとか」

きっと義妹の近江さんから聞いたことなのだろう。別に聞かれても困らない。

「はい、でも、友だちふたりと一緒に準備を進めているのでたぶん大丈夫だと思います」

「テーマを、ですか」

「はい。現代美術が好きな友だちが、ひとりの芸術家に関する論文を今探しているところです。日本語訳のものが見つからないらしいので、図書館でコピーしてもらってそれを訳する予定でいます」

頷きながら狩野先生は上総の話聞いてくれた。軽そうなめがねをかけている。銀縁で、本条先輩のものと少し似ていた。時折めがねをハンカチでふきつつ、

「現代美術とは面白い切り口ですね」

興味深そうに促した。

「いえ、僕は美術とか、絵とか全くわからないので友だちにまかせっきりです。どれ見てもきれいとかそういう感じしか持てないので。生まれつき鑑識眼がないんだらうな」

最後は独り言。思わず友だちに話しかけるみたいな口調であわててしまう。気が緩んでいる証拠だ。

「いえ、いいですよそれで。僕も正直、立村くんが現代美術を積極的に研究したいと思うとは想像していなかったのですから。引き出しを増やすためにいろいろなものを見ておくことはいいことですよ。ただ、立村くんはむしろ伝統芸能とかそちらの方に興味があるのではといろいろ

勘ぐっていたのですが、そちらはどうですか？」

——なんで知ってるんだろ？

あまり上総も母の仕事についてぺらぺらしゃべったことはないが、学校側が細かい情報を知らないわけないだろう。両親の謎の離婚から始まり、母の理解しがたい教育方針、父が「週刊アントワネット」記者ということ、おそらく狩野先生もそのあたりは把握しているはずだ。かまわない。あの担任よりはました。

「興味があるというより、子どもの頃からそういう席に出たり舞台を見たりする機会はそれなりにあっただけです。あまり面白いとは思わなかったのですが、母の手伝いで裏方の仕事をするとも増えて、それなりに言葉は覚えました」

華道茶道日本舞踊、母の娘時代たしなんでいたことに関しては無理やり植えつけられているところはある。

「そうですね。僕は日本文化には疎く、日々反省する毎日です。日本に生まれ育った者として、その国の文化をきちんと知っておきたい気持ちはあるのですが。きっかけがないと触れる機会もなかなかありません」

少し迷ったが、触れておくことにした。

「僕の一学年下に、花森さんという女子生徒がいて一年で転校した人がいます。彼女は今、花街で修行をしていると聞きます。母のつながりでその後の話などよく耳にしますが、大変だけどころかなり充実した修行生活を送っていると聞いてます。自分の将来を十三歳の時に見極めるというのに、本当に驚いたことを覚えてます」

「ああ、花森なつめさんですね。彼女も目標に向かって日々努力しているのですね」

ほっとした表情で狩野先生は微笑んだ。

「彼女も目標を決めたら一直線、のタイプですね」

——ああそうだ、明日杉本に会ったら言っておかないとな。

そろそろ花森なつめも、店出しの準備に忙しい時期だろう。来年の春、地元の中学を卒業したら一職業人として店修行に入ると聞いた。その前に「お店出し」と呼ばれる儀式があるらしく、母の話を聞いた限りだと来年の三月を予定らしい。ただ青瀾の花街は日本でもかなり特殊らしく、上総もまだ話が飲み込めていない。

「僕の周りの人たちはみな、早い段階で夢や目標を決めて行動する人が多いので、すごいというか、尊敬してしまいます。僕はまだ何も未来のことなんて考えていませんし。霧島くんと話をしても、彼は自分の将来を見極めて、今すべきことを選んで律してます。その他にもみな、いろいろな人の話を聞くとこんなんでいいんだろうか、と思うことがあります」

ついぺらぺらとしゃべってしまった。あまり友だち相手にここまで本心をさらけ出すことはない。本条先輩に対しても同様、いや本条先輩だからこそ話せない。情けないくらいに自分の未来を描けずにいる自分がみっともないっつらない。

「将来の夢ですか。なら聞きます。立村くん、将来の職業を考えたことはありますか？ 本当にあいまいなものでかまいません。気軽に語ってもらえますか？」

「え、でも本当にそんな大げさなことは」

口ごもる。夢がなかったわけではない。ただ、現実が痛いだけだ。

「今は僕しかいません。誰にも言うつもりはありません」

緊張してきた。おごり高ぶった中学時代に持った小さな夢をつぶやいた。

「外交官とか、通訳とか、翻訳者とか」

——何が外交官だってさ！

自分で思い切り突っ込んだ。

外交官、というのは中学一年、入学時に一瞬だけ夢見た職業だった。ただし具体的にどのような仕事をするのかまで落とし込んだことはない。語学が得意なら外交官なんか向いているんじゃないの、と親戚の人々に勧められただけ。

通訳も単純に「英語はじめ語学が得意」だからというだけのこと。これも同じく両親、親戚筋のお勧めにすぎない。もともと人とべったり語り合うのが苦手な上総にとってこれはしんどいものでは、と最近になり気づいた。

「ご家族、ご親戚のお勧めですか」

「はい、自分ではどういう仕事がいいか思いつきません。翻訳もやってみたい気はありますが、自分の好きな本でないややる気でないから僕向きではないのかもしれない」

「立村くん、いいですか」

狩野先生が上総に手を差し伸べるようにして呼びかけた。

「僕からの提案ですが、一度語学へのこだわりを手放してみてもいいかがでしょうか？」

「え、でも僕にはそれしかとれないし」

今日は何度狩野先生にぐさっとやられているだろう。虫も殺さぬ顔をしながら、上総の傷口をさりげなく触れるようなことを言う。

「今挙げてくれた職業は決して立村くんに向いていないわけではないのです。ただ君の夢はまだ、他人から与えられたものを選んでいただけのようにも見えます。ご家族のみなさんはきっと立村くんの語学習得能力を誇りに思って、外国語堪能な人々が携わるであろう職業を並べてみたに過ぎません。そして、それはほんの一部です。もっと言うなら、自分で向いた職業を作り出すことだってできるのですよ」

「自分で仕事を作るということですか？」

よく意味がつかめず問いかけると狩野先生は大きく頷いた。

「もうすでに自由研究のテーマが決まっているのなら次の機会にでも考えてほしいのですが、君のお母さんが携わっている日本伝統芸能の世界や、花森さんの暮らしている世界、僕たちには未知の世界をわかりやすくまとめていくといったことにいつかは挑戦してほしいと願ってます。これは僕個人の興味でもあるのですが。さらにそこから英語を用いて外国人の方々にも伝えていく、それもまた面白いでしょうし立村くんの得意分野でもあるでしょう」

「でもそんなに僕は、日本伝統芸能の世界に詳しいわけじゃないし」

押しが強い。流されそう。母の顔が思い浮かばなければあっさり受け入れてしまいそう。ああそう、八月八日はゆかたざらいと聞いた。また手伝いが待っている。肉体労働だ。

「僕が知りたいのは立村くんがどんな風に見て感じたか、です。論文を読みたいわけではないのですよ」

さらに説明を続けようとしたのか狩野先生が前かがみになり上総に語りかけようとした時、タイミングよく前の扉が開いた。

すぐ振り返った。浅黒い顔と銀縁めがね。デニムシャツにターコイズのジーンズ。白いカーディガンを腕通さずに背負い、両腕を前で結んでいる、今時の高校生ファッション。

「先生、お久しぶりです！ 本条です！ んと、それと？」

同時に目が合った。唇をくいと上げて挨拶したように見えた。本能だった。立ち上がった。

「本条先輩！」

さっきまで狩野先生と膝突き合わせて語っていたことが瞬時に飛び去った。こちらをあっけに取られたように見つめている本条先輩の眼差しに気づかぬ振りして上総は、片腕をすぐ取った。手にかばんがあるかと思ったのに、ない。後輩としての義務を果たせない。とりあえずは離さないことにした。

「先輩、お財布とか何も持ってこなかったんですか？」

「ばーか、ポケットに全部入ってるっての。それよりお前、どうしたいったい？」

「聞いてなかったんですか？ 駒方先生から連絡もらったんでここにいます」

「いや、そういうわけじゃねえよ、お前来るのは承知の上なんだが、おい、お前、なんで俺の腕、離そうとしないかってこと、聞きたいんだって」

「あれば持っていこうかなと思っただけです」

「どこに？ こんな狭い教室にだぞ？」

「先輩の荷物をすぐに運ぶのは義務だって先輩言ってたでしょうが！」

「いや、それ今そうするか？ ったく、まあ、狩野先生、俺の弟分が世話かけているようで面目ないですよ、ほんと」

本条先輩が上総の隣に腰掛けるまで、腕を引っ張ったままでいた。黙っていたら斜め前に座ってしまうかもしれない。先生たちには気づかれないように合図もできやしない。本条先輩の隣を押さえるのは中学一年の頃から上総の管轄だから当然だ。

あきれた風に眺めていた本条先輩は軽く上総の頭をかき回すようにし、

「久々に顔見せたら相変わらず妬きもち焼きの甘ったれかよ」

まんざらでもない風につぶやいた。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (3)

「まずは飲み物だな、ってことで」

「はい、何がいいですか？」

「決まってるだろが、こういう日はまずコーラだったの。ほら、これで買ってこい。三人分な」

狩野先生がひきとめる間もなく、上総は本条先輩から預かった百円玉を三枚握り締め、校門脇の自動販売機まで走った。さっきは狩野先生が首を振ったので何も用意しなかったけれど、本条先輩がそれで満足できるわけがない。言われたら即行動、これが本条先輩の命令に対する当然の振る舞いだ。

校門でまずは息を整える。まずはコーラのボタンを押す、てかてか光るのは「当たりが出ればもう一本」の合図。残念、外れた。次に狩野先生にウーロン茶の缶を。同じく外れた。最後に自分の、缶紅茶のボタンを押した。丸い電子版がけたたましく光った後、いきなりファンファーレが鳴り響いた。どうやら当たったらしい。運の消費らしい。

——当然ここは、駒方先生にお茶かな。

狩野先生と同様にウーロン茶ボタンで落とし、合計四本を抱えて走って戻った。外が暑いとはいえ、四本も冷え切った缶を抱えているとかえって寒さを感じる。

「お、ご苦労、あれどうした？ 四本か？」

「はい、さっき一本当たりました」

きわめてあっさり答え、上総はまず狩野先生に、次に本条先輩に、その後空席となっている本条先輩の真向かい席に一本、最後に自分の紅茶を置いた。

「お前さ、相変わらずこういうお上品なの飲んでるのか」

「好みですからしょうがないことです」

「おいおいおい、まあいっか、先生、どうもこのたびはお招きありがとうございます！」 上総のいない間にどういう風なやり取りがあったかは不明だが、すでに狩野先生も微笑みを浮かべて本条先輩に接している。本条先輩は当然、堂々たる態度でもって声高らかにご挨拶ときた。やはり本条先輩は変わっていない。卒業してからほんの少しも。

「駒方先生はまだなんですかね」

「はい、今日はお昼まで用事がありとのことと伺ってます。学校を離れてからは、高齢者向けの施設で絵画の指導を行ってらっしゃるそうです。その他地元の公民館などでいろいろとイベントも行ってらっしゃるようですし」

「駒方先生、お忙しいんですか？」

思わず尋ねてしまう。駒方先生は美術の教師で本条先輩のクラスが卒業するのを最後に定年退職と聞いている。ただその後は講師として勤務を続け、例の「E組」も含めて面倒を見ているはずだ。

「そうですね、駒方先生は青澗の美術界では重鎮とも呼ばれている方ですから。幅広く美術の楽しさを学んでいただきたいということで、積極的にボランティア活動をなさってらっしゃるそうです」

「へえ、やっぱそうか。先生はもともと俺が中学生の頃からそういうことに熱上げてましたもんねえ」

腕組みして頷く本条先輩。問いかけてみたくて顔を覗くと、

「ああお前知らねえかもな。駒方先生は俺がいた頃からしょっちゅういろんなイベントに呼ばれて手伝い参加していたんだ。無理やり引っ張り出されて手伝わされたりしてたなあ。結城先輩のおとつあんがイベント関係の大手を引き受けていたしその関係でいろいろあったみたいだぞ。もっともお前が入学した頃は評議委員会でもめちゃくちゃ忙しくなったんで、委員会はずれの一部の連中が活動してたらしいけどな」

「そういうのがあったんですか？ そんなの知らなかったな」

初耳だった。イベントイコール委員会の感覚で今までできていたから。

「俺が入学した頃は委員会活動もまあ、それほど活発ってほどでもなかったからな。そうですよねえ、狩野先生？」

本条先輩が語りかけると狩野先生も頷いた。

「そうです。むしろ最初は教師主導の生徒参加行事が中心でした。本条くんの言う通り、変わってきたのは結城くんが評議委員長に就任してからですね」

結城先輩が「部活動参加禁止令」を親に言い渡されていて、その網目をくぐる形で思い立ったのが「委員会部活動化」とは聞いていた。しかしその前の状況についてはほとんど知らないと言ってよい。

「駒方先生の考えとしてはひとりの天才を育てるのではなく、幅広い層にうっすらでもいいから絵画の楽しみを感じてほしいという方針だったから、まあ正直嫌がった奴もいたんだろうな。誰にでも公平に教えてくれる一方、極端にうまい奴については適当な扱いしかなかったみたいだしな」

「ああ、うちのクラスにいた金沢みたいなタイプですか」

思い出した。D組の誇り・天才少年画家金沢のことだが、駒方先生は「生徒として」はかわいがったものの本人の美術才能についてはさほどフォローしなかったらしい。かなりごかんむりだったとは、金沢と親しい羽飛の談。

「金沢くんですね。彼も相変わらずよい絵を描き続けているようですね」

「大学の特別講義には参加しているみたいです。でも」

ここで口ごもる。噂レベルのことを口走ってよいものかどうか。

「おいどうした、途中で黙っちゃうのお前の悪い癖だぞ」

「でも噂だし」

「別に悪口言うつもりじゃねえんだったら言っちゃまえ。どうせ違っていたって金沢が抗議にくるわけじゃねえだろ」

狩野先生が穏やかに上総を見守る中、強引に促される形で答えた。

「学校よりも、直接有名な画家の人たちに手紙書いたり文通したりして、それで勉強続けているみたいです。一応学校側でも授業は用意してくれているみたいですけど、金沢くんは物足りないみたいなので自分から直接休みの日、美術館に行っては話を聞きにいたりしているようです。」

すごいなって」

「なんだよそのすごいなって、って中途半端な終わらせ方は」

「だってすごいですよ。自分で、ひとりで、勉強しようとするなんて、俺だったら考えられないし」

いきなり頭を軽く小突かれた。ついでにため息も隣から漏れるのが聞こえる。

「あのな立村、そういう時は、『俺もこれからはそうしよう』とか前向きに考えるのがふつうだろが。なんでお前いつもそういじいじしてんの。確かにそりゃな、金沢は偉えよ。自分で直接連絡とって自己流での勉強に燃えてるんだもんな。だがそれ、お前もできることだろ？ 学校がなくたって、教師いなくたって、やる気ありゃあなんとかなるだろが。学校ってのは青大附属だけじゃあねえんだから」

「本条くん、お見事です」

また弟扱いされてしまった。しかも狩野先生の前でだ。本条先輩の永遠の弟分であることは認めるけれども、人前でガキ扱いするのはやめてほしい。ごくっと紅茶を飲んで喉を冷やしてみる。かえって寒い。

「立村くんは、英語について学校では物足りないから別のところで勉強したいとか、そう思うことはないのですか？」

「一応、大学の講義には出てます」

「それとは別に、たとえば興味ある先生に手紙を書いて話を聞いてもらうとか」

「そんなこと、できるわけないです」

想像もしていない。いきなり知らない奴に声かけるも同然。手紙なら無視されてもあきらめがつくからまだましと言われればそれまでだけど、露骨に鬨感かいそうだ。

「いきなり身も知らずの人にずかずか近づかれて、嫌がられないわけがないし」

「やり方によるんじゃないか？」

上総は首を振った。

「自分だったらやはり、いきなり近づかれて困らないわけがないし」

また本条先輩が頭をぐるぐる掻きまわした。払いのけたいが狩野先生の前だしできない。なんだか完全に小学生扱いされている。弟どころの問題じゃない。

「お前自分でやってきたことを棚に上げて何言ってんの？ 先生、知ってます？ こいつが一年の時、気がつけばずっと俺の右隣陣取っていたくせにですよ？ しかも笑っちゃうのがこいつ、他の奴が俺の隣にいたとすると、ずっと執念深く相手をにらみつけてるんですよ。誰彼問わず。そいでたまたま相手が離れると即座に席を分捕ってそこから先は漬物石状態で絶対に動かない。これ、俺の代の評議連中に聞いたらみな証言します」

声を上げて狩野先生が笑った。もう、この場から逃げ出したい。でも何も言えない。事実だから、受け入れるしかない。

「でも誰も文句言わなかったじゃないですか！」

「言えねえよ。お前の目つき見てたら誰もな。お前知らんだろ？ 結城先輩が見るに見かねてお前の同期男子集めて、『頼むから一年男子同士で仲良くしてやってくれ』って頼み込んだって

こと。想像できねえだろ？

「そんなこと聞いてない」

頭の中は空白でいっぱい。そんなの評議連中誰も言っていなかった。

「だから、お前らの代は異常に団結力強かったんだってこと。もう時効だから言っちゃまうがな。俺が三年の時の評議夏合宿の時、お前抜かした二年男子が真剣な顔して部屋で話し合いしてるんだ。何かと思って聞き耳立ててたら『あれはまずい、絶対まずい、なんとかしなくちゃ』とかせっぱつまった顔して相談し合ってるんだわ。俺が背後に近づいてきたことすら気づかずに。うわっと驚かせてやって何頭つき合わせてたんだって問いつめたところ、天羽の奴正座して、真剣な顔して言うんだよ。『たいしたことではありません。今俺たちが話していたことは単なる猥談に過ぎません』とかな。笑っちゃまうだろ？」

——それと、団結力の強さとどうつながるんだ？

わけわからぬなりに話の筋を追ってみる。全く意味不明。

「猥談となったらそりゃ俺が聞かないわけにはいかねえってことで、さらに膝詰めして問い詰めたところ、今度は更科があなのわんこ面したままで『つまり、立村は巨乳タイプが好みなんだろうなってことです』とかさらっと言っちゃまうんだよ。巨乳？なんだそりゃって思うよな」

狩野先生の顔を見ることができない。もう俯くしかない。だいたい展開が見えてきた。耳が熱い、喉が詰まる。目を閉じたままモグラになって地下にもぐりたい。

「さらに説明を行ったのがいわゆるホームズ・難波ってわけだ。『最近噂で立村が特定の女子に興味を持っているとかいろいろなと言われてますが、結局のところ清坂さんと付き合っているわけですし、その噂の根本はあいつの嗜好がいわゆるそのあれだということと結論づけられました』とな。なぜそういう話題になったのか、よくわかるよな」

「何言いたいんですか先輩」

無理やりあごを指で上げられた。顔も自然と本条先輩を見上げてしまう。涙目になりかけている自分のみっともない面を覗き込まれている。狩野先生の姿は存在しないことにしておいている。

「種明かしするとだ。詳しいことは自分の胸に聞いてもらうとして、あいつらは同期のお前が道踏み外すんでないかと心配でならなくてこっそり相談してたってわけだ。けど俺が首を突っ込んできたもんで、『立村は巨乳好みであって特定のだれそれに惚れているわけではない。あくまでも好みの問題であって色恋沙汰ではない』とまあ、そう結論付けたかったっつうわけだ。なんてことだこの友情。お前知らなかったのはしょうがねえし、そのあとのことを考えるとあいつらの思いやりも無駄っちゃあ無駄に終わっちゃったかもしれねえけど、そういう気持ちがあったってことだけは忘れるなよ。おいおい、どうした、またお前ベそかいてんのかよ。安心しろ、ここにいるの二人だけだ、誰にもばれねえよ」

「いい加減にしてもらえますか本条先輩！」

思わず立ち上がってしまう。絶対に狩野先生の顔を見る気なんてない。何が二人だ、何が誰にもばれないだ、十分ばればれじゃないか。

「帰ります。失礼しました」

「おい待てよ立村、お前まだ来たばかりだろ？ まだ駒方先生も来てねえし礼儀ってもの考えろ、おい」

単に今暑すぎて日射病になりかけているだけだ、それだけだ、意識が少しもやっとしているのはただそういうことってだけだ。本条先輩の腕を振り払おうとしたとたん、

「立村くん、かばんはここにありますよ」

狩野先生が、いつのまにか上総の黒いセカンドバックを自分の手元に引き寄せていた。

本条先輩と目を合わせて、かすかに頷き合っていた。

「悪いがお前のジャケットもこっちに押さえてるからな。帰れるなら帰ってみろ。さ、座れよ。仕切ちなおしだ」

たいしたことないといった面で、本条先輩は椅子を叩き促した。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (4)

「狩野先生わかりました？ これが俺なりのこいつの操縦方法って奴です」

無理やり席に着かされて、憤りのぶつけどころもなく仏頂面で俯くしかなかった上総を無視して、ふたりは楽しげに会話を続けている。

「なるほど、よくわかりました」

——何がわかったっていうんだよ。

「俺なりに考えていたのは、こいつの場合だととにかく言葉が必要だってことですよ。他の奴だったらなんかおごって、パシリに使って、その後で一緒に遊んだりとそういうことだけですむんですが、こいつはね。とにかくしゃべらせるためにはこっちが一方的にアクションを起こして、話をし続けないとだめなんです」

反り返るようにして本条先輩はコーラをあおった。横目でちらっと上総の方を見てまたとうとうと語り続ける始末。

「ただまあ、同じ学年じゃあねえし、俺もこいつをじっと見張っているわけいかねえしってことで、なかなかうまくいかないところは正直ありました。特に俺が卒業してからは全く様子が伺えねえから、周りの奴らから情報もらったりなんなりしてはいたんですが、肝心のこいつが寄ってこない。そうなるとやはり、行き違いつてのは出てきますわな。

——何が行き違いだよ。

上総なりに推理したところ、ジュースを買いに飛び出した際にこのふたり、「取り扱い方」についての意見交換を行っていたらしい。いったいどのように本条先輩は立村上総を操縦してきたのか、どうやって一方的になつかせてきたのか、といった教育方針のようなものをだ。こちらからしたら単純に尊敬しているからなんとなくというだけだが、本条先輩からするとさらに深いものがあるらしい。ただしそれをされる側としては、非常に不愉快だ。何が「操縦方法」だ。動物じゃないんだからそんな軽々しく言ってほしくない。

「俺からすると、捕まえて話をすればたいていは片がつきます。ま、高校の連中に対してはなかなかそうもいかねえなってところはありますが、少なくとも立村に対してそれは有効です」

「何が有効ですか、さんざん人をばかにして面白いんですか」

食って掛かるのもみっともないので小声でつぶやく。もちろん本条先輩にだけ聞こえるようにだ。

「ほらほらそう怒るなよ。ったくなあ、お前どうしてそうなんでも本気取るんだよ。腹空いと機嫌悪くなるってまるで赤んぼじゃねえの。悪いが今日は食べ物持ってきてねえよ。もう少し待て。駒方先生来るまで」

何事もないという風に本条先輩は上総に話しかけてくる。どうしようもない。こういうことをされても、どうしても本条先輩の側から離れられない自分が情けない。

「そういえば、本条くん、来年はとうとう三年生ですが、大学受験の準備は進んでいますか？ 公立高校も最近では夏休みほとんどが補習と聞いていますが」

「ま、一応は出てますよ。出ないと内申点稼げませんからね」

狩野先生がうまく話を逸らしてくれたのが救いだった。上総は本条先輩の語る横顔を食い入るように見つめた。

「具体的な志望校はこれから絞込みという感じでしょうか？」

「まあ、そうですね、理系クラスなんで。こいつと同じ方面には進む気ないですね」

ちらと睨みながら、それでも本条先輩は話を続ける。

「最近、いわゆるマイコンって奴を手に入れまして。いろいろ遊んでいるうちにそっち方面も面白いなあと思う今日この頃ですね。おい、お前マイコンって知ってるか？ 自分のコンプレックスってなんすかそれ、じゃねえぞ」

「名前くらい聞いたことがありますよ。たしかコンピューターでしょう」

あいまいなことをつぶやくのみ。本条先輩は鼻で笑った。

「まあなあ、マイクロコンピューターの略と言っちゃあなんだが、間違っちゃいねえわな。あ、そうです狩野先生、やはりそっちにはご興味は？」

「全くないわけではありませんが、手元においてというほどではないですね」

「今のところはBASIC勉強してそいつでゲームのプログラム組んで、雑誌に投稿したりしてたまーに載っちゃったりなんかしてって感じです。ただまあなんていうんですか、キーボードには今だ慣れませんね。指で一文字ずつ打つってのはなかなかしんどいです。それに、プログラムってのは一文字でも間違えたら最後、思いっきり暴走しちゃって電源落ちてしまう始末だから神経もめちゃくちゃ使いますな」

「BASICですか。ではそろそろ、機械語も勉強しようとしてますね」

上総には未知の世界で会話が成立している。着いていけるわけがなく、ぽかんと口を開けたままだった。狩野先生も数学担当なのだから、いわゆる理系の会話にはなじみあるだろう。本条先輩も自分で言った通り数学と理科が得意な人だった。

「ああ、あっちの方が断然スピード早くなるからマスターしたいんですよ。そんなこともあって今、学校では『マイコン同好会』作って地下で活動続けてます。演劇部で懲りたんで、部活動からはちょっと距離置かせてもらうことにします」

——ああそうだったよな、本条先輩、演劇部で挫折したって話、聞いたことある。

「プログラムはやはり、ゲームが中心ですか？」

「そうですねえ、今はまだ、シューティング系のもんとかそちら方面ですがね。正直、しんどいなってのは、BASICって用語はコンピューター販売しているメーカーによって細かく違いがありすぎるんですよ。大まかに捉えればいっしょなんですけど、ほら、それはそれで細かいバグなんかも出てきたりしてうっかりしたら大暴走、画面真っ白、徹夜して打ち込んだプログラムが保存する前に消えちゃうってのもあるわけです。またせっかくカセットテープにロードしておいても、いざ読み込もうとするとコンピューター側が無視しちゃうなんてこともしょっちゅうです。なんかあれですね、カセットテープで保存ってのはわびしいですね。あのピーガーピーガーガガって音毎日聞かされてると発狂しそうになりますわな」

「テープは伸びますからね。確かに大変です」

——外国語聞いているほうがずっとましだよ。

ふたりの会話は完全に異次元だった。もうついていけない。ひたすら紅茶をしゃぶるだけだった。本条先輩は無我夢中で語りつくしている。上総に理解できるのはその「マイコン」がかつての演劇部時代の悪夢を覆い隠すほど情熱もやせる媒体だということだけだ。

「でも、マイコンはめちゃくちゃ進化が早いですよ。俺が買ったものはまだ英語でしか入力できませんけど、最近発売された奴だとひらがなで入力ができるんですよ。さらに、これから発売される奴だと漢字に変換して文章打ち込めます。これは便利ですよ。プリンタ買っていいソフト組めば、もう手書きノートいらなくなっちゃうかもしれません。ああそうだ、立村、お前さ、英文タイピストの資格とか取る気あるか？」

「え？ それ、なんですか？」

完璧な異次元語で問われた上総に本条先輩は勢いづいて続ける。

「それだったらな、お前向けにいいアルバイト将来紹介するぞ。俺が書いたプログラムをお前が何も考えずに打ち込む。一言一句絶対に間違えるなよ。マイコンぶっ飛ぶからな。それを動かしてみても問題なければ俺が全部、カセットテープに吹き込みまくる。それを通信販売で売ると、これはかなり稼げるぞ？ お前にもラーメン一杯はおごってやる」

「英文タイピストの資格が必要なんですか？ それって」

何ひとつわけがわからないまま問いかける。上総に理解できるのは、本条先輩が何か商売をやりたいがっているらしいという問題だけだ。

「本条くん、ちなみにその同好会ですが、会員は何名ほどいるんですか？」

「今のところ五名。同好会として形になるぎりぎりの人数です。実際活動しているのは俺ともうひとりだけですがね。あ、大丈夫安心しろ立村。お前を引きずり込む気はさらさらねえよ」

——どうせ関係ないんだから知らないよ。

本条先輩は大笑いしながら最後に、

「でも、まあそうですね。そんなこともあって工学科を目指すのがいいかなってとこっす。今はまだ、マイコンも安くて二十万から三十万くらいかかりますがね。でも最近は子ども向けのひらがな入力できるタイプとか、いろいろ出てきてますよ。どんどん進化してくる世界だから先見の明ある俺としては、ここいらで一発勝負かけたいところですね」

とりあえず、本条先輩も将来の自画像をしっかりと描いていることだけは理解した。

「おいおい、楽しそうに盛り上がっているなあ。やはり里希、相変わらずはしゃいでいるなあ」

十二時五分前、扉が開く音に振り返ると白いシャツ姿の駒方先生が、白髪を丁寧に撫で付けたかっこうで姿を現した。十二時過ぎと聞いていたが早く終わったのだろうか。

上総と本条先輩、狩野先生、三人が立ち上がり、一礼した。

「お久しぶりです、駒方先生」

「上総も、思ったより元気そうで安心したよ。ほらほら座って。おや、私の分のお茶もあるのかい？ それならまず一服して、それから食堂に行こうかね」

——いい加減俺のことを名前と呼ぶのやめてもらえないかな。

基本としてこの先生は好きだ。ただどうしても許せないのが、生徒たちのことをいわゆる「ファースト・ネーム」で呼ぶ癖があるところだった。もともと上総は自分の名の響きが好きではない。女子と間違えられる部分が強いのも確かだが、それ以上に生理的な嫌悪感がある。これはもう本能から来るものでしかない。

まず四人そろったところで、本条先輩が声高らかに、「では、まず乾杯と行きましょうか！ 駒方先生、年寄りの冷や水とか言いますけど無理しないでくださいよ！ まだまだ人生長いんですからね！」

缶を軽く上げて乾杯の音頭を取った。大人二人は静かに微笑みながら本条先輩の指示に従った。

「ほうそうか、里希はコンピューターの世界に興味を持っているのかい」

「はい、今も狩野先生と熱く盛り上がってしまいまして、隣にいるこいつが思いっきりいじけてます。な、お前ほら仏頂面するんじゃないか。全く、ほんとかいつについては俺も胃が痛いっらないですよ」

狩野先生がかたんに本条先輩の熱い夢について「異次元用語」を取り入れつつ説明していた。要は本条先輩がマイコンと呼ばれる自宅用マイクロコンピューターを使って、さまざまな遊びを楽しんでいるということ、将来は職業につなげたい、それゆえに工学科を現在検討中とか、そんなことだ。

「年寄りにはちと難しいないようだなあ。私が興味持ちそうなことが、できるのかな」

身を乗り出して聞いてくる駒方先生。美術の先生であろうが「異次元」の話題には着いてくようとしているわけだ。頭がしっかり柔らかい人とみた。

「面白いですよ！ 駒方先生、コンピューターグラフィックってご存知ですか？」

「最近話題だね。アニメなどでも少しずつ利用されていると聞いたがな」

「そんな大掛かりでなくても先生なら役立ちますよ。画面を点で打ち込んでアニメキャラの絵とか名画とかを画面に映し出したり、最近はずつづつですがカラーディスプレイも増えてきてますからカラーのイラストをお絵かきしたりもできます。俺の持っている機会だと八色くらいしか使えませんけど、最近の機種だとその色が何百色も使えてドットも細かく打てるもんもありますから、きっと芸術家魂揺さぶられるんじゃないですか？」

「面白そうだなあ、里希、今度年寄りにもわかりやすい本紹介しなさい。ぜひ読んでみたいぞ。それと、雑誌にプログラムを投稿しているとも聞いたがその本は月刊誌なのかな？ ぜひその本も今度持ってきてなさい。うちの学校にも興味ある奴が必ずいるだろうしな。そうだと上総、梨南だったらかなり食いついてきそうだと思わないか？」

悪気なく駒方先生は上総の顔を見やりながら語りかけてきた。

——何でこういう時にこういう流れになるんだよ。

心臓が苦しい。そのくせ顔がほてってくる。

——立村は杉本が好きなわけじゃなくて単に巨乳が好きだけなんです。

天羽、更科、難波の悪気ない言葉が急に迫ってくる。

——なんで本条先輩あんなわけわかんないこと言うんだよ！

目の前がまた曇りそうになる。こらえる。唇を噛む。

背中にふと暖かいものが触れた。ひくりと、その先を見る。

「先生悪いけど、今日だけは杉本の話出さないでやってもらえないですかね」

本条先輩が背中に手を置いたまま穏やかに提案した。

「俺もできれば、過去ある奴なんで、色恋沙汰の話はしばらくパスしたい気分なんで」

上総の顔を覗き込み、それ以上は何も触れなかった。

「まあ俺の未来は明るく輝いてるってことで、まずはもっかい乾杯！」

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (5)

十五分くらい本条先輩の自画自賛演説が続いていた。みな拝聴しつつも昼ご飯のタイミングをうかがっていたことは明らかで、

「それじゃ、そろそろ行こうか」

駒方先生がウーロン茶の缶を片手に教室を出た。狩野先生がその後に、本条先輩について上総もその背を追いかけた。廊下では二対二で並んで歩くことになる。

「本条先輩」

「なんだよ」

「うちで毎日その、マイコンとか使っているんですか」

「当たり前だろ、でなくちゃあプログラム組めないだろ」

同好会をこしらえてやりたい放題をしようとする本条先輩は確かにかっこいい。ただどこか上総にはひっかかるものが感じられる。それが何かと聞かれると困るのだが。

「そのパソコン二十万以上するって言ってましたけど、そんなお金どうやって手に入れたんですか？」

「だから言っただろ、バイトだって。部活やめてから結構暇になったんで、いろんなところでバイトしてたんだよ。ファーストフード、ドーナツ屋、スーパー、まあそんなところを転々としてたってわけ。あまり長居すると学校にばれるから短期でちょこちょこシマ変えてやってるからぬかりはねえよ」

やはり青潟東はバイト禁止だったらしい。

「衣食住はさすがにうちの親から仕送りあるんでなんとかまかなえる。里理の分もあるしな。それ以外はとことんケチる。食べ物も弁当だし、投稿すれば図書券ももらえるんで必要なものはそれで買う。中学時代と比較すると俺もずいぶん遊ばなくなったよな」

窓辺からさらさら流れ込んでくる夏の風。日差し交じりで暖かい。湿気が少ないので過ごしやすい。本条先輩はふと思いついたように、上総へ尋ねた。

「立村、お前いわゆるマイコンとか触ることって一度もないのか？」

「全くありません。子どもの頃、大きな計算機を見たことありましたが」

父が仕事の関係で手に入れてきたという、キーボード付きの計算機なら知っている。難しい計算もあつという間に可能なのだそうだ。もし小さければカンニングし放題だろうにとため息ついたことを覚えている。

「なんだそりゃ。ああでもお前の父ちゃん雑誌記者だもんな。そういうのには勘が鋭そうだなあ」

「マイコンがあると何ができるんですか？」

今ひとつぴんとこない。上総は前を進むふたりの先生から少し間をとって、本条先輩とだけ語り合えるようゆっくり歩いた。すれ違う生徒たちには目もくれなかった。上総が卒業してから入ってきた生徒ばかりのようで礼をする奴もほとんどいなかった。

「まず、英語単語帳、それから住所録、家計簿、データベース作り。まずはそんなところか。俺の

機械は日本語入力できねえから全部ローマ字だがな」

「データベースって何を入れるんですか？」

ますますわからない。英語しか打ち込めないキーボードならば何に役立つのか想像するのも骨だ。英文タイプというのももちろん役立つのかもしれないが。

「雑誌のバックナンバーとか音楽テープのインディックス、だがやっぱり一番はゲームだぞ。知ってるか？ いったん試してみろ、本気ではまるぞ」

上総は首を振ってそれに答えた。

「無理です。俺はゲームやって勝てたことほとんどないんですから」

「お前なあ、少し新しいものに興味を示すとかなんとかしないのかよ。まあいい、どうせ今日はこれから俺ん家に来るだろ？ 見せてやるよ。俺の芸術的な名プログラムをな」

本条先輩は両手を頭の後ろに組んであらためて廊下を眺めやった。職員玄関まで来ている。すでに先生方ふたりは外に出ている。上総は受付にサインを残し、外靴に履きかえた。すのこに座ってスニーカーの紐を縛り直していたら、ふと頭の上を黒いものが通ったような気がした。職員玄関の向こうを眺めやった。

「あれ？」

「どうした立村」

「誰かいるのかな。先生たちと話してますね」

青大附属の男子生徒らしき奴がひとり、話し込んでいるようだった。

「そりゃあそうだろ。講習もあるだろうし」

上がりかまちで本条先輩もローファーを履いている。わざわざ靴べら使っている。

「何も俺たちだけが生徒じゃあねえんだから。さてと、行くぞ、おい」

——ちょっと待てよ？

「どうした、なんで立ち止まってる？」

本条先輩がたったまま顔を覗き込む。上総はまだ立ち上がれない。とっくに紐は結び終わっている。スリッパを片付けることも忘れている。

「おい、どうした……？」

喉が詰まったまま声が出てこない。なんとか腰を上げた。戸陰に隠れた。

「何隠れてるんだよ、変だなお前」

腕をひっぱられて思わずつんのめった。先生たちが談笑している間に背を向けている男子ひとりをまじまじと見た。そいつはゆうゆうと振り返った。してやったりとばかりに、貴公子然に微笑んだ。

「偶然ですね、立村先輩」

——お前、なんでこんなところにいるんだよ。

礼儀知らずと言われてもしょうがない。頭が空白、からっぽの状態の上総は、目の前にいる霧島の姿に声をかけることがどうしてもできなかった。夏服でネクタイのみきっちり締めている、汗ひとつかいていないさわやかなその姿は、女子たちからちやほやされる生徒会副会長、白馬の王子様の似姿と言い切って差し支えないものだった。

「これから生徒会の用事があるんですね」

現実に戻してくれたのは狩野先生の、霧島に対する問いかけだった。

「はい、午後からは秋以降の学校祭も含めて準備をする必要があります。評議委員会が以前行っていたような『ビデオ演劇』も、改めてどのような形で企画するかも煮詰めなくてはなりませんし」

背を伸ばし、自信たっぷりに言い切る霧島。

「本当は評議委員長もなさってらした立村先輩に、詳しいお話なども伺いたかったのですが、これからお出かけなのですね、残念です」

——何が残念だ、お前実は最初から俺のこと待ち伏せしてただろうが！

喉まで出てくる言葉を飲み込む。さすがに上総も狩野先生、駒方先生の前で礼儀を失いたくはない。しかもただいま、本条先輩の前で完璧な「弟」に戻ってしまい寒天を水につけた状態に近い精神状態と来た。今、変なことを口走ったら最後、霧島の思う壺だ。たぶんあいつのことだ、なんとしてもこの四組にもぐりこみたくて仕方ないはずだ。それが読めないほど上総は霧島のことを他人と思っちゃいないわけだ。

「真も、あまり根詰めるなよ。全力でがんばるのはいいけどな、たまにはゆっくり自分の好きなことをするのも大切だよ」

「ご安心くださいませ。僕は、自分のすべきことをきっちりと意識しております」

——駒方先生、こいつにそれを言う必要は絶対、ないと思います。とことんこいつは自分のやりたいことをするために全力のびのびしていますから。

これも口には出せない。貴公子様万歳。

隣であっけにと取られている本条先輩が、肘でつついて来る。小声でささやく。

「おい、あいつがキリコちゃんの弟か？」

頷いて返す。

「難波がしょっちゅう愚痴っていた、あの、あいつか？」

再度二回頷く。すぐに見咎め霧島が上総の脇に張り付く。先生方のあいまいな微笑みなんか無視である。

「改めて。お噂はかねがね立村先輩から伺っておりました。現在、青澗大学附属中学生徒会副会長、霧島真と申します。かつては姉が多大なご迷惑をおかけしたそうで、その節は申し訳ございませんでした。今後もなにとぞお見知りおきを。立村先輩には大変お世話になっております」

一気に述べ立てた。霧島の外面のよさに上総も最初はだまされた。先輩を敬っているのか馬鹿にしているのかわからないその態度に、上総の同期男子たちも振り回されている。特に難波、恋の弱みもあいまってかなり苦労していると噂には聞いている。

「ああ、俺も難波からしょっちゅう君の噂は耳にしているけどな。あのへなちょこ生徒会を復活させたとかで、えらく羽振りがいいと聞いているぞ」

いやみなのかそれとも単純に後輩への思いやりなのか。とにかく平気な顔をして声をかけて

いる。上総にはわかる。なんとなく本条先輩は霧島を値踏みしている。多分安く値付けしている。こいつは使えないとせせら笑っている。

霧島がぴくりと目つきをこわばらせた。

「難波先輩とはあまりお付き合いがございませんがご挨拶はさせていただいております。生徒会が復活と仰いますが、実のところは今まで評議委員会の独り占めしていた行事をすべていただいただけなんです。そうですね、立村先輩？」

上総が言葉を返そうとしても、本条先輩がしゃべらせようとしない。その迫力に割り込める奴なんていない。正直、ひやひやものだ。本気でつぶしにきているから、頼むから黙ってくれと霧島に伝えたいが果たせない。

「ま、どっかの誰かの『大政奉還』の影響もあったってことだしな。ただ『ビデオ演劇』は俺の世代のオリジナルだからそうそう簡単にまねするのは難しいだろうよ」

「いえ、簡単ですそんなのは」

また霧島は涼しげに言い放つ。上総のことなんかもう無視だ。完全に本条先輩とのバトルと化している。霧島の甘ったれぶりをつい昨日フルコースで体験してきた上総としては、そのクールな態度の仮面がどこから出てきたものなのかが謎でならない。

「まずビデオは、放送委員会にお手伝いしてもらいます。規律委員会の衣装担当は今に始まったことではないですが、美化委員にはメイクや小道具なども用意していただきます。音楽も今回はオリジナルですし今から吹奏楽に音源作ってもらう予定です。それと、今、駒方先生にお願いしたのは全体の色のバランスをお伺いしたかったというのもありますから。僕としては、ビデオ演劇というよりも、短編映画を撮影するような感覚ですね」

さっき飲んだばかりの紅茶がすきっ腹に染みってくる。横目で本条先輩の旗色がいかがなものかを伺う。かなりこれは、鋭いところを突いている。霧島が本条先輩の演劇部に関する重たい過去について知っているとは思えない。ちょうど本条先輩卒業と入れ違いに入学してきたのが霧島だ。直接接する機会もない。青大附高に進学していたらまた話は違ったかもしれないが、青潟東という距離はあまりにも遠い。ゆえに霧島からすれば本条先輩は「伝説の評議委員長」かもしれないが、そのすごさというところについてはぴんと来ないのかもしれない。評議委員長イコール、立村上総のイメージだったらそれはもう、軽く見られても仕方ないかもしれないが。

「かなり、幅広いイベントになっているようだな。ご立派だ。だが俺の時代の評議委員会発『ビデオ演劇』ってのは、そんな大層なもんじゃなくてアングラなものだったんだがな。予定調和なんかよりもマニア受けが命だったんだ。あまり手を広げすぎてどうするってのもあるけどなあ」

わざととぼけた風に本条先輩が流す。お前ら結局、教師たちの後ろ盾を頼りにしているだけなんじゃないのか、とそんな感じだ。

「予定調和イコールつまらないというわけでもないと思いますが。そうですね、立村先輩？立村先輩なら、きちんと整った展開の美しさはご理解いただけますよね」

つんと狐顔の霧島は、上総に流し目を送りつつ本条先輩を挑発し続ける。あまりにも危険すぎるこの行為、もし本条先輩が青大附高に進学していたら全力で霧島を止めただろう。しかし、これも公立進学組と来れば接点もなし、この一瞬むかっとくるだけで流して終わらせることも、で

きそうな気がする。ここまで上総は一言も霧島に声をかけていない。

「忘れてました、本日先輩にご相談したかったことがあります。『ビデオ演劇』については実をいうと、本当は幕末をテーマにした時代劇でも上演しようかと考えていたのですがいくらなんでも立村先輩をイメージするような徳川慶喜の『大政奉還』などを取り扱うのはまずいと判断し、今、宙ぶらりんの状態です」

——こいつ昨日全然そんなこと言ってなかったじゃないか！

確信している。絶対こいつのはったりだ。

「そこで、先輩にせっかくのビデオ演劇だからこそできることが何か、ご意見を伺いたかったのです。青瀨の校風を熟知している立村先輩だからこそお伺いしたかったわけです。それもありますのでできれば先輩、本日、お電話させていただいてもよろしいでしょうか？」

本条先輩が冷ややかに上総を見下ろした。それに答えることもできない。

霧島は不敵に笑みを唇の端に浮かべている。

「いいけど、多分今日は遅いよ。出かけるところあるし」

「さすがに夜十時にはお戻りですよ」

「ああ、たぶん。けど電話よりもそういうこと、また直接会ってのほうがいいんじゃないかな」

舌打ちしたいがもう自分のばかさがげんに頭を抱えるしかない。電話を夜遅く受けたくないというのが本心だったとはいえ、うっかりそんなこと言おうものなら霧島のことだ、嬉々として迫ってくるに決まっている。とりあえず明日は杉本と会う予定だからいいとして。

「先輩、それのほうがよろしいですね。かしこまりました。取り急ぎ明日は」

「明日は用事があるんだ。あさってなら講習があるから学校にはいる」

「それなら、直接お伺いします、それでは！」

——結局それを言わせたかったのかよ！

隣の本条先輩が歯噛みしているのを感じつつ、上総は片手を上げて霧島に答えた。勝利、と背中にはでかでかと文字が見えるようだ。校門側で先生ふたりは様子を伺いながらやはり楽しげに眺めている。霧島は先生にきちんと礼をし、意気揚々と校門を出て行った。最後まで貴公子仮面をかぶったままだった。

「立村、ひとつ聞かせろ」

ふたたび先生たちに引率されて大学に歩き始めた。本条先輩が静かに、それでも熱く滾る何かをゆるがせて上総に問う。

「あいつ、ミス・アマゾネス霧島の、かの有名な弟だろ？ 頭が賢すぎて性格最悪っていう」

「霧島さんの弟であることは確かです」

短く答えた。下手なことを答えるわけにはいかない。

「確か俺の記憶だと、キリコちゃんがいろいろあった時、難波がナイトぶり発揮してあの呉服屋に通いつめたという伝説も耳にしているんだがぁりゃなんだ」

「今でも続いていると思います。難波なりの洞察力で」

できるだけ無感情で、まっすぐ前を見たまま上総は答えた。

「手なづけようとしているが、かなり難波の奴てこずっているらしいぞ」

「難波の考えていることは正直わかりません」

さらりさらりと流す。さらに本条先輩は迫ってくる。

「俺の知っている限りではめちゃくちゃ高飛車なかん違い野郎で、近いうちに全校男子による弾劾裁判が行われそうな嫌われ野郎と聞いているが」

「嫌われる、ってほどじゃないですよ。癖は強いかもしれませんが」

「癖って問題じゃねえだろ。礼儀知れっての。それにだ。あいつ、なんだ？ やたらとお前に絡んできてねえか？ なんかお前、下手に尻尾掴まれたのか？ 弱み握られたのか？」

声を聞きつけたのか、駒方先生が余計な説明を差し入れてくれた。

「いやいや違うよ里希」

「へ？」

「真はとにかく上総のことが大好きなだけなんだよ。なついているだけなんだよ」

言葉を飲み込んだ。これだけは隠しておきたかったのだが。本条先輩が不思議そうな顔で上総の顔を見据える。逃げるなどばかりに睨みすえる。

「お前ほんとに、何したんだ？」

「何もしてません。ただ」

口ごもる。幸い大学に向かう通り道には、噂話を拾って広めようとする奴は見当たらない。ただ言うのが少し辛い。

「この前、後輩でまわりついてくる奴がいて手に余しているって言ってたよな？」

答えられない。頷くだけ。

「まさかあれが、あいつなのか？」

もう察してくれとしか思えない。横を見て知らぬふりを通そうとする上総に、駒方先生がとどめの一言を突き刺した。

「里希が青大附中にいた頃と同じようなじゃれあい方をしているよ、上総と真はなあ。そう思いませんか、狩野先生」

「そうですね」

——なぜそうあっさりとか感するんだろう、この先生。

結局上総は、失礼と思いつつも無視して時間を待つしかなかった。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (6)

先生たちに連れられて、大学の校舎に入る。中学の校舎と異なりひんやり静かな空気が流れていた。何度も見かけるアジ文字の立て看板も目立つが、それすら放置されているのが見え見え、かなり痛んでいる。

「学生運動も今は下火ですからね」

上総の感慨に、狩野先生も答える。

「全く存在しないわけではありませんが、大学の改革よりも自分たちの興味に対して情熱を注ぐ学生が増えているのは確かです」

「自分の興味というと、趣味とかですか」

「そうですね。サークル活動などでしょうか」

狩野先生と連れ立ち、言葉を交わした。さっきの霧島登場劇によりなんとなく本条先輩と話しくらくなったのもあって自然と入れ替わった。その本条先輩はしみじみと駒方先生と思い出を語り合っているようだ。やはり見た感じ、ひとりの生徒に戻っている。

「僕が青大附中に入学した時は」

上総は壊れた立て看板に目を向けながら思い出したことを続けてみた。

「目の前で呼び出しとかいろいろやっていて、やたらとざわめいていたような気がします。今は夏休みだから静かなのでしょうか」

「それもあるでしょうね。ただ、こちらで過ごしている学生たちも多いはずですから全く人が来なくなるということは考えづらいですね。それはそうと、立村くん、大学講義の時は先生たちと食事したりはしないのですか」

「全くありません」

狩野先生は頷いた。そのまま校舎に入り、そのまままっすぐ廊下を突き進んだ。いつもなら教室に入ってピリオドになる道だが、今日はさらにまっすぐ進んで奥の通路を通り抜けた。そこから別の白い建物に入り直した。教室は見当たらず扉だけがずらりと並んだ、アパートに似た雰囲気だった。

「ここは研究室です。エスカレーターに乗りましょう」

すぐに狩野先生はエスカレーターのボタンを押し、四人が揃うのを待ってから乗り込んだ。先に駒方先生、本条先輩。上総がボタンを狩野先生の代わりに押そうとしたが、黙って促された。最後に乗り込んだのが狩野先生だった。

「噂には聞いてたけどここがお偉い大学教授の巣窟ですかあ」

しみじみつぶやく本条先輩。上総の背後にやはりいる。

「そうだよ、中学とは全然違うだろう？」

駒方先生が穏やかに頷く。

「なんか息苦しそうですねえ」

「お前には似合わないなあ」

奇妙な静けさとは裏腹に、四階で降りると眺めのよいレストランらしき場所にたどり着く。「

場所」というのはなんとなく「店」と言いたくない雰囲気か漂っていたからかもしれない。確かに見た感じは、学校祭の模擬店に毛の生えたようで殺風景、一応はメニューもはりだされているがなんとなく、

「病院の中の食堂みたいな感じですね」

ポツリとつぶやいたのがその本音だった。

「上総は面白いことを言うな。今日は少し混んでいるのかな？」

駒方先生は狩野先生と顔を見合わせて、まずは窓辺の気持ちよさそうな席を陣取った。実際、教職員食堂に入ってみると学生らしき人影はほとんどなかった。女性がほとんどいないのもあまり見かけない光景だった。タバコのおいがかかなりきつい。

「禁煙席はないんですね」

狩野先生が眉をひそめた。

「そういうものだよ。まずは腹が空いただろう？ お前たちも好きなもの頼みなさい。そうだ、しゃぶしゃぶ定食はどうだ？」

本条先輩と並んで座り、上総はすぐに頷いた。文句はない。

「へえ、お前も肉食うんだな」

「食べないと思ってましたか」

わざとつとんげんに答えてみた。

「本条先輩は何にするんですか？」

「おんなじもんじゃあつまねえよ。そうだ、よし、とんかつ定食で大盛りにするかな」

先生たちもみなシンプルに、冷やしラーメンや焼き魚定食などにまとめた。

太陽が照り付けているにもかかわらず、顔に当たることのない日差し。

食堂内は空調完備されているからか、かえって寒いくらいだ。すぐにウエーターらしき人が車を押して運んでくる。

「すごい」

思わずつぶやくと、狩野先生が小声で説明してくれた。

「ここは接待用の場でもあるので高級レストランばりの対応が求められているようです」

よくわからないがそうなのだろう。全くもって庶民の上総は、目の前に並んだしゃぶしゃぶ定食にゴマだれをたっぷりつけてまずは腹ごしらえするにつきる。隣で見ている本条先輩が、横っ腹を突いてくる。

「おい、少しよこせよ」

「先輩まだ、とんかつ、手、つけてないくせに」

「いいんだよ、一口でいいからさ」

許可出す前に一切れどころかふた切れ三切れつまみ上げ、さっさと自分の皿に運んでいった。この手早さ見たことがあるような気がする。あえて思い出しはしない。いつつけても自分はいつも食べるものを取られる立場だという現実を、受け入れるのみである。

食べる時は時間があっという間に経っていく。もちろん多少のおしゃべりはするものの、口に

ものが入っていてかつ居心地のよい場所であれば、内容なんて忘れてしまうものだった。

「本当においしいですね」

嘘でもお世辞でもなくしみじみ上総がつぶやくと、本条先輩も同意した。

「俺もかなり青大附属の裏事情知っているつもりでしたが、こんなうまい食べ物食わせてくれるところがあるとはな。おったまげました、いやほんとに」

「よかったよかった。それじゃあこれからだ。ふたりとも何か飲み物頼みなさい。ジュースにするか？ それとも」

「ホット珈琲をお願いします」

駒方先生の言葉をさえぎり、上総はすぐにオーダーした。頭をすっきり整理するためだ。

何も目的なくしていきなり教職員食堂に連れて行かれるなんてことは普通ないはずなのだ。何か、先生たちなりの思惑が潜んでいるはずだ。

——いきなり夏休みに俺と本条先輩を呼び出すなんて、しかも担任でもなんでもなかった駒方先生と狩野先生がだぞ？

仮にあの元熱血担任であればまだ理解はできる。どんなことがあっても蹴ることは確実にしても、一応は三年間担任だったあの男が、高校入学後くすぶっている上総のことを「心配」しやがって「余計なお世話」しまくることならばまだわかる。

しかしあのふたりだ。何かがあるに違いない。

——何考えてるんだらうなほんと。さっきの話だと霧島と俺とがよく顔をあわせていることも気づいているらしいし。でも霧島は、こういっちゃなんだけど外面だけなら優等生だろ？ 問題なんてなさそうな気がするしな。

——それとも、杉本のことか？ 例の修学旅行事件がまだ尾を引いてるのか？

きっかけになりそうな出来事は溢れているのだが、どれも決定打に欠ける。

——いややっぱり俺のことかな。担任ととことんにらみ合っているのは事実だしな。でもしょうがないよな、向こうが切りかかってくるんだから、戦うしかないし。

わからない。やはり上総にはいまひとつぴんと来ない。

テーブルにさす真っ白い日差しが暖かい。コーヒーカップも負けずと白い。持ってみると厚みがある。

「さて、それではこれから、いくつか上総に相談があるんだがな、いいかな？」

やはり来た。それ来た。上総は背を伸ばして両手を膝に置いた。笑いをこらえている本条先輩をちらと見てにらんでやった。

「何でしょうか？」

「まず、さっきのことなんだがな。まあ里希もいることだしざっくばらんに行こう。霧島真についてなんだが、本当に上総のことを心底慕っているという感じなんだが、正直なところどうなのかな？」

「どう、と言われても」

狩野先生が「駒方先生、実は」と説明しようとするが、駒方先生は動じない。にこやかに、ゆったりと、説いていく。

「いやなあ、もともと真はゆいと違って、なかなか人と打ち解けにくい性格だから、そろそろいい友だちができるといいなあとは思っていたんだよ。生徒会にも参加しているし、それなりにがんばってはいるんだが、やっぱりひとりぼっちなのは心配だったんだ。それが最近、上総がいろいろと真の面倒を見てくれているようでほんとうに胸をなでおろしているんだよ」

「いえそんなわけじゃ」

——一方的に追いかけているだけなんだけど。

上総が言葉を選んでいっているうちに、駒方先生はさらに質問を畳み掛けてきた。

「ただなあ、やはりクラスも学年も、校舎も違うとなるとやはり真はどうしてもひとりぼっちになるわけなんだ。もちろん上総がいろいろと面倒見てくれているのはありがたいことなんだが、やはり同学年の友だちもこさえてほしいと思うんだ。その点、どうすればいいと思うかい？」

——余計なお世話だと思うよそれ。

心では即答するが、唇には乗せない。代わりにコーヒーを一口啜った。やはり濃くて、舌がしびれる。

——そんなこと無理だよ絶対に。そりゃ、俺だって霧島があのまま全校男子生徒全部敵にするような言動は控えろって思うよ。けどさ、あいつだって自分なりに思うところあってそうしているところあるしさ。先生たちが心配するのはわかるけど。

「時間が、たぶん、解決してくれると思います」

小声でまずは言い切った。本条先輩が黙って上総の目を見た。

「時間かい？」

「はい、必ず、何か起こるはずですよ。その時に気づくんじゃないかって気がします」

思いついたことだけ並べていった。理論的にどうというものではない。ただ無理やり望んでもいないのに友達を作らなくてはならないなんて、霧島には耐えられないはずだ。それならそのまま、何か騒ぎになるまで待てばいい。上総の実体験によれば、全く何も起こらずに青大附中を卒業するとは思えない。いつか、猛烈にしっぺ返しを受けるはずだ。

狩野先生が静かに上総へ問いかけた。

「立村くん、時間ですか」

「はい、それしかないと思います」

「その考えは間違っていないんですが、ただもったいないという気がします」

「もったいない、ですか」

繰り返すと、「そうそう、そうだよ狩野先生良いこと言った」と頷く駒方先生がいる。

「上総は真のことを信じて、まっすぐ見守っていこうとしている、それはよくわかった。もちろん狩野先生の言う通り間違っていないよ。その一方で時間は有限なのだから、できる限りきっかけを用意するのも、兄としての心ではないかとも思うんだ。わかるか？」

首を振った。やはり何か違和感がある。

「そうだ里希、ちょうど二年前か。こんな風に上総のことについて相談したことあったなあ、覚

えているかい？」

やっと話を振ってもらえて飛びつく本条先輩、まさに犬。

「記憶力馬鹿にしちゃあいけませんぜ先生。そうですよ。評議委員合宿の前に俺だけ駒方先生に呼び出し食って、てっきりまた何か俺の悪行ばれたかと思いきや、こいつのこととききましたもんね。ずいぶん拍子抜けしましたよ」

「先輩なんですかそれ、そのことって」

上総の問いかけにも答えない。本条先輩はあくまでも、駒方先生に話しかけているというわけだ。

「あのままだと立村は一年の連中と仲良くできないかもしれないから少し、俺が手加減しろって言われましたよ。ほら、さっき俺も話した通り、こいつの独占欲 すげえもんでしたから、確かに俺もなんとかしねばとは思っていたんですよ。駒方先生の言うのもまあ、その通りってこともあって俺なりに手は打ちましたよ」

「先輩、なんですかその、手を打ちましたって」

自分の声が怒りを帯びてきそうで怖い。何かいやな予感がする。

「まず、天羽呼びつけて、頼むからこいつとうまくやってくれって指示出したのがひとつ。あの当時、こいつの世代でトップは天羽でしたからね。結城先輩も陰 で手を回してくれていたのですその辺はいざこざなくスムーズに進みました。その他、難波、更科にもそれなりの説明をして協力を得たと、まずはそんなとこです。その他いろいろ工夫凝らしてこいつが一年の間で浮かぬような方法を試させていただきましたが、一応成功したんでないかと俺なりに思っています」

——なんだよそれ、俺がてっきり乗せられただけかよ！

教室にいた時のように立ち上がって、「帰ります！」くらい怒鳴って飛び出したい。この場がやたらと外国人やら品のいい男性連中しかいない場所だから、どうしても動けない。

上総の文句言いたげな眼差しを見て取ったのか、本条先輩は少し声のトーンを落としてふたりの先生に語り続けた。

「けど、今の話だとあの霧島さんとこの弟君ですが、ありゃあ立村の手には負える相手じゃあねえよなって気がしますよ。俺の時のようにわざとクラスの友だちと仲良くさせるためたくらんだって無駄ですよ。立村の性格上顔に全部答えが書いてますから」

援護射撃なのか、ただからかいたいだけなのか、答えが見つけれられない。体をこわばらせてコーヒーを啜った。

「で、ひとつ聞きたいんですけど、単刀直入に言って先生は立村にあの、霧島の弟君に対して何をさせようとしてるんですか？ 悪いけどこいつには小細工は無理ですよ。何せこいつ、好き嫌い激しいし、周りを友だちで固めようって周りからは丸見え。無駄ですよ。それだったら正攻法で素直に立村になつきまくっている霧島の弟をそのまま弟見るように頭押さえつけるのがベストじゃないかとも思うんですよ。先生同どう思います？」

駒方先生と、狩野先生、それぞれに目をやった。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々（7）

本条先輩の鋭い切り込みに、先生方ふたりはにこやかにコーヒーを啜った。

「本当に上総のことをよく見ているなあ、脱帽だよ里希」

「さすがですね」

その一言であっさりと機嫌よくなってしまふ本条先輩も上総から見ればどうかと思う。しかし相手は「本条先輩」なのですべて許される。」

狩野先生はコーヒーカップをソーサーに乗せ、そのまま語りかけてきた。

「今日わざわざ僕たちが本条くんも含めてここに呼び出したのはなぜか、立村くん、少し気になっているのではないですか」

——まさか見抜かれてる？

手をテーブルの上に載せたまま、まずは狩野先生の顔だけ見る。様子伺う余裕なんてない。狩野先生はもう一度カップに手を添えて、前かがみに上総へ食い込んだ。

「それもいきなり、生徒だけでは出入りできないような場所に連れてきて、なぜと思うのも無理はありません。僕もあまり余計な説明をしなかったのが気になるのもわかります」

「いえ、そんな、ただなんとなく」

——本条先輩と会えるかなと思っただけなんだけど。

油断していたのは確かだ。首から耳が熱い。あれだけ問題起こしてきた自分が、学校側から目をつけられないわけがない。中学校の先生たちも上総に対していろいろと責任があるに違いない。ただ本条先輩もセットということもあって、純粹に思い出語りで終わると思っていた。

「たいしたことじゃないよ、まあまあ、上総、少し落ち着いて聞いてくれないかな」

「落ち着いてますけど」

ぶつとつぶやく。どんな目で見られているのだろう。そっと三人の顔を見回す。駒方先生、狩野先生、そして本条先輩。ここには同等に扱ってもらえそうな人は誰もいない。

「別にお前たちに説教したいというわけじゃあないんだ。今の里希の話もそうなんだが、先生たちとしてはやはり上総にも充実した高校生活を送ってもらいたいんだよ。真と一緒に。真があれだけ感情丸出しにして慕うくらいだし、上総も十分、自信を持ってほしいよ。ただ、どうしてもこれだけは言うておかないとな。大人の仕事としてな」

——だから要するに説教かよ。またガキ扱いかよ。

豪勢な食卓とは別に、うんざりするお説教つきだ。いつのまにかコーヒーのお代わりがされている。断る間もなかった。

「ほんと、いたせりつくせりだわ、まじで」

全く関係ないところで、本条先輩が二杯目のコーヒーに口をつけた。

「ここには生徒たちもいないからなあ。まあつまり、上総がこれから真を面倒見ていくに当たって悩むことが出てきたら、すぐにここにいる誰かに相談してほしいと、そういうことなんだよ」

——さっき狩野先生に言われたことだよ。

返事もしたくない。何度も思うことだが、霧島が絡んでくるだけでなぜ大事になるのかが今だに理解できない。生徒会副会長はそれだけ守られなければならないスタンスなのか。

どうでもいいが杉本梨南の時はとことんおっぽりだしてE組にぶち込んできたくせにだ。

「さっきの話と一緒にかもしれませんが」

また狩野先生が割り込もうとする、しかし果たせず。のんびりとろとろ、駒方先生のペースにはめられている。きっと狩野先生は一度で済ませようと手を回してくれたのだ。老獪な駒方先生にはかなわないというところみると、教師間でも序列のようなものがあるのだろうか。

「上総はやさしい子だから、個性の強い後輩たちをそのまま、丸ごと受け止めようといつもしているのは知っているよ。梨南もだから上総にだけは心を開いてくれたわけだしな。それは十分、上総もわかっているだろう？」

——あの、駒方先生。訂正です、杉本は俺に心なんて開いてません。開いているのは誰とは言わないけど一人だけです。

テーブルのコーヒーを見下ろす。細かな泡が消えて濃い色が浮かび上がっている。すぐに飲もう。カップを持ちかけて、指先のぬくもりを感じて我に帰る。本条先輩はくちばしを挟まずにぼんやり外を眺めている。無視してくれて感謝したいくらいだ。

「ただな、真は今まで接したタイプの子じゃないだろう？ まあ成績のよい子はそれなりに苦労していることが多いんだが、ほら、里希、なぜそっぽ向いてる」

かつての学年トップだった本条先輩はにやりとしてコーヒーをまた口にした。

「それに、上総も評議委員会でな、ゆいが辛い思いをして卒業したことも気づいているだろう？」

真はまだまだ子どもだからきついことを言うようだが、これからゆっくりいろいろなことに気づいていかななくてはならない年頃でもあるんだよ。そこんところは上総も十分理解していると思っているんだが、どうかな？」

——わかってるさ、あたりまえだろ、そんなの。それってもしかして、学校の先生たちも霧島の扱いに苦労してたってことなのか？ 霧島さんとのいざこざなんて去年の段階でわかりきってたことなのに、何にも手を打とうとしてなかったとそういうわけかよ？

青空のもと、夏日が窓ガラスでさえぎられている。きっとその光は熱を持ったまま上総の心臓に流れ込んでいるに違いない。なぜこんなに熱いのだろう？

「先生、ひとつよろしいですか」

ちくっと、虫眼鏡で焦がしたような炎が心に放たれた。

「霧島くんはそんなに学校内でも問題を起こしているのでしょうか」

うまく言えない。言い直した。

「ある程度事情は聞いています。霧島さんのことをなぜあれだけ嫌っているかとか、小学校時代は家族から離れて別の学校に通っていたとかはそれなりに耳にしていますが、自分以上に問題を起こしているような印象はありません」

——いや、わからないことないけど、まああの猫っかぶりでなんとかやってるんだろう。

「本当に、そう思ってるかい？ 上総？」

「はい、話をしていればやはりそう思いますし」

目の前の駒方先生は一瞬、まじめに上総を見据えたがすぐに相好を崩した。また狩野先生に「ほらな、やっぱりそうだ。里希の言う通りだ」と話しかけている。

——何かしくじったか？

様子を伺う、何か自分の想像した方向とは別に動き出しているような気がする。

「先生、いい加減こいつをからかうのやめたほういいですよ。俺それで、何度えれえ目に遭わされてきたかももう数え切れねえっすよ」

「いやいや、里希の言う通り、上総には真正面から話をするしかないなあ。そう思ったよ。ほら、上総も今必死に真のことをかばっているだろ？ いつもそうなんだよ、自分が何言われても全力で守ろうとするのが上総なんだよ。ただ残念なことにそれは、どんなに嘘ついても全部、顔に出ているんだよ。正直に生きるしかないんだよ、上総」

——何が顔に出てるって、なんだよそれ。

もう顔を上げられない。救いなのはここに誰一人中学・高校関係者がいないということだけだ。こんなところ知り合いに見られたらもう学校から逃亡したくなる。いや、青瀬からはるか遠くへ駆け出したくなる。

「先生、わかりました、なんで俺が今日ここに呼び出されたってこと」

いきなり本条先輩が軽やかな声で言い放った。コーヒーは全然減っていないことに気づいた。「要するに、相当の悪ですね、キリコちゃんの弟君は。それも不良とかそういうかわいいのりじゃあねえ、かなり面倒くさいところもっていそうな奴ですね」

「里希もおいおい、後輩にきついこというんじゃない」

笑みを浮かべたままそれでも受ける駒方先生。

「先生たちこういうことでしょうか？ 今回一番心配しているのはその霧島って奴じゃあなくて、そいつに振り回される立村、こいつの問題でしょうが」

頭を叩かれた。いつものことだ。顔なんて絶対に上げない。

「今、一通り聞いてみて、立村が一方的に霧島に慕われているってのはよくわかりました。学校の友だちですむレベルじゃあねえんですね。俺がかつて天羽たちに手を回す程度じゃあうまくいかないほど、ってことですね」

「少し訂正したいところもあるのですが、おおむねはその通りです」

——なぜこんなところで狩野先生賛成するんだよ！

「相当思い込みも激しそうな感じしますし、これじゃあ立村もしゃぶりつくされるでしょう。たださえ巨乳のだれかさん、あ、これは今日は禁句な、そっちの面倒も見なくてはなんないのにまた余計な弟分が増えたってわけですから、こりゃあ大変ですわ。俺はお前一人で破裂しそうだったけどな」

最後の一言は上総に向けてのさらりとした皮肉だ。

「ふりまわされた拳句、誰かに相談するって頭がこいつはないですから、それを心配してるんでしょう、みなさん。先生ふたりプラス特別ゲストの俺までひっぱりだして何考えてるんだかうすうすは想像ついてましたがこりゃ相当のモンですな。おい立村、これは自業自得だってこと、

承知してるよな？ 二月にお前何やらかしたか、忘れたわけじゃあるめえな」

いきなり歌舞伎口調で話しかける本条先輩。無視だ無視だ。できることならテーブルにもぐりこみたい。足元しか見えない。

「だからこいつには事が起こる段階で、君たちは包囲されている、銃を捨てて出て来いと呼びかけて起きたいと、そう思った次第なんでしょう。もちろんそれはわからなくもないんですが、こいつの性格上それは意味なしですよ」

「じゃあどうする？ 里希？」

面白そうに、全く動じることなく駒方先生が問いかける。

「さあ、どうしようもないですね。けどまあ、こいつは俺の弟分だし、一年おっぼり出してしまったのはよんどころない事情もあるとはいえ兄貴としての俺に責任がないわけじゃあない。安心して下さい、諸先生方。俺がこいつの面倒、これからも見続けますよ」

——本条先輩？

つい顔を見上げてしまった。三人に見据えられた。

本条先輩の語り口はやはり、かつてと同じ迫力たっぷり、変わっていない。

「ただ、例の霧島って奴ですが、正直俺はあまりいけすかねえなってとこありますよ。かなり賢いことは確かでしょうが、こいつの言い方じゃありませんが『何かが起きる』可能性大ですね。俺の直感ですけど、誰かを連れて駆け落ちしようとかその程度のもんじゃない、とんでもないことやらかしそうですね。まあ俺の取り越し苦労ならいいんですが。またひとりでうじうじ悩み出すようであれば、俺もなんとか正気に戻します。先生ほんと、その辺は大丈夫ですから、ご心配なく」

ふと、後ろでささやき声が聞こえる。そっと肩ごしに振り返り様子を伺う。

四人組の男女で、いつのまにか上総の真後ろの席に陣取っていたらしい。歳は比較的若い。

——ねえねえ何話してるの後ろの席の人たち。中学生連れてきてるわよ。いいのそれ。

——引率者いればいいんだよ。

——でもかわいそうよねえ。中学生をこんなところまで連れてきてこっぴどくお説教するなんて。ずっと俯いてるわよ。かわいそうに。

——でもなあ、大人の言うことも間違っていないし、ほら、高校生もいいこと言ったよ。日本人はこういう先輩後輩といった序列に強いからなあ。

「……お願いします。もう、これ以上は、もうやめてください」

耐えられない。上総は本条先輩に頼み込んだ。続いて先生たちにもう一度頭を下げた。

「僕が未熟だったからです、申し訳ございません」

「いやそんなわけじゃあないんだよ。上総どうした？ 里希に叱られたのが堪えたのかな」

「そういうわけじゃないです、ただもう、この話は」

真後ろでぺちゃくちゃ会話を聞いてその問題について楽しげに語り合っている四人組の話題が、どんどん進んでいく。こんなこと散々言われて、正気で入られるわけがない。

「他の人に聞こえますし、もうこれは」

「大丈夫だよ、周りにはええと、外国の講師のみなさんくらいだ。ここで多少おしゃべりしてもそうそうばれやしないよ。安心しなさい、上総、今日のことは菱本先生には言わないからな」

狩野先生が駒方先生をさえぎった。すぐ上総の顔と後ろの男女四人組を覗き込んだ。少し濃い目の香水らしきにおいが漂ってくる。食事終わらせておいてよかった。

「立村くん、誰かが今僕たちの話していることを、話題にしているということですか」

上総は頷いた。目線で斜め後ろを見やり合図をした。狩野先生も、ついでに本条先輩も視線にあわせて振り向いた。

「外人だけじゃん」

大きく首を振った。甘い、甘すぎる。本条先輩にだけ聞こえるようにささやいたつもりだった。

「あそこにいる人たち、日本語聞き取り把握してます。たぶん、話の内容、全部わかっているはずですよ」

「なんでだよ？」

げげんな顔で本条先輩が尋ねる。言葉が出てこない。たぶんここでの会話も聞かれているかもしれないから。ネタにされるのはもういやだ。

「立村くん、ひとつよろしいですか？」

狩野先生は本条先輩を手で制し、上総よりもさらに小声で解答を導き出した。

「ドイツ語で、僕たちの噂話をしていると、そういうわけですね。僕たちは英語ならともかくもドイツ語までマスターしきれていませんから聞き取りは大変ですが、立村くんにはすべて、隅から隅まで理解できてしまうのですね。それで全部、その人たちに霧島くんをはじめとした人間関係が知られてしまうということで心配しているのではないですか？」

——なんでわかるんだろう、狩野先生は。

上総は唇を噛んだ。英語もドイツ語もフランス語も、聞き取りできる言語はまだ限られているけれど、入ってくる言葉はすぐにわかるもの。上総以外の三人にはBGMでも、自分には生々しい日常会話として入り込んでくるものだった。この瞬間も四人のドイツ人男女は、中学生における子どもの教育論について、上総と霧島と本条先輩を巡る友情と絡めて熱く語り続けている。ドイツ語を解する奴がひとり混じっていることも知らず、ただ、恐らく母国語……ドイツ語……であればばれないだろうとらくらく議論しているわけだ。意味なんて聞き取りたくない。

「語学に堪能なのも、辛いものがありますね」

狩野先生は上総にそっとささやきかけた。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々 (8)

例のドイツ人男女四人組が気ぜわしく食事をした後、急ぎ足で出て行くのを待つかのように、ふたたび駒方先生は話を持ち出した。それまではひたすら本条先輩のコンピューター話に聞き入るのみだったから上総も黙って座っていればそれでよかった。

「ところで、上総、梨南のことなんだが最近どうなのかな」

「え、最近、特に」

フェイント攻撃に今だ慣れない。学校で丁々発止やっている時ならともかくも、完全に本条先輩の甘ったれな弟に戻ってしまった自分に、敏捷な反応など求めることもできない。

「いやあれだ、真のこともそうだが、やはり上総には梨南だろう？」

「いや、あの、そんな」

どもる、何か舌が回らない。思わず隣の本条先輩を覗き見るが思いっきり無視されている。本条先輩も一度は駒方先生に「杉本のことは触れないでやってくれ」とか牽制球投げかけてくれたのに。狩野先生は目立たぬように上総をじっと見つめている。重くはない。楽しげなのは駒方先生のみだ。

「ゆいや小春も手紙などで気遣ってくれているようだしなあ。梨南も最近は女の子らしい趣味を優先するようになったようで、よかったよかった。今年の学校祭もきっと梨南が家庭科室利用して、お客様用の喫茶店切り盛りしてくれるだろうしな。上総も学校祭は足を運んでやってくれよ。梨南が本当に喜ぶぞ」

——関崎連れて行ければどうだかわからないけど俺なんか無理だって。

毒づく。大人たちは上総がひたすら照れているだけだと思い込んで話を進めているようだ。絡めとられたまま、いつのまにか用意されたアーモンドナッツをつまみつつ話を聞く。

「これも話さねばならないと思っていたんだよ。お前も気づいていたかもしれないがなあ、梨南は最近、また新しい計画を友だち同士でこっそり始めているようなんだよ。上総、聞いてないかな？」

「友だち同士ですか？」

思わず問いかける。本条先輩は興味なさげにナッツをつまみ口で噛み砕いている。音がこりこり聞こえる。

「そうなんだよ。私も最近聞いた話なんでね、ちょっとばかり驚いたんだ」

含みを持たせる言い方に、露骨いひっかかりたくなくてつんと澄まして見る。さんざんガキ扱いされていて今更大人ぶってなんになるとも思う。ただこのまま転がされるのだけは絶対にいやだ。

「いろいろあるんですね」

いきなり本条先輩が後頭部をぱこりとぶった。

「おい、興味あるんだったらそれなりに、『教えてください』くらい言えっての！」

「別に興味なんかないですし」

間髪入れず二発目が、今度は頬に軽く飛んできた。

「何度も言っただろ。お前、顔にちゃんを書いてるって。駒方先生、もうこいつの言葉は信じないで、顔だけ見て話進めましょうや。もうつんのめりかけてますよ」

絶対口になんてしまい。そんな、「新しい計画」なんて。聞いたことなんて全然ない。杉本梨南がもし、一学期の段階でそんな企画を立てていたら、最初に気づくのは自分のはずだ。杉本の友だちである桜田さんをはじめ花森なつめあたりなら先着しているかもしれないが、それ以外の相手は誰がなんといっても上総でないと納得できない。

「そうだな、まあ聞きなさい上総。実はな、梨南は最近、他の学校の友だちと一緒に勉強会を始めているらしいんだ。主に土曜の午後らしいよ」

「それどこで」

つんのめっているなんて冗談じゃない。なんとなくつぶやいただけ。聞きたがっているわけなんてない。礼儀で相槌打っただけだ。あれだけ青大附中で虐げられていて、それでも学年トップははずさない杉本梨南がまじめに勉強している、それがそんなに珍しいことか。

「それがなあ。問題はそこでな」

またひっぱろうとする。本条先輩が肘を突いて代わりに駒方先生を促し始める。

「どうも梨南はこっそり、塾の先生になろうとしていたらしいんだな」

——塾の先生？

話が全く読めない。本条先輩と思わず顔を見合わせた。

狩野先生はすぐに話を引き取ってわかりやすく説明を始めた。

「この件をお話するにはやはり青大附中では無理です。ここに来ていただいた理由のひとつはそれでもあります。実は、杉本さんにも最近、気になる行動が増えてきていたので、立村くんもぜひ知っておいてほしいと思ったわけです」

「気になる、行動ですか」

例の修学旅行濡れ衣事件だろうか。でもあれは、学校側が杉本に渋谷名美子の罪をまんまかぶせてしまって幕を下ろす予定ではないか。多少非常識な行為が杉本側にあったとしても、十分おつりの来る学校側の対応ではないかと思う。

知らん振りしてやる、絶対に。

「そうです。実は先日、杉本さんについて一部の市民の方々から情報が寄せられているのです」

「市民、って」

ぴんときない言葉が杉本の周りに振りかけられている。似合わなさ過ぎる。上総は繰り返すしかない。その無能さが許せない。

「学校側には心ある市民の方々が、青大附属の生徒たちの言動について深い愛情のもと忠告の連絡を入れられます。さまざまなケースがありますが、杉本さんについてはまず、公立中学生のお友だちと一緒にアパートの一室に入り浸っているという情報でした」

——そもそもそれ、俺に言うべきことなのかよ？ プライバシーの侵害じゃないのか？

「結論から言いますと、周囲のみなさんが不安がるほどのことはありませんでした。杉本さんは単に、学外の友だち数人と仲良く過ごしていただけのことです。ただ、たまたまその人たちが、

いろいろ過去に問題を起こしてきた生徒だということもあって、一部では悪い影響を受けるのではとみな心配していたようです」

——東堂の彼女の影響だろうか？

思い当たる節が全くないわけではない。確かに、桜田愛子という名の、かつて中学生売春に手を染めていたらしい札付きが第二の親友として杉本に張り付いている。上総の観た限り決して桜田も性格の悪そうな女子には見えなかったが、大人からすると過去も過去だし心配するところもあるのだろう。もっとも東堂の方は、「杉本が自分の彼女にとぼっちりを食わせるのではないかと勘違いしたことを考えていたようだが。二学期以降、この点については何かの機会を見つけて訂正印を額にどかんと押してやりたいところだ。

「最近も顔をあわせましたが、別に問題起こしているようには見えませんでした」

学校側の例の事件に対する対応は知らんぷりして、上総はつらっと答えてやった。顔に書いてあるうがなかりうが、今は言葉が真実として通したい。

「そうか、やはり上総はよく見ているなあ。そうだろうそうだろう」

ひっかかったまたやってしまった。あわててコーヒーと一緒にピーナッツをかじる。すぐに狩野先生は話を戻す。

「たまたまその話をとある筋から聞きつけたもんでな、先週ひょいと梨南の友だちのお宅にお邪魔してみたんだ。どうやら共働きということもあって子どもたちの溜まり場になっているらしいということだな。私も教師ではないし、まあ梨南のことをよく知っている近所のおじさんみたいな気持ちで、手土産持って行って見たんだよ。そうしたらなあ」

つばを飲み込む。息苦しい。かみかけたピーナッツがまだ口の中に残っている。

「いやあびっくりしたよ。梨南がな、ちゃんと部屋の中を掃除してるんだよ。ぱたぱた働いて、さらにそこにいる子ふたりにプリント渡して、ひとりひとりに一生懸命教えているんだよ。そのプリントも、梨南が手書きでこしらえたもので、なあ狩野先生数学の問題は梨南に全部こしらえてもらっていいかもしれないほどのできだったよなあ」

「全くです。教師の出番ないですね。駒方先生のお話通りであれば」

——いったい何を言ってるんだろう先生たち。

また本条先輩と顔を見合わせる。今回ばかりは本条先輩側に仕込みはなされていなかったようだった。

「先生、ひとつ、お伺いしてよろしいですか」

上総は呼吸を整えた。注意深く切り込まねばならない。手の内知られては元も子もない。

「杉本が三年に上がってから、友だち関係であまりよくない噂を聞いていることは確かです。僕が顔をあわせている限りはさほど感じることもないのですが、中学でそこまで聳感を買うような行為をしていると思われているわけですか」

「噂としては、そういうこともなくはない、ということです」

狩野先生が即答した。そうか、わかった。

「その理由が、あの、桜田さんという女子のこととも聞いたことがあるのですが、それは」

「ああ、愛子だなあ。あの子はいい子だぞ。素直でまっすぐで、そうだな雰囲気としては美里によく似ているかな、梨南のよいところを全部知っているからなあ」

——清坂氏に半殺しにされても知らないぞ。

少なくとも桜田愛子は百歩譲って「桜」であったとしても「ひまわり」ではない。

「その一方でちょいとぶきっちょなところもあるから、周りでは誤解されていることも多いことは確かなんだよ。梨南はそういう先入観を持たずに、それこそまっすぐ愛子のかわいらしいところを丸ごと見つけて友達になったというわけだよ。そのことはそれでいいんだが、ただ、大人の目の届かないところでいろいろ計画を立てていればそりゃ誤解される。梨南たちもせっかく、塾を開くんだっつらもっと大人に相談してくれてもいいのになあと、ちょっぴり寂しくなったわけだね、ついこう、おせっかいしてしまったんだよ」

「その、塾の生徒って青大附属の人ではないんですね」

念を押した。どうも、そこがひっかかる。

「そうです。そこが問題なんです」

いつのまにか、ナッツがあと五粒。狩野先生はおそらく、一粒も手をつけていない。

「誤解しないでほしいのですが、杉本さんと桜田さんがふたりで教え合っていた友達ふたりはいわゆる不良、というわけではありません。しかし、公立中学の先生たちからするとできれば大人の目の届くことでそういうことをしていただきたいと考えています」

「でも青大附中では、友だち同士の勉強会なんてよくあることじゃないでしょうか？」

親のいない家に友だちを呼ぶなんてことが、教師介入されるなんてたまったもんじゃない。そんなことされていたら上総は何度ひつとらえられていることか。いや隣の本条先輩はどうなるのだろう。武勇伝の数々を知るものとしては、とてもだが笑うしかない。

「難しいところです。ケースバイケース、としか言いようがないのですが、少なくとも杉本さんが一生懸命因数分解を教えようとしていた公立中学の生徒たちは、大人たちからすると子ども同士で行動を控えてほしいと思われるようです」

「うーん、なんだか話がまどろっこしくてよくわからねえけど、駒方先生狩野先生、話をまとめていただいていたいいですかね」

出た、救いの神。本条先輩が強引に割り込んだ。こんがらがった頭の紐を解いてくれるのは今だひとりだけ。

「つまり、こういうことでしょ。杉本が青大附中の仲良しと一緒に、どういうつながりだかわからんけど公立の友達とつるんで、親のいない一室でたむろってた。そのたむろう理由というのがいわゆるタバコシンナー不純異性交遊あたりじゃねえかって、お偉い『市民』のみなさんは思い込んでしまいわざわざ青大附中にご注進ということでしょうが。ところが事実関係を確認するため、善良な市民である駒方先生が直接その不良集団たむろい部屋に突入したところ、実は杉本ティーチャーによる熱血数学指導が行われていたと。部屋もびかびかももちろんタバコもシンナーもなんもない健全な環境に紅茶もうまい。まずはここまで、間違ってますか？」

「里希、相変わらずまとめるのがうまいなあ。そうだよ、続けなさい」

おだてる褒める、それが駒方先生のやり方だ。三年間伊達に本条先輩の担任だったわけじゃない。

「なーんだ、たいしたことないじゃん、で本当は終わるはずだったんだが問題はそこから。その生徒A、B、実は相当やんちゃしてきたもんで公立の先生方からは目をつけられていると。学校側としちゃあそりやまずいですわな。目の届かないところでタバコシンナー不純異性交遊三点セットやらかされたらたまったもんじゃあない。本当はさっさと解散させたいんだが、実際やっていることはまじめなお勉強、どうすりゃいいの、ってところでしょ、だいたいそんなんので俺の読みはほとんど間違っていないと思うんですが」

——天才だ、本条先輩、やっぱり。

「で、さっきの霧島弟君のことも含めて思うんですが、立村にいったい何をさせたいんですか？ 弟分、妹分、それぞれを面倒見させたいのはわかるんですが、具体的なこと言ってもらえとこいつは動けないんじゃないですかね。もうこいつ頭の中大パニック起こしてますよ」

本条先輩の横顔にただ見とれた。

喉が渴いた。気づいた、口ぽかんと開けたままだった。

——どうすればいいんだろうな。

本条先輩にしっかりかばわれている自分と、実際そうしないと時間を稼げない自分。

情けないっつらない。頭の中大パニック、その通り。否定できないっつらない。

上総は本条先輩の横顔に引き続き、狩野先生の言葉に聞き入った。駒方先生は上総と本条先輩、ふたりを楽しげに眺めながら、ナッツをまた注文していた。

「本条くんは駒方先生のおっしゃりたいことをすべて正確に捉えています。立村くんも、今の本条くんの説明でだいたい状況が把握できたと思います。具体的にこれからのことを僕たちは、杉本さんと親しい立村くんと相談したいのです」

「親しいといっても、いわゆるそんな、変な」

言葉が突っかかる。本条先輩が遠慮なく声上げて笑う。店に響く。昼過ぎでタバコのおいが濃くなってきたようだ。咳き込みそうになる。こらえていると狩野先生が数回咳払いをした後、

「僕たち教師も、杉本さんから一通り事情を聞いて把握はしています。ふたりの友だちが学校の授業についていけないという悩みを聞いて、得意の勉強で手助けしたい。杉本さんの気持ちは単純にそれだけです。もちろんその気持ちは素晴らしいものです。ただし中学生として、まったく気を逸らさずに勉強に専念できるものか、もしくは別の興味に気を逸らされないか、それを心配する人々もいるのです」

「杉本なら大丈夫でしょう」

ぼそとつぶやいた。それしかないのだ。杉本の性格上、勉強するならする、しないならしない。納得する理由が与えられない限りてこでも動かない。杉本がなぜ、公立中学の生徒たちを助けようと腕まくりしたのかその理由は聞かない限りわからない。不良扱いされている相手らしいとも聞かすが、もともと花森なつめも学校側から目をつけられていた経歴があるし、桜田愛子についてはもう言うまでもない。杉本自身はきわめて優等生のお嬢様だが、少し癖のあるタイプ... ..学校側からは手をあまされているような.....には無意識で惹きつけられるきらいがあるようだ。そう考えると、生徒会に入ってしまった佐賀はるみとつながりが弱まってしまったのもしかたないのかもしれない。

「いやそうだがな、やはり女の子同士友だち同士の影響というのはあるもんだよ」

駒方先生の言葉は思いっきり無視する。杉本に限ってありえない。

「もし簡単に不良化してしまう性格だったら去年の段階で退学沙汰になっても不思議ではないでしょうし、そうならなかったということは安心していいような気がします」

「上総は本当に梨南を信頼しているんだなあ」

狩野先生は駒方先生の感慨をよそに割り込んで説明を続けた。

「立村くんの考えは杉本さんをよく知っているから当然でしょう。それは信じたいと僕たちも考えています。これから説明することは、その信頼を前提の上での提案です」

「提案ってなんすかそれ」

本条先輩が面白そうに食いついてきた。上総が口を挟む間もなかった。

「できれば夏休み中にでも、杉本さんにその勉強会について詳細を確認し、その上で大人の管理者がいる環境下で同じことができるようにするよう、提案してほしいのです」

「え、それどういうことですか」

上総が問い返す。まどろっこしいとはこのことだ。本条先輩がすぐに切り返す。

「つまり、親のいない部屋で子ども同士こそそそやっているよりも、学校の教室で第二のE組みたいな場所をこしらえて、大人の監視が可能な環境でやってくれるってことですか。それ無理でしょう。青大附中の連中だけならまだしも、公立の奴らどうするんですか。集めようがないでしょうが」

「全くもってその通りです」

狩野先生はあっさり認めた。

「僕たち大人が心配しているのは、大人のいない場所です。つい気が緩んでしまうことです。もちろんおしゃべりやテレビを見たりとかその程度ならかまいません。誰でもすることです。しかし、それ以外の可能性もある以上、放置しておくわけにはいかないのです」

「じゃああれですか、図書館の自習室ですか。そりゃあますます無理でしょう。話を聞く限りその女子、札付きでしょう？ 俺の女子版でしょう？ 自習室ったら一人の世界ですし、ワンツーマン指導なんてやらかそうもんなら即、追い出されますよ。うちの学校に呼び出して勉強なんてことも、交流会みたいにはっきりした目的があれば別かもしれませんが、それもちょっとまずいでしょう」

「もちろんこれから先、杉本さんの意見も確認したうえでよい方法をとっていくつもりではいます。どちらにしても立村くんをお願いしたいのは、まずその、四人でこっそり勉強会を行うといった内緒ごとを、やめてほしいと伝えてほしいのです」

「それは無理です。杉本がよかれと思ってやってることですから」

きっぱり言い返した。さすがにこれは腹が立ってくる。これが認められるとなると、今日これから本条先輩宅に訪問して言いたい放題言わせてもらうことも禁止になるんじゃないだろうか。霧島が押しかけてきた時に大人の監視下で話を聞くななんてことも、現実問題無理だ。第一、中学に入れば親の前で本音を話す子どもなんて存在するとは、上総自身絶対に思えない。友だちには話せても親には言えない秘密だってあるはずだ。杉本にだってもちろん、あるはずだ。

「先生たちが納得する代わりに案となると、その人たちを杉本の家と呼ぶぐらいしか思いつきません。杉本がその場所で勉強を教えようと考えたのにはそれなりの理由があるでしょうし、相手もいやがるに決まっています。僕なら絶対に断ります」

「いや、方法はあるんだよ、まだ言えないんだけどなあ、梨南たちのために少し考えてはいるんだ。やめろと言っているわけじゃないんだよ。ただ梨南はいろんなことで誤解を受けやすいから損をしまいそうなんだよ。せっかくがんばっている梨南を、また傷つけるのは避けたいんだよ」

やんわり、やんわり。これが青大附中の学校側からなる圧迫か。

——そういうことかよ。これで杉本はあんな思いをすることになったんだ。

一度ならまだしも、二度も。

例の修学旅行濡れ衣事件で、二学期以降杉本は「修学旅行で布団に地図を描いてしまい、しかも旅館に内緒で布団を隠し大目玉食らった奴」扱いされるのが目に見えている。犯人が誰だか、ほぼすべての生徒たちは気づいているにもかかわらず、

——自殺者を出したくない。

この一点でもって杉本に罪をおっかぶせようとしている学校側の態度。十分激怒して問題ない内容だと思う。上総もこの件には深く関わっているしこれから先も犯人関係者に対しては厳しい態度をとっていくつもりでいる。杉本も交換条件を出した上で、真犯人の名を一切出さないと約束し収束したこの事件、しかし誤解されてしまうのも事実だ。特に女子にとっては屈辱だろう。考えるだけでも腹が煮え繰り返る。

それでも杉本は仲良したちと一緒に、自分なりのやり方で学校生活を続けていこうとしている。霧島から聞いた、「なずな女学院」の推薦入学情報も気になるがそれは可能性が低いことだし、所詮デマだと思う。しかし今の話はなんなのだ。すでに駒方先生が……公式には「教師」としてではないということだが……言葉は悪いが「がさ入れ」したというわけだ。杉本は純粋に善意で教えていただけとしっかり判明しているにも関わらず、今度は「大人の監視下でないと友達同士で遊ぶことすら許されない」と手錠をかけられる。こんな理不尽な扱いをされていいとは、上総はどうしても思えない。

修学旅行濡れ衣事件については、あえて知らん振りを通すつもりだ。これ以上杉本のプライドをずたずたにするような話を、知らないであろう本条先輩にまで言いふらす気はない。ただしこれ以上杉本を傷つけることがれば、上総はどんな手段であっても報復する覚悟がある。

上総は顔を上げた。唇を結んだ。大人ふたりをそれぞれ、全神経を集めてかたく、きつく、見つめた。もう、引きはしない。

「ひとつ提案なんですが、いかがでしょう」

本条先輩が、届いたばかりのナッツをばりばり噛み砕きながら口を挟んだ。

「今の話ですがまだ立村にはぴんときてないんじゃないかねえかって気がします。俺なりのわかりやすい説明でまとめはしましたが、はたしてどのレベルの危険度なのかがわからないってところですかね。俺からすると、まあ、そちら方面に足を突っ込んできた経験ありですんで、かなり、かなりやばいんじゃないかという気はします。匂いですがね。ただ先生方のお話だけ聞いてますと、その危機感が薄いんですよ。説明不足というんじゃないくて、実際杉本ティーチャーの教え子たちが今までどんなことをやらかしてきたのかとか、部屋の雰囲気女子四人放り込んでいてあまりにもまずい環境なのかとか、そういうのがこいつには伝わってないですよ。公立の先生方がこりゃまずいとあせるほどの悪だったら、まあ俺が教師側に立てば駒方先生たちの判断は正しいと思います。それを立村に共有させることができるかどうか、ってところが、本日の議論の肝ですよ」

「里希は相変わらずまとめるのがうまいなあ。そうとう、青潟東で鍛えられてるな」

危機感なしの駒方先生はあっさりと褒める。

「そこでなんですが、こいつに一回その現場を見てもらって、その上で判断させるというのはいかがですか。言葉だけじゃあたいしたことないと思ってても、実際勉強現場を確認してみたら、灰皿がなにげに用意されてるとか、何気にゴム一式があったりとか、何気にどっかの男子がねっころがってるとか、なんらかのサインがあるはずですよ。その辺を見てもらって、立村が果たしてどう感じるかってところです。こいつもご存知の通り、杉本に対しては俺が何言ったって聞く耳持ちませんからね。兄貴分の言うことなんか無視です。こいつに煮え湯飲ませられた数あまたの経験で一番しんどかったのが、杉本がらみの問題ですよ」

狩野先生は静かに頷いた。駒方先生に話しかけた。

「そうですね、駒方先生。僕たちの視点だけですと教師としての考え方の方に偏ってしまいます。ここは本条くんの意見を尊重してはいかがでしょう」

「そうだなあ、里希。上総もどうだろう。まあ、そんなに悪いものがいっぱい転がっている部屋ではないんでその点は安心しなさい。まあ、ただ、やはり梨南にとっていい環境なのかどうかとところになると、少し迷うこともないわけじゃあない。さっきも話した通り、梨南には別の提案も用意しているし、その教え子さんたちとも仲良くできるよう私たちも考えていくつもりでいるよ。だからそうだな、一度梨南にも相談して、まずは上総を連れていってみようか。まだ、勉強会はだめだよなんて伝えてないしね、上総に英語の勉強の手伝いをしてもらおうという流れでもっていき、その上で改めて梨南のためにどの方法がいいかを相談しようじゃないか」

「けどそれは、あまりにも」

言いかけた上総の口を、本条先輩が指でひっぱたいた。危うく噛み付きそうになる。

「いい加減にしろ。ここは礼儀を守れ。とにかく自分の目で見ろ。それで納得いかないならその時は俺も話を聞く。納得できれば俺もお前と一緒に先生たちを説得する。まずは、俺たちの言った通りにしろ！」

「本条くんはスパルタですね」

しみじみ、狩野先生はふたりを見つめながらつぶやいた。

指先でひっぱたかれた唇が痛い。

「よし、じゃあどうしますか。いつ頃連れて行きますか」

「まあそこは梨南から聞かないとな」

「待ってください！」

上総は頭を一回振り、呼びかけた。できるだけ抑えたつもりだけど、声がとんがったのが自分でもわかる。

「どうした上総」

「先生たちが僕にこのことを話したと、杉本に伝えてもいいですか」

「杉本さんに、ですか」

頷いた。当たり前だ。嘘を言うつもりなんてない。

「明日、杉本に直接会う予定です。その時に本人から直接話を聞かせてもらいます。先生たちがこのことを内緒にしたいのであればあえて何も言うつもりはありません。けど、杉本は絶対に嘘

を吐きません。僕が知らないふりをしていても、必ず気づきます。隠す自信はありません。その上でもし、問題があるようならば僕自身が説得します。できないのならば、僕はそのまま見守ります。この件については、申し訳ございませんが誰の指図も受ける気はありません」

宣戦布告と思いたければ勝手に思えばいい。青大附中を追い出されようとしている杉本が、最後まで全力尽くして戦っている姿を、上総はただ見守ることしかできない。さらに茨の道が待ち受けているだけではなく、わざわざ茨を増殖させようとしているような青大附中の対応を上総は黙って受け入れる気なんてない。駒方先生も、狩野先生も、もちろん本条先輩も、杉本のことを心配し、同時に上総のことを慮って言ってくれていることは承知している。しかし誰にも踏み込めない一点がある。

——杉本が望んでいることを理解できるのは、俺だけだ。

卒業式で確信したあの瞬間を、上総は決して忘れない。

どんなに周りが「間違っている」「これが正しいんだよ」そう訴えたとしても、杉本が求める価値とは違う。やさしい大人たちや同級生たちが薦めてくれるものではない、どんなに無駄とわかっていても、干からびそうなほど求めているものが何なのか、上総は誰よりも知っている。永遠に手が入りそうになくても、せめてその似姿だけは与えたい。

見守り組三人衆はしばらく無言でいたが、駒方先生がまずコーヒーを飲み干して微笑んだ。「よしわかった。上総の信じる通りにやってみなさい。ただ、約束だよ。梨南と話をしてみても、どう判断したかだけは報告するんだよ。今、青大附中の生徒たちに聞かれないようにして上総に打ち明けたのは、信じているからなんだ。その信頼に上総もどうか答えてほしいんだ。信じているがね。その上で、指示の代わりに、提案をさせてもらうことになるがね」

「提案、ですか」

「そうです、あくまでも『提案』です」

狩野先生が頷いた。だんだん外から流れてくる窓の日差しに赤みがさしてきたような感覚がある。

「大人として、教師として、守る立場としてのそれが義務です。それはきちんと話を聞いてほしいのです。約束してもらえますか」

本条先輩は何も言わず、黙って上総をめがねの奥から射た。

「約束します」

両手を握り締めたまま答えた。三人の「大人」たちに焦点を合わせられ燃え上がった上総の炎は、窓辺に射す太陽よりもはるかに熱かった。

その三 高校一年夏休み九日目・立村上総の本条先輩を振り回す日々（10）

その他の話もいろいろした後、おいとましたのは一時間後だった。ずいぶん長話をしたものだ。改めて駒方先生、狩野先生に礼を言うと、

「いや、上総もよくがんばっているとわかって安心したよ。また近いうちにこうやって話す機会もあるだろうしな。よかったよかった」

——杉本のことも聞き出さないとまずいもんな、そういうわけか。

うっすらと毒づきたいが、やはり駒方先生は本条先輩の担任、嫌う気にはなれない。

「そうですね、僕も君たちとゆっくり話し合う機会を持つことができてほっとしました。霧島くんや杉本さんのこともいろいろと相談しなくてはなりませんから、また連絡させていただきます」

——あっさり認めてるしな。しかたないか。

狩野先生は最後まで穏やかに締めた。上総のことを理解してくれている、数少ない教師のひとりで、これから先できればその関係すらはずした形でつながっていきたいひとりでもある。霧島のこと、とはっきり言ってくれたのはその誠意だと思っておく。

駒方先生は本条先輩にもこやかに語りかけた。

「里希もな、そのマイコンだか、コンピューターグラフィックだか、もう少し詳しいことを教えてもらいたいもんだなあ。まずはその、プログラムとやらを今度持ってきてなさい」

「お安い御用で。掲載雑誌多すぎて大変ですがね」

「それから、上総のことをこれからも頼んだよ」

——余計なこと言うなよな。

また火がつきそうになるのをこらえて本条先輩の反応を見る。いたって当たり前の顔して答えている。

「俺しかこいつを面倒見られる奴はいないこと、重々承知してますよ」

——面倒なんか見られたくないよ、そんなの。

もう一度挨拶した後、本条先輩とふたり、青大附中の自転車置き場に向かった。中学時代と同様に、三年D組用の空きスペースに滑り込ませておいた。生徒たちもほとんど学校に来ていないようなので、違法駐車もばれないですんだ。本条先輩も同様に三年A組のエリアに置いていたようだ。

「来るか」

「はい」

至って当たり前。最後までガキ扱いされっぱなしでむかつかないと言えば嘘になるけれど、本条先輩と一緒にいられる時間が少しでも多いのならばまんするしかない。

「じゃあ、着いてこい。道、わかるな」

「わかります」

余計な会話はほとんどなし、ギアを上げて全力で自転車をこぎまくる本条先輩に上総は全力で

ペダルを漕ぎ追いかけた。途中、スーパーでスナック菓子と飲み物何本か仕入れた後、本条先輩の住むアパートへそのまま直行した。背中の汗も、斜めに降りかけた太陽も、濃すぎる影も、全く気にならなかった。

「しかし、夏日だよなあ。あちいわ」

部屋に入ると入り口はもわりとくる。息が上がり、まずは水を一杯もらいたかった。

「まずは扇風機かけとくか。んと、里理、帰ったぞ」

本条先輩の兄、里理さんの部屋前で呼びかけていたが、全く返事なしのようだった。

「あいついねえな。まあいっか。どっかでふらついてるんだろ。とにかく俺の部屋に入ってる。水かサイダーかそれともコーヒーか」

「コーヒーはもういいです。水でいいです」

入る前に本条先輩は、ガラスコップに水道から水を汲んで渡してくれた。立ったまま飲み干した。

「ありがとうございます」

「里理いねえなら戸開けっ放しのほうが涼しいな。その辺に座ってろ」

扉を開けて、いつものように座り込む。ほこりっぽい匂いと厚ぼったい空気でむせる。

「先輩、窓開けましょうか」

「そうだな、網戸にしてくれ」

言われたとおり窓辺に近づき、手をかける。側の勉強机奥に、風呂敷のかかった塊のようなものが鎮座ましている。机スペースは圧縮されている状態だ。

風が入ってくる。時間は二時半過ぎ。まだ太陽は照っている夕方にはまだ時間がある。先生たちを挟んで語り合うのも楽しくないわけではないが、やはり言葉半分に区切ってしまっているところもある。本条先輩にしか言えないこともあるし、察してほしいこともある。どちらにしても本条先輩がいない限りは何もできないことばかりだった。

卒業してから何度も訪問し、時には泊まったりもしている。見慣れた光景ではあるけれど、先月泊り込んだ時にはまだその「マイコン」なるものを見かけなかったのだが、どこに隠しているんだろうか。一ヶ月も経たないのに二十万もするものを購入するなんて。バイトしているとか言うけれど、本当だろうか。相当激しいバイトでないとやっていけないんじゃないだろうか。

「さあさ、こっちに来い。水ばっかしじゃ耐えられねえだろ。飲め飲め」

本条先輩が出してくれたのは、とことん合成着色料がちりばめられているであろう黄色い飲み物のボトルだった。名前は聞いたことがないものだ。

「ほら、飲むか？」

「はい、いただきます」

家では絶対に飲めない代物。喜んでいただく。母が合成着色料にやたらとうるさく、下手に駄菓子屋などのお菓子をつまんでいたりするとぶん殴られそうになる。人の家だとそういうことに気づかずに平気で口にできるからほっとする。

「おいしいですかこれ」

「すっばいだけだろこりゃ」

「奇妙な味、しませんか。すっばいってうか、甘ったるいってうか」

それでも冷たいからたいていの味覚はそれで満足できるもの。二杯飲み干した。

「それにしてもなお前、もう少し先生の前ではまともな態度取れよ。俺も人のこと言えないがな、なんだあの甘ったれぶりは」

毎度の説教をかまされる。いつものことなので慣れている。

「申し訳ございません」

「こうやって頭を下げてごまかすと、それもパターンだよな。まあいっか」

頭を撫で回してくる。思いっきりにらんでやる。本条先輩が本気で噛み付いてくる時の眼差しとは違う、のんびりした表情だった。話を逸らして機嫌を取ろう。

「先輩、さっきの話に出てきた、『マイコン』ってどこにあるんですか？」

「見たいのか？」

やっぱり乗ってきた。上総も本条先輩と四年目の付き合い、どこらへんに機嫌よくなるつぼがあるのかくらいわかっている。大きく頷いた。

「そっか、まあ来い。ほら、これだ」

窓を開けた時に目を留めた風呂敷の塊に近づき、さっと払った。

テレビのブラウン管に似たものと、キーボードらしきものがセットになり勉強机の上を占拠しているのがやっと間近で確認できた。

「先輩、テレビですか」

違うとは思いが確認してみる。近づいて顔だけ寄せてみる。

「テレビだったらここにあるだろが。ほら、よっく見ろよ」

別の場所を指差した。本条先輩もテレビはあまり見ない人になりつつあるようだ。埃をかぶっている。かわりにブラウン管の右下にあるボタンをまず押し、次にブラウン管の台となっている四角い箱のスイッチを入れた。聞いたことのないかすれた電子音……さすがにそのくらいは上総でもわかる……が部屋に響き、黒い画面に緑の英文字がずらっと並ぶ。文章そのものは読めるものではあるが、あっという間にその文字が消えてしまい、残るは左上の小さな四角い空白のみ、黒い画面の中で点滅している。

「これ、なんですか」

「カーソルっていうんだよ」

それ以上本条先輩は詳しい説明を行わず、文字を入力してはキーボード右側のキーを押し、また単語を入れてはキーを押すの繰り返しを行い、次にカセットテープを取り出した。脇においてあるラジカセに何かのケーブルをつなげた。それを箱にもう一度差し込む。キーボードをまた叩いて今度はカセットを再生する、の繰り返しだった。

「音楽入っているんですか」

「聞けばわかる」

本条先輩の言葉が終わる前に、黒板をチョークでひっかくような、一言で片付けると「耐え難い」音が部屋の中一杯に響き渡った。耳をふさぎたいががまんする。その音が独特のリズム

を持って上がったり下がったりしつつ鳴り続ける。

「先輩、これ、なんとかならないんですか」

「プログラム読み込んでるんだしょうがねえだろ」

「たとえば普通の音楽テープでもこうやって読み込めるんですか」

「馬鹿、常識考えろ。これはコンピューターしか理解できねえんだよ」

噛み合わない会話を続けながらも本条先輩は手馴れた操作を続けていく。しばらく画面が青くなったり黒くなったりさまざまに色を変えた後、「GAME START」と赤い文字がどでかくトップに表示された。

「ゲームですか」

「当たり前だろ。ほら、これ押してみろ」

本条先輩は「ENTER」と書いてある鶯色のボタンを指差した。恐る恐る押して見る。壊れはしなかったようだ。てかてか光っていた文字が一瞬消え、次に表示されたのは七色の丸が自分めがけて飛んでくる不思議な画面だった。

「ほら、次はこの丸を目指して、このキー押してみろ」

本条先輩が指差したのは、キーボードの一番下に伸びている、細長いバーだった。何度も叩いてみる。画面下方から七色の丸めがけて白い線が伸び、いくつかはぶつかりその丸を破裂させている。

「打ってってことですか」

「そう、お前コンピューターゲームやったことねえのか」

「ゲームセンターでは少ししたことあります」

もともと、途中でうんざりして止める。南雲と一緒にいった時は一緒に画面を覗き込んでしゃべりながら楽しんだけど、自分でプレイする気にはなれない。

「南雲はなあ、強いぞ、腕は。けどなあお前、ほんっと男としての闘争心、もっと出せよ。スポーツには燃えないし、ボーリング教えてもストライクで感動すらしやしねえ、いいのかそんなんで。男としてついてるもんついてんのかよ。あ、いや、悪い、お前は別の方面で本能で動いているもんな。悪かった」

ひとりずつぶやきながら、本条先輩は上総からキーボードを奪い取り、勢いよく細長いキーを連打し始めた。なかなか落ちなかった丸が、本条先輩にかかると数秒で消え去る。すぐに「クリア」といった文字が黄色でまたどでかく出てくる。かくかくしているのが見えていて落ち着かない。本条先輩はいったん電源を落とした。

「ゲーム興味ねえなら見てもしょうがねえだろ。電気の無駄だ。止めるぞ」

「先輩、これ先輩作ったんですか」

「いや違う。こんな単純なのは俺じゃなくても誰でも書ける。まず見ろ。これだ」

本棚から一冊、薄いA4版の雑誌を取り出した。見ただけでコンピューター雑誌とわかるがそれだけだ。五月号とある。目次をまずめくると、そこには「人気作者のプログラム特集。ミスター・パーフェクト本条氏」と見出しが載っている。

「先輩、もしかしてこの『ミスター・パーフェクト本条』って」

「訂正しろ、『氏』も俺のペンネームの中に入っているぞ」
誇らしげに言い放った。グラスを上総に差出し、
「ということで、説明の前にまず、俺に敬意を表して一杯注げ」
言い放った。もちろんだ、誰が逆らうか。

軽く目を通した限り、そのマイコン雑誌らしきものには「ミスター・パーフェクト本条氏」の組み上げたオリジナルゲームプログラムが三作掲載されていて、読者からかなりの支持を得ている。そこまでは理解した。ただそのプログラムと称されるものが全くもって意味不明だった。10、20、30……と先頭に番号が振られ、そこから英語でさまざまなプログラムが組み込まれているようなのだが、何を意味しているのかが全くわからない。

「いわゆるBASICと呼ばれるあれですか」

「ま、そういうこと。要するに俺はこの雑誌でそれなりの才能を認められているってことだわな。当然だろ」

「でも、なんでそんなにすごいことになったんですか？ それに、この前俺が泊まりにきた時このマイコン、なかったような気がするんですが」

「だからバイトして買ったって言ったろ。それと付け加えておくとだ、先生方の前では言わなかったが俺は二十万も出して新品買ったわけじゃあねえ」

「新品じゃないんですか？」

言われた意味が不明のまま尋ね返すと、本条先輩は鼻を鳴らして言い放った。

「この雑誌でな、プログラムのコンテストがついこの前あってな、俺は十本オリジナルのものを送りつけたわけだ。そうしたらなんと全部採用になっちまって、特賞のパソコンセット一式をもらっちまったと。すげえだろ」

「すごい！」

やっぱり本条先輩だ。やっていることは未知過ぎるが大人の社会で堂々と認められているというこの事実を誇らないわけにはいかないだろう。褒める、絶賛する、もう惜しまない。先生たちの前でそっくりかえっても上総は絶対腹を立てない自信がある。

「先輩、おめでとうございます。先輩やっぱり天才なんですね！」

「いや、わかりきったことを褒めてくれるのはまんざらじゃあねえが、ちなみにこの話には続きがある」

もったいぶって、本条先輩は続ける。合成着色料ばりばりの黄色い炭酸飲料を飲み干す。

「青潟東は公立で、いわゆる受験が待ち構えているこの頃。当然三年次は地獄の受験勉強に費やさざるを得ないというわけだ。しかしながら、神は俺を見放さなかった。夏休みが終わると九月に入りすぐ修学旅行だ。修学旅行先なんだが、この雑誌が発行されている出版社の地元でもある」

「それとこれとどう関係があるんですか」

「実は、自由時間を使って一度、編集部遊びに来いと誘われてるんだ」

「遊びに行くって何をやるんですか？」

「まあ、たぶんな」

胡坐をかきながら本条先輩は、上総の手元にある雑誌をそのままひっくり返し、裏表紙をめくった。出版社の発行元住所が載っている。

「そっちの大学に進学したら、バイトに來いというお誘いだろうな、たぶん。そこで評価されたら、そのまま就職しちまいなって流れになるかもな」

「就職ですか？」

果てしなく遠い未来の話を、本条先輩は足をつけてしゃべり続けていた。

扇風機だけがくるくる回っていた。

「じゃあ、青濁を出すことに」

「当たり前だろ、出ないでどうする」

上総は自分にも合成着色料のたんまり入った飲み物を注いだ。朝から水ものばかり摂っていて身体によくないことはわかっている。どうせ病気になったってかまわない。熱出して本条先輩の家に泊まりこんだってかまわない。

——どうせ、本条先輩はいなくなるんだから。

マイコンが途中熱暴走を起こして動かなくなってしまうまで、上総は本条先輩の肩越しにディスプレイと呼ばれる画面を眺めていた。テレビにそっくりなのに映らない。ひたすらシューティングゲームの世界。どんぱち、どんぱち。「ピー」の音が細かく打たれたり、時には伸びたり。

——こんなのがおもしろいのかな。

本条先輩にどやされた通り、自分にはいわゆる男としての本能が薄いのだと思う。

——神経ぴりぴりして、落ち着かないような気がするな。

「今日は暑いからなあ、しばらく寝せとくか。我が愛機よ」

ディスプレイをなでてから、上総に向き直り、

「おい、飲み物」

「ただいま」

ツーカーの呼吸でまずは渡す。飲み物はすでに二本目のグレープスカッシュに突入している。

「先輩、ゲーム以外でコンピューターが役立つ場面ってありますか？」

「そりゃあたんまりあるわな。例えばだ、過去の試験をかき集めてきてデータにしてぶち込んでおく。まあ日本語入力は無理だがな。そこで傾向と対策を読み取って完璧な予想答案を作っとく。テストは余裕で満点だぞ」

「それ、やったんですか？」

本当なら上総もぜひ知りたい。本条先輩はけらけら笑った。

「あのな、それできてりゃ俺もとっくの昔に優等生復活してるだろうが。だがな、夢ではないらしい。さすがに国語の現代文は難しいにしても、数学あたりだと当たる確率がかなり高くなりつつある今日この頃らしい。ま、俺はうちで一通り英語と数学の問題をキーボードで打ち込んでるがな。まだまだ実用性には乏しい」

——やることやってるんだ本条先輩すごい。

上総が尊敬の眼で見上げているのを気づいているのかわからないが、本条先輩はさらに楽しげに語り続けた。

「そうだ、ゲームといやあ最近、アドベンチャーゲームという種類のものも出てきているらしいんだ。俺もまだ自分でプレイしたことはねえけどな。どこかの山に探検に行くと、そこでモンスターに出会うと、さあお前どうする？ 一、戦う、二、逃げる、三、死んだ振りする、さーどうだ！」

「逃げる」

きっぱり答えると思いきり叩かれた。

「お前なあ、そういう話してるんじゃないか。つまりだ、こういう設問がマイコンの中からぴよこぴよこ出てくる。それに答えて先進むと、さらに質問が用意されている。さあどうするどうすると進んでいくと、やがて黄金の宝の山にたどり着く。勇者万歳。こんな話が画面いっぱいにずらずら続いていくんだ」

「あの、先輩、それ、文字でしょうか」

イメージがつかめなくて上総は確認を取ってみた。上総の頭の中でうごめくものは、ディスプレイの黒いバックに緑の文字が延々と自動的に綴られていく画面だった。誰もキーボードを打たないのに、文字だけが不気味に増えていくかなり気持ち悪い光景。

「そうだ、残念ながら全部輸入もんらしい。お前のお得意だろ。こちらも主に冒険ばかりだが、中には色っぽいもんもあるらしいぞ。全部文章で誘ってきて、それに答えるとさらにスケベな返事がって展開でな。まあ俺からしたら、生身なしの文字だけでエキサイトするもんかいなと思うが」

「それ面白そうですね。物語を読みながら自分でも参加していくって感じですか」

「まあな、俺もなんとか手に入れて試してみたいんだが、残念ながら輸入するには莫大な金がかかりそうで、しばらくはがまんするしかねえなと思う」

本条先輩は指を折って何かを数えていたが、

「まあでも、今はなんとかうちで打ち込みできるから楽になったよな。今までは電気屋のマイコンコーナーとかで三十分待ちして席を分捕り、一気にプログラム打ち込んでそれをプリントアウトして、そこから投稿なんていうめちゃくちゃ手間のかかることしてたからなあ」

「それ俺も不思議だったんですけど、先輩の特集が雑誌で組まれているってことはその前にいっぱい投稿していたってことですよ。この一、二ヶ月ってことじゃないでしょうし。いつ頃からそういうことしてたんですか」

「まあ、厳密に言うと去年の夏だわな。まだ演劇部で裏方作業、鉋がけにトンカチ、ペンキ塗ってたてほいさっさしていた頃か。その頃お前も全然連絡してこねえからそんな話をすることもなかったしな」

——本条先輩、やることはやってたんだ。

南雲の言う、「演劇部で干されて腐っていた」わけではなかったのだろう。

「まず、きっかけはたまたまでかい電気屋のすみっこにマイコンらしきものが鎮座ましていたのを発見したのがきっかけだな。結構青湯にもあるんだぞ。マイコンコーナーってのが用意されていて、売り場の一角に十台くらいならんでいて、ひとり三十分交代で無料、打ち込めるといったすげえ環境が、だ」

そんなの上総はいままで見たことがない。頷くだけ。

「俺もそれまでは、お前と同じくらいの認識しかなかったけどな、とりあえず一緒に入っている本屋に駆け込んで、マイコン雑誌一冊買って、指一本で打ち込みを試してみたんだ。たまたま初心者向けのページが混じっていて、かんたんなゲームのプログラムも掲載されてたからな。あくまでも、試しだったんだ、そんな時は」

そもそも、マイコン見かけてすぐ本を買って打ち込みたくなる衝動が信じがたい。

「そうしたらな、バグがない良質のプログラムだったのもあって、一発で走ったんだよ。あ、いわゆるプログラムが動くことを『走る』って言うんだがな。ちゃちいシューティングゲームだったけどこれははまった。さっそくしこたまプログラム入門書を買って自己流で覚えることにしたんだが、まあマイコン高いしな、方言もあるしな、同じコンピューター言語といっても各メーカ

一でちょこちょこと違いがある。ちょっとでも間違えると動かない。半年近くは四苦八苦しなわな」

「先輩、ということは、マイコンが来るまでずっと電気屋さんここで打ち込んでいたんですか？」

恐る恐る尋ねて見る。当然の顔して本条先輩は膝を打つ。

「あたりまえだろが！ こんな高いもん手に簡単に入るかよ！ それでも成せばなる、なんとかなるもんでな、でき合いのプログラムを自分なりに打ち込んでいくうちにパターンがわかってくる。うちで雑誌読んで知識詰込んでいくうちに自分でもなんとなく作ってみたくなる。実際試してみたら走る時もあれば走らない時もある。せっかく作ったのをひとりで溜め込むのも健康上よくないから雑誌に投稿してみたらあつという間に大スター。演劇部では万年裏方のわが身だが、こちらの世界では我が世の春到来ときた。二重生活はなかなかしんどいがなんとかなる。ただ、やはり本気でやる以上は青大東の連中にも俺の力を見せ付ける必要を覚えて、春、マイコン同好会の申請をして無事通った、というわけだ。どんなもんだい」

「同好会にすると何か良いことあるんですか？」

間抜けだとは思いますが、突っ込んでみる。

「そりゃああるだろ。相部屋だが部室もらえて、マイコンの雑誌程度置くことはできる。会員の中には親がマイコン持ってる奴もいるからあわよくば貸してもらうこともできる。やはり一人孤独に指一本で打ち込むよりも、仲間作ってわいわい話をしている方が気が楽だな。俺がこの調子で大成功したら、同好会からたぶんマイコン部に昇格できるんじゃないか？ 卒業までの大目標はそれだな」

脳天気語りまくっている本条先輩に冷や水かぶせるつもりはないが、やはり確認しておきたかった。

「先輩、ちなみに次の会長は決めてるんですか？」

やはり、青大附中出身者としては、考えておかなければ嘘だろう。本条先輩はやはり即答した。

「当然。一年に期待のルーキーがいるからな。たっぷり仕込んでぞ」

やはり、本条先輩はどこへ行っても本条先輩ということだった。

「おい、なにいじけてるんだよ。腹減ったか？」

「そういうんじゃないです」

山積みされた掲載雑誌をめくりながら、上総は全く理解できない文字の羅列を眺めていた。

演劇部で全く相性の合わないタイプの劇を押し付けられて逃げ出した本条先輩。負け犬扱いされていて肩身が狭かったこともあったらしい。本条先輩自身は口にしないが、南雲から聞かしてもらったいきさつを耳にする限り相当プライドがずたずたになるようなものだったらしい。外野の上総から見れば、どう考えても青大附中評議委員会ビデオ演劇のようなやりたい放題が認められるわけないとも思う。あれは青大附中だったからこそ許されたお遊びであり、部活動とは違うもの。

でも、そんなことでめげる本条先輩ではないと信じていた。実際それは証明されて、雑誌の形としてそこに積まれているというわけだ。上総の見る目は狂っていない。

——けど、どうしてこんなにすぐ自分の場所をこしらえられるんだろう。

青大附中評議委員長の華々しい活躍とは比較にならないかもしれないが、自分のやりたいことをすぐに見つけて認められているこの人は、どこへ行っても輝いていられる。生徒会や委員会に関わらなくても、すぐに自分の得意分野を見つけ出し土台を築いていく。そんな本条先輩に上総は中学入学当初から憧れていた。ああなりたい、確固たる自分を貫いてどんどんやりたいことを実現させていく力、それが本条先輩だ。どんなに僻地に追いやられようともめげることなく戦っていける人だ。

——それに比べて俺はなんだろう。

前の日、霧島にも感じた苦味が口に蘇る。少しやわらかい熱風が吹き込んでくる。扇風機の風に混じって心地よい。

——青大附高の英語科にもぐりこんで、いい友達にも恵まれて、それでいて何にもしてないってわけだよな。担任には目をつけられるし、数学できないからって物笑いにされるし、果てには関崎の下働きしろとかわけわからないことまで言われるし。まあいいよ、それでも。ただ、これで本当に青澗大学の英文科推薦してもらえるのかな。

本条先輩が大学をすつとばして就職という未来を眺めているその脇で、上総はまだ大学進学への心配ばかりしている。それも英語が得意だからというそれだけで、何の目的もなく、具体的な職業も思い浮かべることができないありさま。本条先輩や霧島のように、明確な目標らしきものが全く見えない。狩野先生にも、英語へのこだわりを手放すよう言われたけれどもそんなことできやしない。第一、自分から語学能力を取ったら何が残るのだろう。からっぽ、みっともない、いじけた自分しかない。

「しけた面してるんじゃないやねえよ。そうだそうだ、さっきのおさらいやるか」

「おさ、らい？」

あわてて問う。本条先輩がにやにやしながら顔を覗き込む。雑誌を丸めて自分を肩を叩きながら、

「先生方の前じゃああの程度しか言えねえだろ。まずだ、キリオの件、全部白状しちまえ。お前今の今まで弟分候補がああ、キリオだなんて一言も口にしねえし。まじで仰天したぞあん時は！」

そうだったか、まだ言っていなかったか。忘れていた。頭がぼんやりしている。

「そうでしたっけ」

「そうでしたっけじゃねえよ！ キリオといやあ、てっきり難波がキリオちゃん目当てでいろいろと面倒見ていると思っていたんだが、まさか弟が弟になつてるとわな。まずは全部話せ。正直お前があいつになんで第二のホモ説ささやかれそうなほどおっかけられているのか、その理由がわからねえと俺も何も言えないだろが！ それにだ」

言葉を切り、大きくため息を吐いた。

「杉本のことになるとお前が暴走するのは今に始まったことじゃねえしもう何も言わないがな。どうするんだよ、あんな啖呵切っちゃまって。杉本が例の女子たちと不純異性交遊ばりばりだったらお前、生きていけるか？ 人間、環境にやっぱ飲まれるんだぞ。お前が心底杉本に惚れ抜いているのは承知してるしこれ以上俺も口は出したくないが、あんなことがあった以上はそれなりの説明が必要じゃねえのか？ おい、まずは白状しろよ」

——そうだ、どうせ言うことだし。

夕日はまだ遠い、それでももう五時。

——霧島にも夜十時にはいないかもしれないって言っといたし。父さんにも今朝、今日は本条先輩のうちに泊まるかもしれないって言っておいたし。なんかあったら電話かかってくるよなきと。

まず整理した。

——言ってはならないこと。

・杉本梨南の「修学旅行濡れ衣事件」

たとえ真っ赤な嘘だったとしても、知らない人に言いふらすべきものにあらず。

・霧島真が佐賀はるみに命がけで惚れていること。

本条先輩は新井林とも親しい。黙って聞いているだけとは思えない。用心に越したことはなし

。

・清坂美里が関崎乙彦に捨て身のアタックを繰り返していること。

曲がりなりにも三年間上総の恋人だった相手。上総の気持ちはすっきりしていても周囲が納得するとは正直思えない。

これ以外のことはまずすべてさらけ出してもいいだろう。

いや、忘れていた。

・霧島とのきっかけが、駅前のピンクチラシでいっぱい書店だったこと。

ばれた時の霧島がどれだけ荒れるか想像するだけでも恐ろしい。

一通りまとめた後、上総は本条先輩に返事をした。

「何から話せばいいですか」

「まずはあの霧島だろう。俺も難波経由の話しか知らんしな。どこで知り合った？」

「ええと」

口ごもった。そうだ、本条先輩は天羽や難波ともつながっている。ということは上総が霧島との出会いを立場逆転させて話した内容を耳にしている可能性も大だ。あわせておかないと後々まずそうだ。

「実は六月頃に、駅前の本屋で、たまたま本買ってたら見咎められたんです」

「へえ、どんな本だ」

答えは準備してある。感情交えずに続けるだけ。

「いわゆる、その、グラビア系で」

「ほお、どういうんだよ、今度俺にも見せろ」

「ええととにかく、それ買ってたらあいつに声かけられて、校則違反なんじゃないかってつっこまれて、それで」

「野暮な奴だなあ。ああ見えて硬派か」

「どうなんですか。とにかく俺もまああまり見られたくないところだったんで、それであいつの話の聞くはめになり、現在に至るわけです」

「つまり、逆ナンパってことか。ほええ、こええなあ最近の中学生は。それもお前一年前は腐っても評議委員長だったんだろ？ そいつを叱り飛ばすとはな」

本条先輩は雑誌をぺらぺらめくりながらさらに問い続けた。

「俺も個人的に、青大附中の生徒会状況とかが気になっていたんで、言われるままに話を聞いていくうちに、そうですね、なんというか、わかってくるものがあったというんでしょうか」

「わかる？」

雑誌を丸めて手にぱしりと納め、本条先輩が問いかけた。

「そうです、うまく言えないんですけど、最初はまあ脅迫されていたようなものですけども、だんだんあいつも、普通に話す友達みたいな奴がほしかったんだなってことがわかってきました。一週間くらい話、してて、もう俺は霧島の小学校時代がいかに悲惨だったか、霧島さんが可南に進学してからすっかりおしとやかになってしまった様子とか、難波が毎日しつこく霧島さんを尾行しているらしいとか、ほとんど理解できるようになりました。霧島は、気取っているように見えますけど根は、単純にふつうの友だちがほしいだけです。たまたま俺がそこにいたというだけなので、時間が来ればさっさと同学年のところに行きますよ。俺がさっき先生たちの前で『時間が解決する』と言ったのはそこです」

若干意味が異なるところもあるが、つながってもいる。

「そうか、『時間』か。わからなくもねえな」

「そうです。俺なりになんであんなに霧島がひっついてくるのかわからなかったとこあってかなり最初は手、余りました。でも、よく考えたら俺も小学校から青大附中に入った時、そっくりだったなってことに気づいて、それでまあ、向こうの気の済むまで勝手にやりたいようにさせておくか、ってことで、現在に至ります」

「ほお、お前自覚あるのかよ」

ぽかりと本で叩かれる。ひったくりきちんと本を広げ直し、本条先輩に渡す。

「まじめに話してるんだから聞いてください。俺が中学時代無事に生きのびてこれたのは、クラスや評議にたくさん友だちがいたからだ、卒業式当日気づいたんですけど、それってものすごく運がいいことだと思うんです。本条先輩、そう思いませんか？」

「ああそうだな、はいそれで？」

「入学第一日に羽飛や清坂氏と友だちになって、評議委員会では天羽や難波や更科たちと一緒にあったし、南雲や古川さんや、とにかくかつての自分には考えられないくらい友達に恵まれて、いろいろあったとしてもなんとかやっていけたんだってところがあります」

「それ、もう少し早く気づけよなあ。親心も知らんでまったく」

あきれたようにつぶやく本条先輩。

「でも、霧島にはそれがいいですよ」

「あのえせ貴公子野郎にか？」

上総は頷き、膝を抱えた。

「そうです。話を聞いている限り、成績はいいし顔もあの通りだし、生徒会副会長で来期はたぶん会長決定でしょう。霧島呉服店は青湊でも老舗だし経済的には恵まれているんじゃないかって感じですが、でも、あいつはいろいろあって友達が誰もいないんです。詳しい事情はあまり聞いてませんが、クラスの連中としょっちゅうもない話して盛り上がるようなことがなさそうなんです」

「お前もそうじゃなかったか？ 俺がどんだけ」

言いかける本条先輩の親心ブルースはまずおいて、上総はしゃべり続けた。

「先輩わかっています。先輩がどれだけ気を遣い続けてくれたかわかっています。霧島にはそういう風な後ろ盾がないんです。俺よりはるかに、恵まれてないんです」

霧島を前にこんな甘ったるい言葉を並べるなんて怖気立つところもあるけれども、本条先輩の前ならばいくらでも話すことができる。

——霧島は、ひとりぼっちなんだ。しかも頼る人がいないんだ。

少しガードを緩めた上総に、まっしぐらに突進してきたのも、誰一人頼れる相手がいなかったからなんだということ。

青大附中委員会独特の、義兄弟意識のようなものが存在したからこそ、上総は本条先輩を慕い、しがみついてきた。実際今もこうやって足元でじゃれ付いているわけだけど、この人の前であれば多少はめをはずしても本でぽかっとやられるだけですむ。見捨てられたりはしない。そういった安心感がある。卒業間際、本条先輩ととことんぶつかり合い、そこで初めて自分が対等に必要とされていると感じとることができた。その時から本条先輩とのつながりはいわゆる「あにおとうと」以上のものに進化したような気がする。そういう関係を得られたことが、現在学校で相変わらずいじけまくっている上総にとっては宝だし、まるのままの自分でいられる本条先輩の側でくつろぎたいと思う。

ただここまでたどり着くのに、上総の場合はまるまる三年間かかった。

対等になるために、せいっぱい背伸びし続けて壊れかけ、本条先輩から切り捨てられることを覚悟して尋ねた二月半ばの夕方。あれが上総にとってのターニングポイントだったと、今ではよくわかる。

「正直、後ろ盾がほしいんだったら俺じゃなくてももっとしっかりした奴の方がいいことは承知しています。一度は俺もそうはつきり言いましたし。でも、霧島が今の段階では俺と話すことを望むんなら、落ち着くまで聞いてもいいかなくらいは、思っています」

「あのな立村」

また頭のがしと手を載せる。払うのも面倒でそのままにしていた。

「お前な、霧島のことを受け止めたってのはよくわかった。ただな、先生方がなんで俺まで呼び出したのか少し考えろよ」

「わかっていますよそのくらい」

「いいや全然わかってねえ、ほんとこれっぽっちもわかってねえよ。まあ霧島は野郎だし、お前

もそっちの趣味はなさそうだけどな」

「ないですそんなの」

「そうだなお前の趣味は巨乳ちゃんだもんなあ」

思いっきり手を振り払った。言葉は要らない。

「そう怒るな怒るな。あのな、俺が言いたいのはだ。お前なんでも真正面から受け止めすぎて、自分がさんざんこけにされてもめげないで、結局気づかぬうちにぼろぼろになっちまってるパターンがほとんどだろ。狩野先生も駒方先生も心配してるとこ、本当はそこだと思っぞ」

「そんなことないです」

「ふざけんなよ、俺がお前の犠牲者だったの。仮にだ、あのまま霧島がお前にだけなつきまわってきたとする。まあ次期生徒会長様だ、へまはそうそうしないだろう。だがもしそこでだ、突然お前のことが嫌いになっちまってつとんげんな態度をとり始めたとする。こんな奴になぜ熱上げてたんだろ俺ってばかみたいとかいって無視したりするかもしれねえぞ、そんなとき」

「たぶん、そうなります。だからそれが『時間が解決』です」

繰り返した。何度も考えたことだった。

「霧島も落ち着けば、もっと自分にふさわしい友だちなり先輩なり選びますよ。その過渡期にたまたま俺がいただけですから」

「ほお、じゃああっさり手放せるか？ せっかく友だちになれたかわいい後輩を」

「向こうが決めることだししょうがないことです」

「顔に書いてるって今朝から何度繰り返してるんだっての！ あのな、そこなんだよ立村。お前な、いつも自分はなんとかなる、たいしたことないって思い込もうとしてるだろ。友だちなんかいなくてもひとりで生きていけるとか、かっこつけていただけろ？ それがどうだ、実際は耐えられなくてすっきりいじけてしまうわなんだで、どんだけ俺に迷惑かけてきたんだ。俺相手ではよかったな、他の奴だったら半殺しいされるぞ」

本条先輩は積み重なっている雑誌を指で大まかにつまんでめくった。マイコン雑誌の一種らしいが、本条先輩の作品が載っているタイプの本とは違って、もっと文字が細かく、専門書めいた雰囲気をする分厚いものだった。A4版のマガジンタイプだ。

「これな、狩野先生が『機械語』とか言ってただろ、これだよ」

二文字ずつ、数字、もしくはアルファベットがずらりと何十ページにも渡って掲載されえいる。プログラムらしいことはうすうす感じるが、今まで本条先輩が見せてくれたものとは違う。少なくとも「BASIC」というものは「PRINT」とか「LINE」「COLOR」などと英語で意味がわかる言葉が並んでいた。「機械語」とかいうものは全く、その意味となるヒントすら得られない。

「これを全部打ち込むと、めちゃくちゃ手の込んだアドベンチャーゲームが楽しめるはず、なんだが、さすがに打ち込む根性は俺になかった」

「こんな細かい字、打ち込むなんて無理ですよ。俺だって絶対に」

「いや、でもスピードは断然BASICよか早い。時代はこっちに来ているんだ。だがまあ、打ち込んでみると気もめいるわ、それに全部打ち込んでさてENTERとか押すと、一気に暴走し

始めてしまって、気がつけば全部プログラムが消えているという悲劇が待ち構えているというわけなんだ。お前わかる？ この不毛を」

「なんとなく」

薄い社会の副読本くらいの熱さだ。ページ一面にびっちりその機械語だかが並んでいる。最後まで全部打ち込んだことだけでも本条先輩は賞賛されるべきだと思う。

「そうだろ、つまりそういうことなんだよお前の面倒見てると」

「俺と？ なんで？」

上総が問い返すと、本条先輩はため息を吐いた。

「全部間違いなく打ち込んだと思っていた。完璧なプログラミングだと自己自賛していた。たぶんこれで世界をあっという間に驚かせる魅惑のオープニングが現れるとわくわくしていたわけだ。ところが実行してみたら、とんでもない方向にプログラムが動き出してしまい、気がつけばプログラムごとぶっ飛んだ始末。それでもテープにロードしとけばまだしも、それする前に実行しちまったらもう打つ手なし」

「確かに大変ですね。打ち直したんですか？」

今度は本気で頭をぐりぐりやられた。片手で頭を押さえつけられ丸めた本でごりごりと。

「気づけよいい加減。俺はまだいい。こうやって毎回毎回打ち込み直せるだけの余裕もある、我が愛機も熱が下がればまたいい仕事してくれる。でもお前、それできるか？ 手間かけて一生懸命打ち込んで、気がつけば暴走されて。またやり直すだけの根性あるか？ めげずにいられるか？ 先生たち心配してるのそこなわけ。また前のように、そのまましずんで立ち直れなくなるんじゃあねえかって、そればっか気にしてるってわけ。わかるだろそのくらい、わからないとまらずいぞそろそろ」

その後で、またページを指でなぞりながら、

「俺の見た感じじゃあのキリオの奴、プログラムにとてつもない大バグが隠れてるぞ。打ち込んで実行して、その後暴走するだけじゃあすまねえぞ。マイコン側にも、再起不能のダメージ残したらどうするんだいったいな」

里理さんはまだ帰ってこない。

「珍しいなああいつ。またその辺ほつつきあるいてやがるのかよ」

「そりゃあ夏休みですから用事あるに決まっています」

「あいつが帰ってこねえと、食べ物作らねばなんねえだろ」

「材料あれば俺が作りますけど」

「めんどくせえ」

飲み物ばかり消費しているせいか、まだ食欲はない。五時半過ぎか。何時までいようか考えた。一応父には、帰りが遅くなる旨伝えてはある。本条先輩宅とも伝えてある。

「今日は泊まっていかなえのかよ」

「明日予定あるので無理です」

もちろん夜通し語りたいたことは山々あるけれども、杉本と会う以上は仕方ない。

「あっそか、そういうことな」

特に何か言ったわけでもないのだが、合点した風に本条先輩は頷いた。

「あの後、お前ら進展あったのか？」

珍しいことだった。本条先輩から杉本のことを振ってくるのは。

——どうした風の吹き回しなんだろ。

本条先輩は上総と杉本梨南がどういつながりかを正確には把握していないだろう。あの冬の日にとことん語り合ってから、本条先輩の方から杉本梨南の話を持ち出すことはなくなった。あえて触れないようにしてくれたのだろうとは思う。ただ、先生たちとの会話を思い出すとそれなりに、様子見はしていたのかもしれない。天羽、難波、更科の三人からもしかしたら例の事件も耳にしている可能性だってある。さらに言うなら新井林から杉本梨南を踏み潰した旨の勝利報告を受けているかもしれない。なによりも本条先輩は杉本タイプの女子があまり好みではなさそうだ。

「何も、ないです。どうしてですか」

「気づかねえわけねえだろ」

本条先輩は足を伸ばして机の脚に持たれた。右手で上総を呼ぶようなしぐさをする。すぐによっていくと、そこに座るよう床を叩いて指示された。

「あの三羽烏に愚痴られてみる。またお前何かやらかしたのかとひやひやするじゃあねえか。

おい、今度はあの子、何やらかした」

「やらかしてなんかないですよ。誤解されてるんはいつものことだし。今日の話聞いただけでもそうですよ。杉本が何かよかれと思ってすることが、実は全部裏目に出ているだけです。どうせ明日話を聞きますってさっき俺言いましたよね」

「ああ、教師専用語でだな。だがここは俺ん家だ」

肩をがっしり掴まれた。

「逃げられると思うなよ。お前が考えていることのほとんどは悪いが全部お見通しなんだ。俺には強力な青大附高のネットワークがあるんでな。これから全部俺の知ってることを並べて立ててやるから、反論あるなら言ってみろ」

——本条先輩、いつものやり方だよそれ。

やはりどこからか情報は把握していたのだろう。この点、上総の読みは当たっていた。また上総が杉本梨南に引きずられて足を踏みはずすんじゃないかとひやひやしていたのだろうか。もっともそれは心配御無用。すでに上総の居場所は野にあるわけだ。

「修学旅行の話、と聞けばお前わかるだろ？」

だらだら演説されるかと思いきや、実は一言。

「修学旅行、ですか、それ、知りません」

「わかったわかった、誰かの寝小便の話と言ってもわからんか」

「そんな噂話、知ったことじゃありません」

「ふうんそうか、ついでに言うとその犯人をつるし上げるため、一肌脱いだらしいという噂をちらと耳にしたんだが、それも知らぬ存ぜぬ通すのか？」

「人前で服を脱ぐなんて趣味はどこかの誰かと違ってありません」

「面白くもねえギャグ言うんじゃないやねえ。で、その結果、どこかの巨乳ちゃんは生徒会の天敵たちに土下座させて大勝利と聞いたんだが、果たしてどこまで本当なのかな」

——大勝利じゃないよ。

「一言抗議させてください。その、変な呼び方やめてください」

「褒めてるんだろ、そうそう乳ってでかくなならないもんなんだぞ。よっぽどもむか女性ホルモン満々に育てないと」

まずいこれは本条先輩の挑発だ。ひっかかってなるものか。

「はっきり言えばいいじゃないですか。杉本のことだって」

こちらも喧嘩腰にならざるを得ない。

「確かに一時期、ありもしない噂が流れていたことはありました。俺なりに調べたこともありました。でも、結局根も葉もない噂なのであっさり消えましたよ」

学校側の姑息な手段についてはあえて何も言わない。これこそ実体のない情報に振り回されたくはない。

「ほお、さすがによくわかってるな。今日は俺としてはお前、褒めるつもりでいたんだがな。天羽がびっくりしてたぞ、立村が中学に乗り込んで行って、ギャラリーが取り囲むなか、杉本が冤罪だってことを断言したってな。それに答えた杉本もなかなか腹が据わっているし、立村もさすが伊達に前期評議委員長やってたわけじゃねえんだなってしみじみ語ってたぞ」

「別に、狙ったわけじゃないんですけど」

不意を突かれたような気がする。てっきり杉本梨南の濡れ衣を信じきった本条先輩がいきなりからかってくるんじゃないかと読んでいたからなおさらだ。何でいきなり「褒めてやる」なんだろう。目的が読めない。

「その後、なんでも藤沖がお前に頭を下げていたとも聞いたが、それも知らん存ぜぬで通せるのかな」

「同じ英語科ですから、話はしますよ」

もっとも立場が逆転した以上、上総の方からこれ以上歩み寄る気持ちはない。杉本に対して汚名を着せて自分の彼女を守ろうとするあの姑息なやり方を誰が許せるか。

「その結果、杉本は自分から噛み付いたりせずむしろ、冷静に流し、その結果として無実をあっさり証明してしまったというハッピーエンドと聞いたんだが、どうなんだ」

「ハッピーエンドじゃないです。絶対に」

「それはなんでだ？」

本条先輩の突っ込み。自分でも油断していた。まずいまずい。

「理由なんてありませんけど、そんなみっともない噂流されて、冤罪だったとしても傷つかないわけじゃないですし。杉本は傷ついたと思います」

「まあ、おねしょの犯人なんて言われたらそりゃあ死にたくなるわな」

本条先輩はさらりと流した。突っ込んでこなかった。

——でもどうということなんだろう。天羽たちもそれじゃ、杉本が濡れ衣着せられてるってことでもって本条先輩に報告したというわけか。

上総だけの先輩というわけではない。天羽も、難波も、更科ももちろん本条先輩の後輩だ。それなりにご注進しているのだろう。ただ思ったよりも杉本寄りの情報だったことに、正直動揺を隠せない。上総の認識だと、杉本は渋谷名美子のしでかしたことについて一切拒否も肯定もしないといった形で終わらせたはずだ。条件が、佐賀はるみ生徒会長に謝らせること。あまりにもあっさりした見返りに怒りすら覚えたものだった。しかし杉本は納得して、今も楽しく桜田愛子たちと勉強会だかなんだかしているはずだ。杉本の立場はどんどん泥沼に落ちていっているだけのような気がするのだが。

「お前はてっきりバッドエンドだと思って落ち込んでるかもしれねえがな。これは素直に杉本を褒めてやれよ。見事な演出力だったぞ」

「何が演出ですか。周りからさんざん嘘八百言うように追い詰められて、結局罪をかぶるはめになってしまって、逃げ場なくなってしまうってどうするんですか」

「ってことは、誰かから頼まれたりしたのかよ。ははん、そう考えると話が通るぞ」

「先輩、何をどんな風に聞いてたんですか。いきなり杉本を褒めるなんて、気持ち悪すぎます。杉本をあんなに罵倒してたくせに」

「いやいや、よく聞けよ。ただその前にだ。今俺が話したことはすべて事実と認めるんだな？ そうだろ」

すばやく考えて判断した。幸い、要の部分はばれていないと見た。

「俺の知る限りはほぼ事実です。ただ杉本がハッピーエンドだってことだけは、断固として拒否します」

力なく答えてしまった。本条先輩の、肩に置かれた手の重さにはかなわない。

「よしよしわかった。今から説明してやっから待ってろ」

肩をそのままぼんぼん叩いてくれた。

「お前が意地になって杉本をかばうためつつ走らなかったのはよかった。今までのお前だったら教師連中に抗議するとか、生徒会長の男関係をばらすとか、そっち方面に走っていただろうしな。ふだんはそんなことしなくとも、杉本に対してだけはお前人格変わるの俺も重々承知してる。よくがまんした、それは偉いぞ」

「褒められても別に」

「いいから受け取っとけ。それともうひとつ。お前、あえて杉本のやりたいようにやらせただろ。あれがよかった」

「何が、ですか」

全く言っている意味が分からない。本条先輩の方が熱暴走してしまってマイコン同様止まってしまったんじゃないだろうか。

「お前はとことん杉本の保護者になりきって、あくせく世話を焼きながら様子を伺っていただろ。中学の問題だってのもあるし、お前も高校からだそう杉本に張り付くわけにもいかないだろうし、それはそれで当然だと思うがな。最後に決着をつけたのは杉本ひとりであって、お前は無理に援護射撃をしなかった。あの化け猫生徒会長に何か突きつけてやりたかったかもしれないががまんした。その結果、想像以上の成果を挙げたというわけだ」

「成果でもなんでもありません。現に杉本は今だに濡れ衣かけられてますし」

「それ、どのぐらいの奴が信じると思うか？ あんなに堂々とした奴に、そんな姑息な噂があっても信じられると思うか？」

本条先輩は語りかけてきた。目を向けずに、真正面を向いたまま。

「今までお前のやり方は、杉本かわいさのあまりにさんざん引きずり回してその結果、あんまりいいものではなかったんだ。それは自分でもわかってるだろ？ 評議委員長に指名するとか予告しておいて結局新井林に切り替えたりとか、交流サークル作るとか言ってたら先手取られてE組送りにされちゃったりとか。お前が一生懸命なのは俺が一番よく知ってる。けどな、お前が先頭に立てば立つほど、裏目になることもあるんだよ」

「わかっています。だから評議委員長落とされましたし」

「そんな昔のことまだいじけてるんじゃないやねえよ。ああまだガキだよこいつ。あのな、俺が言いたいのはお前の戦法がどちらかというと『アドベンチャーゲーム』タイプだってこと。俺は青大附中時代とことん『シューティングゲーム』タイプだったからその差がはっきりわかるわけなんだがな。俺のやり方をまねていたのはまあ当然とこっちや当然だし今更言ってもしょうがねえけど、お前はむしろ『アドベンチャーゲーム』のようにゆっくり少しずつ、単語を入力して先、先と進んでいく方が向いているんだよ」

「アドベンチャーゲームって、英語ですべて選択肢が用意されているあれですか」

「そうだ。まだ日本ではどこまで人気出るかわからねえがな。ただこれから先、日本語入力

がちゃっちゃとできるようになったり挿絵とかがグラフィックで入れられるようになるとまた変わってくかもしれないなあ。立村、お前はまだ、主流じゃねえかもしれないけどな、自分の得意技はここでしっかり掴んだだろ？ お前はわしがわしがと前に出るよりも、陰で静かにサポートして、相手を動かしていく方が絶対向いている。それ、覚えとけ。こんな見事な成功例、めったに経験することなんてないんだからな。忘れるなよ」

頭をわしわしとつかみ、ぐりぐりされた。

「先輩、痛いですって」

「いや、まじで祝杯挙げたい気分だわな。よし、今日はせっかくだしお前なんか食い物作れ」

「え？」

さっき露骨に面倒くさそうなこと言っていたくせに何を。こちらも迷惑そうに覗き込むと、

「スープのもとと牛乳、あと鶏肉くらいは冷蔵庫にたしかあったぞ」

——結局、ここでも料理させられるのかよ。

上総は立ち上がり、台所の冷蔵庫の前にしゃがみこみ、まずは中を確認することにした。やつれた葱とブロッコリー、じゃがいももある。冷たい野菜スープにしてみよう。

空腹に耐えかねた本条先輩の強い要求もあって、結局ジャガイモとブロッコリーに鶏肉を軽く合えたホットスープで仲良く夕食を摂った。途中仲間入りした里理さんも加えて、片付けやらなんやら、テレビを眺めながら語り合っているうちに電話のベルが鳴った。本条先輩宅は、黒電話がしっかり仕事をしている。

「なんだろうね、新聞の集金かな」

色白でどうみても本条先輩のひとつ上兄貴とは思えない里理さん。すぐに受話器を取った。

「はい、本条ですが、はい、あ、どうも、初めまして、あ、こちらこそお世話になってます」

いきなり舌をかみそうな顔して、ぺこぺこおじぎをしている。

「うちの関係かあ？」

本条先輩が声を掛ける。里理さんは手を振って否定の意を送る。上総をちらと見ながら、

「あ、います、あ、いらしてます。代わりましょうか」

上総も自分を指差して、里理さんに確認してみる。目と目が合いその通りと納得する。受話口を手で覆って差し出しながら、

「立村くんのお父さんからみたいだよ。緊急の用みたい」

「ありがとうございます」

なんとなくいやな予感がする。今まで友だちの家に泊りがけで出かけた時も、ほとんどの場合父が電話をかけてくることはなかった。それが今日に限って。母がまた、予告なしに襲来して上総を呼び戻せと叫んでいるのだろうか。確かにそれは緊急事態かもしれない。

「もしもし」

「上総か、いたのか」

のんびりした口調の父、この調子だとたぶん母の襲来はなさそうだ。胸、なでおろす。

「今朝、話した通りだし。どうしたの」

「帰りは何時くらいなんだ？」

「たぶん、十時前にはうちにつくと思う。自転車で帰るし」

「遅いな。夜道だしあぶないぞ」

「今から帰ったって同じくらいに着くよ」

本当はもう少しごろごろしていたかった。明日の予定さえなければ泊まりこみたいところだった。さすがに杉本と会うことを考えるとあきらめざるを得ないのが辛いところでもある。

「いやな、実はな」

父は言いづらそうに切り出した。

「さっきからお前の友だちから三回くらい電話がかかってきているんだ」

「電話？」

様子を伺っている本条先輩と目が合ってしまう。

「そうなんだ。お前の後輩とか言ってたがな」

「後輩？」」

思い当たる節、おおいにあり。

「霧島くんと名乗っていたよ。なんでもお前にどうしても相談したことがあるそうで、何時でもいいから連絡をよこしてほしいとのことだった」

「そのことで三回もかかってきたの？」

今は七時半。霧島には十時くらいまで帰らないと話したはずなのに。もっとも十時以降に電話するのはやはり常識的に気が退ける。明日の朝にでも連絡するつもりでいた。

父はため息を吐いている様子だ。

「三十分のうちに三回というのは、相当な緊急の事情だろうな」

——霧島、いったい何考えてるんだ……。

「それもあるし、せっかくお友だちの家でゆっくりしている時に申し訳ないんだが、早くうちからかけ直してあげたほうがいいんじゃないかと思ったわけなんだ」

「今から帰ってもどちらにしても九時近くだけど」

腰が重たい。動きたくない。よりによってあの霧島にまた引きずり回されたくない。本条先輩の側で甘たれていたい。本条先輩のマイコンだかなんだかの本いじっていたい。

「ああ、それは大丈夫だ。父さんが迎えに行く。車だとすぐだからな」

「でも父さん、今俺いるところ、住所分かるのかな」

本条先輩の住所まではさすがに教えていなかったような気がするが。

「それもな、その、霧島くんから教えてもらったよ」

父はあっさり答えた。

「必要であればお前を迎えに行くから、本条くんの住所知らないかと彼に冗談で聞いてみたんだ。そうしたら、本気で彼が食いついてきて、わざわざ確認して住所を教えてくれたよ。場所はだいたいわかる。着いたらクラクション鳴らすから降りてきなさい。うちの車ならエンジンの音でもだいたいわかるだろう？」

——霧島、なんで本条先輩の住所、知ってるんだろう？ これも生徒会役員の特権なんていわないよな。

卒業生の現住所まで即、取り出せる情報力、恐ろしいものがある。上総は本条先輩の部屋であけたままの網戸を眺めた。もしかしたら、いやそんなことはないと思いたい、霧島の奴、ここまで追いかけてくるなんてことはないだろうか。

「わかった。待ってるから」

あきらめるしかない。弟の時間もあとわずか。上総は静かに受話器を置いた。

「さあ、どうした、お前の父さんか？」

「やさしそうな人だねえ」

本条兄弟にそれぞれ話しかけられ、上総はまずうなだれた。呼吸を整えて、

「あと三十分くらいで帰ります。父が車で迎えに来てくれるそうなので」

「いつもより早くねえか？ いくら杉本と明日デートでもそりゃねえだろ」

「そうだよ立村くん、里希がどれだけ楽しみにしてたか」

「黙れ里理。それより、何か面倒くさそうな事情がありそうだな。隠すなよ、言ってみろ」

隠す必要もない。なにせ本条先輩は現場にいたのだから。上総は食べ終えた皿を全部重ねて台所に持っていった。本条兄弟はどちらも手伝おうとしない。あとで洗うつもりなのだろうが上総としてはやはり落ち着かない。さっさと洗剤使って洗い流し、その辺にあった汚れたふきんでぬぐっておいた。

「先輩のご想像通りです。呼び出しがかかりました」

「呼び出しだと？」

「相撲みたいだねえ」

全く関係ない突っ込みは里理さん。本条先輩の目つきが本気で怖い。言葉を選ばねば。

「まさか、と思いたいんだが、そのまさかなのか」

「ご想像通りです」

ゆっくり、目を合わせず、答えるのみ。

本条先輩が諸事情を里理さんに、きわめて簡潔に説明している間、上総はひたすらテレビにかじりついていた。今はやりのベストテン番組。上総があまり知らない日本の歌謡曲ばかりが流れている。羽飛貴史最愛の鈴蘭優もランクインしていた。日本少女宮が新曲スポットライトに登場していた。

「立村くんもそれは大変だね。面倒な子になつかれちゃったね」

「そうだろそうだろ？ 俺もまじおったまげたわ。あのめそめそ泣いてばかりいたあいつがやっという兄貴分になれそうで、成長したもんだとしみじみしてたんだが、その弟分がなんだよ、あの、狐面した、えせ優等生野郎ときたもんだ」

知るか。テレビのボリュームを大きくしてやった。鈴蘭優と日本少女宮のリーダーが仲良くトークを交わしていた。羽飛と結城先輩が語り合っているも同様に見える。

「ま、俺の苦勞を学ぶチャンスと思って突き飛ばすことにするか」

「でもね、里希、僕からすると少し心配だねえ」

無視し続ける上総をよそに、本条兄弟はまだ語り続ける。特に里理さんの語りが熱い。頼んでもいないのに耳に飛び込んでくる。

「だって、その彼は、立村くんを一種の偶像崇拜みたいにしてているわけだよ。本人は意識しているかわからないけどね。でもそれってアイドルにあこがれるファンと一緒に、熱が冷めたらひどいもんだよ。うっかり誰かと付き合っていることがばれたら手の平返したように冷たくなるし、かわいさあまって憎さ百倍になってしまう可能性だってある。立村くんもその子には気をつけたほうがいいよ」

——気をつけたくたってもう行き着くしかないんだ。

やるべきことはしたし予防策も打った。それでもこうなった。これが現実なのだ。今日も先生たちから、本条先輩から、いろいろ助言をいただいたけれどもどうしようもないと今はあきらめている。里理さんの言う通りだろう。あれだけべったりしてきた霧島も、時間が来ればすぐに離

れていく。上総に失望して、以前と同様に「あの出来損ない元評議委員長」として軽蔑するに決まっている。それまでの短い間だけなのだ。だったら、その時だけは希望に答えてもいいだろう。そう今だけは。

テレビの音量より低い、聞きなれたエンジン音がかすかに砂利道をこすのと一緒に響き渡る。本条先輩のアパート脇には車一台片道通行できるだけの通路が用意されていて、そこには砂利が退いてある。上総は立ち上がった。荷物はかばんひとつだけ。忘れ物はない。

「本条先輩、お邪魔しました。また、連絡します。今度は泊まらせてください」

「できるだけ早くな。お盆前にはもっかい来いよ。まだ聞き足りねえことあるんだからな」

事情が事情なので本条先輩も今回は引き止めなかった。里理さんも、「立村くんの料理はおいしかったよ。今度は一緒においしいものの作り方教えてもらえると助かるよ」

本条先輩との生活はあまり、食生活が豊かでなさそうだとということだけは把握した。

一礼して靴を履き、すぐに階段から駆け下りた。暗闇にヘッドライトだけが煌々と灯っている。なだらかなフォルム、父の車とすぐにわかる。

父は運転席から出てこなかった。助手席に乗り込み、シートベルトを手探りし、

「ごめんなさい」

一言だけ伝えた。

「まだビール飲む前だったからな。たいしたことじゃない」

——母さんいなくてほんとよかった。

父とだと、この一言で終わらせられる。もし母が相手だったらどうなっているか考えたくもない。おそらく、霧島の猫かぶり態度は好感持って受け止めるかもしれない。感じのよいお坊ちゃんと都合よく勘違いしてくれるかもしれない。しかし、そのお坊ちゃまがあわてて電話をしてくるというのに、我が家のどら息子は不良先輩宅に転がりこんでマイコンだかなんだかで遊んでいるときたら、追求されないわけがない。

「ここに住んでいるのがお前の先輩だろう？ お兄さんと二人、か」

「本条先輩は四人兄弟で、すぐ上のお兄さんと暮らしてるんだ」

話したことはなかった。まだ車の中のライトがついていないせいか、自然と口に出た。父もいったんエンジンを切っている。省エネルギー意識だろう。

「そうか、お前の一番頼りにしている先輩だと、先生たちが教えてくれたが。何して遊んでたんだ？」

「しゃべってただけ。何も悪いことしてないよ」

杉本の話も頭に残っているせいか、つい用心深くなる。

「先輩が持ってるコンピューター見せてもらおうとか、雑誌見せてもらったりとか、それだけ。それから食事作って食べた」

「一緒に作ったのか？」

「作ったのは俺ひとり。野菜とじゃがいものスープ作って食べただけ」

事実だけ伝えた。父は声を上げて笑った。窓を開けた。
「この分だとクーラーかけなくてもいいな。さあ行くか」
改めてエンジンを入れ、父は改めてハンドルを握り直した。

階段をけたたましい音立てて降りてくる気配がする。上総は窓から顔を出した。あの足音の響きは一人しかいない。

「ちょっと待ってて」

降りる前に扉へ張り付いたのはやはり、その人だった。

「間に合ったか。あのな、これやる。お前も読んどけよ」

本条先輩が大判の封筒を抱えて駆け下りてきた。父の存在に気づいたのか、すぐ運転席まで回り、

「いつも上総くんにはお世話になっています。本条と申します」

いきなりきりっとした礼をした。銀縁めがねをかけていると本条先輩は、高校生以上にどうしても見える。しかもきちんとジャケットまで羽織ってきている。暑いのに。

父もぎょっとしたようだがすぐに気を取り直し、

「いや、こちらこそ。上総のことをいつもかわいがってくれているとかねがね聞いていましたよ。本当にありがとう。今度ゆっくり、うちに泊まりにおいで。ご存知の通り食べ物は上総に作らせるから、ゆっくりできますよ」

——完全に父さんも俺を、料理人扱いしているよな。それと頼むから、俺のこと名前で呼ぶなよ。それと、本条先輩も、いいじゃないかよ苗字で。俺には立村っていう正式な苗字があるんだからさ。

身体をかきむしりたい。このまま車のボンネットにもぐりこみたい。顔を伏せるにしても本条先輩に父の前でどやされそうなので避けたい。

「あ、それとだ」

今度はすぐ、上総のいる助手席に回ってきた。敏捷すぎる。

「永久保存版だからな。心して受け取れよ」

にやと笑って、軽く手を振り、階段の下で待機した。見送ってくれるらしい。

「先輩、ありがとうございます。あのこれって」

「感想はあとで言えよ、じゃな」

上総が次の言葉を口にする前に、父がアクセルを踏んでいた。砂利道を出て行くと同時に本条先輩の姿も見えなくなった。

封筒の中を覗き込む。

——ミスター・パーフェクト本条氏特集のあれかな。

さっき見せてもらった特集号と同じ内容らしいが、表紙は全く折れてない。

——バックナンバーかな。

取り出して見る。暗くて文字もプログラムも見えない。

「目が悪くなるから、うちに帰ってからにきなさい」

父に注意され、黙って袋にしまう。窓の外を眺めた。青濁の、料亭が立ち並ぶ温泉街を通り抜ける。橙色の灯りが軒下にたくさん並んでいる。たしかこの中のどこかに花森なつめが住み込んでいるはずと聞いた。

「お前に兄弟作ってやればよかったな」

不意に父が、信号で停まる直前につぶやいた。

家に到着し、車から先に降りて居間に飛び込み、受話器を握り締めた。電話番号はまだ覚えていない。部屋に戻って手帳を取り出して探す。霧島の電話番号はまだ手帳のアドレス帳に書き込んでいない。電話もそうそうする機会なし。向こうからかかってくるばかりだったからつい忘れていた。

車庫から戻ってきた父とすれ違い、受話器に手を伸ばそうとしたら、タイミングよく呼び出し音が鳴る。待ってたかのようにだ。よく見ると留守録も入っている様子。

——先輩、遅かったですね。

開口一番これである。昼間に聞いたどこぞの貴公子らしく優雅に振舞うその姿。

「遅いも何も、まだ八時半だぞ。いったいどうしたんだよ」

——本条先輩のお宅にいらしたのですか。

ここは一発きつく文句を言うておくほうがよさそうだ。勢いで放つ。

「話したる、今日は十時過ぎまで戻れないかもしれないって。別にお前が話したいその、ビデオ演劇のこととかは明日以降でも問題ないことだろ。そんなに急ぐ用件なのか？」

——当たり前です。立村先輩、これから僕にひれ伏すほど感謝しますよきっと。

余裕たっぷりに微笑む様子が伺える。全く動じない。

——杉本先輩の進学先に関する詳細情報で、新しい噂を本日入手してまいりました。立村先輩ならきってお聞きになりたいであろうと思って、即刻連絡させていただいたのですがいかがですか。

「杉本の進学先？」

本当だったら「ざけんなよ！ そんなの明日杉本とたっぷり話すから聞く気もねえよ」くらい怒鳴ってやりたいのだが、やはり気になってしまう自分の気の弱さよ。父が居間にでんと座って上総のおろおろしている様子を伺っている。母がいないのが救いだが、たぶん録画中継ということであっさり情報が流れるだろう。ああいやだいやだ。；

——ですよね、お聞きになりだいですよね。ではお話します。それと立村先輩、本条先輩に僕のあることないことを吹き込むのは控えていただけますか？

「吹き込んでないよ。むしろ褒めていると思うよ」

——それは光栄です。

いったいなんだろう。霧島と話をしていると、とことん相手の思う壺にはまっているような気がする。本条先輩も、先生たちも、上総のことを心配してくれるのは力関係が明らかに逆転しているかのように見えるからだろう。

——実は、今日先輩たちと別れて生徒会室で、佐賀先輩とお話をしたのです。先ほど申しましたとおり、生徒会もそれなりに準備があります。ビデオ演劇にとどまらずいろいろとです。

「そうなのか」

さぞ、最愛のマドンナ佐賀はるみ生徒会長にとことん尽くしてきたであろう。どんな美辞麗句

を並べ立てたのか。さて青大附中の王子様は何を聞きだしたのか。わざと興味ない振りしてやる。

「それはよかったな、お前も満足しただろ」

——立村先輩いいのですか、そんなにあっさり流しておいて。杉本先輩のことなのですよ、お分かりですか。

「だから、何が」

——杉本先輩の進学先の件ですよ。昨日僕が「なずな女学院」が候補に挙がっているとお伝えしましたが、かなりの信憑性を持っているようです。佐賀先輩がそのようにおっしゃってましたからね。

「佐賀さんが？」

少し、ぴくり、こめかみが動く。

不思議ではない。もともと佐賀はるみは杉本梨南の元親友であるし、自宅も近所だ。ある意味村八分とされている杉本梨南の家庭が助けを求めている時に、すっと入り込める距離ではあるけれども。ただ、現在はすっぱり縁が切れているはずだ。そんな情報入るほどあのふたりが親しいとは思えない。

——お住まいがお近くなので、お母様の関係でいろいろと情報は入るようですね。また、小学校時代の同級生たちや担任の先生とも交流なさってらっしゃるようで、想像以上に濃い内容を耳にしていらっしゃるようです。

わざともってまわったような言い方をする霧島。たぶん、上総をじらすためだ。

「そうなんだ、知らなかったよ」

——本当にご存じなかったのですか？ 佐賀先輩のお話ですと先日、小学校の同窓会が行われたそうで、その時にいろいろと確認なさったそうです。なんでも殿池先生がわざわざその先生にまで挨拶に行かれたそうで、全部筒抜けだったそうですよ。

「それ、はっきり言ってまずくないか」

思ったことのみははっきり言う。

「どう考えても機密事項だと思うんだけどな。小学校の担任の先生が、話したってことだろ。へたしたらつかまるよ」

——あくまでも、噂です。あとは立村先輩のご判断です。

じっと黙る霧島。じりじりさせるつもりだ、手の平に汗がにじむ。父が夕刊を広げてわざわざビールを用意して一人で飲んでいる。頼むから食堂行けと言いたい。

「わかったよ、教えてもらえるか」

——やはりそうですね、お話いたします。

勝ち誇っている、反り返っている、もう勝手にすればいい。どうせ霧島がとりつかれたかのようにしつこく電話をかけてくるのも、わざとらしくこっち見てコールをしてみせるのも、一過性のものだから。秋になればすぐに消える。

——佐賀先輩や新井林先輩など参加なさったそうですが、当然のことながら杉本先輩はいら

っしゃいませんでした。当然のことでしょう。なかなか団結力の強いクラスだったそうで、ほぼ全員の参加だったようです。

杉本梨南のみ欠席だから「ほぼ全員」なのか。思い切り「ふうん」の一言だ。

——そこでいろいろとその担任教師は、殿池先生経由で杉本先輩に対して何を聞かれたかを生徒たちの前で洗いざらいお話をさしたそうです。立村先輩のおっしゃる通り、機密の問題もありますね。もっともその担任は、すでに二年前、退職なさってらっしゃるようなのであくまでも一般人としての認識だそうです。

「人間としてどうかと思うよ。杉本でなくても絶対言っちゃいけないことだし」

——人間性云々はともかく、その先生がおっしゃるには。

またいやな間を取って、霧島は語る。

——青大附属高校に絶対進学させたくないって力入れているんだってと大笑いさしたそうです。しかも、「なずな女学院」の噂たるやすごいいいものでした。

「この前お前言っていた学校か」

——そうです。「なずな女学院」は一言で片付けるならば「花嫁学校」、それも、あまりにも古風な「良妻賢母」育成のための全寮制女子高校と判明いたしました。校名が知られていないのも当然のことです。最近開校したばかりとうかがっております。計算からいくと、来年の入学生が第一期生だそうです。

「そんな学校知らないよな。それとも公立の生徒たちは聞いているのかな」

——青潟から百キロも離れているので、そもそも学区が違います。また、私立高校であればさまざまな地域から留学生も来るでしょう。杉本先輩だけではないと思われます。

霧島はそこまで教師のごとくさらさら述べた。

「そうなんだそれで」

——まず、殿池先生が挨拶にいらして、杉本先輩についての印象を確認された時に、その小学校時代の担任は語ったそうです。彼女は良妻賢母型の学校の方が幸せになれるのではないかと。男子と張り合ってレベルの高い学校で戦っていくよりも、むしろお嬢様学校でお裁縫やお茶お花をたしなみながら、よいところへお嫁に行くのが一番幸せなタイプではないかということです。

「ちょっと待てよ。それ、杉本の小学校の担任の話なのか？ 本当にそんなこと言ったのかよ！」

ひどすぎる。怒鳴ってもいいくらいだが父がビールを片手に目を光らせている以上何もできない。てっきり昨日の話では殿池先生の先走りだと思っていたのだが、裏には裏がいたというわけか。

——佐賀先輩が仰るにはその通りだそうです。ついでに、佐賀先輩については「彼女は本来もっとリーダーシップをとって活躍できるタイプの子だったが、杉本先輩がいたためにスポイルされ続けてきた。生徒会長として立ったことはむしろ遅すぎるくらいだ」とも。さすがその点を見る目がおありのようです。そう考えると杉本先輩に対して評した言葉も、まんざら嘘ではないのでしょうか。

「霧島、ここから先、下手なこと言ったら電話切るからな。それで」

——失礼いたしました。そこで、杉本先輩にお勧めの学校の話で盛り上がったらしく、流れで出てきたのが例の「なずな女学院」です。社会から切り離れたある意味温室に七年間押し込んでおいて、そこで完璧な主婦を作り出すのが目的の学校とのこと。

「完璧な主婦だって？ 杉本に絶対合わないだろ。飛び出すよ。絶対に」

——誰もがそうお思いでしょう。ところが佐賀先輩は納得なさってました。むしろ、杉本先輩は男子と張り合うよりも、中のよい女子たちと静かに手芸をしている方が幸せになれるとつぶやいておられました。僕も立村先輩のために、もう少し確認をしておかねばと思ひましていくつか質問をいたしました。

「俺のため？ ああいいよ、なんでも」

——そうです。そうでもしなければ立村先輩はお気づきになどなりませんから。そうしたら、佐賀先輩は少しお考えになった後、僕の姉に触れました。あの救いようのない馬鹿姉が、自分のレベルにふさわしい女子刑務所高校に進学したところ、すっかりおとなしいペットと化したことを例にとり、むしろ杉本先輩もそのように飼いならされる方が幸せなのではないかとおっしゃってました。さらに申し上げれば。いえ、やめておきましょう。

「なぜそこで止める？」

声がきりぎり苛立つ。部屋の扇風機は元気に回っている。風がかすかにカーテンを揺るがす。父だけがビールを順調に消化していつている。どうでもいいがつまみはいらぬのかといたくなる。いや、すでに風呂に入ったのか聞きたい。

——絶対怒らないでいただけますか。電話切るなんてことおっしゃらないでいただけますか。

「俺が怒りそうなことなのかよ」

確実にぶち切れる内容なのだろう。一呼吸置いて約束した。

「わかった、今回に限り、何も言わない」

——かしこまりました。佐賀先輩はおっしゃったのです。

霧島は笑いを含んだ声で、

——それの方が将来、立村先輩も助かるでしょうから、と。

これは当然、怒っていい内容だと思う。

霧島がしつこく念を押して教えてくれたのも納得ではある。

怒鳴ってはいけぬ、怒ってはいけぬ、そう約束したから何も言わない。

——そうか、俺をまただしにしたという訳か。

黙りこくった上総を様子伺うように、霧島がささやきかける。

——立村先輩、どうでしょうか。

「言っただろ、俺は何も言わないって。ああそうなんだって、それだけだから」

——そうですか。それなら、突然なのですが、あさってのことなのですが。

切り替えが早すぎる。ほんの少しだけ不安げな感じだったのが、一気にひっくり返った。

——あさっての講習は高校で行われるのですか？

「ああそうだよ。数学の個人講習が二時間もある」

詳しいことを言うつもりはない。屈辱としか思えないこの内容を。

——それであれば、終わりましたら学食でお待ちしてます。さらに詳細情報ありますのでお話をいたします。それでは、失礼いたします。

いきなりのフェードアウトだった。

「上総、この前話していた後輩君か」

ただ呆然として受話器をぶら下げていた上総を、父はおかしそうに見た。

「ああ、そう」

「どういう性格の子なのかな」

鼻歌歌うみたいに探りを入れてくる父。それはそうだろう。ある程度説明しておかないと今後が心配だ。

「成績優秀で中学の生徒会長やってる。賢いことは確か」

「いや、性格について知りたいだけなんだがな。本条くんのような男気溢れるタイプなのかな、それとも、あの口調通りの気品ある性格なのかな」

何かを言わねばならなかった。何か気の聞いた言葉を出さねば。父を納得させることができるようななにかを。上総は受話器を置きなおし、両手をかけた。目を閉じた。そのまま思いついたことのみ答えた。

「俺にそっくりなことは確か」

それ以上は喉が詰まって何も言えなかった

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々（1）

セーラー襟に紺の線が入った白地のワンピース、その上に紺色の半そでニットカーディガンを羽織った姿を、青潟駅改札口前ですぐに見つけた。向こうも上総を発見したのか、ぴんと背を伸ばして丁寧に礼をしている。駆け寄った。

「おはよう、だいぶ待ったかな」

信号の不具合があったとかで、二十分ほど汽車の到着が遅れてしまった。自転車で来たほうがずっと早く着いたはず。上総の認識で間違いがなければ、最低でも三十分以上この改札で立ちっぱなしだったはずだ。

「おはようございます。三十五分ほどお待ちしておりました。ただ、駅構内でのアナウンスがございましたので、心配はしていません」

いつものようにまっすぐ抑揚のない話し方をする。ポニーテールに結い上げた髪の毛は背中につくほど。白く溜めのような光が髪全体に落ちている。真っ白い頬が少し赤らんでいるようにも見える。

「そうか、ごめんな。それなら行こうか」

「まずどちらへいらっしゃるおつもりなのですか」

「そりゃあもちろん」

青潟東高校へ、そう答えるつもりだった。上総は隣でまっすぐ前を見つめている相手に声をかけようとした。

「青潟東ですか」

「そうだよ。分かっているくせに」

「かしこまりました」

女子たちがよくしている肩から提げるポシェットに軽く触れ、財布を確認するようなしぐさをする。首をかしげて上総に問う。

「他の学校生徒が入っても支障ないのでしょうか」

「たぶん大丈夫だって本条先輩話していたけど。本条先輩が言うには、もともと青潟東は私服通学可能な学校だから他の生徒たちが入り込んでもたいてい気づかれないって」

「本当でしょうか」

「本条先輩の言うことだから、間違いはないよ、きっと」

きっぱり答えると、隣の相手はしばらく考え込んでいたが、

「かしこまりました、到着してから改めて判断いたします」

ずっと上総の隣に滑り込むと、静かな眼差しのまま側に寄り添ってくれた。駅を出てすぐ、バス停留所の行き先地図をじっくり読み込み、

「青潟東行きはこちらです」

余計なことは言わず、バスロータリーの三番乗り場へ歩き始めた。早足で姿勢よく、まっすぐに。

——なんで朝九時に待ち合わせをしようと言い出したんだろな。

霧島との電話を置いて、その後十時過ぎにいきなり杉本梨南から電話がかかってきた。杉本の方から上総にかけてくるということは、今まで一度もなかった。

——待ち合わせ時間を早めてほしい、理由はあとで説明するからとかいきなり言い出したからな。まあ早く帰っておいてよかったよ。もし本条先輩のところで油売っていて、父さんしか家にいなかったとしたらまたこれはこれで面倒だったろうしな。

早起きはいつものことだし、朝九時待ち合わせならば八時半の汽車に乗ればいいだけの話だ。たいしたことではない。上総が驚いているのはむしろ、杉本の予定変更がいきなりだったことだ。もともと杉本はいったん決めた予定をそうかんたんに動かすことがない。一度決めたことはよっぽどのことが起こらなければ決して譲らない。一度結んだ約束は絶対に守る。それが杉本梨南の性格だった。

——珍しい。何か起こるんじゃないか？

隣の杉本のつややかな髪の手を何度も見直した。レースのリボンが巻いてある小降りの麦わら帽子をかぶっている。手入れの行き届いた長い髪は先しか見えない。

「あのさ杉本」

「何か御用ですか」

杉本はバス停のベンチに腰掛けたまま、上総に顔を向けた。笑みらしきものがひとつもない、誰かをにらみつけるような眼差しのままだった。

「早く行きたい理由でもあるの」

「はい、ございます」

「昨日電話でも聞いたけど、理由教えてくれないのかな」

「深い理由はありません。その後出かけたところがございます」

ぴしゃりと答える杉本。全く動じず。

「それ、どこ？」

もちろんしつこく食い込む上総。

「今日は一日休みだと思ってたけどな。違ったのか」

「厳密にはその通りです」

杉本はあっさり認めた。腕時計を脈取る部分で確認し、
「今から青瀧東高校を見学するのであれば、どんなに時間がかかったとしても三十分程度で済むでしょう。これから来るバスが九時四十五分発ですから、十一時前には終わるはずですよ」

「それはそうだけど」

時刻表に詳しい杉本に、この点はかなわない。黙って聞く。

「先ほどのように交通機関の遅れが若干あったとしても、十一時半に駅に戻ることでさえできれば遠出はまだ可能です」

「遠出？ 場所はどこだよ」

全く聞いていないことをいきなり言われても困る。

「それほど遠い場所ではありません。汽車で二十分もかかりません。自転車であればもっと早い

でしょう」

「だから、どこだよそこ」

苛立ちつつ問い続けると、杉本はきっと上総を見据えた。

「別に先輩にご一緒していただきたい場所ではありません」

「いや、でも今日一緒に出かけるって約束しただろ？ しつこいようだけど約束だよ」

杉本が約束という言葉に弱いことを、上総は三年前から知っている。

「青潟東を見学するのももちろんだけど、俺は自分なりに杉本へ話したいこともいくつかある。時間もそれなりにかかるかなと思って、今日杉本がまるまる空いている日を選んでこうしているんだけどさ。次の予定が入っているなんて知ってたらもっと別の日にしてたよ。杉本が一日本当に暇な日をさ」

「確かにおっしゃるとおりです」

杉本は素直に認めた。珍しい。指を口元に当て、考え込むように俯いた。

「立村先輩が誤解なさるのももっともです。私ももう少し立村先輩の理解力を把握した形で、本日の予定をお伝えしておけばよかったと反省しております」

「俺の理解力っていったいなんだよ」

「はい。立村先輩は青潟東高校の見学だけが目的と思っておりました。私も一日時間が空いていることは確かですがそれなりにひとりで出かけた場所もありました」

思い切り失礼なことを言われて瞬時に落ち込んだことも、すぐ忘れた。大切な部分がある。確認したい。

「杉本、ひとりで出かけたってことに間違いないだろうな」

「言葉通りの意味です」

「誰かと会うわけじゃないんだよな。待ち合わせしているわけじゃないよな」

「はい。出かけた場所があるというだけで、どなたかと会う予定は一切ありません」

きっぱり、あっさり。あとは場所と目的だけ確認すればいい。打つ手はある。

「そうか、なら、どこで何をするつもりか聞いてもいいか」

「私に確認してどうしたいのですか」

「いや、もしよければの話だけど」

ゆっくり、ひとつ間を置く。息を止めて、すぐ進む。

「俺もついていっていいかな。あ、もちろん女子専用の場所だとか、あまり見られたくない場所とか、親戚の家とか、そういうんだったら別だけど」

あきれ果てたかのようにため息をつく杉本、ポシェットの紐を指で何度かさする。

「先輩は自由研究や勉強などなさらないのですか」

「もちろんするけど、清坂氏や羽飛と三人組でする予定だし、勉強も明日から高校で講習が始まるからその時すればいいし。今日は完全に空けているんだ」

「行き当たりばったりで着いていって楽しいことでもあるのですか」

感情のこもらない冷ややかな声で杉本が問う。答えはとっくの昔に用意されているので怖くはない。

「いや、杉本がもし見たいものやイベントとかあるんだったら、きっと俺も面白いと感じるんじゃないかなって気がしたんだ。ほら、マイセンの展示会あったら？ あの当時俺、あまり食器とか興味なかったけど、杉本と一緒に見に行ったあとからやはりうちの食器とか観察するようになったよ。詳しいことはわからないけど拘る人たちの気持ちはなんとなくああこういう感じかなって思えるようになったし」

「その節はチケットをありがとうございました」

去年の秋の話だ。父からもらったマイセン展のペアチケットを握り締め、杉本を強引に誘い...目的は別に存在したが.....ゆっくりと陶器の数々を鑑賞したものだ。美術鑑識眼には自信のない上総だが、杉本の素直な感想をひとつひとつ耳にしていくに従い、なんとなく好き嫌い程度は感じられるようになってきた。はっきり感じたのは、杉本の好みのものはおおむね上総の感覚にそぐうものであり、杉本が苦手とするデザインのもは上総も二度見したいと思えるものではなかった、という点だろうか。嘘ではない。杉本のセンスは結構自分にも似たところあるのではないだろうか。そう考えると今の、意味不明な要求もまんざら嘘ではないと思う。

「マイセンの時もそうだけど、杉本の好みって俺に近いんだよ。だから、たぶんこれから杉本が行こうとしている場所も、俺好みなんじゃないかなって気がするんだよな。これ直感でしかないんだけどさ。俺が今まで全く知らなかったところも、たぶん杉本がいいって言うんだったら、いいとこなんじゃないかなって。いわゆる自分の中の引き出しを増やしたいという気持ちかな」

しみじみ語って見る。嘘ではないが、やはり若干の脚色はある。何より目的が違う。

杉本は小首をかしげて、もう一度時計を覗き込んだ。上総も一緒に丸いアナログ形の時計盤に見入る。

「立村先輩のお宅は品山ですね」

「そうだよ」

わかりきったことを聞くものだ。

「方向が異なりますので、一度青湊に戻り、再度汽車に乗り直す必要が出てまいります。お手間がかかります」

「ということは、品山方面じゃないんだな」

「そうです。遠いわけではないのですが、立村先輩には交通費がかかりますがそれでもよろしいのですか」

「別に、泊り込むようなところじゃないんだろ」

なんとなく杉本の態度が、かつてと違い柔らかくなったような気がしてならない。今までの杉本なら「また立村先輩は変態じみたことをなさろうとするのですか。恥を知りなさい！」くらい言い放つだろう。数回上総を罵倒するやり取りが続いた後、ため息をついて受け入れる、そんな流れがほとんどだった。それが今は、すぐにため息、そしてあっさり交渉可能ステージへと上がってきている。

「はい、私も本日は五時までに自宅へ戻る予定です」

そこまで言い切り、杉本はじっと上総を見つめた。にらんではない。自然に、たとえば心を許す女子の先輩や友だちを相手にしているような眼差しだった。

「子辺の修道院へ立ち寄る予定ですが、ご興味はありますか？」

——子辺か。

夏の日差しが降り注ぐベンチで、上総は一瞬二月に見た車窓の景色を思い起こした。

白い雪粒でびっしりと埋まった、真っ白い町並みを。

甘い香りとやわらかな感触。三桜行きの鈍行汽車の中で、上総は杉本梨南の一番近い場所にいた。

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々（2）

青潟駅から鈍行列車で三十分程度。決して子辺駅は遠い場所ではない。ただ本数が一時間に一本程度、しかも毎度のことながら遅れるのが普通といったところもあって、積極的に足を運ぶ場所ではない。ただ青大附中からは少し坂道を漕いでいけば汽車よりは早くたどりつくための近道もある。

「修道院には行ったことあるの」

「小学校の遠足で一度だけ参りました」

がらがらのバスの中、一番後ろに席を陣取り、上総は杉本梨南に尋ねた。

「俺も二回くらい行ったことがあるよ。学校の遠足と、あと親に連れられて」

「確か、男子修道院ですよ」

「うん、女子修道院は青潟にもあるけれど、男子修道院というのはあまり聞いたことないな」

車内のクーラーはあまり効いていないが、窓を細く開けているのでさほど息苦しくはない。窓辺から外を見下ろした後、すぐ杉本に向き直った。

「でもなんで突然」

「深い意味はありません」

杉本は背を伸ばし、椅子に浅く腰掛け自分のポシェットを膝に載せた。

「ただ、青潟の文化や建築物に疎いまま生きていたくなくなっただけです」

大げさな言葉遣いと言われるかもしれないが、それが杉本梨南にとっての日常。

「歴史に興味があるんだ」

「そういうわけではありませんがなんとなくです。それにしても立村先輩、少ししつこすぎるのではないのでしょうか。それと、お気づきでなければもうしわけないのですが」

上総の鼻先に手を伸ばすようにして窓辺の停車ボタンを押した。赤くランプが点灯し「停車します」のマークが浮かび上がった。

「青潟東高にはここから行くほうが近いのです。降ります」

——杉本連れてきてよかったよ。

上総一人だけならば、確実に乗り過ごしていた。

十時をまだ回らない。杉本は上総が後から降りるのを待ち、さっそく指を前方に指した。

「こちらの路を通りぬけていけば舗装された路を歩くよりも早く着くはずですよ」

「近道なんて知ってるんだ」

「常識です。受験のためにすでに調べてあります」

まっすぐ歩き続ける杉本、その姿を追いかけて上総は改めて周辺の景色を確認した。杉本が降りたバス停は、上総の記憶からすると青潟東高よりふたつ前のはずだ。どうやって行くつもりなんだろうか。自転車に乗れない杉本のためにバスを選んだのは上総だが、通学路までは確認していなかった。

「青潟東高の校舎裏です。おそらく立村先輩は正門から入るおつもりだったのでしょうが」

にこりともせず杉本は歩きながら説明した。思ったよりスピードがある歩き方だ。

「私のリサーチした結果ですが、正門の場合ですと先生たちの監視が厳しく、場合によっては注意されるかもしれません。いくら私服であっても気づかれてはことです。しかし、裏にある小さな池は防風林に囲まれていて、そこから入る分にはあまり注意されないとのこと。事実かどうかわかりません。ただ行って見る価値はあるのではないのでしょうか」

「杉本、どうしてそんなに調べてる？」

さりげなく聞いてみた。

「当然です。受験する予定があるのなら当然のことです」

表情を一切変えず、杉本は上総を見上げた。

「受験する以上はこちらも万全の準備を整えなくてはなりません。当然のことではありませんか」

麦藁帽子で覆われた杉本の表情には、何も読み取ることができなかった。

杉本の言う通り、バス停から五分もしないうちに防風林らしき場所にたどり着いた。ぐるりと囲んでいる木々の間から、学校らしき建物が見えるが鉄網に覆われている。

「やはり難しそうですね」

少しだけ落胆した声で杉本がつぶやく。

「いいよ、そのまま素直に正門から入ろう。どうせ今日は受験のための下見なんだと伝えれば、たとえ顔を先生たちと合わせても問題ないよ。それに今日は、教室に入るわけじゃないんだから」

さすがにそこまでは考えていない。不法侵入扱いされたらどうするんだ。

「立村先輩、まさかそんなことをお考えだったのですか」

「いや、さすがにそこまでは」

全力で否定する。今日の目的はひとえに、「杉本梨南の青濤東高受験に向けての下見」に過ぎない。校門に入り、できれば教室を外から眺め、さらに本条先輩の城であるマイコン研究会の匂いを感じ取れば御の字のつもりだった。

「本条先輩、今日は来てるかもしれないしな。もしいたら、後輩の顔してついてって案内してもらおうか？」

あまり望んでいない展開をつい口にしてみる。杉本も食いついてきた。

「本条先輩が今いらっしゃるのですか」

「たぶん。公立高校も夏休み講習があるって聞いたし、先輩今、マイコン研究会の会長やってるしさ」

「なんでしょうか、その『マイコン研究会』とは」

遠回りながらも正門に向かい歩き出す杉本が、さらに問う。誰も人通りがない。木々に埋もれそうで完全な避暑状態。午前中とは思えない暗さが漂う。青大附中の裏にある森に似ている。上総はかいつまんで説明した。

「本条先輩、最近マイクロコンピューターって機械に夢中で、プログラムも自分で組んでいる

んだ。雑誌に投稿もしていて、最近はお条先輩の特集まで組まれる始末らしいんだ。今日持ってきたから、あとで読んでみるか」

実は、杉本に自慢するため持ってきた「ミスター・パーフェクトお条氏」特集のプログラム雑誌。昨夜一通り目を通して見たが、詰め草の「読者の声」と編集サイドのつつこみを楽しんだ以外は全く付いていけない。世の中の人々はなぜそんなにシューティングゲームが好きなのか、不思議でならない。

「マイクロコンピューターですか。お条先輩は機械をお持ちなのですか」

「うん、雑誌に投稿していたらうれしいよ一式。それだけじゃ足りないらしくて、附属品のプリンターとかをバイト代でそろえて、あと、近いうちにフロッピーと呼ばれるものをそろえるつもりでいるらしいよ。今だと、カセットテープでけたたましい音鳴らしてプログラムを録音しなくてはいけないらしくて、気が狂いそうだとか言ってたし」

お条先輩の受け売りだけなのは当然。半分以上自分でも言っている意味が分からない。第一フロッピーってなんなのだ。お条先輩に言わせると「次世代の記憶保存装置」なのだそうだが見た目小ぶりのレコードにしか見えない。またあのチョークひっかく音が流れるのだろうか。テープとかレコードとか、マイコンには音響装置が必要なのだろうか。

「そうなのですね。お条先輩は独学でなさってらっしゃるのですか」

さらに興味深そうに尋ねてくる杉本に、上総なりの背伸びした答えを返す。

「うん、そうらしいよ。お条先輩は雑誌と本を自分でそろえて、自分のマイコンが手にはいるまでは近所の電気屋でプログラムの打ち込みをしてカセットテープに録音し、それをプリントアウトして投稿するって繰り返してきたんだってさ。自分で打ち込み続ければ自然に覚えるんだって自慢してたよ」

「そうですね、確かにその通りです」

自分に言い聞かせるように杉本は頷いた。セーラー服の襟元が時折ゆれ、白い肌がちらりと覗く。紺のラインがたどり着く先につい目が行きそうで、すぐに逸らす。

「日本語は打ち込めないのですね」

「最初俺もそう思ったけど、よく話をお条先輩に聞いたらカタカナだけなら大丈夫らしいんだ。打ち込み方少しだけ教えてもらった。近いうちに普通の漢字交じりの文章を打ち込めるようになるらしいとも聞いたよ。そうなったらいいよな。全部文章打ち込めるならわざわざ紙で保存しておかなくてもいいしさ。日記とかつけても、読まれないですむし」

「そうなのですか。そうなるといいですね。本の文章を全部漢字変換して打ち込んでおけばいつでも本が読めるようになる時代が来るのでしょうか」

「だからお条先輩からは、早くタイピングの勉強しろってせかされてる。たぶんプログラムとかの手伝いさせたいんだらうな。俺なんてまだ、キーボードってものの触ったのこの前、お条先輩とところに行ったのが最初だったのにな」

杉本は話聞き入りつつ、何度か首をかしげた。

「お条先輩はゲームを作ることに専念なさってらっしゃるのですか」

「そうみたいだね。シューティングゲームが得意らしい」

「ゲーム以外に興味はお持ちでないのでしょうか」

「持ってないんじゃないかな。俺ももっと別のことができるのかどうか聞いてみたけれど、あまりぴんとこなかったみたいだし。ただマイコンが進化していくにしたがって、できることがたくさん増えてくるはずで、たとえば絵を描いたり音楽を作ったりすることもできてくるはずだって。だから本条先輩は将来、工学科目指すとか言ってるよ」

「工学科、ですか」

「そう、なんでも本条先輩は、プロのプログラマーになりたいらしいんだ。今は雑誌の投稿者の扱いだけど、近い将来はそれを仕事としたいって。そのためにどうするべきかを考えて、毎日勉強しているって話してたよ。目的決めてるんだよな、すごいよな」

「目的ですか。その通りですね」

ここまで杉本の言葉はまっすぐ、平べったく、感情がほとんど感じられない状態のものばかりだった。珍しいことではない。

「本条先輩のお話をされてらっしゃる立村先輩は、どうしてそんなにうれしそうなのでしょう。私からしますとそちらの方が謎でございます」

「なんでって、だって、本条先輩だし」

答えにならない答えを返してしまう。

「本条先輩だから素晴らしいプログラムを組まれるとか、まさかそのように思い込んでいらっしゃるのではありませんか」

「それは当たり前だよ。俺には全くわからないけど」

「わからないことを、一方的に素晴らしいと決め付けるのは間違いではありませんか。立村先輩、確かに本条先輩には才能がありますし、顔もきちんと整っていらっしゃいます。立村先輩とは大違いなのは認めます」

——ああまた始まったよ。どうせ俺は本条先輩にかなっこないし。

それでも腹が立たないのは、杉本の根本的好みが本条先輩に向いていないと分かりきっているからだだった。

「ですが、プログラムについては実際動かして判断する必要がございます。立村先輩。私は本条先輩をけなしているわけではありません。ただ、実際の価値を把握せずに、一方的に本条先輩を偶像化する立村先輩が異様に見えてならないのです」

「しょうがないよ、俺は本条先輩にかなわない。それに俺にはマイコンだかなんだかそんな機械いじることなんてできないし。それよかなんで杉本、そんなことで怒ってるの？」

上総からしたらなぜ、杉本が本条先輩にいらいらしているのかがよくわからない。

「何でもございません。これから校門に入りますがいががいたしましょうか」

いつのまにか、目の前に青渦東高校の校門が見えてきた。防風林が途切れ、砂利道をはさむ格好で並んでいた。

麦わら帽子を取り、杉本がまっすぐ、その校舎を見つめる。深く一礼した。

襟もとに風がすり抜け、背中 of セーラーがかすかに揺れていた。

「入ろうか」

「いいえ、ここにいます。ここから先は、入ってはなりません」

「でも、大丈夫だよ、見つからないよ」

時折自転車でやってくる青潟東高校の生徒らしき集団が、上総と杉本の前を通り過ぎていく。この格好ならきっと目立たないはずだ。紛れ込めるはずだ。

かたくなに杉本は首を振った。長いポニーテールの先が上総にぶつかった。

「歩いている間に考えました。やはり、部外者が足を踏み入れてはなりません」

「なぜ。受験するのに」

「受験する保障はありません」

目を校舎から逸らさず、杉本は凜と言い切った。

「そして合格する保証もありません。この学校に通う自分をイメージできない以上、現段階で足を運ぶ権利はありません」

「杉本、聞いていいか」

上総はさりげなく問うた。

「現段階がだめなら、入っていいのはいつからだ？」

「おそらく、高校の下見の日です。受けることができれば、ですが」

麦わら帽子を抱きしめ、もう一度杉本梨南は最敬礼をした。

——あの情報、本当なのか。

しばらく青潟東のシンプルな校舎を見据えていた杉本梨南は、やがて麦藁帽子をかぶり直し、うしろにかかるリボンを整えた後、

「では、参りましょう」

背を向けた。

「どこに」

「青潟駅に戻ります。そこからまっすぐ、子辺駅に向かいます」

「あ、でもまだ早すぎないか」

来たと思ったらまた戻るときた。杉本が言い出したらきかないのはわかっているけど、あまりにも極端だ。ただ校門で立ち止まっただけ。それだけのためになんでわざわざ交通費をかけてきたのか、無駄としか言いようがない。

「それにさ、学校の中に入らなくたって見るところはあるよ。たとえば通学路とかさ、ほら、正門側からだとどんな本屋があるかとか、友だちと帰り寄り路する場所あるかとか、いろいろあるだろ。そうだ、本条先輩が言ってたけど」

「また本条先輩のことですか」

あきれた風に杉本がつぶやく。そうか、文句あるか。

「よくこの辺のハンバーガー屋でマイコン同好会か研究会か、その連中とミーティングするために集まったりするって。それとやはり本条先輩だから友だちと青大附中時代と同じように喫茶店にも寄るみたいだし」

「私はこんな暑い日にハンバーガーのようなあぶらっぽいものはいただきたくないのですが」

「でも何も食べないで行くわけじゃないだろ。そろそろ十一時半だしさ」

「子辺に到着してからでちょうどいいのではないのでしょうか」

冷ややかに杉本は言い放つ。上総を置いてすたすた進む。すでに青潟東の建物を防風林が覆い、緑に濃く隠されていく。書店、古本屋、おもちゃ屋、さまざまな店舗が並んでいるが全く振り返ろうとしない。杉本が好きそうなものもたくさん並んでいるように見えるが一瞥もしないままだ。

「でも子辺に食べるとこってあるか？ せいぜいジュースくらいだろ。自動販売機くらいかもしれないし」

「私は食事をしたくて行くわけではないのです」

「ならなんで」

何回目か忘れたがまた同じ質問をしてしまう。

「立村先輩、もう私の話したことを記憶から消してらっしゃるのですか。私は青潟のことを知らずにいたくないと、何度お伝えしたことか」

「なんでいきなりそんなことに目覚めたんだよ。杉本が好きなことなのか？ それともさ、どこかの誰とは言わないけどそいつの自由研究が青潟市の歴史関係とつながっていたあらとかそんな

ところかよ」

本当は喉が渴いてきていらいらしていたせいだ。自分でもわかっている。いやみ言いたいわけじゃない。ただ不自然だ。華やかで気品のあるオペラを愛し、完璧なるローエングリンを求め、マイセンの食器に陶酔している杉本と、青潟の景色とはすぐわない。

「そんなものではありません！ 失礼な」

「だったらはっきり言えばいいだろ。こちらだって振り回されるのはたくさんだよ。なんだよ、せっかく青潟東の下見したいだろうなって気遣ってやったのに、ただちらっと覗くだけで終わりかよ」

「お帰りください。私は一人で参ります」

十字路で杉本はきっと上総を見上げ、厳しく一声挙げた。

「冗談じゃない。なんで俺の方から帰らなくちゃいけないんだよ。こっちだって用事があるんだから帰るわけいらないんだって。第一、今日誘ったの俺の方だよ。杉本に話があるからこうやっているんだけどさ」

全く理屈に合わないことでごねている自分が情けない。杉本にこんなこと言って嫌がられないわけがない。いつもならその辺しっかり計算してご機嫌を取るのが常だ。紳士でなくては杉本に受け入れてもらえない。わかっているのになぜか自分でも意味不明な言動を取ってしまっている。そっぽ向いた。でも帰る気はさらさらない。

「私にお話があるという、ということですか。その点も気になっておりましたが、立村先輩は一言もおっしゃらないではありませんか。話さえ終われば、即座に解散してもよいのではないですか」

「じゃあ、なんで今日、俺の誘いに乗ったんだよ。青潟東に行ってみて、どんな学校か知りたかったからだろ？ 杉本だって受験のこと考えればそれなりに知りたいことだってあるんだろうなと思ったからさ、俺も本条先輩に聞いて情報集めてみたんだけど、それも聞きたくないのか」

「何度も申し上げますが」

杉本も上総の言い分にあきれを通り越して軽蔑に似た厳しい眼差しを投げかけてきた。痛い。太陽の白身がかった光、それでさされて黒く穿つもの。巨大なレンズの焦点で燃えるもの。ちりちりと音がしそうだ。上総に分かっているのは本能で口走るのみということ。

「本条先輩経由の情報を集めていただいたことには感謝いたします。しかしそれは、男子でかつ本条先輩の価値観からなるものでありましょう。私に必要なものかどうかは疑問です」

「疑問かどうかわからないけど、少なくとも全くないよりはましだと思うけど」

普段だってこんなくだらないことでけんかしたいとは思わない。杉本には今以上のすさまじい罵倒を浴びせられてきたけれど、決して上総がめげることはなかった。むしろ上総はその言葉すら全くいらいらせず受け入れるだけだった。いつもなら杉本の気まぐれもさらりと流せて、素直に子辺駅へ向かおうと思える。なのに今だけは自分がコントロールできない。どうしても子辺駅の男子修道院になんて行きたくないとだだっこになり騒いでいる自分がいて、制御できない。そうだ、青潟にいればいい。ここで遊んでいればいい。

「立村先輩、今日の先輩は少しおかしいのではありませんか。いつものことと申し上げればよろ

しいのかもしれませんが」

さりげない皮肉を混ぜながら、杉本は言葉のスピードを下げた。

「何を私に求めてらっしゃるのがよくわかりません。立村先輩、私を青潟東にお誘いいただいたことには感謝しております。お話があるのであれば伺います。ですがそれは、子辺に向かう汽車の中でも問題のないことではありませんか。相席になる可能性もありますが、それでも連れが他にいるわけでもありませんのでふたりでお話は十分可能なはず。それによくお考えなさいませ」

いつのまにか杉本につられて歩いていた。すでにバス停に到着だ。しかもタイミングよく青潟駅前着きのバスが後ろから追いかけてきている。余裕で乗り込める。ステップに足をかけながら、杉本はとどめを刺した。

「市内でお話をするよりも、機密が守られることでしょうに」

——確かに。

何も言い返せなかった。プール通いの小学生たちがうろうろする車内でただ、杉本の隣でばつ悪く俯くだけだった。また帽子を脱いで膝に置く杉本の横顔を、上総は時折盗み見した。

——杉本はやはり、何かを隠している。

どう考えても、いつもの杉本梨南ではなかった。

上総の知る杉本梨南であれば、青潟東高校の校門に到着した段階ですぐ、職員玄関に飛び込み「これから受験に備えて下見をさせていただきますがよろしくお願ひします」と頼まれもしないのに挨拶をし、それからゆっくりと校舎付近を散歩していたことだろう。もちろん校舎の中は無理にしても、花壇や外庭、グラウンドくらいはゆっくり見られたはずだ。吹奏楽部の練習、演劇部の発声練習、運動部のランニング、そのくらいの部活動見学はできたかもしれない。本条先輩と話した限り、あまりうるさいことは言われならしいとも聞いている。いくら本条先輩と相性よくない杉本であっても、情報であればいくらでもほしいはずだ。だまって素直に上総にくっついてくるだろう。青潟東の情報であれば、だが。

それが全く反応なしと来た。

しかも、青潟東在学中の本条先輩の話題などどうでもいい、とまでも。

杉本はただ、正門に向かい誰かを見送るような眼差しで、一礼をしたのみだ。

もう一度杉本の表情を伺う。杉本は決して嘘を言わない。噂の真偽を問えば必ず正しい答えを返してくれるだろう。しかし、霧島経由で得た情報はまだ決して口には出せないものばかりだ。ヒントは杉本の時折見せる素の表情のみ。言葉同様嘘ではない。

上総は目を閉じた。膝に手を置き、車のゆれをこらえる振りをした。

——まだ噂レベルのことだ。信じる必要なんてない。杉本がいきなり青潟の歴史に関心を持ち始めたのは、きっと関崎のせいだ。関崎を含む例の外部三人組が、自由研究に「青潟の石碑」か何かを選んだらしいという噂を古川さんから聞いたけど、きっとそれだ。古川さんは杉本のことをかわいがっているからきっとその情報を持っていったんだろう。関崎のことになら目がない杉本のことだしそれがきっかけに決まってる。そうでもなければ西洋好みの杉本がいきなり青潟の

中に目を向けるなんて、ありえない。きっとそうだ、そうに決まっている。

「何をじろじろご覧になるのですか」

「いや、ただ、ごめん」

言い繕う。いいのだ、どちらにしても謝らなくてはならないことばかりだった。上総はすぐ頭を下げ直した。杉本の膝に載っている麦藁帽子に頭を突っ込みそうになる。

「さっきは言い過ぎた。ごめん、俺が悪かった」

「お気づきになればよろしいのです」

またも高慢に聞こえそうな口調で答える杉本に、ほんの少し胸を撫で下ろした。本気で縁を切られても当然のことを口走ってしまったのだから。

「それなら、このまま今日は付いてっていいかな」

「立村先輩がそれでよろしければ、私がかまいません」

杉本はつんと澄ましたまま、それでも上総の方を静かにみやりそう答えた。

——子辺の男子修道院。

思い出した。あの二月の冬の夜、杉本梨南は子辺駅で狩野先生により無理やり下車させられたのだった。鈍行列車の席でひとり、上総は杉本のぬくもりが頬にふれているものと信じてただ眠っていた。いつの間にかそのやわらぎが消えたことにも気づかずに。

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々 (4)

タイミングよく十二時始発の三桜行鈍行に乗り込み、上総はまず進行方向一番目の席を押さえることに成功した。理由は簡単で、ふたり以外向かい合う相手がいないことだった。他人と向かい合わせで顔をあわせるのも、別にやましいことしているわけではないのだから問題ないはずだと理屈では理解している。

「ここなら少し落ち着けますね」

無表情に杉本が答える。窓際に上総が座るのを待ち、隣に腰掛けた。

「夏休み中だし、やはり人手が思ったより多いな」

子辺の男子修道院は青瀧近郊のちょっとした観光の穴場として人気があるらしい。上総も杉本から説明されるまでは気づかなかったが、遠方からも訪ねてくる人々がかなりいるとのことだった。

「そのこともあって今日は、席が埋まっているようです」

「ほんと、よかった」

鈍行だとだいたい三十分から四十分程度。十二時半過ぎには到着するだろう。

窓辺から見える青瀧の景色は、はるか向こうに淡い水色の山々が、ぐっと近づいてくるとうっすら緑の稜線が、さらに手元に引き寄せられるがごとく真四角の建物が、ところどころに錆付いたトタン屋根が、それぞれ交互に交じり合い移り変わっていった。

「立村先輩、どうぞ」

行く前に買い込んだ麦茶の缶をそっと差し出す杉本の手、目の前に伸びる。

「ありがとう。だいぶ喉渴いたよな」

青瀧東高校から駅にとんぼ帰りして、まだ水気を一切取っていない。

「それほどでもありませんが」

「飲んだほうがいいよ。暑さで倒れてしまうと大変だよ」

杉本は小首をかしげて考えた後、

「おっしゃる通りです。いただきます」

自分用に購入した小ぶりのりんごジュースをこくりと飲んだ。

——誰もいないな。

同じ学校の連中と顔をあわせたらことだと思っていたのだが、幸い取り越し苦労のようだった。まずありえないとは思いますが霧島がまたしつこく追いかけてきたらどうしようとか、青瀧東高校付近で本条先輩に捕まるとか。杉本の言う通り子辺の男子修道院が観光地だとしたら、それなりにすれ違う可能性はあるだろう。

「知り合いいるかもな。誰かかしら」

「それは大丈夫かと思われませぬ」

上総の問いに杉本はあっさり答えた。口を軽くハンカチでぬぐった。

「遠くに行くならまだしも近くならまだまだかもしれませぬ。私が思いますに、子辺は自転車で

も行くことができる距離です。いつでも行くことができる場所です」

「でも俺は二回しか行ったことないけどな」

「そうです。そこなのです。いつでも行けるところだからこそ、後回しになりがちな場所なのです。この列車に乗っている人々も、見た感じほとんどは市外の方が多いように感じます。言葉のイントネーションがなんとなく異なりますので」

「ずいぶん耳澄ませてるな」

真正面には運転手の背中が見えるのみ。隣には杉本梨南が座るのみ。

家族連れらしい集団のおしゃべりがかましい。

「まだだいぶ時間がございます。立村先輩、私に話があるとのことですが、ここであれば誰にも聞かれませんか。お伺いしてよろしいですか」

まっすぐな口調で、目を見開くようにして、杉本は上総に膝を向けた。

「え、今？」

「はい。今からですと到着まで三十分もございます。私も子辺に到着しましたらゆっくりと見て歩きたいので、余計なことはまずここで片付けたいのです」

——余計、ときたかよ。

心の準備ができていないなんてこと、言う暇なし。上総は急いで飲み干し窓辺に缶を置いた。麦藁帽子を膝において静かに見据える杉本にふさわしい表情をこしらえた。

「三十分で終わるかどうかわかんないけどさ」

まずは切り出しておく。

「昨日、本条先輩と、駒方先生と狩野先生と会っていろいろ話をしたんだ。杉本も駒方先生とは会う機会あるだろ？」

「はい、ございます」

突如、杉本の目が堅くこわばった。唇がきゅうと引き締まるのが目に見えて分かる。

「そのことでございますか」

「予想しているならたぶんそうだよ。そう、駒方先生から聞いたことがあって、俺なりに確認したいんだけど、話、聞いてもいいよな」

「どのような内容なのかは別として、ご存知なのであればしかたのないことです」

——やはりいろいろあったんだな。

上総なりに杉本への切り出し方はいろいろ考えていた。最初の予定では青潟東高校のふたりになれそうな場所、たとえば中庭とかグラウンドの隅とかそのあたり。そうでなければ駅前のどこかかわいらしい喫茶店を探して杉本お気に入りの上品な紅茶でも啜りながら。まさか鈍行列車の席でという展開は想像していなかった。しかも杉本から詰め寄られるなんて、予想外もいいとこだ。

「俺が聞いたのは、杉本が誰かの家庭教師をしているってことくらいだけど」

「家庭教師ですか。近いものはあるかもしれません」

「公立の女子たちと話をしているとも聞いたけど」

「そこは正しいです。単純にそれだけの話のはずなのですが。なぜ駒方先生は大げさに騒ぎ立てるのでしょうか。私には全く理解ができません」

上総に正面から語りかけてくる。もちろん平らかな言葉遣いは変わらない。ただ噛み付くわけではない。単純に、不思議でならないという風情だ。機嫌は悪くなさそうだ。このまま話を持ち出しても缶で殴られることはなさそうだ。そう踏んで上総は話を進めることにした。

「一応、俺が駒方先生から聞いたことそのまま言うけどさ。杉本が公立の女子ふたりのために家庭教師をしているということと、それを学校の先生たちが目をつけているとかそういう話なんだけどな。駒方先生も様子見に来たんだろ」

「駒方先生だけではありません。狩野先生もご一緒です。お暇なことで何よりです」

冷ややかな口調。杉本はもともと狩野先生が好きではないらしい。二月の出来事が尾を引いているのだろうか。膝元の麦わら帽子に時折黒い影が走る。トンネルを時折潜り抜ける。

「言っとくけど、俺は杉本が何か悪いこと考えているとは思ってないし、そのことだけは絶対信じてほしいんだ。ただ、また妙な奴らに足をすくわれるのだけはいやだからさ。一応、何があったかだけ確認しておきたいんだ」

「また立村先輩は、私を信じようとせずにそのようなお言葉なのですね」

耳が痛い。杉本の言う通りだ。一学期初夏に起きた「修学旅行濡れ衣事件」の顛末を知る限り、上総は本条先輩に高く評価される振る舞いをした「らしい」が、杉本からの株は大きく落としたはずだ。杉本を無条件で信じなかったことが相当恨み真髓らしい。この点についてはもう何も言い返すことができない。

「信じてるから今こうやって話してるだろ。それと、今日俺が杉本とこうやって会うってことは先生たちにも全部伝えてあるよ。嘘吐くのはいやだしさ。駒方先生も俺からしたらずいぶん余計なお世話するなって気するけど、先生たちの話だけだとやはり不公平だろ。それだったら俺なりに杉本の考えをきっちり知っておきたかったんだ。そうしとけば先生たちにもはっきり文句が言えるし、誤解も招かなくていいだろ」

「そうでしたか。駒方先生は立村先輩をも利用して、邪魔しようとなさるのでしょうか」

怒るでもなく、ただ首をひねっている。襟元のくっきりした骨のような部分が浮き出ているのが妙に目立つ。

「今に始まったことではありませんが、私は決して間違ったことをしておりません。むしろ公立の先生方からも感謝されていいはずなのです。なぜいきなり文句をつけてこようとするのか、私にはそれが不思議でなりません」

「公立の先生たちに？ お前そちらからも文句言われたのか？」

気になるフレーズだ。杉本が公立の札付き女子たちと付き合いがあり、その関係で彼女たちの担任からいやみを言われたというのだったら、かなり失礼な内容ではないかと思う。上総からしたらむしろ、そのことを名誉毀損として、それこそ駒方先生を利用して猛抗議してもいいのではないかという気がする。

杉本の口調だけが、静かで落ち着いたままだ。

「どうして公立の先生たちは、彼女たちにきちんと勉強教えようとしなないんでしょう。私にはそ

ちらの方が信じられません。立村先輩、もしそのことについてすべてお知りになりたいのであれば今からすべてお話いたします。駒方先生にも私からあとでお話させていただきます」

何も、隠すべきことではないらしい。杉本は気張らず、素直な表情でゆっくり語り始めた。強く光るのは、エナメル白い靴のせい。上総の足元にそっと差し出されていて、初めて気づいた。

「桜田さんのことはご存知でしょうか。立村先輩」

「知ってるよ。杉本の友だちだってことくらい」

——東堂の彼女だってこともな。

飲み込むところはしっかり押さえて上総はじっと話に聞き入った。

「彼女の友だちとして紹介されたのがきっかけです。桜田さんはもともと青大附中の風土がお好きではなかったようですが、諸事情により入学せざるを得なかったそうです。公立中学の友だちとのつながりが強いのもそれは当然でしょう。さまざまな問題が起きたようですが、桜田さんの人格を否定することではありません」

「杉本と知り合ったのは、三年の春からだろ。つい最近か」

「そうです。きっかけは、青大附中に桜田さんの友だちにあたる子たちがやってきて、迎えに来ていたからです。その頃桜田さんは、東堂先輩に見張られているといった籠の鳥としての生活を送っていて、かなりストレスがたまっていたと聞きました」

「東堂がか」

何度聞いても意外な組み合わせと思わざるを得ない。首筋が熱くなるので襟を少し立てて目を避けてみる。南雲の親友でもある元保健委員の東堂が、なぜ芳しくない噂の立つ桜田愛子に惚れたのか、しかも結婚まで考えていると桜田の親に直訴しに行ったとか、いまだに謎の部分が多すぎる。目立たぬところで派手なことをしているものだ。

「東堂先輩は何でも桜田さんのお友だちを警戒していたそうです。なかなか会えずにお友達も困っていらしたようです。事情を聞いて、とりあえず私が一緒に混じれば問題ないのではという話になりました。さらにじっくり伺うと桜田さんは思いやりのある、友だち思いの人でした。意気投合して現在に至ります。もちろん、そのきっかけとなった桜田さんのお友だちもです。ここまではよろしいですか」

杉本は一気に語り切った。

「聞いていいか」

「ご質問ですか」

「俺が聞いている限り、普通の友だち作りにしか聞こえないんだけど、なぜ公立中学の先生にも目をつけられる扱いされてるんだらう。不思議でならないよ。たまたま杉本の友だちが数珠繋ぎになり増えていって、たまたまひとりの家に行って勉強しただけだろ？　なんでここで公立の先生や駒方先生が顔を出す騒ぎになるんだってこと。俺には全く理解できないよ。そんなことしたら俺何回つかまっているかわからないよ」

「そうです、その通りです。私も何度もそう申し上げました」

何度も何度も頷いた。杉本は帽子のリボンを何度も指先で整えた。

「私の知る限り、いろいろ事情を持っていることは確かです。おおむね事実とは聞き知っています。ですが、そのような過去があったからといって、公立高校進学を夢をかなえさせないというのは何か間違っていないのでしょうか。勉強をしたい人たちに、なぜ分かりやすく教えようとしなくていいのでしょうか」

「おおむね事実って、それは」

口ごもる。桜田愛子、もしくは東堂の彼女、このふたつのキーワードで得られる情報は決して楽しいものではない。男子たちの口からこぼれる言葉は、ひとえに下品の一言につきる。駅前裏のホテル街にて、とある喫茶店にて客待ちをしている中学生たちとか、東堂がぶっちぎれて彼女を連れ戻しに行ったとか、ありとあらゆる噂が飛び交い、桜田愛子に関する情報をすべてネオン色に染めている。

「ありがたいことに私は青大附中の生徒です。成績も幸い人に誇れる数字を保っています。それならば、友だちとして私ができることは、彼女たちに少しでも手助けすることではないでしょうか。たとえば、公立高校進学するための勉強手伝いをするとか、彼女たちの悪口を平気な顔して言う愚か者を成敗することとか、さまざまございます。でも、最優先順位としては桜田さんと協力して、学校の授業を解説することです。そうすれば、学校で相手にされなくとも、きっちり公立高校入試ではよい結果が出せるはずですよ」

「ごめん、杉本、もう少し聞いていいか」

駅にいったん止まったようだ。人の出入りあり。外は水田が広がっている。緑が途切れ途切れに空へつながっていく。

「桜田さんの友だちに勉強を教えるってことか。いろいろあって学校では無視されている人たちを、杉本と桜田さんが協力して勉強を手伝ってることなんだな」

こくり、大きく頷いた。杉本の顔がほわりとやわらかく見える。笑っていないのに。

「はい、その通りです。もっとも今は桜田さんと役割分担しています。私は主に問題を作成したり、細かい内容を分析して説明する方、桜田さんは国語や歴史などを中心に分かりやすく図解し、スキット風に説明するやり方です。おかげでみな、一学期の成績は驚くほど上がったと喜んでくれました。私も、桜田さんの独特な教え方を見るのが楽しみで通っているようなものです。こうすれば誰でも成績が上がるはずなのに。私たちのような一生徒がしていることを、なぜお給料をもらっている大人である先生たちができないのか、私には不思議でなりません」

「ってことは、杉本がしばらく電話連絡つかなかったのも、もしかして夏期講習期間中だったってことなのか」

「お察しの通りです。珍しく鋭いですね立村先輩」

勝ち誇ったかのように杉本は言い放った。実際勝たれたのだから仕方ない。

——これは、俺も杉本側に立たざるを得ないよな。

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々 (5)

杉本梨南と桜田愛子が中学三年に入り、行動を共にするようになったことについては、上総も早い段階で気にしてはいた。

——本当にあの噂本当なんだろうか。

なにせ桜田という女子は、入学当初からいわくつきのすれっからしと聞いている。不良少女と呼ばれた代表格としては花森なつめもいるが、彼女はもともと自分の求める路を見据えてその上での言動だったから、上総としては違和感がない。早い段階で恋人らしきものとの交渉があったとは本人の口からも聞いている。ただしそれは将来を見据えた上での家族公認の付き合いであり、いわゆる学生の恋愛沙汰とは一線を画すものがある。

——不特定多数の相手と手当たり次第ホテルに通ってたとか、お小遣いもらっていたとかいろいろ聞いたけど、そんなことほんとにしてたらとっくの昔に退学だよな。

噂だけが一人歩きしているところはあるのかもしれない。先入観で見てもならないと思う。ただ、上総の知るほとんどの男子は「あいつは絶対バージンじゃねえよな」と断言する。どこで確認するのはわからないが「雰囲気として、絶対」といったものがあるようだ。

「杉本に前から聞いたかったんだけどいいかな」

「どうぞ。お答えできることであれば」

せっかく隣に腰掛けてくれているのだ。肩寄せ合うくらい語り合わねば損だ。

「杉本の友だちって意外と優等生タイプいないよな」

「優等生ですか」

戸惑った風に杉本は指を唇に当てて考え込んだ。

「いわゆる『優等生』の概念が私にはわかりませんが」

「いや、杉本みたいにまじめで成績もよい女子だったら、同じようにきっちりした人が友だちになるのかなと思ってたんだ。でも、こういったら変だけど、花森さんだろ？ あの人も俺は知ってるから平気だけど、やはり意外に思うよな」

「そういうことですか」

ひとりごちて杉本は頷いた。

「立村先輩の仰る『優等生』が成績優秀でかつ大人に覚えのよい人間のことを意味するのであれば、私とは相性が合わないかもしれません。そういうタイプはみな私を嫌います。嫌われるならば私も相手をとことん憎みます。そのような関係にならない人々が、自然と独特の個性を持つ人たちというのであれば分かるような気はします」

「嫌うって、いったい」

「おそらく立村先輩は私と桜田さんのことを邪推しておられるのでそのようなことをおっしゃるのではないのでしょうか」

「邪推なんてしてないよ」

風向きが変わり始めている。あわてて否定する。残念ながら動かせない。

「花森さんも、桜田さんも、先生たちからは決して好かれている人たちではありません。そのく

らいのことは承知しております。理論的に何故という説明はできません。ただはっきり言えるのは、ふたりとも私の立場がひっくりかえされようとしている時、決して逃げずに守ろうとしてくれました」

上総は口を開きかけた。何か自分なりに抗議しなくてはならないような気がする。杉本は気づくことなく、背をつんと伸ばして語り続ける。

「この機会ですからお話をさせていただきます。関係者誰もいないようですのでかまわないでしょう。先日の一件についてです」

聞くかどうするか迷っていたあの、件だ。語ってくれるならこっちのもの。上総は身を乗り出し窓辺から離れて杉本に張り付いた。杉本も露骨に避けることはせず、上総の膝に麦藁帽子を少しかぶせた。ちょうど絆創膏を張り付けたかのようにつながった形となる。

「あの後、無事に片付いたのか」

「はい、おかげ様で期末試験後にすべてが私の考えたとおりに収まりました」

——ほんとかよ。

本条先輩にもそんなことを言われたが、上総の奥底では納得ができていない。頭の中でこねくり回してみたけれど、結論はやはり杉本の犠牲に尽きる。その目を見て取ったのか杉本はきっと上総に牽制球を投げる。

「立村先輩、やはり私を信用されてないのですね」

「だからそんなことないって何度も言っただろ」

「いいえ、いいのです。立村先輩はそういうお方です。今回の件だけではなく、前日も、またその前もです」

上総の傷を思いっきりえぐるようなことを言い放ち、杉本は改めて本題に入った。子辺駅到着まではまだまだかかりそうだ。時折トンネルを潜り抜けるたび、杉本の姿は夏の陽から冬の闇とを交互に行き来しているかに見えた。

「まず私が要求しました、生徒会長との話し合いです」

杉本は口元を引き絞りつつ説明した。

「この件にとどまらず、佐賀さんとの間には片をつけるべき問題がいくつかございました。周りでは私が彼女の足を引っ張っていたために能力発揮の邪魔をしたという意見が大半を占めています。そのことを否定はしません。経過よりも結果なのですからしかたないことです」

「経過よりも結果？ 生徒会長だから、負けたということか」

上総もその点は理解できる。ただ敗北者としての言葉が杉本から出たのが意外だっただけだ。「どんなに努力をしても、結局は結果で判断されるのが現実なのです。あの霧島先輩も、心優しく精一杯努力を重ねてこられたのに、成績のレベルですべて切捨てられてしまいました。西月先輩も同じです。あんなに思いやりのある先輩ですら、一度の過ちで退学と同様の扱いを受けてしまいました。その一方で佐賀さんは生徒会長として認められてから高い評価を受けています。結果がすべてなのです」

表情を伺う。タイミングよくトンネルにまた入った。少しかかっているように見える頬に陰し

いものが見えた。

「西月先輩の件もあり、私としてはいつか佐賀さんときちんと話し合いを持つ必要があると、三年に上がった頃から考えておりました。また、桜田さんと楽しくお付き合いするようになってから佐賀さんもかなりしつこく私にアドバイスを送ってきたこともあり、この辺の誤解を解く必要もあると感じてきました」

「ひとつ聞いていいか。杉本、佐賀さんに桜田さんのことでって」

もちろん佐賀はるみとしても、杉本の元親友なのだから、学年の不良化の兆しばかり女子と付き合うことを快く思わないのは当然のことだろう。上総も似たような気持ちを感じていたのだから、この辺は認めざるを得ない。杉本には思い切り無視された。

「そのこともありましたので、修学旅行の出来事はある意味よいきっかけでもありました。渋谷さんの態度にはもちろん面白くないところもあります。しかし、百パーセント自分に非がない立場であれば何も怖いものはありません。どこを叩いても埃なんて出てこないのですから。濡れ衣をかけようとしても無駄なこと、一部で私に罪をかぶせてごまかそうとする動きもあるようですが、真実はきっちり証明されるものです。もちろん誤解している愚か者もたくさんいるようですが、私には関係のないことですから」

杉本はそこまで語った後、じっと上総の目を見つめた。にらんでいなかった。

「試験が終わってから、古川先輩に付き添っていただいて佐賀さんと最後の話し合いをいたしました。その時にきっちりと、私が無実であることを認めると同時に、桜田さんに対する失礼な言い分について謝るよう要求いたしました」

「桜田さん？」

トンネルから抜けた。杉本にさっと太陽のスポットが当たる。

「そうです。過去に何をしてきたかだけで勝手に彼女の人間性を決めつけ、私に悪い影響を及ぼす人間とかばうような振りをし、結局は私と桜田さんを見下げています。一年の段階で同じことは花森さんに対してもありましたが、その時は私もまだ力がありましたので言い返すことができました」

「その時はって、今は、お前に力がないのか」

「力があります。ただ、結果ですべて評価されている現実には認めなくてはなりません。私がどんなに桜田さんの本質を説明したとしても、今の佐賀さんには負け犬の遠吠えに思われるだけでしょう。おそらく、他の人々も同様でしょう。私は佐賀さんに真実を認めるよう頼みはしませんでした。ただ、私と桜田さんの前で頭を下げていただきたいただけ伝えました。私に濡れ衣をかけただけでなく、一緒にかばってくれた桜田さんを侮辱したことに対してきちんと詫びていただきたいたいということのみです。それさえしていただければ、あとは些細なことです。卒業まで何も見えていない男子たちが私を聞くも耐えない言葉で嘲笑したとしても、無駄なことですから」

「あいつも信じてくれてるものな」

杉本が言葉を呑んだ。一瞬幼く見えた。やがてゆっくり首を振った。

「どうした？」

「私はそこまで愚かではありません。見るべきものは見ております」

杉本は口を閉ざした。ゆっくりとスピードを下げ始める汽車の響きが足元から伝わってくる。上総は膝にそっと麦藁帽子を引き寄せ、白いシフォンのリボンをなでた。

——杉本は、もう、気づいているんだ。

上総が一学期の間、ありとあらゆる手を使って関崎の高校生活についての彩りを隠してきたことが、すべて水泡と化したと気づいた瞬間だった。どんなに目に見えないマントでくるんでも、青潟東高校に合格するまでは静内菜種といちゃつかないよう頼み込んでも、それはすべて無駄なこと。杉本梨南はすべて、関崎への想いが届かないことを思い知らされている。関崎は互いの付き合いについては決して認めなかったけれども、杉本からの一途な想いをありがた迷惑に思っていることについては否定しなかった。

杉本の性格をよく知っている上総からすると、決して静内から関崎の気持ちを奪い取ろうと画策することはないと思えた。葉牡丹の鉢植えを抱きしめて差し出すのた精一杯の想い。もし別の相手に関崎を想いを寄せていれば静かにあきらめるだろう。かつて新井林を巡る佐賀はるみとの恋の鞘当とその惨めな結末を思い起こせば、ふたたび同じ道を歩むとは思えない。いや、すでに杉本はそこまでの「力」を失っているとつぶやいたではないか。

——その時は私もまだ力がありましたから、ってか。

なんで気づかなかったのか、上総は自分を殴りたくなる。

なぜ、濡れ衣事件の時、つべこべ言わずに杉本を丸ごと信じてやらなかったのだろう。

どちらであってもありのままの杉本梨南を認めると上総は伝えたはずだった。杉本が拒絶するのも当然だ。杉本はすでに、かつての激しい炎を失いかけている。火達磨になり周囲をやけどさせながら目的に向かいぶつかっていくあの頃の杉本ではなくなっている。あの時杉本がしてほしかったのは、何も考えずにただ見つめて頷くだけのことだった。

隣で杉本が上総をいぶかしげに見つめている。

「立村先輩、どうなさったのですか」

「え、なんでもないけど」

「そろそろ子辺に到着です。いらぬ缶を捨ててまいります、お貸しく下さい」

帽子は上総の膝に預けたまま、杉本は窓辺の缶を摘み上げた。

「捨ててまいりますので少々お待ちくださいませ」

まっすぐな、他人行儀な口調は変わらぬままだった。

「次は、子辺、子辺に停車します」

車内アナウンスが車掌の声で流れる。同時に、席へ戻る気配がある。白いワンピースの裾がまず目に入る。白いエナメルシューズの輝きも。顔を見上げた。声が喉でくっくと止まる。

「どうなさったのですか」

「髪、ほどいたのか」

おずおず問いかけると、杉本は当然といった風に頷いた。

「立村先輩に意味不明の理由で八つ当たりされるのは迷惑ですので。青潟に帰るまではこのまま

にいたします」

腰までたれる長い髪が、杉本の頬にかすかに触れて乱れた。

——杉本は、俺が何をしてほしがっているか、すぐに気づくのに。

上総は黙ったまま、杉本に麦藁帽子を手渡した。

子辺駅に到着した。乗客が空になるのを待って上総は杉本梨南と連れ立って降りた。

「帰りの時刻を確認しておきましょう」

杉本がすばやく駅のホームの時刻表を確認し、

「一時間に一本ですし、一時四十分のに乗ればいいでしょう」

「昼ごはん食べる余裕はあるな」

「立村先輩、そんなにおなかが空いているのですか」

眉をひそめる杉本に頷いてみせる。切符を改札口の駅員に渡し、まずは外に出る。

「ふだんならもう給食の時間だろ」

「それはそうですが、あまりにもいやしくないですか」

「あっそう、杉本は食べたくないの」

意地悪なことを聞いてやる。

「立村先輩ほどではありません」

「じゃあいいだろ、先に何か買っていくか」

駅を出て一通り子辺の町並みを眺めた段階で、小じられた喫茶店でのランチは即却下された。まず、店が想像以上に少ない。小さな食堂と喫茶店風の店が立ち並んではいたが、すでに先客でいっぱいだ。

「たぶん、これから修道院を観光に行く人たちが俺たちと同じことを考えているんだろうな」

「はい、どうしましょうか」

言いながら杉本があちらこちらを眺め、上総を促した。麦藁帽子の下から前髪が覗き、黒い瞳が大きく見える。

「立村先輩、あちらをごらんください。どうもパン屋さんのお店のようですね」

「何か買っていこうか」

「外は暑いですし、何も入っていないシンプルなものにしましょう」

小さな店だったが、焼きたての小ぶりなパンがそれなりに並んでいた。客はだいたい四人くらいか。くるみが刻み込まれた食パン一斤を分け合うことに相談して決めた。本当は惣菜風のパンでもいいと思ったのだが杉本の強い意見に折れた。

「この暑さですとすぐ悪くなってしまいます。ただ飲み物はこちらで用意していきましょうか」

紅茶の紙パックを二人分選び、杉本はすばやく清算した。上総が財布を出す間もなかった。しかたないので上総はマドレーヌを四個包んでもらうことにした。おやつくらいあってもいいだろう。多少は甘くてもよし。

「私の調べたところによりますと、修道院の近くには小さな公園が設置されているようです。修道院の敷地で食事をするというのは敬虔さが足りないと思います。お寺や神社で飲食してはいけないと言われてますし、まずは一通り観てまわってからでもよいのではないのでしょうか」

「でもさ、小学校の遠足で行ったところだよ。なら多少はいいんじゃないかな」

上総が疑問を呈すると、すぐ反論された。

「修道院は神に仕える人々の場所です。そういう場所においては観光客である私たちも礼儀を守るべきです。子どもの頃は許されていたかもしれませんが、それに甘えるのはよくないことです」

となると、いつになったら食べられるのだろう。こんなことだったら青潟にいる間に早くても何か腹ごしらえしておけばよかったと後悔するが後の祭りだ。杉本は食欲なんかどこかにおいてきたかのようにすたすた歩いている。

——それにしても、観光客こんなにいるのに、なんで静かなんだろう。

それなりに人通りはある。店が少ないとは思いますが、それなりにお土産店は並んでいる。有名な寺院もあるらしく、反対方向に歩いていく人々もいる。

なのに、静かだ。うるさくない。みな、話はするがさほど馬鹿話するわけでもない。上総と杉本のようにゆっくり歩いていくのみだ。なだらかな坂が続く。

「見えてきたな。あそこが修道院か」

「すっかり覆い隠されてますね」

少し息が上がったのだろうか。杉本の声はかすれている。

「確か中には入れなかったよな」

「はい、男性のみなんらかの手続きをすれば入ることが可能とは聞きましたが、女性はだめです」

「となると、あそこから覗くだけか」

緑の木々がぎりりと迎える中、赤みがかった煉瓦の建物が正面に浮かび上がってきた。左右に緑の羽根を広げているようにも見える。鉄柵で仕切られているところまでたどり着いた。数人、前で写真撮影をしている。おそらく大学生以上の男性たちだった。青空に映えてさぞ決まった写真が撮れるのではないだろうか。横目で様子見しつつ、上総は鉄柵の近くに杉本を連れて行った。

「ここから先は立ち入り禁止だな」

独り言をつぶやいて、ふと背中に不穏な空気を感じた。振り返った。誰かがいたわけではない。杉本も隣で鉄柵を覗き込んでいる。

——なんだろう？

ついさっきまで穏やかに盛り上がっていた男子五人組が、小聲でなにやらささやき合っている。そのひとりが杉本を顎でしゃくって指しながら、何かをつぶやいている。それに共感してこくこく頷く男子もひとりいる。共通しているのはみな、杉本の背中をじろじろ見つめているだけのことだった。

——どうしたんだろう、杉本がまた何かしたのかな。

しているわけがない。学校ならともかくも、ただ歩いているだけで杉本が害を撒き散らすわけがない。通りすがりの人間ににやにやされるようなことをやらさすわけがない。

上総はそっと耳を澄ませた。ざわつく空気を背から感じるようにして、その言葉の意味を拾お

うとした。理解した瞬間、後悔した。

——すげえでけえな、超ボインじゃん。中学生か、高校生か。

——側にいる男も猿みたくやりまくるだろ、ありゃあ。

——もしかしてあれ、ノーブラ？ すっげえゆれてるじゃねえ？

——うーんどうかな。顔がな、いまいちな。胸だけだったらそこで観たホルスタインの方が断然上じゃねえ？

杉本には聞こえていないと信じたい。

たまたま上総の耳に入っただけのことだ。そうだ、そうでなければ困る。

上総は振り返り、声の主たちをできるだけ普通の目で見返した。

感情なんか込めやしない。杉本が気づいたらことだから。

さすがに噂話に燃えている男子五人組は上総と目が合い、何か思うことでもあったのだろう。

「さ、行こうぜ行こうぜ」

あっさりと背を向けて、坂道をゆっくりと降り始めた。

入れ違いに中年女性のグループがかしましくおしゃべりしながら現れ、男子連中のつぶやいた生臭い言葉をすべて打ち消してくれた。上総がしつこく相手を目で追っているのを発見するやいなや、

「あらごめんなさい、よかったらカメラのボタン、押してもらえないかしら、そこのお坊ちゃん」

いつのかまにか記念撮影の手伝いを任されてしまった。上総がカメラのシャッターの切り方に四苦八苦している間、杉本ひとりですっと、鉄柵を握り締めて中をじっと見つめていた。

一段落してまずは杉本の隣に滑り込んだ。無言の杉本が見つめているものを追ってみた。

「さっきからずっと観ているけど、何か面白いものでもあったのか」

「面白いわけではありません」

「ならなんでずっとこうやってるんだよ」

隣で杉本の真似をしてみせた。ずっと隙間から、赤褐色の建物とその上にある聖母像だけ見つめている。緑の草木がさわさわと揺れているのがはっきりと聞こえる。

「修道院に興味があるんだな」

「別に、そういうわけではありません。私は特に何かを信じているわけではありません」

「ならなんで、ここに今、こうしているんだよ」

上総はゆっくりつぶやいた。

「一度、観てみたかったです。そんなにおなかが空きましたか立村先輩」

また勘違いしたことを杉本は突っ込む。上総としては否定したい。

「俺が空腹で猛獣になりかけてるとでも言うのかよ。失礼だな」

「落ち着くからです」

脈略のない返事が帰って来た。話す気ないとでもいいうのかもわからない。

「なぜだか私も把握できておりませんが、子辺駅に降り立ってここまで黙って昇ってくる間、何かを守られているような感じがして落ち着いたのです。おわかりになりますか立村先輩」

「ああ、なんとなくそれはわかる」

「周りでどんな雑音が聞こえようとも、この建物と景色を眺めているだけで、それで十分といった気持ちになります。どうでもよくなるのです。なにもかも。こんな気持ちになったのは、生まれて初めてかもしれません」

静々と杉本は、視線を建物に向けたまま語り続けた。よくみると、セーラー服のふくらみの先が、ぴったりと鉄柵に触れている。横から見ると確かにゆれ方が尋常ではない。

——雑音が聞こえようとも、か。

あの大学生五人組の、一発ぶんなぐってもおつりがきそうな言葉の羅列。あれに気づかない杉本ではない。もしかしたらまた杉本が見知らぬ男性たちを前にお得意の罵倒劇場を幕開けするのではないかと思っていた。なのに、杉本の視線はずっと柵の奥深くに向けられている。上総には手の届かないどこかを見つめている。

「杉本、聞いていいか」

「なんでしょうか」

青い空が白い雲を引き連れて真上からゆっくり覆いはじめる。天気が崩れる合図だ。

「いや、なんでもない」

言葉を飲み込んだ。まだ、今なら隣の杉本に手を伸ばせる。触れたら張り倒されるかもしれないが、すぐ側で顔をあわせていられる。まだ、鉄柵で仕切られることもないし、はるか遠くに旅立つわけでもない。遠くを夢見ている杉本梨南も、今は上総の側にじっと寄り添ってくれている。そんな相手に、決断を促すような質問を投げかけるべきにはあらず。

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々（7）

牧草地を眺め、売店でクッキーをそれぞれ購入した。結局まだパンには手をつけていない。たまたまソフトクリームを見つけて、半ば強引に上総が杉本へ手渡したからだ。

「食事前なのに、健康にあまりよろしくないのでは」

「いいよ、とにかく何か口にしないと立ってられない」

ベンチに腰掛け、ひたすらなめた。甘すぎず、それでいて歯ごたえがあり、ただただおいしい。味よりも冷たさがなによりものご馳走だった。杉本も文句を言わずに静かになめている。脇に麦藁帽子を置いて、長い髪を背中に追いやるようなしぐさをした。

「髪の毛を解いたのは失敗でした。もうこんなことはしません」

「なんで」

「邪魔です。夏はやはりひとつにまとめた方がよいのです。冬場ならともかく」

杉本はそれでも最後までソフトクリームをなめ終えた後、脈を取る部分で時間を確認した。

「うまくすれば一本早く青潟行きのお車に乗ることができます。急ぎましょう」

「え、これから公園も回るんじゃないのか？」

「いいえ、これから青潟へ向かう用事がございます。先輩には無理やりお付き合いさせていただきましたようで申し訳ございませんでした。これからまっすぐ参ります。それでは」

黙っているとそのまま杉本一人で坂道を転がっていきそう。上総も立ち上がった。

「だからなんでそう唐突に予定変更するんだよ。せっかくゆっくり散歩するんだったら、駅前の喫茶店にちょっと寄ってもいいかなとか思ってたんだ」

「その必要はございません」

杉本はきっぱり答えた。

「今、ここでソフトクリームをいただきました。ごちそうさまでした。これだけでは正式な食事にこそならないものの、駅に着けば少しは待ち時間もあることでしょう。そこでいただくもよし、席が取ればそこでゆっくりといただくもよし、そういうものではないでしょうか」

自分の腕時計を見やり、時刻を計算する。空も少し雲が増えてきたようだし、雨が降る可能性も考えれば早く青潟に向かった方がいいのは確かだ。杉本の言う通り次の電車には間に合うだろう。ただ、規則正しい行動を好む杉本の性格とは思えない気まぐれな言動に、疲れてきているのも正直ある。いつも振り回す相手なら覚悟はしている。杉本だから、わからない。

「杉本、あまり言いたくないけどさ。連れがいる時はそれなりに配慮するもの、普通するよな？」

「先輩がついてきたいとおっしゃるからです。私は最初、お帰りになることをお勧めいたしました。お車の中でお話も一通り終わりましたから、もうひとりでお戻りいただいてかまわないのです」

「そういう問題じゃないだろ？ 杉本、俺は確かに話があると云ったし最初の一点目は確かに終わらせたよ。でも、まだあるってこと、少しは想像してもらわないとさ」

「それは、帰りのお車内でも難しいことなのではないでしょうか」

「難しくはないけど、ただできれば相席の場でできるものじゃないよ」

上総はかんで含めるよう言い聞かせた。

「行きは運良く、先頭の席を押さえられたからいろいろ話もできたけど、今もほら、こんなに観光客がたくさんいるだろ？ そう考えたら無理だよ」

「無理とは思えないのですが、立村先輩がそこまで仰るのならばそういたしましょうか」

言い終わるやいなや、杉本は帽子をかぶり直し、ポシエットを揺らしながら急ぎ早に売店を出た。追いかける上総のことなど気にせず、やはり転がるように駆け出した。風が出てきている。やはり雨が一振りきそうだ。

「杉本、早すぎる、ちょっと待てよ」

「急がなくてはなりません」

駆け出しながら杉本は上総と並んだ。歩調を緩めた。

「立村先輩のご希望が、ふたりでじっくりお話をとということであれば、すべきことはひとつです。一刻も早く子辺駅に向かい、その上で相席にならない席を押さえることです。本気で走れば先輩は私よりも早く着くはずですよ。お忘れですか、先輩は去年、クラス対抗リレーの選手だったではありませんか。人並み以上の脚力はあるはずですよ」

「いや、それは、ただ」

どもる上総をきっとにらみつけ、杉本はまた坂道を駆け出そうとし、躓きかけた。転びはしなないが、バランスを崩して二、三步ふらついた。

「大丈夫か。そんな靴履いてるのに走るからだよ」

「先輩のご希望通りにさせていただこうとしておりますが」

「いいよ、そんな急がなくても。遅れたらまた一時間待とうよ。どうせパンもあるし、お菓子もあるし。時間はつぶせるよ。それに、杉本に見せようと思ったんで本も持ってきたんだ」

かばんに押し込んだ例の「ミスター・パーフェクト本条氏」特集マイコンプログラム雑誌である。話のネタに、というよりも本条先輩経由で青潟東の話題を用意するために小道具もそれなりに用意してきた。話の流れからして無駄になるかと思っていたのだが。

「本ですか？」

靴を履き直し、今度は普通の速さで歩き出し、杉本は上総に小首をかしげた。

「うん、さっき話した。本条先輩のマイコンプログラムが載っているっていうマイコン雑誌なんだ。昨日本条先輩からもらったんだ。先輩の特集が組まれてるんだ。本名は隠してペンネーム使っているらしいけど、いかにも先輩らしい名前作ってて笑えるよ」

「マイコンプログラムですか。本条先輩の部活動ですか」

「部活動とは違うよ。本条先輩は最初、演劇部に入っていたけど相性が合わなくて一年でやめたんだって。その後、マイコンに興味持って独学で勉強し、近所の電気屋さんに通ってプログラム打ち込んで雑誌に投稿して、その繰り返しで今では有名人になったんだ。すごいよな」

「行きの汽車でも先輩はそのようなこと、おっしゃってましたね」

杉本が小さく頷きながら、上総のかばんをじっと見る。

「俺も本条先輩から青潟東の学校事情についてはいろいろ聞かされていて、苦労してるんだなっ

て思ってたんだ。もともと公立とは勉強の方法も部活動も、もちろん委員会もいろいろと勝手が違うから、いくら本条先輩が天才でも大変だったと思うよ。でも、本条先輩のすごいのは、自分に合わないことに気づいた段階ですぐ、本当の路を探し出したことなんだ。俺にはやはり真似できないな」

「演劇の代わりに、マイコン、ですか」

「そう。本条先輩は評議委員会で三年間ビデオ演劇やってたし、ほとんど主役と演出両方やってたし、演劇部でもきっとスターになれると思っていたらしいんだ。でも、青潟東の高校演劇は人を感動させるための、悪くはないんだけど青大附中のカラーとは全く違ったものを作風としていたらしいんだ。台本もオリジナルではなくて、高校演劇の世界で名作とされる脚本を選ぶ必要があったらしいって。それがいいか悪いかは俺も正直わかんないけど、本条先輩にはどう考えても合わないよな」

杉本が頷くのを確認して、少し歩くのを早めた。坂が緩やかになると同時に駅の三角屋根も見えてきたようだ。発車時刻には十分間に合いそうだ。パン一枚くらいなら腹に押し込めそうだ。本条先輩の話をしていると空腹を忘れられるので、このまましゃべり続けることにする。

「そういえば、青大附高には演劇部がないのですか。最近、一部の有志たちが中学で演劇部活動を始めているらしいと聞いたことがあります」

「あるよ一応。ただ活動については全然わからないな。本条先輩がもし青大附属の演劇部に入っていたら、たぶんあのビデオ演劇と同じ乗りに染めてるよ。そういう人だもの」

「私はあまり一般的な演劇になじみが薄いのですが」

——オペラにしか興味ないもんな。

とりあえずは促す。

「ビデオ演劇のようなテーマは、高校演劇の世界で受け入れられないのでしょうか」

「たぶん受け入れられないんだと思う。俺が本条先輩から聞いた限りだと、まず時間制限があって六十分以上超えるとその段階で減点。脚本の話もしたけれど、中には自分で創作する学校もあるし顧問の先生が書くこともあるらしい。ただ、部活としての目的は地区大会優勝だし、最終的には全国大会を目指すことになる。そうなると、どうしても受け入れられやすいテーマや、高校生の身の丈にあった脚本を選ぶ必要が出てくる。それがすなわち、感動ものと呼ばれるカラーで、青潟東は主にその感動させることを目的とする作品を好んでいたらしいんだ。つまみ食いでも申し訳ないんだけど、わかるかな」

「分かりづらい説明ということをご理解いただけているのであれば結構でございます」

また傷口をえぐるような言葉をぶつけた後、杉本は頭の中を整理するように復唱した。

「つまり、本条先輩がなじんでこられた青大附中のビデオ演劇と、青潟東の高校演劇とは、全くの別ものということですね」

「そう、その通り」

「さらに確認いたしますと、青大附中が評議委員同士の自己満足で終わっている作品だったのに対し、青潟東演劇部は観客を感動させることを求めているということなのですね」

「御幣はあるけど、そんな感じなのかな」

杉本は相変わらず手厳しい。

「それであれば本条先輩が違和感を感じるのは当然のことでございます」

「え、それなんで」

駅に到着した。青潟行きの電車があと十分ほどで停車するとのアナウンスが流れていた。すぐに切符を購入した。乗り込む客は十名程度、思ったより少なかった。まずは待合室に腰掛けて、くるみの食パンを一ちぎって食べた。かりこりして、やわらかくて、十分満たされる。杉本も遠慮がちに手を伸ばした。パンの耳をまずちぎり、半分だけちぎって少しずつ口に運んだ。

「さっきの話の続きだけど」

一枚だけなんとか流し込み、改札を潜り抜け、駅のホームに向かった。鈍行行きのホームに向かう。杉本が麦わら帽子をさりげなく直しながら歩いていくのを追いかけてながら、上総は話しかけた。どうもきつすぎる。本条先輩になぜ、と聞きたい。

「私も一時期、評議委員会に関係しておりましたので感じていることなのですが」

一番先頭の乗車ホームに並び、杉本ははるか向こうの赤茶けた修道院を眺めた。すっかり空は白くなり、奥の方には黒みがかった雲が近づいてきている。

「本条先輩は確かに素晴らしいトップでした。それは認めます。個人的には顔と同レベルの才能をお持ちかと思われまます」

——顔、ね。そういうことかよ。

どうせ本条先輩や新井林や関崎のような「男らしい」顔が好みなのだろう。わかっている。

「しかし、その本条先輩がなぜ、青潟東演劇部と合わなかったのか。そう考えてみると私には見えてくるものがございます」

「それは、何」

「本条先輩は、自分の楽しみを追及されてらただけなのです」

思わず杉本の眼差しを探った。にらんでいない。ごくごく自然なやわらいだ瞳だった。今日の杉本にはきりつけるような激しいものが何一つ感じられない。その理由がどこにあるのか、上総なりに推理してみたのだが、結局結論は出てこない。

指を折りながら、話し続ける杉本。追いやっていた髪の毛がいつの間にか前にたれていた。髪をほどいたままの杉本は、何か黒いマントに包まれたようにか弱く見える。

「ビデオ演劇で申しますと、きっかけは結城先輩が自分の合法的部活動代わりとして企画したものが始まりと伺っております。本条先輩も、評議委員会の仕事だからというよりも、自分がスターになりたいから、といった気持ちの方が強かったのではないのでしょうか」

「それは、そうかもしれないな。本条先輩だし」

「時間制限なし、ただ面白いものを追求すること、それが間違っているとは思いません。ですが、完成度を考えるといかがでしょう。少なくとも部外者の人に見せて自慢できるものでしょうか」

「面白いとは思うけど、完成度は確かに、難しいよな」

かすかにホームへ響くものを感じた。汽車が近づいてきたらしい。

「忠臣蔵は、杉本も知ってると思うけど水鳥中学生徒会の人たちに見せたよ。それと学校でも給

食時間に流れたことあるし」

「奇岩城も、ですね」

痛みの蘇る思い出。最低限の返事に留めた。

「作っている時は楽しかったでしょう。脚本を作ったり、大道具をこしらえたり、もちろん演劇がお好きであれば充実するのは当たり前のことです。私を見た限りですが、本条先輩は演劇部でも、自分が楽しいものを追及しすぎたのではないのでしょうか」

「それ、まずいのか？」

上総が問い返すと、杉本は大きく頷いた。

「先輩のお言葉を借りるならば、よい悪いの問題ではありません。本条先輩がおやめになるのは当然のことです。なぜなら、自分のやりたいことと、観客のほしいものとは違うからです。青潟東の演劇をごらんになる人々は、きっと感動したかったのでしょう。本条先輩は自分が楽しみたかったからでしょう。それがぴたりと合えばそれにこしたことはないのですが、そうではなかったのではないですか」

「でも自分が楽しめない相手も感動しないんじゃないかな」

さりげなく本条先輩をフォローしてみるが無駄に終わることは分かりきっていた。杉本には何を言ってもかなわない。

「青大附中では本条先輩が楽しめば楽しむほど、周りが感動してくれました。でも青潟東には本条先輩が楽しめば楽しむほど、さめていく人々ばかりだったのではないのでしょうか。青潟東で求められていたのは、相手をとことん楽しませ、喜ばせるタイプの演技者ではなかったのでしょうか。私には、そういう気がしてなりません」

杉本は立ち上がった。風が強くなってきたのか、帽子ごと頭を押さえた。

「たぶん、立村先輩であれば、青潟東演劇部ではうまくやっていけたのではと存じます。さあ、参りましょう」

到着したらすぐ、入り口の戸を開き、先頭を切って乗り込んだ。すぐに先頭席の窓から顔を出し、上総を手招きした。どうやら目的の二人きり席は押さえられたようだった。

その四 高校一年夏休み十日目・立村上総の杉本梨南を振り回しあう日々 (8)

三桜駅から終点青潟駅までそのまま乗る人は少ない。そこが鈍行のありがたいところで、適度にどこかかしら入れ替わっていく。特急だと三十分程度だが、鈍行でどこまでも行くとなるとだいたい三十分程度かかる。

「それでもかなり混み合ってきましたね」

「そうだな、やはり夏休みなんだろうな」

時折通路で空席を狙う視線も感じる。幸い知り合いはいなさそうだ。

「杉本は夏休み、八月以降の予定ってあるのかな。学校の講習とか、例の桜田さんとの集まりとかそういうこと以外に」

上総が問いかけると、杉本はこっくり頷いて答えた。帽子はを膝にきちんと乗せた。

「一泊二日程度ですが旅行の予定はあります」

「どこらへん？」

杉本は知らない街の名前を挙げた。

「知らないな。親戚の家？」

「いえ、いろいろと用事らしきものもございます。立村先輩はいかがなさるのですか」

話を振られて上総もしかたなく答えた。

「お盆過ぎになるけど、二泊三日くらい親の手伝いで出かける予定はあるよ。帰ってくるのが下手したら二学期の始業式あたりになるかもしれない」

「それは何か、お母様のお手伝いですか」

上総は短く答えた。

「そう。詳しいことわからないけど、日本伝統芸能関係であることは確か」

嘘ではない。期末試験当日に高熱でぶっ倒れ、その際母に持ち出された件がその後具体化した。ある日本舞踊のお師匠さんが記念の会を行うとかで、その舞台監督……よくわからないがイメージとしてはそんな感じか……として母が出陣することになったらしい。父との打ち合わせも済んでいたようで、よければ人足として上総を連れていきたいとの希望らしい。いったい何に使うつもりなのか、上総には全く想像がつかない。

「面倒けどしょうがないよな。できればそれまでに宿題や自由研究は片付けたいんだけどさ。なかなか進まない」

「私は昨日の段階ですべて終わらせました。自由研究だけは桜田さんと一緒に行く予定なのでまだ時間がかかるかと思われませんが恐らく大丈夫でしょう。時に、立村先輩、自由研究の内容をお伺いしてもよろしいですか」

まっすぐな口調で、杉本は麦藁帽子を胸に当てるようにして尋ねてきた。長い髪の毛が午後の日差しに照らされて甘い色に光る。

「羽飛、清坂氏とふたりで、現代美術の有名な画家をテーマに論文を作ろうかってことになっているんだ。その人自体は日本人なんだけど、海外での活動がほとんどらしくて情報の九割方が英語の文章らしいんだ。俺はあまり、その現代美術興味ないんだけど、英語の訳くらいはできる

かなってことで混ぜてもらうことにしたんだ」

あの憎っくき麻生先生のたくらみにより、個人での原書翻訳で片付けることができなくなり、いやおうなしに友だちとの集団活動にせざるを得なくなった。こういう時、中学時代の心つながる友だちのありがたさを感じる。

「そうなのですか。立村先輩は現代美術があまりお好きではないと思っておりましたので、意外な気がいたしましたが、そのようなご事情であれば納得です」

さっきは本条先輩の演劇に対するスタンスを手厳しく批評していた杉本も、上総のことについては珍しく流している。杉本はもともとヨーロッパの文化、優雅で華やかなものを愛する傾向がある。ひとつの例がオペラで、ワーグナーの「ローエングリン」に心酔していることは上総も以前から知っている。もっとも本人は気づいていないようだが、杉本は生まれつき音程を取ることを苦手としている。周囲からも救いようのない音痴だとささやかかれていて、実際その通りと言わざるを得ないのが辛いところだ。何度も探りを入れてみたが、杉本本人の耳には自分の歌う声もすべて自然に感じられるらしい。

「杉本も、あまり、現代的過ぎるのは苦手だろ？ 家がひっくりがえっていたり、キャンバスが真っ黒くぬったくられていたりとか、いわゆる前衛的なものって」
「おそらく、上総とほとんど感覚が変わらないのではと見ていた。

「はい、家はきちんと建っているものがよろしいですし、人の顔はきちんと美しく描かれているものが一番です。背景画は細かく丁寧にリアルなものが私は好きです」

——じゃあ俺と同じだよ。よかった。

杉本の言葉に一安心し、上総は次の質問に関するタイミングを計り始めた。

——例の家庭教師ごっこについて、もう少し煮詰めておかないとな。

行きの汽車で語り合った通り、杉本梨南には全くやましいことなく、むしろ人のためになることを楽しみながら行っているだけであるということは確認できた。実際現場を観ていないので百パーセントとは言えないかもしれないが、この辺はあとで考えることにする。少なくとも、他の男子たちがたむろっていてタバコだかゴムだか使うようなことはやらかしていないようだし、環境も杉本が丁寧に掃除しお茶まで用意するくらいなのだから、不衛生な場所ではないのだろう。

目的はいたって単純。

——桜田さんの友だちを公立高校に合格させるため、勉強を手伝っている。

これだけだ。なんと分かりやすい結論か。

ただ、その友だちというのが過去にいろいろやらかした経歴があり、公立中学の先生……おそらく担任だろう……が気をもんでいる。それこそ不純異性交遊とかシンナー遊びの巣窟になるのではとはらはらしてる、というわけだ。運悪く杉本も桜田も、青大附中ではそれなりに札付き扱いされているのをもって話は実際よりも上積みされている状態ときた。

——けど、埃、出しようないだろ？

駒方先生にはどちらにせよ、杉本と話し合いした結果を伝えるつもりではいる。隠すことなど

何もない。きちんと杉本にもそのことは伝えておくつもりでいる。

——でもな、駒方先生もなんとかして俺を連れて行ってその現場を押さえてくたてならないって顔してるしな。杉本、そんなことされたらものすごく怒るぞ。この場で縁切りされるかもしれないよ。

いったいその、杉本に提出したいという駒方先生のプランがどんなものなのか、上総には正直想像ができない。今、している秘密基地のような場所ではなく、別の教室とか用意してそこで同じことをさせるつもりなのだろうか。昨日本条先輩も話していたとおり、他の公立中学生が混じっている以上青大附中で対応できる内容とは思えない。

杉本が純粋に、桜田の友だちを助けようと心を砕いているだけならばそのまま放置しておいてもいいような気が、上総はする。あくまでも杉本に対しては。ただ相手の桜田愛子なり、公立の中学生たちまで信用できるかとなると、心もとないところもある。

——東堂はこのこと、知ってるのかな。

昨日すっかり失念していたことを思い出した。一応東堂の彼女が桜田愛子であることは承知していたけれど、駒方先生はあいつにも上総に話したような内容を伝えているのだろうか。あまり付き合いはないので確認するのも難しい。ただ南雲の親友でもあるので、間に入ってもらって下宿先での相談も可能ではあると思う。

「杉本、行きで話していたことなんだけど、ちょっとだけ続きいいかな」

「どうぞ。この場でけりをつけたいのであればよろしく願いいたします」

つんと澄まして、杉本は険しく上総を見据えた。

「私には何も疚しいことはありませんので」

「それはわかってる。どう考えても杉本悪くないもんな」

まずは肯定を。

「ただ、駒方先生たちはものすごく杉本たちのことを心配しているんだ。過保護すぎるってほどにさ。俺はどう考えても変だと思うけど、どうしても邪魔したくてならないようなんだ。一言で片付けると、つべこべ言わずにやめてほしいってことらしいよ」

「立村先輩も同じ考えですか」

「まさか」

即答した。冗談じゃない。

「俺もそんなこと言われたら頭に来るよ。はっきり言うけど、俺は杉本がしている個人教授のこと、すごくいいことだと思う。その人たちだって、喜んでくれてるんだろ？ 桜田さんも教え方がうまいらしいし、杉本もだろうし」

「その通りです。立村先輩にも一度お見せしたいくらいです」

誇らしげに杉本は語る。

「私は理解することこそ簡単にできますが、桜田さんのように噛み砕いて丁寧に説明する技術については持ち合わせておりません。しかも我慢強く繰り返すのです。こんなこと誰でもわかっているだろうと思われることを、相手のプライドを傷つけることなく、エンドレステープのように繰り返すのです。しかも、笑顔で、です」

そうそうできることではない。わが身を思う。ここでは口を挟まない。

「彼女が得意とするのは理数系です。私はどちらも得意といえばそうですが、あえて国語と英語、社会を担当しています。桜田さんは少女漫画の絵を描くのもお得意なので、ある時は数学の文章題をもとにしてロマンチックな漫画を一作書き上げてしまったくらいです」

「少女漫画と、数学の文章題？」

想像を絶する。もしこれが本当だったら、青大附中はとんでもない才能の持ち主を見落としていることになる。

「桜田さんが言うには、理数系科目はほとんどが物語に構成できるものなのだそうです。そのことばかり考えていたので学校の成績はあまりよくないとかおっしゃってますが、実際はこうしたら失礼ですが佐賀さんよりもはるかによいのです」

「そうなんだ、知らなかった」

「すべて感じることを物語に構成することが好きな人なので、授業というよりもむしろ彼女の物語を毎回聞かされているようなものです。時折、みんなで物語をいろいろ作りあったりしていくうちに、自然と問題も解けているといった感じでしょうか。結果、私も含めてみな、一学期の成績は格段伸びたはずです。証拠も必要とあれば用意してくれると思います。そのために通知表というものがあるのです」

「論より証拠だな」

——さて、ここからどう持って行くか、だな。

すでに上総の選択肢は、杉本と桜田のコンビネーションが生み出す未知の勉強会を守る方法に絞られている。駒方先生や狩野先生がどう思うかは別として、桜田愛子はまさに教師の鑑ではないだろうか。実際観ていないというところはあるにしても、学年トップの杉本がここまで褒め称えているという事実、また成績にもすでに反映されているという確固たる事実、さらにどんなかんたんな質問でも笑顔で教え続けるというところ、これがどんなにまれなことだか、落ちこぼれの上総にはいやというほどよく分かる。

それに、数学の文章題で少女漫画を描くことができるというのはどういう発想なのだろうか。A、B、X、Y、それぞれを擬人化するのだろうか。「ねむり姫」のごとく王子の魔法のキス代わりに方程式を解くような場面が出てきたりするのだろうか。

「俺も見てみたいな、桜田さんのその説明とか」

「そうでしょう、当然です」

「でも、駒方先生もその場面を見てたわけなんだろう？」

「はい。ただあまりぴんと来ないご様子でした。駒形先生はご高齢ですのできっと、受け入れがたいものがあったのかもしれない。私たちが単純に、遊びほうけているだけと判断したのかもしれない。たまたま桜田さんが漫画のストーリー作りと説明を取り混ぜて行っているところでしたので」

だいたい話が見えてきた。上総の答えも見つかりつつある。手駒は用意できた。

「わかった。杉本。今思いついたことあるんだけど、一通り聞いてもらえないかな」

あたりを見渡した。知り合いはやはりいない。青潟へ近づくにつれて人が増えてはくるけれども、上総たちの席にはさすがに寄り付いてこない。小声でささやきたい。手でもっと近づくよう招いた。窓辺の風と揺れる響きにかぶさるよう語り続けた。

「まず、今日話したことを俺はすぐ、明日にでも駒方先生に話さなくてはならないんだ。これは約束したことだからしかたないけど、杉本の話聞いた限りでは全くそのまま話して問題ないと思うんだ。だってさ、青大附中はもちろん公立中学の方からも表彰されてもいいことだよ、杉本たちがしていることは」

「当たり前です」

きっぱり答えた杉本に、さらにささやいた。

「でも、頭の堅い先生たちには通じないと、そういうわけだろ？ だったらさ、その場をもう一度駒方先生と狩野先生に見せて、文句あるかってとこ、見せ付けてやったらどうだろう？」

「それも考えましたが、駒方先生があの反応ですから」

力を込めて続けた。手を杉本の膝にある麦藁帽子に載せた。ざらざらした感触が心地よい。話しやすい。

「駒方先生だけだろ、来たのは。狩野先生は来てなかったんだろ」

「はい」

「駒方先生ははっきり言って美術の先生だから、理数系には弱いんじゃないかって気がするんだ。桜田さんは理数が強いんだろ。それなら数学科の狩野先生を呼んだほうがいいよ。狩野先生は話が分かる人だから、桜田さんのやり方を見ればすぐに納得するよ。少なくとも駒方先生よりはまともな反応ををすると思う」

「そうでしょうか」

表情を曇らせる杉本。少し俯いた。狩野先生にはほんの少し恨みがあるはずだ。

「あと、これも明日俺なりに先生に話しておくつもりだけど、桜田さんの友だちが通っている公立中学の先生たちにも同じように見せ付けてやること、できないのかな」

杉本がぱっと顔を上げた。

「それは、わかりませんが」

「うちの学校の先生たちだけだと偏ってしまうから、できればその担任の先生も呼んで目の前に突きつけてやるってのはどうかな。別に何も悪いことをしているわけじゃないんだし、成績だってちゃんと上がったんだから文句つけられるいわれなんてない。目の前に突きつけてやれば、もう横槍入ってくるなんてこと、ないよ」

拳を握り締める。かばんに手を置く。上総は力を込めて訴えた。

「いいか、杉本は間違っていない。勝手に過去のこと引っ張り出して余計なおせっかいをする人たちに対して、正当な抗議をしているだけなんだ。俺は誰がなんと言おうとも、お前が正しいことを証明するから。もうこの前のような思いはさせない。約束するから」

杉本は首を横に振り、寂しげにうつむいた。

「いいえ、お約束していただかなくてかまいません」

「なぜ？」

もう一度首を振りなおし、窓辺に視線を向けた。

「お約束していただいたら、叶えられなかった時立村先輩を恨むことになります。もうそのような思いをすることは、避けたいのです」

上総も肩越しに振り返った。青潟近郊の平たい建物が立ち並んでいるのが見えた。もう数分で終点青潟駅に到着だろう。杉本の声が首筋に染みた。

「でもおおよそは立村先輩と考え方は一緒でございます。自分を信じるのみです。立村先輩、そのようにお手配、よろしく申し上げます」

すぐに顔を杉本へ向けられなかった。喉もとで「うん」と答え、そのまま上総は近づいてくる青潟の景色に見入るだけだった。

「これからどこ行くの」

到着した頃には小雨がぱらついていて、傘なんて持ってきていない。

「どうしましょうか。傘を買っていかねばなりません。お店に寄らないといけません」

「いいよ、その辺でビニール傘買って行こう」

店を探すが杉本に止められた。

「結構です立村先輩。先輩はこのまま品山にお帰りください」

「いやそんなつもりないけど」

まだ三時になるかならないか。まだまだ遊べる時間ではないか。上総なりに汽車の中で予定を組んでおいたのだが、この雨でお流れになりそうだ。なんとかならないものか。

「まだ早いよ。もう少しまともなもの食べたいよ」

「立村先輩は食べることしか考えていないのですね。まったく」

「いやしいなんて言うなよ。杉本が食べなさ過ぎるんだよ」

憎まれ口を聞きながら駅の売店に向かう。まずは傘を捜さねばならない。まだ夕立というには早い時間帯だが、ひと雨降ったらあっさり虹が出ないだろうか。少しだけ雨宿りすればなんとかなりそうな気がする。

「あのさ、少しだけどこかで座っていこうよ。アーケード通ればそれほどぬれないですむしさ。ほら、角のところにあるドーナツ屋さんあるだろ、そこにしよう」

「でも、私は」

「俺が誘ったんだから今日は言う通りにしろよ」

有無を言わず駅のロータリーに出る。雷が鳴り響きつつある。杉本をせかしながら横断歩道を走りぬけ、駅前商店街のアーケードを突き進む。杉本が書店を見つけてちらと目線を走らせたが強引にこちらを向かせた。誰が「佐川書店」なんて立ち寄らせるものか。杉本のことだ、よい本見つけたら買うかもしれないが、誰があいつの家業をもうけさせたりするものか。

バス停前のドーナツ屋は席が埋まっていた。しかし雑居ビルの二階に目を向けると喫茶店らしき気配の店が見える。珈琲専門店らしい。見た感じ中学生の立ち寄るような場所ではなさそうだった。

「あそこにしてみるか」

「よさそうですね」

杉本の了解を得られたので階段で昇る。すでに杉本の白いワンピースはほんの少し濡れたらしく、身体にぺたりと張り付いている。思わず見てはならないところに目が行ってしまい、すぐに逸らす。見なかったことにする。

ガラス戸を押してまず中に入る。夏休みの空気とは異なる静けさが漂っている。先客に学生らしき人は誰もいない。みな、本や新聞を片手にくつろいでいる。

「お二人さまですか」

ウェイトレスらしき女性が出てきて席に案内してくれた。つとんげんな態度だったが、「ここでは大きな声での会話は控えていただいておりますがよろしいですか」の言葉にすべてを悟った。

「承知いたしました、メニューお願いします」

完全にここは普段上総が触れている世界と異なる場所だということだけは、よくわかった。心置きなくおしゃべりする場所ではない。ただそれぞれひとりで物思うための場所だった。杉本以外の相手と立ち寄るべきところではない。

杉本は少し腕をさするようなしぐさをし、首をかしげつつメニューを開いた。黒い革の表紙に、珈琲名だけがずらりと並んでいる。ケーキセットも一応、あるにはある。腹の足しになるかどうかは難しいところだった。トーストセットもあるが時間がだいぶ過ぎているようでこれもパスとなる」

「ケーキセットにしようか」

「はい」

待ち構えていたウェイトレスに手で合図をし、上総はふたり同じチーズケーキセットを注文することにした。選択肢がそれしかない。洗濯できるのはひとえに珈琲のみ。選びようがないので、本日のお勧めとあるブレンド珈琲にした。

「話がしづらいな」

「それでいいではありませんか」

できるだけ声を潜める。BGMがクラシック音楽なのは杉本にとってうれしいことかもしれないが、できるだけ小さな声で話しても目立ってしまうのは悩みどころだった。なんだか今日は厄日だ。杉本と思う存分語り合うつもりでいたのに、どこかパーフェクトに進めない。話さねばならないことが、まだたくさんある というのに。

「杉本、あのさ」

「声が大きすぎます。静かになさいます」

「それなら隣に行くけど、いいかな」

「別にかまいませんが」

四人席、革張りの赤い席。腕を置くところもある。近づきすぎることはない。上総はグラスを持って席を移った。冷やかに杉本が見据えるのもかまわずにまずはお絞りを手に取った。温かい。

「これならささやき声でも聞こえるだろ」

「確かにその通りですが、今日の立村先輩の言動は常軌を逸しております」

「いったいどこがだよ」

「今のよう一度決めた席を移るなんてこと自体、普通はなさいません」

「しょうがないだろ。できるだけ小声で話さねば鳴らない場所なんだから」

そうこうしているうちにケーキと珈琲が並べられた。少し大きめのレアチーズケーキだった。まずはケーキだけ一気に流し込んだ。珈琲ももちろん口にはした。味は正直わからないが、一口熱いものを身体に入れるとなぜだか気持ちが凧いだ。ふうっと肩から力が抜けた。夏だからとい

って冷たいものばかり飲むのは身体によくないわけがわかったような気がした。ただケーキの腹持ちはよくない。あっという間に吸収されてしまいそうだ。

杉本は隣で、小さくケーキを切りながら口に運んでいた。白い飾り気ないコーヒーカップを手において、ゆっくり啜っていた。

「アイス珈琲のほうがよかったのか」

「いいえ、今は熱いほうがおいしく感じます」

「俺もだ。ほんと」

横目で見ながら頷きあった。カップを同時に置いた。

「杉本、これ見る？」

かばんから雑誌を取り出した。

「これは」

黙って表紙を指差した。本条先輩特集号のマイコン雑誌だ。頷いた。これだけでたぶん杉本ならわかるはずだ。

「お借りいたしますがよろしいですか」

「いいよ」

杉本に手渡し、上総は改めて珈琲をソーサーごと持ち上げてひとくち、またひとくちと運んだ。外は雨が本降りだろうか。あっさり夕立で終わっただろうか。流してくれればいい。杉本に「常軌を逸した行動」などと叱られた自分の言動が、どこからくるかが珈琲ひとくちで少しずつにじみ出てくるのがわかるから。

——やはり、杉本は先のことを考えているんだ。そうに違いない。

霧島から聞いた噂はまゆつばもの。信じるわけにはいかない。杉本ならばあっさり否定してくれるものと信じていた。一年後半から杉本の青大附中における望みは、青淵東高校に優秀な成績で合格し周りの連中を見返すことだと思っていた。どんなに暴れても、どんなに泣き叫んでも、杉本の真なる願いはかなわない。大切に思っていた友達には自分の行為を「いじめ」として扱われ、小学校時代から想いの裏返ししか表せなかった相手にはとことん憎まれ、やっと見つけた王子様も杉本のことは全く目に入らず別のお姫様とじゃれあっている。自分の能力にしがみつきたくとも、周囲のやさしい大人たちはどうでもいい価値ばかり褒め称える。せいぜい興味を持つのが、

——俺みたいな価値のない奴ときたら、人生恨みたくなるよな。

それでもこうやって、一日時間をもらえるだけ上総は恵まれている、と思う。どうみてもローエングリンになれない自分を、杉本はいったいどう見ているのか気にならないこともない。王子様の最新情報を伝えるための僕とでも思っているのだろうか。それでもいい。だから今は一緒にいられる。この時間をともにできる。

本条先輩に問い詰められ、自分の杉本梨南に対する想いを認めた時から自分が新しく生まれ変わったような気がする。「恋愛感情」が何なのか、正直理解できない。ただ一緒にいたい、こうやって語ってみたい。同じ場所で顔を見合わせ身を寄せ合いたい。その気持ちが「恋」なの

なら、もしかしたらそうなのかもしれない。たとえ思いがよその奴に向けられていたとしても、こうやって一緒にいられるのは自分なのだから。

——青潟東に行っても、しょせん市内だ。自転車で通えばいくらでも顔をあわせられる。それに杉本の家は青大附中から近くだし、時間さえうまく合わせれば朝の挨拶くらいはできるかもしれない。青大附高に進学しなくても、いくらでも接点はある。

本条先輩といまだに遊んでいられることから、杉本に対しても同じように時間が流れると思っていた。霧島が、あんなことを言うまでは。

噂だ、しょせん単なるデマに過ぎない。殿池先生がたまたま杉本の家を訪問していたのはさまざまな事件の後処理に過ぎない。それさえわかれば上総は余計なこと考えずに杉本をじゃらして遊んでいられる。いらいらして八つ当たりなんてしないですむ。

肩に流れる杉本の長い髪を眺める。雨にぬれたのか少しぺたりと重たく張り付いているように見える。つややかに輝く髪が、すぐ手に届く場所にある。よく羽飛が美里の髪の毛を引っ張って遊んで叩かれているのを見たことあるが、今上総が同じことをしたらひっぱたかれるんじゃないだろうか。ついでにうるさくした罪で喫茶店をおん出されるかもしれない。

——まだ八月だし、決断なんてしてないよな。

多少、考えるところはあるかもしれない。学校側が「ギフト」として学校推薦を行う可能性もゼロではないだろう。しかしそれ以上に杉本のプライドが青潟東をあきらめるなんてことを許すだろうか。上総にはまずありえないこととしか思えない。杉本にとって青潟東進学とは、ただの公立高校受験成功だけではない。今まで杉本をいたぶりののしってきた青大附中の連中を見返し、激しい憎しみを昇華させるためのシンボルなのだ。そのシンボルを奪い取り、目標を失わせるなんてことは上総からしたらそれこそ一種の「いじめ」に見える。それも、学校総仕掛けの一対多数の残酷なやり口だ。先日の「修学旅行濡れ衣事件」も含めて、これから先杉本の傷が拡がっていくのを、なぜみな意味ありげな視線でもって見守るだけなのだろう。

——どんなに杉本が手を伸ばしてもほしいものは誰も差し出してくれない。代用品ばかり手渡されて、喜ばない自分が悪いのだと攻め立てられて、これからも過ごしていくのか杉本は。

かき集めた花束を上総なりのアレンジで手渡した、半年前の卒業式。

ありがとうとは言ってくれたけど、自分が杉本にとって渡してほしい相手ではないことくらい承知している。受け取ってくれたことには感謝しているけれども、それは上総の目的を達しただけに過ぎない。杉本はまだ、ずっとおちょぼ口で代用品ばかり差し出されているだけだ。どうすれば、杉本の本当にほしいものを渡せるのだろう。何一つ、本当になにも上総は持っていない。誰が杉本に、完全なる想いを手渡してやれるのだろう。

「杉本、ほら、この本にも書いてるだろ。本条先輩電話インタビュー受けてるんだよ」

できるだけ耳元でささやいた。髪の毛に顔がつきそうなほど近づいた。

「本条先輩、高校で同好会作ったことまで話してるよ。やりたいことがあれば自分でどんどん進めていけるんだって自慢してるよな。さすがミスターパーフェクトだよな」

「自分でやりたいことが、あればですか」

杉本は本を膝に広げ、ゆっくりつぶやいた。どこか遠くを見つめているかのようだった。

「はっきりと青瀬東とは書いてないけど、高校の話もしてるよ。本条先輩、青瀬東が自由な校風で、やりたいことがあれば自分でどんどん切り開いていける学校なんだってさ。青大附中のこと言ってるかと思ったよ」

何も言わず、次に目を伏せた。またページをめくった。プログラムの一覧がずらりと出てきた。ここから先は上総にとって未知の世界だった。

「これは、なんですか」

「だから本条先輩の作ったプログラム。ゲームだよ。杉本はゲームセンターで遊んだことある？」

まずないだろう。当然頷いた。言葉はない。

「よくわからないけど、迫力満点のゲームらしいよ。グラフィックっていうのかな、絵もきれいだし、星が降ったり車が本当に走っているように感じたりと、画面の中だけでこんなにどきどきするとは思わなかったな。俺はあまりああいうの好きじゃないけどさ」

杉本はまたページをめくった。本条先輩の特集は終わり、BASIC入門講座のようなページが見開きで二ページ載っていた。

「杉本もこういうの興味あるんだったら、青瀬東に入ってから本条先輩のマイコン同好会入れればいいよ。会員五名しかいないみたいだけさ」

「このプログラムをコンピューターに、どうやって入れるのですか」

投稿されたプログラムページをめくり、じっくり読み込みながら、それでも小声で杉本は上総に尋ねた。

「キーボードで」

「そのためにはマイコンが必要なのですね。どこにあるんでしょう？」

「本条先輩が言うには、近所の電気屋とか、あと大型スーパーの書店の脇とかだってさ。ここからでもいけそうなところらしいよ」

しばらく考え込み、残りの珈琲を飲み干し、杉本は静かに上総へ告げた。

「立村先輩、そのマイコンの使える場所がお分かりであれば、連れて行っていただけませんか。それと、この本を貸していただけませんか」

「なぜ？」

思わずきつく返してしまった。杉本は首を振った。

「決して立村先輩の宝ものを汚すつもりはありません。ただそこまで本条先輩が自慢なさるのであれば、私もそれなりに検証したいのです。立村先輩はそのプログラムをごらんになったことがおありですか」

「ちょっとだけ。でもこのプログラムなのかはわからないよ。とにかくたくさん作ってたから。たぶん混じってたと思うけど」

「それであればなおのこと、特集を組まれても不思議のないほど洗練されたプログラムなのかをぜひ拝見させていただきたいものです。つきましては、そのキーボードがあるところがかつ打ち込める場所を教えてくださいたいのです。そのためならば、傘も用意いたします」

——杉本、本気かよ。これ、打ち込むってどうやって？ 指、一本で全部打ち込めると思っているんだろうか？ まさかだよな。

杉本のわがままにはもう逆らえないことくらい分かっている。上総は残りの珈琲を飲み干した後立ち上がり、杉本が手洗いに立っている間に会計を済ませた。杉本には絶対に払わせない、それだけは意地でも貫いた。

支払いのことではしばらく杉本に食って掛かれたけれどもあえて無視し、上総は雨上がりの空を眺めた。すでに青空が覗いている。夕暮れにはまだ早い、黄身がかった日の光が過ぎた時間を思い起こさせた。

アーケードを通り過ぎ、まだ乾いていない車道の水溜りに目をやった。

「やはりタ立かな、スコールではなさそうだし」

「日本でスコールなどありません」

機嫌をすっかり損ねてそっぽ向いていた杉本も、返事だけはしてくれた。

「本条先輩がよく立ち寄ってたっていう店はこの左角だけど、行くか」

俯き加減で考え込む杉本。さっきは「もう立村先輩の顔など見たくありません！」とか叫んでいたくせに、隣に寄り添ってくれている。

「はい」

ぎろっとにらみつけ、すぐに逸らして、あっさり返事をした。

本条先輩特集の記事にはえらく感銘を受けたらしい。

——でも杉本が、コンピューターに興味持つなんて想像つかないよ。

食いつくように雑誌をめくりながら、プログラムのページをまじまじと眺めていた。杉本が学校一のかしこい女子なのはわかっている、本条先輩宅で見たマイコンと一緒に戯れている姿は想像がつかない。単なる好奇心なのだろうか。

——杉本は頭がよくて賢い女子が好きだし、自分でもそうなりたいと思ってるんだ。そうなれないなんて絶対いやだと思ってるんだ。本条先輩にライバル意識持ってるのかもな。別にそんなこと考えなくてもいいのに。本条先輩にかなう奴なんてそういないよ。

さらさらした杉本の長髪が背中揺れる。麦わら帽子をかぶり、清楚な風情をかもし出している。コーディネートを意識したわけではないけれど、上総も生成りのジャケットに細い紺ストライプのシャツで付き添っている。色の波長は合っているような気がする。

「そういえば、霧島さんや西月さんとは連絡取ってるの」

「はい。先日お手紙をそれぞれいただきました。霧島先輩にはよくお会いします」

——あいつの言う通りか。

横断歩道を渡り、ゆっくり左のバス通りを歩いていく。右手に洋品店が立ち並び、その奥に青漏で一番敷地面積の広い電気屋がある。三階建てで、本条先輩が言うにはいつも三階のマイコン売り場でたむろっているという。まさかとは思いますが本条先輩と顔を付き合わせたらどうしようと思う。昨日の今日だ、またいろいろ突っ込まれるに決まっている。車の通りも多い。途中何度か、駐車場に入る車により足止めされた。

「西月さんは元気なのかな。気になるけど情報が全然入ってこないんだ」

美里経由での情報は無難なものばかり。西月小春の忠実な騎士である片岡司には英語科の天敵として見られてしまっているようでろくに話をしたことがない。

杉本はびっくりした眼で上総を見上げた。

「確か、神乃世の高校に通っているんだよな」

「いいえ、現在はあちらの御宅で高校卒業の資格を取るため勉強なさってらっしゃいます。大学検定試験を目指しているとのことですよ」

初めて聞いた。たぶん美里も知らないんじゃないだろうか。古川こずえはもしかしたら少しくらい聞いているかもしれないが。でも知っていたらとっくの昔に噂となっていたような気がする。

「高校推薦決まってて、すぐに公立受験は厳しいよな」

「そういう問題ではありません。西月先輩はあちらさまの御宅で、毎日お勉強なさってらっしゃるとのことです。なんでも、あちらさまには個人図書館のような部屋があるそうで、毎日本を読んでもいいとのことですよ。その他、お家のお手伝いをなさったり、遊びにくるお子さんたちの相手をなさったりと、お忙しく過ごされてらっしゃるようです」

杉本は本気の顔して食ってかかる。いつもそうだ。自分をこよなくかわいがってくれた女子にのみ、杉本は猫のごとく手と足伸ばしてひっくり返る。おなかを触られてもたぶん怒らないだろう。杉本のポニーテールを丁寧に結っていた西月小春のその後がいかに痛々しいものか、想像つかないわけではない。噂にもなっただろうし、もみ消されたとはいえ一種の傷害未遂事件であることには変わりがない。その被告とも言える西月小春を、それでも杉本は一心に慕っている。

「そうなんだ。元気そうでよかった」

「あちらさまも、西月先輩を大切に守ってくれるそうです。青瀉にいる限り、いろいろと叩かれる羽目になるでしょう。今が幸せなら、それでいいのかもしれない」

「杉本、本気でそう思うのか」

答えなかった。俯きながら何かをつぶやいていた。はっと顔を上げ、

「ここですね」

タイミングよく電気屋の入り口に立ち止まった。流行歌が延々と流れる店内はにぎわっているように見えた。高いところから扇風機が列を成して首を振っている。

「立村先輩、三階でよろしいのですね」

「そうだよ。エスカレーターあちらだ」

一階の家電売り場をすっとばし、三階まで昇っていった。本条先輩の話に間違いがあるわけがなく、やはり三階はコンピューターの楽園、売り場の片隅に、二十台ほどコンピューターが壁際へコの字型に並んでいた。さまざまな種類のマイクロコンピューターが存在している。上総が本条先輩宅で確認したタイプのものとは異なるものもある。

「立村先輩、先ほどの雑誌を拝見させていただいてよろしいですか」

杉本に促されて、かばんから取り出す。手渡すと杉本は本条先輩特集ページを開き、次にプログラムページを指でなぞり、

「こういう時は詳しい方に聞くべきです。常識ですから」

かちんとくる口調で言い切り、入り口の店員らしき人に声をかけに走った。

——俺が聞いてやるのに、なんで何も言ってくれないんだろ。

口だってちゃんとあるのに。

杉本が確認していたのは、本条先輩の作ったプログラムに対応したマイコンを今、利用することが可能かどうかということだったらしい。

「タイミングよく空いているようです。こちらへ」

上総を手招きし、いそいそとマイコンの前の席に腰掛ける。同じタイプのマシンが三台並んでいるところを見ると、売れ筋のタイプであることはうかがい知れた。

「でもどうやって調べた？」

「先ほど拝見させていただきましたが、コンピューター用語にはさまざまな種類のものがあるようでそれぞれ見出しに「なにになに-BASIC」との記載がございました。ということは、コンピューターの種類によって違いがありそうです。私は全くその点に関して疎いので、まずは全く同じ環境下で試しかった次第です」

相変わらずの堅い言葉で説明しつつ、杉本はまず、ディスプレイ下の機械に電源を入れた。黒背景に白い文字がやはり浮かび上がった。

一台のコンピューターにつき椅子が二脚あり。先客たちを見ても、男子同士で尻寄せ合ってゲームに目の色を変えている連中がほとんどだった。ちらと覗き込んだ限り、他の機種からあふれ出る色合いは、本条先輩の家でみたものとは違ってきわめて鮮やか過ぎた。

「本条先輩の使っている機種は、色が地味なのかな」

「一昔前の機械なのかもしれません」

言いながら杉本はキーボードの上にもず、雑誌を開いた。本条先輩の組んだプログラムが掲載されているページだった。

「キーボードは、この文字通りに打ち込めばよろしいのでしょうか」

「たぶん。本条先輩、指一本で打ち込んでたよ」

「忍耐強いのですね」

そう言いつつ、杉本は隣の席で、ディスプレイとキーボードが一体化した機械をいじっている中学生らしき男子をちらと覗き込んだ。ひとりで来ているらしく、やはり同じ誌名の雑誌を広げて、両手でばたばたキーボードを叩いている。ピアノを弾いているようにも見える。

杉本は本を脇に伏せ、両手を広げたままキーボードの上に重ねた。

「ピアノ弾くみたいに打てばいいのでしょうか」

「よくわからないけど、杉本、ピアノ習ったことあるのか？　なんかそんな気するけど」

思わず失言。杉本にとって音楽を演奏する関連の出来事はすべて悪夢。本人は気づいていないかもしれないが。

「はい。少しだけたしなんでおりました」

指をピアノ鍵盤を弾く準備をするかのように丸く置いた。

「卵を包むように、丸くとよく言われました。弾きづらいのに」

「ああわかる。俺も親に弾き方教わった」

一応は弾ける。練習すれば合唱コンクールのピアノ伴奏くらいはできると思う。もっとも母に仕込まれただけなので自己流だし、それ以上極める気もさらさらない。

「立村先輩、それは初めて伺いました」

「それより、プログラム打ち込むんだろ？ ページ開いたまま持ってようか」

手を伸ばすと首を振られた。

「だめです。ただどうやって打てばいいのかがわかりませんと」

「数字とアルファベット、あとカタカナだろ」

まず左端の「Q」を押して見る。キーを一つ一つ試していると、上総よりも先に杉本がコツを飲み込んだらしい。「Shift」というボタンと「A」のボタンを押すと大文字になるといったことなど、入力のコツのようなものがだんだんわかってきたようだった。

「早いな、もうこんなに覚えたのか。俺全然わかんないよ」

「そのくらい常識ではございませんか。立村先輩にそこまで期待しておりません」

次に杉本は、雑誌の中のプログラムをまずじっくり見直した。

「最初は10から始めるのですね」

上総に確認しても無駄と感じたのか、杉本は独り言をいいながらも10という文字を画面に入れた。白い文字が浮かび上がった。。人差し指でキーを探しつつ、

「でも、これだとすべてを打ち込み終わることは至難の業ではございませんか。本条先輩はどうやってこしらえたというのでしょうか」

「本条先輩だもの、すぐ覚えたんだ、きっと」

「立村先輩、いい加減になさませ！」

いきなり杉本がきっと声を挙げた。小声で周囲をはばかりながら、

「いいですか、立村先輩、よくお考えくださいませ。本条先輩は確かに長いプログラムを打ち込まれたようです。人差し指をどのくらいいためたかは存じません。ですが、本条先輩よりも早く打ち込める方法だってあるはずですよ。例えばほら、あのお隣など」

さっき覗き込んだ中学生男子のことだろう。前髪を刈り上げた彼は、ランニングとジーンズ姿で無心になりキーボードを叩き込んでいる。画面は黒く、文字は白い。数字の羅列というところを見ると、本条先輩と同じ夢を追っている奴のような気がする。両手を開いて、指先でぱかぱか叩いている。

「どうした、杉本？」

「どうすれば両手で打ち込めるのでしょうか」

もう一度指を開き、キーボードに重ねた。

「試してみます」

それだけ言い残し、杉本は次の瞬間キーボードをおずおずと打ち始めた。一本指ではなく、両手の指先を派手に鳴らしながら、キーボードの位置を教え込むように。

約三十分程度。上総は杉本の指先がだいぶ慣れ、ゆっくりながらも確実に文字を捉え始めるのを見た。何度も隣席の指先を覗き込んでこっそり真似をしているうちに、何かのきっかけを掴

んだらしい。

「これで間違っていなければいいのですが」

「その前にテープ買ってきて、録音しておいたほうがいいよ。本条先輩が話してた」

げげんそんな杉本に、上総は預かっていた麦わら帽子をなでながら説明した。もちろん本条先輩の受け売りであることには変わらない。

「マイコンってとにかく熱さに弱くて、部屋の中が熱帯夜になったりしたらもう動かなくなってしまいうらしいんだ。本条先輩がマイコンの機嫌を取るために電源をOFFにしたりするんだけど効果なさそうなんだ。休ませる分にはいいんだけど、その間に打ち込んだプログラムが消えてしまうとすっかりめげてしまうって言ってた」

「確かに、それは辛いことですね」

杉本は伸び上がってカセットテープ売り場を覗き込んだ。

「先輩、テープで録音すると仰ってましたが」

「ここにもテープレコーダーあるし」

「それでは今から買ってまいります。何分程度のものがいいのでしょうか」

「音楽とは違うから三十分程度でいいんじゃないかな」

あてずっぽで答え、上総は立ち上がった。杉本に座ったままでいるよう合図した。

「俺が買ってくるよ。一本でいいだろ」

抵抗ありありの杉本もここでは素直に従った。

「恐れ入ります、お願いいたします」

——なんであんなに早く覚えられるんだろ。それも見よう見真似だぞ。

杉本の覚えの早さを知らないわけではなかったが、実際目の前で見せ付けられるとあっけにと取られてしまう。いや、息をのむしかない。キーボードだって生まれて初めて触れたと言ってなかったらうか。マイコンに対する知識だってつい一時間くらい前、本条先輩特集の雑誌を目で追ってそれで認識したものだけじゃないだろうか。上総も一応、本条先輩経由の受け売りで説明はしたけれども、内容をしっかり把握したわけではない。

横目で隣席の男子がぱこぱこ叩いているのをまず見定め、両手で打ち込もうとするその発想が信じられない。本条先輩には英文タイプを覚えろとか言われたが、杉本はその試験を受けるまでもなく自己流で覚えてしまっているわけだ。

音楽テープ売り場で立ち止まり、ノーマルポジションの三十分テープを二本購入した。急いでマイコンコーナーに戻り、両手そろえて待っていた杉本に手渡した。

「ありがとうございます。お支払いは」

「いやいいよ。今日は俺が杉本をもてなしたいだけなんだ」

「でも先ほどアイスクリームも、珈琲も」

「だから言っただろ。杉本、今日は俺が誘ったんだからさ」

「でも、コンピューターコーナーには私が来たくてまいりました」

「俺が本条先輩の本見せたから、興味持ったんだろ」

あまり説得力のない言い訳をする。どうしても杉本から割り勘でもらいたくなかった。杉本が男女平等の思想とは異なる「おごり」を快しとしない人間だということは知っている。でも、今だけは上総がすべてもてなす義務がある。かたくなな思いだった。

「とにかく、早く保存して、それからプログラム走らせよう。コマンドはたぶん、これだと思うから」

R U N。

その三文字でプログラムが動き出した。七色の流星が降り注ぎ、画面に「START」とでかでかと描かれた文字を眺めながら、上総は本条先輩のシューティングゲームが動き出すのを見た。本条先輩が部屋で動かしているのとは違い、はるかに迫ってくるようなスリルで溢れていた。

「先輩、ゲームなさいますか」

「うん、いいかな」

杉本を肩を並べ合い、上総は細長いキーを何度も叩いた。飛び出す銃弾が数限りなくたくさんの星を打ち落としていく。上総は杉本の発するぬくもりが近くにあることを腕から肌で感じつつ、ひたすらディスプレイに見入っていた。

指先をこれだけたたきつけたのは生まれてから初めてじゃないだろうか。

マイコンコーナーの男性店員にプログラムの保存方法を習った後、杉本は上総に、「それでは、参りましょう」

静かに促し、再度店員に頭を下げて出て行った。上総ももちろん後を追うのだが、どうもその男性店員の視線が妙なところに集中しているような気がして、落ちつかなかった。二十代後半だろうかと予想してみる。

「立村先輩はこういうゲームをしたことありますか」

「友だちの家でたまにね。でもあまり面白くない。テレビゲームって苦手なんだ」

「本条先輩が評価されるのも頷けます。テレビゲームとはどういうものか私もよく把握できておりませんが、こういうものを一から作り上げることのできる才能には素直に感服いたします。かしこい方はやはり素晴らしいのです」

「かしこくなくて悪かったな」

外を出る。そろそろ四時半を回ったところだ。杉本は五時までに家へ戻らねばと話していたような気がする。女子だしあまり遅くまで連れ回すのもまずい。雨が戻る気配もなさそうだ。自分も汽車に乗って品山に戻らねばならない。たぶん五時半くらいには着くだろう。

「残り二本のプログラムも打ち込みたいので、今度の休みにまた参ります。店員さんも非常に丁寧でしたし、心地よい空間でした」

「そうか？　ざわざわしていて落ち着かない感じがするけどな」

「立村先輩は苦手なのですか？」

「当たり前だよ。キーボードなんて打てないものな。本条先輩とここで少しずつ教えてもらうよ。それの方がいいし」

「立村先輩は最初から最後まで本条先輩のことしか考えてらっしゃらないのですね」

ため息吐きつつ杉本は脈の部分で時計盤を確認した。

「帰りの時間か？」

「はい、そろそろ帰りませんと家族が心配いたします」

一時期、母親との関係も悪化していたと聞いた記憶があるのだが、その点は改善されたようだ。詳しいことはあえて聞いていないが、あの気の弱そうな杉本の母親が娘に何を思っているのかは、なんとなく想像ができた。心配しないわけがない。

「そうか、でもまだ少しぐらいなら時間あるだろ」

「いいえ、私も受験勉強しなくてはなりませんし、桜田さんの漫画に情報を増やす意味でももっと本を読まなくてはなりません」

「漫画に情報ってなんだよ、面白いな」

からかい調子で尋ねると、杉本は真顔で噛み付いてきた。いつものようにだった。

「真剣な話です。桜田さんはじめお友だちの名誉を回復するためにも、素晴らしい作品を書き上げていただかなくてはなりません。狩野先生や公立の先生方を呼んで私たちが後ろ暗いこと一切

していないと証明する意味でも、です」

杉本の横顔をそっと眺めた。もう日差しはさほど強くないがそれでも麦藁帽子をまだかぶっている。路に長く映る影が濃い。まだまだ明るい。

——聞こうか。

駅に向かう足が重たい。

噂話どまりの情報を確認していいんだろうかとも迷う。

杉本の語る言葉を一通り整理していくと、霧島が持ってきた杉本梨南のなずな女学院進学疑惑はかなりの線で見えていいのかもしれない。青湊東高でのかたくなな態度や、修道院での静かなたたずまい、本条先輩の話に対する過剰な対抗心、ひとつひとつはささいな内容だが、つなぎ合わせてみると結論はひとつしかないようにも見える。

——けど、俺の思い込みかもしれない。単純に杉本の気まぐれに過ぎないのかもな。

上総の知っている杉本梨南はすでに少しずつ形を変えていっているのかもしれない。一学期の出来事も含めて考えると、杉本の価値観にはやわらかみが出てきている。濡れ衣事件にしたって、かつての杉本なら渋谷名美子を息の根止めるまで叩きのめしたはずだ。上総もそれが前提にあったからあえて杉本をけしかけたところもある。しかし、杉本の判断は逆だった。

横断歩道を渡り、駅のロータリーに向かいながら、杉本のなびく長髪を眺めて見る。

外見はそれほど変わったようにも見えない。

——相変わらず関崎のことばかり考えてるんだろうな。

今日、一番恐れていたのは、関崎を含む外部三人組と何かの拍子で鉢合わせすることだった。幸いそれはなかった。青大附属関係の人間にも一切会わずにすんだのは救いだ。もし誰かと会っていたら、こんなに気楽に過ごせていただろうか、否、ありえない。

「立村先輩、何をお考えなのですか」

駅前の道路を渡ろうとして、不意に杉本が呼び止めた。

「え、何も考えてないけど」

「珍しくまじめに物思いにふけてらしたので、少し気になりました」

「そうか、俺のことも少しは気にしてくれてるのか」

わざといやみっぽく答えてやる。いつもなら「関崎ほどではないかもしれないけどさ」くらい言ってやりたいのだが、さすがにこれ以上嫌われたくはない。そのまま道路を渡り、駅の待合室に向かった。品山行きは、まだ十五分程度間がある。

「杉本も、門限があるだろ。帰らないとまずいだろ」

「何をおっしゃいますか。私にまだ時間があるだろうとおっしゃったではありませんか」

相変わらずの抑揚のないまっすぐな言葉で杉本は、待合室の椅子に腰掛けた。夕方近く、部活帰りの学生、観光客、ビジネスマン、その他いろいろな人々がすれ違って行く。待合室の席もだいぶ埋まっている。ふたり仲良く座れたのは奇跡かもしれない。

「今日はお誘いいただきありがとうございました」

立ち上がり、まず丁寧に礼をした。すぐに腰掛けた。

「楽しかった？」

「それなりに。ただ、立村先輩の突発的な行動には少し困るところもあります」

「それは俺の台詞だろ。なんだよ朝から俺を振り回していたの杉本の方だろ」

「だから私は何度もお帰りくださいとお伝えいたしました！」

「その選択肢だけはなかったんだからしょうがないだろ。本当にな、なんだよ、なんで青潟東に寄ろうとしなかったんだよ。高校の下見に来るんだったら学校側だって文句言わないと思うよ」

今更ながらごねてやる。杉本は答えなかった。まっすぐ上総を見据えるだけ。男子たちをむかつかせるあのきつい眼差しで。上総はそんなの慣れっこなので全く気にならない。

「立村先輩、私にあれだけ一方的にお話なさったのであれば、私もお伝えしたいことがございます。よろしいですか」

「ああいいよ、いくらでも言えばいいさ」

腹の虫が鳴いたような気がした。当然ざわめきで打ち消される。家に帰ったらボリュームのあるものをこしらえたい。何がいいだろう。冷やし中華にでもしようか。頭で材料をこねくり回しているのも知らず、杉本は再度上総を呼んだ。

「立村先輩！ お聞きくださいませ！」

「聞いているよ」

「今朝からこの瞬間まで長い時間立村先輩とお話させていただきました。こんなに延々と長い時間過ごしたのは初めてです。改めて気づきました」

ぴぴっと電気が走ったような気がする。まじめに話を聞かねばならないような気がする。大至急夕飯のことを忘れることにし、向き直った。

「立村先輩は、本条先輩に依存し過ぎではございませんか」

これが杉本梨南の、男子連中を怖気奮わせる眼差しだ。すべての力を瞳に向けて発射するきついもの。怖くはない、がちゃらちゃらしたままで接することは、絶対にできない。

「朝から夕方まで、立村先輩がお話なさったことの大方七割がたは、本条先輩すごい、本条先輩だからできる、本条先輩は天才、その類のことばかりです。もちろん集計を取ったわけではございませんが、私と話をしている際に本条先輩の話題が出てこないことはほとんどありません。先輩、自覚はお持ちですか？」

凍りつく。クーラーが利いて心地いいはずの待合室が、突然氷壁の部屋となりそうだ。溶かす言葉で言い返してみる。

「自覚たって、それは本条先輩、すごい人だからいまさら」

「立村先輩、またおっしゃいました！ いつもそうです。本条先輩への枕言葉には必ず、『すごい』とつくのです。私は立村先輩が本条先輩を尊敬する気持ちを間違っているとは思いません。確かに本条先輩は立村先輩と違いリーダーシップに優れてますし、私と同様学年で成績トップでした。運動神経も素晴らしく、立村先輩が一回しか参加できなかったクラス対抗リレー大会も三年連続参加なさいました。その他評議委員会での活躍の数々、それを否定することなどできません。立村先輩よりはるかに上のランクの方であることは認めます。しかし」

ここで杉本は言葉を切った。あたりを見まわした。声を潜めた。膝を上総に寄せた。

「それはあくまでも青大附中時代のお話でしょう。立村先輩から伺った限り、青潟東において本条先輩は演劇部でご苦労なさり、その後自分のやりたいことを見出しマイコン同好会をこしらえ、ついには外部の出版社にも認められることとなった姿。確かにゲームは素晴らしい出来だったと思いますし、立村先輩に同じことができるとはこれっぽっちも思いません。ですが」

また言葉を切り、きりりと睨みすえる。ドリルのような。息の根止められている。怖い。先輩風吹かせて黙らせたなら最後、全身煙となり杉本が消えてしまいそうな気がする。

「それでよろしいのですか。立村先輩は本条先輩はすごい、本条先輩だからなんでもできる、マイコン研究会も本条先輩だから成功した、そう仰いました。ですがそれは青大附属のものさしで図れる内容ではありません。本条先輩の力ではありますが立村先輩が引け目を感じる必要はないのではありませんか」

「引け目は感じてないさ。ただ、やはり俺には無理だなんて思うところも正直あるよ」

言い返した。ただし小声で。即、却下された。

「私が申し上げたいのはそこでございます！ 立村先輩はなぜここで、本条先輩とは別の方面で力を発揮させようと思わないのでしょうか。本条先輩のすごさをたたえているだけで、肝心要のご自身が何をなさろうとするのか全く想像がつきませんでした。演劇部のお話、マイコンのお話、それぞれ本条先輩のご事情を把握することはできました。でも、立村先輩は本条先輩の『すごさ』が何なのかを本当の意味で理解してらっしゃらないような気がします。本条先輩が見事なのは、ご自身が苦労された後、自分の道を見つけて出版社に投稿という形で売り込んだことでございます。もともと才能がおありなのもあるでしょうが、ご自身で路を切り開こうとなさったことです」

「そうだよ、俺もそう思う。だから本条先輩は」

「お黙りなさいませ！」

近くに座っていた老夫婦がちらとこちらを見てささやき合っている。きっと噂話の種になっている。でも逃げられない。杉本が「すごすぎる」からに相違ない。

「青大附高と青潟東は別の校風です。それぞれよいところはありますが、一方的にまねができるものではありません。それに立村先輩と本条先輩は天と地ほどの差がありすぎます。どうしていつも立村先輩は本条先輩と比較していじけたことをおっしゃるのでしょうか。私は以前より腹立たしく思っておりました」

「そんな説教するなよ。本条先輩を尊敬しちゃいけないのかよ」

「いいえ、そういう意味ではありません。私の言いたいことはひとつでございます。立村先輩は本条先輩を真似なさっている限り、何をなさっても勝つことができません」

静かに、目だけ飛び出しそうなほどににらみつけ、

「今後私の前で、『本条先輩だからできる』とか『本条先輩はすごい、自分にはできない』などといった寝言のようなことを仰るのであれば、私は金輪際立村先輩と縁を切らせていただきます。それでは、失礼します」

「おいちょっと待てよ、なんだよいきなりまたわけわからないこと言い出すんだよ、せっかく楽

しく話してたのに、気まぐれにもほどがあるだろ？」

腹立たしい想いと、杉本のいつもの勘違いと、どちらかを天秤にかけている。はっきり言って、上総は全然怒っていない。他の野郎なら怒鳴るか殴るかするかもしれないが、杉本にはその「怒り」のセンサーが壊れているようだった。むしろ、なだめて、すかして、自分が汽車に乗り込むまでになんとかせねば、そこに尽きる。

「それなら、今度杉本に会う時にはこういえばいいのかな」

軽く、ばかっぽく続けた。

「『本条先輩なんて目じゃない、この程度のことなら俺の方がよゆうでできる、本条先輩じゃなくても、誰でもやる気があればできることなんだ』って。なんだかそれだと、本条先輩に会った時にどやされるよ。さすがにそれは怖いし」

杉本は上総の腕を取った。いきなりのスキンシップだった。そのまま話さない。身体の血が全身突然上に昇ってくるようだった。改札口で品山行きがそろそろ入るとのアナウンスが流れている。

「本条先輩の前で言うようにと、誰が申しましたか」

「え、そう言ったの杉本じゃ」

言いかけた上総をぴしゃりと跳ね除け、杉本は上総の腕をがっちり握り締めた。跡がつきそうなほど、痛みがある。

「非常識なことは申しません。私の前のみで、おっしゃっていただければ結構です。本条先輩だから、という特別扱いを私と話すときはどんなことがあってもおっしゃらないでいただきたいと、それだけのことです。おわかりですか！」

それだけ言い放ち、杉本はあっさり腕を離した。後ろに一步下がり、深い礼をした後、

「本日はお付き合いいただきありがとうございました。それでは失礼いたします」

上総の言葉を待たずに背を向け、すっすと待合室を出て行った。上総が左腕をあたためて見ると、やはり杉本の指のあとがくっきりと赤く残っていた。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と引っ張り合う日々（1）

夏休みが始まってからほとんど天気の崩れることがなかったのだが、今日は朝からしっとりした雨が降り注いでいた。さすがに寒くはないが湿気でねっとりする。

——こういう日に限って講習なんだよな。

遊びほうけたつけといえはそれまでだが、学校に行く準備をするのも正直かったるい。

今のところまだ宿題には少ししか手をつけていない。八月に入ったらなんとかしなくてはならないと分かっているのだが、つい遊ぶ方にかまけてしまう。昨日のように。

早朝、ラジオ体操の曲も今日は流れない。上総はベットで転がりながら、薄い羽毛布団を蹴り上げてみた。朝五時起きの習慣も休みが続くと崩れてしまい、六時過ぎにずれ込んでしまう。自転車で行くのなら七時過ぎには出たいところだが、幸い講習は本日九時から二時間ほど。まだ時間はある。

——杉本、何言ってるんだよ。

目覚めてまず、考えたこと。

——何が、本条先輩のことばかり考え過ぎてる、だよ。しょうがないだろ、あの人なんだから。

青潟駅の待合室に取り残されて、汽車に乗り込み、立ったまま品山駅のホームに降り立ちとぼとぼ家に帰るまでの間、延々鳴り響いたその言葉。布団を握り締める。抱くかっこうになる。

——なんだよ、本条先輩に張り合っ賢くなりたいてのは杉本のいつもの癖だし止め様もないけど、俺にまでそんなこと求めてどうするんだよ。本条先輩にかなわないってのは今に始まったことじゃないんだし。それに俺も本条先輩に勝ちたいなんて思っていないしさ。すごい人をすごいって褒め称えてどこ悪いんだよ。わけわからないな。

長い髪をなびかせ、麦わら帽子を見送ったあのあと、何も言い返せなかった自分が情けない。本当はいくらでも反撃したってよかった。本条先輩が青大附中時代、青潟東、すべての場所において才能すべてで開拓してきたことを知っているのは上総だけではない。やっかむよりもあこがれる、そののどこがわるいのだかわからない。杉本のことだから、次回から本条先輩のことを褒めようものなら激怒して席を立つかもしれない。どうでもいいことに気をつけなくてはならないのが面倒くさいったらない。

そこまで考えて、はっと飛び起きる。雨音がしっとり響く。

——杉本の前だけ、って言ったよな。

杉本の前では本条先輩礼賛を控える代わりに、他の人の前ではかまわないと。

ということは、杉本も本条先輩が尊敬すべき人であることを理解はしているわけだ。

——ああそっか、そういうことか。

思わず頬が緩んでくるのを感じる。なんで今頃気づいたんだらう。

——要するに杉本は、本条先輩よりも自分を認めてほしいってことなんだろな。あんまり俺が

本条先輩のこと褒めるから、杉本の方を軽く見ているって決め付けたんだ。それなら話は通じる。杉本は賢いといわれたい子だからな。

もしここが杉本の変わったところとするならば、受け止めよう。そのくらい、かんたんだ。

六時半までごろごろしていたが、さすがにそろそろ準備をせねばならない。

夏はブレザーが不要だが、ネクタイだけは原則着用しなくてはならない。暑い盛りにネクタイを巻くというのはかなりしんどいのだが仕方ない。上総も見た感じからするとワイシャツをボタン開けて気崩すのはあまり好きではない。

かばんには、筆記道具と英語の辞書、手帳など。数学の教科書も一緒に包んだ。学校の講習は基本としてプリントのみなので荷物が少なくて楽だ。食堂に向かい、昨日残した胡桃の食パンをそのままちぎって食べた。一日立つとだいぶ水分が蒸発してぱさぱさ、たくさん噛む必要がある。

——杉本も、なんでよりによって食パンなんて思いついたんだらう。ほんと昨日は腹空いたよ。今度杉本と会う時は、あいつがなんと言おうとも、どこかで昼食べてからにしよう。

空腹の教訓をかみ締める。すっかり忘れていたのだが杉本にあとで渡すつもりだったマドレーヌも結局四個あまってしまった。全部食べるのもなんだし、腐るものでもない。学校で誰かに分けてもいい。

「おはよう、おやどうした、珍しいなお前にしては」

「パンあまってるけど、これでいいかな」

父の分も三枚残しておいた。

「くるみのパンか。どうしたこれは」

「昨日、遊びに行った時に買ったんだけどあまったんだ」

「なんでよりによって、食パン買ったんだ？」

「弁当の代わり。結局一枚しか食べなかったし、そのあとも食べる暇なかったし」

牛乳で流し込む。くるみのこりこり加減が歯に心地いい。父も水色のシャツに薄いジャケットを抱え、インスタント珈琲を自分で淹れた。母がいないからこそその手抜きだ。

「そうか。だから昨日はジンギスカンだったというわけか」

発作的に帰りのスーパーでラム肉を買い込み、二人分フライパンで無理やりジンギスカンもどきをこしらえた。ジンギスカン専用のたれでふたり、レタスで焼肉を包んで無言で食いまくったのが昨夜のディナーである。父も帰った時は驚いていたが、男の食欲に言葉は要らないというわけだ。

「今日は学校か」

「そう。講習は一時間だけどそのあと、補習もあるし。数学」

「お前ももう少し理数系点数取れよ」

「そうする」

できればすぐにそうしてる、そう言いたい。

父の車がエンジン音響かせて元気に出勤した後、上総は軽く洗物を済ませた。今日は少し遅くてもいい。雨だ、どうせ自転車使えない。汽車ならそれほど時間もかからない。思い立ち水筒に麦茶を入れていく。ジュースを買うのもできれば避けたい。何も考えていなかったが、やはり昨日は散財し過ぎた。

——杉本に聞いとけばよかったな。旅行いつ頃だろう。

いつもあとになって気づくこと。どうでもいいことばかりひたすらしゃべっていたくせに、次の約束を押さえておくのを忘れてしまう。また仲良したちとの家庭教師ごっこに盛り上がりすぎるのだろう。友だち優先は当たり前なことだけど、夏休み一度しか顔を合わせられないというのは思い切り不自然だ。

——またマイコンのプログラム打ち込みに行くと言ってたし。あ、そうだ、打ち込みたくたってプログラムが載ってる雑誌持ってるの俺だしな。杉本が必ず俺に言いにくるよ。まさかひとりで行くなんてこと、考えられないしな。

あんな野郎連中しかうろついていない場所に、お嬢様然とした杉本がひとりで足を踏み入れている姿なんて想像がつかない。上総が付き添っていたからこそ、なんとか入ることができたようなもの。杉本は表面上冷静を装っていたが、やはり居心地がいい環境ではなかったに違いない。それにしてもあの、杉本に対してやたらと丁寧に説明していた男性店員は、女性が来るのが珍しかったからああもサービス満点だったのだろうか。どうも気にかかる。気のせいといえどもそれまでだが、杉本を見つめる目つきに何か怪しいものを感じてしまう。

——でも、あんなに早くキーボードの打ち方を覚えて、さっさとプログラムを動かしてしまう杉本はやはりすごいよ。本条先輩と比べられたくないなら、しばらく俺は杉本とふたりの時だけ、思い切り褒めてやればきっと機嫌よくなるよな。

帰ったらすぐに電話で連絡を入れておこう。記憶のみにとどめ、メモには残さなかった。

傘を片手に家を出て、十五分の道のりを足早に歩く。

学校は夏休みでも会社が休みなわけがなく、会社に向かう人々が同じ方向にどんどん進んでいく。品山から青潟、その往復で日が暮れる。

明け方ほど本降りではないけれど、小雨とはいかない。傘を差して路を急ぐ。できるだけ早く、品山の空気から抜け出したい。上総が呼吸しやすい場所ではない。

「上総くん？ 立村くんよね」

女性の声だった。いきなり呼びかけられて振り向くことの、なんと重たいことか。

息を止め、覚悟を決める。腹に力を入れて振り返る。近づかれてその熱に退く。

「あ、お久しぶりです」

それしか口にできなかった。消えた言葉をごまかすために馬鹿丁寧な礼をする。

「よかった、元気そうね、何より、本当によかった！」

上総の真後ろには、だぼだぼのピンクTシャツと臍脂のキュロットをはいためがね顔の女性がこやかに微笑んでいた。ひつつめ髪に漫画チックな丸めがね。忘れはしない。世話にはなった。感謝はしている。でも会いたくない。上総はもう一度、今度は軽く頭を下げ、

「すみません、これから学校に行くので、失礼します」

切り上げるつもりだった。嘘ではない。汽車一本逃したらまた雨の中ホームで待たねばならないのだから。

「そっか、夏休みなのに学校なんだね。がんばってるんだあ！ほんとよかった。そうだ、はがき、京くんが送ってくれたんだけど、同窓会来週の日曜にあるのよ。立村くんも来ない？」

「お誘いありがとうございます。この日は先約がありますので」

ここでは霧島の猫かぶりを真似させていただくことにする。慇懃無礼、とことん無視したがっていることを伝えたいがどうも彼女には伝わらないようだ。一応は小学校教諭、品山小学校の担任だった美子先生、やさしい先生だったが、残念ながら上総にとっては距離のありすぎる人だった。

「そうかあ、残念！でもまだいっぱい機会作るからね！それにしても、本当に大きくなったねー、私ね、三月の卒業式、観にいったんだよ！父母席で思い切り泣いちゃったよ！あの泣き虫だった上総くんが堂々と英語でべらべら答辞読んでるんだもん。私英語わからないからすごさぴんとかないけど、菱本先生がぜひ、立村くんの晴れ姿を目に焼き付けてほしいって言われてね。いやあん、ほんとカッコよかったよ！」

——頼むから、名前と苗字混ぜて呼ぶのやめろよな。

今明らかになった考えたくない事実を目と耳をふさぐため、上総は全力でもって霧島スマイル……と、命名した……をしっかりと浮かべて、きっちりと挨拶をした。

「卒業式、いらしてたのですか。恐れ入ります。あの、それでは、汽車が来るので失礼します」

よけいなこと口走ってまた突っ込まれるのだけはごめんだ。三回目の礼をし、にこやかに傘と手を挙げてはしゃぐ美子先生に返し、後ろ足で砂を蹴りたい思いで駅まで走った。裾に水撥ねがかかったが、どうでもいい、知ったことか。洗えば消える。消えないものもある。

——あの野郎、俺の知らないところで何血迷ったことやらかしてるんだよ。

定期券を見せ、一本早い汽車に乗り込み相席に座った。会社員らしき男性たちに囲まれ、上総は静かに窓を眺めた。どうせ終点青潟までこのままでいればいいのだから楽なものだ。あの美子先生にさえ会わなければ、雨もさほどじっとりしたものには感じなかつたらう。青潟には梅雨がない。湿気そのものの美子先生とさえ、すれ違わなければ。

——あいつなんで、美子先生を卒業式に呼び寄せるなんて非常識なこと考えたんだ？常識で考えてもありえないだろ？小学校の先生にとって三月は死ぬほど忙しいだろうに、なんでよりによって卒業式に呼び寄せる必要性あるんだ？わかってるよ、品山小学校から合格したのってここ数年俺しかいないってこと。珍しいことは承知してるさ。でも、とっくの昔に卒業した教え子をわざわざ自分のクラスの子どもたちおっぼっというて来るもんか？信じられないよ。それに、卒業式、美子先生なんていなかったよな。父母席に混じってたってことか？うちの親たちも気づいていたらなにかかしら挨拶するよな？まさかこっそりどこかに座らせてたとか言わないよな。全く、諸悪の根源はやっぱりあの熱血青春野郎なんだ、なんでもかんでも！

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と引っ張り合う日々 (2)

青潟駅到着八時十五分。普段よりも遅い到着だった。

八時二十分授業開始の青大附中ならこれで遅刻決定だ。腕時計を手首で確認し、上総はバスロータリーに向かった。夏でも雨ならバスで行くしかない。

夏休み講習に通うのは上総だけではない。青大附属の生徒ならばいわば強制的に呼び出されるようなものだった。教室に他クラスの連中を集められて、先生たちの話をひたすら聞く。学校の授業延長といえばそれまでだ。ただ高校生になるとおまけもあって、それぞれ一回程度、担任以外の先生をはさんで細かい個人面談を行う。どの教師に当たるかは学校側が決めるので、当日になるまでわからない。はっきりしているのは麻生先生と顔を付き合わせる心配がないというそれだけだ。

——面倒だよな。ほんとうちの学校は、先生をこき使いすぎるよな。倒れるんじゃないかな。

某熱血青春野郎のために用意された職場としか言いようがない。狩野先生も大変なんじゃないだろうか。今思えば上総がどうしようもなく数学で深みにはまったため救いの手として差し伸べられたのが狩野先生だった。まじりつけのない感謝を捧げたいが、自分のクラスを抱えて他組の生徒をあれだけ面倒みるのはしんどかっただろう。

バス停に向かい、すっかり空いたバスに乗り込む。講習開始時刻にはまだ間もあるためか、思ったより空いていた。降車口側の席に座った。乗り込む人の顔を横から眺めることになる。小型カセットレコーダーにイヤホン指して耳に押し込んだ。南雲から以前もらった洋楽のヒットソング集を再生し、窓辺を眺めた。「佐川書店」の前を中年男性が丁寧に掃き掃除しているのがちらっと見えた。

十五分ほどで青潟大学前バス停に到着した。あまり乗客が増えないまま終点というのも珍しい。上総が降りて空を見上げた時も、全く止む気配はなかった。

——帰りも降ってるんだらうな。

今日は講習が終わったあと、羽飛と美里と一緒に図書館で打ち合わせる予定だった。自由研究の中間報告と言えいいのか。上総からしたら、ふたりの集めてきた英語の論文を見せてもらわないことには何もできない状態だし、その他いろいろと確認したいこともあるわけだ。当然、昼食を学食で何かかしら食べることになるだろう。

青大附中から附高に向かう坂をゆっくり登る。普段ならさほど息切れを感じないゆるい坂だが、暑さのせいかやはりきつい。まだ朝なのだから涼しいはずなのだが。

数人、顔見知りとすれ違い挨拶だけ交わした。貴史、美里はまだ来ていない。坂を登りきり振り返ったがやはりいなかった。

講習の予定時間は今回二時間と定められている。そのうち一時間は例の個人面談で、残りの一時間が数学の集団講習だ。上総以外に理数科目の難ある生徒が集められて、細かい個人指導を受

けることとなる。普通科の生徒も混じっているらしいが、学年は特に関係ない。共通点は「理数系の落ちこぼれ」に尽きる。合計五日間続くと同時に、明日からはさらに他授業……英語と国語……も追加される。

「おはようございます、立村くん、ね？」

本日二人目の女教師登場、なんで続くのかわからない。中学校舎を通り過ぎ大学敷地を横切ろうとすると、いきなり声をかけられた。美子先生よりもはるかに品のよい、清潔な響きのする声だった。

「おはようございます」

上総は立ち止まって、一礼した。一年B組の担任、野々村先生が静かな佇まいですぐ側に立っていた。紺のタイトスカートに白いカット襟のブラウス、髪はポニーテール。見るからに堅物の雰囲気は漂う。まじめな人なのだろうとは、思っていた。

「これから講習なのね」

「はい」

あまり話すこともない先生だった。もともと国語の先生ではあるけれど、英語科は担当から外れている。一度も授業を受けたことがない。上総が知っているのは野々村先生が美里ととてつもなく相性が悪いということくらいだ。この先生の判断で、一年B組の評議委員は静内菜種に決まったという日くつきだ。

「私も、あとから行きますから、その時にまたね」

少しでも口調なのが気になる。そういう人なのだろうか。

「あの、何か」

気になり尋ねてみた。野々村先生は首を軽く振り、また足を速めた。会釈し、そのまま高校校舎へ走っていった。何かふわりとした柑橘系の香りが残ったがすぐ消えた。香水ではなさそうだった。

生徒玄関に向かい、靴箱におきっぱなしの上履きに履き替えた。

「おはよう、立村くん」

なんだか今日は女子にばかり声をかけられているような気がする。轟琴音だった。相変わらず手入れが雑なショートカットのままだが、ブラウスにはしっかりとアイロンがかかっている。リボンも左右対称に結ばれている。

「おはよう、あれ、轟さんは今日、個人面談なの」

「そうよ、面倒よねあれ。高校はきめ細かいんだかなんとか分からないよね。こちらもそれなりに準備しておかなければならないし。まあいいけど、適当にうっちゃっておくつもり」

一応は学年トップの才媛なのだが、外見で軽く見られている轟の存在。本来なら奨学金をもらえて当然の成績だったにも関わらず、とある告発によりあいまいにそのチャンスを奪われてしまったという、これも因縁の出来事が絡まっている。上総からしたら学校側もずいぶん露骨なことすると思わざるを得ない。生活が厳しいからこそ行いう内職だってあるだろうにとも。

「じゃあ、またね」

いつものようにあっさりと手を振り、一年の教室に向かって歩いていった。無理に張り付かずにさっさと離れてくれるさっぱり感が心地いい。それでいて用がある時は上総の準備が整った時を見計らって近づいてくれる。

とりいそぎまずは一年A組の教室へ急いだ。

講習の内容はひとりひとり異なるが、朝だけはとりあえず全員が顔をあわせることになる。上総は個人面談があるしその後数学の補習と決まっているけれど、反対に大学生のゼミに参加させてもらうため先生に大学校舎へ連れて行ってもらう奴もいる。他クラスの連中ともませこぜになるので、結果どういう時間割になっているのかは全く把握できない。

「やあ、久しぶりだな」

教室に足を踏み入れたとたん、すぐ近づいてきて声をかけてきたのは、本日初めての男子、関崎乙彦だった。すっかり浅黒く日焼けした関崎の顔は精悍さを増している。十日ほど顔を合わせていないのになんだらうこの黒さは。

「ああ、久しぶり」

「連絡取りたかったんだが、なかなか時間がなかったんだ。あとで空いている時間教えてくれないか。一度飯でも食おう」

「ああ、でも無理しないでいいよ」

十日ほど前に起きた出来事をすっかり忘れているのだろうか。上総なりにしっぺ返しを食わせてやったし、多少の気まずさは覚悟していた。しかし全く持ってその気配がない。

「いや、俺がお前に用があるんだ。あとで電話する」

——しょうがないな。

ため息を吐きたくなるががまんする。まあいい、関崎は嫌いじゃない。多少熱くてうっとうしい時もあるが、適度な距離さえ保てればそれなりに話が続く奴でもある。

関崎はすぐ席に戻り、駆け寄ってきた片岡を相手になにやら話を聞いている。上総とは一切話どころか挨拶も交わさない。ここまで無視されるのもあまり面白いことではないが、無理に接するつもりも今のところはないのでそのままにしておく。さらに藤沖が関崎に匹敵するほどの日焼けぶりと、見事な丸刈り姿にクラス全員の絶句を誘いつつそれなりに一年A組の夏休み再会日は盛り上がっていく。

「おっはよーさん！ 相変わらず休み期間はチェリーボーイ卒業キャンペーンに燃えてる？ 藤沖もあんた、なっかなか決まってるじゃん！ かっこいいよあんた。いい男だねえ」

かなり露骨な褒め言葉を浴びせるのは、女子でひとりしかいない。女子たちから「こずえちゃんもどうしたの今日、妙にかわいいよ」とか呼びかけられ、投げキスを返している。

「それと関崎、あんたもずいぶん黒々とトーストされちゃったねえ。どう、プールで誰か女の子ひっかけたの？ なんかプールで泳ぎまくったって顔してるねえ」

「いや、プールは三回だけだ。あとは毎日バイトと自由研究だ」

「へー、自由研究ねえ。例の外部三人組で何計画してんのよ」

「青潟の観光マップ作りだ。結構面白い。意外なところに意外な発見がある」

「とかなんとか言ってナンパの嵐だったりして。あ、だめか、女子いるもんね」

「当たり前だ。いや、古川、ナンパとはなんだ？」

関崎と古川こずえは冗談のようなやり取りを一学期同様繰り返している。堅物の関崎と下ネタ女王の古川こずえとは意外とよく合うのが不思議だ。

「ったくもう！ 関崎あんたどうしてこんなに鈍感なわけ？ そうだあんた、夏休みカラオケ行ったの？ そうとう喉うずうずしてるんじゃないの」

「そうだ、いいこと思い出した。そうだ、藤沖、今度カラオケ行こうか。いや、カラオケよりも外で歌うほうがいいか」

今度は藤沖も絡めて話を進めている。思えば青大附高入学後関崎の評価はうなぎのぼり、外部三人組を合わせていろいろと噂もされるがそんなの無視してやりたい放題過ごしている。しかも全部学校の校則に違反せず教師連中とも受けはよい。やりたいことはきっちりうるさ型に話を通して進めるのが関崎流だ。

「あ、忘れてた、あのさあ立村、なんなのこのおぼけみみたいな顔。うちでひとりしこしこ抜きまくってストレス解消してるだけ？ 全く困ったもんねえ。こういう奴のためにうちの学校の講習ってあるのかもしれないねえ」

「余計なお世話だ」

きっぱり言い放つ。こずえに対する対応方法は過去三年間で学んできている。

「古川さんの予想に反して、それなりに外に出かけてるよ。心配しなくたってさ」

「あーそれは失礼、どこ行ったのよ」

「たとえば子辺の修道院とか」

まずい、口を滑らせてしまった。周囲を見渡すが男子連中は特に聞き耳立てている奴もいない。しかし相手はこずえだ。下ネタ女王でかつ一年B組の女子評議委員、しかも附属上がりで女子たちの絶対的支持に支えられている。

こずえはゆっくり上総の机に両手を置き、上から見下ろした。

「ふーん、そうなの。子辺、ねえ。ずいぶん遠くじゃないの。旅行にしては距離が短いし、ねえ誰と行ったのよ」

「誰でもいいだろ。外に行ったってことだけわかれば」

「そういうわけにはいかないのよねえあんた。さ、言っちゃいな言っちゃいな、誰とおデートしてたのよ。さあ、誰。あ、そっか。立村にはデートしたい相手一人しかいないもんねえ。まさか、そのまさか？」

「何勝手に妄想しているんだよ。人のプライバシーに口突っ込むのはやめろよ」

「だって想像できちゃうじゃないの」

にやにやしながら、小声でこずえはささやいた。ショートカットの髪が揺れる。いたずらっぽく見下ろす。

「あの子に対抗できる相手がいるとしたらさ、あんたの場合本条先輩しかいないじゃん。本条先輩が子辺の修道院に行くなんて考えられないよねえ。美里も行くんだったら羽飛か私絶対連れてってるしさ、となると、あえて名前は言わないけどそういうことなんじゃないの」

——だからこんなところで言うなよな。

どうせ分かりきっていることなのだ、口を滑らせた自分が悪い。

むっとり黙る上総をにやつきながらこずえは見つめた。こくこく頷く。

「そっかそっか。あんたなりにがんばってるんだ。お姉さんは安心したよ。ま、血迷って神様見守るなか押し倒したりなんかしなかつただろうしね。第一段階は完了したとして、第二段階はめかるんじゃないよ。一步一步着実に、やるんだよ」

「何をやるって」

言葉に詰まる上総を無視し、こずえはさっさと女子グループに明るく声をかけに向かった。なぜか男子以上のエロネタを振り回さないのは、こずえなりに T P O を考えているのかもしれない。こういうところを見ると、こずえはやはりクラスの評議委員として気配りのできる姉御なのだと思えざるを得ない。

麻生先生が汗をたっぷり額に光らせ現れた。合いも変わらず脂ぎったその顔が見苦しい。上総はすぐに目を逸らした。今日は一切この先生を相手にしないですむのがありがたい。

「十日ぶりかそれとも毎日会ってる奴とかいろいろいるが、おはよう、お久しぶりだ」

「おはようございます」

起立、礼、着席を一通り行った後、麻生先生はすばやくプリントを一人一人に配って歩いた。上総にも無言で渡された。これから五日間の講習予定である。

「今回の夏講習はひとりひとりのカリキュラムが違うから、教室を間違えたりするなよ。先生たちだってこの暑いなか、汗だくになってお前ら待ってるんだからな。さてと、もうだいぶ時間も押してるし、さ、とりあえずは解散だ！ 行ってこい！」

即座にこずえが号令をかけた。この間五分もない。麻生先生は礼もそこそこにまた教室から飛び出していった。やはりこれが夏休み。肩から力が気持ちよく抜ける。

「あ、立村、あんたこれから個人面談？」

「そう、なぜか視聴覚教室」

わざと強調して言ってみた。

「誰なんだろうね。あんたの担当。あとで教えてよ」

「教えても問題なければ」

こずえとも軽口を叩き、上総はすぐに三階に向かい階段を昇った。タイミングが合わなかったのかまだ羽飛にも美里にも会っていない。一年B組もC組も朝のホームルームにはかなり時間がかかっているらしく、まだ廊下に出てくる奴はひとりもいなかった。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と振り回しあう日々（3）

視聴覚教室にたどり着いた。すでに先客あり。三名ほどが緑の黒板に記載されたとおりの席順で座っている。ざっと見たところ一年生はいない。知り合いも見当たらない。上総は壁際の最奥席に向かい、席についた。

——同じ部屋でもこれだったらある程度プライベート保てるよな。

適度に二ブースほど離れたところにみな配置されている。個人面談の場合はてっきり個室で話し合いを行うのかと思っていたのだが、よく考えれば難しいだろう。全校生徒ターゲットで行うのだからある程度はまとめて行わないと手間がかかってしまう。あまりこの辺の事情については上総もよく把握できていない。

上総は筆記用具を取り出した。英語の授業でしょっちゅう使うカセットレコーダーに埃が溜まっている。やはり、今は長期休暇なのだと思うざるを得ない。ハンカチで拭こうか迷っているうちにまず、一人目の先生が現れた。麻生先生だった。

——まさか、だよな。

首筋がぎくりと痛む。麻生先生は黒板を見上げ、上総のほうをちらとみやり、その後は無視して別の生徒の席に向かった。ちょうど窓際のまん前の席にいる、背の高い男子生徒だった。生徒が立ち上がって礼をするのを、麻生先生は手で止めつつ、

「まあまあ、緊張するな。気楽に行こう気楽に」

穏やかに声をかけた。席につきまず、ヘッドホンをつけるように指示を出し、その他何やら細かい説明を行っている。

ヘッドホンを持ってみた。マイクつきのものだった。

次に現れたのは三年担当の男性教師だった。名前が思い出せない。誰だろうと首をひねっている間にその先生は、窓辺最奥の席に向かい、麻生先生と同様に礼をした。だいたい三十代前半か。ラフなピンクのポロシャツに白いスラックスというのは夏休みでなくてはできない格好だろう。やはりヘッドセットをつけるように説明をしているらしい。ただ遠くて声は一切聞こえない。

——まさか、ここで英語のヒアリング試験なんてこと言わないだろうな。

自分の担当が誰なのか予想してみるが、なかなか想像がつかない。個人面談とは言うものの、どういう相談をすればいいのだろうか。自分の数学無能さをカバーするためにということだから、数学科の先生が話に来るのだろうか。それは避けてほしい。毎週の補習でずたずたな想いをしている上総の本音だった。

三人目。扉が開いた。

「おはようございます」

凜とした声の響きに思わず腰を上げて覗き込んだ。すぐに座りなおした。

「麻生先生、加田先生、お待たせしました。それではよろしいですか」

「野々村先生、こちらこそよろしく申し上げます」

図太い声で麻生先生が挨拶を返す。加田先生と呼ばれた先生も同様に応じた。

白いブラウスに紺のタイトスカート、シンプルだが品のある風情でもって、野々村先生は廊下側の席、最奥に近づいてきた。導線に間違いがなければこれは確実に、上総の隣に腰掛けることになるはずだ。あまり考えたくないのだが。おずおず立ち上がる。様子を伺っている麻生先生の目を無視した。

「あ、あの、野々村先生が」

「立村くん、よろしくお願いします。緊張しなくていいのよ。席について、まずはヘッドセットつけて待っててね。そうそう、スイッチも入れなくちゃ」

上総の机に手を伸ばし、カセットテープのスイッチを押した。赤いランプがついた。

「少し待っててね」

ヘッドセットをかぶり、言われたまま、ただ座っていた。

——野々村先生って、まさか、だろ？ B組の担任で、たしかあの先生国語担当じゃなかったかな。違ったか？ なんで俺の担当なんだろう？ 何かの間違いかな。

三人一緒の個人面談である理由が把握できた。女教師と男子生徒、それは一対一だったら危険に決まっている。思わず更科の顔が思い浮かんだ。

「お待たせしました。これから一時間に渡り、個人面談を行います」

ヘッドセットから声が聞こえてくる。野々村先生のはっきりした口調の聞きやすい声だ。

「最初に、この面談中は必ずヘッドセットを着用してください。つけることにより、それぞれの担当教師からの声のみに集中できます。またそれにより、他の生徒の会話は一切聞き取れなくなりますので、必然、プライベートも保たれます」

——なるほどな！ 言われてみればそうか！

耳元にぴったり当てて見る。聞こえるのは確かに野々村先生のみ。耳をすっぽり覆うだけの大きさがあるので、窓際先頭、奥、それぞれの話し声は聞こえない。

「また途中、お手洗いにいきたくなった場合は申し訳ないのですがヘッドセットをつけたまま退室してください。これもそれぞれのプライバシーを守るための措置です。ここでそれぞれの担当に話すことは、決して外部にはもれません。その点をご安心くださいね」

上総は黙って頷いた。世の中いろいろな方法が用意されているものだ。

「そして、時間が経ちましたら、この後の講習にそれぞれ向かっていただきたいのですが、一時間だけでは不安ということもあるかと思われます。そのため、ここでは話きれなかったことや、担任教師には話づらいことなどありましたら、改めて時間を取ります。もちろん都合もあるので百パーセントではありませんが、できるだけご希望に添えるようにします。では、ここから先は、それぞれの担当教師との対話になります。よろしくお願いします」

——個人面談、だよな？ でもなんで、野々村先生なんだろう。

何度考えても分からない。野々村先生は教卓に備え付けられている巨大な電子機械をいじりつつ、上総に向かって呼びかけた。

「立村くん、聞こえる？」

「はい、聞こえます」

「待ってね」

何かの操作を行い、野々村先生は麻生先生に何か声をかけた後、駆け足で上総の隣席に座った。息を切らしている様子だった。ブラウスの襟が揺れていた。ポニーテールも揺れていた。

「ごめんね。では始めましょうか」

「よろしくお願いします」

これしか返事しようがない。とにかく今は受け入れるのみ。今回の個人面談担当教師がなぜか一年B組の野々村先生であること。野々村先生は見たところ二十代前半の女性教師であること、清坂美里とはそりが合わないこと。しつこいようだが、国語担当であるということ。まずはこれだけでも、ということだ。

額にかかる前髪がぴったり眉の真ん中にかかっている。きっちり揃っている。

「驚いた？ 女の先生が担当で」

「少しは、あ、でもそれが何かというわけではないです」

嘘を言えなくてとんちんかんな答えをしてしまった。野々村先生は微笑んだ。

「そうか、英語科の授業は私、教えてなかったものね。驚くのも当然よね。ごめんなさい。今から詳しく説明するわ」

ずいぶんと友だち言葉を使う先生だ。失礼な感じはしないのだが、やはり戸惑うのも本音ではある。膝に手を置き、上総は野々村先生の顔をうかがった。野々村先生がヘッドホンをつけて、さっそくマイク経由で話しかけてくる。

「これで聞こえるかしら」

「はい、大丈夫です」

「さっき説明した通り、これから立村くんと話すことはすべてマイクを通じて行います。他の人たちに聞かれないようにするというのが目的なので少し不便だけがまんしてね」

「わかりました」

「それと、今回私が立村くんの担当になったのは二つの理由があります。一つ目は、まず数学の補習について。わかるわね」

——一番の謎だし。わかるわけないよ。

「申し訳ありません、ちょっとわからないです」

マイクで答えると隣の野々村先生はまたにっこり笑った。承知済みってところだろうか。

「ごめんね、それを説明したかったの。私をご存知の通り国語全般が専門だけど数学についても比較的詳しいの。専門じゃないからあまり難しいことは教えられないけど、基本的な内容であれば、お手伝いはできると思います」

「それって許されてるんですか、あの、専門外というのは」

詳しくはわからないが、担当以外の授業を教えるというのは、どこかの法律で罰せられたりしないのだろうか。

「それが立村くんの担当になった理由のひとつでもあります。専門は国語の現代文、古文に絞ら

れるけれども、個人面談の担当であれば話を聞きながら途中相談することもできるでしょ。私が相談に乗れる範囲は比較的広いということ、まずは理解してほしいんだけど、どうでしょう？」

——数学が詳しい？ つまり得意、ってことか？ 文系なのに？ なんて先生だ。

正直思う。人間の頭とは思えない。ありがたいことではある。

「それともうひとつ、これは立村くんを意識してほしいことなのだけど」

野々村先生はさらに続けた。

「私は国語の教師だからもちろん専門は国語。もともと立村くんは国語も得意科目と聞いているけれども、そちらの方面の力をもっと伸ばす必要があると思います。これは中学の先生たちからも申し送りされてます。立村くんは数学で自信をなくしかけているかもしれないしもちろんこれからフォローは続けます。でも、できればもうひとつ、別の得意分野で知識の幅を広げてほしいんです」

——そりゃ、数学よりは国語が得意だけど、でも、英語よりは落ちるよな。

返す言葉に戸惑いつつ、ヘッドセットで声を聞く。目の前の野々村先生は上総の様子を伺いつつ、何度もこくこく頷いた。

「大丈夫よ。立村くんとはまだ話をじっくりしたことないけれど、狩野先生からもいろいろお話は聞いているの。一学期のうちはなかなか立村くんにあったカリキュラムを手探りで進めるしかなかったけれど、二学期以降は大丈夫よ。一週間に一回程度、こういった形でわからないところや勉強方法とか、そういう点を煮詰めていきましょう。何も一流の数学者になる必要はないけれど、数学特有の考え方だけでも把握しておけば得意分野に進んでも必ずプラスになるはず。一緒に、歩いていきましょう」

「先生、ただ、時間が大変なんじゃないでしょうか」

もったいないくらいの申し出で恐縮しつつも、やはりわなが仕掛けられているのではとびくびくせざるを得ない。何か裏があるのではないだろうか。申し送りは野々村先生の話によると狩野先生とのことだが、三年間担任だったあの青春熱血馬鹿野郎教師も関係していないとは考えられない。

「B組の担任もしなくちゃならないのに、僕みたいな、あの、普通じゃないくらいできない生徒に時間をいただくというのは」

「大丈夫、そういうことを青大附高の生徒は心配しなくていいんです」

野々村先生はポニーテールを派手に振って否定した。声はやはりヘッドセット経由だった。派手な顔立ちではないが、肌が真っ白い。美人やかわいい部類には入らないかもしれないが、一緒にいていやな感じはしない。

「立村くんだけではないの。大まかな内容は担任の麻生先生が決めますけれども、私はあくまでも立村くんの手が届きにくいところを手伝うだけ。私にとってはそれほど大変なことではないし、立村くんであればほとんどはひとりでできるはずよ。それに、もし大変なことがあれば私だけではなくて他の先生たちの力も借ります。ひとりに全部負ぶさるようなことはないの、心配しないでね」

白いショールのようなものを膝にかけ、野々村先生はかばんから黒いカバーつきノートを取り出した。ちらっと見えたところによると、どうやら上総の申し送り資料がまとまっているようだ。数学が赤点だらけなのも承知しているのだろう。しかたがないとはいえ、みっともないっらない。

「それでは、まずいくつか確認を始めますね」

野々村先生の声が耳に届く。今まで聴いたことのない質感のものだった。ヘッドセットを通してのせいか、身体にしっとり染み渡るような感覚がある。女性にしては少し抑え目にも聞こえる。今朝顔をあわせた美子先生の、きんきんした声とは全く別のものだった。

——もう少し性格が穏やかだったら杉本もこんな感じになるのかな。

妄想がちらつく。上総はすぐヘッドセットを耳に当てなおし、野々村先生からの質問を受け取る準備をした。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と振り回しあう日々 (4)

野々村先生との対話はヘッドセットごしながら、きわめてクリアに進んでいった。まずお決まりの一学期成績確認から始まり、得意分野と苦手分野の聞き取りなど、さらに話は進んで上総の家族についても問われていた。

——ずいぶん突っ込んだところ聞いてくるな。まあいいか。

答えて困るものでもないので、正直に話した。

「父は雑誌記者、母は現在別居していますが日本伝統芸能に関するコーディネーターのような仕事に携わっているようです。詳しいことは僕も把握していませんが」

「お母さまが、そうだったのね」

納得顔でポニーテールを揺らしつつ頷く野々村先生。涼やかだ。汗ひとつつかかない。クーラー有無の問題ではないと思う。

「それでは日頃から本を読んだり、演劇などを見ることは比較的多いのかしら」

「はい、演劇というよりも、日本舞踊の会とか、茶道の席とか、それから和楽器の演奏会とか、そういう感じです。あまりよくわかりませんが、嫌いではないです」

「そうなの。では立村くん自身はそのような日本文化の習い事をしたことはあるの？」

「いいえ、あまり集団が好きではないので、習い事したことはありません。一応、ピアノとお茶は母の手ほどきである程度はできますが、人に見せられるものじゃありません」

「それはもったいないわね。でも、目は肥えているってことかしら」

「僕には、わかりません」

答えに困る質問だった。上総はしばらく言葉を選びつつ野々村先生に答えていった。話の内容からすると、母が日本伝統芸能がらみの仕事をしていることに対して興味を強く示しているようではある。国語科の先生だから当然なのだろうが、それでもやはり偏りすぎているような気がする。

戸惑う上総に対して、野々村先生はさらさらメモを取りつつさらに問う。

「読書は、日本文学、海外文学、どちらが好き？」

「どちらかというと、海外です」

「好きな作品は？ 中学の先生たちから伺ったところによると、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』を愛読書としていると記録にあるけど」

「はい、小学校の頃から好きな作品です」

なぜ好きなのか聞かれたら、それこそあの青春野郎も真っ青な勢いで語ってやるつもりだったが野々村先生はあっさりと流した。肩透かしだ。

「日本文学はどうかしら」

「一通り目を通してはいますが、強烈に何か、というのはありません。最近だと森鷗外の『即興詩人』が印象に残りました」

『即興詩人』はデンマークの作家・アンデルセンの綴った作品だ。厳密には翻訳ものだと突

っ込まれると困る。やはり野々村先生は流した。

「だいたい立村くんの持つ傾向がわかったわ。それではこれからのことなのだけど、私なりに考えている今後のカリキュラムを説明するわね」

耳に響く落ち着いた声に頷く。きんきん響かず脳に染み通るようだ。一重瞼の静かな眼差しでもって、野々村先生はノートを閉じ、上総に正面から語りかけてきた。

「まず、今後ですけれども。数学についてはこのまま二学期以降も集団補習を行うことにします。形式としては今まで通りですが、さっきも話した通りできるだけ私も教室にはいるように心がけます。もちろんクラスもあるし毎回できるとは限りませんがね。私も無理はしないから、立村くんもご心配なく」

「ありがとうございます」

軽く流すようにして、野々村先生は話をつないだ。

「一学期は諸事情で学生さんたちに任せざるを得ませんでした。立村くんには少し向いてなかったかもしれないという気は私もしています。学生さんたちのことをフォローするわけじゃないんだけど、まだ慣れてないのよ。これから経験積んでもらえればどんどん分かりやすく教えてくれるようになると思います。でも、立村くんには待たないで、この点はできるだけ私が入るようにします。他にも同じ立場の人はいますから安心してね」

「はい」

野々村先生がまず数学補習の説明を終えた。ノートをぱらりとめくる。マニキュアのないさっぱりした指先。短く爪が切っている。

「そしてこれは補習というわけではなく、私からの宿題なんだけど、国語のこと」

「国語ですか」

またプリントたっぷり渡されるのだろうか。げんなりしそうだ。上総なりに顔には出さないようにしていたつもりだが、野々村先生にはばれていたのだろう。首を振った。

「そんな心配しなくていいわ。立村くんがいつもしていることよ。これから古文・漢文をできるだけ読むよう心がけてほしいだけ。問題を解いてもらうというよりは、私が渡したレジュメを通じて、立村くんがどう感じたかを短い作文にまとめてほしいの」

「作文ですか」

どちらにしてもめんどくさそうではある。

「そう緊張しなくていいのよ。私、ここで立村くんと話をしてみても感じたのだけど、もっと日本文化にがっぴり四つで組んだほうがいいのかもしいという気がしたの」

——がっぴり四つって、この先生、相撲好きなのかな。

全くどうでもいいことを思いつつ、頷いた。まずは黙って聞くことに専念する。

「読書することには抵抗がないというのは、素晴らしい能力のひとつよ。中学の先生たちからも伺ってますけど、立村くんは海外文学を好んで読んでいて、夏休みの自由研究ではいつも海外文学の原書を自分の言葉で訳して提出していたと聞きました。大嶋先生からもその点は伺ってます。卒業式の英語答辞のことも、かなり細かく耳にしています」

小さくなりたいのをこらえつつ、また話を聞く。

「もちろんそれは素晴らしいことだし、これからも伸ばして行ってほしいことだけど、ただ立村くん、今まで意識して日本文化を楽しむ経験はないんじゃないかしら。ほら、お母さまのお手伝いで裏方に立つことはあったと言ってたけれども」

「はい、楽しいというよりも、なんとなく触れていたという感じです」

「そう、私からすると立村くんは他の生徒たちに比べて、日本文化に自然になじむことができるという貴重な機会を得ているの。うちの学校は中学からお茶の授業もあるし、学校祭ではお茶会も評議委員会主催で行うし、比較的関心の高い人は多いはず。ただ、さらに深いところへとなると、意外とチャンスがないというのが本当のところではないかしら」

「確かにそうですね」

上総は頷いた。野々村先生の言葉はいちいちごもつとも。青大附中でなんでだか、男子評議が全員袴はかせられて野点の手伝いさせられるなんて学校はそうそうないと思う。ただそこから、本気でお茶を習い始めたとかそういうことは聞いたことがない。

「もともと立村くんは語学が得意だし、だから英語科に進学したところはあるでしょう。でも、これから先は、海外の人々と接するにおいて必ず日本文化とはなんぞや？という問われ方をしていきます。本当なのよ。英語がぺらぺらでも、袴のつけ方を知らないのはなぜなんだお前日本で育った奴だろうって怒られるとか、ざらなのよ」

「普通の家で育った人はよっぽどのがないと、自分で袴をはくひとはいないと思います」

正直な感想を言う。

「そうよね。でも外国の人たちは日本人……語弊があるわね、日本で生まれ育った人たちはみな、日本文化について熟知しているものだと、心から信じ切っているの。これは大変なことよ。自国の文化についてしっかり学べていないという現実は、やはりまずいわ」

妙いに熱く語り出す野々村先生。やはり国語科、こだわりがあるのだろうか。言いたいことはなんとなく理解できるのだが、上総に何をさせたいのかが伝わってこない。日本文化の語り部になれとでもいうのだろうか。ますますわけがわからない。

「これから私が提案したいことは、せっかく日本文化に深く触れる機会があるのだから、それを実際の体験として身に着けつつ、それに伴う知識も蓄えてほしいということなの。同時にそれを、他の人たちに伝えることができるようにしてほしいとも思ってます。できれば日本文化について詳しく英語で語ったり書いたりすることができるようになれば、海外の人々とのコミュニケーションにも必ず役立つはずですから。同時に日本語と英語の言葉の違いを通じてまた新しい視界が開けるかもしれません。いえ、必ず拓けるはず」

——だから、毎週古文のプリント読んで作文かよ。

毒づきたいが、さわやかな野々村先生の微笑みに面じて耐える。きっと純粋な想いで言ってくれているというのは伝わってくる。某青春熱血野郎に同じことを言われたらヘッドセット投げ捨てて教室を出て行ってやるだろうが、この先生にそれはできない。ただ、この件を親に知られたら何を言われるかわからない。母に知られようもんなら、また「上総あんた、学校でチャーんと習ったでしょ！ 補習もしてもらっているくせになんでこの歌詞わからないの！ 古文勉強してるじゃないの！」とか罵倒されるのが落ち。目的は正しいが、副作用が怖いというのが本

音だ。

黙って聞き入る上総に、野々村先生は静かに締めた。

「この件はまず、二学期に入ってから詳しい説明しますね。麻生先生にも許可をいただかなくてはならないし。でも立村くんにとってきっとこれは必要なことだと思うの。ぜひ試させてほしいの。お願い」

——「お願い」ですか。

女教師にあまり慣れていないせいもあるのだろうが、話を進めていくと勝手に違い過ぎて戸惑ってしまう。中学でも全くいなかったわけではないし、小学校時代はあの美子先生だ。今までは慇懃無礼に振舞えばそれまでだったが、今は決して不快感を感じないタイプの野々村先生が相手だ。どう答えていいものやら検討がつかない。

「わかりました。よろしくお願いします」

これは無理やり話を終わらせるより他にない。頭を下げた。上げると野々村先生は、表情を極端に変えず、ただやわらかく微笑んでいた。

「そうそう、立村くん、夏休みの自由研究だけど何を選んだの？」

雰囲気を変えたいのか、野々村先生は友だち言葉ふだんに問いかけてきた。

「はい、友だちと三人で、美術関連の資料を翻訳しようかと考えてます」

「翻訳、好きね」

——それしかできませんし。

とは、言えない。簡単に説明しておくことにした。

「友人がふたりとも、現代美術に興味があるようで、その中の特定の画家を選んで研究したいと話していました。その画家は確か、最初日本で活動していたらしいのですが、ある時外国に飛び出して、そこからはずっとそこを本拠地にしていたという話です。日本ではあまり知られていない方なのですが、海外の情報はかなりたくさんあるらしいので友人たちに頼んで資料を集めてもらい、僕なりに翻訳しようかなと、思っています」

「そうなの。得意分野ではあるのね。でも現代美術には興味あるの？」

「いいえ、全くありません。僕はあまり、絵がわからないんです」

最後は小声で言う。やはり自分にとって美術とは未知の世界だ。羽飛と美里の目の輝きに時折ついていけなくなる。それでもいいと今は思えるが、中学時代は辛かった。

「私もよ。本当のことというと、きれいでわかりやすいものが好き。立村くんも？」

「僕もです。きれいな景色とか、そういうものはいいと思いますがそれだけです」

好みは保守的と見た。美里と感性が合わないのもわかるような気がする。野々村先生は満足そうに頷き、メモを取りながらさらに尋ねた。

「ちなみに、誰と組むの？」

——これ聞くのかよ！

迷うが、しかたない、嘘は言えない。答えるしかない。

「C組の羽飛くんと、あと、B組の清坂さんです」

野々村先生の指がぱたと止まった。耳のヘッドセットに、なんとなく冷たい呼吸音が聞こえたようだった。

——やはりだな。

横顔に厳しいものがちらついたように見えた。緊急フォローを上総なりに行う必要があるそうだ。

「あの、ふたりとも、僕とは同じクラスで、あの、D組だったので仲はよかったです。それと、清坂さんとは三年間評議やってましたから、結構話もしましたし。そのこともあって今回、一緒に組んだだけなんです」

「わかってるわ。そうよね。ただちょっと意外でびっくりしたの」

すぐに笑顔を取り戻し、野々村先生はさらりと答えた。

「性格正反対に見えるのに、友だちとのつながりって不思議ね。立村さんと清坂さんは水と油の感じがしたのに。だから人と人は、面白いのよね」

ちっとも面白がっていない風につぶやいている。

耳元にささやかれた言葉には、もっと冷えたものが流れている。目の前で静かに微笑みメモを取り直す野々村先生には見えない何かが、声だけに。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と振り回しあう日々（5）

野々村先生と個人面談が終わった後講習に参加した後十一時半過ぎに本日のカリキュラムは終了した。これから五日間続くことになる。気が重い。

「立村、やあっと見つけたぞ！」

廊下に出て呼びかけられてこちらもやっと気がついた。羽飛貴史がスポーツバック片手に駆け寄ってきた。相変わらず浅黒い顔で、いかにも夏休み満喫しているのがよく分かる。

「こっちも探してたんだ。今日講習だったんだろ」

「そ、英語、すげえ大変だわ。お前よく英語漬けの生活送ってて平気だよなあ。あ、そうだ、そろそろ美里も来る頃だし、迎えにいか」

「清坂氏はどこにいるんだろう」

肩を並べて歩きながら、上総は羽飛に尋ねた。

「ああ、あいつも一緒。ただいろいろ用事あるみたいでな。古川もいっしょだったんで女子同士いろいろわちゃわちゃやってるぞ。女子は夏ばてしねえよなあ。お前どう？ 毎年恒例でぶっ倒れてるんじゃないかねえの」

「最近は大いぶ慣れたよ」

とろとろしゃべっているうちに、理科の講習会場たる一年B組の教室に到着する。

「今日はB組でやったんだな。清坂氏のホームか」

「ホームなんだかよくわかんねえけど。ああまだいるぞ、呼んでくるからお前待ってろ」

貴史が勢いよく教室に飛び込み、美里に呼びかけているのが聞こえる。数人出入りしていて、上総とも顔見知りの連中が多い。「立村、待ってるよか入れよ」などと呼びかけてくれる奴もいる。

「立村くん、ごめんね、待たせちゃってる？」

美里は古川こずえとふたりで席隣り合わせになり、ことごと語り合っている様子だった。遠慮したほうがよさそうだ、手を挙げて合図をして引っ込もうとしたが、

「ちょっと立村、あんたこっち来なさいよ。まったく何よねえ、呼ばれるの待ってるなんてなんなのよねえ。ほら羽飛もこっちへどうぞ」

「暑苦しい奴だよなあお前」

そう言いつつも羽飛はこずえの隣に腰掛けた。まだ昼前ということもあり、みな動きがゆるい。上総も近づいて行って美里の隣に座ることにする。顔を見合わせて、頷きあった。

「これからみんなどうすんの？ 私はこれから図書局でお弁当食べるけど」

こずえがかばんの弁当箱を持ち上げてみせた。

「こずえすごーい。お弁当作ってくるんだあ」

美里も弁当箱をなでたりして不思議そうに問いかける。

「でも、暑いから、悪くなったりしない？」

「大丈夫よ。サンドイッチ、カチカチに凍らせて、同じくジュースにはさんで持ってきたから、冷え冷えだよ」

羽飛は美里をさっそくからかう。

「お前、弁当なんて作ったことねえだろ」

「あるもん、誰も食べてくれないけど」

「まともに食わせる自信ねえくせに」

「ひどい！ ねえ聞いてよ立村くん、こうなんだよずっと！ 昨日旅行から帰ってきたとこなんだけど、貴史ってばずーっとこの調子でしゃべり続けてさんざん私こけにするんだもん。いいよだ、絶対に今度、おいしい料理で羽飛家のみなさまおもてなししたげるもん」

詳しいことは聞いていなかったのでも上総も尋ね返す。確か、講習五連荘が始まる前に家族旅行を予定しているとは話していたような気がするが。

「今年も合同家族旅行出かけたの」

「うん、そうだよ！ 今年はおうちのお父さんが仕事休めなくて不参加だったけど、全部貴史のお父さんが仕切ってくれてすごく楽しかったんだよ。車はちょっと使えなかったの、自動車だったけどね」

「それなら駅に着いたのは何時ごろだった？」

なんだかざわざわする感触を押さえつつ尋ねてみた。

「夕方、三時過ぎかなあ。貴史、確かそのくらいだよね」

「まだ明るかったけどな。着いた時えれえ雨降ってたぞ」

胸を撫で下ろす。危うく美里たちと顔をあわせるところだったというわけだ。別に悪いことをしているわけではないけれども、気まずさはたぶんある。杉本梨南のことも美里はちゃんとわかってきているけれども、そこに行き着くまでの流れを考えて少し痛むものもある。

顔には出さず、上総は羽飛に話を振った。

「まだ席があるうちに何か食べに行こうか。夏休み前だからそんなに人はいないと思うけど、サークルの溜まり場で席取られているかもしれないし」

「そうだなあ、雨、そろそろ止んでるか」

窓に目をやる。だいぶ落ち着いてはきている。小雨程度、肌寒さを感じる程度だ。

「それなら、まず腹ごしらえしようか。それから図書室に戻って自由研究の続きやるのが一番自然な流れだと思うんだけどな」

「そうだね、じゃあこずえ、ごめんね。またあとで電話するね！」

本当は美里も自由研究の仲間にこずえを混ぜたくてならなかったらしい。上総も羽飛も反対していたわけではないが、肝心のこずえがすでに別の仲間と予定を組んでいたため断られたという。いつも仲よしだけで行動するというわけではなさそうだ。

「こっちも連絡するよ。あ、そうそう立村、あんたも昨日エキサイトしすぎたんだから少し冷静になりなさいよ。まだまだ未練ありげな顔してるけどね」

「何言ってるんだよ、まったく」

杉本とのことを触れられたくない。やましいことなく、美里の前ではなんとなく。

夏休み中は学食も比較的空いている。

「やはりね、読みどおり、当たってるね」

美里が上総と羽飛をそれぞれ見上げながら嬉々としてささやく。

「さ、早く食べちゃおう。私、今日は海老の入ったカレーライスにするね」

「じゃあ俺はとんかつ入りのカレーだ」

「別に何も入ってなくてもいいから、普通のカレーにする」

結局三人ともトッピングこそ違えども同じカレーにまとまった。性格がにじみ出ているとつくづく思う。さっそくトレイにそれぞれのカレーを載せてゆっくり食べることにした。

「立村くん、今日は二時間講習があったのよね？ 二時間目は数学ってきいたけど」

美里がまず、カレーのルーをたっぷりつけてエビフライにかぶりつきながら尋ねてきた。

「講習というか補習。理由は聞いてほしくないけど」

「ごめんね、それで一時間目は？」

「個人面談、一時間たっぷり」

ここまで言いかけて、思わず美里の興味深々の顔を見やる。そうだ、担任なんだ、あの人は。黙っているのも不自然という気はする。さりげなく話すしかない。

「担任以外の先生が入るんだよね？ 私は講習最終日って言われてるけど、貴史は？」

「俺は明日。かったりーなあ。で、お前誰だったんだよ」

「ええと、B組の先生」

名前を出すのがなんだか抵抗ある。美里をちらっと見る。カレールーだけすくって口に運んでいる。

「もしかして、うちのクラスの担任？」

「そう、そういうこと」

「ええ？ うっそお！ なんで？ だってあの先生、国語の先生じゃない！」

すっとんきょうな声を挙げる美里を、羽飛ぶがスプーンで叩くまねをする。

「あのな美里、少しTPOをわきましろ」

「あんたに言われたくなんかないわよ！ もうなにそれ、信じられない！ だって女の先生だよ？ 立村くんになぜ女の先生が話をするの？」

「俺も驚いたけど、いい先生だと思ったよ」

火に油を注ぐのはまずいと思う。だが嘘は言えない。

「えー！ そんなの絶対嘘！ 立村くん、きっとだまされてるのよ、なになに、何を話したのよ」

急いでカレーをかきこむことにする。そうしないと昨日と同様、食いはぐれることになる。羽飛もにやつきながら隣の上総をつつく。

「年上のお姉さんにぼーとしちまったのかよ。年上好みって奴か？」

「そんなんじゃないよ。先生をそんな目で見ると奴いるかよ、普通」

言いかけて黙った。いる、そういう奴が約ひとり。いろいろと問題がありそうなので言葉は

控え、美里に言い訳することにする。

「担任だったらどう思うか分からないけど、単純に面談するだけだったらそんないやな気持ちはしなかったな。聞かれたことは、せいぜい成績と、今後のカリキュラムとかその程度だし。俺の場合は数学がネックだから、その辺のフォローもこれからしてくれるとは話してくれた。国語の先生だけど、数学にも明るいとか話してたな」

「そんなこと、私聞いたことないよ。絶対変！」

美里は言い張る。半分もカレー片付けてない。もうだいぶさめているはずだ。

「私もあまり人の悪口言いたくないけど、あの先生すごいだよ。とにかくえこひいきしまくり。一応は担任なんだから全員公平に見なくちゃいけないじゃあない？好き嫌いはもちろんあるかもしれないけど、それ、顔に出しちゃいけないと思うのよ。すごいんだから。私に用事があるって話しかけるときの仏頂面っぷりったらないわよ。そのくせ、すぐ側に別のごひいきさんがいる場合は笑顔で軽やかに語りかけてるし。この差、なんなのって感じよ。そうとう私のこと嫌いなんだなって気はするけど、ああ露骨に差をつけるのはひどいじゃない。それに、聞いてよ！」

「美里落ち着け。人聞いているぞ」

「聞いてたっていいじゃない！あの人も聞いてたらしいのよ！一学期が過ぎたある時を境に、やたらと貴史が私に張り付いてくるのよ。しかもうちの母さんとやたら仲良しだし。変だと思ったら、なんと私に変な虫がついてないか見張るためらしかったのよ！そうよね貴史！あんだ、白状したよね！」

美里の爆発ぶりを久々に見せ付けられたような気がする。上総はようやくシンプルなカレーライスを食べ終わり、水を飲んで一息ついた。羽飛もあわせてため息をつき、小声で、

「てなわけで、ばれちゃった、というわけ」

にやりとささやいた。それほど痛手は受けていないらしかったのが救いだ。

「つまり、私が高校に進級してから男子たちとへらへら遊びほうけてるんじゃないかって、あの先生勝手に妄想してたってことなのよ。家庭訪問でもそんなこと吹き込むし、周りからも私がいろいろ男子と手当たり次第付き合ってた、常識知らずのことしてたって平気で思ってるのよ。立村くんが一番わかってると思うけど、私そんなこと、なかったよね！証言してくれるよね！」

「うん、もちろん証言する」

大きく頷くと美里はようやく笑顔を取り戻しゆっくりとカレーを食べ始めた。

「それにしてもひどい噂立てる奴いるよな」

「だからその張本人があのお先生よ。私のこと気に入らないから、あることないこと吹き込んでるの。私が遊び人になったんじゃないかってうちの母さんたちが心配して、それで貴史をお目付け役にあてがったってわけよ。あんだってそろそろ鈴蘭優のファン活動本気でやりたいだろうに、私に張り付かなくちゃいけないなんてそっちの方が拷問じゃないの。うちの親も親だけど、そのとっぴじめがあのお担任なの！立村くん、よっくわかった？」

担任を嫌う気持ちはわからないわけではない。

美里の言い分も間違っていない。当然激怒すべきだ。

ただ、

——そんな、えこひいきする先生には、見えなかったけどな。

飲み込んだ言葉が、胃にもたれる。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と振り回しあう日々 (6)

高校の図書館に戻り、まずは古川こずえがカウンターの中にいるかどうかを確認した。

「もしもし、古川さんいますか？」

美里がまず、当番の女子に声をかける。話をしている間に上総と羽飛は手前の長テーブルをまず押さえた。かばんを置いて、ひとまず座った。

「さあてと、雨は全然やまねえし、ここで自由研究全部片付けちゃうか！」

「それは無理だろ、俺も全然話つかめてないし」

「あ、そうだ。立村に渡すんだって。ほら」

羽飛はすぐかばんから金具つきファイルを取り出した。かなりの枚数コピーしてきたようだ。ざっと観ると、すべて英語の資料だった。上総の当番だ。

「かなりあるなあ、これ、全部俺が訳すのかよ」

ファイルを奪い取り、まず目を通してみる。思ったより難しい単語は少なく、美術系の専門用語さえ把握できればすぐ理解できそうな内容ではある。

「そんならいお前にやってもらわねえと、つりあい取れねえだろ。だから昨日の旅行だって資料集められそうなところ選んだんだぞ」

「由来がある場所だったのか」

食事しながら旅行先を確認はしたが、あまり興味のある場所ではなかった。

「そう、今回のテーマとなる画家さんの生まれ故郷でな、記念館もあるんだ。そこで美里と一緒に頼んで、資料出してもらったんだ。もちろん現物じゃねえよ、コピーだけだな」

知らなかった。すでに自由研究は着々と進んでいたというわけだ。羽飛貴史と清坂美里、このふたりが組んだたくらみで、失敗したことは全くない。

美里がもどってきて、貴史の隣に座った。斜め向かいに上総がいる計算となる。

「古川さんいなかったの」

「うん、図書館の準備室で本の整理してるんだって。あと少ししたらカウンターかわるって言ってたよ」

高校の図書館がどういう雰囲気なのかは想像がつかないが、古川こずえのことだ、相変わらず例のネタで盛り上がっていることは確実だろう。

「女王様はどうでもいいだろ、それよか美里、立村にコピー全部渡したけど、それでいいだろ？」

すぐに美里は上総の手元を覗き込み、何度も頷いた。

「うん、そうそう。立村くん、全部細かく訳さなくてもいいからね。きっと読めば一発でわかったらうだろうなって思うけど、必要なところだけでいいから。たぶん立村くん、こういう作風苦手だと思うんだ。だから、私たちがある程度まとめておいたのに、裏づけしてくれればそれでいいからね」

「それはそれで楽だけど、なんだか手抜きしているような気、するな」

「してないってば！ また立村くんいじけるんだから！」

美里がふくれつつらするのを、面白そうに羽飛がなだめる。この組み合わせではどつく、つつこむ、なだめる、怒らせるなどさまざまなパターンが目の前で展開される。のんびりとそれを眺めて物思うのが三年前から上総の定位置だった。ふたりをうっちゃっておいて、まずは一通りもらった資料に目を通すこととした。

「そうか、この人、名の知れた日本画家の一人息子として生まれたものの、生まれた時から日本文化そのものになじめず育ったということか」

資料を読みながら、時折羽飛に話しかける。

「そ、お前知らなかったの」

「調べたよ。でもこんなに詳しくなかった」

何も準備しなかったわけではない。今回テーマとする画家はある時期を境に日本から飛び出し、アメリカで成功しその後凱旋帰国すら一切せず客死したというところまでは百科事典で調べていた。それなりに名は知られているはずなのだが、日本の美術界では存在を一切無視されているとのことだった。むしろ彼の名はアメリカを中心に、好意的な批評はほとんどが海外のものだと、聞いていた。

「俺も金沢に教えてもらうまでは、こんな画家がいるなんて知らなかったもんなあ。ま、金沢も苦手なタイプの画風だとは言ってたけど、俺にとっては超ダイレクトなんだ」

「わかるわかる！ 何描いてるかわからないようで、実は遠くから見るとものすごい景色が浮かび上がるんだよね。立村くん、あのね、貴史と一緒に記念館行って何枚か絵を見せてもらったんだけど、近くで見ると絵の具の無駄遣いって感じのぐちゃぐちゃした、幼稚園のお絵かきみたいな絵が並んでるの。え？って思うでしょ？ でも二メートルくらい離れてみると、そこから見えるのが湖だとか、お馬さんの似顔絵とか、いろんなものがたくさん見えてくるの、何度観ても、飽きないの」

羽飛・美里と上総との好みが百八十度異なることはすでに納得済み。頷くのみ。

「そいでだ。まず立村にその絵のグレートさを語ることは俺もめんどくせえし、お前もどうだっていいだろ？ 隠すなよ。そっちは俺と美里が合同で書く。立村に頼みたいのはむしろ、こいつの生い立ちみたいところを、論じてもらいたいんだ」

「生い立ちか、それならなんとなくわかるな」

気が少し楽になる。絵の話よりも人の物語の方がずっと興味深い。

「貴史とも旅行で話してたんだけどね。立村くんから見て、この人の日本に対する想いってどうなのかな。日本に残っている資料だと、本当は帰って凱旋展覧会やりたかったんじゃないかとか、すごく悔しい思いしてたんじゃないかとかいろいろ言われてるんだけど、海外の新聞とか読むと違うらしいんだよね」

「そうなの」

「そうなの！ 別に日本に帰らなくてよかったって幸せだよって書いてるらしいんだけど、私、立村くん

みたく詳しく読み取れないから、よかったらその辺教えてもらえないかなって思ったの」

美里が上総の手元にあるファイルをめくって、何度か指差した。

「この記事？」

すぐに目を通して見た。比較的やさしい単語ばかりなのでだいたい把握はできた。

「ああ、そうだな。清坂氏の言う通りかもしれない」

「え、どっちが？」

「つまり、日本よりアメリカの方が好きだったってこと。もっと言うとき、この人、生まれてこのかた、日本を好きでいたことって一切なかったみたいだな」

「うっそお」

羽飛も身乗り出して尋ねてくる。さすが本物だ。

「ちょっと待て、それ、お前、この資料見て言ってるか？」

「うん、言ってるよ。もっと詳しく読み込まないと俺も自信ないけど、この人のインタビュー記事見る限り、『生まれた時から、日本が、日本の風土が、日本の文化が、すべてが憎かった』って。ほら、この記事もおんなじこと書いてるし、さらにこっちも」

「ってか、立村。お前この十分ほどの間に、こんなに目、通したのかよ」

——それしかできないし。

ふたりの尊敬の眼差しに当てられるのは照れくさくもあるけれど、それに値することをしたとも正直思っていない。英文について言えば、分かってしまうのだからそれだけのこと。家族旅行まで利用して自由研究に没頭する羽飛と美里のコンビにはかなわない。

しばらく話し合った結果、上総のパートはまず、この画家が日本を心底嫌っていた理由がどこにあるのかをテーマにすることで話がまとまった。芸術関係の鑑識眼が求められるものではなく、ひとりの青年が好きになれない場所で耐えてなぜアメリカに飛び出したのか、そのあたりを資料片手に想像で語る方向がいいのではということになった。

「どうせお前、そっちの方が向いてるだろ？」

「そうそう、立村くんは人を観察して分析する方が好きでしょ。それに、資料のほとんどは英語だし、先生たちだって専門家でなければそんなの分からないはずだから、想像力働かせて小説っぽくこしらえちゃってもいいと思うな」

「ばれたらその時が怖いけど、そうだな、それなら書いてもいいかもな」

まず羽飛がその画家の画風や個性について語り、次に美里が作品に関する印象をまとめ、最後に上総が「日本を何故彼は愛せなかったのか」というテーマで落とす。

「うわあ、じゃあもう、自由研究終わっちゃったも同然じゃない！ わーい、遊べるね、原稿用紙五枚程度でいいよね」

「美里ならもっと書きたくなるんじゃない？ いいぞ、どうせ枚数制限なしだ。あ、それ立村も一緒な。書きたいだけ書きちまえ」

ふざけあいながらも、それなりにイメージはまとまってきた。英語で読むことができたのも要因のひとつかもしれない。集中していたせいも、この画家がなぜ日本をとことん嫌っていて、死

ぬまで帰国をよしとしなかったのがなんとなく見えてきた。

「でもさ、これ、書いてもいいのかな。非科学的だとか言われそうなんだけどさ」

「資料には出てるんだろ？ 書きちまえよ」

「だってさ、まずいよこれ」

困る。本気でまとめたいが迷う。どうせ先生たちに読まれるだけなんだからと思っても、勇気がいる。

「この人、自分がアメリカ人だと思い込んでるんだよ。アメリカで生まれて、生まれ変わって日本に来て、でもどう考えても他人の家にはしか思えなくて、居場所がないと思い込んでるんだよ。いろいろあるんだろうけど、生まれ変わりっていうのはちょっとこれ、書いたら颯爽かいそうな気がするよ。言っとくけどこれ、羽飛たちが持ってきた資料に載ってるんだけどさ」

ふたりは顔を見合わせた。いきなり信じることはできなさそうだ。

「生まれ変わり？ オカルト？ 怪奇現象？」

「そいえば今、夏だなあ」

「非科学的展開じゃないの、これ、なんなの、すっごく笑える！」

——やはりな。でもこれ、資料にあるんだし、悪いけど俺はこの話で書くよ。

膝を叩いて笑いこけている羽飛と美里を尻目に、上総はさらに資料で妄想を組み立てることに専念した。これなら十枚くらい余裕で書き飛ばせる。

「あーれ、おい、あんたら何さっそく盛り上がってんのよ！ あ？ もしかして自由研究？」

「見ればわかるだろ、そういうこと」

羽飛が上総の広げている資料をにやつきながら指差す」

「俺たちが足で集めてきた参考資料をもとに、立村大先生がロマンチックな幻想小説をお書きになるんだそうだ。ベストセラー間違いなしだなあ。な、立村、印税入ったら俺にもおごってくれよな。とんかつカレー一杯」

でまかせもいいとこだが、こずえの前では知らん振りを決め込む。

「なんでそんな話になってるのよ。全くあんたたち、ネタには事欠かない人たちなんだからさあ。立村もなんなの、そんなに欲求不満たまってるの。エロ小説はテクニックたくさん知っておかないと書けないよ」

「こずえってば！」

相変わらずの三つ巴。上総は言いたいように言わせておいた。ひたすら頭の中にうごめくストーリーを追いかけて、一人の青年が迷い描く物語をつむいでいった。とりあえず、自由研究では英語と直結しない内容で提出できそうだ。これで、担任・麻生先生の鼻は明かせる。大満足だ。

——杉本に聞かせたら、どんな反応するだろう？ あとで聞かせてみようか。

その五 高校一年夏休み十一日目・立村上総の羽飛貴史と清坂美里と振り回しあう日々 (7)

まだ残り五日間あることだし、今日は無理をせずにさっさと帰るつもりでいた。

「そいじゃ、また明日な」

「立村くん、またね」

生徒玄関で三人それぞれ分かれた後、上総は中学校舎に足を向けた。約束通り、狩野先生を訪ねるつもりでいた。駒方先生はすでに講師扱いなのでいないかもしれないが、さすがに狩野先生くらいならいるだろう。

——杉本から聞いたこと、話とかないとな。

ちゃんと杉本梨南からも許可を得た内容だし、上総のスタンスも定まっている。あとは現場を拝見するといった流れで持っていこうと思っている。杉本にやましいところは一切ないし、桜田愛子にしても人に教えることが得意という信じがたい特技を持っているようだ。そのくらいは話をしてもいいだろう。

——それに、霧島もいるしな。

生徒会役員が講習後午前中で帰宅するわけがない。うっかり先に帰ろうものならまたあいつのことだ、いじけて騒ぎ出すだろう。早めに手を打っておくが勝ちだ。

全く止みそうにないこの雨、果てしない。

高校校舎から大学を通り抜けようとした時だった。

後ろから水しぶきの音を派手に鳴らしてかけてくる奴がいる。振り向いた。

「ああ、立村、よかった」

「関崎、どうした」

意外ではないけれど、今会うとは思っていない相手だった。すっかりシャツが水浸しだ。ビニールの透明傘を差している。かばんを小脇に抱えていて、さらに長い肩掛けバックも下げている。夏休み講習の時期にしてはずいぶんな大荷物だ。

「他の奴がいるところでは話せないこともある。とにかくどこかで座ろうか」

「あ、でも俺もこれから中学に用があるんだけどさ」

「五分で終わる。申し訳ないが付き合ってもらえないか」

——まあいいか。十五分くらいなら。

上総は言われるまま、大学校舎の軒下へ向かった。中に入るつもりはない。傘を閉じ、軽く降った。関崎も同じく雑に傘をたたんだ。

「しかし、久々に雨が降ったな」

「昨日あたりから天気は怪しかったけど。三時ごろに一雨きて、すぐ止んだよ」

「雨、か」

関崎はすっかりぬれたシャツを脱ぎたそうにつまんだ。

「時間がないのにすまなかった。本題に入る」

呼吸もおかずに関崎はさっそく上総の顔を覗き込み、続けた。

「立村、昨日の雨の頃、お前青潟駅にいなかったか」

関崎乙彦、単刀直入、やはり来た。枕言葉ほとんどなし。

——まさか。

短い言葉でしか感情が浮かばない。そのまま頷く。言葉もくつつける。

「いたけど、それが」

「やはりお前らか」

複数形が気になる。関崎は腕を組みながら、片方の膝を後ろ蹴りするように軽く曲げた。

「実は、見ていた。お前たちふたりが歩いているところをだ。盗み見したわけではないが、一応報告しておきたかっただけなんだ」

「関崎、お前、あの、どういうこと」

感情表現どんどん言葉が短くなる。湿った空気でどんどん背中が冷えていく。

関崎も上総の表情を見てとったのか、気まずそうに目を逸らす。すぐに戻した。

「昨日の昼、たまたま友だちの家に遊びに行っていて、その家の二階から外を眺めていた。そうしたら偶然、立村ともうひとりが歩いているのを見かけたんだ。駅前の横断歩道を渡るところで、傘も差さないでよく走っているなと思った」

——あの時か。

思い当たる節、あり。昨日の午後三時前、夕立にはまだ早い時間帯、駅前のアーケードで雨宿りしながら歩いた道。

「関崎、つまり、そういうことか」

「その通りだ」

「駅前の本屋の二階か」

声が湿ってくるような気がする。関崎とは顔を合わせられない。心臓だけがゆだっている。

「お前知ってるのか」

驚き声で関崎がつぶやく。まさか気づかないなんて思っていたのだろうか。そちらの方が上総は信じられない。顔を見ず頷いた。

「お見通しならしょうがない。そうだ、佐川書店の二階だ」

——これはえらいことになるぞ、どうするんだよ。杉本になんて言えばいいんだか……！

熱い友情をかこつ関崎乙彦、こいつの真っ正直でかつ、生真面目な性格は入学前からよく知っている。いい奴ではあるのだが堅物過ぎて、中学では人気もなくくすぶっていたと聞く。水鳥中学生徒会の副会長でありながら女子受けは圧倒的にもうひとりの副会長に集中していたとも事情通は伝える。

青大附高に入学後、一気に鬱積していたエネルギーがマグマとなって流れ出したのか、現在一年の中でもっとも注目されている一人とされていることは言うまでもない。教師たちの覚えも高く、女子たちからもひそかに注目されている男子でもある。それでいてすでに、彼女立候補者も複数出馬しているとも。そのうちの一人が清坂美里であり、杉本梨南であり、なぜか上総と縁

のある女子ばかりなのか、複雑な思いもなくはない。

それでも関崎はすでに、自分でこそ認めないが心の本命を定めていることは、上総の目から丸見えだ。その点において特に突っ込むところもない。上総としてはただできれば、杉本梨南が卒業するまでの間はそのおつきあいを内緒にさせていただきたいという願いのみである。美里についてはそれほど心配していない。自分の言いたいことを言い切れれば、どういう結果であっても受け入れるだろう。ふっきれて元気になれば、それでよい。「

しかし、関崎はいくつ、爆弾のネタを仕入れてきたのだろう。

複数形で話していた、ということなら当然、麦藁帽子の女子と一緒にいたこともお見通しだろう。どのくらい近くで覗き込んだかはわからない。ただ上総と杉本とのつながりを一学期の段階でよく観察してきた関崎のこと、すぐに真実へつなげている可能性もなくはない。いやそれだけではない。問題は場所だ。観察したその地点だ。

上総はそっと関崎の表情を見やった。関崎も同様に様子を伺っているのが見え見えだ。

「友だちの家だとしたら、ひとりで見たんじゃないよな」

「ああ、その通りだ」

「それで、俺に伝えたかったというわけか」

「そうだ。個人的に俺も、立村とゆっくり話をしたいとは思っていたが、こういう形で見ることになるとは思っていなかった」

関崎が俯きながら、そっとひとりごちた。引け目を感じていたのだろう。偶然とはいえ、覗き見してしまったようなものなのだから。しかし、上総にとってそれは事件どころの問題ではない。頭の中がどしゃぶり。空は少し落ち着いてきたようだが、それでもまだ黒っぽくうごめいている。息を無意識のうちに止めて空を見上げていた。ゆっくり息を吐いた。

——最悪だ。どうする、杉本になんていえばいいんだろ。

「佐川書店」の前を通った時、確かにちらっとその不安は感じていた。杉本が本屋に寄ろうなんて血迷ったことを考えさせないように、無理やり引きずっていったようなものだ。駅前の「佐川書店」が因縁の相手、佐川雅弘の自宅であることを上総は早い段階で知っていた。杉本はたぶん、佐賀はるみと佐川雅弘とのひそかなるつながりも気づいていない。あの佐川雅弘が何も知らない杉本梨南を関崎乙彦と観察し、その上で練り上げた情報を佐賀はるみに流したとしたら……さらにその情報を佐賀はるみが生徒会つながりで霧島真に伝えたとしたら……考えたくない妄想だけが膨らんでいく。

——杉本は今でも、関崎のことしか考えてない。関崎がいるから受験勉強にも身が入るんだろうし、学校側からひどい嫌がらせをされても、めげずに立ち向かっていけるんだ。関崎と不意に顔をあわせた時の杉本の顔を忘れるわけじゃないか。それなのに、まったくどうでもいい俺なんかとふたりっきりで歩いていて、それも身なり整えていかにもそれっぽく付き合っているみたいな顔して歩いていて、それをあの関崎に見られたなんて気づいたら、ショック受けないわけじゃないよ。しかも誤解を消す方法なんて、ほとんどないんだからさ。

言葉のきつつきがどこかにいる。ちくちくきりきり、つついている。

——それに、あの佐川が目を光らせていたなんて、さすがにそこまで俺も頭回らなかった。で

も考えてみれば自然だよな。佐川書店ってアーケードですぐ下は覗き込めないけれど道路の向こう側歩道はよく見えるだろうし。二階だろ？ あいつの勉強部屋が二階ってことか。ふたりで眺めながら関崎ともどもどんな会話してたんだろ。まさかとは思うけど、関崎、他の学校の友だちだからとかいって油断して、修学旅行濡れ衣事件をペラペラしゃべってなんてないだろうな。ガセネタは承知してるけどさ、あの佐川のことだ、恐ろしく頭の働く奴だ、佐賀さんを使ってまた杉本を陥れようとするかもしれない。なんでだよ、よけいなえさなんて与えたくなかったのに、なんで、よりによってこんな展開になってしまうんだか……。

「立村、俺は他の奴に言いふらすつもりはない」

関崎は相変わらず生真面目な顔のまま、語りかけてくる。

「正直、いろいろあった相手と一緒にいたのを見て、驚いたことは認める。だが、俺の本音としては、ほっとしたところもある」

「ほっとしたって」

いやな予感がする。やはり十一日前の復讐か。まったくの善意面で関崎は続ける。

「一学期、本当にいろいろあった。俺も終業式の日にお前といろいろ話をしたが、まだ解決していない問題がてんこ盛りのような気がする。このままではよくない、そう思っている。お前がなぜ、あんな置き土産をしたのか今だに理解できないところもあるが十日間考えて、これもお前の友情表現だと受け入れることにした」

「だから、受け入れるって」

暗に美里のことを意味していることはさすがにわかる。だが「うけいれる」とはどういうことなのか。美里からははっきり振られたと報告を受けたはずだが。

「立村、お前はああいう形でしか、友情を示すことができないんだなと、理解した」

関崎はまずゆっくりと空に向かって言い放ち、首を降った。

「だが、それは間違っている。これも確信した。俺はやはりお前が友だちの世話ばかり見て自分をすり減らすよりも、もっと積極的にクラスに関わる方がずっとプラスになるはずだ」

「あのさ、関崎、話、ずれてるよ、結局何言いたいのか」

「立村は、あのままつつきればいいんだ。俺は昨日、雅弘と一緒に眺めていて、確信した」

——やはりあんな奴でも親友なんだよな。

毒づきつつ、無視しつつ、息を止める。覚悟はある。関崎の言葉は避けたい核心をもろに突いてきた。

「まず立村、お前は心の赴くまま、そのまま行動していいんだ。俺に気を遣う必要はない。相手がどう思っていようが俺は、まったくその手の関心を持つことはない。なら、お前の気持ちを最優先して、これから動けばいい。これは昨日の件を例にとって言っているが、お前が突っ走るべきはクラスにも、委員会にも、またどこか別の場所にも必ずあるはずだ。このまま隠れることはない。自信を持つんだ、立村」

——関崎、どうするんだ、こいつ、とことん勘違いしてるよ。どうすればいいんだ、最悪の展開だよ。佐川経由で情報を掴んだ佐賀さんに、また杉本が説教されてぶちぎれて、今度は俺なん

かと無理やりくつつくよう命令されるなんて地獄だろ。あいつにとって関崎が完璧すぎる存在だ
っていうのに、俺なんかと無理やりくつつけられそうになるなんて、あいつだって受験勉強忘れ
たくなるほど衝撃だと思うよ。

思わず言葉がもれた。身体が震えた。

「関崎、頼む、今のこと、誰にも言わないでくれ」

「だから最初に言っただろう。俺は誰にも話す気はない。知っているのは俺と雅弘だけだ」

「わかってる、だけど、言わないでほしいんだ」

理由は言えない。杉本梨南のプライドをこれ以上、自分でも傷つketくない。

関崎はしばらく傘を振りながら上総を観察していたが、やがて目を逸らしたまま頷いた。

「男に二言はない。安心しろ」

——安心できないんだってさ。

関崎がそっと空を眺め、ふうと息を吐いた。

「少し、青空が覗いたな。そろそろ雨も止みそうだ」

その六 高校一年夏休み十二日目・立村上総の霧島真に再度振り回される日々（1）

雨が降っていたことと、たまたま霧島も狩野先生も中学校舎にいなかったこともあって昨日はさっさと品山に帰った。到着したとたん電話がわんわん鳴り響き、上総は当然のことながら受話器の向こうでわめき散らしている霧島の相手をするようになった。

——立村先輩、なんでいなかったんですか！

「いや、中学校舎に行ってみたけど、なんかいなかったみたいだから」

嘘ではない言い訳をしてみせるが、いきり立っている霧島には届かない。

——僕が先輩の顔を立てて、昼休みきちんと高校へお伺いしたにもかかわらずなぜいらっしゃらなかったのですか、と聞いているのです！

「講習終わったのは昼前だし、学食で食事した後図書館で自由研究の準備をしてたんだ。タイミングが合わなかったんだな。でも、そのあと昼過ぎに行こうとしたんだけど」

——なんで図書館なんかいらしたんですか！ 僕は昨日お話ししたはずですよ。ちゃんと僕はお伺いしますからって！ 僕だってプライドがあります。いいですか立村先輩、明日は絶対に、講習が終わったら僕が行くまでの間、ロビーで待っていてください。絶対に！

一方的に電話が切れた。もう、電話のマナーなんて聞いちゃいない。

そんなわけで本日は三時間の授業が終了後、霧島を待つため高校校舎の生徒玄関ロビーで待つ羽目となったわけだ。講習最初の日だけ遅く始まったが、二日目以降は八時半から授業が開始される。一時間ごとに十分休憩が入るので終わるのは十一時五十分。腹の虫にとっては絶妙なタイミングだ。

国語、数学、英語と各クラスの生徒がうまくブレンドされて授業を受ける。先生もひとりで同じ授業を三回ずつ行うのだから、体力もなかなか持たないのではないだろうか。ちなみに国語は野々村先生担当ではなかった。数学だけはもちろん特別クラスで受けることになる。三時間目の英語は普通科の生徒と一緒に、珍しく今日は南雲と一緒に当たった。

「りっちゃん、救いだよ、神様だよ、よかったあ」

「そんなに喜ばれるほどでもないけど」

「いやほんと、俺もうあの英語の宿題の山、どうすりゃいいのって感じなんだわ。りっちゃんからしたら、あの程度の英文さらさらって読めちゃうかもしれないけどさ、俺、もともと英語アウトだろ？ もうまじ、助けてって感じ」

「俺からしたら、数学の宿題をあっさり今の段階で終わらせているほうが尊敬できるけどな。普通科の宿題見せてもらったけど、俺には一理解できない内容のような気がする」

「そんなことないってりっちゃん。そうだ、明日俺、バイト休みなんだよね。講習終わったらうちの下宿こない？ たいしたもの出せないけど、お茶とお菓子くらいは用意しまっせ」

そういえば、まだ一度も南雲の下宿には足を運んだことがなかった。興味はある。

「いいよ。俺も何か持っていくよ」

土産に何か男子ふたり腹持ちのいいものでも持っていこう。

南雲といつものようにのんびんたらしとしゃべっていたら、上総の側から覗き込む奴がいる。ひょいと見やる。東堂だった。どっしりしていてどこことなくお間抜けな愛想のよさがにじみ出ている顔だった。額には汗がべっとり。タオルハンカチで汗を拭きながら南雲の前席にどっかり座った。

「やあや、なぐっち、無事に生きてるかあ？ 最近お前のバイト先顔出してねえけどな」

「おかげさまで、どっかの誰かにいびるだけいびられつつ今日も元気に生きてまっせ」

このふたりが大親友であることを知っている上総としては、少しだけ居心地が悪い。仲良し同士が盛り上がると疎外感を感じるのはいつものことで慣れている。開いたノートに目を向けつつ、書くことなしにシャーペンを滑らす。

「立村、おいおい、ちょっとこっちこっち」

東堂が呼びかける。仕方なく顔を上げる。頷いた。能天気な顔して笑う。

「そんなあ、ひっこみなさんな、混じりんさい」

不思議な日本語で上総を混ぜる。南雲もにっこり頷く。おそろおそろ加わる。

「ところでさ南雲、突然なんだがひとつ相談があるんだ」

「ほいほい、なんですか東堂先生」

「明日、とりあえず、ひまか？」

「明日か、ちょっと先約ありってとこかな」

南雲は上総をちらと見る。上総もあわてて首を振る。急ぎじゃない。

「いや、俺はまた別の日でもいいよ、なぐちゃんが都合のいい日に振り替えてもらえば」

「なんだ、立村をナンパしてたんか、ふうん」

別に気を悪くした風でもなく、東堂は上総の机に手をかけた。指先でつんつんたたきながら、

「それだったらちょうどいいや、なあなぐっち、そんなら俺も明日混ぜてもらえるかな」

「ああ？」

驚いたのは上総だけではなかったようだ。南雲も口をあんぐり開けた。

「一応明日、バイト休みだから、りっちゃん連れて英語の宿題手伝ってもらおっかなと思ってたんだけどな。けど、どうだろ、りっちゃん、三人じゃ、やっぱし、まずいかな」

気を遣っているのが見え見えの口調で問う。問われた上総も非常に困る。「まずい」と言い切りたいところでは、ある。南雲とふたり何も考えずのんびり気楽に過ごしたい、そういう本音もある。さんざん後輩たちに振り回され、本条先輩の前でへろへろにあまられたれていると、素の自分にふっと戻りたくなる。

「いいけど、東堂、お前、俺がいてもいいのか」

遠慮がちに上総も問う。お互い様のような気がする。東堂はへらへらしたまま首を振った。

「いいっていいって。むしろそっちの方が話が一回で済むし、俺も今回の英語の宿題発狂寸前なの。南雲と一緒に世話になりたいよ、まじで」

——結局そっちか。まあいいか。

英語宿題、困った時の立村上総伝説は、青大附高進学後もまだまだ健在ということか。英語科

でいくらでもできる奴がいるだろうに。とりあえず上総は、すでに全部終了させた英語の宿題をまとめて持っていくことになる。土産もやはり男子三人が食いまくれるものを選んでいったほうがいいだろう。

英語の先生が教壇に上がった。すぐに前を向き、上総はすでに把握済みの授業をまじめに受ける振りをした。

——そうか、東堂か。それもいいかもな。

南雲交じりで話をしていた時は意識していなかったが、東堂の言う通り、

——そっちの方が話が一回で済む。

のは当然だし、

——いつかはきちんと話をつけないとならない相手。

というのも確かにある。当然、桜田愛子のことだ。

もともと東堂は中学時代同じクラスで過ごした仲間だが、男子グループの派閥もそれなりにあり親しく会話したことは少ない。南雲の親友というつながりもあってそれなりにくだらない話題で盛り上がったこともないわけではないが、上総は聞き役に回ることが多かった。話している時あまり羽飛がいい顔をしないこともあって、距離を置いてはいた。

だが嫌われているわけではなかったようだ。南雲経由の話で聞くとところによると、東堂は上総の評議委員時代の功績をそれなりに評価していたらしい。女子たちから総すかんを食って孤独をかこった時も、ほとんど……いや、すべて……の男子が味方に立ってくれたが東堂もそのひとりだった。みな、態度が変わらず受け入れてくれていた青大附中D組の野郎連中には一生土下座して感謝するしかない。当然、東堂もその中に入る。その上での好感度は確かに持っている。保健委員を三年務めていたこともあって、授業中貧血で倒れた上総を何度も運んでくれたことも、もちろん感謝のセットに含まれている。

だが、一対一で語り合うのりの友だちとは違う。南雲を間に挟んでいれば会話も途切れないだろうが、中座なんぞしてふたりきりになったらどう会話をつむいだらいいかわからない。いい奴であったとしても、会話が続く奴とは違うのだ。

——けど、もうそろそろそんなことも言ってられないしな。

昨日狩野先生に会わなかったのは運がよかったのかもしれない。むしろ、東堂と少し話しをして、杉本と大親友である桜田愛子が営んでいる内緒の塾に関する情報を交換したほうがいい。もしくは東堂がどこまでその話を把握しているかを確認する必要があるだろう。上総なりに場合によっては東堂を組み込んで、狩野先生に直談判するというのもひとつの手だ。

問題は、まったく関係ない南雲の立場だが、一学期の段階で修学旅行濡れ衣事件の顛末をある程度は聞き知っているはずだしその件とでも匂わせておけばいいだろう。南雲が規律委員である以上、それなりに学校側の動向は気にしているであろうとも思う。直接そのことについて話をしたことはないけれども。

——うまく、話、持ってかないとな。

人の色恋沙汰には口を出したくないが、いかんせん杉本梨南が関係している以上上総も何もし

ないわけにはいかない。東堂には申し訳ないが、もう少し桜田愛子について詳細を聞きだす必要があるとみた。

「じゃあ、明日、講習終わったら自転車置き場で待ち合わせな」

「わかった、また明日」

「りっちゃん、明日よろしく！」

英語の講習もただ座って聞いているだけで終わった。南雲と東堂、および一部の男子連中が上総の机にたかり、英語の宿題の答えについての交渉を十二時までの十分間で一通り終わらせ、教室を出たのは十二時過ぎだった。貴史と美里には、今日は用事があると朝の段階で伝えてある。何気なく「霧島さんの弟が」と伝え、納得顔で送り出してくれたのがありがたかった。

生徒玄関ロビーの椅子に、靴箱を真正面から見る位置で座った。かばんを脇に置き文庫本を探したが見つからない。うちに忘れてきてしまったようだった。父がくれた、青潟の街並みに関するルポルタージュをまとめた本だった。一部父も執筆しているらしいが、匿名記事だったそうで署名はない。いかに興味がないかという証明とも言える。

隣に誰かが腰掛ける気配がする。横を向いて顔を確認する。やはり奴だった。

「立村先輩、お待ちしておりました。遅かったですね」

「あのさ、霧島、お前こそ中に入ってきて何してたんだ？」

一応中学の生徒は職員玄関から入ることが常である。杉本が来たときは上総が迎えに行くまでがんとして入らなかった。霧島はまったく抵抗ないらしく、スリッパのつま先を軽く上げて答えた。

「当たり前ですよ、二年後僕もこの学校に進学するのですから。今から慣れておくのは常識です」

「まだ、来たことなかったか」

「一度だけ、生徒会がらみで挨拶しに行ったことはあります。部活やっている連中はそれなりに交流あるのですが、生徒会は別ですから」

相変わらず気取った口調で霧島は答え、しわひとつないシャツにネクタイを巻き直し、立ち上がった。

「立村先輩、昨日約束破った罰として、『おちうど』に連れて行ってください。そこでならゆっくり僕の機密情報も語ることが可能でしょうから。先輩もそちらの方が長い目で見て、お得だと思いますがいかがでしょうか」

——こいつ、黙っていれば何様だと……。

怒るにも怒れない。上総を見守る周囲がみな心配する、霧島のやりたい放題主義に逆らえない。上総は立ち上がり、生徒玄関に向かった。きっちり髪を整え、すれ違う女子たちから熱いまなざしを受けている事に気づいていないらしい霧島へ、声をかけた。

「職員玄関出たらそこで待っていてくれ。俺もすぐ行くから」

『おちうど』にこの時期あえて行くのは、正直面倒だがしかたない。機密の守られる場所であることは、霧島に言い返すことができないくらいの真実だから。

その六 高校一年夏休み十二日目・立村上総の霧島真に再度振り回される日々 (2)

ここまで裏表がはっきりした性格だと、かえってほっとする。こちらも心の準備ができる。なんとか霧島の性格を把握しつつあるこの頃、上総は教師用の校門から出てくる霧島を待っていた。

「昨日の雨でずいぶんと涼しくなりましたね」

「本当だな」

七月末までのうだるような暑さとは違い、空気の中に細い風がすり抜けていくような感触がある。青湊の夏は短い。八月も半ばを過ぎればもう秋の声。蝉より鈴虫が鳴き始める。

「立村先輩は今日も講習ですか」

「そう、六日間連続だけど毎年のことだからな」

のんびりと答える。霧島もただ生白いわけではなく少しずつ肌に赤みが差ってきてはいる。それなりに街中には出ているのだろう。

「今日は生徒会の仕事はないのか」

「たまには休むこともあります。中学はそれほど忙しくもありませんし」

クールに交わす。外で他人の目がある限り、霧島は決して自分を出さない。完璧で冷ややかな貴公子を演じ続ける。その一方で上総以外は誰もいないと気づいた瞬間からあっさりとそれを脱ぎ捨てる。その切り替えのすばやかさは見事なものだ。今はまだ、中学の生徒たちが霧島を見つめる可能性もゼロではない。それならとことん王子になりきる。

「先輩は、あの後本条先輩とお出かけになったのですか」

「そうだよ、本条先輩の家でいろいろと話してた。やはり先輩だからさ」

「とっくに別の高校へ行ってしまった人に対してずいぶんご執心ですね」

「なんか意味を取り違えたらまずい返事だと思うよ、霧島」

野郎相手にやきもち何ぞ妬くわけでもないだろうが、霧島の性格上それもそれこれもこれ。そういう奴なのだ。

「たいしたことじゃない。本条先輩はコンピューターに詳しいからいろいろ教えてもらったりしたし、そのくらいだよ」

「コンピューター？ いわゆるマイクロコンピューターのことですか」

勘が鋭い。霧島は興味深げに上総を見上げた。

「そう、マイコンって言ってた。自分でプログラムを組んで、それでいろいろとゲーム作って雑誌に投稿して、その世界では有名人になっているみたいなんだ」

「雑誌に載った程度ですか」

他の奴に言われたのなら思い切り説教してやるのだが、相手は霧島だ、がまんするしかない。上総はしばらく呼吸を整えた後、静かに答えた。

「価値がなければ載せないよ。本条先輩は青大附中時代から天才だった。公立に進んでもちゃんと成功している。これがすごなくてなんていうんだよ」

「立村先輩は、ずいぶん視界の狭いことをおっしゃいますね」

きりきり、とんがった声で霧島は返す。

「僕もあまりデジタルの世界には詳しくありませんが、なんでも小学生あたりからコンピューターに関しては天才と呼ばれる人たちがたくさんいるそうです。プログラムもすらすら書いて、グラフィックも独創的なものをどんどん作って、中ではすでに会社を作って利益を出している中学生もいるとのこと。そういった才能溢れる人々と比較して、果たしてプログラムを投稿して満足しているだけの本条先輩が、どこまでものだか」

「それなら聞くけど、霧島、お前、何かの世界でそれだけ頭角出していると自覚あるか？」

少し絞めてやる必要は感じた。ゆるく、皮肉ってやる。

「うちの学校は賢い奴が多いと思うけど、外で高く評価されることしている人って意外と少ないような気がするんだ。俺の代だとせいぜい、美術の金沢くらいかな。学校内でそれなりに成績がよくても、全国で比較するとどこまでついていけるのかあいまいなところもあるような気がするんだ。本条先輩が組んでいるゲームがどこまでのものだか正直、俺には全然わからない。でも、それを学校外の第三者に認めさせるということは、能力がなければ決してできないことだと思うんだ。どう思う？ 霧島？」

霧島は黙った。しばらく考え込んでいた。悔しげにうつむいているかのように見えた。

「立村先輩だって同じじゃないですか」

一言、しぼりだすかのようにつぶやいた。

「俺は最初からそんな野心なんてない。これ以上嫌われなければ、それでいい」

「『向上心のないものは馬鹿だ』という言葉がありますが」

「だから前にも言っただろ、それで人を追い詰めてもしょうがないよ」

腹は立たない。陽が照ってきたからだろうか。大学校舎から中学校舎を大回りしいつもの森を抜けた。今日はほとんど人がいない。すっかり木々で覆われた緑の道を歩きながら、上総は霧島に向けて語りかけた。

「けど、そういう才能のある人を見守る方が俺には向いているんだと思うんだ」

「才能のある人って本条先輩ですか」

「先輩だけじゃない、まだまだたくさんいる」

空を見上げる。天に突き刺さる針葉樹の先が、こぶしを振り上げている腕に見えた。

「そういう人たちを助けることも、大切な仕事じゃないかなって気がするんだ」

霧島はしばらく黙っていた。森を抜けるまでそのまま唇をかみ締めていた。道路に出て初めて口を切った。

「いやです。僕は、必ずトップに立ちたい。誰にも負けたくありません。立村先輩がそんなに助けたがりなことするんでしたら、僕あたりを手伝ってくれればいいんじゃないですか」

——結局そこかよ。

苦笑するしかない。これ以上突っ込まない。あと数メートル歩けば「おちうど」に到着だった。

。

——一度しか連れてきてないのによく覚えてたな。

一学期、いろいろあって無理やり連れ込んだのがここ「おちうど」だった。和風喫茶店と呼ばれてはいるが、いわゆる帰宅帰りの中学。高校生が立ち寄るには敷居が高すぎる雰囲気だった。二階は小さな舞台が設置された和室が用意されていて、日舞のおさらい会やお茶会、その他日本伝統芸能関連のイベントなどが定期的に行われている。そこで上総もしょっちゅう手伝いに駆り出されていることから、中学入学以降「おちうど」は母のつけ……ほとんど身内扱い……でただ食いのお許しをいただいていた。いわば親戚の家に遊びにいったお菓子をもらうような感覚だ。ただし、上総もひとりで出入りするわけではない。特定の友だち……たとえば杉本梨南とか……を連れて学校内関係者には知られたくないをするために通うのみ。今まで連れてきた友達は、よく考えるとほとんどいない。本条先輩、清坂美里、羽飛貴史、南雲秋世……親しい友だちだからといって引っ張り込んだことはない。例外的に関崎乙彦を連れていったのは失敗だったと思う。花森なつめにいたっては、上総と同様「おちうど」の常連なのだから例外としておく。

ただ、霧島からしたらここにひっぱりこまれた記憶はあまり楽しいものではないだろう。高い鼻を思い切りへし折ったような出来事なのだから当然だ。過去の傷が痛むのもかわいそうだと思う。できるだけ触れないようにはしてきたのだが、まさか霧島のほうから「おちうど」通いをねだってくるとは思ってもみなかった。

——呉服屋の若旦那ともなれば、行きつけにしておきたい店なのかもな。

霧島の性格を思い返して無理やり納得することにした。隣で小脇に抱えた夏用ブレザーに袖を通し、霧島はハンカチで軽く汗をぬぐった。それだけではない。あぶらとり紙で丁寧に鼻を押さえた。

「何、それ」

「先輩ご存知ないとは。鼻がてかっているのは決して見栄えがよいものではありません。立村先輩、一枚差し上げましょうか」

——杉本みたいなこと言うなよな。

それでも受け取ってしまう自分が情けない。顔を言われるがままに押さえてみた。

なじみの店、引き戸を開ける。かすかな抹茶の香りと、三味線の音色から清元だろうと見当をつけた。レジにいたおかみさんと顔をあわせた。

「あら、かあさくん、こんにちは」

「こんにちは。あの、今日も友だちを」

言いかけて振り返る。やはり王子面の霧島がぎりりと微笑みながら立っている。

「立村先輩、恐れ入ります」

「さあさ、どうぞどうぞ、奥の席が空いてますから、今日はソファでゆっくりなさいね」

夏休み中で昼間、あまり人がいないらしいかった。ソファ席が空いているということは上総が「おちうど」参りした時もそうそうない。運がいいのか悪いのか。杉本梨南を連れてきた時も最近はめったに当たらない。先に霧島を座らせると、おかみさんが上総を手招きして、小声でささやいた。

「あのお坊ちゃん、もしかして」

「ご存知ですか」

電流めいたものが走る。霧島に関してはいつもそうだ。周りの人たちがなぜか霧島に対しては用心深い態度を取る。

「かあさくんの仲良しさんかしら」

なんだ、あっさりしている。拍子抜けした。

「仲良しというか、学校の後輩です」

「そう、それはよかった」

おかみさんはほっとした風につぶやいた。

「かあさくんがかわいがっている男の子なら、安心ねえ」

——だからそれ、誤解招くよ。俺悪いけど、そういう趣味じゃないから！

年上受けしそうな気品ある振る舞いが、特定の層には確実に受けるのだろう。きっとおかみさんは霧島の猫かぶりに見事だまされている。いきなりヒステリックにわめきだしたり、好きな子の純潔疑惑にパニック起こして泣き出したり、手当たり次第人の食べているものも手を出したりとやりたい放題野郎とはきっと思っていないのだ。

メニューを持ってきてもらいふたりでにらめっこする。

杉本と一緒にの時はたいていコーヒーだったが、霧島とだと何がよいだろう。

「抹茶がよいですね」

「ケーキ三個ずつ選べるよ」

「いただきます」

もう上総がおごるものだと決め付けているようなその振る舞い。今更だが怒る気にはなれない。実際、上総のふところは傷まないのだからそれはそれでいいのだが。しかし霧島、食べ物に対しては遠慮がない。この調子だとたぶん、上総の分もぶんどりにくるんじゃないだろうか。おにぎりセットもらおうかと思案する。一応、昼だ。

「かあさくん、お雑炊あるけど、用意しようか？」

「ほんとですか。ぜひお願いします」

お雑炊と侮るなかれ。タイミングが合わずにめったにお目にかかることがないのだが、「おちうど」のお雑炊は、ミルクをたっぷり混ぜてその中に魚介類をたっぷり煮込んで作った美味な逸品なのだった。あまったのだろう。ありがたくいただく。当然霧島の分も用意してもらえよう。ふたりぶんと頼んだ。

「それにしてもねえ、かあさくん、人はね、縁なのよ。そうでしょう？ お坊ちゃん？」

お坊ちゃん扱いにもぴくりともせず、霧島は優雅に頷いた。

「もっともです。僕も最近、つくづくそう思います」

微笑みを交し合う霧島とおかみさんのしぐさに、またかすかな漣を感じたがあえて忘れることにした。今は食べることだけ考えよう。

ミルク風味の雑炊は上総の思っていた通り、実に味わい深いものだった。

「夏場にこんな熱いものよく食べられますね」

などと最初毒づいていた霧島も、一口ちりれんげで掬うや否や、無言で皿を空にする運動をし始めた。しばらく何も話さなかった。腹の中があたたかくなると、誰でもそうなるらしい。一番の幸せは食欲が満たされることではないかと、この数日ほど上総は真剣に考えている。

さすがに霧島は上総の食べている皿にちりれんげをつっこもうとはしなかった。他人の目が存在していることを意識しているのだろう。

次にプチケーキが三個運ばれてきた。ショートケーキ、水羊羹、杏のムース。それぞれ皿に盛り付けられ、立ててもらったばかりの抹茶も運ばれてきた。

「さて、目的の話をさせていただきたいのですがよろしいでしょうか」

霧島は抹茶の入った茶碗を丁寧に両手で持ち、一口啜った後に切り出した。

「立村先輩、その後の杉本先輩のことは、いかがだったのでしょうか」

「いかがって言われても困るけど、別に何かがあったわけでもないよ」

「何をとぼけてらっしゃるのですか。僕はちゃんと情報を仕入れておりますが。なんでも立村先輩は先日、杉本先輩を連れて駅前通りを散歩なさってらっしゃったと伺いましたが。僕から得た情報をもとに行動をさっそく起こすとは、さすがです」

「お前に褒められるとは光栄だよ」

いやみったらしく言ってやる。関崎から話は聞いていたのでこういった流れになることは正直覚悟していた。霧島がどこまで真実を知っているかは分からないが、佐賀はるみ経由の情報であることは確かだろう。朝からしつこく霧島自身が追い掛け回していない限りは、の話だが。

「嘘を言いたくないから認めるよ。そうだよ、俺は杉本と用事があって青潟駅にいたよ。ついでに言うなら雨に祟られたんでその辺の喫茶店にも入った。たぶんそのあたりまで情報は掴んでいるんじゃないか」

「あっさり認められるとは、よほど凶星だったということなのではないでしょうか」

勝ち誇った風に言い放ち、霧島はまずショートケーキを細かく切って口に運んだ。イチゴは最初に食べる主義らしい。

「別に隠すことじゃないし」

「それではさらにお伺いいたしますが、杉本先輩はどこまでお話になっていらっしゃいましたか。やはりなずな女学院への進学を考えてらっしゃるとか、そんなことでしょうか」

「知ってどうする？ 誰かに伝えるのか？」

切り返した。ここで佐川が一枚かんでいる可能性をどうしても捨てきれない。霧島を疑うわけではないが、ここで杉本が不利になる言動だけは絶対に避けたい。

「僕がそんなことをすると」

「お前がしたくなくても本能が動いてしまう可能性はいくらでもあるだろ。たとえば佐賀さんとか」

「いいかげんにしてください！」

かっとなりすぎて、上総の残しておいたいちごを奪い取った。止める間もない。

「僕がそんな、裏切るようなことをするとお思いですか」

「だから、霧島本人は信じてるよ。でも人間は、感情が高ぶりすぎたら何しでかすかわからない動物だから。霧島自身の問題じゃない」

よくわけのわからない顔をしている霧島、イチゴをもぐもぐ噛んでいる。

「結論から言うと、杉本は何にも言わなかった。なずな女学院のなの字も出さなかった。受験についても普通に話しただけだ。ただ、将来のことを真剣に考えていることだけはなんとなく感じた。そのくらいだよ」

「将来のことですか。高校受験は近い将来の問題です」

「青大附高にエスカレーターで進学するつもりなら、十一月の内部推薦のことだけ考えていけばいいけれど、外部受験の場合はそれだけじゃすまないからね」

上総は語り続けた。

「どこの学校に進学しようとも、将来何になるかを考えることは一緒だからさ」

「ただ、学校によっては将来を閉ざされるケースもあります。僕の姉のように」

止めたいのをこらえてしゃべらせることにした。霧島には、その方がいい。

「僕の姉についてですが、せっかくですので最新情報を差し上げましょう」

もったいぶって切り出した。

「姉があの女子刑務所的な高校に進学していることはご存知の通りですが。中にはまともな価値観を持っている女子もいるようです。先日、姉のもとにクラスメートの女子がひとりいらっしゃいましたが、彼女は学力レベルの低い相手にもかかわらず実に品のある人でした」

「それ、いつ」

「昨日ですね」

となると、つい最近か。別に霧島ゆいについては詳細を知りたいとは思っていないのだが、霧島の姉ともなるとまったく無視するわけにはいかない。

「その方はどうも、水鳥中学出身だそうです。関崎先輩にお伺いすればご存知かもしれません。髪の毛はお下げに編みこんで、礼儀正しく、きれいな花を手にとりいらっしゃいました。掃き溜めに鶴、といった風情です」

「そういう人がなぜ、可南に入学したのかが不思議だと言いたいんだろう」

突っ込んでやる。行き着く先はかたんに見えた。霧島は指で否定した。

「安易な発想なさないでください。彼女はいわゆる公立高校落ちで滑り止め入学した人です。青潟の高校入試は公立・私立各一校ずつしか受験できません。単に受験日が重なっているだけのことです。そのこともあって本来であればもっとレベルの高い学校に進学できたはずなのに、安全圏を狙うおとによってしかたなく低レベルの学校に進まざるをえなかった、悲劇です」

霧島はそこまで説明し、ムースに手をつけた。上総はようやくショートケーキを半分消化しただけだが。

「僕はたまたま、彼女と姉とが語っている声を耳にただけですが、あまりの明晰さにただ言葉を失いました。彼女は自分の進学が不運だったことを認めつつも、僕の姉に出会えたことにまず感謝していました。同時に、ここで自分のできることを探すために努力したいとも語っておられました。これはすごいことではないでしょうか？ 泥沼の中でも精一杯自分らしく生きようと努力なさっていらっしゃるんですから。もし僕の姉がそういう心もちを少しでも持っていれば、僕ももしかしたら尊敬できたかもしれません。それがなんですか？ 今だに投げやりで、成績もあの可南で中ぐらいの状態、しかも委員に参加しようともせず、なりゆきまかせで生きているだけ。ちなみにその彼女は、学校側から二学期以降生徒会活動に立候補を勧められていらっしゃるようです」

——霧島の女子好きが本気で俺にはわからない……。

もちろん上総も、霧島の語る「霧島ゆいの女友だち」が性格のよい前向きな女性であることを否定はしない。公立高校受験で失敗し滑り止めで入学した学校で、精一杯自分のできることを探そうとする姿は立派だ。偉いと思う。

だからといって自分の姉に向上心が足りないと思うのはお門違いのような気もする。

第一、努力していないと、そう決め付けられるものだろうか。

霧島はあまり勉強しなかったとしても、人並み以上の成績は修められるだろう。人生ぼろぼろになり学業投げ出しても姉以下に陥ることはないだろう。だから、精一杯の努力をしてきた霧島ゆいの姿が手抜きにしか見えないのかもしれない。

——きっと俺もそう見えてるんだろうな。

霧島ゆいと同じレベルで見られているだろうということは前から感じている。だからなおさら、上総は霧島の言葉が痛い。霧島が姉を罵倒すればするほど、努力を認めてもらえない自分を叱咤されているように感じて、泣きたくなる。腐っても先輩だし、死んだって涙を流す気なんてないが。

ただ、気になるのはその女子に対しての霧島の態度だ。

なぜいきなり、なんだろう。つい最近霧島は、ひたすら佐賀はるみをあがめ奉っていたにもかかわらずだ。

「霧島、ひとつ聞きたいんだけどいいか」

「どうぞ」

「その人になんで興味持ったんだ？」

単刀直入に尋ねてみる。つまり、関崎流。

「簡単です。あの人は、うちの生徒会長とお友だちだということがわかったからです」

「どういうことだ、それ」

まったく訳が分からない。問い詰めてしまう。霧島は何事もないかのように答えた。

「僕は彼女と姉とが客間で話をしているところをすべて、自室で聞いておりました。そこで彼女は姉に、生徒会長を知っているかどうか尋ねていたからです」

——友だちって、おい、まさか。

水鳥中学の女子についてはほとんど記憶がない。やたらと不良っぽい会計女子くらいだろうか。生徒会で関崎とも相性がよくなかった相手のはずだ。霧島の話に登場する女子とは考えづらい。

「霧島、なんで佐賀さんと彼女が友だちだったんだろう」

「詳しいことはさすがにわかりません。ただ、うちの姉は生徒会長について批判的な態度を取っていましたが、彼女は懸命に生徒会長のよいところを出してかばっていました。佐賀生徒会長のよさを理解する女子はそれほど多くないのが現実です。嫉妬とも言えましょう。しかし、彼女は姉に対して佐賀生徒会長について、仕事のできる、かしこく、そして愛らしい女子であることを力説しておりました」

——それと、佐賀さんと友だちであるという結論にどうしてつながるんだ？

まったく持って霧島の思考回路はわからない。

要するに霧島は、佐賀はるみをどういう形にせよ褒め称える女子をすべて肯定したくてならないのだろう。努力家で自分の居場所でもって精一杯の努力をする素晴らしい女子である、それ以上に、佐賀はるみの価値を認めている。これ以上の賞賛ポイントはない、というわけだ。

「お前がとことん佐賀さんに惚れ抜いていることだけはよくわかった」

上総は短く留めた。

「それはそうと、学校祭で演劇やるとか言ってたけど、あれどうなったの」

本条先輩が目の前にいた時に聞いた話を思い出し、まずは確認しようと思った。霧島の目的は本来、かつて評議委員会が請け負っていた「ビデオ演劇」を参照したいとのことだったが。話が霧島の姉に特化してしまい、上総も辟易していた。霧島ゆいのことを弟の真が語るのならば、必然、悪口にならざるを得ない。

「よく覚えてらっしゃいましたね」

「それが目的だろ」

「はったりですよ、今の段階ですぐに学校祭の話をするわけがありません」

「お前、あのさ」

——いかにもありがちな言い方でさらさら述べ連ねていくせになんだよ、まったく。

上総が黙りこくって抹茶を啜るのを見つめつつ、霧島は余裕ありげに微笑んだ。

「今思えばずいぶん不思議な話です。一委員会である評議がなぜ、演劇部の真似事など行おうとするのでしょうか。それもシナリオや装置だけは本格的なものを用意して、給食時間を利用して放映するとは、いくら青大附中が独創的個性のある学校だったとしても考えづらいところがあります」

「だから、それは本条先輩とあと結城先輩が」

言いかけたのを霧島は遮った。

「僕からしたら、さっさと演劇部を作ってしまうだけでよかったことに思えます。確かに結城先輩は諸事情から部活動に入ることを保護者側から許されなかったと聞いています。その代わりに評議委員会を抜け穴にしたという話ですが、親を説得するとかそういった選択肢はなかったのでしょうか。その上で健全な形で演劇部をこしらえて、地区大会、全国大会を目指し、学校の名を高めていく、そういった方法も可能だったはずですよ」

「学校の名、か」

盲点だとは言いたくない。結城先輩も、もちろん本条先輩も外に向かって青大附中の名を馳せようとしたことはなかったような気がする。

「その通りです立村先輩。僕は生徒会に入り、青大附中が青潟市外でどのようなランク付けをされているかを確認しました。青潟近郊では言わずと知れた名門中学ですが、高校、大学に進学していくにしたがってその栄光は色あせて生きていきます。現在はまだ、出身者が要職について活躍している状況ですのでさほどでもありませんが、これから先、外部進学者がもっと増え、レベルの高い進学校が増えていくにしたがってゆでがえる現象が起きてしまうのではないのでしょうか」

「ゆでがえるか。気持ちよくゆでているうちに逃げられなくなる蛙のことだな」

「よくご存知ですね立村先輩。僕は幸い、父から紹介される形で青潟市以外の有識者のみなさまとお話させていただきます。あまりにも青潟内の常識と、外の世界での価値観が違いすぎることに愕然とします。青潟大学が一流と信じ切っている人々は、十年後もしくは二十年後、どれだけ後悔することか、僕は想像するだけでぞっとします」

霧島が厳しい口調で語り続ける中、おかみさんが麦茶をサービスしてくれた。ありがたくいただく。

「でもさ、霧島、この前話してなかったっけ。青潟大学に進学するつもりだって」

「仕方なく、という意味合いです。僕も許されるならば外部大学に進学したいに決まっています。僕の言う『仕方なく』とは青潟で商いを営むに当たっての人脈作りであり、同時に家業へ直接携わっていくための修行をできるだけ短くするためでもあります。青潟を出てしまうと、どうしてもそういうわけにはまいりません」

——そうか、そんなに青潟にいるのがいやなのか。

その気持ちは分からなくもなかった。上総の場合は青潟というよりも、「品山」というコミュニティの中から飛び出したくてならなかったから、規模を広げればほぼ同じ感覚だという認識でいる。息苦しい「品山」の空気であり、小学校の同級生たち、先生たち、すべてから飛び出したかった。取り立てて何がというわけではない。テレビを見ないから、世界文学を背伸びして読んでいるから、変わったコート着ているから、その他、クラスの同級生たちとは異なる行動をしているという理由で、上総は幾度となくはらわたの煮えくり返る思いをしてきたものだった。あいまいながらもけりをつけて青大附属に飛び込んできたのもそのためだ。

「でもさ、過去はいやってほど追いかけてくるものだけどな。どんなに逃げてても」

「逃げるとは思っておりません。僕は、単純に青潟が息苦しいだけです。自分がしでかしたわけではない過去の出来事をもとに、今だに一部の男子連中からは好奇に満ちた目線で見られる始末。あの馬鹿な姉はともかくも、なぜ僕がいまだにそんなことを言われなくてはならないのか、謎でなりません」

——霧島さんのせいだけじゃないと思うけどな。

心ではつぶやき、黙って聞き続ける。

「とはいえ、僕もいい加減元服を迎える大人です。現実問題として母をひとりにしておくわけにもいきません。仕事も覚えなくてはなりません。あの馬鹿姉もいつまでもひとりというわけにはいかないでしょう、近いうちになんらかの形で嫁に行くでしょう」

感情を荒立てず、霧島がたんと語り続ける。狐面はそのままだが、どこかあきらめているような匂いがする。

——霧島に聞いてみようか。

ふと思ったことがある。上総は麦茶を少しだけ飲んで口をしめた。

「単なる俺の好奇心で聞きたいんだけどいいかな」

「お答えできることであれば」

「夏休みの自由研究で、ある画家の生涯について調べているってこの前話しただろ？ 俺が英語の資料を訳す形でのものをやるってこと」

「そんなことおっしゃってましたね、それが何か」

自分の話の腰を折られたと思ったのか、不機嫌そうに霧島は口を尖らせた。

「たまたま調べてたらさ、今霧島が話していたことに近い内容のことがわかったんだ」

上総は霧島の様子を伺ってみた。たいして興味ないと言いたげな顔をしている。

「その画家は父親が名前の知れた日本画家で、そのままレールを歩んでいけばそれなりの成功が約束されていたんだ。もともと才能もあった人だし。ただ、いろいろな事情があって二十代でアメリカに飛び出し、それから一度も日本に戻らず前衛的な絵やデザインで名を馳せた人らしいんだ。俺は今までそんな人がいること自体しらなかったけど」

「それと僕の話していたこととはどうつながるんですか」

いぶかしげに問い返される。

「つながるわけじゃないよ。ただ、その画家と霧島とがなんとなく重なって見えたんだ。ちゃんと後ろ盾がそれなりにある環境下で」

「そんな、いんちきくさいことをおっしゃらないでください」

「後ろ盾」という言葉に過敏反応したらしい。まずいまずい、言葉を控えねば。

「言い方間違っていたら謝る。俺が言いたいのは自分に合わない場所だと判明した段階で外に飛び出すのもひとつの判断かもしれないなってこと。霧島も将来店を継ぐというはっきりした目標があってそのために青潟へ残ることを選ぶ予定だろう？ でも本当は外の世界を見たい。それだったら、なぜ飛び出すことももつと検討しないのかなって不思議に思ったんだ。もちろんご家族のこともあるとは思うけど。でも、霧島の本音は、店とかそういう背負うものがなければ、青潟大学ではなく別の学校に外部受験したいんだろ」

霧島は黙りこくった。唇をかみ締めていた。わかりやすい奴だ。

「まだ霧島には大学受験まで時間があるし、ゆっくり考えることもできる。中学二年の段階で最初から青潟大学のみ絞ってしまうのは間違っているんじゃないかって気がどうしてもするんだ」

「立村先輩は英文科しか進学できないと伺いましたが」

「なんだよ、その『しか』って。まあ間違っていないから言うけど、俺は外部受験をする気は今のところない。それほど賢い頭持ってないし英語が頼りだから、できれば楽しんで学内推薦で進学したい。でも、学部はもしかしたら、国文科かもしれないし法学部かもしれないし、まったく畑違いの学部を選ぶかもしれない。選択ができなくて空いている学科どこかに押し込まれるだけかもしれない」

指を折りながら数えた。

「俺もまだ高校に入学して四ヶ月しか経ってないし、これからゆっくりいろいろと可能性を探るつもりではいるよ。ほら、おととい個人面談があったからさ、その時に担当の先生から、英語だけではなく国語にも関心を持ったほうがいいって言われたんだ。最初この人、何考えているんだろうと思ったけど、うちで考えてみて納得したよ。今の段階で道を狭めるのではなくて、まずいろいろな方面に視野を広げることが大切なんだなってこと」

「ということは、視野を広げる一環として物理学でも勉強をなさるのですか」

逆襲したがる霧島。理数系がすべて終わっている上総を追求する。

「いや、さすがに理数系は避けたいな。俺はそのあたりあまり考えてない。おそろくだけど、俺がもともと日本伝統芸能関連に触れることが多いこと知ってて、ある程度素地ができてるところか

ら広げる方がいいんじゃないかって進めたかったんじゃないかなと、そんな気がするんだ」

「そんなものですか。僕にはまったく理解できません。それはそうと、立村先輩、ムースには手をつけないのですか」

やはり来た、食べ物狙っている。のんびりと答えた。

「もう手はつけたよ、ひとさじだけど」

「残されるなら僕にください」

言い終わるや否や、指でムースのガラス容器を寄せて、断りもせず食べ始めた。江戸ガラスの細かな輝きが、霧島のつつこむスプーンと絡み合って光る。

——なんで俺はこんな偉そうなこと、霧島に言ってしまうんだろう。いやだよな、普通は。

自己嫌悪に陥る。今まで上総はかの熱血野郎教師に延々と説教をされ続けてきたものだった。今、霧島に離れたようなことを鼻高々に語っていた。奴が一応担任だった以上受け入れざるを得ないのはわかっているが、それでも苛立ちを隠せずにいた。

たまたま野々村先生に進められて腑に落ちたことや、自由研究で掬い取ったネタを持ち出して、先輩ぶってみて満足しようとするその心持ち、見抜かれているような気がする。霧島のことだ、上総を見返しては、「なあに偉そうなこと言ってるんだよこいつ」とか思って軽蔑し切っているかもしれない。きっとそうだ。だからムース奪い取りやがったんだろう。別にまずくて残していたわけじゃないのに。ゆっくり後で食べるつもりだったのに。

——けど、嘘は言っていない。

霧島の将来に向かう姿勢は上総も正直、尊敬している。年下野郎にそんなこと死んでも言いたくないけど、花森なつめと同等には、すごいと思える。その一方でなんだか無理をしているような気もする。霧島なりに将来を踏まえた努力を重ねているのだろうが、もっと別の可能性を考えてもいいんじゃないだろうか。学年トップの優等生だからというわけではなく、例えば別の大学に進学することによって別のコネクションが得られるとか、将来に必ずプラスになると思える学校が外部にあるとか、さまざまな広がりがあるはずだ。十四歳の段階で、かたくなに進路を決め付けるのがなぜなのか、掴みかねた。

「先輩のありがたくもないお説教を聴かされた以上は僕にもお時間いただけますよね」

何へそ曲げたのかわからないが、霧島は自分の分の麦茶に口を付け、ぴんと背を伸ばした。

「僕は立村先輩とは違い、身近な人間のいざこざや恋愛沙汰とは基本として縁がありません。家族の問題はどうしようもないところがありますが、少なくとも立村先輩のごとく特定の女子たちからめとられるようなまねはしておりません」

「あっそうか、俺にはそう見えないけどそれで」

茶化すと、きつと言い返すのが霧島の作法だ。

「どうお思いか存じませんが、僕はこれから先、自分の店を持つに当たって修行することが必要です。物心ついた時からそのことばかり考えていました。今もまた、父の側で日々学ぶことの多い今日この頃、少しでも自分のレベルを上げていくために努力を続けているのです」

「うん、それはよくわかる。それで」

茶化しは半分にして促す。

「なんとでもおっしゃればよいのです。立村先輩になぞお分かりになるわけもないのですから。ただ、それなりに僕の考えていることも今後の参考にはしていただけるのではと思いますし、これから一通りお話させていただきますが、口を挟まずにお聞きいただけますか」

単に、「黙って俺の話の聞け」の一言で済みそうな要求だ。上総は頷いた。もう黙っておく。

「青潟という街は、僕からしたらただの田舎都市です。一応、『都市』とはしておきますが、なんの個性もない退屈な街に過ぎません。その街で僕たちは生まれ育ち、たぶん就職して、死んでいくんでしょう。外に出ることもなく」

いきなり霧島の口調は憂いを帯びた。目を伏せたまま、コースターに人差し指をかけたまま語り続ける。

「立村先輩は青潟大学以外の選択肢を考えたほうが良いとおっしゃいました。無理なことです。僕があのお店を継ぐ以上、青潟を出て行くことは不可能です。まともな大学といえば青潟大学しかありませんし、それも日本国内で通用するブランドでもないことは承知の上です。この街で生きることは、僕にとっての宿命なのです。運命は変えることができます、でも宿命は生まれもつてのものだから、動かすことなんてできないのです」

目をあげようとしな。上総は黙って聞き入った。口をはさまないと決めていた。

「その枠組みの中で、僕がどう生きるかを、そうですね、小学校の高学年あたりから毎日考えていたものです。幸いか不幸か僕は、家族から離れた場所で暮らしていましたが孤独にはなれていましたからね。その中で、僕は家業に興味があり、いつかは自分の店を切り盛りしたいんだという自覚を覚えました。とこかのとんまな姉が、自分の誇りだけで跡取りを奪い取ろうとしましたが、僕からしたら笑止千万。僕のやりたいことが、家には確かにあるのです」

言葉を重く、じんわりと述べる。

「青大附中を受験したのももちろん将来のためです。ただ、僕が期待した空間ではありませんで

した。誰もが将来の夢なんて大きくなったらパイロットレベルの内容でしかなく、僕のようにじっくりと仕事としての今後を考えている奴はひとりもいませんでした。話しかけてもうざったがられるか、むしろ鼻で笑われるか。あいつらにとっては僕の語ることなど、難しすぎて理解できなかったのか現実逃避しているだけなのか、そのどちらかでしょう。僕は語るのをやめて、父の仕事を見て学ぶことに専念しました。早い段階で父は僕が跡を継ぐ決意があることを知っていましたし、そのためにいろいろな場所で学ぶ機会を作ってくれました」

麦茶をこくこく飲んだ。途中、おかみさんが継ぎ足してくれた。「恐れ入ります」と礼をした。続けた。

「立村先輩は僕が無理をしているとお思いかもしれませんが、とんでもないことです。僕はただ、本気で将来のことを考えているだけなのです。いろいろな縁で僕は生徒会役員に選ばれましたが、運営に関してもっと積極的に学ぶ機会を得るためです。上から見下ろして、ベストな戦略を考えていくこと、そういったことを学ぶのに生徒会はよい練習台ともいえるのではないのでしょうか。決して、ストレス解消のために利用しようとしたり、演劇やりたくても部活動がなかったために代用にしようとしたとか、そういうわけではないのです」

本条先輩が聞いていたら青筋立てて霧島を張っ倒しているだろうが、あえて考えずに聞き続ける。

「僕はずっと和服や反物が好きでした。椅子よりもたたみが好きでした。コーヒーよりも抹茶が好きでした。いわゆる『和』の世界が好きでした。ただ、僕と同年代の連中にはその価値観を同じくする人がいません。しかたないことです。中学生の好むものではないとわかりきっています。せいぜい、学校祭で評議委員会が野点に駆けずり回っているのを嘲笑するのが関の山です。去年までの僕はせせら笑う立場でした。しかし、今は僕の方からなんとかして、切り込む必要があるのではと、考えているところです」

上総は言葉を発せず、そのまま霧島の顔を見つめた。ずっと顔を伏せたままで目の動きが捉えられない。

「立村先輩、僕が入学する前のことと伺いましたが」

いきなり霧島が、はっと目が覚めたかのように見上げた。

「全校集会イベントで、ファッションショーを行ったという話を伺ったことがあります。評議委員会と耳にしましたが、本当ですか」

さすがにここでは口を利いていいだろう。

「いや、制服をメインにして小物で味付けしてその費用を当てるというクイズ大会ならやった。ファッションショーとは違うけれど卒業式の仮装のほうが近いかな」

スポットライトを幕の陰でふたりいじっていた杉本梨南との会話を思い出しながら上総は答えた。余計なことは言わないことにした。霧島もそれ以上つまらなかった。

「それならアイデアがかぶることもないでしょう。せっかく僕が青大附中生徒会でほぼ全権を握り、好き勝手できる立場にいるのなら、ここで自分のやりたいことを突き進むのも悪くはないのではないですか」

「いや、一步間違うと反感買うけどな」

言いかけた上総を遮った。

「学校祭で僕は、主だったところに和の文化をちりばめさせていただくつもりです」
言い切り、ふっと笑った。上総が絶句したのをしてやったりと思ったがごとく。

——和の文化って、けど、うちの学校和の文化関連の部活、あったっけか。

「具体的には、何を考えてるんだ？　うちの学校にはそれらしきものなかったような気がするけど。茶道部がないからしかたなく、今まで評議委員が担当していたようなものだし」

「違います。部活動や有志が行うものであれば何にもなりません。しつこいようですが僕は生徒会副会長、次期会長でもあります。評議委員会だって結局は一委員会、話題になってもほんの一過性のものでしょう」

「ずいぶんなこと言うなあ、まあいいよ、事実だし」

霧島には何を言ってもしょうがないので上総はあきらめている。

「しかし生徒会が音頭をとって行うのであれば、話は違います。イメージとしてはまず、生徒会役員は全員和服、それも浴衣などの軽いものではなくできればきちっとしたもので。僕も言い出し役ですのでそれなりの格好はします。そして、もてなし用の喫茶、去年は洋服だったようですが、ここも先生たちと相談して、和服でそろえていただくようにします。各クラスでの出し物など和服では話にならないものもあるでしょうしそのあたりは個人に任せますが、公的な立場に立つ委員や放送部のみなさんには、強制的に着ていただくことになるでしょう」

「それ、大丈夫か？　まだそれ、話、持ってってないんだろ？　それにさっき霧島、まだ学校祭のことなんて考えてないって言ってなかったか」

手でしなしなと否定する。

「ここにたどり着いた時まではその通りです。嘘ではありません」

「じゃあなぜ」

「立村先輩のせい、とでも申しましょうか」

霧島はにんまりと上総を見上げた。

「立村先輩が僕に、将来がなんだとか、可能性を絞り込まないほうがいいのかなんだとか、いきなり先輩ぶって説教しだしたあたりから、ふと新しいアイデアが浮かんだ次第です。青澗を出ることができなかったとしても、学校組織を利用することによって、僕は将来の顧客作りや足場を固めることができるというわけです」

「顧客作り？」

戸惑うしかなく、上総がさらにつぶやくと、

「商いの常識です。僕がこの方法を取ることによります、先生たちへ和服に関してのアピールが可能となります。ここは僕よりも父にがんばってもらう必要がありますが、大人の方でも和服に触れる機会のない人が多いご時世、生徒たちが無理しても着ている姿を目にすれば何かかしら、心に触れるものがあるでしょう。直接お求めいただかなかったとしても、これから先生徒たちになんらかの形でこのイベントを伝えることになるでしょう」

「確かに、記憶に残る以上、家族には話すだろうな」

「次に生徒たちです。生徒たちもやらされている気持ちでいっぱいでしょうし、僕もまさか全員喜んで乗ってもらえるとは思っていません。かえってうんざり逃げられる奴の方が多いと見ています。しかし、ここも大切なところですが、ここで一生袖を通さなければ一生着る機会がないであろう生徒たちにきちんとした形で着せてみて、その感覚を覚えていただけるかどうかで、また認識も変わってくるでしょう」

「そういうものかな」

「好き嫌いではありません。今後卒業式や入学式、成人式などで着ざるを得ない可能性だってあります。その時に、この学校のイベントを思い出し、たまたま僕が霧島呉服店の跡取りであり、生徒会副会長だったということを少しでも記憶してもらえれば、またどこかでつながる可能性もあります。一過性のものではありません、これが顧客作りなのです」

「記憶に、留めるか」

「さらにこの取り組みが成功すれば、来客も興味を持つでしょう。生徒会が働きかけたものなのだとなれば、地元新聞地方版から取材が来るかもしれません。当然僕が広報関連は引き受けますのでその時に家業のことに触れることもあるかもしれません。すぐに購買につながるわけではありませんが、その代わり、メディアに触れた人々の記憶には残ります」

「つまり霧島は、学校祭を使って、将来の顧客作りと自分の顔を売っていくことと一緒に行動しているわけか」

頭がうまく働かない。整理しながら上総は尋ねた。あまりにも霧島の頭の回転が速すぎる。本当に、この場で決めたことなのか、それが信じがたい。

「お察しの通りです」

霧島は唇をきゅっと上げて、せせら笑うかのように答えた。

「青潟にいるからこそ、こうやって学校全体を動かす形でのマーケティングだってできるんです。立村先輩、外に飛び出したがる連中とは、違うんです」

その六 高校一年夏休み十二日目・立村上総の霧島真に再度振り回される日々 (6)

霧島が一通り言いたいことをすべて言い放ち、上総の残したケーキもすべて平らげ、大満足顔で外に出た。後を追おうとし、おかみさんに呼び止められた。

「かあさくん、ちょっと」

「いつも、ありがとうございます。おいしくいただきました。そして友だちの分も」

「その、お友だちなんだけどね」

他の客たちに聞こえないように小声で耳元にささやいた。

「まさかかあさくんのお友だちだとは思わなかったけど、もしかしてあのお坊ちゃん、霧島さんところの息子さんじゃなくって」

——やっぱりばれてたか。

驚きはない。むしろ、ああやっぱりか、の一言に尽きる。上総はあっさり認めた。

「そうです。その通りです」

「ならよかったわ。もし違ってたらと思っていたんだけど、やはりそうなのねえ。世の中本当に狭いわ。かあさくんなら大丈夫そうね、よかった、これで安心したわ」

——どこが安心したんだろう。

「それではまた、今度の八日、先生とこの会でまたかあさくんお手伝いしてくれるんでしょう？ お母さんがおっしゃってたわよ。ほんとかあさくんがだんだん使えるようになってきて本当に助かってるって。またお願いね」

やはりそうかと思う。「おちうど」の二階座敷を借りてシンプルに行われる予定とは聞いていた。さほど男手が必要とも思わないのだが、母の命令には逆らえないのもまた事実だ。改めて一礼し、上総は引き戸を開けた。

霧島は閉じた傘を片手に入り口で待っていた。陽が照ってきたようだ。水溜りがあちらこちらに点在し、その中に白い光が映っている。夏の光だ、やはりまぶしい。

「本日はごちそうさまでした」

「お前、ここに来たことあるの」

尋ねてみた。別に「行き着けにしているくせになぜ俺におごらせる」と突っ込みたいわけではない。ただ、霧島がなぜ「おちうど」に行きたがったのかそのわけを知りたいだけだった。

端正な横顔をそのままに、霧島はあっさり答えた。

「父に連れられて、ですが。僕が自分からというわけではありません。父もここでよく、商談らしきものをしています。僕も勉強のため隣で話を聞いています。顔を覚えられたのはそのためかもしれません」

「商談か。すごいな」

「ただ黙って座っているだけです。何も話はしません」

——中学一年の頃、からか。

計算すると上総が中学三年の頃から霧島も連れ扱いとはいえ顔を出す機会があったというこ

とか。そう考えると二ヶ月前、尋常ならざる状態の霧島を「おちうど」に引きずり込んだのは果たしてよいことだったのかわからなくなる。顔を知られている場所で、エロ本がどうだとかああだとか真剣に語り合ったのだから。霧島も居心地悪かっただろう。

「何で、今まで言わなかった？」

「言う必要がありますか」

上総が答えずにいると、霧島は横目で見やった。すぐ目を伏せた。

「ここに来る中学生は僕だけだと信じていましたから。僕はまさか、たかだか二歳上の高校生がこの場所を自分のサロンのように利用したりとか、付け払いしてたりとかしているとは想像していませんでしたから」

「俺の場合は特別だよ、親との関係もあるし」

フォローするつもりで声をかけたが逆効果か。霧島は目を背けたままつぶやいた。

「そんなこと、どうでもいいことです。ただ僕は、立村先輩と違って、杉本先輩を連れ込むようなことは決してしないでしょ」

「どういう意味だよ」

「ここは、僕にとってビジネスの場です」

霧島はまっすぐ前を見据えて言い放った。

「将来僕は、必ず一人前の商人として成功してみせる。青潟というこの場所で、暖簾を守ってみせる。それどころか伝統を打ち破ってみせる。軽々しく外へ飛び出していくことのできる連中を見返してみせる。その気持ちを忘れたくないからです」

——霧島は、本当は外に飛び出たくてならないんだ。

意地っ張りも突き詰めればこんなところか。上総はもう霧島に言うつもりもなかった。

ひとりで霧島が学校祭企画を勢いよく語り続けていた間、ずっとそれだけを感じ取っていた。この青潟という街が、この風土が好き、そう言い切りつつも霧島の視線の先にはそこから背を向けようとするたくさんの同級生たち、いや先輩たちを見据えている。その中にはきっと本条先輩もいることだろう。確実なのは上総がその中から外れていることだけだ。

どういう事情があるのかは、これまで霧島が自分の家庭事情について語ってきたこととつながりがあるのかもしれない。姉のゆいがかつて巻き込まれた事件をきっかけに壊れかけた家族の絆、傷が深すぎるあまり息子を溺愛し続ける母、それに答えねばならないと心に決めている霧島本人。十四歳にしては背負うものが大きすぎるようにも見えた。

成績からしても、学年トップの成績なら青潟大学以外の、霧島いわく「本当のブランド大学」を狙ってもおかしくはない。青潟が小さな地方都市であることを自覚していて、このまま埋もれたくない野心を持つ霧島ならなおのことだろう。

それでも、この街から出ることを欲しない。許されない。

上総からすると、もったいないとは思う。いくらでも方法があるのではとも思う。留学はするつもりだとか言っていたけれど、それ以外にも海外の大学を目指すとかいろいろな方法もきっとあるような気がする。ただ、今の霧島にはそれがまったく見えないのだろう。軽やかに外へ飛び

出すことのたやすい同級生たち……必ずしもそうとは言い切れないが……をねたんでいることすら気づかずにいる。どこかの誰かに似ているようで、それは限りなく上総自身にも似ているようで、時折息が止まりそうになる。

「立村先輩、先ほど僕がお話した学校祭の企画ですが、現段階ではどなたにもおっしゃらないようお願いいたします。まだ固まっていない状態ですし、まずは先生たちを口説き落としていく必要があります。何よりも生徒会長とご相談しなくてはなりません」

「言うわけないだろう。中学のことなんて話してどうするんだよ」

「いえ、杉本先輩あたりには口を滑らせてしまうんじゃないでしょうか」

これは怒っていい内容だと思う。上総はきつく言い返した。

「俺も言っていることと悪いことくらい区別つくよ。失礼だな」

「それはどうも。もっとも僕も、『おちうど』の存在を生徒会長へお話ししないというところの常識は持っておりますが」

皮肉の言い合い。意識していなかったがはたと気づく。霧島の立場であれば、上総と杉本がふたりこっそり席を共にしている「おちうど」の場を佐賀はるみにばらしても不思議ではない。むしろふたりでいるところを寝込み襲うようなこととして、杉本を激昂させようとしてもおかしくはないのに。

「お互いそちらの方が、ビジネスとして好都合だから、と申せばよろしいでしょうか」

「ビジネス、か、それもいいか」

ちっともビジネスライクでない表情で甘ったれる霧島の表情は、周りに人がいない時に見せるものと同じだった。品山で思う存分飲みまくり食べまくりした時のものにも、またよく似ていた。学校帰りの生徒に顔をあわせたらどうするんだろう。ひそかに心配してやった。

霧島と特に明日以降の約束はせずに挨拶をして別れた。今日は言いたい放題ストレス解消したのだろう。しばらくは連絡も途絶えるだろう。大学を通り抜け、中学校舎からゆっくり坂を下りていった。突き当たった先にはバスロータリー。夏休み中は駅前行きの本数も減る。腕時計で確認し、駅前行き次の停車時間を確認する。運良くあと五分で来る。大学生が数人ぐったりした顔してベンチに座っていた。

上総はかばんからノートを取り出した。昨日より始めた自由研究用のまとめノートだった。なぜ、美術の世界で名を知られた親がいて、そのままレールに乗っていけば安全な形で成功できたかもしれないのに、あえて日本を飛び出した「彼」の生き様を日本語でまとめていくうちに浮かんでくるのは、決してその海外で知られるようになった見知らぬ画家の姿ではなかった。その言葉にひもづいたものはすべて、上総のよく知る友だちの姿ひとりひとりであり、その中には本条先輩も、杉本梨南も、そして霧島もいた。

——心底好きなものが存在していて、でも自分の目の前にある道はそことは別であって、第三者からすれば恵まれている世界。それを捨てて飛び出すことは、決してたやすいことじゃない。今の霧島を見ていればそれもわかる。言い訳して、自分を納得させて、それでも結局は耐え切れ

ず飛び出した。すべてを捨ててアメリカへ高飛びするには、どんな葛藤があったんだろう。俺にはその気持ちが絵にどう影響したかなんて全然わからない。そのあたりは羽飛か清坂氏に全部まかせよう。ただ、自分の前世を真剣に信じ込んでしまうくらい好きな世界が、今差し出されているプレゼントの中には何もなくなったら、それは逃げ出すしかないというのも、分かるような気がする。

バスが来た。ノートを閉じて乗り込んだ。バスの中でノートを読むなんて車酔い一直線のようなことはしない。すっかり晴れた青空の昼下がり、白い雲を眺めれば言葉はおのずと流れ込む。上総はしばし、今頃自宅で母親と姉に威張り散らしているであろう霧島の気持ちに滑り込んでみた。何かうごめきたすような期待半ばで。

前日までの雨もようやく上がり、また陽が照りつけ始めた。講習三時間を耐えるのも少ししんどくなりつつある。窓を開け放したままでシャープを握り締め、ふと瞼が重くなる。なんとかつつぷしていねむりこくのだけは免れ、鐘が鳴るのを聞いた。

「りっちゃん、お疲れ。腹空いたよなあ」

「ほんと、何か食べたいよな」

「じゃあさあ、外でなんか食べよっか」

南雲が手早くかばんに勉強道具一式ぶち込んだ後、東堂含めて呼びかけた。

「学校だとなんか落ちつかないし、ハンバーガーみたいな腹持ちいいもん食いたいよなあ。りっちゃんも来る？」

「よければ、いくけど」

東堂と顔をあわせて南雲は頷いた。

「だめなわけないじゃん。じゃあさっさと出ようよ、また先輩方に捕まったらめんどろじゃん」

いろいろとしがらみのある南雲を励ますように、東堂はおおらかに笑う。

「まあまあ、お前さんのように女子がごろごろしている奴だと、振り払うのもひと仕事だもんな。先に玄関出て待ってるからな、あ、立村先生もどうぞどうぞ」

——何が先生なんだか。

上総は答えず、頷くだけにした。

話の流れで東堂も含めて三つ巴での南雲宅訪問と相成った。例の「修学旅行濡れ衣事件」をきっかけに、一度は上総のほうから持ちかけたものだった。もっともその時は事情が入り組んでいたことと、南雲、東堂それぞれの都合もつかず結局お流れ。無理に再開することもなく今に至る。

——いい機会かもしれないしな。

上総はかばんを持ち、手提げに詰込んだ大きな菓子箱……家からくすねてきた手付かずのバウンドケーキまるごと……をぶら下げ、そのまま南雲についていった。できれば羽飛と美里とは顔をあわせないで玄関に向かいたかった。いろいろと面倒だ。

「あーあ、バイトのない一日、なんて幸せなんだって思うよなあ」

「ずっとバイトだったのか」

尋ねると、南雲は大きく手を広げて頷いた。

「もう、義務、義務ったらないんだよね。学校休みの間そんなにお客さん来ないから楽かなと甘く見てただけどね」

「結構来るのかな」

違う違う、南雲は首を振りながら肩をすくめた。

「面倒なんだよ。今年の春までバイトの主だった人がいてさ、その人が就職したにも関わらずしょっちゅう様子を見に来るんだよ。どうも俺のことがお気に召さないみたいでさあ、見つけ

るたびひたすら説教。ぐちぐち仕事と関係ないところまで突っ込むんだよな。それでやたらと、もうひとりのバイト君と比較して嫌味を言いまくるってわけ。あまりにもしつこいと」

「言い返すのか？」

バイトの分際で、とか言われそうだが南雲はにっこり首を振った。

「違うよ。黙って俯いていると、たいてい店の奥さんがかばってくれるんだ。おいしいお菓子があから休みなさって俺を奥に呼んでくれるんだ。そのバイトの主だった人をうまく言いくるめてどっかへ追っ払ってくれるんだ。やっぱり俺、おばあちゃんには愛されちゃってるから、ほんとありがたいよなあ」

——おばあさん以外にも、全年齢的に受けがいいような気がするけど。

上総は思ったことを言わずに調子を合わせた。

たぶんもうひとりのバイト君とは、関崎のことだろう。相変わらず朝一番でバイト先の荷解きを行ったり掃除や片付けに余念ないという。夏休みだから勤務時間を長くするというものもないらしい。朝は関崎、昼は南雲、といったタイムテーブルは平日時期とほぼ変わらないようだった。

「まあでも、なんとか最近は慣れたとこ。うまくやってけばなんとかなるかなって」

南雲は軽やかに続けた。襟もとを緩め、肩からかばんを背負い直した。

「同じ下宿の連中も同じ飯を食っていれば気心も知れるし、連日連夜の勉強行脚もうまく抜け穴見つけられるし、夜中は夜な夜なマージャンだし。そういう生活もなかなか楽しいよ。今日はそれも含めてフリーだから、もうめいっぱい遊ぶぞって感じかなあ」

「なぐちゃんは夏休み中家には戻らないの」

自宅は市内、下宿先とほぼ変わらない距離。上総も何度か南雲の自宅へ遊びに行き、一度は泊めてもらったこともある。なんのために下宿生活しているのかが今ひとつ理解しかねるところもある。普通下宿とは、遠距離に済む生徒たちが通学時間を無駄にしないで済むようにするために用意されているものだろう。なぜ南雲が一人暮らしする必要があるのだろう。詳しいことを聞いたことはなかった。

「講習終わるまではいるつもりだよ。お盆前には戻る。ばあちゃん、きつとうちに帰ってきてるだろうしそんなときはやはりお迎えしたいよなあ」

修学旅行中に亡くなった南雲の祖母、すでに一周忌を迎えたはずだ。おばあちゃん子だった南雲がどんな想いでその日を迎えたのだろう。明るく振舞う南雲の心に去来するものを想像して、上総は再び口をつぐんだ。軽々しく触れるべきことではない。

「ま、予想してない展開でいきなり下宿生活だけど、やっぱり自由っていいなって思うよ。親にはうるさく言われたいし、こうやって暇な時友だちを連れ込んだりもできるし。お勉強タイムだけはしんどいけど、慣れればなんとかなるし。バイトもがんばればお小遣いにもなるし。それはそれでいいのかなって思うんだよね」

「学校とバイトを両立させるなんて、すごいよな」

嫌味ではなく素直に感慨を述べると、南雲は上総に極上の笑顔を振り向けた。

「りっちゃんに褒められるとさ、ほんっとうれしいよ」

「どうして」

「だって、嘘言っていないじゃん、心にもないお世辞言わないって知ってるから、素直に信じられるんだよね。ああ、今日はいいこと絶対あるよな！ さ、りっちゃん早く行こうよ。東堂大先生が腹空かせて待ってるよ」

南雲は勢いよく生徒玄関のすのこに駆け出していった。東堂が心配していた通り、あっという間に女子たちの視線にさらされ、「南雲くん、やっぱかっこいいよねえ」とため息とともに語られることとなる。中学時代からちっとも変わっていない南雲のアイドル的評価だった。

三人で連れ立ち校門を出て、南雲の下宿へそのまま歩いていくことにした。南雲曰く、
「すごいうまいハンバーガー屋があるんだよ。そこでテイクアウトしてうちで食おうよ。300円なんだけどたぶん二人分は入ってるんでないかってくらい巨大なハンバーガーがはさんであって、フライドポテトも三人分くらいのものがたった200円なんだよね」

とのよだれたらたらな情報に、男子ふたりは逆らわなかった。

「やはり講習があれだけ続くと腹も減るよなあ」

「同感。何はともあれ食べないと、生きていけないよな」

店の前は押すな押すなの大行列、一応今日は夏休み真っ只中のはずで、学生たちもそれほどいるとは思えないのだが、南雲に解説を求めると、

「最近、観光客の間で人気らしくって、口コミで広がっているらしいんだよね。たぶん今ここにきている人の九割がたは、観光客だと思うんだ。でも大丈夫、俺ちゃんと手を打ってあるから」

「ほう、それはなんと」

東堂が面白そうに語りかける。

「そりゃあもちろん、あれでっせあれ！」

あうんの呼吸。にやにやしなながら南雲は入口に向かい、上総に振り返り、

「すぐ戻ってくるから、そこで待ってて、では！」

敬礼してすぐ中に入っていった。

「待たされそうな気がするけどな」

列が途切れないのを上総がぼんやり眺めていると、側でのほほんとしている東堂が答えた。

「昨日のうちから南雲がちゃあんと手を打ってあるから、大丈夫」

「手、って？」

「ほらあれ、昨日の段階で俺と立村が遊びに来るって話になっただろ？ 授業終わってからたぶん南雲、店に予約を入れて、昼の時間になったら三人分作っておいてもらうようにって予約を入れておいたんじゃないかなあ。あいつそういうところはほんっと気が回るから」

「え、でも、三人分だったら相当の金額になるんじゃないか」

もちろん割り勘のつもりでいる。ただ一括で払うのは学生にとってはきついんじゃないだろうか。

「そんなことありゃあせんよ。心配しなさんな立村、南雲はそのためにバイトしてるようなもん

だし。あ、戻ってきたよ、ほらほら、はええなあ」

行列の人々が白い目で見ると無視して、南雲が大きな包みを三袋ほどぶら下げて出てきた。ざっと観るに、かなりの量だ。スーパーのビニール袋で言えば牛乳にパンにコーンフレークの箱を詰込んだくらいの大ささじゃないかと思う。それが三袋だ。

東堂と一緒にそれぞれ袋を受け取った。ハンバーガーとフライドポテト以外にもまだいろいろ入っているらしい。

「下宿、すぐそこだから急いで入っちゃおう。あったかいうちに食っちゃおうよ。あ、飲み物もうちに冷蔵庫で冷やしてあるからご心配めさるな。じゃあ行きましょう！」

「なぐちゃんありがとう、けど、かなり高かったんじゃないかな」

上総がそっと尋ねるのを、南雲はまた笑顔で振り切った。

「大丈夫大丈夫、まだまだバイト代たんまりあるから、ここいらでふだんお世話になりっぱなしのりっちゃんにはご馳走しないとね。それにこれから、英語を教えてもらわなくちゃあならないし、講師代としては安すぎるくらいでっせ。あ、ついでに東堂先生もおんなじもんだけど」

「俺はおごってもらえないのかなあ、立村だけか」

つっこんでくる東堂に南雲は首をひねるふりをし、

「まあ、今回だけは、特別サービスするしかないか、ってところかなあ、東堂には次回俺にたっぷり焼肉おごってもらう予定だし、それはそれでまあいっかってとこっすね」

「ひでえ話だ。じゃあ今日は遠慮なく食わせてもらうぞ、よっしゃ！」

南雲と東堂がいつもの調子で楽しげに語り合うのを、上総は後ろで黙って眺めていた。このふたりの乗りは自分にはないものだとわかっていた。相手がもし南雲 だけだったとしたら、決してこんな会話を交わすことはないだろう。たぶんそれは、南雲が上総にあわせてくれているからなのだろう。しかし南雲の本質は、こうやって東堂とアホ話をやらかしながら盛り上がっているところなのかもしれない。そんな南雲がなぜ、今まで上総を日々気遣い、友だちとして尊重し、今日も こうやって自宅まで招いてくれるのか、その理由も今だにわからなかった。

その七 高校一年夏休み十三日目・立村上総の南雲秋世訪問顛末（2）

南雲の住む下宿は、巨大ハンバーガー店から歩いて一分もかからなかった。細い小路に入っ
てすぐ、「楽実荘」と看板がかかっているところにあった。

「ここ、どうぞどうぞ」

蝉の音が響く中、南雲について靴を脱ぎそろえる。まだ余裕があるにせよ、靴が散らばって
いて足の踏み場に困る。とりあえずは隅に並べておいた。

「結構多いんだわ、下宿で帰らない奴。でもまあ、普段よりは静かかなあ」

「この前来た時よりも、ずいぶんな」

東堂はしょっちゅう顔を出しているのか、慣れた風に階段を昇っていく。挨拶ひとつもない。
まかないつき下宿なら、ただいまの一言くらいあってもいいのにと思うのだがそれすらない。管
理する人自体留守なのかもしれない。

「夜だけだよ、ご飯でるのは。昼も頼めば出してもらえるのかもしれないけどね」

南雲に聞くとそんな返事だった。急勾配の階段を注意深く昇り切り、廊下を伝って最奥の戸を
開く。両脇に三部屋ずつ設置されていてその突き当たりが南雲の部屋らしい。

「一番早く下宿先決まったからさ、俺が最優先でいい部屋もらえたの。窓から川が見下ろせるし
、花火大会の時は最高だよ。ここからどでかい花火がぼーんと上がるのが見えるんだよね。下宿
のみんなでここ来て眺めて、いろいろやるんだわ、楽しいよ」

「いろいろやるって何を」

「そりゃあ宴会に決まってるだろ」

東堂が上総に答えた。手元のハンバーガー包みを真四角のテーブルに置いた。十畳ほどの広々
とした和室だが、筆筒と勉強机、本棚を覗いてはほぼがらんとした感じに見えた。男子の部屋で
よくあるようなポスターとかそのようなものはない。カレンダーもありきたりの風景写真のもの
だし、目立つのはせいぜい、小型のラジカセが置いてあることくらいだった。

「寝るときは布団を出すんだろ」

「そりゃあね、でもそっちに慣れたら楽。部屋が広々使えるからこうやってのんびり過ごせる
ってところもあるってこと」

南雲はいったん部屋を出て飲みものを取りに階段を下りた。上総と東堂だけが取り残された形
となる。かなり熱いままのハンバーガーを取り出そうとビニール袋にてを入れておくと、いきな
り話しかけられた。

「ところでなんだけどなあ、立村」

「何？」

やはり緊張する。同級生で、特に親しいわけではない、「友だちの友だち」だとやはりぴくり
としてしまう。早く南雲に戻ってきてほしい。できるだけ自然に答えたつもりだった。

「南雲も、まあ、いわゆる事情は把握してるってことだし、せっかくの機会、ゆっくり話そうや
」

「そうだね」

——話すたって、どうやって？

上総ももちろんそのつもりできたわけだが、切り出し方については思いあぐねているところもあった。まず、東堂がどこまで事情を把握しているのか、そのあたりを確認する必要がある。できれば南雲を介してうまくもって行きたかった。東堂にとってもあまり気持ちいい内容ではないだろうし、緩和材としての南雲に頼りたかった。

杉本梨南に関係する桜田愛子のことだけならまだしも、清坂美里とのいざこざも関係してくるとなっては切り出し方にも迷いがある。一応、「別れた彼女」扱いにはなるにしても、上総にとっては「かけがえのない友達」として今だつながりの深い美里である。無碍な扱いをしたくない。

東堂はハンバーガーをさっさと取り出し、さらにフライドポテトの山、それプラス肉団子の塊をテーブルに載せた。こたつ兼用のものだと今気づいた。

「とりあえず、宿題分は持ってきたよ」

食べ物に手を出す前に、用意してきた英語の宿題解答を封筒に入れてテーブルの下に置いた。うっかり食べるのに集中していて渡し忘れてしまったらことだ。本来の目的はここなのだから。東堂はすぐに受け取り、油っぽい指先で封筒を覗き込んだ。中から取り出したりはしなかった。

「いやあ助かる、サンクスサンクス。これで夏休みはのんびりできるよなあ。これ、立村、どのくらいで解いた？」

「夏休みに入って二日目で」

厳密には二日目午前中一時間程度で一気に片付けたのでそれほど苦労はなかったような気がする。感嘆の声を挙げる東堂。

「それにしてもなんで立村そんなにすぐこの大長文読めるの」

「それしかできないし」

答えるのもおっくうで、口をハンバーガーでふさぐことにした。南雲の絶賛する通りハンバーガーのでかさたるや一人分の二倍とまではいかないが、一・五倍はあるだろう。中のしゃきしゃきしたレタスとべたつかない具の味わいが、こういってはなんだがハンバーガーで片付けるのがもったいなく思ってしまう。ふつうの皿に持って、フォークとナイフで平らげてもいいくらいだ。

「けど、本当に大きいよな。食べきれるかな。まだフライドポテトもあるし」

「食べる食べる、遠慮なく食っとけ」

こうやってできるだけふたりっきりで重たい会話が乗ってくるのを避ける。上総なりに時間稼ぎをしている。自分でも姑息なやり方、気づいていないわけではない。ただどうしても気になってしまうのも確かなのだ。

——ジュース取りに行っただけなのにずいぶん時間、かかるんだな。

さて、どう持ち出そう。

しばらくふたりでもぐもぐ、ひたすら食べることに専念していた。実際絶賛の言葉はとめどなく、東堂曰く「裏メニューもすごい」とか言い出すし、上総もつい黙って聞き入る。

「あっさりした生ハムと分厚いチーズをはさんだサンドイッチタイプのもあるし、女子好みの小ぶりのもんもあるらしいし。俺も南雲もまだ全部制覇してないけどなあ」

「でも中でゆったり食べられそうなムードじゃないよな。あの行列だと」

「確かに、特に今、夏休みだしなあ。ま、今日はこれだけ食べりゃあ大満足だ」

男子同士の集まりではほとんどの場合、食事がまっとうであればたいてい話が弾む。

「野郎同士だとかこういうところでのんびり食べるしなあ」

同じことを思ったのか東堂はのどかにつぶやいた。もうとっくにハンバーガーは平らげ、残りのフライドポテトを一回につき三本ずつ口に押し込んでいる。

「立村はあんましこういうところで食うことないのか」

「ないわけじゃないけど、最近はあまりないな。学食で済ませる」

「じゃあ、女子連れてく時はどんなところ行く？」

三分の一残っているハンバーガーにかぶりつきながら、上総は息を止めた。口の中で固まっている。東堂は何事もないかのように続ける。

「俺とか、こういうところ連れてっちゃうけどなあ。南雲は例外だから別として、立村がお気に入りの彼女とかと歩く時はどんなところ行くのか、ちょっと興味があるよな」

黙っているのも礼儀に反する。急いで飲み込んだ。そういえば飲み物がないので喉が詰まりそうなのだ。

「彼女なんていないけど。あ、今は、だけど」

美里に対して失礼な発言になる。あわてて訂正する。東堂の面白そうな眼差しが痛い。

「特に付き合っていないから、そんなことないし」

「いやいやそんな硬いこといいなさんな」

「ほんとだよ。そういうの、よくわからない」

どうここで答えたらいいだろう。単純に何気なく、東堂が上総の恋愛沙汰について興味を持っているだけなのか、それとも例の一件が関係していて鎌をかけているだけなのか。判断に苦しむ。上総が知っているのは東堂が一年以上前から桜田愛子を溺愛していて当の本人からうっとおしがられるほど付き従っていることくらいだ。ついでにその桜田愛子仁まわりつく迷惑娘が杉本梨南だと大なる誤解もしているようだし、その件については上総が説明する必要があると思う。ただ、ここですんなり乗っていいのだろうか。迷う。

「付き合うって意味が、俺には今だによくわからないから、冗談抜きで」

羽飛や美里、本条先輩には何度も繰り返してきた言葉。さすがに東堂に言い放つには説得力がなさ過ぎるような気がする。少しだけ追加訂正する。

「友だちとだったら、『リーズン』とか、そのあたりとかかな。女子が混じってればあまりがさつなところもまずいかなと思って、それなりのところも考えるけど、そもそもそれほどの機会がないんだよな」

「なんかちょっと意外だな、てっきり立村なら、いろいろデートコース組むの得意なんじゃないかとか思ってたけど、そうでもないんか」

「何、そのデートコースって」

問い返して舌打ちしたくなる。そうだった。一応は三年間、清坂美里とは公認のカップルだったのだから。それなりのことをしていて不思議はないはずだ。外野からしたら、青湊市内の喫茶店をすべて回っていていいんじゃないかと思われているのかもしれない。

「そんな計画立てたって、喜んでもらえるわけじゃないし」

喉に詰まる。何度もパンをかみ締めて飲み込む。喜んでもらえるわけなんてない。この前だってそうだった。上総なりに立てた計画を、杉本梨南が果たして満足してくれたのかわからない。向こうのしたいことを言われた通りに追っかけて手はずを整えることで精一杯だった。少しでも杉本は満足してくれただろうか。押し付けがましかったんじゃないだろうか。ほんのちょっとだけでも、

——関崎の代わりになれたらどうか。

「佐川書店」の二階窓から投げかけられていた眼差しを、杉本梨南はまだ知らない。

あえて口に出さずにおく、そのまま王子様に想われる日々を夢見る杉本を、これ以上ずたずたに引き裂きたくない。

「あーれ、ふたりとももう食っちゃった？」

南雲がコンビニのビニール袋に一リットル分のコーラを入れて戻ってきた。

「どこ行ってたの」

「いやさあ、俺がまずっちゃって、冷蔵庫に入れておいたはずのコーラが全部飲まれちゃってたんで空っぽ。あわてちゃった。そんなわけでただいまコンビニ調達してきやしたというわけ」

「言ってくれれば俺も運ぶの手伝ったのに」

「いや、ご心配なさるな、りっちゃん。今日はとことん俺なりのおもてなしタイムなんでそこんところはさ。あーあそれにしても冷めちゃったかなあ。りっちゃん今度、本条さんも混ぜて一緒にあの店で食べようよ。本条さんもたまに行くらしいけどね」

「ほんと？」

本条先輩に連れていってもらったことは一度もない。ということは南雲もしょっちゅうふたりで顔をあわせて話をしたりしているのだろうか。

「それにしても東堂のこの遠慮のなさなんすかそれ」

「なんでなぐつちに俺が気を遣わねばならないんだよ」

また気兼ねないやり取りを交わしているふたりを眺め、上総はそっと食べ終わった包みを小さくたたんだ。まだフライドポテトに手がほとんどついていないのだが、帰るまでにすべて食べられるのだろうか。

「ま、今日のはのんびりいきましょか。そいじゃ、乾杯だけでもしようっか」

一緒に買ってきたいらしい紙コップを並べ、黒いコーラをこぼれない程度に注いだ。

家でめったに飲んだことのないコーラを口にしながら、上総は膝を抱えたまま窓辺の青空を眺めやった。ここからは見えないがすぐ側には川が流れているはずだった。花火はきっと川面へ鮮やかに映ったことだろう。

——ここでだったら、杉本も空を眺めてくれたらどうか。

もし南雲とふたりだけであれこれ話をしていたとしたら、もう少し足を伸ばしていられたことだろう。ハンバーガー一個で十分腹がいっぱいで、フライドポテトもまだ八割残っている。だいぶさめてしまった。まあ腐らないだろうから持ち帰ることにしようと決めた。

「ところで南雲も、最近どうなの。彼女とはそれなりに？」

「まあ、一応、それなり」

意外と東堂も南雲の恋愛事情についてはつっこまない様子だった。

「いろいろあるけど、まあこんなもんでしょ。忙しいし」

「おデートとかはどうなの、最近は」

上総に話しかけたことを今度は南雲に振る。ということは単純に、デート研究をしたかっただけとみた。南雲はパンをようやく平らげた後、コーラを一杯飲んだ。

「そりゃあ学校では話をするよ。けど、高校はやっぱり人の目があるからなあ」

「全校生徒の注目の的ともなりゃあそりゃ大変だ」

——奈良岡さんのこと、やっとふっきれたのかな。

学内の公認ラブラブカップルだった南雲と奈良岡彰子との静かな別れを知るものとしては、あまり口出ししたくない。東堂も三年間保健委員の相棒として仲良くしてきた奈良岡に対しては特別な友情があることだろう。このあたりも微妙なラインに違いない。ふたりともうまく、地雷に触れないように用心深く語っているように見えた。

「俺としちゃ、毎日バイトの方がもう大変。だいぶ慣れてきたけどね。最近は売り上げも上がったとかで大入り袋をもらったりすることもあったりして。なかなかだろ」

南雲はかばんから、お年玉に使うようなポチ袋を取り出した。しっかりとした和紙だ。

「ところでりっちゃん、ふと思ったんだけど、後期の委員に出る気ないのかな。ずっと気になってたんだけどさ」

「別に、あまり考えてないけど」

言葉が途切れる。なぜ南雲が話を無理やり切り替えたのかに戸惑う。東堂もぼかんとした顔で、フライドポテトを半分以上消化している。

「相手がいることだし、俺の一存で決められることじゃないし」

「え、ちょい待ち」

東堂が割り込んだ。南雲と上総、交互に見ながら、

「俺が聞いた話だと、後期のA組規律は立村が入るって噂で持ちきりだけど、それまだ、当の本人に伝わってないってことか」

もぐもぐ言わせながら問いかけた。

——どこからどういう展開になってるんだろう。

意識していなかったが、南雲も東堂も、現在は同じ規律委員だった。すっかり忘れていた。元青大附中規律委員長だった南雲と、中学時代は保健委員を三年間務めた東堂と。なぜいきなり規

律委員に知り合いが集中してしまっているのかが謎だった。

関崎からも、後期は規律委員に入ってほしい旨打診されているし、流れとしてはたぶん、そうなるのではないかと覚悟はしている。ただし女子受けの死ぬほど悪い自分がすんなり推薦されるかはわからない。いつぞやのようにあっさり落とされるかもしれない。

ただ、規律委員に押し込まれるであろうという噂は、まだまだ一部にしか流れていないと思っていたのだが。南雲に知られているとは想像していなかった。それに東堂の言う、「噂で持ちきり」とはどういうことなのだろう。噂する奴がそんなにいるとは思えない。

「今のところ、まだ全然話題になってないけど、どうしてかな」

恐る恐る返事をする。まだ東堂に対しての対応に迷いがある。すぐ南雲が間に入ってくれた。ありがたい。

「りっちゃん、違うって。噂のルートは別のほうから。ほら藤沖の応援団のこと知ってるだろ？

いよいよ二学期に入ったら活動を本格化させて、来年の四月に向けて新入団員集めるんだって。気合入りまくり。職員室でも先生たちにいろいろと根回ししているようだし。なあ東堂大先生？」

さりげなく東堂も頷く。

「そうそう。俺もそう聞いたんだ。藤沖が今評議だろ？ 評議が抜けたらどうするってことになって例の外部野郎が上に入ることになりそうで、となると空いた男子規律委員の座はどうなるんってことで」

「わかんないよ、役ついてないの俺だけじゃないからな」

流してみるが東堂はしつこく食いつく。

「英語科は人がいなさ過ぎるだろ？ まさか下着ドロのあいつを規律委員に押し込むなんて非常識なことするとも思えんし、となると、結論はひとつだってことだよ。元評議委員長をそのまま野ざらしにしてどうするってことに、そりゃあなるわな」

「俺はあまり評価されてないから、別に何も不思議じゃないよ」

謙遜ではない、本気で思う。

「藤沖や関崎のことはよくわからないけど、規律委員のポストが空くことは知ってる。でも、中学と違って高校は委員の入れ替えが自然に行われているみたいだから、それほどのこともないんじゃないかなって気がするんだ」

「いやあわからんぜよ、なあなぐっち」

呼びかけられた南雲は、二杯目のコーラを飲みながら何度も頷いた。暑苦しいはずなのになぜか額がきれいに覗いていて髪もさわやかに伸びている。日の光で時々きらりと光る。

「りっちゃんは気づいてないかもしれないけど、委員会に戻ってきてほしがってる奴は結構いるんだよ。俺が知ってるだけでもかなりいるし、その他にもね」

「まさか、いるわけないよ」

「いや、それが結構いるんだよ。元評議委員関係者のみなみなさまとか、元青大附中D組のみなさまとか、ありとあらゆるみなさまが待っているんだけどなあ」

天羽とか、難波とか、更科とか、あのあたりか。

「理由としてはいろいろあるけど、まあなんってっか、俺たち内部生が外部の連中に最近食われつつある今日この頃ってこと。いろいろ風当たりが強いんだよね。中学時代はいろいろと楽しく企画立てて盛り上がってきたけれど、いまや風前の灯。かの外部三人組をはじめとして、先生たちもみーんな俺たちよりも外部生ばかり評価し始めるという日々が続いているんだよ。これはあんまり、おもしろくないよな」

——関崎と相当、やりあってそうだな。

南雲に関崎との件であまり詳しいことは聞いていない。が、水と油という気は確かにする。「一学期はいろいろ負けっぱなしな俺たち内部生だけど、やっぱりそろそろ反撃したい時期じゃん？俺もそろそろ、学校祭も近いってことで何か動けなくちゃあなってるんだよ。第二次青大附高ファッションブックとか、そろそろ出したいしね。ファッションショーもやりたいし、さらに言うなら演劇関連で衣装提供なんかもしてみたい。いろいろ一年生ながら企画を考えてるんだ。先輩たちもいることだし根回しは必要だけど、やるときはとことんやりたいしさ」

南雲の目がきつく見えた。上総と語り合っている時はあまりこういう目つきをしない。珍しかった。

「中学と違うところは、委員の改選が十月だってこと。生徒会改選も一緒。で、学校祭は十一月。中学と一ヶ月ずれてるんだよね。そこのところもあって、もし学校祭やるんだったら後期の連中と一緒に盛り上がるってことに、計算上なるよなあってこと」

「確かに」

「それだったら、りっちゃんが後期の規律委員に入ってくれたら俺としても百人力なんだけどなあ。な、そうだろ？東堂？」

振らなくてもいいのに南雲は東堂に呼びかける。話をあわせているのだろう、東堂も同意してくれる。無理しなくてもいいのに。つい肩身が狭くなる。

「そうそう、俺もなぐっちに同意だよん」

「けど、俺は規律の仕事まったくわからないし」

「基本は週番だけど、これから少しずつ青大附中色に染めていこうと思ってるんだ。ファッションブックもそうだし、その他のイベント参加もね。まだ先輩たちの動きが読めないからゆっくりと進むしかないんだけどね。けど、二年に上がればここから先はなんとかなるよ」

上総の知る限り、青大附中時代の規律委員会はいわゆる「おしゃれ専科」の世界だった。校則を無理やり守らせようとする厳しさなんて知ったことではない。友だちは針と糸、暇さえあれば手芸に没頭する女子がいたり、どこかで演劇の衣装係を求める声あればすぐに駆け出していく奴もいる。南雲はそのトップとして、「青大附中ファッションブック」なる季刊誌を発行し、生徒たちのおしゃれを促進し続けた。何よりも規律委員長でありながら校則違反すれすれのシャギーヘアを卒業まで貫いたその根性たるやあっぱれというしかない。そんな南雲がくすぶっているままで満足するわけがない。

——でも、俺とはあまり関係ないような気もするよな。

華やいだ規律委員会……本来の「規律委員会」とはまったく異なる意味合いだが……の雰囲気にはやはりそぐわない。上総は自覚している。

「俺の言いたいことなんだけどね、りっちゃん」

南雲は手を合わせて「ごちそうさま」ポーズを取った後、さらりとした笑顔で言い放った。

「後期は万難排して、いっしょに規律委員やろうよ。きっと楽しいと思うよ」

胃が重たい。コーラは甘ったるくて口に合わない。上総は俯き加減で膝を抱えた。

「俺が決めるわけじゃないから。もしなったら、その時は、迷惑かけないようにするけど」

南雲と東堂が顔を見合わせている。

——やはり、俺に気遣ってるんだ。

身体を硬くして上総は膝に顔を押し付けた。今だけは何も観たくなかった。

——俺が委員会から外れて、いじけてるんだと思って、それで慰めようとしてくれてるんだ。
わかってる。それが思いやりのひとつなんだって。

もてあましているのが見え見えのふたりを観察しつつ、上総は自分の分のフライドポテトに手を伸ばした。すっかりさめているがあまり水っぽくない。うちに持ち帰って食べても大丈夫そうだ。

——やっぱり、来るんじゃないかった。

気の合うもの同士で、誰かが代表して話を盛り上げてくれるならそれに付き従うだけで済む。羽飛と組んでいる時はたいていそうだった。南雲と一緒にいる時もほとんど同様だった。だが今日はいつもと違い、南雲も上総にずいぶん痛いところを突いて来る。後期規律委員の話なんてまったく予定外だし、できれば南雲に気づいてほしくなかった話題でもある。南雲の立場上……元・青大附中規律委員長……無視するわけにはいかなかったとしても、できれば二人きりの時に切り出してほしかった。たぶん南雲も、親友の東堂がいるもんだから上総もゆったり受け止めてくれるものだと思い込んでいたのだろう。

——けど俺ももう少しなんとか言えよな。

自分にも腹が立つ。これでも必死にあわせてこようとしてきたのだ。中学時代から本条先輩にはこっぴどく怒鳴られてきた。評議委員長時代だって苦手な人たちとうまくやり取りするよう、性格切り替えを意識してやってきたつもりだ。それでも、今だに「心底許した」タイプの相手でない限り、こうやって口ごもってしまう。情けないっつらない。

南雲と東堂は目と目で相談しあっている。やはり、こういうところが、親友だ。

「りっちゃん、あのさ、ごめん。俺が悪かったよ」

南雲が胡坐をかいて、いつものさらりとした笑顔で語りかけてきた。

「回りくどかったよな。今日、なんで俺が東堂を呼んでりっちゃんと合わせようとしたのか、説明してなかったもんな、ごめん」

ばつ悪そうに東堂も同じくフライドポテトをつまんでいる。自分の分はほぼ平らげ終わったようで、南雲の山盛り分を狙っているようにも見える。

「りっちゃんには単刀直入に話すよ。俺さ、前にりっちゃんから清坂さんや杉本さんのこといろいろ相談したいことがあるって聞いてたし、東堂からも同じようなこと聞かされてたから、なんらかの形で話し合いの場あるといいよなって思ってたんだ。いったんはその準備もしてたけど、なんだかんだでお流れになっちゃっててさ」

「これは俺も悪かった。立村、ごめんごめん」

口にポテトをほおばりながら東堂も続いた。よく食えるものだ。

「その後、俺も噂でしか聞いてないけどいろいろ展開があつたらしくて、少し様子見かなあとか思ってたんだ。人に口出しされるのって面倒だろうし。そういうもんだよね」

東堂に「な、そうだろ」と相槌を求める。

「おんなじおんなじ」

「けど、最近になってまたいろんなことが起きたらしいって、俺も東堂から聞かされてて、やは

りここはりっちゃんと腹を割って語ってもらうほうがいいんじゃないかなって、元三年D組規律委員として思っちゃったわけなんだ」

ここまで南雲はからりとした口調で語った。同じ内容を別の奴が押し付けがましく語ったのであれば、上総も耳をふさいで逃げ帰るだろう。そうさせないのが南雲の不思議なところだった。穏やかだがこちらをきっちり向かせる。襟を正したくさせる。言うこと素直に聞きたくなる。どこから来るのか分からないが、上総はそれに従うのがいやではなかった。

「ごめん、なんだかふたりに気を遣わせてしまったみたいだな」

「いやいやそんなことありゃせんよ」

また東堂が、口を動かしながら首をゆるやかに振る。

「俺も、前から立村とはじっくり話してみたいと思ってたんだよ。中学の時からだけどな。ただまあ、めんどくさい野郎同士の派閥とかいろいろあったもんでなかなかね。まあこうう機会もなければ、おまえさんとのんびり自分の彼女についても語ることもねえだろうし、せっかくなぐっちの用意してくれた場所とハンバーガーを食いながら、のんびりやりましょう。俺もあまり、裏に回った言い方するのは好みじゃないんで、立村がそれでいいんだったらどんどん直球でいきますか」

「それでいいなら。俺もあまり人と話すの得意じゃないから変なこと言ったらごめん」

テーブルの下に足を伸ばした。ぶつからないようにした。

「ということで、それじゃ最優先課題があるんだってことで、東堂大先生、行きますか」

空のグラスにコーラを注ぎながら、南雲が促した。

「ああ、じゃあ立村、夏休み前のことなんだがな、お前さんと俺の妹ちゃんたちがまたいろいろやかかしているって話は聞いているかなあ」

——やはりそうか。読み通りか。

いくら南雲がうまくとりなしてくれたとしても、緊張がほぐれないのはそこにある。上総は片膝をかかえ直し、頷き答えた。

「夏休み中に、駒方先生から聞いたよ」

「そうかあ。俺は夏休み前。ほら、期末終わった直後あたりかな。いきなり駒方先生に飯食いにいこうとか誘われて、ただ飯ラッキーとか思ってたら、いきなりだよ」

「ちなみにどこに連れてってもらったの」

「それがなあ、大学の中にある教職員食堂って奴。すげえ豪華なハンバーグランチ食わせてもらって何事かと思ったぞ」

「俺も同じ。しゃぶしゃぶ定食ご馳走してもらったよ」

間に入って聞いている南雲が思いっきり吹き出した。

「なんなの二人とも、駒方先生におごられ自慢してなんですかそれ。俺、今まで一度も教職員食堂なんて行ったことないよ。うらやましいなあ。でお味は」

ふたり声をそろえて答えた。

「ものすごく、おいしいよ」

しばらく南雲のために、東堂が教職員食堂について説明を行っている。上総はその間に作戦を練ることにした。もう食べたくないのでコーラを少しずつ飲む。炭酸がすっかり抜けていて、ただの黒く甘い水だった。

——ということは、俺に話をする前に駒方先生は東堂を教職員食堂に連れ込んで、桜田さんの件について説明したってことだな。その時に当然杉本の話も出てきただろうし。なぐちゃんも前もって話を聞かされていたとか言ってたところみると、かなり早い段階であのふたりの家庭教師ごっこは進んでいたんだらうってことだよな。

窓から入ってくるやわらかい風が心地いい。扇風機も一応回っているけれども、なくてもいいくらいだ。さらに深く奥へ進んでみる。

——たぶん、今までの経緯からして東堂は杉本がすべての悪の発端だと思い込んでいる。そうするとここで俺の切り出し方ひとつ間違えると、せっかくの話し合いも崩壊してしまう可能性があるってことか。

難しいところだ。東堂の気持ちもわからないわけではない。どういうきっかけか知らないが札付きの不良娘にどっぷり惚れてしまった以上、彼女の味方にならざるを得ないのは当然だ。上総も自分を振り返ってみればわかるし、言葉よりも行動で証明してしまっている以上言い訳しようがない。ただ、南雲の立場でふたりを見下ろせば、どちらも同じ穴の貉に見えるだろう。

「でさ、続きなんだけどいいか」

「いいよ」

ひとくさり南雲に説明を終わらせて、東堂が話を戻した。

「ご存知の通り、俺の妹ちゃんはいろいろとたちの悪い噂があったりして、周りの偉い先生たちをはらはらさせてるんだわ。そのところはなぐっちもよーく知っていると思うんだけどな。俺もやはり保護者としてある程度面倒を見なくちゃいけないと。そういうこともあって駒方先生はまず先に、俺に話を持ってきたらしいんだ」

——「妹ちゃん」か。俺が杉本にそんな言い方したら即座に縁切られるよ。

「まず、一点目、どうも彼女は俺に内緒でかつての仲間とつるんで、たまり場でいろいろやらかしてるんじゃないかってことなんだがな。俺もそれは前から気になっててあいつにいろいろ確認したんだよ。けど、まあご存知の通り怖いお兄さんの言うことなんぞ妹ちゃんは全然聞こうとしない。そんなわけで俺と駒方先生と相談してがさ入れしようということにまとまった」

「がさ入れ？ え、でも駒方先生はお菓子持って様子を見に行っただけって聞いたけど。それに東堂、お前も、行ったの？」

戸惑う上総に東堂は動じることなく首を振った。

「いやいや、それは駒方先生に止められた。やっぱりいろいろ面倒なことがあるかもしれないし、残念ながら俺は未成年だからもう少し時を待ってって言われちった」

——ということは、杉本も気づいていないということになる。

「あとから聞いたけどなあ、駒方先生はがさ入れなんて過激なことをしたんでなくて、食べ物の差し入れしただけだったらしいんだ。のんびりと食って、もてなされてそれでおしまいだったん

だが、やっぱり、学校側でもいろいろと問題視されちまってるってことなんだよ。いくら今はまじめにお勉強してますって言ったって、あの場所で以前はシンナーとかなんかやってた連中がまたたまり出して面倒なことになるんでないかとか、まあいろいろもめているらしいんだ。特に、ご近所さまにな」

舌打ちして、東堂は上総に向かい、ため息をついてみせた。

「たぶん俺の聞いた話と東堂の言うこととはほとんど同じ内容だと思うよ」

まずはここで、結び目をひとつ作っておくことにした。

「俺も夏休み入ってからいきなり本条先輩とセットで呼び出されて、東堂と同じ教職員食堂でランチご馳走されて、いろいろ話を聞かされたから。もっとも俺の時は別の用事もいろいろあったから狩野先生もいたよ。それと、一応当の本人にも話を聞いておきたかったから、その後一回」

完全に黒い泥水と化したコーラを飲み干した。喉がすっきりする。

「杉本にも詳しい事情、ゆっくり聞いてきた。あとで先生たちに報告するってことも伝えた上で。それと、東堂に杉本が伝えてくれって言ってた」

肩が凝っている。思い切る。一気に言い切った。

「桜田さんのことを束縛しすぎるのはよくないって。もっと信じればいいのになってこと、たぶん言いたかったんだと思う。杉本はずっと前から、自分の意思がしっかりあって一生懸命な人は、周りの評価がどうであっても真正面から認める性格だから、なおのことだと思うんだ」

エールを返してみた。

上総なりの返事をどう東堂が受け止めるか。

固唾を呑む。様子を伺う。まずは南雲の顔をちらと見る。困った風に口を動かしている。ひたすら嚙んでいるとみた。次に東堂を見る。細かく頷いている。激昂はしていないようだ。

「なるほどなるほど、すでに情報収集は立村が先手を取ってたというわけか。はええなあ」

「タイミングもあるけどさ」

「で、そちらの情報だとどうだった？」

冷静に返事してみる。

「うん、聞いてみたけど、ごくごく普通の友だちづきあいの延長みたいだよ。桜田さんだったっけ、その人の公立中学の友だちが受験勉強で苦労しているから、杉本とふたりで手伝っているだけみたいだ。杉本が言うには、桜田さんの教え方は神業レベルらしくて、それを観るだけでも勉強になるらしいよ」

「あの子がかあ？ 信じられねえなあ。見た目知ってるだろ？ どう考えても教師の適正なんてなさそうだけどなあ」

上総は首を振って続けた。杉本経由の情報は正しいのだ。

「俺は直接見てないしなんとも言えないけど、数学の問題を少女漫画化してストーリーに仕立て上げるってのは普通じゃないと思う。想像を絶するよ。それで楽しませて成績も上げるっていうんだからさ。どういう展開なのかわからないけど、どちらにしてもその友だちの成績はみな上がっていて本当だったら感謝されてもいい話のように聞こえた」

「本当かあ？ なんか眉唾だよなあ。だってそうだろう。立村はその杉本さんって子の話しか聞いてないんだろ？」

きっぱり答える。

「杉本はいろいろ言われているけど、基本的に嘘は絶対につかない。見方が偏りすぎているところは確かにあるかもしれないけれど、噂だけで人を判断しない性格だよ」

本当はここで「外見だけ」と言い切りたかったのだが、残念ながら否定ができない。杉本が究極の面食い娘だということを上総は忘れていない。いいんだどうせ。

「俺の聞いている限りでは、杉本がその友だちのアパートに行ってお茶やお菓子を用意したり部屋の掃除をぱたぱたやったりして環境を整え、分かるところは教えるといった形を取っているよな。教えるのは相当桜田さん上手なようだから、どこまで手伝っているかわからないけどさ。ただ東堂や先生たちが心配するように、俺は実際その現場を見ていない。だから断言ができないのは認める」

まずはあっさり認めてみた。突っ込まれたら逃げられないところだからしょうがない。上総もし反対の立場だったらそこを追求するだろう。だが、今の上総は杉本梨南を丸ごと信じることに決めている。どんなに理屈にかなっていなくても絶対そうする。かたくなと言われてもしかたない。

「そのこともあるから、一度駒方先生とも相談して、なんらかの形で俺もくっついて行こうかと

いう話にはなってきた。まだ忙しくて先生たちには報告してないんだけどさ。けど俺なりに別には何も問題なさそうだし、いわゆる不良化の兆しの溜まり場でもなさそうだし。東堂が心配するのももっともだけど、今回に限っては大丈夫な気がするよ。かえって表彰ものかもしれない」

さあどう出る。上総はじっと東堂の表情を伺った。

少なくとも、最愛の恋人・桜田愛子をけなしてはいない。

杉本の言葉通りに伝えて、持ち上げているつもりではいる。

だがあっさり頷くかどうかは、五分五分といったところでもある。

南雲があらあらといった風に顔を見合ってはため息吐いている。

東堂はしばらく考え込んでいた。蝉の声が甲高くなったのをタイミングに向こうから切り出した。

「あのなあ、立村」

胡坐をかく足を組み替えた。

「お前がその杉本さんだったか、彼女からじっくり話を聞いて、その上で判断したんだったら俺も正直、その通りと納得したい。もうここで首千切れんばかりに振って、握手して終わりにしたいところなんだ。だがな」

ちらと、南雲を見る。南雲も肩をすくめる。意味がわからない。

「この話には結構ながーいながーい前置きがあって、それを知っている俺としてはどうしても即、信じるわけにはいかないってところあってね」

「前置きってなんだよ」

蝉がいったん黙り、また鳴き出す。

「お前さんは優等生サイドお意見しか知らないかもしれないけどな、俺としてはかなりどん底サイドから聞いたネタもたんまりあるんだよな。もしよかったら今からひとくさり語らせてもらってもようござんすか」

東堂の口調に嫌味は感じられない。むしろため息を幾重にも重ねて、「なんとかしてくださいよ」と言いたげな雰囲気漂っている。相当頭を痛めているのだろうとはうかがい知れた。その一方で、やはり杉本を馬鹿にしているのではという匂いも漂ってくる。杉本が現中学三年の中で問題児扱いされているのはしかたないことだけど、少し訂正してほしい気持ちもある。

「優等生サイドかどうかは別として、確かに一方的な意見しか確認してないのは認めるよ。でも、東堂、その話をしたらこういっちゃなんだけど、桜田さんのあまり知られたくないこととかも出てくるんじゃないのか」

詳しい事実は知りたい。だが桜田愛子の過去やらかした生臭い話まで聞き出す気はない。いや、本当だったらそこも含めて確認する必要があるが、口にする東堂の痛みを無視することができるほど、上総は人間腐っているわけではない。

「ああ、いろいろ出回ってるからなあ、あの子の噂もなあ。な、なぐっち、お前にも前から話してるだろ、例の件。あの立村に話したことあるか？」

なぜか南雲に確認しようとする。いや、聞いたことはない。南雲もそんなに口の軽い奴ではない。南雲本人も首を振って答える。

「いや、だって今までしゃべる必要なかったじゃん」

「そんなら、一から俺が話す必要あるよなあ、わかったわかった」

東堂は腕組みをし、南雲に「もう一杯もらうぞ」と自分でコーラを注いだ。しゅわりと音が聞こえる。炭酸は抜けきっていないようだった。

「立村もいろいろ話してくれたし、個人的にまだ別件で聞きたいこともあるし、俺も黙っているわけにはいかねえよな。少し聞きたくないネタも出てくるかもしれないがそこんところは勘弁な」

ゆっくり、心を整えるように胸を何度か手で上下にさすった。ごくんと飲んだ。

「とりあえず、今流れているあの子に関する噂はおおむね本当なんだよ。残念なことに」

「噂って、たくさんあるからすべてってわけではないだろ？」

自然と上総も小声になる。東堂は窓辺を眺め、目を上総たちから逸らしたまま続けた。

「とりあえずすべて、とっていいだろうなあ。まずバーजनでないってこと、駅前で売春めいたことやらかしてたってこと、一回補導されかけたけど、いろんな事情があって結局お目こぼしされてるってこと、このあたりは全部、本当なんだ」

東堂の隣で南雲は、何も言わずにコーラを味わっていた。

——そういう噂が全部ほんとして、いったい。

もちろん知らないわけではない。杉本と桜田愛子がからむようになってから、ろくでもない噂の数々は上総の耳にも届いていた。そのこともあって気にはしていたし、さりげなく離れてほしいとも願っていた。杉本の性格上すんなり受け入れるわけもないのでなあなあにはしていたけれども、積極的に付き合っほしいタイプの女子ではないとは思っていた。

——けど、そんなこと、言っいいのか？ 東堂？

言葉がうまく出てこない。心臓だけが激しく波打つ。東堂の使う単語はダイレクト過ぎる。

「バーजन」「売春」「補導」、すべてがみな、直接昼間語るべき内容ではないような気がした

。

「中学、三年だよな」

「そうなんだ。俺たちには想像つかねえよ女子ってのはええよ。知らんところでどンドンやっちゃまってるんだよなあ。俺も長年保健委員やってたけど、まさかなあ、そういうのがざらだとは思ってなかったよ。なんせご存知の奈良岡のね一さんが女子の基本形だと思ってたんでね、なあぐっち」

無言でこくこく頷く南雲を見やる。

「気づいたの、いつ頃？」

恐る恐る尋ねて見る。

「中学三年に上がる前の春休みあたりかなあ。白状しとくと俺の一目ぼれだから、そんな噂があったとしても知ったことじゃねえってそこはある。ただ、あんまり彼氏としてはうれしいネタでもないってことで、早いうちに悪の芽は摘んどいたほうがいいかなと、俺なりにいろいろ考えて

はいたんだよ」

一目ぼれ、と言い切る東堂の口調に照れはなかった。計算するともう付き合っ二年目突入ということか。

「でも、俺の一方的ラブコールだけではなかなかね。うまくいかないんだ。前々からの友だちの付き合いも続いているし、学校側も監視きついし、いろいろあって結局俺なりにひとつ方法を考えた」

「何それ」

また南雲と顔を見合わせてにやっと笑った。

「あの子の親に直訴したってわけ」

——直訴？

「告げ口？」

「違うよりっちゃん、もっとすごいんだよ東堂先生は」

それまで黙っていた南雲が、東堂の肩を組み、親指を立てて見せた。

「俺たちの修学旅行前、こいつさ、彼女のご両親に結婚前提で付き合いたいとながーい手紙書いて送ったってわけ。それがまた、菱本先生はさんで大騒ぎになったんだけど、結局その熱い想いに彼女よりもご両親が感動してしまい、公認の仲になりおったってわけ。うちの学校のカップルって、やたらと親公認が多いけど東堂もそのパターンだったんだよ」

「まさか、それ」

口が開いたままふさがらないとはこのことだ。言葉が喉の奥にひっかかって出てこない。南雲が蓋を閉めた状態のコーラ瓶を上総の前にどんと載せた。

「とりあえず、これ飲んで落ち着いて、それからゆっくり続きにまいりましょうや、りっちゃんも東堂大先生も」

上総の動揺ぶりが相手には見え見えなのだろうか。隠しているつもりなのに。さらに止めを刺すのは東堂のぼかんとした言葉だった。

「そんな驚くことか？ 俺、立村だったらとっくに経験してるだろうし、それなりのことやるからある程度わかるかなと思ってたんだけどなあ。ほら、修学旅行四日目の時も、ほら」

南雲がさっと東堂の口に手を当てた。完全に上総の顔を見て慌てている。かくせやしない。

「りっちゃん、違う、誤解するなって、これはまた別の話なんだよ、な？」

——東堂にもまさか、知られてたのかよ……！

修学旅行四日目夜。あの悩ましい夜のこと。

——なぐちゃん、誰にも言わないって、言ってたよな、確か。

もう一度南雲に視線を送ると、懸命に否定しようとする南雲の申し訳なさげな表情と、戸惑っている東堂のまんまるい目とがそれぞれ返ってきた。

思えばあの修学旅行から一年以上経つ。五日間の旅行であれだけいろいろな出来事が詰め合わされるとは思っても見ない展開に、上総も心底疲れ果てたものだった。楽しくないと言えば嘘になる。友だちとの絆が強まった、これも事実だが。

——けど、五日目のあれ、なんで東堂が知ってるんだろう。

もし南雲が誰にも話さなければ、四日目夜の出来事は誰にも知られていないはずだった。

羽飛も、美里も、こずえも。それぞれ一夜を共にしたという、一步間違うと校則違反で停学、いや下手したら退学食らいそんなことをしでかしたわけだが、唯一部外者で気がついたという南雲さえ黙っていてくれれば、それで無事片付いたはずだった。

——だって、絶対誰にも言わないって、言ってたよな？

「りっちゃん、違う、誤解しないでほしいんだけどさ。んと、東堂、ちょっとお前は何にも言わないでもらえるか？ ちょっと俺としてはりっちゃんに説明しないとまずいかなとか思うんだ。頼む」

まだぴんと来ていないのか、東堂も南雲の顔を見やり、

「そんな俺、まずいこと、言ったか？」

首をひねっている。その肩を軽く叩いた後、南雲はすぐ上総の前に陣取って、じっと覗き込んだ。相当あせっている様子がうかがい知れた。あの南雲が、呼吸を整えて正座をしているのだから、当然だ。

「これ、りっちゃんに話してなかったかもしれないんだけどね、俺、あの時部屋隣だったろ？

それで、もっと言うと、俺と東堂が同室だったんだよ。これも、きっと覚えてると思うけど」

上総の脇で東堂も大きく頷いている。さすがに発言は控えている様子だった。尋常ならざる上総の動揺が伝わっているのかもしれない。自分自身ではかなり抑え目にしているつもりではいるのだが、あまりにも不意打ちで反応を選べない。言葉を失っている状態としか言いようがない。

「で、なんで東堂がそのこと知ってるかっていうと、最初に気づいたのがこいつだからなんだよ。俺は気持ちよくすやすや寝入ってたところだったんだけど、いきなり東堂が俺を起こして隣の様子に変だとか言い出したんだよ。な、そうだったよな」

途中、東堂のことも気遣いながら話を進めていく。こういうところが南雲の人柄なのだと上総はいつも感じ入る。誰かと話していて、よっぽど嫌いな奴でなければいやな思いをさせないように振る舞い、その一方で相手に引け目を感じさせたりしない。誰とでも親しく付き合い、えこひいきしているように見せず、その一方で自分にだけは特別なところを見せているようなそぶりを何気なく感じさせる。上総もそれに引き込まれたひとりだった。

「今だから言えるけど、ほんとあの時はあせったんだ。なんとなく壁の向こう側で会話しているのが聞こえるんだよ。たぶん羽飛と古川さんだったと思うけど。女子を部屋に引きずり込んでいて、しかも一対一っぽいじゃん？ そうなったらもうひとりがどこ行ったのかなって、普通思うじゃん？ もうあんときはまじ、びびったよ」

「ごめん」

謝るのも間抜けだがそれしか言いようがない。東堂も「違う、違うってそういうじゃねえんだよ」と懸命にフォローしようとしているが、南雲が片手で静かに止める。

「まあ、運良く、ってかたまたまってか、無事脱出できてそれでちゃんちゃんになったけど、あの時のりっちゃんの顔見てたら、何も無いに決まってるって俺はすぐ思ったよ。誰も疑ってないって。まああの時船でさんざんからかって、ほんと悪かったって思ってる。けど、もしなんかあったらやっぱりわかるもんだし」

「なぐっち、それかえって立村を馬鹿にしているようにも聞こえるぞ」

妙なところで注意を促す東堂。言い当てている。

「俺からしたらせっかくのチャンスだし、ちゃんとやるべきことやれる方が自慢できるもんだと思うけどなあ」

ちっともからかうような口調でないのが上総にはどうしようもなく痛い。こうやって話をしてみると東堂も南雲と親友づきあいしているだけあって、それなりに思いやりもあるいい奴なのだということがよく伝わってくる。クラスの万年保健委員として結構お世話になったしそれはそれでありがたいと思っていたのだが、上総の過去の過失を知っていながら今日まで黙ってくれていたのはそれなりに考えるところがあったのだろう。

「だからお前黙ってろって。とにかく今言ったのは、りっちゃんを責めるつもりじゃなくって、まあたまたまだってことを強調したいだけなんだよ。決して俺は、東堂にぺらぺらりっちゃんの秘密を話したんでもないし、たまたまだってだけ。もちろん他の奴は知らないから、そのところも安心してほしいんだ。ほんとだよ、ほんつとに」

「わかってる。疑ってないよ」

汗かいたわけでもないのに全身が火達磨になったようだ。コーラを飲むというよりも、グラスの端をかじったまま膝を抱えて座っている。自分でもなんだか子どもくさいことをしていると自覚しているけれども、それしかしようがないのだ。どうしようもない。

懸命に上総の様子を伺う南雲のまじめな表情と裏腹に、隣で能天気になんか声をかけてくる東堂とのコントラストが、なおも上総の頭をぐるぐるさせる。

「もう一年経ったことだし、こう言っちゃなんだけどお前さんも前の彼女とは別れたことだし、いい機会だから聞きたかったんだけどな、やっぱりあの時、やりたいとは思わなかったのか？ どう考えてもチャンスだっただろ？俺が同じ環境に置かれたら正直、自制する根性はなかったと思うんだ。どうやって耐えた？ 今後のためにも聞きたいんだけどなあ」

「東堂、なんでお前そうやってりっちゃんいじめて楽しむんだよ。過去ったって一年、まだまだ過去じゃないんだぞ」

南雲がまたかばってくれる。この展開は自分でもなんだか息苦しい。たまたま東堂が口を滑らせて思い出したくもない過去をひっぱりだされたわけだけれども、上総からしたら何も悪いことをしてないことは確かだし、ある意味時効にはなっていることだった。野郎連中の話であればそれはそれで開き直るしかないけれど、美里やこずえが絡んでいることを考えると答え方ひとつによっては誤解を膨らませてしまう一方かもしれない。もっと言うなら、東堂は現在美里と最

悪の関係でありながら規律委員をやっているわけだ。二学期以降美里をどういう眼差しで見下ろすのか、それを考えるのも正直辛い。

「耐えた、のかもしれないけど、本当に何もなかったよ。情けないけど、本当に何もなかった」
言葉を変なところで切りながら、上総は答えた。東堂にはまだ自分のスタンスがつかめていない。南雲相手にそのままするするしゃべっていいのかどうかもわからない。「南雲の親友」なのだから。南雲の人の見る目を信じていいのかもしれないが、どうしても口がうまく回らない。「もちろん、それなりに困ることもなかったわけじゃないけど相手もいることだし、それにそういうのが目的でそこにいたわけじゃないから、だから」

「どういう目的だったの」

穏やかに南雲が問い返す。つい答えてしまう。

「あの旅行で、向こうもいろいろ精神的に参っていたこと、知ってたから、何か言ったほうがいいかなと思った、っていう、それだけ。女子のことよくわからないけど、このままいやな思いしたままで旅行終わらせるのはまずいかなとか、そう思ったから、本当にそれだけなんだ。けど、最初からそんなつもりじゃなかったし」

顔が火照ってくるのがわかる。顔を隠したい。横を向く。

——嘘だ、嘘ばかりだ。

本当はタオル一枚でバスルームから出てきた美里を目撃して腰抜かすほど驚いたこととか、そこで考えたくもない感情を覚えてしまったとか、一夜自分を自制できるのかを何度も問い返しつつ手を縛ってもらおうと真剣に頼んだこととか。母の言う通り、自分は十分過ぎるほど野獣じゃないかとすら思う。あの時何事もなかったのはむしろ奇跡だったのかもしれない。南雲、および影に隠れていた東堂のおかげで無事過ごせたことに本当だったら感謝しなくてはならないと、自覚はしている。

「ああそうか。そうだよなあ。清坂さんもいろいろあったもんね。りっちゃんのあの立場だったら、心配しても不思議ないよな」

ふうっと唇から空気を出すようにして、南雲がしみじみつぶやいた。

「せっかくの機会だしもう少し聞きたいんだけどなあ、立村」

やはり話をかき回すのは東堂だ。まだ食っている。フライドポテトが半分以下になりつつある。

「思い出話じゃなくてさ、これも前からすげえ不思議だったんだけど、お前さんなんで今に清坂のこと面倒見てるんだ？ こういっちゃあなんだけど、あの女子はどう考えても羽飛の彼女で一著上がりだろ？ 中学の時は同じ評議だったし気心も知れてたってのはあったかもしれないけどな。俺も今B組で清坂と規律やってるけど、いやあ立村苦労してただろうなってのがよくわかるよな。あれだけ気、強い女子にいろいろプライベートなお説教かまされたら普通切れるだろ？ 俺は切れたぞ」

「ああ、本当に申し訳ない。俺からも謝るよ」

自然とこの話に流れることは予測済みだった。東堂と美里が高校に入ってからいろいろとぶつ

かり合っているという話は聞いていたし、その点も上総が仲裁する必要があるのではと思っていた。もっともこの件は羽飛がかわりに取り組んでくれることになったのでさほど心配はしていなかったのだが。

「なんでお前さん謝るの。てかここも不思議なんだよなあ」

またしみじみとポテトフライを口に押し込みつつ東堂は続ける。

「俺の目から見たら、どう考えてもお前らは典型的なうまくいかないカップルに見えたけどよく三年も続いてたよな。それプラス、別れた今でも仲良く遊んでいるしな。自由研究羽飛と清坂と組んでるんだろ？ お前からしたらそんな気にならないんだろうけど、外野からみたら、別れた彼女と平気でしゃべられるのが想像を絶するったらねえ」

「そうかな、そう見えるのかな」

つぶやいてみた。ここははっきり答えを出せそうだった。上総は南雲にもちらりと目を走らせた。まだ正座している。東堂の顔をしっかりと捉えて答えた。

「確かに性格は正反対だし、いわゆるそういう付き合い向きではなかったと俺も思ってる。清坂氏にはほんと長い間迷惑かけたなって。けど、俺にとっては、この学校に入ってまもなくできたまじりっけのない初めての友だちのひとりだったから、どうしても特別なんだ。もっと言うと、今まで生きてて出来た、いろんなことを話せる友だちだったから、付き合うとかなんとかそういうの別にして、ずっと特別な存在にはどうしてもなってしまうんだ。これ、変な感じ方かもしれないし、わかってもらえないとも思うけど、いわゆる彼氏彼女のつながりをやめるだけで、その特別なつながりが切れるとは俺にはどうしても思えないんだ」

「じゃあ、杉本さんは、りっちゃんにとってなんなの」

いきなり南雲が突いて来た。静かに、やわらかく、責めずに。

蝉が鳴き止んでいる。

「特別なつながり、だよな」

——つながってなんかない。

麦わら帽子をかぶり、澄ました顔で上総を見上げたにらみつけるような眼差し。

マイコンを相手に上総を無視してひたすらキーボードをたたきつけている横顔。

青潟東高校の校門を前に、上総の存在を忘れたかのように頭をふかぶかと下げた姿。

関崎と目が合い、桃のような頬をそっと押さえるようにし目を閉じる表情。

どの杉本梨南にも、上総の手は届かない。つながってなんかない。

「杉本は」

首をかすかに振りながら、もっとも近い言葉を託した。

「何してほしいかとかが、自然とわかるだけなんだ。本当に、それだけ。つながってなんかない」

上総の言葉で一気に空気が重くしてしまったのがわかる。遠慮がちに南雲が、「りっちゃん、とりあえず、インスタントコーヒーあるんだけど、飲む？」

といかにも雰囲気をかえたようなそぶりで立ち上がる。東堂も、「ちょっと悪い、トイレ借りるわ」

と外に出て行く。トイレは一階で共用らしい。上総ひとりだけ取り残された。

——やっぱり、場違いだったよな。

自分でも頭がとっちらかってしまっついで、意味不明な言葉を口走ってしまった。南雲と一対一でいる時ですら、たぶん話すことはなかったんじゃないかと思える言葉だった。

——つながってなんか、いない。

杉本梨南は最初から上総の方など見てはいない。最初から覚悟してきたことなのに、口に出してみるとこんなにも重たい。手を伸ばそうとしても届かない。触れられやしない。

——俺はいつも、こんなのばかりだよな。

修学旅行の時だって、一線とまではいかなくとも上総がその気になればキスくらいは進めたかもしれない。今年の正月だって、南雲に童貞捨てたいなどとほざいたのはどこの誰だろう。自分だって本当はつっぱしってとことんのめりこみたい、本能だけの人間なのだ。本条先輩には、後始末が出来るまでは手を出すなと釘を刺されているけれど結局大人になんてなれやしない。いつまでたってもこうやって周りをあたふたさせておもりされている赤ん坊のまま。何が先輩だ、何が後輩だ、何が妹ちゃんだ。

「りっちゃん、どうぞ」

仲良く親友同士で戻ってきた。南雲がお盆で三人分のコーヒーをカップに入れて運んできて、戸を東堂が開けるかっこうとなる。上総も腰を上げようとするが、

「いいっていいって、まあ、コーラばかりだとなんかね、落ち着かないしね」

——こういうところが気が利くっていうんだよな。

テーブルにはまだ大量にさめたフライドポテトが残っている。紙袋を片付けてコーヒーの置き場所をそれぞれ作り、まずは一口啜った。また蝉が何かを引っ張るように鳴き出した。引き絞られそうだった。

「あれ、なんだろう、これ、おいしい」

ふっと舌に熱いものが触れ、気持ちがおぼろけていく。インスタントと言っていたけれど、そうとは思えない味わいがある。

「安いんだけど、たまーにね、こうやって飲みたくなっちゃう時だってあるんだよ。特に夜八時過ぎのお勉強タイムに入るに従ってってとこかな」

「そうか、なぐちお前、夜は集団勉強会のため、一切お付き合い禁止なんだもんなあ。電話も取り次いでもらえねえし」

東堂がけらけら笑いながら突っ込む。それは上総も気づいていた。高校に入ってから南雲に電

話連絡すると必ず、折り返しになる。それも夜十一時以降というかなり遅い時間帯である。不思議に思っていたのだが、なるほど納得する。

「そうなんだよ、ったくこの下宿ちょっと異常だよなあ。俺も一応小学時代はまじめに勉強してたけど、中学ではたらたら人間に変身したからこのガリ勉ムードはまだ慣れないよ。りっちゃん想像できるか？ まずバイトが終わるのが六時だろ？ その後帰って風呂入って夕飯食って、その後間髪入れずお勉強タイムに突入なんだよ。それもさ、自分の部屋でやらせてくれりゃあいいものを、みんな一室に閉じ込めてひたすら、問題集かりかり解いてるってわけ」

「一室って、下宿生全員で顔つきあわせてか？」

上総も問いかけた。

「そうだよ、何でもここの下宿は学生の本分たる勉強に専念させるための場所だから、できるだけ自由を拘束するのがモットーなんだってさ。それに青大附属の学生って実はここの下宿俺一人。あと全部青潟東か西の学生ばっか。授業の速度から使っている問題集から全然違うから、宿題教えてもらうわけにもいかんしまあ大変だよ。メリットないし」

青大附属の生徒がないというのは意外だった。上総が質問する前に南雲が即答えてくれた。

「うちでもいろいろ相談したんだけどね、俺があんまりにも中学時代遊びほうけてたもんで、親戚の偉い大学の先生がさ、こういう寄宿舎みたいところで鍛えてもらったほうがいいとか言い出して、反抗する間もなく押し込められたってわけ。ここだと親の監視こそ届かないけれど、代わりに怖い人たちがたくさんいるからね。少なくとも勉強には専念してもらえないかと甘い期待を持ってたらしいんだ。それにも加えて、自由時間が多すぎると碌なこと考えないだろうかってことで、半ば強引にアルバイトもあの『みつや書店』に決まっちゃったというわけなんだよね。あーあ、ほんと中学時代は極楽だったなあ。ま、今の生活もこうやって適度に羽根伸ばせるから悪いことばかりじゃないけどね」

南雲がさわやかに語り続ける。どういう事情かは把握できていないけれど、かなり南雲の家庭もいろいろな事情が隠されているらしい。両親が会計事務所を営んでいて、比較的青潟では裕福な範疇に入る家庭とは噂されている。妹がいるらしいが、事情があって別の家で育てられているとか、そのあたりも詳しく聞いたことはないけれども口に出したくないものがいろいろあるに違いない。上総もそのあたりは一切触れないことにしていた。あえて南雲に気を遣うところがある とすれば、「南雲家の家庭事情」には興味を持たないようにしていたことくらいだろうか。

「なんだかんだ言って下宿の連中も学校こそ違うけどいい奴ばかりだし、休みの日はみんなでつるんでキャンプ行ったりバーベキューやったり、そこそこ楽しんでるんだ。まあ三年間の修学旅行って考えればいいのかな、と最近悟っている最中なんだけどね」

「あんまりお前突っ込みたくないんだけどなあ」

東堂はコーヒーを半分飲んだ後、面白そうに突っついた。

「それだけガリ勉してるくせに、成績全然あがらねえの、なんでだよ」

「そりゃあ、まあ、そういうもんっしょ。強制的に勉強させたって効果ないんだよ。やっぱ、本人のやる気がなくっちゃね」

にやつきながらも東堂はどんどん詰めていく。

「そうこう言いながら、将来は公認会計士だろ？ ちゃんと将来の目標はあるってところがなあ、なぐっちのすごいとこなんだよな」

「公認会計士になるんだ？」

思わずつぶやいてしまう。親の職業を継ぐようなことになるんだらうか。南雲は首をのけぞらせるようにして両手を伸ばして横たわり、すぐ起き上がった。

「跡継ぎさんになるかどうかは別として、大学行ってる間に公認会計士はとっておきたいよなあ。頭が働くうちに難しいとこはとっておいて、その後は俺のパターンでのんびりやっていきたいなってとこ。それを人は要領いいだけって言うかもしれないけどね」

「でも公認会計士の試験ってすごく難しいって」

両親がいろいろ話しているのを聞いたことがある。「会計」とつく以上上総には手の届かない仕事という前提で、父母が笑いながら話していたのだった。

「まあ、英語ぺらぺらになりなさいっていうよりは楽なのかなって思うよ。俺、英語全滅だけど、数学はなんとか人並みだしね。難しい方程式やってるより、いろいろなクライアントさんと話して、相談に乗って、喜んでもらえる結果だせるような仕事もまたありかなって思うんだよね。うちの親もそういうスタンスでやってるし」

さりげなく上総を持ち上げているのが伝わる。頭を下げるしかない。

「仕事の話、家族の人といろいろするの」

控えめに尋ねてみた。

「するよ。誰がどうしたとかそういう噂話は個人情報の問題もあるから教えてくれないけど、こういう人が出世するとか、こういう人は落ちぶれるとか、結構いろいろ聞くんだ。全然わかんないけど、今のうちに聞いておいたほうがいいかなと思って、最近は意識して聞くようにしてるんだよね。りっちゃんは？」

「俺は、あまり」

当然のように返されて口ごもる。ほとんど、いや、まったくとっていいほどない。

「うちは雑誌記者だってことくらいしか聞いてないんだ。雑誌もあの『週刊アントワネット』だから、どういう記事かってこともあまり突っ込めないし」

「あれ、そうなん？ 立村の親父さん雑誌作ってるのか？」

またタイミングよく東堂が聞いてくる。そうだった、あまり上総は自分の両親について仲のいい友だちにしか話したことがなかったはずだった。南雲にも詳しいことはたぶん伝えていないと思う。一応、父が「週刊アントワネット」の専属記者で、たまにルポルタージュを書いているとか、ごくたまにそれが書籍化されているらしいとか、でも匿名で書いているのでほとんど知られていないとか、その程度だ。母にいたっては具体的な職種を絞ることすらできない。結局母の仕事は一般的にどういう名称で呼ばれるべきものなのだろう。

「雑誌記者なだけだよ。『週刊アントワネット』にいろいろ書いているらしいけど、具体的な内容は知らないけど。俺は全然父親の仕事に関心持ったことないし、わからないな」

「それすげえもったいないじゃんかよ、なあなぐっち？」

また話をもごうとする。東堂は様子を伺い魚を狙う猫のように忍び込む。

「俺の兄貴も将来マスコミ行きたいって言ってるんだよなあ。なぐ、お前にも話したろ？ とにかく出版業界にもぐりこみたくてなんないの。青潟出て大学行きながら、マスコミ専門学校に通ってまずコネ作りにいそしんでるって。結構大変みたいだよ。講師の話聞くために講座代払わなくちゃいけないしってな。そういうの考えると立村、お前すっげえ恵まれてるよ。ただでいくらでもマスコミ事情聞けるんだぞ。うちの兄貴聞いたら嫉妬に狂うのが目に浮かぶよ」

「そんなもんかな」

南雲と東堂が顔をあわせて大きく頷き合っていた。東堂に兄がいたことも初耳だが、さらに青潟外の大学に進学してマスコミ業界に入ろうと勉強しているとは思わなかった。何よりも上総自身、自分の父が「マスコミ」の住人であることを意識したことはこれまでほとんどなかったと言ってよい。マスコミといえば、新聞・出版社、そのイメージしかない。一応は父も出版社勤めなのだからもう少し意識しててもよかったはずなのに、なぜか「週刊アントワネット」の記者であることしか頭にない。それが自分の将来につながるのかと問われても、ぴんと来ない。

南雲は洋楽好きだし、上総もそれなりに詳しいのでしばらくカセットテープをいじったりなんなりして時間が過ぎた。すっかりくつろぎきった東堂がいきなり横たわって居眠りし出したのをいいことに、少しずつ上総と南雲は会話をつなげていった。

「そういえばさっき、りっちゃん本条さんと話をしたっていったよね」

「会ったよ。例の教職員食堂で先生たちと一緒に食べたんだ」

洋楽雑誌を膝に載せてめぐりながら答えると、南雲は声を弾ませた。

「そっか。最近俺も本条さんとはご無沙汰してて、そろそろ飯でも食いにいきたいなあって思ってたんだ。今度、誘ってみようか。元気そうだったかなあ」

「相変わらずだった。今はコンピューターに夢中なんだって」

かいつまんで説明した。マイコンという小型のコンピューターにかじりついてゲームのプログラムをこしらえ、雑誌に投稿して現在ではちょっとした有名人だということ。

「そっか、やっぱ本条さんはあつという間にスターになっちゃうなあ」

「本当だよ。演劇部のことで落ち込んでそうだなって思ったら全然だもんな。やはり本条先輩は特別だなって」

「まあいろいろあるんでしょうが、ってことで」

だいぶ日も暮れてきた。本当だったらそろそろ帰らなくてはならない時間帯ではあるのだが。バイトが休みとはいえ、夕方の賄いもあるだろうしあまり長居してはいけなような気もしている。東堂との対話も最初は緊張したけれど、話してみればあっさりということで結構いい奴だということが分かったのは収穫だった。もっとも最初の目的だった「杉本梨南と桜田愛子の家庭教師ごっこ事件」についてはどう対応するか、まだ話が進んでいない。上総としては、東堂が状況を把握していてかつ駒方先生と連携を取っているらしいということが判明しただけでも十分だと思う。

「夕飯は何時頃に出るの」

「六時半頃かなあ。あ、りっちゃん時間大丈夫？」

「もうそろそろ、帰るよ。本当にありがとう、ごちそうさま」

南雲も無理に引き止めることはしなかった。まだすやすや寝入っている東堂の顔前に手をひらひらさせて、

「すっげえ眠り込んでるよ。まあいっか。ちょっとこのまま放置しておこっか。外まで送るよ」

上総も軽く東堂に頭を下げ、足音をしのばせて廊下に出た。隣の部屋でテレビの音楽が流れるのが聞こえた。誰かかしら、帰ってきているのだろう。蝉はまだ時折鳴き出している。

靴を履いて「楽実荘」の玄関を出た時、南雲がいきなり手を川辺に向けた。

「ちょっとだけ、付き合ってもらっていいかな、りっちゃん」

南雲の部屋から見下ろしたすぐ側に流れている、青潟では大きな川。水流は緩やかだが、よどんではない。きれいな水が青空を映し出している。誘われるがままに上総は南雲についてい

った。どうせ行く方向は一緒だ。のんびり歩いていく。

「東堂がいきなり変なこと言い出して、驚いたかもしれないけど、あいつ、悪気はないんだ。それだけはわかってやってほしいんだ。ごめん」

ひくり、とする。言葉がうまく出てこない。

「いや、気にしてないよ」

「わかってる。りっちゃんああいう風に言われるの苦手だよ。本当は前もってりっちゃんにあいつの考え伝えておけばよかったんだけど、どうしても東堂が自分で直接話をしたいって言い張ってさ。あいつにしちゃ珍しいんだよね」

「桜田さんのことを考えれば、そうなるよな」

噂に聞いた通り、桜田愛子への熱い想いは本物のようだ。結婚を親経由で申し込むとか想像を絶することをいろいろやらかしている東堂のこと、悪影響を及ぼしているであろう杉本梨南への警戒心が強くないわけがないのだ。

「まあ、その辺はすねに傷のある俺が言う資格ないんだけど、でもあいつ、ああのほほんとしやべっているように見えて、ほんっと真剣なんだ。彼女が例の仲間 とつるんでいわゆるおっさんを釣り上げようとたむろっていた時、俺、東堂に付き合わされて乗り込むの手伝わされたことがあるんだわ。まじ、あの時はおったまげたなあ。彼女をタクシーに押し込んでそれから家に連れ帰ったらしいんだ。彼氏っていうか、もう半分、親って感じ。兄貴なんてかわいいもんじゃないよね」

「そんなこと、してたのかよ」

水流が南雲の言葉をそっと底支えしているようだった。しっかり聞こえた。

「学校側でも東堂のこと有名で、最初のうちはいろいろ心配していたみたいなんだ。菱本先生も修学旅行の時わざわざ熱く語り合いに来たしね。でも、東堂はとことんまじめだし、ああいう奴だから、いつの間にか信頼されるようになったみたいなんだ。ほんとは俺たちとおんなじ、ただ惚れ抜いてるってだけなんだけど。まじめって得だよなあ」

はは、と声を出して笑う。横顔は少女漫画の王子様、嫌味のないさらしとした笑顔。

「問題は彼女自身が何にもその気がないってことで、全然進展してないんだよね。それでもいいんだって。東堂は。あいつはただ、あの子が無事卒業してくれて、後ろ指刺されない扱いをされるようになれば、それ以上何にも求めないって、そう言ってるんだ」

——本当に？

言葉に出しかけたものを飲み込んだ。

「俺も最初、本当かなって思ったよ。だってさ、あいつも言った通り、普通だったら避けたいよなあ。バージンじゃないのはともかくとして、知らない奴ととっかえひっかえやっちゃうんだよ。俺もこの辺は人のこと言えないから顔隠すしかないけど、それを脇においてもそういうことする女子とは付き合いたくないって思っちゃうもんなんだよなあ。だってさ、別の相手知ってるってことは、俺、比べられるんだよ？ 上手か下手か、ジャッジされちゃうんだよ。それ、怖いよ、正直」

「それ、分かるような気がする」

霧島が騒いでいた「佐賀はるみは未通なのか？」の疑惑を思い出す。

「手を出す気もないし、ただ守りたいだけなんだって。あいつ、一年前からそんなこと言ってたんだよ。けど俺にはその頃、なかなか共感できなかった部分もあったんだ。理由、聞かなくてもわかるよね」

上総は頷いた。ほんわりまん丸あんまん姫の行方を、川面に見たような気がした。すぐ流れ去った。かわらぬ水の流れですべてが運び去られるようだった。

「俺、今まであまり言わなかったけど、あいつは前からりっちゃんに興味あったんだと思うよ。あ、変な意味じゃなくて。派閥違ったし、あまり中学の時はりっちゃんとも話す機会なかったし、こうやって語る機会なかったけど、なんとなく話が合いそうなところ感じてたんじゃないかなあ」

「そうかな、全然そんな感じなかったけど」

「そうだろうなあ、りっちゃんは前からそうだよ。俺もりっちゃんと話をし出したのって二年に入ってからだよね。評議だとバランスよく付き合わなくちゃいけないところもあるのかなと思ってたけど、もうクラス別々だったらそんな気兼ねもいらぬよ。そんなこんなもあったし、まあももとの用事もあったしってことで、こういう場を設けさせていただいたってこと」

「そうなんだ」

短く、簡潔に答える。

「あいつとの長い付き合いで思うに、東堂はきっと、自分と似たような立場で気持ち分かり合える奴と話をしたかったんだと思うんだ。彼女がどうかこうとかいうんじゃないでね、なんてっか、こう、外野にいろいろ言われて馬鹿にされても動じることなく、たったひとりの人を守りたいって思える、そういう気持ちを分かり合える相手ってのにね」

「けどそれはお前が」

南雲に問いかけて見る。首を降った。南雲の髪がきらりと光る。

「そこんところがね、俺の場合すごく弱い。守ろうとして、ずっとこけた過去あり」

また軽く笑った。

「きっと東堂は、いわゆる札付き女子に惚れ抜いてしまった自分の因果にもう歯噛みしてるんだと思うよ。天使みたいな子だったらきっとらくちんだったろうなって、それこそ手と手をつないでおデートタイムとかそういう子だったらきっと楽だったろうなあって。でも現実はどうでもない。ちょっとしたことで、親呼び出しならぬ彼氏呼び出しされて、自分の妹を何とかしろと説教されちゃうんだもん。そういうの、経験ないから俺わからないしね」

上総をさらっと見やった。思わず顔を伏せてしまう。足元には露草が咲いている。青い、しっとり湿った花だ。

「りっちゃんだったら、きっとそんなあいつの気持ちを少しは汲んでやってもらえるんでないかなって気が、俺なりにしたんだよね。勝手に決め付けてたらごめん。けど、りっちゃんなんとなくそういうところあるんだよ。もしかしたらりっちゃん、他の奴らに嫌われてると思ってたかもしれないけど違うんだよ。ほんと、りっちゃん思ったよりも男子連中には評価されてるし、好かれてると思うんだ。ただ、きっかけがないだけなんだよ」

「そんなことないよ、俺はあまりそういう風に好かれるタイプじゃないし」

「ああそうそう、女子は別、女子関係はもうアウトオブ眼中でいきましょうってとこで。ただ、噂で聞いているかもしれないけど、いつだったか女子たちがりっちゃんのことをすげえ攻め立てた時、クラスの男子たちが全力で弁護軍団設立してがんばったことだってあったんだよ。ほんと、あれは見ものだったな」

「そんなことあったか？」

覚えがない。噂には、確かに、聞いた。

「あったんだ。事情あって詳しいこと言えないけどね」

言葉を濁す南雲に、上総はあえて追求することを控えた。何か、自分が触れてはいけないものを感じる。

「これから先、規律委員会でかなりの確率、りっちゃんと一緒になる可能性が高いと思うんだ。俺もほんとはすっごく楽しみだよ。すごいことできそうな気、してるし。でも、もしりっちゃんがかまわなければ東堂のこともちょこっとだけ、気にしてやってもらえないかな。性格的になんかなってところあるかもしれないけど、長年つきあってきた俺が思うにほんとあいつ、いい奴だから」

南雲はそこまで語った後、ふっと顔を上げた。

「あらまずい、あいつそろそろ起こしとかないと、地獄の授業に無理やり参加させなくちゃあならなくなっちゃうや。りっちゃんありがと。今日、来てくれてありがと。今度俺の方からりっちゃん家に行くから、その時はまたよろしく！」

夕日に髪をきらめかせながら、南雲は片手を振りながら背を向けた。上総の背中に聞こえる川の流れる音は、心なしかかたことと石のようなものにぶつかっているようにも聞こえてきた。背中をぐいと押すかのごとくだった。

その八 高校一年夏休み十四日目・立村上総の跳ね返される日々（1）

連日の講習は、時間数こそ普通の授業より短いものの、先生たちの力の入れようが半端ではなく、終わった後はかなりエネルギーを消耗する。それでも学食でだべったり街を歩いたりなんなりはそれなりにする。天気がよければ自転車でも結構いろいろ行けるわけだから。前の日も南雲の家でのんびんたらしと語り合ったりもしていた。この日も羽飛や美里、時々こずえもはさんで図書館で自由研究をネタにしたおしゃべりに興じたりもしていた。

「なあ、立村、なんでこんな風にいる空想広げられるんだ？ お前の頭」

上総のまとめてみた草稿をざっと見せると、ふたりとも興味深そうに読み入り、同時に首をかしげた。

「ほんと、そうだよ。立村くんの原稿ってなんってっか、うまく言えないんだけど」

美里も言葉を選びつつ、

「小説を書いてるって感じ、なんだよね。わかる？ この意味」

「そんなつもりないよ。小説なんて書いたことないし」

至極当たり前なことを答えると、

「そんなのわかってる。でも、なんか立村くんがまとめていることって、説明しているというよりもひとつの物語みたいに感じるの。うーんと、本当にこの人そういう人だったのかなって思っちゃうくらい、違う人に思えるの。貴史、あんたもなんか言ってよ」

ふたりの賛辞は決して褒め言葉ではない。なんとなくそれはわかる。

自由研究として取り扱う以上、もう少し論理的に話を進めなくてはならない。ふたりの原稿を読んだ限り、事実関係を簡潔にまとめ、具体的な事実の提示に徹している。分かりやすくあっさりしている印象を受けた。特に羽飛の内容は、実際生で語っているイメージとはまったく別の、きわめて冷静沈着な内容だった。熱いパッションを感じない。

「そうかあ、パッションか。立村に言われるとは思わなんだ」

上総の意見に羽飛は額をペしんと自分で叩いた。

「もっと作品論やるんだったら今しゃべっているような話書いてもいいと思うけどな」

「やっぱ俺もシャイだから」

間髪入れずに美里が張り手をかます。

「熱いと頭が滾るよね、わかったわかった。でも、言われてみるとそうよね。本当だったら貴史がもう少し書きたいこと一杯ずらっと並べてもいいのになって気はするな。ね、貴史、あんたこれがもし、鈴蘭優に関する論文だったらもっと情熱で溢れてるよね。なんかセーブしてるって感じ」

「うるせえなあ。少しは俺だってイメージチェンジしてえんだよ。華麗なる変身ってのか。まったく、美里もなんだ？ 年表みたいなのをさーっとまとめているのはいいけどなあ。立村ほどではないにしても、見方偏ってるような気がするぞ。なんでファッションへの影響とかそういう女子っぽい話ばっか持ち出すんだ？」

「いいじゃないの、まあいいよね。こずえ？」

カウンターを他の生徒に任せ、こずえが駆け寄ってくる。貴史の肩越しに三人それぞれの原稿を手に取りささっと目を通す。

「まあ、三人三様ってとこなんだろうね。あんたら三人が組んでやるんだからおんなじ内容やるとは思えないし。まだまだ夏休み十分時間あるし、好きなように練ってみなってとこじゃないの？ けど羽飛がねえ、そんなに芸術命だったとはねえ。あ、そうそう、さっき金沢が羽飛のこと一生懸命探してたけど、どうしたのよ」

いきなり話が金沢のことに飛ぶ。夏休み中金沢とはほとんど顔をあわせることがなかった。クラスがD組ということもある。相変わらずの天才画家ぶりを発揮していることは耳にしているがそれ以上の情報はない。

こずえがにやにやして羽飛相手に語る。

「それがさあ、あいつすっかり黒ぶちのめがねかけちゃって。エロ本でデッサン研究し過ぎたのかしらんとか思って突っ込んでみたら、なんか尊敬する画家さんがそういうのかけててかっこいいと思って、思いっきりガラス玉の伊達めがねなんだから笑っちゃうよ。スケッチブック抱えて走り回ってたけど、ねえ、羽飛、探さなくていいの？」

美里も何度も頷きながら羽飛の肩を叩く。

「貴史、そうだよ、あんた金沢くんと連絡とらなくちゃって言ったじゃない。まだその辺にいるのかなあ。探そうか？」

「いやいや、今日はいい。明日あいつ講習に来るだろ？ そんとき捕まえて見るわな。もう少し今日は、ここで煮詰めていくぞ。立村、今日は付き合えよ」

「わかった、大丈夫」

昨日、今日となかなかゆっくり話し合う間がなかったのだからしょうがない。本当は講習が終わったらすぐ中学校舎で狩野先生を捕まえるつもりでいたのだが。

カウンターで本の貸し出し業務に戻ったこずえを背に、しばらく三人で話を詰めた後終わったのは三時半過ぎだった。普段ならばまだまだ余裕の時間帯なのだが、

「ごめんね、今日いところたちが泊まりにくるのよ。だから早く帰ってうちの手伝いしなくちゃ」との美里都合により、早めの解散と相成った。

「夏はこういうことざらだもんな」

全力で駆け出していった美里を生徒玄関で見送った後、のんびりと自転車置き場へ歩いていった。砂利道が熱い。一時、気温が下がった時期もあったのだがあつという間に盛夏真っ只中に逆戻り。少し歩くだけで頭ががががする。自転車のサドルに腰掛けたくないくらいだった。

「お前は親戚んとこ、よく行くだろ？」

上総に問いかける羽飛の言葉ももつともだ。今まで遊ぶ約束を断る理由一位が「親戚の家に行くから」だった。実際嘘ではないのだが、今年に限ってはそれが無い。母の都合ですべてお流れになった。別にいとこなどいないし、会うとしても祖父母だけだからそれほどのものでもない。別の意味で面倒なことは多々あるがそれはそれだ。

「そうだね、一応行くこともあるけど、今年には行かないんだ」

「へー、旅行はなしなのかあ」

「いや、休み終わり近くに二泊三日で出かける予定はあるよ。親とだけど」

「宿題どうするんだよ」

「その前に片付けておかないとな。羽飛、数学と理科、頼んだ」

しばらく間延びした会話を交わしたまま自転車を押していった。なんとなくだらだらしたい気分だった。美里がいない分、無理にしゃきしゃきしなくてもいいのが楽だった。別に美里を差別しているわけではなく、単純に「女子」の有無の差だけだった。

学校から離れ、通学路から十字路、バス通りに出るとようやく街も賑わいを見せてくる。ゲームセンター、書店、文房具屋、喫茶店、洋品店、さまざまな店が立ち並ぶ通りへと出た。特に目立つものもない。

「立村、どっか久々に自転車漕ぐか。海でも見に行くか」

「それもいいね。夏の海、そういえば今年一度も見ないや」

自転車のサドルをなでた時だった。羽飛が眼を見開いたまま立ち止まった。

「あれ、おい」

「どうした？」

「あそこですっげえ勢いで走りまくっている奴、あれ、もしかしてな」

上総もつられて見やった。かなり遠くから走ってきていることだけはよくわかった。青大附高の制服を着ていることも見て取れる。近づくまで顔が判別できなかったのはひとえに、黒ぶちのめがねをかけている、どこぞの秀才くんみたいな面をしていたから、それだけだ。

「金沢か？」

「たぶん、そうらしい」

羽飛と上総は顔を見合わせたまま、ゆっくり自転車を押して近づいていった。幸い通行人を跳ね飛ばすことなく、青大附属の誇り・天才少年画家金沢は全力疾走でたどり着いた。

「はっば一、探してたんだけど今日学校にいたんだ」

「ああ、俺、探してたってさっき古川から聞いたけど、なんかあったのか？」

慣れっこの顔して羽飛は金沢に答える。中学三年修学旅行をきっかけに、このふたりはやたらと美術を通じて情熱たっぷりに語り合うようになっていた。金沢があこがれてい他と言う著名な日本画家との対面に羽飛が旅行中一役買った、というのが本当のところと聞く。入学当初から優れた画才を持つ金沢の名はD組以外でも知られていたが、芸術感性を共有する友だちはそれほどいなかったのだろう。小柄で目立たず、いつも水口と一緒に行動することの多い金沢が、修学旅行を境にしょっちゅう羽飛に張り付くようになったのは、上総だけにとどまらず他の奴らからも奇妙に思われていたようだ。

金沢は伊達めがねを取り、頬を緩めた。鼻の下を指でかいた。上総がいることによりようやく気づき、少しだけ表情を曇らせた。

「あ、ごめん、俺も今日用があるし」

「いいっていいって、そう逃げるなよ」

羽飛に自転車のハンドルを押さえられ仕方なく立ち止まる。通行人の邪魔にならないよう、小路に入る。スナックやら夜の街らしい匂いが漂うが、いかんせん真っ青な空のもとまだまだお眠りの時間だろう。

「んで、どうした？」

「羽飛、ちょっと今日、付き合ってくれるかな、実はさ」

上総をまたちらりとする。ためらうそぶりを見せる。だから先に帰ると言ったんだ。羽飛の手をハンドルからはがそうとするが、かえってがっちり押さえられてしまう。

「なんだ、今日は悪いけど立村と海見に行こうかって、青春ロードするつもりだったんだけどなあ」

「ごめん、でも、今日だけは頼む、俺に付き合っ！ もしあれなら立村もいてもいいから」

——俺もいていいからって、やはり帰ったほうがいいよ。

三度目の正直、上総は自転車を無理やり押し出そうとした。今度はがっちりサドルを押さえられる。そのまま羽飛は話を聞きだそうとする。

「そっか、立村いてもいいか。じゃあお前ここにいろよ。それでなんだ？ どこ付き合えばいいんだ？」

「うん、すぐそこ。あそこの喫茶なんだけどさ」

金沢は羽飛の自転車ハンドルをがっちり押さえた。もう上総の存在など目に入っていやしない。勢い増すばかり、ただただひたすらマシンガントークしまくるしまくる。

「昨日美術館内の図書室で聞いたんだ。今日の夕方四時過ぎから『ファビアン』っていう喫茶店で、俺のすっごく好きな画家さんが知り合い集めてお茶会するんだって。プライベートな集まりだから、何かするってわけじゃないんだけど。けど、こういう機会であれば顔見ることできないし、もしかしたら話すチャンスがあるかもしれないってことで、俺、今からそこ行こうと思うんだ」

「ああ？ おい、立村、『ファビアン』なんて知ってるか？」

上総は首を振った。あまり聞いたことのない喫茶店だ。学生が通うようなところではないのだろう。

「俺も初めて聞いたんだけど、交番に行って聞いたりして今やっと場所がわかったんだ。始まるまであと十分くらいしか時間ないから、早く行こうよ」

「おいちょい待った、お前、その画家さん知らないんだろ？ それも単に仲間としゃべくだけなんだろ？ すげえプライベートタイムなんだろ？ そんなの覗き込んでどうするんだよ。じゃますんなって怒られたらどうするんだよ」

もっともだ。羽飛もそこんところは冷静だ。どんな事情かはわからないけれど、仲のよい連中と気兼ねないおしゃべりを楽しんでいる時に、どこの馬の骨ともつかぬ高校生に「僕、あなたのファンです、サインください」なんてされようもんならかなり頭に来るんじゃないだろうか。金沢にはもともとそういうところでの「遠慮」という感性がないらしい。そういえば修学旅行の

時も、似たようなことをやらかした前科あり。仲間はやっぱり羽飛だったと聞いている。目の輝きっぷり、しゃべりの速さ、すべてが教室にいる時とは大違い。きっと羽飛も手に負えないと頭抱えているんじゃないだろうか。上総としては知ったことじゃない。勝手にやってると言いたい。

「俺だってそんな非常識じゃないよ。もちろんチャンスがないなら黙って知らん振りするよ。けど、この人の絵、本当にささいなことを描いているように見えてじっくりみると、なんてっかこの、涙出てきそうになるんだよ。羽飛にもあとで見せるけど、ほんっとにすごいんだ。なんで今の時期に青瀧なんか来てるのかわかんないけど、たまたま昨日誰かが話しているの聞いて、もう、押さえられないんだ。けど、ひとりで行ったら怪しまれるし、羽飛とふたりなら、まあたまたまってことで」

ここまで言いかけ、ちらと上総の方を見た。

「あの、やはり俺帰るよ、羽飛、お先に」

言いかけると金沢がやっと首を振った。

「一緒に座ってる奴が多ければ多いほど、カモフラージュになるから、立村もいていいよ」

——ああわかったよ、どうせ俺は「いていいよ」なんだよな。

羽飛の「絶対帰るなよ」視線に射すくめられ、上総は静々と二人の後を自転車で付き従っていた。

金沢のメモ書きを頼りになんとかたどり着いた。

「こういう殴り書きですら芸術的なお前の筆はなんなんだ」

「けど、わかるだろ？ ここだよ、ここ」

交番で確認しながら描いたという金沢手製の地図は、実に分かりやすい。たぶんそれがなければ永遠に迷子だったんじゃないだろうか。何度道を曲がったのか上総は覚えていない。渦巻きのような道をなんとかたどってたどり着いた「ファビアン」は見た目真っ黒い箱のような建物だった。どうみても喫茶店には見えない。

「本当にここなのかよ」

「って、描いてるけど。あ、そうだよここだよ。ちゃんここに店の名前貼ってある」

よく見ると入り口の郵便受けに「喫茶・ファビアン」と横向き表札がかかっている。

「店でいいんだよな？ ここ」

「入らねばわからねえだろ。さあ行くぞ金沢」

迷う金沢の尻をたたきつつ、貴史ががっしりした黒い扉を押した。何も聞こえなかったはずなのに隙間ができたたん、サクスの音色が流れてきた。よくわからないがたぶんジャズだろう。聞いたことがない曲だった。上総が最後に入りすぐ後ろ手で閉めた。薄暗い店内には、数多くの男性がそれぞれひとり、ふたりとそれぞれの席を占めている。入ってみると思ったよりも広い。BGMも最初は驚いたけど、耳に慣れてくればそれほどうるさくもない。

「さあお前どこに座るんだ」

「奥だよ。だってあそこに、グループ席があるし。あそこできつと集まるんだよ。予約席って書いてるし」

すばやく金沢は店奥のグループ席を斜に眺めやれる四人ボックス席を押しえた。なんだろうこのはっこさは。普段教室でこのくらいちょこまか動けたらもっと高い評価得られただろうに。絵のこととなると常識を逸してしまうというのが金沢の妙なところでもある。

「羽飛、こっちこっち」

はしゃぐ金沢に苦笑しつつ、羽飛が金沢の隣に腰掛けた。上総にも、

「おい、お前はこっちだったの」

真っ黒いテーブルを叩いて招く。声が大きすぎるんじゃないだろうか。ちらと周囲を眺めて上総は首を振った。口に軽く拳を作って当てた。指を立てて「しー」とやるのは女子っぽすぎて抵抗があるけれど、羽飛にせよ金沢にせよ、少しこの場の空気の特異さを感じ取ってほしいとは伝えたい。

——それにしても、ここ、大人しかないな。

一歩入った瞬間に感じた場違いな気分。上総も親に連れられて通常友だちとは来ないような場所に足を踏み入れたことは一応ある。「おちうど」は別としても、それなりに緊張しなくてはならないような座敷とか、会席とか、いろいろだが。だがその時はたいてい大人がいたし、黙って座っていればそれだけでたいていことがすんだ。しかし今は、なんといっても羽飛と金沢と一

緒だ。この二人を観る限り、かしまりたい気持ちも全然感じられない。憧れの大先生に遭遇できることを心待ちにし舞い上がっている金沢はともかくとして、付き合いでくっついてきてのほほんとしている羽飛はまったくもって振る舞いなど気にしてはいない様子だった。

——なんだか思い切り目立ってるよな、俺たち。

様子を伺う。足を踏み入れた時、たまたま上総は店の主人らしき初老の男性と目が合った。何がというわけではないが、とがめるような眼差しに身体を丸めたくなった。お義理の「いらっしやい」は聞こえたけれど、制服姿の男子高校生はおよびではない場所だということだけはよく理解した。

無言でその男性がメニューを持ってきた。ちらと見ると喫茶タイムは六時まで、それ以降はパブタイムでアルコールが出る。未成年者は六時以降入店禁止としっかり釘がさしてある。

「あと二時間あれば大丈夫だよ、なあ、羽飛」

「まあな、おい立村、ずいぶん落ちつかねえけどどうした？ 腹痛いのか」

「そんなんじゃないよ」

飲み物を選ばねばならない。喫茶タイムとはいえそれなりにする。とりあえずは無難なところでブレンドコーヒーでどうだろう。貴史と金沢は何も考えずにコーラを選んだようだ。これっぽっちでずいぶん高いと文句言いながら。

——場所代だよ、しょうがない。

言葉を飲み込み、上総は肩越しに金沢の狙うグループ席を見やった。小さく「予約席」と札がかかっているがまだ誰も来ていない。薄暗い店内で、十人ほど座れそうだ。店内全体が黒を基調に組み立てられているが、その席だけは橙色のランプが用意されていた。今気づいた、この店には窓がない。

「ほら、この画集知ってるか？ これ、新聞の連載小説挿絵をまとめたものなんだけど、さらさらっと描いているようでじっくり見ると表情がすごく細やかなんだ」

金沢は小ぶりのリュックから本を一冊取り出した。文庫タイプの大きさだった。まず羽飛がじっくり目を通し、

「なんてっか、こう、寝てても描けそうな絵だなあ」

顰蹙買いそうな言葉を口走る。もちろん周囲には丸聞こえ。金沢がテーブルを叩いて抗議する。

「なんだよ、羽飛、そりゃあお前は現代美術好きだからこういうの嫌いなもの知ってるけど、寝ながらなんて失礼だよ。俺、思うんだけど、こういうスケッチ風の絵ってすごく難しいんだよ。色を塗ってごまかすわけいかなしいね」

「そんなもんか。よっくわからねえなあ」

滔々と述べ立てる金沢の言葉などほとんど聞いてはいなかった。なにせ上総には別の視線がびしばしと飛んでくるのが痛いほど分かるのだ。二人がはしゃぎまくっている中、心ある大人たちの冷たい眼差しと、ひそひそ話。目をそれぞれの席にやるとつい顔が合う。気まずさいっぱい顔で顔を伏せるしかない。

新たな客人が現れる気配あり。戸口から陽の光が差し、すぐに消えた。トランペットの曲が変わったようだった。十人ほどの男性ばかりが小声で語り合いながら上総たちのいる席の脇を通っていき、予約席にそれぞれ陣取り始めた。店の主人がすぐにメニューを二枚用意し、穏やかに挨拶をしていった。かすかに聞こえる口調は、上総たちに向けてのものとはまったく異なり、ほのかな歓迎ムードが漂っていた。

「あ、あの人なんだ、うわあ」

さすがに金沢も自分の置かれている立場を自覚したのか、少し伸び上がって様子を伺うに留めた。羽飛の腕を掴んで、何かを早口にささやいている。斜向かいにいる上総には聞こえなかった。

「どいつだよ」

「ほら、いっちゃん奥に座っている、白い髪の人だよ。思ったより、歳、とってるんだ」

「そりゃあそうだろう。お前の本見たら、俺たちが生まれるはるか昔の新聞小説だろう、あのイラストは」

「でももっと、もっと若いんだと思ってたよ。最近の絵を見てたらそんなにおじいちゃんとは思わないよ」

何度も腰を上げる金沢を無理に落ち着かせようとする羽飛、どうみても無駄な仕事をしている。

「おいおい落ちつけよ。何度も言うがなあ、人のプライベートタイムに割り込もうなんてアホなことと思うなよ。帰り際こっそりサインをとかならわかるけどよ」

「サイン？ そんなのいらないよ」

金沢がきつと羽飛を見据えて言い放った。

「俺の絵を見てもらえるんだったら、何もいらない」

黒ぶち伊達めがねをかけたまま、きりりと唇を結んだ。膝にはすでに、スケッチブックの準備が整っている。きつと修学旅行の時も同じようなことが起きたのだろう。断言する。上総がその場にいたら絶対に止めた。羽飛だったから走らせた。でも、今はもうどうだっていい。勝手に突っ走ればいい。

「金沢、席、代わろうか」

声をかけてみたが、すでに金沢のめがねには上総の存在は欠けてしまったようだ。返事すらしない。ひたすら羽飛相手に小声でささやき続けるだけだ。羽飛からすれば鈴蘭優のようなアイドルを追っかけているのと、金沢が初老の画家氏を見つめるのと同じようなものに思えるのかもしれない。共通点はきつとあるのだろう。

上総は淡い橙色の闇の中、コーヒーを啜った。今までになく、苦味が口の中に広がる。他の客たちを観察してみることにした。それぞれランタンの光に包まれる格好でひとり、もしくはふたりの時を過ごしているようだった。斜め前の席にはふたり組の男性が手帳を片手になにやら談笑しているのがかすかに聞こえてくる。年恰好はだぶん、三十代後半くらい、横顔がなんとなく父

に似ているような気がした。本当にかすかにだが。

——え？

ちょうど斜め前。その男性が上総をちらと見てぎょっとした顔を見せた。

——父さん？

完全に目と目が合った。上総を認めた。険しい表情でこちらを見据えた。すぐに向かい合う相手と会話を続けた。知らん振りを決め込むつもりらしかった。それにしても露骨におどろかなくてもいいじゃないか、そう言いたい気持ちを上総はもう一口コーヒーを喉に流すことで押さえた。

普通だったら仕事中的はずだ。通常なら会社の中にいるはずだ。何もこんなジャズがががながん流れている喫茶店で油を売るなんてそんな悠長なことできるわけがないはずだ。なのになんなのだろう。遠目から見る父は、学校の先生たちと比較してもはっきりしすぎているほど若かった。毎日顔をつき合わせコーンフレークを流し込んでいる父とは別人に見えた。

意識しすぎて向こうの会話まで聞こえてくる。

——面白い視点だとは思いますが、今の時代にこのテーマは危険なんじゃないですか。

相手の男性が父に意見らしきものを伝えている。父が答える。

——危険かもしれませんが、ただ、ジャーナリストとして僕の立ち位置を見つめると、どうしてもいつかは書かねばならないテーマだとは思うんです。ライフワークとして、個人的にですね。

——なんで父さんこんなところにいるんだよ？

あつという間にコーヒーを飲み干してしまった。その間にも金沢のエキサイトぶりは止まらずそちらもまた、目に痛かった。

「ほら、ほら、なんか出した。あれ、なんだろ」

「大きさから言って、紙だな。絵だろかな」

「絵？」

またすっとんきょうな声を出しそうになり、必死に自分で制している。

「ってことは、生のスケッチだよな？ だろ、だろ？ 羽飛？」

「その可能性もあるかもしれねえけど、ほら金沢、もう少し落ち着けよ」

頭をぽんぽん叩いてやりながら、羽飛も上総を見やる。

「どうしたの立村、まじ、眠いのかよ」

「違う、なんでもない」

斜め向かいに父が上総をちらちら見ながらなんらかの話を進めているなんてこと、言えるわけがない。それなりに話の内容も聞こえてくるにはくる。ただし父の声は比較的抑え目であり、相手の男性……たぶん父よりも若干年上だろう……が遠慮なくしゃべるタイプらしい。話の内容はなんとなく聞き取れる。父が小さい声でかつ上総の存在に気づいていて、さらに無視をこいているということは明らかに、内緒ごとの匂いがぷんぷんする。

——俺も逆の立場だったらたまったもんじゃないと思うかもしれないけどさ。

理解はしているつもりだ。もしかしたらいわゆる取材なのかもしれない。家で父は仕事の内容について細かく語ることがなく、当たり障りのない情報しか持ってこない。南雲の親のように自分の息子に対して語りつくす家庭とはまったく違う。ただなんとなく、「週刊アントワネット」の最新号が置いてあったり、直接匿名記事のまとまった本をもらったりとかそういうことはある。最もほとんど目を通すことはない。当然父がどういう記事を書いているか想像することすらできない。

——ルポルタージュとか言ってるのとこみると、やっぱり一目を避けたところで取材しているのかもしれないな。たとえば匿名を前提に秘密情報をもらおうとか。その真っ最中に自分の息子が現れたとなったら、無視するしかないよな。

とりあえずは都合よく解釈しておくことにした。上総なりに父を思い遣っているつもりでもある。もちろん家に帰ったら何を言われるかわからないが、少なくとも何か悪いことをしたわけではない。酒やタバコが目の前に並んでいるわけでもない。まあ、高校生が喫茶店に入ること自体がまずいという判断であれば叱られても仕方ないかもしれないが、今回は友だちに無理やり引きずり込まれたようなものだ。事実だししょうがない。

——立村さんしか書けない内部事情とかもいろいろあるでしょうしね。もちろんこれから先、あなたが背負うものが大きいことを考えると、私としてはあまりお勧めできないテーマではある

んですよ。なんと申しますか、波紋というものは確実に広がりますね。

——波紋ですか。確かに、それは覚悟してます。

——あなたが身軽なお立場なら私も応援したいところがあります。ですがね、あなたにはほら、息子さんがいらっしやるでしょう。お連れ合いさんもね。そのことを考えると少し難しい部分があるのも事実なんですよ。

どでかい声ではないが、上総の耳には届く程度の言葉だった。斜向かいに座る父はこちらを見はしない。ただ小声で返事をしている。かなり低めている様子だが、残念ながらはっきり聞こえてしまう。もし上総が金沢や羽飛と熱くしゃべりあっているだけならば無視できる内容でもあるのだが、いかんせんこのふたりはグループ席でにこやかに談笑している画家集団に釘付けだ。しかも本来なら止める立場に立つはずの羽飛すら、金沢に感化されて突撃準備を整えている様子だ。

「なあお前、本気で行くつもりなのかよ」

「行くよ。だって雰囲気よさそうだよ。こんな機会がなければ話なんてできないんだ。それに、青潟で暮らしている以上こういうチャンスをしっかり掴んでいかないと、上に進めないんだ」

またきりっとした目つきで金沢が言い放つ。まったく持って、学校ではとことん仮面をかぶっていることが証明されているような口調だった。

「羽飛、この前も話したろ？ 俺はこのまま青潟の中で埋もれるのって絶対いやなんだ。そりゃ、みんな、俺の絵好きだとか、すごいとか褒めてくれるのはうれしいよ。俺としゃべったことなくても、絵を見せたらうちの学校の人たちはみんな思い出してくれる。名刺代わりにもなるしさ。けど、それは青潟の中、だけなんだ。何度も言うけど学校と、せいぜい青潟の中だけなんだ。俺の絵を見てくれるのは、それっぽっちなんだ。日本の人口のほんのわずかなんだ」

「そりゃなあ、青潟は地方都市だし、お前の絵がどんなにすごかろうが、すべての奴らに見てもらふことは不可能だろ？ なにあせってるんだよ。それに金沢、お前、大学の授業も特別に出させてもらってるし、美術館のイベントとかで顔も売ってるだろ？」

「あくまでもそれって、青潟だけなんだよ！ 青潟の中でそれも、美術が好きの人だけだよ。俺もここではすっごく絶賛されたりいろいろ言われたりするけど、一歩外に出たら俺程度に描ける奴なんてごろごろしてるんだ。うちの学校だってそうだよ。たまたま俺が小学校の頃から賞とってたからそれなりに見てもらっていたけど、実際駒方先生は俺の絵よりもあの、英語科のあいつの方を高く買ってるんだ。俺も、ああいう色使いできないし、才能あると思うし、ねたむつもりなんてない」

「ああ、片岡のことか。あいつこういっちゃあなんだが噂の下着ドロだろ」

さらっと言い放つ羽飛をぴしっと遮る金沢。

「そういうんじゃないって！ 俺はとにかくこのままじゃまずいってことなんだ。今その、片岡って奴の絵のことねたんでないって言ったけど、うらやましいことは確かだよ。だって俺ああいう描き方知らなかったもん。知らないってことは、存在することすらわからないってことだよ。わかるだろ、なあ立村？」

突然振られても困るが、頷く。共通点はその片岡が英語科の同級生というところだけ。絵がう

まいかどうかは正直、鑑識眼のない自分には分からない。

「羽飛、そこだよ、俺言いたいことって。俺はまだ青潟でちやほやされてるだけで、知らないことが多すぎるんだ。本読んだり、テレビ見たり、図書館で絵を見たりいろいろしてるし勉強してるつもりだよ。けど、限界があるんだ。どんなに努力しても、平面で得られる情報には限界あるんだ。俺は知らないことをもっと知りたい。それを得る方法のひとつってのが、俺にとっては、いろんな人に会うことなんだ」

——いろんな人に会うこと？

アンテナにひっかかる言葉がぴっと刺さる。上総の表情を見て取ったのか、今度は方向を変えて金沢のマシガントークは続く。

「けど、俺はまだ高校生だから金もないし学校さぼるわけにも行かない。だったら合法的手段でチャンスがあれば、絶対逃すわけいかない。昨日もそんなこんなで美術館の図書館にこもってたら、隣の席でいろいろと話をしている人がいてさ。偶然青潟にその人が来て、友だち同士でお茶会しようってことになっているとかすっごい具体的な話をしてたんだ。それってすっごい偶然だよ。高校から目と鼻の先だよ。しかも今夏休みだよ。こんなチャンスをどうして逃せるってか？」

「確かにそうかも」

言いかけた上総を遮って再び羽飛に噛み付いた。

「そうだろ、立村も賛成してくれたよ。な、じゃあ一緒にこっち来いよ」

「何で俺が？」

目を白黒させている羽飛を無理やり通路に押し出し、騒々しさに不愉快そうな顔でもってこちらを見ている他の客たち……父たち含む……をよそに、金沢と羽飛はグループ席へと突進していった。救いだったのはそのグループ席の人々が最初からふたりの異様な振る舞いに気がついていたらしいことだった。いきなり当の画家氏が立ち上がり、同時に取り巻きの紳士諸氏も拍手をして金沢たちを迎え入れている。興奮しすぎて忘れたスケッチブックが金沢の席に置きっぱなしだった。上総はそれを手に取り、脇ではらはらしながら見守る羽飛に手渡し、座り直そうとした。と、同時に通路から誰かが近づいてきた。

「……父さん？」

「早く帰りなさい」

短く、きっぱり、上総に告げた。いつもとは違う厳しい表情をした父に射すくめられた。

「ここは、お前たち子どもが来る場所じゃない。あとで支払いは済ませておくから、帰りなさい」

それだけささやき、また父は席に戻っていった。同じ表情を見せたのは、狩野先生に連れ戻されて青潟駅に降り立った時以来だった。

上総は立ち上がった。あっという間に金沢が迎え入れられ、その画家氏の隣に入れてもらい熱く語り始める様子を確認した。羽飛も招かれていてそこにもぐりこもうとしているのを押さえてささやいた。

「悪いけど、俺用事があるんだ。また明日」

「あ、ああ」

さすがに止めることもなかった。羽飛のかばんとコーラの入ったグラスを二人分手渡しした後、上総はそのまま出口に向かった。支払いは父がすることに話がついていたようで、冷やかな「ありがとうございました」の声のみが背中に響いた。一步外に出て、まだ明るい日差しの中、上総は軽く立ちくらみを覚えた。熱くなった自転車のハンドルを握り締め、全力でペダルを漕いだ。一刻も早く、品山の我が家に向かいスピードを上げた。

しつこいようだが、上総は何も悪いことをしていない。言い訳はできる。父が帰ってきてから何問われても、後ろめたいことなんて何一つない。歯を食いしばり、喉からこみ上げるものを押し込んで前を見た。

自分の分だけチャーハンを作って夕飯を済ませ、風呂もさっさと入って、部屋に籠った。電話は鳴らず、網戸をあけたままベッドに横たわった。明日が夏休み最後の講習日だしさっさと寝るが勝ちだ。FM放送のエアチェック時間を確認し、テープをセットした。一時間分丸ごとノンストップなので、一旦録音を始めてしまえばあとは放置しておけばいい。本を読みながらごろごろしていた。

——絶対に今回に限っては、俺はちっとも悪くないからな。

父が帰ってきて妙なことを言い出すようだったらその点をはっきりさせるつもりだった。何が「子どもの来るところではない」だ。そんなこと入り口には一言も書いてないだろうに。そりゃあ、六時以降パブタイムというのは知っていたからその前に引き上げるつもりでいた。頼んだものだってせいぜいコーヒーかコーラくらい。別に未成年だからといって禁じられたことをしたわけじゃない。

——なんで俺があんなこと言われなくちゃなんないんだよ。気まずいのはわかるよ。仕事中に家族と会ったら面倒くさいというのは俺もいやってほど身に染みてるから。けどまったく関係ないところで、あんな冷たい顔でさっさと帰れなんて命令されるなんて、絶対妙だよ。俺の方が迷惑だよ。友だちと一緒に来ていたのに、ひとりだけさっさと帰らなくちゃいけなかったんで義理だって欠かしてしまったようなものだし。人前だから何にも言わないでおいたけど、冗談じゃない、こっちだって納得いかないことには反発する権利あるよな。いくらなんでも親だって。

麦茶が切れたのでお湯を沸かし、専用のポットに氷を詰込み一気に注ぎ込んだ。まだまだぬるいが、冷やしながらか飲まなくてもいいくらいの温度には下がっていた。外で聞きなれたエンジンの音が聞こえる。急いで麦茶の入ったポットごと部屋に持っていくことにする。今夜は少し熱帯夜っぽさが復活しそうな湿気あり。水分補給には余念がない。部屋の戸を閉じると同時に玄関が開く気配がした。

——十時か。

早くもなく遅くもなく、いつも通り。仕事のある平日のパターン。いつもなら上総も電話の前でだらだらしたり、飲み物飲んだりしていることもあるのだが今日はあえて部屋に籠った。挨拶なんてしたくもない。

特に呼びかけられることもない。向こうだって気まずいだろう。息子に仕事邪魔されたとでも思っているんじゃないだろうか。冗談じゃない、余計な話なんてしたくもないわけだ。しばらくヘッドホンをつけて、録音中のFMラジオで流れる洋楽に耳を傾けた。上総好みではないけれど、南雲に前の日進められたミュージシャンの新曲だった。

ノックなしに部屋の戸が開いた。飛び起きた。

「ノックくらいしろよな」

「いや、したんだが気づいてなかったみたいなんで失礼。悪いんだがそのポット、もらっていいか？ 喉がからからなんだ」

しまったしくじった。父が上総の部屋に押し入ってくる正当な理由を認めざるを得ない。枕元のサイドテーブルに置いたままにしてある麦茶ポットは、今一本しかなかった。父もほしがるのは当然のこと。もう少したくさん量こしらえておけばよかったと悔いるも後の祭りだ。

「持ってけば」

「ああ、カップも持ってきたんでここで一杯飲むよ」

——正気かよこの人。

どうでもいいがやはり上総にとって父も母も普通の感覚ではない。さっさと麦茶ポット持って居間でも書斎でもどこでも行って、ごくごく飲み干せばいいのにと。父は上総の勉強机から椅子を引き出し、悠々と座った。かすかにアルコールの匂いがする、ということはどこかで一杯引っ掛けてきたのだろう。酔っ払いは好きじゃない。もっとも見た感じ酔いはすっかりさめているようだ。

上総は背を向けてもう一度ベッドにもぐりこんだ。

「明日、学校早いから先に寝る」

「まだ十時過ぎだろ。いつも夜更かししてるくせにどういう風の吹き回しだ？」

からかうように上総の側に、椅子ごと近づいてくる。枕元で顔を覗き込んだ。のんびりした口調で上総の肩を毛布の上から叩き、

「ほら、起きろ、そうすねるな」

いつもの穏やかな父の表情で促した。

仕方なく起き上がる。親に対する礼儀として割り切る。父と顔を合わせ、すぐ目を逸らす。何言われるかわからない。自分はちっとも悪くない、これだけは譲らない。

「しかし、なんであんなところに来たんだ？ 高校生が来るような場所じゃないだろうに」

笑いを含ませたような口調で父は問いかけた。顔を見ていないのでどういう表情かは分からない。何にも悪くないのになぜ自分がいじいじしてはならないのかわからない。

「別に、学生入店禁止とか書いてなかったけど。昼間だからパブタイムにもかからないと思う。頼んだのはコーヒーだし。友だちも一緒だし」

「いやそういう意味じゃない。お父さんが聞きたいのは、なんでああいふ『ファビアン』のようなところをわざわざ選んだのかが不思議なだけなんだ」

「たいしたことじゃない。友だちが用事あったってだけ」

短く、冷ややかに答えたつもりでいるが、父の口調はまったく変わらない。なんだったのだろうあの場での冷たい言い方は。普段どおりに話をしてくれれば、こちらだって何か事情があるのだろうと判断して気持ちよく出て行っただろうに、理由もなくわけのわからないこと言われたら、頭に來ない方がおかしい。

「そうか、二人いたな。学校の友だち、か？」

「あたりまえだろ」

横を向いた。用があるならさっさと言いたいこと言って出て行ってほしい。

「ふたり、お前を置いて後ろの集団と混じっていたが、それが理由か？」

「俺とは関係ないよ。ひとりがどうしてもあのグループの中の人とお近づきになりたいって言い張ったから付き合いについてきただけだって。父さんだってわかってるだろ。俺がひとりでこんな複雑な道を通ってたどり着けるわけないって！」

目は伏せたまま小声で吐き出してやる。父は何も言わない。

「なんだよ、なんで俺だけこんな責められなくちゃいけないんだよ。別に校則違反したわけでもないのに、なんであんな言い方されなくちゃなんないんだよ。知らない振りしてほしいから最初からそのつもりでいたけど、あんなこと」

「上総、よく聞きなさい」

父が遮った。肩に手を置き、何度か軽く叩いた。

「言い方が悪かったのなら謝るよ。ただ、お父さんが言いたかったのはそういう意味じゃないんだ。今から説明するから、一通り聞いてもらえないかな。その上で納得いかないなら改めて答えるから、いいか？」

横目で見やると、静かに微笑みを浮かべる父がいた。自分と全体的にそっくりな姿だけに、もし羽飛あたりが気づいていたら親子だと見抜いていたかもしれない。

「まず、あの場所、つまり『ファビアン』はお前の言う通り年齢制限のかかった喫茶ではない。それは正しいよ。ただ足を踏み入れた時そこにいた客層を見て、上総、お前はどう感じた？」

普通に話してくれるのなら、上総も自然に答えるしかない。

「学生向きの店じゃない、なとは思った」

「そうか、やはりそこは理解してたんだな」

こくこく頷きながら、上総の顔をじっと見つめつつ語り続ける父。

「なんとなく歓迎されていないといムードは、感じただろ」

「うん」

心を見透かされているような気がして面白くないけど、事実には答えるしかない。

「次に、あの席でお前の友だちふたりが大変盛り上がっていたようだが、もしかまわなければもう少し詳しく聞かせてもらえないか。お父さんの記憶が間違っていなければあの席にいらした方々は、明日市民会館で講演会予定の絵の先生じゃないかと思うんだが、どうかな」

やわらかく、さりげなく、食い込んでくる。

「そんなの知らないけど友だちは絵に詳しいから、たぶんそうだと思う」

「その友だちは、中学の時一緒だった金沢くんだろうか？ 彼の名前は知られているよ」

「そこまで知っているんだったらなんでしつこく確認するんだよ」

いらだってくる。我がままだと承知している。でもわざとらしく確認して、何かを悟らせようとする態度に腹が立つ。父は動じなかった。

「だいたいそんなとこだと思ったが、なるほどな。わかった」

ひとりごちた後、父は自分のグラスに麦茶を注ぎなおし、一杯飲み干した。

「金沢くんが先生と接触したいと思い立ち、お前を連れてあの店に入ったということなんだな。普通の学生街の喫茶店気分が入ってきたら勝手に違って戸惑うも、金沢くんは無事お前らの

協力のおかげで先生とお近づきになれた、ということだな」

「最後まで確認してないけど」

嫌味を混ぜてやる。たぶん金沢の舞い上がり方を見れば父の言葉通りの結末となっただろう。上総の推測では、おそらく金沢の騒ぎぶりが奥のグループ諸氏にも伝わり、行動を行った段階で迎え入れてもらえる準備ができていた可能性が高いと見た。

「結果としてはハッピーエンドだしそれはそれでいいんだ。ただな、上総」

ひと呼吸おいて、父は首をゆっくり振った。録音終了の合図でテープがかちりと止まった。

「あの人は快く迎え入れてくれた、ありがたいことだ。ただ、あの場所をなぜかの先生たちが選択したのかを考えてみようか。お前も分かっている通り、道は分かりにくいし普通学生たちが立ち寄る場所でないのも確かだ。お父さんがあの場所にいたのは、仕事がらみの打ち合わせだが、なぜあの場所を選んだかといえば」

言葉を選びながら続けた。

「ある程度分別のついた大人しか集まらない場所だからなんだ。そういう場所は、お前も大人になればいろいろ覚えてくると思うが、必ずしも未成年者出入り禁止を謳っているわけではない。お前の主張通りアルコールも出でこない。ただ、あの場には目に見えないルールのようなものがある。なんとなくそれはわかるな？」

分かっている。頷くしかない。

「『おちうど』もそれに近いが、まあそこはお母さんの顔で利用させてもらっているからまた別だ。『ファビアン』に集まる人たちは、まず、子どもたちのたむろう店はできるだけ避ける。空気が合わないからな。出来る限り言葉の少ない大人しか集まらない場所を探す。喫茶店といってもいろいろあるから当然なんだがな。コーヒーも一杯五百円とは普通高いと思うかもしれないが、その金額を払っても平気と思える人たちにのみ集まってもらえればいいと店側も考えている。あの場でお前たち高校生が三人足を踏み入れるということは、もちろん迷惑をかけるつもりはなかったにせよ、それを願っているお店側、およびお客さんたちのゆるやかな時間を邪魔したことに、実はなるんだ」

「わかってたら行かないよ、けどしょうがないだろ、友だちが行きたがったんだから。俺だってそんなとこだって知らないから」

「そのことは承知の上だ。まあ今回は、お前も災難だったな。将来二十歳過ぎてお前もあの場所の空気がつかめるようになれば、また居心地よくなることもあるんじゃないかとは思う。だが、大人の世界は必ずしも未成年お断りの札を下げているわけではないということも、覚えてもらいたいんだ。その意味は上総、わかるな？」

——理不尽だ、絶対理不尽だ！

心で叫ぶも、父の静かな言葉には逆らえない。ここが母相手にする時とは違うところだった。

しばらく黙ってそっぽ向いたままでいた。父の説明に頷けないわけではなく、むしろ正しいとすら思える。それでも素直に「うん、わかったよ」と言えないところがどうしてもある。

「父さん、ひとつ聞いていい？」

「どうした」

「あそこで、仕事の話、してたってことだけど、俺や母さんに何か影響あること書くつもりなの」

あてずっぽだった。このまま何も言わずに話を終わらせたくないだけだ。

「話を聞いてたのか」

「聞こえるよ。あんな側だったら誰だって」

わざと冷たく答えてやる。実際は話もほぼ切れ切れだったし、具体的な内容などはまったく見当つかない。ただ、「息子さんが、お連れ合いが」の単語が出てくるということは、いやおうなしに自分へとつながってくるのではないかとも思う。

「そうか、やはりな」

「別に俺がとやかく言うことじゃないけど、波紋が広がるようなこと、するつもりあるのかなとか思っただけ」

一方的に諭されるだけで終わるのはいやだった。せめて一発返り討ちくらいしたいもの。

「ジャーナリストがどうか、言ってたし、父さん記者だからそういう覚悟する仕事をしてるんだろうなとか、ちらっと思った、それだけなんだけどさ」

うまく言葉が出てこない。父が記者という仕事をしている以上、それなりのリスクもいろいろ抱えているのだろう。具体的な内容は分からないにしても、裏から押さえ込まれるような危険な情報なども聞き知っているのだろう。それを扱うのがジャーナリストの立場として避けられないことなのか、それが果たして自分や母にどう影響してくるのか、わからないから聞きたいだけだ。知っていればそれ以上追うつもりもない。

父のため息が聞こえた。また一杯、麦茶をグラスに汲む音が聞こえた。

「そうだな、いい機会だから上総にも話しておこうか」

また肩を叩き、

「まあ、横になれ。そんな堅苦しい話じゃない」

横たわるよう促した。真上から見下ろすようにし、特に変わらぬ穏やかさで続けた。

「詳しいことはプライバシーの問題もあるし、虫食いの形で話すしかないんだがな」

両膝に手を置き、ゆっくりと語り続けた。

「少し前からお父さんは個人的に深掘りしたいテーマを持っていて、仕事の合間に研究を続けていたんだ。誤解するなよ。一応は仕事の一環だし、別に今日はさぼっていたわけじゃない。情報収集をしていただけなんだが、お前からしたら遊んでいたように見えるかもしれないな」

「別に、そう思っていないよ」

寝たまま、ぼんやりと見上げて答えた。

「そのテーマがまとまるのにはもう少し時間がかかるだろうし、もしかしたら一生日の目を見ないまま終わるかもしれない。個人研究としてノートにまとめて、お父さんが死ぬ時には棺おけに入れてもらうようになるかもしれない。それも、ひとつの人生だな」

父が自分の死に触れたのは初めてだった。

「どういうテーマかも、今は誰にも言えない。お前がどこまで話を聞いていたかはわからないがあの場で話していた内容だけだと特に詳しく触れていなかったはずだしさほど心配していない。ただ、これから先、お父さんの研究が進むにつれてどういう展開が待ち受けているか、読みきれないところもあるんだ」

「父さんの研究、ってそんなに、周りに止められるようなないようなのかな」

「いや、そうは思わない。いつかは誰かがまとめるべき内容だと思う。ただ、今まではそれを取り上げようとするジャーナリストが誰もいなかった。お父さんは一介の雑誌記者かもしれないが、直接現場の人たちと接することによって蓄積してきたものもたくさんある。また人間関係においても、いろいろと学んできたこともある。なかなか仕事では返せないこともたくさんあるけれども、いつか書籍という形でまとめることができないかと、今いろいろと模索しているんだ。わかるか？」

——書籍って、父さん、本を書こうとしてるのか？　もしかして、作家？

何も言えず父を見つめるだけ。それを受け止めるようにして父は首を振った。

「勘違いするなよ。作家って小説家になるとかそういうわけじゃない。しいていえばポルターージュかな。お父さんが身近でいろいろ学んだことやたくさんの人たちと接して調べたことを、いつかまとめて本にしたい、そう思っているところではあるんだ」

「でも父さん、結構本、出してるし」

「匿名記事だがな。ああいう形ではなくて、名前を出して書くことを考えているんだ。ただそうになると、いろいろ難しい問題もたくさん出てくることになる。ここから先がお前の小耳にはさんだことにつながる」

かみしめるように、ゆっくりと。

「あいまいな言い方しかできないんだがな。このテーマを何らかの形で発表した場合、まず父さんの立場は会社でいろいろと厳しいことになるであろうことは覚悟している。まさか首にはならないだろうが、それでもタブーに触れたとして給料減らされたりとか、職種換えとか、そのくらいのはあるだろうな」

「そのくらい、って話じゃないよ、タブーってそんなにまずいこと」

言いかけた上総にまた父は首を振った。

「まあ社会人ならよくあることだ。できるだけそうならないように手は打っておくつもりだし、今話をしたのは最悪のパターンだよ。ただお父さんが一番心配しているのは、お前と母さんのことなんだ」

「俺と母さん？」

「今から話すことは現段階ではまだ、母さんに言うなよ。また余計なこと考えて、暴走してしま

うかもしれないからなあの人のことだから」

楽しそうに笑う。父は母にいまだべた惚れである証拠でもある。

「犯罪とか個人のプライバシーとかそういう問題ではない。ただ、多くの人々にとっては決して触れられたくない点を書かざるを得ないだろうとは思っているんだ。上総、『暗黙の了解』という言葉があるだろ？ 誰もが承知しているけれども、あえて何も言わずに放置していることとか、たくさんあるだろ？ お前も思い当たる節いろいろあるんじゃないのか」

何も答えない。ただ見上げるだけ。

「これからお父さんがルポとして書きたいのは、あえて今まで知らない振りをしてきた出来事を、できるだけさりげなく、記録に残すということなんだ。決してセンセーショナルな扱いをしてほしいとは思わない。ただ、将来誰かがこのことに疑問を持った時に、実際このようなことが起きたのだとか、いろいろな事実が絡み合って現在に至ったとか、その導線は残しておきたいんだ。詳しいことは言えないが、お父さんはいろいろな事情もあってそのことについて詳しい。関係者と言ったほうがいいのかかもしれない」

「何か、は言えないんだよね、まだ」

声が出ないが、無理に問う。答えてもらえないことはわかっているから。

「そうだ、言えない。ただこのことが明るみに出ると、上総の周辺の人たちにも少なからず影響があるかもしれないね。お父さんの仕事についてもかもしれないし、テーマに関係している人たちがもしかしたら友だちの中に存在しているかもしれない。もしくはお前自身が当の本人であるかもしれない。いろいろなことがあるんだよ。これは母さんにも同じことが言える。母さんの仕事にも影響が出てきてしまって苦勞をかけてしまうかもしれない。要は仕事がうまくいかなかったらうちに戻ってくればいいことだし、そっちは心配していないんだが、問題はお前だな」

自分に問いかけるようにつぶやいた後、父はふっと真剣な顔をした。

「まあ、破産してその日暮らしになるとか、そういうわけではないから安心しなさい。ただ、いつになるかはわからないけれども将来のことは今から少しずつ、考えておいたほうがいい。お前、来月でいくつになる？」

「十六、だけど」

「元服の歳を過ぎてるな。それなら話は早い。お前なりに将来を考えるんだっただけ早いほうがいいからね。お前は数学があれだが英語は得意だと聞いているが、将来何かになりたいとか、そういう目標はあるか」

ぐっと詰まる言葉ばかり。夏休みに入ってからそればかりだ。食いしばった。答えられない。

「具体的に何がというのがないのだったら、最低限の目標として、大学卒業してから自分で自分を養っていけるだけの能力を身に着けるよう意識したらどうかなと、お父さんは思うんだ。今話した通り、仕事の内容もお前が大学を卒業するまでには大幅に変わってきている可能性があるし、今まで通りお前を支援できるかどうかもわからない。まあそれは大丈夫だと思うが、万が一、ということだってある。母さんも同じだよ。まだお前も子どもだし、十分甘えていい年頃ではあるんだが将来ひとり立ちして生きていくようにそれなりの努力を始めてもいい時期じゃないかな。そのために何が必要かについては、もちろん父さんも母さんも、先生たちの力を借りて考

えていくよ。ただ、上総、お前もそろそろ、今の生活が変わるかもしれないということだけは、頭の隅においてもらいたいんだ」

「変わるってことは、一人暮らし？」

「かもしれないね。状況にもよる。今の段階ではお前を一人アパートに追いやってやりたい放題させるのはできれば避けたいし、青潟に住んでいる以上はここから通ってもらいたいが、それもいろいろなことが関係してくるから、確実ではない。大学も、青潟大学に進むのか別の大学を選ぶのか、それとも就職するのか、またいろいろと選択肢がある」

「就職は、するつもりないけど」

「わからないよ。将来はわからない。ただ、いつ何事があったとしても、きちんとひとり立ちできるだけの知識と能力だけはきちんと身に付けてほしい。できればまあ、数学と理科の成績をもう少し、パステルトーンの赤から脱皮してもらいたってところはあるが、仕事の内容を選べば文系だけでも生きていける場はあるからなあ」

にやりと笑い、父は立ち上がった。

「とにかくいきなり何かが変わるということはないし、ほぼ九割方はこのままのんびんたらしと平和な生活が続くと思うよ、ただ万が一、何があっても、ということだけは意識してこれからの学生生活を心して過ごしてほしい、とまあそんなとこだ。じゃあ悪いが麦茶のポットもらってくよ。後で父さんも麦茶沸かし直して冷やしておくからな」

半分以上減った麦茶ポットとグラスを片手に、父は部屋を出て行った。

——一人暮らしならしたいと思ったことあるけど、でも、今の話って、いったいなんだろう。父さんが研究しているテーマが原因で、俺や母さんにも影響があるって。

今まで一瞬たりとも考えたことがなかった。

父が、テーマを持って「書く」人間だったということに。

顔にふうっと熱い風がかかったような気がした。やはり今夜は熱帯夜になりそうだった。

その九 高校一年夏休み十五日目・立村上総の狩野先生と語り合う日々（1）

今日で講習も終わる。せっかくの夏休みをなぜほとんど学校の授業と変わらない内容でつぶされた日々もなんとかこれで完了だ。

「さーてと、なあなあ立村、今夜ちよいと元評議委員会同窓会でもやらないか」

今までどこに隠れていたのか気づかなかったが、天羽が帰り、生徒玄関で話しかけてきた。授業カリキュラムがまったく別なので上総とはかち合うこともなかった。

「今夜か？ ちょっときついな。明日だったら大丈夫だけどさ」

「そっか、まあいそがねえし、かえって明日の方がとっぷり騒げるかもな。まだ難波や更科には声かけてねえし、じゃあ明日ってことで話つけとくよ」

「どのくらい集めるつもりなんだ？」

「俺たち男子四人に決まってるだろが。女子なんて集められるわけねえだろ。お前だって今更清坂ちゃんとカップル扱いされるのはたまったもんじゃねえだろうし、俺のいとしい近江ちゃんはそんな暇ありゃあスーパーのイベントにカメラもってすっ飛びまってるし」

肩をすくめて涙を拭くしぐさをする天羽。相変わらずの演技派だ。

「じゃあ、そんなとこであとで電話すっから、じゃあなあ」

瞬く間に靴を履き替えて天羽は、猛烈な勢いでもって砂利道を駆け出していった。

外に出てみると昨日と変わらぬ太陽の日差しが黒く校舎の陰をこしらえていた。一度は退いたと思われた暑さもすぐ戻り、かえって息苦しいくらいだった。久しぶりに一人で校舎を出て、上総は中学校舎へと向かった。さすがに今日こそ顔をあわせておかないとまずいだろう。約束したのだから。狩野先生と。

「立村くん、こんにちは。よく来てくれましたね」

運良く他の先生たちとも顔を合わせずにすんだ。上総にとってこのことは「青春ドラマを背負った暑苦しい某教師」にぶつからずにすんだことともイコールである。狩野先生はちょうど職員室を出たところで上総を見つけ、声をかけてくれた。教師らしく半そでのシャツに生成りのスラックス、腕には同色のジャケットを抱えていた。

「遅くなって申し訳ございませんでした」

「ちょうど、職員室の窓を見ていたら立村くんの姿を見かけました。そろそろ来るだろうと思っていましたが、よかった」

何がよかったのかわからないが、とりあえずはよいことにしておく。狩野先生は廊下を見渡してすぐ、上総を促した。

「せっかくですから今日は外に行きましようか。いいところがあります」

「でも今日は、先生、学校に御用があるのでは」

「いいえ、たまたま書類関係の仕事があったので来ていただけです、終わったらすぐ帰るつもりでしたしタイミングもよかったんですよ」

——本当かな。

まさかとは思いますが、上総が顔を出すのを待ち続けていたなんてことはないだろうか。気が少しだけ重くなる。本当はもっと早く訪ねるつもりだったが、ついこのびのびになってしまったのが申し訳ないところだった。言い訳できるところがあるとすれば、その間に杉本ともじっくり話をし、東堂サイドの視点も確認したし、自分の考えもまとまったし、といった点だろう。

「あまり学校の関係者がたくさん集まる場ですと、立村くんとも話がしづらいところがあります。比較的学校の近くです。歩いていきますよ」

徒歩五分程度。「おちうど」より先。林を通り抜けた住宅街の一角にある建物は、「あおがた憩いの家」と銘打たれた日本家屋だった。青潟では珍しい瓦で屋根を覆い、靴を脱いで上がる形式だ。すのこで靴を脱いで木造の靴入れに仕舞い、ロビーの一角にあるお茶場に向かう。十畳ほどの和室が二部屋解放されていて、そこでは子どもを連れた親子連れや年配の婦人たちが手持ちのお茶を飲みながらくつろいでいた。騒がしいが、それなりに広さもあるのでゆっくり出来る空間にはなっている。

「公民館ですか」

「それに近い環境です。一階はこのように市民のみなさんへ開放されています。青潟市に関する書籍も用意されていますので郷土図書館に近い雰囲気もあります。ただ、学生さんたちはあまり知らないようですね。僕も、駒方先生に連れられて初めて知りました」

狩野先生は天井を指した。

「二階には六部屋ほど時間ごとに借りることが出来る場があり、よくお稽古事をなさる方々が利用されています。駒方先生が主催している絵画の会も、週一回程度上の部屋を借りて行っていると伺っています」

「この前のお話とつながるんですね」

上総は取り外された襖が廊下に立てかけられているのを見た。柱や床の間を見る限り、かつては豪勢な生活が送られていた邸宅と言っているのかもしれない。黒光りした柱とその木目の荒々しさが強烈に迫ってきた。しかしその床の間に詰込まれているのは郷土関連の書籍だけで、本来飾られるべき花もなければ掛け軸も見当たらなかった。その本すらほとんど手に取られていないらしく、よく見ると埃をかぶっている。

「何か飲みましょう。お昼は？」

「まだです」

「ここで少し休んでからにしましょうか。今の時間はどこも混みあっていますから。一時を過ぎれば少しは空くでしょう。少しだけがまんしてください」

時計を覗き込むと十二時半、確かに今はどこへ行っても並ぶだろう。腹時計が寂しいが、それもしかたあるまい。狩野先生が立ち上がり、

「とりあえず、飲み物にしましょう。立村くんは紅茶でいいですか」

館内に設置されている自動販売機に向かい、確認をしてくれた。

——こういうところがあるんだな。

「おちうど」を始めとする青潟古来の町並みが続くこの地域は、学芸地区とも呼ばれていて青

湯市内でも比較的ゆとりのある人々の居住地として呼び習わされていた。詳しいことを聞いたわけではないけれど、あまり学生たちがうろつく街でないことも確かだ。青大附中の裏にある雑木林を抜けた辺りにはよほどのことがない限り近づくことはなかった。上総のように「おちうど」という行き着けが存在する場合を除く。ただ上総も、「あおがた憩いの家」なる休憩所が存在するところまでは把握していなかった。

——こういう雰囲気、杉本は好きかな。いや、嫌がるかもな。日本文化それほど好きじゃなさそうだし。

つい杉本梨南の好みを重ね合わせてしまい、すぐ打ち消す。建物はともかく、子どもの泣き声と女性集団のけたたましい笑い声がこだまする部屋の中でくつろげる性格とは思えない。それは霧島にも共通するところだが、どちらにせよ誰も連れてくる気にはなれない。

狩野先生が缶の紅茶を持ってきた。お礼を伝えてすぐ飲んだ。柱に背を向ける格好で狩野先生が上総の隣に、足を伸ばして座った。

「ここに来ると不思議とくつろげるんですよ。実家に似ているからかもしれませんが。立村くんはどうですか」

「もし誰もいなかったら、楽かもしれません。ただ人がこれだけいると、落ち着かないところも正直あります」

「君らしいところですね。ごもつともです」

——どこが俺らしいんだろう。

狩野先生に言われたくない言葉だったのもあって、少し黙った。冷えた紅茶をごくりと喉を鳴らして飲んだ。気づかないのか狩野先生は、辺りをゆったり眺め回して上総に語りかけた。

「以前は青大附中の生徒たちもここでボランティア活動をしたり、駒方先生の手伝いをしたりしてよく交流していたそうです。最近はそれも少なくなったそうですが、駒方先生としてはできればそろそろ復活してほしいと願っているようですね。もちろん学校側との折衝もありますからそう簡単にはいかないかもしれませんが。ただこれだけ一般の人たちと交流ができて、しかも大人の目がしっかり存在している場所はそうそうないと思うんですが、どう思いますか、立村くん」

「確かにそう思います」

上総も足を崩した、胡坐こそかかないが膝を少しだけ伸ばした。

「お弁当や飲み物は持ち込み可能なんですか」

「はい。もちろんごみは持ち帰ることが原則です。誰かがうっかり汚そうものならすぐ注意されます。その点は厳しいですよ。お子さん連れの方でも、例外はありません」

「机とかもないんですね」

「図書館とそこが違います。小さいお子さんが机にぶつかって怪我をしたりしたらことですしね。もちろん畳でノートを広げたり、教科書を読みあったりとか、そういうことも可能ではありません」

「時間は何時までですか」

「二階は八時までですが、一階はたいてい六時でいったん終了となります」

すらすらと狩野先生は「あおがた憩いの家」に関する情報を述べ立てていった。

——なんで俺をここに連れてきたんだらう。

上総は狩野先生の横顔を見つめた。紅茶の缶を持ったまま、じっと見据えた。

「どうしたのですか、立村くん」

「今日、僕が先生にお話することと、この場所とはもしかして関連がありますか」

「そう、思うのですね」

問かけられ、俯きたくなるががまんした。歯を食いしばり答えるしかなかった。

「杉本たちをここで勉強させてはどうか、ということなんですか」

頭の中で組み立てられた推理を口にしてみた。狩野先生は驚きを見せず、促すように頷いた。

「この前のお話で、駒方先生が個人的にお考えのことがあるという説明をなさいましたが、もしかしてここで、杉本たちを集めて、周囲の視線が存在する中で続けさせようと言うことなのですか。外れていたら申し訳ないんですが、僕にはそういう気がしてならないんです」

「もしそうだったら、どうしますか」

上総は答えられなかった。広々とした和室。その奥でいきなり転がり出す幼児ふたりの姿。あやすようにしながらもおしゃべりを続ける親たちの群れ。また別のグループが飴やらお菓子やら取り出しピクニック気分ではしゃいでいる。時間制限なし、のんびり過ごせる環境。大人の目も届く場所。柱から見えない縄を用意しくくりつける場所。

「僕には杉本たちの気持ちがわかりません。ただもし僕が、杉本の立場だったとしたら、プライド傷つけられるような気がします」

かろうじてそこまで言葉にした。

狩野先生は立ち上がった。上総を見下ろし静かに促した。

「立村くん、行きましょうか。まずは君の気持ちをゆっくり聞かせてください。その上でよい方法を僕も探っていきます。安心してください。今日は駒方先生は来ませんから」

「あおがた憩いの家」を出て、狩野先生は空を見上げた。

「よい天気ですね。中に籠るのがもったいないくらいだ」

上総に振り返り、やさしく微笑んだ。

「せっかくですから、少し歩きましょう。いいところがあります。それほど時間はかかりません。参道沿いに向かいましょうか」

参道といえば、このあたりは寺町でもあった。思い出して上総は頷いた。

「お寺が多い町並みなんですね。僕もあまり歩いたことがないので、行ってみたい気持ちはあります」

青大附属に在学して四年目とはいえ、あまり街の中をざっくり歩くことはそうなかった。たった五分でたどり着ける「あおがた憩いの家」も知らなかったわけだから、実は身近なものこそ盲点だったのかもしれない、そんな気がした。ここは狩野先生の言う通り、目の前に広がる異郷を突き進んでみようと決めた。

狩野先生は住宅街の細い小路を見つけてするりと進んだ。

「少し入り組んでいますが、大丈夫です。近道ですし車も入ってきません。かえって安全かもしれませんよ」

くねくねした道を通り、背の高い百日紅の花や足元に咲く彼岸花、力の限り顔を見上げているひまわりの花と顔を見合わせた。風鈴の音が聞こえたり、テレビの高校野球中継の雄たけびなどが聞こえたりと、目も耳もとにかく気ぜわしい。しばらく道なりにへび道を登っていくと、ようやくたどりついたのが巨大な山門だった。

「いつもならばここでゆっくり散歩していくのですが、これだけ歩くとおなかが空きます。調達していきましょう」

奥に広がる古刹を横目で見やり、狩野先生は軽く首を振った。下りの参道沿いで、小さな店に入ってしまった。上総には、

「ここでそのまま待っていてください」

言い置いて、すぐに小さな弁当箱を二箱ぶら下げてきた。

「いいところがあります。そちらでいただきますよう」

「え、でも、おいくらですか」

「値段を聞いたら驚きますよ。そのくらい安いのですから、これは遠慮なくいただいでください。さあ行きましょうか」

「でも、この前もご馳走になってしまったし」

なんだかおごられなれてしまいそうで罪悪感がある。財布を捜そうとするのを狩野先生は制した。

「大丈夫です、立村くんはまだ、甘えていい年齢なのですから、安心してください」

すぐに立ち止まり、左脇の竹垣でこしらえられた小さな門を覗き込んだ。

「ここでゆっくりしていきましょう。やはり人もいないようですね。ありがたいことです」

狩野先生に促されて竹柵の門をくぐると、適度に手入れがほどこされた小さな和風庭園と、小さな東屋がいくつか設置されていた。途中には同じく竹でこしらえられたベンチもある。まっすぐ手前の東屋へ向かい、真ん中のテーブルに弁当を置いた。一緒についてきた小さなビニールパックのお茶もある。

「ここは、どういう場所なんですか」

腰掛けて見渡すが、他の人の気配を感じない。よく見ると庭園風にこしらえられてはいるけれども縦に長く、最奥が出口となっているようだ。手前には小さな日本家屋が用意されている。何か由緒正しい家だろうとは思うのだが、それが何なのかわからない。

「僕が調べた限りですと、かつてこの参道沿いでおもちゃ屋を経営していたという方が亡くなられ、遺志として市に寄付をし街の人々に役立ててほしいということで設置されたのがこの公園だと、いうことです。流れとしては『あおがた憩いの家』とほぼ同じ経緯のようですね。現在ここは、当時の趣をそのままにしたちょっとした公園として利用されているようです。お彼岸の頃やお正月には大層にぎわうようですが、今の時期はちょうど谷間なのでしょう、ほとんどこのように、人が寄り付かないようです」

「僕が知っていたら、自分の隠れ家にしているかもしれません」

——たぶん、誰かを連れて。

狩野先生に促されて上総は弁当包みを開いた。赤飯と一緒にちいさなおはぎがひとつ、漬物が二種類、小さく植えつけていた。

「ありがたくいただきます」

「夏向きのご飯ではないかもしれませんが、ここのおこわは大変おいしいです。青濁にしてはめずらしく、小豆の赤飯なのであっさりしていておいしいと個人的には思います」

「ああ、それはわかるような気がします」

声を弾ませた。

「青濁の赤飯は甘納豆を入れるのが主流だから、全体的に甘いなって気がします」

たくあんを先に口にした。辛すぎず、しょっぱすぎず、赤飯の適度な甘さによく合った。

——けど、狩野先生何が目的なんだろう。俺に何を言いたいんだろう。

つい安心して甘えてしまっている自分に気づく。心をいったん許すととめどもなく甘ったれてしまうくせがあることを自覚はしている。まずいと思って距離を置こうとするとかえって不自然になり諍いとなる。このあたりのさじ加減が難しい。

担任でもなく、単なる数学担当の教師に過ぎない狩野先生に、ここまでかわいがってもらえていいのかすら、自分では判断がつかない。本来ならばこのくらい甘ったれるのは担任に対してのみではないか。死んだってあの熱血教諭なんかに擦り寄る気などさらさらしない。ただ、自分を高く買ってくれたという理由だけでこうやって赤飯をおごってもらったり、ふたりで話のできる場所に連れていってもらったりと、過剰に目をかけてもらって本当にいいんだろうかとも、いつも思う。青大附中の先生たちは、誰もがこのようにひとりずつ生徒のことを思い遣っているのだ

ろうか。とてもだが狩野先生の態度は、他クラスの一生徒に対する内容ではないような気がしてならない。かつてのA組評議、天羽忠文にも申し訳ないと思うところが多々ある。

——E組の時も、駒方先生についていろいろ手伝ってたようだし。駒方先生を尊敬していたりするのかな。先生たちもいろいろ面倒なつながりが多そうだし。まあ、霧島の話信じるならば、あの馬鹿熱血男とそりが合わないのはわかるような気がするな。

今回に限って言えば、狩野先生と話すべきことは確かにある。

ひとつはあの、杉本の家庭教師稼業の件。

もうひとつは、自分のこと。なぜ野々村先生に上総があてがわれたのか、そのきっかけはやはり狩野先生経由の話なのではないか、といったこと。

用件があるのだから、こうしていてもいい。自分に言い聞かせた。

「先生、あの」

「なんですか」

「あの、どうして、こういう場所をよくご存知なんですか」

思っていたこととは裏腹に、まったく関係ない質問を投げかけてしまった。お茶を飲んで口の中のご飯を飲み込んだ。

「さっきの『あおがた憩いの家』は駒方先生の経由と聞きましたのでわかるのですが、こういったお寺とか、ここの公園とか、そこに住まないとなかなか分からない場所のような気がします。僕も今までこういう参道があることやお寺の存在自体意識したことがなかったし、少し不思議に思ったところがあります」

「学生時代からこのあたりはよく歩いていました。院生は貧乏ですからできるだけお金のかからない楽しみを見つけるようになるものです。旅行もそうそうできませんし、自動車もばかになりません。書店に行けばほしい本で財布の紐が緩みます。そこで考えたのが地元の町を足で探検するといった楽しみです」

「散歩、ですか」

「そうです。当時はこのあたりに下宿していましたからね。研究室に向かう前の早朝、この参道を歩いて、ここの公園でぼんやり考えながら空を眺め、カメラでいろいろなものを撮影し、ゆっくりと降りていきます。ただよいと思ったものを写して忘れた頃にフィルムを預けて現像してもらいます。それを場合によっては引き伸ばして楽しんだりもします。基本としては徒歩で回ることの出来る場所に絞ってますね」

確か狩野先生は理系の院卒で、そこから中学の教師となったはずと聞いている。

「そのこともあって、青潟の街に関しては僕はかなり詳しいと自負しています。青潟の観光雑誌一冊くらいは書くことの出来るネタがあるはずですが、残念ながらその機会もないのですけれどもね」

「A組の人たちにはそれ、お話なされたのですか」

少なくとも天羽からは聞いたことがなかった。狩野先生は笑った。

「いいえ、残念ながらその機会はありませんでした。学校はこう見えて、まったく余裕がないのです。僕も教師に成り立ての頃は担任した生徒たちに、授業以外の語り合いも行えればと思った

ことがあったのですが、優先すべき出来事が多すぎて最後まで念願叶えることができませんでした。後悔してます」

——だから俺に話しているのかな。

上総なりに判断が難しくて首をひねる。おはぎもつぶあんが甘ったるくなくて、いくつでも入りそうなほどだった。どちらも普段は上総が喜んで食べるものではないし、どう考えても夏向けの食事ではないのに、あっという間に腹へ収まる。

ふと、気配を脇に感じた。どことなく暖かいやわらかいものが近づいてきているような感覚が、腰にある。

——なんだろう、なんか敷いちゃってるかな。

腰を浮かそうとして脇を見た。身体が凍りついた。

——なに、なんで、いつのまに。ていうか、なんで俺の隣にいるんだ？

黒く細かな縞模様の燕尾服をまとったその御仁。

「ああ、ここには本当に多いんですよ。昔からです」

毛艶のよい猫の兄弟……雌雄不明だが……が丸くくっついて上総の隣に鎮座増していた。取り落としたたくあんを目ざとく見つけ、二匹とも足元に飛び降りて奪い合いを始めた。黄色いたくあんを勝ち取った一匹が、うにゃうにゃ言いながら食べ終え、満足げに舌なめずりをしていた。

「猫って、魚以外のものも食べるんですか。たとえばたくあんとか」

「食べるでしょうが、たくあんを食べる猫は僕も初めて見ました」

たくあんを食べ損ねたしま猫が、上総の膝元に手をかけて、もっと欲しそうに甘えて鳴いた。上総はただ、身体をこわばらせたまま猫の顔が摺り寄せられるのに任せていた。

「立村くん、猫はお嫌いですか」

「いえそれ以前に、触ったことが、ありません」

猫が、上総の指先をぺろりとなめた。

「猫アレルギーはありませんか」

「たぶん、ないと思います」

猫たちが床に転がるわ草むらでじゃれあうわ、目の前のベンチで細長くころがるわ、増殖していくのを上総は呆然として眺めていた。その間にも先ほどたくあんを食べ損ねたしま猫が上総の膝にのっかってきて、黙って顔を見上げている。

「去勢手術済みのようですね。首輪しています。気立てのよさそうな猫です。なでてみたらいかがですか」

促され、息を止めてそっとまるい背に触れてみる。指先にごつごつした背骨の感触があり、手のひらにはやわらかな毛並みが感じられる。なでられるがままにしま猫は、上総の膝で頭をたらし、目を閉じた。耳だけがぴくぴく動いている。

何度かなで続けているが、まったく動こうとしない。足元にはたくあんをせしめた方の猫がくねくねと身体を擦り付けている。相当、たくあんの味が気に入ったらしい。

狩野先生もテーブルに上がろうとした猫を抱き上げ、同じく膝に載せた。タキシードをまとったような毛色で、上総の膝にいる猫よりも子どものようだ。

「しばらく来ないうちに、だいぶ増えたようです。同じ血縁関係だけかと思ったら、ペルシャ猫もいます。たぶん誰かが捨てにきたのも混じっているのでしょう」

「捨て猫ですか。これ全部」

完全に上総の膝を臨時休憩所と認識してしまったしま猫。確かに皮の茶色い首輪がついている。ということは、野良じゃないのだろうか。

「厳密に言うとその通りです。この参道沿いには猫が昔から多く住み着いていて、地元の人たちがえさをやって面倒を見ている。ただあまりにも増えすぎるといろいろな問題が発生するので、最近は捕まえて去勢手術を受けさせるようにしていると聞いたことがあります」

「野良猫を捕まえるなんてことができるんですか」

これだけべったりされるのだから、意外とあっさりつかまりそうな気もするが。

「かなり苦労するでしょうね。僕もその辺は詳しくないのでよくわかりませんが。ただ、この猫たちが首輪をしているところみると、誰かかしらの手が入っているということにはなるでしょう」

草むらの陰でペルシャ猫と三毛猫がうなりあってパンチの繰り出し合いをしている。どう見ても同じ血統には見えない。

「お寺に向かうともっといますよ。あちらこちらで顔を出しています。ただ問題は、この地域が野良猫たちに優しいことを聞きつけて、飼えなくなったペットを置いていく人々が増えてきていることです。ここにもペルシャ猫がいます。たまたま突然変異した可能性もありますが、通常はどこかから連れてこられたと考える方が自然でしょう」

静かに、感情を交えずに狩野先生は続けた。

——去勢されてるってことは、子どもが増えないってことなんだな。

上総も動物を去勢して飼うことがどういう意味なのかは理解していた。身近な友だちが動物を飼っているわけではないけれど、放置してしまえば増える一方、駆逐されざるを得ない。そのための対策の一環なのだろうとは思う。

「この猫たちは、保護されているんでしょうか」

「そうです。参道沿いの人たちによってですが」

「でも、実質は、野良猫扱いされているということではないんでしょうか」

この懐きっぷりを見るとどんなに頭をひねっても、野良とは思えない。狩野先生に喉をなでられている猫も同様だ。

「難しいところです。ふさわしい言い方が見つかりません。今言えることはこの猫たちはこの参道でこそ守られています、一步別の場所に行くと駆逐される対象となる可能性が高いということでしょうか」

「保健所で捕まえられるというあれですか」

「それもあります。猫嫌いの人もたくさんいますし、迷惑をかけてしまうケースも多々あります。どちらにも言い分はあります。ただこの場にさえいられば少なくとも食べ物は確保できます。去勢手術を施しておけばこれ以上子孫を増やさずにすみますので、自然と減っていくはずでもあります」

しま猫がふっと顔を上げて、口をもごもご動かし、またぺたんと顔を伏せた。舌を小さく出している。

「暑いからばてているのかもしれませんがね。立村くん、だいぶ慣れましたか」

「はい、おとなしいですね」

今まで動物を飼ったことはなかった。学校にいる鶏とかうさぎなどを見たりすることはあったけれども、触るほど近づいたことはない。上総の友だちもなぜかペットを飼っている奴はひとりもいなかった。

「動物嫌いであればしかたありませんが、そうでなければこうやって触るのも面白いものです。触ったあとは手を洗う必要はありますが、ここにはお手洗いも設置されていますのでそちらの心配も御無用です」

「狩野先生はペットとか飼っていますか」

「いいえ、家内が動物を苦手としていますので、たぶん一生飼うことはないでしょう」

たしか、近江紡の実姉に当たる人だと聞いた。

「個人的には嫌いではありませんので、たまにここで遊ばせてもらっています」

タキシード姿の子猫は膝で転がるだけでは満足できず、何度も立ち上がっては狩野先生の指にかじりつく。弁当の紐を使ってじゃらして遊んでいる狩野先生の頬には、学校で見かけたことのない子どもっぽい笑みが浮かんでいた。

——先生たちが考えているのは、この猫たちのようにしたいってことなのかな。

心地よく重たいしま猫の体重を感じながら、上総は足元で手と足を伸ばし寝ている猫を見下ろ

した。おなか真っ白い。ころんころんと転がり続ける。

——こうやってころころころがってもらって、時々膝の上ののっかって寝てもらったりして、のびのびさせているように見えて実はしっかり監視しておくといった形にしたいんだろうか。

「あおがた憩いの家」でも感じたのは、どこか大人のいる場所で紐をつけてつないでおきたいという強い意志だった。狩野先生がそうにおわせる何かを口にしたわけではない。単に青湯散策好きな狩野先生の趣味に付き合わされただけなのかもしれない。いや、きっとそうだろう。策略あってここまで無邪気に猫と戯れることなんてできないだろう。

むしろ感じるのは上総の深読みのしすぎか。

かわいらしく無邪気な子猫たちを、やさしい大人たちの手でじゃらしつつ、参道外の危険な場所から隠し、同時にこれ以上害を及ぼさないように去勢手術しておいて置く。もちろんそれで猫たちは守られている。参道沿いだけならば。ただ、外で自由を謳歌することは禁じられてしまう。うっかり遊んでいようものならすぐ、駆逐の対象となってしまう。

「聞くのをすっかり忘れてましたが立村くん」

こたっとテーブルの上で眠りこけたタキシード子猫の目やにを取ってやった後、狩野先生は上総に尋ねた。

「猫たちしか聞いている人もいそうにないので、この前の続きをしましょうか」

「はい、そのつもりです」

まったく動く気配のないしま猫を押さえたまま、上総は答えた。

「先日、杉本さんと会い、詳しい話を聞いてきました。それと、東堂くんとも話す機会があり、自分なりの考えはまとめたつもりです」

「そうですか。よかった。杉本さんはお元気そうでしたか」

「はい。まじめに勉強しているようです。同時にその、家庭教師ごっこもかなり真剣に取り組んでいるようです」

きっぱり答えてやった。しま猫がくいと頭を押し付けてくる。薄い桜色の鼻脇に小さなほくろがついている猫だった。

「杉本の一方向的な言い分かもしれませんが、教えている公立中学の生徒たちはみな、一学期の成績も上がったらしく、その続きを夏休み中も続けているようです。杉本が言うには、桜田さんの教え方が素晴らしいらしく、僕には想像もできないような授業を繰り広げられていると聞きました」

狩野先生は頷きながら聞いていた。また別のペルシャ猫が椅子に飛び乗ってきて狩野先生の手元にちょっかいを出している。なでながら上総に問いかけた。

「僕も直接確認したわけではないのですが、駒方先生も桜田さんの熱心さには舌を巻いていましたね。拝見したいものです」

「杉本いわく、しっかりと状況を見てもらって、納得してほしいようなことを話していました。本人たちはちっとも悪いことをしていると思っていなさそうですし、僕も杉本から話を聞かせてもらった限りかえって褒められていいことをしているようにしか聞こえませんでした。勉強で分

からないところがあれば教えあうのが、うちの学校のいいところだと思うのですがそれがたまたま他の学校の生徒ただただでなぜ目くじらを立てるのが、正直つかめません」

たぶん、杉本もここまで説明することは許してくれるはずだ。すでに修道院行き帰りの汽車の中でそのあたりは伝えておいた。大歓迎だろう。

「僕個人としては、狩野先生自身にその授業を全部見ていただいて、特に数学に関しての桜田さんの素晴らしい教え方を確認してもらって、それで判断してもらうのがいいのではという気がします。杉本に対しては、いろいろ知っているのも混じっているかもしれませんが、桜田さんのことについては僕も公平に判断できると思います」

「そうですか。僕も杉本さんの作ったという問題を見て出来のよさに驚いただけです。そういうことなら、夏休み中に一度拝見する必要はありますね。立村くんはまだ、杉本さんの開いているその部屋には行かないのですか」

「まだです。僕が行くよりもむしろ東堂が行ったほうがいいんじゃないかとも思います」

たった今まで思っても見なかった言葉が滑り出した。狩野先生も手をいったん止めた。同時にペルシャ猫がその指に甘かじりしているのが見えた。

「僕は杉本が妙なことをやらかすとは思っていません。ただ東堂は桜田さんのことを心配するあまり、彼女を過小評価しているような気がします。それは僕から見て、もったいないことに思えます。それだったら、僕よりも東堂を連れて行って、彼女がどれだけ一生懸命に人に尽くしているかを見てもらって、見直してもらったほうがいいんじゃないかって気がどうしてもします」

「立村くんは、いいのですか？」

かじられた指をそのままペルシャ猫になめさせながら、狩野先生はもう一度問うた。

「僕が行っても、杉本は喜ばないと思います」

すでになで慣れた厚みのある猫の背中。いつまでも載せておきたかった。上総は手のひらのぬくもりを何度も毛皮で確かめた。

すやすや眠っているしま猫をベンチにそっと置き、まだまとわりつくたくさんの猫たちと別れを惜しみつつ、手洗いに立ち寄った後すぐ出発した。猫を触った後で特に手が汚れたわけでもないけれど、今まで感じたことのない感覚が残っている。

「初めて猫を触った感想はいかがですか」

「やわらかくて、面白いですね」

月並みな感想でしかないけれど、実際なでて見ると細かな反応が感じられる。狩野先生の真似をして喉を触ってみたらいびきのような音を鳴らすし、時々なにやらねごとのようなことをつぶやいている。人間になんとなく似ている。

「すべての猫がああ幸せだったらいいのですが、世の中は厳しいことばかりです」

それ以上触れず、上総は狩野先生に次いで参道をゆっくり下っていった。昼下がりとはいえまだ陽は高く、伸びる影も濃いままだ。電気屋の前を通ると、テレビの前に幾人かが集まり、高校野球の試合にかじりついていてた。準々決勝くらいだろうか。

「立村くんは、今年の高校野球に関心はありますか」

「いいえ。もともとスポーツには興味がない方です」

目もくれずそのまま歩き続けた。事実だった。ある程度男子同士の語らいで話題に出てくることはあるし、一般常識として頭には入れておく。青大附属のスポーツに対する勝負弱さはある意味伝説であり、応援するのも燃えるところまで進まない。

「それにもともとテレビあまり観ないというのもあると思います」

「クラスの話題についていくのは大変ではありませんか」

「いえ、他の友だちがみなフォローしてくれるので、大丈夫です」

上総がそこまで答えると、狩野先生は頷いた。やさしく上総を見下ろした。

「立村くんは人に恵まれる運を持っているのかもしれないね」

「たまたまだと思います」

言葉を濁した。

本当はもうひとつ聞かねばならないことがあった。

——なんで、野々村先生を紹介してくれたんだろう。

まだ一回しか直接話をしていないけれども波長が合いそうな気はした。ただなぜあえて、国語科の野々村先生が上総の個人面談担当になったのか、そのあたりが不思議でならなかった。美里の意見だと明らかに偏り過ぎているのであえて話半分に聞いておく。

——狩野先生から話、聞いてるって言ってたもんな。

さりげなく語ったその言葉が今日までずっとひっかかっていた。中学と高校が連携を取っているのは前から知っていることだけど、狩野先生と野々村先生とのつながりがどのあたりにあるのか、どこで上総のことをよろしくと伝えてくれたのか、皆目見当がつかない。

「どこかで涼みましよう。さすがに日の当たる道を歩き続けるのは疲れます」

いいタイミングだ。上総は狩野先生に道筋を任せた。

できるだけ青大附属の人間がいない場所で、男ふたりが立ち寄っても違和感のない場所となると限られてくるのはわかるような気がする。結局店で適当なところが見つからず、もう一度「あおがた憩いの家」で落ち着いた。当然誰も知り合いはいない。さっきまでうるさく騒いでいた子どもたちもいつの間にか姿を消している。タイミングよく静かな空気が流れ始めたようだった。

「同じところの往復ですが、落ち着くべきところに落ち着いたというべきでしょうか」

言われる前に上総は狩野先生の分、缶に入った紅茶を自動販売機で買っておいた。すぐに手渡した。

「今日はいろいろご馳走していただきありがとうございます。これは僕からです」

「いえ、いいですよそんな気を遣わなくても」

「いいえ、僕が今日はそうしたいんです」

きっぱり告げた。同等で接さないといけないような気がした。狩野先生も上総の表情に何か感じる場所があったのか、

「わかりました。ありがたくいただきます」

すぐにプルトップを引いて飲み始めた。上総も続いた。喉越しよく、甘さが心地よく伝わった。

「それにしても人がいなくなったら広々としていますね」

まったくいないわけではなく、奥の隅で年配の女性たちが高らかに声を挙げて笑っているのが聞こえる。にぎわっていないわけではないのだが、やはり距離が適度に保たれているのはうれしいものだった。

「お子さんたちはたぶん、昼ご飯とお昼寝の時間なのでしょう。小さなお子さんを持つ親御さんは本当に大変です」

「先生、ひとつ、お伺いしていいですか」

無理やり話を切り出した。狩野先生がちょっと戸惑った風に首をかしげた。

「実は、講習一日目に、個人面談がありました。あの、先生は」

言葉を区切りすぎて舌がもつれてしまう。その名前すらうまく出せない。

「ああ、そうでした。個人面談の担当教師のことですね」

わかってますとばかりに、狩野先生はにこやかに答えた。

「野々村先生はいかがでしたか」

「やはり、あれは狩野先生が？」

「僕よりも、青大附高の先生たちがいろいろ相談していたようです。僕も知らないふりをしてしまい申し訳なかったのですが、立村くんが補習のことでいろいろと苦労しているらしいとは聞いていました。そのことで高校の先生たちからも相談を受けていたことは事実です」

——なんだ、最初から知ってたのかよ。

だまし討ちにあったような気もするが、結果オーライと割り切るしかない。上総は改めて缶紅茶を飲んだ。少し落ち着こう。

「立村くんも先日話してくれたように、補習の方式が君向きではないということは感じました。野々村先生もお話されたと思いますが、高校の補習で学生さんたちが手伝ってくることはもちろんよいことも多いのです。これからも続くでしょう。ただ、立村くんの感じている苦労を実感することは、誰でもできることではありません。きっと彼らも少しずつ学んでいき、将来教壇に立つ際の糧にしていくことなのでしょう。ですが」

狩野先生は首を振り、やさしく上総を見つめた。猫に対してとほぼ変わらない瞳だった。

「立村くんに与えられた時間が三年間のみと考えると、その間に何かをしないではいきません。僕なりにいくつか提案を試みたのですが、その中で一番これはと思ったのが、野々村先生のことです」

「でも野々村先生は、国語の先生ですが、いいんですか？」

いくら国語と数学がどちらも得意といっても、かなり無理のあるキャスティングに思える。もちろん上総は来学期以降、ほんの少しだけ楽しみにしているところもある。ただ、女性の先生でかつ、国語の先生、しかも現在美里の天敵と化した野々村先生とどう接していけばいいのか迷っている最中だった。狩野先生に美里の話をする気はまったくないにしてもだ。

「確かに最初は驚くでしょう。野々村先生は国語担当ですが、実を言うと最初の一年は他の大学の理数学科に籍を置いていらしたのです。かなりレベルの高い学校です。その後いろいろ思うところがあつたらしく、一年浪人して青潟大学の国文科に進学し、教員資格を取得したとのことです。青潟大学は教員育成に熱心な学校ですからね。きっと野々村先生もそこを見込んで入学なさったのでしょう」

——理数学科から、なぜ国文科？

知りたいことを飲み込む。やはり想像を絶する脳の造りだということだけはわかった。

「僕は野々村先生を学生のことから知っていました。院生だった頃からです。教師というよりも先輩後輩の間柄と言ったほうがいいでしょう。彼女が非常に数学のセンスがあり、さぞかし元の大学のみなさんは彼女を手放したくなかったであろうとつくづく思いを馳せたものです。現在のところ、野々村さんは国語教師として全力を尽くしているようですが、せっかくのあの能力をかくしておくのももったいないと僕なりに考えたというのもあります」

「そんなに、数学のセンス、ってすごいんですか？ あの、野々村先生が」

数学にセンスなんてものが必要なのか、すらわからない上総の立場。情けないったらない。

「分かりやすく教えることが得意、と言い換えるべきですね。今、補習授業に手伝いできている学生たちと同じことを、彼女も学部生の頃にしていました。国語が苦手な生徒たちの手伝いが国文科の学生ゆえ当然中心なのですが、たまに数学で躓いている生徒を見つけるとすぐ、懇切丁寧に説明を繰り返していました。おそらく、立村くんに対しても同じことをしてくれるんじゃないかと、彼女を知っているものとしては期待したくなった次第です」

狩野先生はそこまで語り、足を伸ばしてふうっと息を吐いた。

その九 高校一年夏休み十五日目・立村上総の狩野先生と語り合う日々 (5)

理数学科を選んで将来も期待されていたであろう野々村先生が、なぜいきなり青潟大学に浪人までして入学しようとしたのか。上総からすると想像を絶する決断だった。

「僕には、信じられません」

問いかけるように狩野先生が覗き込む。上総は紅茶の缶を両手で握り締めた。

「数学なんてあんな難しい学問を、すんなり解けるのになぜ」

「野々村先生にも伝えておきますよ。そのきっかけをぜひ立村くんに語ってほしいとね。きっと彼女のことで詳しく話してくれるでしょう。いや、話したがっていると思います」

「そうでしょうか」

つい美里の怒りの声が思い出される。

「得意学科がたまたま理系学科ということもあって周囲に進められ受験したものの、本当の自分のしたいことは別の場所にあったと気づいたようです。理系から文系への切り替えはきっと大変だったと思います」

「先生になりたかったのでしょうか」

信じられない。上総からしたら学校の教師とは一番避けたい職業でもある。

「そうかもしれません。彼女は生徒のことが心底大好きだと言ってますからね」

——清坂氏の言葉どこまで信じればいいのか。

とりあえずは頷いておいた。

「自分の好きなものがすぐに見つかる人は幸せです。僕がその例かもしれません。化学や数列の美しさを楽しめる性格の僕にとっては、数学教師という仕事は転職と言っていいかもしれません。まあ、僕に受け持たれた生徒・保護者のみなさんには迷惑かけてますが。ただ、そういう人は数少ないことも承知してます」

じっと上総を見つめた。

「今はなんとなく聞き流しておいてください。僕の独り言だと思ってもらえばいいです。その上で聞いてもらえますか」

「はい」

聞かなければならないような気がした。逆らえなかった。

隣の部屋で、来月の家族旅行予定で盛り上がっている女性たちのけたたましい笑い声が響き渡っている。それでも狩野先生の声は上総にしっかり染み渡っている。

「たとえば、立村くん、君の場合は英語を始めとする語学を得意としています。隣で語らっているドイツ人の会話もなんとなく聞き取れてしまうし、英語ならほとんどネイティブレベルの会話ができるでしょう。素晴らしい神からの授かりものです。きっと君の人生を豊かにしてくれるでしょう」

静かに上総をたたえてくれた。すぐには信じない。きっと落と素に決まっているから。

「英語科進学も特に疑問はなかったことでしょうし、そのことが間違っているとは思いません。

ただ、ここで立ち止まってほしいのですが、立村くん、君には語学能力以外のものがあるか、それを考えたことはありますか」

考える。ない、いや語学能力たつたかたがしれているけれども、人に誇ることの出来る才能はひとつもない。首を振った。

「あまりにもひとつの能力が抜きん出ているために、別の道に気づかないということも往々にあることです。ぜひここは野々村先生とゆっくり語らってほしいのですが、彼女も子どもの頃から大学進学にいたるまで、理系学科に進学するという事に疑問を感じたことがなかったそうです。ただ得意だというそれだけで、周りからもやれ医学部だ、やれ工学部だなどと進められ、医者になりたくないからなんとなく理数学科を選んだというのが本当のところのようです」

蝉の合唱が始まる。いい音のカーテンだ。

「この前、立村くんは語学が得意だからという理由のもと、外交官とか、通訳とか、翻訳者とかいろいろな夢を語ってましたね」

「いえあれは、なんとなくなんて、違います」

慌てて否定するが狩野先生は続けた。

「いえ、笑っているのではありません。ただ、もしかしたらと思って欲しいのです。語学がまったく絡まない業界だったとしても立村くんにぴったり合う職業があるかもしれないということ、少しでいいから意識してほしいのです。たとえば翻訳ではなく作家になるとか、通訳ではなく司会者になるとか。頭に描いている仕事から『語学』というフィルターをはずし、それに合った仕事をひとつの候補として追加していくのも面白そうです」

「作家とか司会者ですか？」

とんでもない発想の飛躍にただ上総は口をあぐりあけるばかりだった。狩野先生はすべて真顔で語っている。上総のことを思い遣ってくれていることが痛いほどわかる。ただ、こういったらなんだが、暑さでだいぶのぼせてしまったのではないかと疑いたくなりような内容でもある。

「ひとつの例です。その他、仕事に直結はしないけれども語学力が求められるケースだってたくさんあります。街の観光ガイドさんたちも、語学ができれば外国のお客さんたちを喜ばせることができますし、ほら、ここの『憩いの家』で駒方先生が教えている絵の教室で、もし外国から日本に来て間もないお弟子さんがいらしたら、その場で通訳してあげるのも素晴らしい生かし方ではないでしょうか。語学力が前に押し出されなくても必然的に求められる場面というのは、意外と存在するものです」

「そうなんですか」

「そう考えると、もう少し夢の裾根が広がるような気がしませんか。就職する頃にはもう少し絞込みが必要になるかもしれません。その段階でやはり通訳の仕事に打ち込みたいなら迷うことはありませんよ。とことん進みましょう。ですがもしかしたら寄り道したところにとんでもない宝が隠れていることだって多々あります。あの猫たちの楽園のように」

手の平にしま猫の柔らかい毛並みが蘇った。ほわほわしていて、すべすべしていて、あたたかかった。また触りたい。

「僕があえて薦められることがあるとすれば、もっと立村くん、散歩をしたほうがいいですよと

ということでしょうか。たくさん歩いて、いろいろな猫道を見つけて滑り込んでいくうちに、自分でも気づかないものが見つかることが、結構あるものです。あの休憩所もそうですし、ここも、そうですね。天井の高い家は本当にいいですね」

——確かに、天井はやたらと高いな。

天井を見上げて大きく深呼吸している狩野先生を眺めながら、上総は訪ねた。

「先生のお宅はこんなに広いんですか？ あ、ご実家、ですか」

「旧家ですから、それなりに広いですよ。家で結婚式出来てしまうくらいです。クラス全員が泊まってもまだ余裕があるかもしれません」

とんでもない豪邸だ。中学二年の夏合宿事件でしかした記憶に、思わず俯く。

「逃げ出したいと思ったこともありましたが、子どもの頃に植えつけられた感覚はそう消えるものではないんでしょう。やはり最後はこのような和風の空気にたどり着きます」

だいぶぬるくなった缶紅茶を飲み干し、上総は廊下から見える小さな庭を眺めた。季節外れのあじさいがなぜか咲いている。昼間なのに色の濃い朝顔がまだ咲いている。季節が微妙にずれているようだった。

いろいろ語らっているうちに、少しずつ新しい人も増えてきた。今度は小学生たちが集まり始めたようだ。そろばんを片手にじゃらじゃら鳴らして騒いでいる。

「そうだった、この部屋は日によってそろばん教室の特訓用に利用されるんです」

狩野先生の言葉を合図に、上総は立ち上がった。そろそろお暇しなくてはならない。ご馳走してもらったし、長い時間いろいろ話してもらった。上総ひとりのために想像以上のもてなしを受けたような気がする。靴を履いてすぐに外へ出た。

「先生、本日はありがとうございました。本当に、楽しかったです」

「僕もです。これだけゆっくり実のある話ができただけは久しぶりです」

日が落ちかけているけれども十分明るい夕暮れ時。上総は腕時計を覗き込んだ。

「これからどうやって帰りますか」

「駅までバスで出て、そこから車で帰ります。たぶん四時台のに乗ることが出来そうです」

「車道も夏休みですからまだ空いているでしょうね。気をつけてお帰りなさい。それと」

中学校舎から坂を下る場所で、頭を下げる上総に狩野先生は言い添えた。

「杉本さんたちのことですが、せっかくですから立村くんも一緒に行きましょう。恐らくですが、立村くんの力が必要になると思いますよ」

——やっぱり忘れたわけじゃなかったんだ。

「とりあえず時間が決まったら連絡します。もちろん杉本さんたちにも連絡して行きますので、抜き打ちなんてことはするつもりありません。せっかくだからゆっくり見学させてもらいましょう」

少しだけ引き締まる思いを胸に、上総はもう一度礼をし、坂を下ることにした。

——いや、俺が行って何もならないよ。杉本のことを理解してない人たちにこそ、見せるべき

であって俺なんかが足踏み入れたって邪魔扱いされるだけだって。でもやっぱり東堂には、桜田さんの名誉回復も兼ねて行かせたほういいよな。できれば、狩野先生にはその時の報告を後で、あの、「あおがた憩いの家」か、あの公園で聞かせてもらうほうがいいような気がする。それにしても。

しま猫の、顔を見上げて鳴いたときの桃色の鼻を思い出した。

——猫って本当に、喉を鳴らすんだな。知らなかった。

待ち合わせは夕方五時。青潟駅前改札口にて。

「お前そんなに遅く、誰と遊ぶんだ」

朝の段階で父に本日の予定を伝えたところ、げげんそうな顔で尋ねられた。

「中学時代委員会で一緒だった友だち三人と、海辺で花火をするんだ」

「まあそれだと、夜でないともまずいな。だがひとつ確認したいんだが上総」

朝食を終えて、上総に食器をテーブル経由で押しやり、父はじっと上総を見つめた。

「ただでさえ海の近くは人気もないし危険だろう。大人の付き添いとかはどうなってるんだ」

きた、この質問は覚悟していた。青大附属では中学・高校ともに海辺に出かける際は保護者の付き添いが必要となっていた。別に書類を提出するとかそういうわけではないが、親たちには中学入学の段階で事細かに説明されている。父の疑問ももっともだ。

「ああ、それ大丈夫」

できるだけさりげなく上総は答えた。

「中学で保健室の先生している都築先生と一緒に来る予定なんだ」

「保健室の先生がか？」

なおさら疑問は膨らむ一方らしい。上総は頷いた。

「そう、都築先生も花火やりたいらしいんだけど、なかなか女性ひとりだと辛いから、俺たちと一緒に見たいって言い出したらしいんだ」

「らしいって、お前が頼んだんじゃないのか」

当然、首を振る。

「そんなわけないよ。都築先生には他の友だちがちゃんと前もってお願いしたんだよ。俺はあまり都築先生とは話す機会ないからよくわからないけど」

あいまいな言い訳に聞こえそうではらはらす。なんとか父は納得してくれそうだった。

「わかった、とにかく大人と一緒にいるんだったら大丈夫か。だが九時前には汽車に乗れよ。どちらにしてもそう長居していい場所じゃないんだからな」

「十時にはうちに着くようにする、約束する」

かなりきわどい答えを繰り返している自覚はある。とりあえず上総としてはこれ以上つまれないうちに父を会社に送り出したい。立ち上がり、受け取った食器を台所へ運んだ。もちろん、汚れがこびりつかない間にすぐ洗うためだ。

無事、父の愛車がいつものエンジン音で走り去った後、上総も一通り食器の始末を終わらせ、ゆったり居間のソファに腰掛けた。天気はすこぶるよい。天気は今日までこの調子が続き、明日以降ゆっくり下り坂になると聞いている。

——母さんからまだ、ゆかたざらいの話、詳しいこと聞いてないな。

珍しいことだった。いつもだったらすでに母の猛烈な罵倒と一緒に打ち合わせを行うはずなのだが。予定としてはあさってと聞いている。八月に入ってからまったく連絡が来ないのだけが、

妙に気にかかる。父にもそのあたりは確認していない。いきなり朝、車で連れ去るつもりなのだろうか。それともわざわざ汽車か自転車で会場の「おちうど」まで向かえとでもいうのだろうか。人遣いの荒い母ならありそうなことだけに恐ろしい。

最初から「知らない」ことならば、後で文句を言われたとしても「知らない」で通せるのでそれはそれでいいのかもしれない。上総なりに自分を納得させた。まずは掃除機をかけておこう。主婦業とか女くさいとかいわれようが、やはり早いうちに掃除洗濯を終わらせておけば、十時以降はのんびり好き勝手できる。今日は四時台の汽車で向かうことにする。本当は「自転車で行きたいところなのだが、さすがにそこは父が許してくれそうにない。

まだ、朝七時を少し回ったところだった。早起きするのもいつものこと。もう少しごろごろしてもいいかと思うが、身体が動いてしまうのだからしょうがない。上総は掃除機を引っ張り出し、まずは廊下へ持ち出した。

——そろそろ宿題も手をつけないとまずいかな。

ここ一週間学校の講習続きで出かけることが多かった。久々に家でのんびりできそうだ。昨日、狩野先生と語らったことも身体の中にじんわりと広がってきていて、今朝も気持ちよく目が覚めた。一応は中学教師、はるかに年上、そんな存在にも関わらず、まったく不快感なく素直に言葉を受け取れる存在。この人の言うことならば、そのまま納得して動いてもいいかもしれない、そう思える。

——杉本のことだけは別としても。そうだよな、語学だけじゃ、まずいよな。

じっと自分に問いかけてみる。夜、机に向かい日記をフランス語で綴りつつ……以前ドイツ語で書いた時に母が読破したことがあり、それ以来フランス語に切り替えた……響いてくる何かを感じとってみた。ノートの切れ端に今度は同じ内容を日本語で綴ってみた。さらに、強く、自分を押し戻すものがあつた。

——狩野先生の言う通りだ。僕は青大附中に入学してから語学能力だけを認められて三年間を過ごしてきた。少なくとも英語なら一通り自分の思っていることをすべて書き残すことができるし、ドイツ語とフランス語、中国語もなんとか簡単な内容だったら聞き取る程度はできる。でも、よく考えたら僕がもしその国で生まれ育っていればだれでも出来ることだと思う。もし僕がアメリカ、イギリスで暮らしていたら当然英語がネイティブになるだろうし、ドイツ語もフランス語も一緒だ。

だけど、語学が出来たからといって何の役に立つのだろうか。

今役立っていると言えるのは、友だちの宿題や授業の訳文を早く仕上げ、みんなに答えを配って喜ばれることくらいだ。あとは、洋楽を聞いている時にライナーノートなしですぐに歌詞を書き取れることとか、外国の新聞で友だちが喜びそうな記事があれば切り抜いて溜めておき、プレゼントしたりすることもできる。

でも、それ以外、これから先何に役立つのだろうか。

みんながこんなに喜んでもらえるのならば、役立てたい。青大附属の中ではきっとできるだ

ろう。だけど語学力があるからといってどういう仕事に就くことができるのかわからない。

狩野先生に指摘された通り、僕の職業イメージは外交官、通訳、翻訳者くらいしか思いつかない。外交官と言ったのは、中学時代祖父母のところに挨拶に行った時、語学が得意と伝えたところ将来は外交官も夢ではない、とか言われたからだ。具体的にどういう仕事なのかまったくわからなかったけれど外国語をぺらぺらしゃべることが必至なのだということだけは理解した。それからなんとなく夢見てきたところもある。通訳や翻訳者はさすがに僕でも分かる。ふだん授業でやっていることを職業にするだけなのならばそれでもいい。英語の先生になることはまったく考えていない。人にものをわかりやすく教える自信なんて全然ない。

今、思いつく職業がたったの三つしかないということが怖い。

狩野先生の言う通り、僕はもっと視野を広げる必要があるのだと思う。もっと散歩をしているようなものを見るべきだということだけど、その通りだ。僕は今まで、学校の近くに「あおがた憩いの家」なる旧家を元にした建物が存在することも知らなかったし、猫があれだけたくさんいる場所もみたことがなかった。それ以前に、猫を触ったことすらなかった。本当に、何も知らない。井の中の蛙とはこういうことなんだと自覚している。

これからはもっと、たくさん、いろいろなものを見て、金沢の言う通りにいろいろな人に出て話をしたり、チャンスがあれば場数を踏む努力をしないといけないと思う。そうしないと、小さな世界しか見えないまま、高校時代が終わってしまいそうな気がする。

書きなぐった紙はすぐに細かく引きちぎり捨てた。日本語の日記なんて爆弾をこの家に保存するなんて危険なことを誰がするか。嗅覚の異様に鋭いあの母が何をしでかすかわからないではないか。

一通り掃除が終わり、気がつけばもう少しで八時二十分前。まだまだ時間はある。上総は新聞を開いて最初に死亡広告欄を確認した。知り合いがいないかを確認するのが義務と、母に小さい頃からしつけられている。社会面の下に固まる黒枠の死亡広告が並び、その隣に細く「霧島呉服店」の電話番号が表示されているのを見つけた。

——それにしても珍しいな。霧島の奴、全然連絡してこない。

嵐の前の静けさでないといののだが。上総はすぐに次の紙面に目を移した。目を通し終わったら、テーブルの下に置きっぱなしになっている「週刊アントワネット」の古い号を読んでみようと思った。どれが父の書いた記事か、予想してみよう。」

夏の高校野球記事をざっくり読み終え、新聞をたたんだ上総は次に「週刊アントワネット」のバックナンバーを手にした。マガジンラックに押し込められているのだが、たいていは父しか読まない。上総もあえて今までは知らない振りをしていた。大人向けの週刊誌だが、特にグラビアとかそういうものはほとんどなく、ただ青潟の街に関する話題の一環として歓楽街などに触れることはある程度、と聞いている。もちろん父から聞いたのではなく、見出しや読んだことのある連中から聞き知った程度だが。大人向けの雑誌である以上、目の前にあっても書き手がその場にいる以上、手を出す勇気は今までなかった。

まず、ページをめくる。最初の数ページがカラー、その後は白っぽいペラペラした白黒の紙を使っている。つまんで重みが来る程度の厚み。かなり古い号で、今年の五月半ばに出たものようだ。青潟の経済事情や公立高校受験情報内申点情報、その他私立高校に関する噂話……青大附属ももちろん含まれている……など、多岐に渡っている。次号の予告には青潟近郊の名医探し特集なども組まれているらしい。

——そんな号じゃなくてよかったよ。

すでに卒業したけれど、水口や奈良岡の二人の顔が思い浮かんでしまう。奈良岡彰子はまだいい。母が眼科医ということは聞いているが、特に目だって悪い噂を聞いたことはないから。問題は水口だ。「水口医院」は青潟市内でも有数の大病院で水口もがきんちょそのものの性格にも関わらず、実は学年トップを譲らずに卒業した秀才くんなのだ。おそらく問題起こさなければ跡を継ぐことになるだろう。だが水口病院は、上総たち当時中学生の耳にも入るくらい、「ヤブ医者が集まり」とか「医療ミス多発」とかその代名詞に利用されることが多い。元三年D組の連中もそのことはみな承知していたが、だからこそあえて知らん振りし水口こと「すいくん」を「おもちゃ扱いして遊んでいたところもある。

——けど、結構きわどいこと書いてるんだな。

興味のあるところだけつまみ読みすることにする。やはり「青潟大学附属」に関する情報にはアンテナが働く。「青潟市名門中学・高校と言えば青潟大学附属だが、今年の中学入試から受験生に求められる資質が変わってきているとの裏情報あり」だとか。そんな情報があれば在学中の上総にも十分話が伝わってきそうなものなのだが。

そこまで考えて、先を追ってみる。

——やはり、高校にも影響があるのかな。このことは。

ひやりとする部分が、確かにある。

記事はそれほど大きいものではなく、青潟市内の中高入試情報の一こまに過ぎない。青潟大学附属も中学入試のレベルだけが恐ろしく高く、高校入試はまた別の意味でほんの少ししか募集していないこともあって、わりと上総の知っていることしか書いていない。ただ、

「青潟大学附属関係者の談話：特出した個性よりも成績・人格ともにバランスの取れた生徒を優先して入学させる傾向がここ一・二年多く見受けられる」

などという嘘か本当か分からない情報が挟まっている。いったいどこの関係者なんだろうかと質問したくなる内容だが、上総も少し気になっているところではある。

「ここ一・二年」となると、上総たちが入学した年の二年下あたりだろうか。霧島が入学した年と合致する。成績よしでも性格に難ありの生徒をあえて不合格にしたい傾向が、もしかしたら出てきているのかもしれない。特出した個性、というのもそれに通じている。上総がたまたま青大附中に合格できたのは、国語を始めとする文系科目の成績がずばぬけていたからではないか、というのが巷の噂だ。そうでなければ当日ほとんどと白紙すれすれだった算数の結果で、合格するわけがない。ただそれも、たまたま「特出した個性」の一環として選ばれたのだとしたら納得はする。この記事を読む限り、今後の青濤大学附属中学入試は、すべての科目がバランスよく点数取れていて、かつ性格もどこぞの誰かのように嫌われやすすくない相手を選びたい、と言うところに落ち着きそうだ。

——俺はかろうじて拾われたってことか。けどこの流れでいくと、中学入試だけじゃないよな。バランスよく成績のいい奴って。俺なんかどうするんだよこれから。高校もこのままだと数学とことん落ちこぼれていくこと決定だしさ。狩野先生も慰めてくれたし、野々村先生もいい先生だと思うけど、でも、肝心の俺が鳥頭だとどうすればいいんだよ。

この辺は「週刊アントワネット」にまだ記載されていない。ただ、上総たち青大附高生には日頃ささやかれているネタでもある。

——お前知ってるか？ 大学推薦でさ、今までだったらよっぽどへまやらかさねば黙って大学推薦で青濤大学に進学できただろ？ そう思って俺たち入ったよな？

——そうだけど、変わるのか？

——あくまでも噂だけだな。大学側では一科目でも極端に赤点続きの学科があり、改善の見込みない生徒に関しては受け入れない方針を採りたがってるらしいんだ。

——おいそのネタ、確証あんのかよ。

——ねえよそんなの。けど中学の教師連中たちからしたらそれは決定事項らしいぞ。だから今、中学入試だっといういろいろ変わってきてるだろ。いままでだったら、特定の才能が秀でてるってだけで一発逆転できたけど、そういうわけにも行かなくなっちゃう。極端な話、金沢や立村タイプの奴は落とされるってこと。

この話の上総は加わっていない。たまたま別のクラスで夏休みの講習中に聞いた話だ。もっと言うならば、上総がこの手の噂話を聞いたのがその時が初めてではない。羽飛からも、南雲からも、評議三羽鳥連中からも、言葉は違うがそれなりの話を聞いている。

——かなりこれは、本当っぽいよな。

狩野先生を前に不安を述べたのは、このあたりにも理由がある。学校側が一学期終了を前に上総に対する対策を講じてくれたのもそのせいかもしれない。簡単に改善できるものだったらどんなにいいかと思う。何度も机に向かって宿題を解いてみようとしてみたが結局果たせず落ち込むのみ。おそらく、貴史か美里がこしらえてくれた数学の回答集を丸写しするはめになるだろう

。 —目指すは、青潟大学英文科なんだけどな。こうなったら英語トップだけは死守しないと

。 ため息を吐く。誰もいない。ページをめくる。

取り立てて興味深い記事もなく、最後のページ、編集後記に何気なく目を通した。

—父さんも書いてるんだらうな。

記者である以上どこかに筆が入っていることは確実だ。署名記事ではないので、父の文章がどれなのかはわからなかった。どういう文章を書いているのかも正直想像がつかない。あえて言えば署名が付きそうなのは「あとがき」とか「読者の声」コーナーの返信とか、せいぜい編集後記くらいだろうか。あまり期待はせずさっと読んだ。

—え、これ、(r)って、もしかして。

何度か読み返した。最初はただの偶然かと思った。しかし、それにしてもあまりにもシュチュエーションが似すぎている。もう一度、目を凝らした。

「私事になりますが愚息の話題にたくさんのご意見を頂き恐縮している(r)です。当時十四歳の一人息子が初めての彼女を部屋に連れ込んだことに対しての対処。父親の判断としては正しいのご意見が圧倒的ですが。避妊具を一パック渡すという行為に関しては是非が分かれており、親という仕事の難しさ感じる次第です。そんな息子も十五歳、まだまだ悩みは尽きません。ご教授のほどを」

—つまり、あれだな。これ、二年前のクリスマスのこと、言ってるよな。

発行週を確認する。雑誌のローテーションがどんなものかわからないが、「編集後記」の紙面を使い、(r)とか言う記者のひとはわざわざ自分の一人息子の自宅デートを取り押さえたことを自慢げに綴り、ご丁寧にも息子への説教と一緒に避妊具一パックを手渡し練習するよう促したことで書きまくったわけだ。最終ページでありながら、「恐縮」するくらいの反響を頂いてわざわざここでもお礼を述べているのか。もし「愚息」が上総自身のことであれば、当然モデル料としていくばくかの謝礼が必要なんじゃないのかとも思うがそこまでは追求するのもぞっとする。上総が危惧しているのはひとつ、今後もこの(r)なる人物は、自分の「愚息」に関する与太ネタを不特定多数の読者に提供していこうと考えているのでは、という一点につきる。

—冗談じゃない！ 何がジャーナリストだ！ 単なるプライベートの切り売りやってるだけじゃないか！

母に関してはすでに信用などしていない。ただ父に対してだけはまだ、少し期待していたところもあった。多少疑問に思うことがないわけではないけれど、おそらく母にそそのかされてるのであって、きっと本心は違うのだと信じていた。

しかし、そんな期待など一瞬のうちに消え去った。

結局、ふたりともお神酒徳利、お似合いなのだ。

上総は静かにマガジンラックへ「週刊アントワネット」をしまいこんだ。できるだけ読んだあ

とが残らないように注意深く差し込んだ。まかり間違っても両親に日記など読まれてはならない。うっかり本心を口走ってもいけない。かくなるうえは、身を守るためにアラビア語を勉強しようと誓った。さすがに両親ともども、第二外国語でアラビア語を学んでいるとは思えない、そう信じたい。

涼しいうちにいったん勉強でもしようと部屋に戻った。まだ朝の九時を回ったところだ。洗濯機と乾燥機を両方終わらせてたたりすれば、食事以外の家事はすべて終了する。天羽がふざけて「立村、俺んここに嫁に来いよ」とからかったことがあるけれど、いざ一人暮らしする分にはこれだけであれば十分生きていけると思う。

——どうせ夏休み最後の三日間は例の旅行だしな。早めに仕上げておこうか。

気が重い話だが、母と顔を付き合わせるのはこの夏休み中まだまだ予定がある。ゆかたざらいは序の口、最終三日間は母と共に二泊して少し遠出の手伝いに出かける。具体的にどのようなイベントなのかは上総も把握できていないのだが、それなりに男手も必要なのだろう。こき使われる覚悟はしている。

上総はまず、自由研究用のノートを広げた。最終的には原稿用紙にすべて清書して提出する予定だが、貴史や美里たちから指摘された通り、上総自身の妄想に近い内容だとやはりまずいと思う。自分なりに頭を整理してもう少し客観的に伝えられるようにしたかった。とはいっても、何度考えても上総の中にうごめくのは、自分の生まれ育った場所であり環境を愛することが出来ず逃げ出して解放感を味わったであろう若き画家の青年に対する共感だけである。実際描いたという絵画も上総の心にはインパクトを一切残さなかったし、芸術界のややこしい事情も正直どうでもよかった。

——なぜ、恵まれすぎているこの場を逃げ出そうとしたのか。それまでに生まれ故郷を憎んでいたのか。どうしてそこまで、お膳立てされているその場を愛せなかったのか。

ぐるぐる、何度も頭の中がうごめき、やがて静かに止まる。そこを狙って綴り続ける。原稿用紙と違い横書きのノートだと、気がつけば何ページも重ねてしまう。

一時間ほど集中して書き上げた後ノートを閉じ、次の課題に取り組むことにした。

読書感想文はとくに七月の段階で仕上げたし、理科のプリントについてはすべて誰かから答えをもらって書き込んでおいてある。数学だけが今難儀しているところだが、羽飛か美里か、それとも南雲あたりか、数学を得意とする奴らに頼ることができそう。となると、もうほとんど終わったも同然ではないだろうか。

——すべて実力で片付けたわけじゃないけど、まあこんなもんだろうな。

あとは自由研究のまとめをもう一度か二度、ふたりと打ち合わせてまとめればなんとかなりそう。最初受け取った時にはどうなることかと思っただけ、それぞれの得意分野をぶつければ意外とあっさり片がつくものだ。

——それにしても、他の奴みんな自由研究何やってるんだろうな。聞いている限りだと関崎を筆頭とする外部三人組は歴史関連のことをしているみたいだし。天羽や難波は何やってるんだろう。まさかシャーロック・ホームズ研究なんてことは想像つかないし。更科はどうなのかな。あいつもまじめに勉強するなんてところ見たことないな。

夕方会う予定の元評議三羽烏とも、ご無沙汰だった。講習の時もすれ違うことはあったがなか

なか時間が作れなかった。せっかくだ、気心が知れた同士とことん遊びまくってやることにする。外で友だちと花火をやるなんて、何年ぶりのことだろう。

——ロケット花火とかねずみ花火とか、まとめてスーパーで買ってくか。

ひとつ気になることがあった。この点は父と一緒にだった。

——なんで、都築先生を引っ張り出したんだらうな。

天羽から昨日の夜電話で聞かされた時はかなり驚いた。そもそも青大附中の養護教師としか認識していなかったし、その名を聞くまですっかり忘れていた。天羽曰く、

「ご存知の通りさあ、うちの学校妙なところでくそまじめだろ？ 大人がいないと夜遊びできねえよってふざけるなって感じだわな。そしたら更科が都築先生に交渉してくれて、一応別の場所でたむろうことにはしているけど、名目上は俺たちの監視係を引き受けてくれるって話になったんだよな。まあ理由は野暮なこと突っ込むことなしてことにおきたいよな。わかるだろ、立村？

暗黙の了解とはこのことだ。上総もこれ以上細かい突っ込みは、天羽の指示通りしなかった。

——やはりそうか。けど本当なのか？ どこまで本当なんだよ？ 更科がもし都築先生の家の中にもぐりこむくらいの関係だとしたら、これって大問題だろ？ かなり噂になっているはずなのに、なんで誰も注意したりしないんだらう？ 謎だよな。

勉強に疲れて机の脇に置きっぱなしの麦茶を飲む。だいぶぬるくなっていて、ひんやり感がない。氷も解けていて味も水っぽい。今朝沸かしたばかりの麦茶を冷蔵庫にポットごと冷やしたが、果たして飲み頃に冷えているだろうか。

ベットに仰向けになり寝転んだ。これだけ勉強に励んだのだから少しくらいは怠けたっていいだろう。両手を伸ばして伸びをした。

——ほんとに、どうなんだらう、更科も。

実は仲間内で一番危険な橋を渡っているのが奴じゃないかと、上総はひそかに疑っている。そもそも更科と都築先生との噂は中学一年の頃から響き渡っているし、更科本人も認めているときた。からかわれればそれなりにチワワな笑顔で肯定する。都築先生もイエスカノーかを生徒の前で言い放つことはないが、更科とは気軽に冗談を言い合ったりしている。上総から見たらそれは、気の合う先生に対する気兼ねない語り合いにしか過ぎないのだが、そこからどうして「教師と生徒の禁断の恋」に発展するのかが理解できなかった。

——いや、もっと謎なのは。

何度考えても答えが出なかったのは、それだけおおっぴらに話題になっていながら、学校側が一切動かなかったことだった。もともと青大附属は生徒たちの人間関係を粒さに見守る学校だし、少しでも不自然な言動が見かけられたらすぐに呼び出しがかかる。最近の例だとやはり杉本と桜田の家庭教師ごっこに尽きる。霧島の上総にひつつく姿がいつのまにか職員室の話題になっていると狩野先生も語っている。ふつうだったら見逃してほしいと思うところまでじっくり観察するのは、うざったりつたらない。

更科と都築先生との関係には、まったくもって放置のままだった。

評議委員とはいえそれほど目立つわけでもないし、個性の強い天羽、難波、ついでに言うと例の霧島ゆいの間を取り持ってちょこまか動くのが更科の役割だった。女子受けも人懐っこい笑顔でもって抜群だし、それでいて仕事もきっちりこなす。かといって同じ年齢の女子は子どもっぽく見えるらしくて興味なしと言い放つ。難波とコンビで動くことが多い更科だが、恋愛沙汰に関してはきわめて賢く立ち回っているように見える。

——もう中学卒業したし、縛りはなくなったと考えればいいのか。

最近では美化委員で仕込まれたという華道を、都築先生宅玄関で披露させられているという本人の談もあり。いったいどこまで本当なのかわからない。年上好みは昔からと言えばそれまでのだろうが、更科は上総の評議世代において唯一、嘘か真かが見分けられない男子だった。

——それにしてもどうなんだろう。どこまで本当なんだろう。俺からしたら年上の女性と付き合うなんて想像すらできないよな。霧島もそうだけど、年上だと思いきりお説教されそうじゃないか？ 偏見って言われたらそれまでだけどさ。俺も決して人のこととやかく言える立場じゃないけど、でもやっぱりなんか変だよ。

あれこれ考えているうちにうとうとしてくる。そのまま目を閉じる。

——もし、そのことが本当ならどうするんだろうな。これから先。更科の自己申告通りに都築先生宅に入り浸っていて、それなりのこともしていたりしたら、このままだと都築先生側が法律で罰せられたりしないのかな。一応、合意の上かもしれないけど、更科だって未成年だし。そのこともまったく考えてないなんてないよな。

今夜、本当に都築先生が花火の場に現れたならば、そのあたりもじっくり観察してみることにしよう。更科がいい奴だということは霧島ゆいのことも含めてよくわかっているつもりだ。難波のことを一番心配していたのも更科だ。ただ、やっぱりまずいものはまずいんじゃないかと不安になるのもまた事実だった。

家でぐうたらするのはよく考えると久しぶりだった。昼寝したり、途中昼ごはんをめんどうくさくて今朝と同じコーンフレークで済ませたりして気がつけば二時過ぎだった。四時二十分台の自動車でも間に合うのだが、むしろ少し早めに行って駅前で時間つぶしでもしていたほうがよさそう。三時頃に出て一時間くらい 駅前の店をうろうろしよう。

シャワーを浴びてから身支度を整え、手帳を何気なくめくる。

夏休みが終わるまでの予定確認だ。

——ええと、明日も何もなくて、あさっては例のゆかたざらい手伝いで、その次の日あたりに自由研究の打ち合わせか。

計算してみれば夏休みもあと十日を切っている。毎日遊びほうけてきたけれども、あと一週間ちょっとでまた学校へ舞い戻ることになる。気が重くないと言えは嘘になる。宿題がほぼ完了しつつあっても、やはり面倒くさいことには違いない。

上総は手帳の空白を指で押しながら、さらに三日間を丸つけした。

母との旅行という、口論確実な二泊三日の旅が待ち受けている。

——動いていれば顔合わせないですむからかえっていいのかもな。

上総なりにわが身の防御については現在模索中である。最後の一日はまるまる何もないのでのんびり休めそう。それにしても、旅行に連れて行くといいながらいまだに目的地を一切教えないというのは妙だ。いくらなんでもこんなこと、今まで一度もなかった。

——母さんにしては、めずらしいな。ほんと俺どこに連れてかれるんだろう。

あまり深く考えないことにした。どうせあさってには判明するだろうから。

財布とかばんなど身の回りのものをそろえた後、上総は二時半過ぎに家を出た。歩いていくのもかったるいがしかたない。行きがけにスーパーに寄りファミリー用花火一式を一パック購入して持って行くことにした。たぶん天羽あたりがちゃっちゃと用意しているとは思うのだが、念には念を入れておく。

駅について定期券でホームに下りるとタイミングよく青湊行きの鈍行が到着した。乗り込み最奥の席に座り、窓辺を眺めた。品山の景色は見慣れたもので、遠くに大きな川が流れ、はるか向こうに山々が青く光っている。川を渡る汽車の窓から眺める水の色は、雲ひとつない青空で輝いている。ちらほら、泳ぎに出ている子どもらや釣りに興じる連中もいる。観察する間もなく通り過ぎた。

——あの川、泳いだらまずいんじゃないかな。

ふと思い出した。小学校時代は夏休み前、「海や川で遊ぶ時の注意点」に関するプリントを渡されたものだった。海水浴は大人と一緒に、川遊びも同様だが決して泳いではいけないこと。いろいろ厳しい内容ばかりだった。もっとも上総は泳ぎが好きではなかったので自分から出かけたことは一度もない。せいぜい、青湊のプールに本条先輩に引きずり込まれる程度のことだった。

そうだ、海に出かけたことなんて、ほとんどない。夏の海なんて。

青いシャツの襟を深く外に折り、風を喉に向けて受けた。空いている窓から冷たい風が滑り込んでくる。心地よかった。

自動車にはほとんど人もいない。ゆったり進む車窓の景色をただ目で追っていた。近づいてくる景色に住宅街や学校が挟み込まれてくる。だんだん駅終点も近づいてきているということだった。

青潟駅に降りすぐ太陽の照りつける中歩き始めた。本当は書店に寄ろうかとも思ったが、あの「佐川書店」にだけは絶対近づきたくなかったし、それ以外の書店だと品揃えがあまりよくないのでよさそうな本が見つからない。ゲームセンターで時間つぶしするのもなんだか違和感がある。上総は海辺沿いの道に向かい足を向けた。駅の真後ろが海で、ヨットも数多く繋がれているようだった。のんびり眺めながら歩くことにした。

木で敷き詰められた道をゆっくり進んでいくと、あちらこちらにベンチが並んでいる。夏休み中だけでもっと人が座っているかと思ったが、意外にも空いていた。時計を覗き込み、まだ三時半前ということもあって座ってみることにした。潮の匂いが息苦しいほどで、さわやかとは言いがたい。すぐ側で眺める青潟の海はどことなくどす黒い緑色に見えた。揺れている小さめの観光船も、人はあまり乗っていないようで係員の人々が退屈そうにだべっている様子が遠くから見えた。青いのは空のみ。まっすぐなのは太陽のみ。

——あまり海は好きじゃないな。

何度も思うことを、再度感じる。海の近い街に育ったはずなのに、憧れのようなものがまったくくない。波打つ海の色と揺れるちりめん模様の柄を眺めるたびに、自分の好きなものではないと何度も実感する。そういえば、羽飛がやたらと上総を誘って海を見ようと誘っていた。やはりこのあたりが好みの差なのかもしれない。

——この海が好きな人もたくさんいるんだろうな。

どう思う？ 杉本？ そう聞きたくなかった。もちろん隣には風とかもめのみ。

ふと後ろに人の近づいてくる気配がする。駆け足のようだった。振り返った。まさか自分をめがけて追いかけてくるなんて思っていなかった。声が出なかった。

「やはり立村か！ よかった」

息を切らせて穏やかに手を振る男子がひとり、その後ろ十メートルほどに二人組の男女がいる。一人は密接に、もう一人は顔見知り程度だった。笑顔を返すしかない。

「ああ、関崎、お久しぶり」

講習の間は曲がりなりにも学校で顔をあわせていたのだから、まったく久しぶりというわけでもないのだが。まずは挨拶した。日ごとに黒味を帯びていく関崎の肌に、どれだけ遊び歩いているのか聞きたくてならなくなった。

——ああそうだった。関崎とは、一度ここで話をしてるんだ。

二年前の二月。葉牡丹の花の処分方法について。頭から振り払った。

関崎はデニム製のトートバックをぶら下げ、中に大量の紙を押し込んで上総の後ろに突っ立っていた。重そうではないが、かさはありそうだ。後ろに連れがいる以上長居はしないだろう、上総も落ちついて交わした。

「自由研究か」

「よくわかったな。そうなんだ、俺も今、あいつらふたりと組んで毎日青潟市内を歩き回っているんだ」

「確か青潟の歴史か何か、だったよな」

うろ覚えの記憶で尋ねると、

「ああ、青潟市内の記念碑を訪ねてその由来みたいなものを調べているんだ。俺としては全部回りたいと思っていたんだが、あまりにも数が多すぎてこの夏休み中に片付けるのはかなり厳しいと気づいた。そこで、今回は青潟市内の駅前付近に絞っていこうと決めたんだ。もう少し時間がほしいとは思う」

「足で調べてるんだな、すごいよ」

とは言うものの、上総からするともっと賢く調べればいいのにと思わざるを得ない。あまり歴史方面に詳しいわけではないが学校の図書館だけではなく、青潟市郷土博物館などに行けば詳しい方々がいろいろ教えてくれるはずだ。上総が調べたわけではなくて、中学時代似たような研究をしていた他クラスの生徒たちから噂で聞いた話だった。もっと言えば、中学の自由研究で誰がかしら提出しているテーマじゃないかとも思う。

「青潟郷土博物館とかは、行ったのか」

さりげなく聞いてみた。関崎はもちろんといった顔で頷いた。

「ああ、毎日通っている。俺の家から歩いてすぐの場所だからな」

「毎回足を運んで調べているのか？ 大変だよな。俺だったらもっと手抜きして調べるかもしれないのに。図書館とかから資料集めて書き写すだけかもしれないのにな」

「いや、それはだめだ。俺はそういうやり方は苦手だ」

きっぱり、やはり関崎らしく言い放つ。後ろの二人組がひそひそ様子を伺って話をしているのが気にかかる。関崎はしゃべり出したら周囲への気遣いを思いっきり忘れてしまう性格だとは思っていたが、やはりこれはまずいだろう。

「俺もあまり歴史は得意なほうではないんだ。受験で仕方なく勉強した程度だ。だが、今回の自由研究を通して、青潟には数限りない忘れてはいけない歴史の記録が残っているのだと改めて実感したんだ。実際足を運んで、場合によっては見学させてもらったりして、見えてきたものがたくさんあるんだ。これは本をめくっているだけでは知りえなかったものだったんだ。ひとり、仲間に歴史マニアがいるんでその影響もあるのかもしれない」

——どちらだろう？ 名倉か？ それとも静内さんか？

どうでもいいのでさらっと流した。上総は静かに答えた。

「やはり三人集まると文殊の知恵って本当なんだな」

「ところで立村。あさっては暇か？」

突然強引に関崎は話を変えた。答えは用意できている。すぐに首を振った。

「親の関係で用事があるんだ。ごめん」

「そうか、それなら次の日は？」

「俺も自由研究の追い込みがあるから、友だちと集まって打ち合わせする予定なんだ」

「そうなのか、ああ、それだったらその次の日は、どうだ？」

どんどん詰めていく関崎の迫力に嘘がつけない。家で手帳を覗いた限りこの日は何も無いはずだった。

「一応、空いてるけど」

「そうか、それだったらぜひ、ゆっくり話さないか」

満面うれしげに関崎は上総の右肩をがっちり押さえた。

「天気がよければいい公園があるんだ、そこで敷物しいて、バドミントンでも用意して身体を動かそう」

「バドミントン？」

今気づいた、巨大なトートバックの奥にはラケットの柄らしきものが覗いている。

「雨が降ったらせっかくだし俺の家に来てもらってもいいんだが、兄貴と弟がいるからなあ。その時に何か考える。それよりとにかく自由研究やいろんなことをお前とじっくり話したいんだ。いいか、空けてもらえるか」

肩にがっしりのかった関崎の右手がやけに重い。

「わかった、いいよ。俺も空けておくから」

そう答えずにはいられない。そうしないとたぶんこいつは上総から食いついたまま離れない。

「よし！ 今日はまだこれから回る場所があるからあとで時間について連絡するからな。それじゃ！」

上総の答えを確認するや否や、関崎はくるっと背を向けて仲間ふたりに駆け寄り、そのまま駅の反対方向に向かって歩いていった。三人ともジーンズ姿だった。上総の身近ではあまり見かけない格好だった。

——関崎の奴、終業式の仕返しするつもりかな。いいさ、受けて立つ。

かもめが群れを成して空を旋回しているのが見えた。上総は立ち上がり、海に背を向け駅に戻ることに決めた。

駅前のデパートで文房具を眺めたり雑誌を立ち読みしていたりして時間をつぶし、気がつくともう五時十五分前だった。そろそろ駅でスタンバイしていてもよい頃だ。上総は結局買わなかった手帳に心を残しながら、エスカレーターで一階へと降りていった。

まだ日が落ちない。花火にはまだ間がある。四人で集まってもまだどこかでぶらついているしかなさそうだ。その辺りはおそらくリーダーの天羽がそれなりの計画を立てていることだろう。気にはしていなかった。

青潟駅の改札をちらっと見て、まだ誰も到着していないことを確かめる。

汽車を使って通学するのは四人の中で上総だけだから、待合室で座っていればいい。誰かが来ればすぐに出て行くつもりだった。

「おやおや、二番手はお前かよ。はええなあ」

空席を見つけて座ろうとしたら、肩越しに声をかけられた。もちろんすぐに挨拶する。

「天羽も、もう来てたのか」

「そりゃあまあ、下準備ってもんがあるからな。立村、こっち来い。空いてるぞ」

背中を合わせる形になる席に天羽が座っていた。気づかなかったのは黒のTシャツに白のショートパンツという、天羽にしては珍しい格好をしていたからだった。

「どこか行ってきたのか」

「こんないい天気のうちでくすぶってるわけいかねえだろ？ もっちりプールでひと泳ぎしてきたところだよん。もちろん、野郎どもと一緒に、ナンパはノーサンキュー」

「誰もそんなこと聞いてないのに」

「ほんとは真夏の海で思いっきり泳ぎたかったんだけどなあ。どうも俺の予定と空模様とがあわねえもんだから、結局海水浴にはいけずじまいなんだわな。くっそー、めっちゃくちやくやしいぜってとこ」

「まだ夏休みあるんだし、そんな悲観しなくたっていいのに」

上総が適当に合いの手を入れると、

「そうだなあ、まだ十日あるもんな」

指を折って数え、膝を打った。

「さあさ、それはそうと立村。お前も何ぶらさげてんの」

ビニール袋に入れたままの花火セットに手を止めた。

「いや、いらなかなと思ったんだけどなんとなく」

「ああラッキー！ じゃあ俺が無理に買う必要ねえな。これだけありゃあ間に合うぜ。本当はさ、みんな集まってからその辺で買ってくかって思ってたんだがなあ。それだけありゃあ十分。どれどれ見せて見ろ」

無理やり引っ張り出し、ビニールごしに吟味する。上総も横から覗き込む。

「打ち上げも一本ある。へー結構線香花火もあるなあ。ねずみ花火五つも入ってるんだ。これは

結構燃えるぜ。あ、一応な、バケツとかマッチとかは更科が全部用意してくって今朝連絡があったんだ。火事の恐れもなし。ってとこ」

「更科がか？ でもバケツとか持っていくとなると、ここまで荷物になるんじゃないかな」

何気なく疑問をぶつくと、天羽は指で「ちっちちち」ときざっぽくポーズを取る。

「そりゃみなさんご存知の通りってやつよ。あいつ彼女んちにしっかり泊まって、そこからまっすぐ来るんだからな。車で到着に決まってるだろ」

——都築先生の家からなのかな。

上総は息を整えた。時計盤を見上げた。まだ十分程度間がある。口を切った。

「あのさ、今夜、都築先生が来るって話だったけど、それ本当か？」

「あ、それな、カモフラージュ」

きっぱり天羽は否定した。首振りながら「ノンノンノン」とつぶやきながら、

「都築先生って二十五歳とはいえ、乙女だしなあ。こんなところで高校生相手にわあきゃあやりたい気分じゃあねえだろ」

「でも、昨日お前電話でそう言ってなかったっけ？」

「厳密に言うと、保護者として責任者、ではあーる、それはまちがいなーし」

芝居がかった言い方をするのはやはり天羽のお家芸だ。

「現場にはいる。車で更科を連れてくるし、たぶんその辺で女友だちと騒いで入る、らしい」

「騒ぐって、友だちと？」

「そりゃあ、都築先生に友だちいないってことねえだろ？ 夜は更科連れてうちに帰るはずだし、保護者同伴であることには変わりないってわけ。でも、俺たちが花火で燃えまくっている時にはその辺のファミレスでおしゃべりに夢中になってるはずだけどなあ。そう俺は聞いたぞ。じょうだんじゃあねえだろ。更科はともかく俺たちからしちゃあ先生だろ。先生の前ではめはずせるか？」

「確かにそれはそうだね」

頷きつつ、また改札口を見る。となると、今日ここで待ち合わせるのは難波のみということになる。

「更科とは現場集合か」

「そゆこと。あいつらはふたりでくるからたぶん六時半頃だと思うぞ。ホームズ到着と同時に俺たちもなんか腹ごしらえしようぜ。ハンバーガーとか飲み物とか持ってってもいいし。そっか、敷物もあったほういいよなあ」

不思議だ。

タイミングよく聞き出してみようと思うのだが、どうも呼吸が合わない。

更科が都築先生とそれなりに出来ているということは、青大附属生の間で公認の事実だと理解はしているのだが、まだそのことに対するリアリティがない。天羽の言う通りだとすると更科は夏休み中、都築先生の家に住んでいることになる。都築先生が一人暮らしかどうかは確認していないけれども、どちらの親も知っていたら許すとは思えない。

しかも今夜はこれから、都築先生の車に同乗して現れるとくる。もちろん帰りもだ。

これは本当に、あっていいことなんだろうか。二十五歳と十五歳……更科の誕生日は十二月…
…の十歳差恋愛というのは、こういっただらなんだが、成り立つものなのだろうか。

「お前らもう来てたのか」

三人目到来。難波が銀縁めがねに白いポロシャツとジーンズ姿で現れた。こいつもそれなりに黒く焼けている。それほど珍しくはないが、いつものホームズ気取りはどこぞといった感じだった。

「お、集合五分前にもう全員揃ったってわけか、優秀優秀」

「あとは更科だけか」

上総がつぶやくと、難波は生真面目に首を振った。

「立村、お前も知ってるだろ、更科は遅いってことをだ」

「今、天羽から聞いたんだ」

まあまあ、といった風に天羽が自分の隣に座るよう難波を促した。待合室の出入りは激しく、みな腰を落ち着ける暇がなさそうだった。

「そ。俺が説明したの。立村、あまり年上恋愛事情に詳しくなさそうだし、俺なりにレクチャーしてやったのだよん」

「天羽も、違うだろが」

苛立つように難波は膝を拳骨で叩いた。

「あいつがそんな軽々しいことやってるわけないことわかってるだろ？」

「まあまあ」

「ちょっと待ってくれ、難波、聞いていいか」

突破口が見つかった。上総は天羽にかぶさるようにして、難波に尋ねた。

「結局のところ、あのふたりってどうなんだろう。俺にはまったく何がなんだかわからないんだけど。わざわざ保護者役買ってくれたんだから御礼も言わなくちゃいけないと思うしさ。けど更科がいるんだったらあまり俺たちが口出しする必要もないかなと思うし」

「よくわかってるだろ、お前の言う通りだ。そっとしとけ」

難波はさっと前髪を振り払い、めがねをかけ直した。

「人にはな、触れられたくないものだってあるということ、そこのお前が一番よくわかってるだろが」

重たい一言ではある。

あの難波に言われるとは。

「まあ、難波もそう意地になりなさんなって。俺たちの間柄だと暗黙の了解だと思ってたんだがなあ、よく考えると立村はあまり真実のふたりについて知らないのも無理ねえなあ」

「観てりゃわかるだろ」

吐き捨てるようにつぶやく難波に、上総も言い返す。

「いや、噂ばかりで本当のところは全然見えてこないなとは思ってたよ。聞いちゃいけないかなとは思ってたし」

「素直に聞けばあいつのことだ、するするっとしゃべるに決まってる」

「けど、一歩間違ったら犯罪だよ。俺も詳しいわけじゃないけど、未成年者と大人が付き合うのは法律に触れるらしいって聞いたことがあるんだ」

こんなところで意地を張るつもりはなかったのに、引けなくなっている。

「俺が知りたいのはあのふたりが出来てるとかどうとかじゃないんだ、このこと、ばれたら大変なことになるかもしれないのになんでみんなおおっぴらにしてるのが、どうしても疑問なんだ。天羽、難波、そう思ったこと、なかったか？」

「この辺でいいだろ、ほら、いくぞ」

その場を仕切ったのはやはり天羽だった。黒いTシャツをぱふらぱふらさせながら立ち上がり、上総の手元にある花火を改めて受け取ると、

「じゃあ、これから買ってっか、それとも食べてっか、どっちにする？」

思わず上総も難波と顔を見合わせた。食べ物の話になると諍いもどうでもよくなる。

「軽く食べておくか」

「そうだな、ハンバーガーでも食っとくか」

意見は一致し、駅前のファーストフードに入って適当に好きなものを注文することにした。特にこだわりはない。いつぞや南雲の家でご馳走してもらったどでかいハンバーガーとは違い、いわゆる普通の平べったいものだった。味わうわけではない。それでいい。

さっさと二階の四人席を押さえた。同じ年代だが知らない奴らばかりがみなおしゃべりに興じている。夏休み中というのが丸わかりだ。

「とりあえず、うちのがっこの連中は誰もいないとみた」

天羽は難波に声をかけ、上総を最奥の席に座るよう指示した。

「腹減ってちゃあいらつくばかりだろ。まあ食え、それが一番だぞ。難波、お前もだ」

特に文句を言うでもなく難波は黙ってトレイを置き、ひたすらハンバーガーに食いつき始めた。ちらと上総のトレイも覗き込んだ。

「チキンバーガーにしたのか」

「なんとなく」

天羽と難波が普通のハンバーガーで、上総だけがチキンバーガーというのも別に奇をてらったわけではない。ただ食べたかっただけだ。まだ夕食には早い、海べまで歩いたこともあってか食欲はそれなりにあった。昼をコーンフレークで済ませておいてよかったと思う。

「でだ。話蒸し返すようだがな、立村ちゃん」

それぞれハンバーガーを平らげ、第二部のフライドポテトと飲み物それぞれに取り掛かった時、天羽が切り出した。

「さっきの更科のことなんだがなあ。俺もお前に全然話、してなかったのは悪かったと思ってる。てっきり知ってるもんだと思ってたけどなあ」

難波は黙っている。気まずさの交換を目が合うたびしているようだった。上総もウーロン茶で喉に流し込みながら頷くだけにした。

「いい機会だし、俺たちの更科坊やに対する認識を一致させとくのも悪くはねえよな」

「もし、秘密事項だったら無理には聞く気ないよ」

「おい、話を持ち出したのは立村、お前だろが」

また突っかかってくる難波を、今度は上総も無視した。

「まあまあ慌てるな難波、お前の方が更科の事情よく知ってるのは俺もわかってる。けどな、

まあ、これから何が起こるかわからんってんも確かにあってな。なあ、立村もそのあたりなんとなく、わかるだろ？」

わからないが、とりあえずは頷いておく。

「都築先生も嫁入り前だしいろんな噂が流れるのはなんかやだろうしな。いざって時のために準備をしておくのも悪くはねえよな。そう思うだろ、難波」

それぞれの様子を伺いながら、天羽は話を進めていく。

「更科も立村がこのこと全然知らないとはまったく思ってもいねえだろうし、ま、そこんところ黙って聞いてちょ。てなわけだが」

手を軽く叩き、天羽はふたりをテーブルに集めるようなしぐさをした。当然、とっくにテーブルについているので無理にひつつく必要もない。さすがに小声で話すことにはなる。

「実はな、あの二人」

芝居がかった口調で天羽は続ける。

「生まれながらの、許婚ってことよ」

——いいなずけ？

「おい、でかい声出すな」

「出してないよ。けど、それ、まさかだろ？」

驚き過ぎて言葉すら出てこないのに、難波の奴、まるで上総が絶叫したような目で見ると。天羽がすぐに説明に入る。

「冗談と思うのも無理はなし。そりゃあそうだ。俺たちの世代で結婚相手が決まってるなんてことねえしなあ。彼氏彼女のお付き合いだってばったばたしてるってのに、冗談じゃあねえよなあ。ただ俺の今言ったことは一切嘘なし。更科もあっさりしゃべってるぞ」

「俺は一度も聞いたことないけど」

上総はつぶやく。本当に、一度もない。気がつけばできていた状態だ。

「ああそうだよなあ。立村、お前、一年の頃俺たち同期よかずっと本条先輩にべったりだったろ？ あの頃にしゃべってたことだから、ああそうだよな、タイミング逃したな」

「そうか、そうだな、天羽納得だ」

いきなり共感しあう天羽と難波を睨みながら、上総はフライドポテトをひたすら口に押し込んだ。食べるのが一番だ。動揺を押し殺すには。

「あんまし詳しいことは俺も聞いてねえけど、更科の家庭事情が結構入り組んでて、実は当の本人もよくわかってねえらしいんだよ。とにかく、政略結婚しなくちゃいけないうちの坊ちゃんだってことは確かなんだが、どうみても普通のうちの育ちにしか見えねえなあ。とにかく、更科は生まれた時から都築先生と結婚しなくちゃいけないはめになっちまってるの」

「だから青大附中に入学したのか？」

混乱する頭を整理するのも追いつかず、飲み込んでから質問、質問してから飲むか食うかのどちらかするしかない。

「さあなあ、ま、今思えばC組にはキリコもいたしA組ほどのコネクラスではないにしてもそれなりの裏はあったのかもしれねえなあ。更科が言うには、もうそのことはわかりきってたし、覚悟もしてたんだそうだわ。同級生にキリコがいたにも関わらずまったくよろめかねなかったのはひとえに、最初っから、姫君が保健室にいらしたからってこと」

「でも、十歳離れてるんだろ？ 入学した時だって十三歳だとして」

「そうそう、その通り。十三歳で結婚が決まってるなんて普通考えられねえだろ？ 戦国時代だったらまだしもな。更科はともかく、都築先生もまだまだ女盛り、中学生のガキなんか相手にしたかあねえだろ」

「そうだよ、俺が小学一年の女子に手を出すようなものだし」

難波が上総に紙ナフキンをぶつけてきた。すぐ払った。言葉はない。

「戦国事情がいろいろあったんだろうし、更科も覚悟だけはあったけどそれ以上のことはよくわからないみたいなんだ。ただ、将来は保健室のおねーさんと結婚するんだよ、ってことだけは言い含められてたらしい。そこで、将来の花嫁に取り入れるため更科少年が行ったことが、いわゆる周りに、『都築先生大好き』光線を撒き散らすこと」

「そう言われてみれば確かにそうけど」

おおっぴら過ぎる更科の、都築先生への恋心はただ笑うしかない。上総はずっとネタだと思っていた。むしろ年上の女性にちょっかいをかけて遊んでいるだけかと思っていた。せいぜい真実が潜んでいるとするならば、年上好みという点くらいだろう。疑ったことすらなかった。

「でも、更科はたまたま年上好みだったからよかったけど、都築先生はどうなんだろう。結婚が決まっていたからって、都築先生は迷惑なんじゃないのか？」

「まあ、それも確かにある」

天羽は否定しなかった。難波も頷くのが見えた。

「更科のラブコールを最初のうちは都築先生もいなしていたようなんだわな。中学生男子のファンクラブの延長みたいな感じで遊んでいたみたいなんだ。けどなあ、ここからがやっぱり政略結婚の部分ありってとこでだ」

声音を低く。

「学校側が、このふたりの結婚をバックアップしだしたんだわ。別にさ、何かをたくらんだわけじゃあねえよ。ただ、覗ざる聞かざる言わざる、黄金のスリーパターンを徹底しだしたってだけなんだがな。立村の言う通り、まったく、口出しをしなかったんだ」

「やはり、あれはたくらんでたってことなのか？」

クーラーで身体が冷え切りそうになる。言葉が震える。

「学校側も、双方の親にあのふたりをくっつけてもらいたいという頼みを聞いてたみたいで、本来ならば禁断の恋になるべきところをあえて知らん振りを決め込んだというわけなんだわ。これはすげえことだぞ。俺たち今年で出会って四年目ってわけなんだが、その間更科だけは一度もスキャンダルに巻き込まれてねえだろ？ 俺たち三人そりゃあもうえらい目に」

今度は難波が天羽の後頭部をひっぱたいた。「ってえ、何するんだホームズ」とおどけつつ、それでも天羽は語るのをやめない。

「学校側としてもメリットあるんだろな。あのふたりが結婚するといろいろと。めんどくせえ事情がいろいろあるんだろうし、都築先生がそもそも親の言いなり結婚には抵抗してたみたいでな。そらやだろう？ けど、更科はあきらめずに求愛し続けたってわけ。その結果が今にいたると、ま、そのあたりは思いっきりすっ飛ばしちまったけど」

「今は、都築先生も更科を受け入れたってことなのか？」

恐る恐る尋ねると、難波が引き取ってぶっきらぼうに答えた。

「受け入れざるを、得ないだろ。あいつが犠牲にしてきたもん考えたら、そのくらいするだろ」

——犠牲？

問い返せなかった。何か、言葉の裏にびっしりと苔のようなものが張り付いていそうで、口が動かなかった。

あまり突っ込んではいけないような内容というのは上総も把握した。とりあえずは黙ってウーロン茶を飲みつつ、今夜の予定に話を逸らすことにした。

「更科は六時半か」

「さっきも言ったろ。駐車場に直接車置いてくるから現地集合だつてな」

難波が機嫌悪そうにつぶやく。

「それまで時間つぶしてわけか。まだ一時間くらい間があるね」

時計を覗き込む。周囲の中高生たちは誰も腰を浮かす気配がない。長居上等、やたらとクーラーが強く感じるが気のせいだろう。ウーロン茶を切らさないようにする。

「せっかくうちのがっこ連中がだあれもないんだ、少しはまじな話したっていいだろ、学校近辺ではしゃべれねえ話をちょいとな」

天羽が場を取り持つ。

「いいけど、どんな話？」

「二学期以降の、戦略だよ旦那、そりゃー当然！ ほら難波、立村にもうちっと話しとけ。うっかりこいつに情報回ってねえなんてことになったら、本番中ことだからな」

じわり、また冷気がうなじに刺さる。難波も頷いた。

「それもそうだ。立村ちゃんと聞けよ。これからが本番なんだからな」

「わかったよ、それで具体的には、何？」

ふたりの肩を組むようにして、にやつきながら天羽はささやいた。

「内部上がりの逆襲、はじまりはじまりってことよ」

——とうとう本気出す気なんだ、天羽たち。

気にはなっていたことだった。「外部三人組」……なんともセンスのない呼び名だが荘としか言いようがない……の快進撃に危機感を持った天羽たちがひそかに勝負の時を待っているのは気づいていた。実際何度か企画の場にも立っている。しかし「外部三人組」の代表ともいえる関崎乙彦と親しい上総としては、どうも共感できないところもある。その点は天羽らにも伝えてある。ただし、拳固でぶっ放すような勝負でもやらかさない限りは静観がベストというのが上総の判断でもある。

「まず現在入ってきている情報からいくか。外部三人組の二学期以降は、立村も知っているかもしれないが関崎が評議に、静内は評議のまま、ってところだろ。名倉はトリオの中でも立ち位置正直よくわからんが、奈良岡ね一さんと幼馴染って話も聞いているぞ」

「そうなんだ、初めて聞いた」

奈良岡彰子、現在医師になるための専門高校に水口と一緒に進学した、いわゆる「あんまん姫」かつ、南雲が人生において正真正銘まじめに振られた相手でもある。

「で、次なんだが。そうすると自然とA組の規律委員ポストが空く。どういうことかわかるよな、ホームズ」

「俺に聞くより立村に教えてやれ」

また難波はにこりともせず上総を見やる。しかたないので答えてやる。

「夏休みに入ってから後期規律委員のことしつこくいろんな奴に言われているけど、まだ何にも決まってないんだって。なんか巷では俺が後釜になるような話が進んでいるみたいけど」

「なんだわかってるじゃねえの。さっすが立村ちゃん、わかったわかった。じゃあ続き行くぞ。俺たちが聞いている話では、麻生先生もお前をなんとかしてどっかの委員に押し込みたいと思ってるらしい。藤沖が応援団に燃え上がっている以上クラスにそれほど関わるとは思えねえ。じゃあどうするってことでかつての評議委員長をひっぱり出すチャンスってことになる」

「言われたら受けるかもしれないけど、自分から何かする気は全然ないよ。俺は人ひっぱる能力全然ないってこと、お前らが一番知ってるだろ」

「ああそうだな、引っ張るって意味ではな」

またいらっとくることを難波がつぶやく。

「お前が規律委員に入ることでのメリットは、むしろ俺たちにあるんだ」

「難波？ 天羽？ なんで？」

問い返すと天羽も難波に親指立てて「GOOD!」のサインを送る。

「理由その一、A組は三年間クラス替えがない。B・C・D組は来年になったらおさらばだ。どういうトッピングになるんだかかわからんがまた一からやり直しだ。場合によってはまた俺たちと同じパターンでせっかく続けられた委員会に続けて関われなくなっちゃう可能性もあるというわけだ。そのくらいわかるな、立村？」

「ああ、だいたい」

難波がめがねをついと上げる。

「そういう状態で、もし立村がこのまま規律に張り付いてくれればたとえメンバーが入れ替わったとしても要がしっかりした状態で持っていける。たまたま選ばれただけでひょっこり入ってきた奴が一人か二人いても、お前は半年間リードしているわけだし他の連中とも連絡とっておけばまたうまくいく」

「そういうものかな」

「理由その荷、もし立村が規律に入ったら、南雲は確実に喜ぶだろ」

——確かに。

南雲と東堂に両手で迎え入れられそうな気は確かにする。

「今のところ南雲が来年規律委員長に上がるのは確実に言われている。どこの組に振り分けられたとしてもそれは確定だろ。あいつの人気じゃあな。さらに青大附中時代の実績もある。『青大附中ファッションブック』を季刊誌で本格化させたのはあいつの功績だ」

「でもまだ一年だし先のことは」

上総が言いかけると天羽が「黙ってる」とばかりに手で押さえるようなしぐさをする。

「立村がいきなり入っても南雲がいればバックは完璧だ。そして理由その三なんだが、さすがにこの辺は分かるだろ？」

「わからない」

一言で断つ。難波があきれはてたかのように肩をすくめる。

「しょうがねえ。じゃあ聞いてろ。お前B組の規律が清坂だってことは忘れてねえだろな」

「知ってるよ、十分に」

「だったら、東堂と清坂がかなり険悪だってこともよく知ってるな」

「双方から聞かされてる。大変だよな」

難波は鼻を鳴らし、上目遣いで言い放った。

「いまだに仲良しこよしやっているお前なら、B組規律委員同士の関係を保つためのクッション代わりになると、そういうことになる。立村が清坂をうまく機嫌取っていけば、男子規律連中はみな平和、ハッピーエンドとそういうわけだ」

——なんだか安易な発想してるな。

本当はそのくらい言い返してやりたいところだった。あえて黙っていたのは、

——けど、清坂氏の話し相手になる程度だったら、俺にも出来るかもしれない。

ちらりと心によぎったものがあるからにすぎない。

「まあまあ、難波も演説ご苦労さん。俺も概ね同意。とにかく立村がどんな形でもいいから委員会に戻ってもらえれば、これから先俺たちの計画もすっげえスムーズにいくってわけなのよん、わかるよねえ」

「よくわからないけどさ。ただ、頼むから関崎たちにへたな挑発するのはやめろよ。別に『外部三人組』っとか言ったってそれは俺たち附属上がり人間が勝手に呼び習わしていることなんだから。天羽の目的はむしろ、外部のみなさんばかりをひいきしないで、たまには附属上がりのことも評価しろって訴えることだけだろ？ こればかりはどうしようもないって。俺には人のこと言えないし成績だってお世辞にもいいとは言えないけど」

「そうよ、そこそこ、立村ちゃん」

何がぴんと来たのか、いきなり天羽が甘ったるい声を上げた。

「夏休みが終わったら自由研究提出だろ？ 自由研究は今回グループで好きなこと研究するだろ？ 立村は確か羽飛と清坂と一緒になんかやってるんだろ？」

「まあそれなりに」

内容には触れてこなかったのが物足りない。

「俺の集めた情報によるとだ」

難波がまた、いやみっらしい言い方で割り込んできた。

「外部三人組は、青潟の有名な石碑を熱心に分析してるんだそうだがな」

「ああ聞いた。さっき関崎とすれ違って話したよ。足を使っているいろいろ調べているみたいだよ」

別に隠す必要もなさそうなので伝えておいた。

「立村、お前知らねえかもしれないがな。夏休み後自由研究を先生がたが吟味して、高く評価されたものにはなんだか褒美を取らすって噂があるんだぞ」

「ふうん、それが？」

中学でもそれなりに評価はみなしてもらっていたんじゃないかと思うが、なぜ天羽がそこまで

重大そうに語るのか、上総にはつかめない。

「俺たちは青大附中時代からずっとやりたいことを自由研究でやってきたと。ところがその三年間をすっとばして外部連中の方が高い評価受けてみる、立場ねえだろ」

「ない、かな？」

疑問は消えない。上総も首をひねる。難波が平手でテーブルを叩いた。

「ないに決まってるだろ！ ただでさえ軽く見られている今年の附属上がり連中がさらに馬鹿にされてしまうと、さあどうなる？ 関崎はA組、静内はB組のそれぞれ評議委員。しかもA組となるとへたしたら三年間ポジションが変わらない。青大附属のやりたいことがとことん出来るといった校風が下手したら変わってしまう可能性がある。特に何にも知らないくせに、正義を振りかざれたりして、気がつけばってこと、お前、考えないのか？」

いくら熱く二人に語られても上総には、頷くことができなかった。

——気持ちはわかるけどさ。でも、なんだかんだ言って、外部三人組の人たち、青大附高になじんでるよ。関崎見てたら、よくわかる。

しばらく時間つぶししているうちにほとんど冬も同然の空調に耐えかねて三人とも店から出た。

「結構露骨だよな」

鳥肌が立っている上総が腕をさすりつつ言うと、

「寒がりの立村がそういうくらいだから、相当俺らを追い出したかったんだろうなあ」

伸びをしながら天羽が答える。

「客と思ってないんじゃないか、商売として間違ってるぞ」

難波が相変わらずむっとした表情でつぶやく。

「しかたないって、どんどん入れ替えねえと店もまわらねえんだよ。しょうがねしょうがね」

さっと空気を変えるべく、天羽はさっと右手を海の方へ差し出した。

「やっぱ、海に行くっきゃあねえよ！ 夏だぜ、夏！」

それなりにペットボトルを始め飲みものやちょっとしたスナック菓子を二袋くらい用意し、レジャーシートも用意していざ出陣と相成った。まだ時間は六時過ぎ。三十分くらいで更科も到着するはずだ。

「そ、更科待ちってことなんだけどな、みなの中よっく考えてくれたまえ」

また天羽がルパン口調でふたりに語りかけてくる。

「この空、なんだ？」

右手で天を、左手で地を指す。

「まあ確かに、そうだな」

「花火にはまだ早いよな」

「そういうこと。となると更科が来てもしばらくは花火に火はつけられないってことになるというわけだよ諸君。どうやって夜を待つか、だな」

天羽の言う通りではある。夕暮れが迫ってきたとはいえ、今の時間に花火をやっても意味がない。花火とは闇に浮かぶ華だ。太陽に打ち消されれてどうするというのがだ。

「でも三十分くらい待てばどうにかなるよな」

上総も同意しつつ、腕時計を覗きこむ。これだけ仲間がいればさほど時間をつぶすのに苦労はしないだろう。かといってここで人生論を語ったりする気もない。さっき十分ハンバーガー食べながらいろいろまずいことなど相談しあったのだから。

「じゃあ、場所をとっところか。この当たりの浜辺にすっか」

天羽は手早い。すでに場所の目星をつけていたらしくすぐ砂浜に下りた。夜はあまり海の側に近づかないようにとのご沙汰が出ているため波打ち際ではなく、車道にも比較的近い場所を押さえていた。

「やっぱな、満潮干潮ってのもある」

難波がよくわけのわからないことをつぶやきつつ、そそくさとレジャーシートを敷いた。上総

も浜辺の大きめな石を拾い集めて四つ角に置いた。

「まあ四人十分座れる位置ではあるわな。まだ明るいから必要ねえかもしれねえけど、これもだ」

かばんから取り出したのは巨大な懐中電灯だった。大きめの水筒ほどある。

「ラジオつきでもあるから、万が一の時に便利だってこと。あ、電池も予備のあるからなくなったら言えよ」

実に準備万端だ。天羽の手際によさにただ感心する。

「あのさ、まだ花火は開けなくてもいいかあ」

「湿気がくるからぎりぎりでもいいぞ」

難波が答える。こいつも気がつけば自分で用意したらしい小型の折りたたみ椅子と小型の三脚を用意し、カメラを取り付けている。

「どうしたのこれ」

「見りゃ分かるだろ。写真を撮るんだ」

「それはもちろんわかるけど、ここで撮ってどうするつもりなのかなと思って」

「俺が写真好きなのも忘れたのか？」

忘れたわけではないがその言い方はないだろう。言い返したいのをぐっと答えて上総は天羽に近づいた。バケツが必要だと聞いた記憶があるが買わなかったのはなぜだろうか。

「あ、そうそう。これな、更科が車で持ってきてくれるって。やっぱ火を使うとな、危険だからってこと。いくら海にあれだけ水があったって全部塩水だし取りに行っている間に炎上しちゃったら元も子もねえだろ」

となると、一通り準備は整ったということになる。手持ちぶたさで夕闇落ちる海辺を眺める。泳ぐ奴はさすがにいないにしても、やたらとアベックがうろうろしているのが目につく。しかもスキンシップが激しい。目に毒だ。

「立村ちゃん、気持ちはわかるが今夜は俺たち男子の友情でがまんしてちょ」

「何、言ってるんだよ」

見咎められて思わずうな垂れる。天羽が上総の肩を叩く。小声でささやく。

「やっぱしなあ、夏の海のアバンチュールってもんはいろいろあるってことよ。俺も噂でしか聞いてねえけどな。夏のこの、なんてっか夕日を眺めつつあまーい言葉をささやかれると女子たちもみんなぼーっとしちまうと。それで、『愛してる』なんてささやかれようもんならもうあとは、恋のA・B・Cまで一直線、って流れみたいだぞ」

「いや、まさか野外だしそんな」

天羽の言葉は真に迫っていてつい、引き込まれそうになる。

「と、思うだろ？ 普段はそうなんよ。理性のブレーキって奴があるからなあ。けど、ただいま夏休み、こわーい親もいない、いるのは愛する彼氏だけ、身も心も開放されて、ゆったりした中で、さて、どうする？ いくとこまで行くっきゃあねえだろ！」

「いくらなんでも、外ってのはないだろ」

「立村は潔癖だねえ。まあそういうお前さんだからこそやらねばなんねえというところなの

よん、ってことでおーい、難波、そこでカメラいじるのもいい加減にしてこっち来い！」

まだ三脚をいじっている難波を呼び寄せると、天羽は腕時計を覗き込み、片手は腰にぴっと当て、

「じゃあ行くぞ、これからアベックの生態をじっくり観賞させていただこうではないの。一同出発！」

「ちょっと待てよ、生態って、その観賞って」

何しでかすつもりなのか、そのこと自体が把握できていない。難波の顔も覗き込んで見るが取り立てて驚いているようには見えない。

「言った通りの意味だ。真っ暗闇のところを覗き込むわけじゃあない。せいぜいAかBだ。見学しとけばお前の将来にも役立つだろう。行くぞ！」

——俺の将来？ 何言ってるんだ難波？

どうも今日は難波と会話がかみ合わないような気がする。しかたなくふたりに着いていくことにした。歩いていくうちに影もだんだん淡く、暗闇に溶けていく。

「お、早速第一弾発見！ いいか、できるだけさりげなく、そおっと近づくんぞ」

天羽は人差し指を口に当て、抜き足差し足忍び足といった風に腰をかがませた。先にいるのは確かに男女二人組、いわゆる「アベック」もしくは「カップル」とわかる。ただ海辺ではなく、上総が関崎と鉢合わせしたあたりのベンチだった。かなり海辺からは離れた位置となる。そもそも、闇の中でよくわかるものだ。

「後ろを通り過ぎるだけだろどうせ」

「黙ってあいつの言う通りにするんだ」

難波に制され、不承不承言われた通りにする。黙って三人、並んで歩く。すれ違うのはTシャツ姿の男女、および男子グループがほとんどで女子同士のお散歩組は見当たらなかった。

「さ、ここで、おふたりさんを驚かせに参りましょうか、みなの中」

「ちょっと、それまずいよ、颯どころじゃないよ、もしけんかになったら大変なことになるって！ おい、難波止めようよ」

何を考えているのかわからない。上総は天羽の腕をひたすら引っ張った。平気の平左で天羽に従う難波の片腕も掴んだがあっさり押し戻された。

「だって知らない相手だよ、迷惑だって、やめろって」

「もうここまできたんだから覚悟を決めろ」

「覚悟ったってまずいよ、人間としてやっちゃいけないことだって！」

「うるせえなあとにかく黙れ。そんなにいやなら置いてくぞ」

足が動かない。ふたりが足音を忍ばせて近づいていく先を、上総はぬるま湯に似た空気の中食い入るように見守るしかなかった。常識を逸している。いくらなんでも見知らぬカップルを見つけて、こともあろうに脅かそうとするとは。ふたりともその手の「常識」は持ち合わせている奴だと信じていたが、まさか、夏休み、解放されたからといってこんな、人の心をつかめないようなことを平気でしようとするとは、絶対に許せない。いや、許せなくてもやってしまうのな

らば、これからどうすればいいだろう。少なくとも逃げると言う選択肢はない。

「天羽、難波、こっち来いよ！」

思いっきり、自分の出せるだけの声で叫んだ。

天羽が振り返った。難波が振り返った。ふたりとも影だった。

ついでにベンチのふたりも振り返った。うちひとりが同時に立ち上がり、バックをかかえるようにして駅方向へ走り出した。

——たまたま、そっちに行っただけってことにすれば、きっとばれないで済む。けど、気づかれたかな、そうだよな、女子なら気づくよな。

「立村、早くこっちに来い！」

叫び返したのは難波だった。と同時に、ベンチに残ったもう一人の男も振り返り、甲高い声で呼びかけた。

「待ってたんだよ、ほら、大丈夫だよ。立村も一緒に行こうよ」

——更科？

三人が楽しげに上総を手招く様子に、上総はまだ、固まったまま動けずにいた。天羽らしき影が上総に近づいてきて、肩を抱いてささやいた。

「種明かししとくと、最初っからあすこで待ち合わせってことだったんだわ。お前に言わずに済まなかったな。さ、すねてねえでこっちに来いよ」

すっかり暗闇の中、難波が設置した三脚とカメラを目印にして自分たちの場所に戻ってきた時、更科が心配そうに様子を伺いに来た。

「これ、ホームズたちに頼んでやってもらったことなんだよ。立村に言わなかったのは悪かったけど」

「いいよ、怒ってなんかないから」

言葉とは真逆のことを答えてやる。何が「頼んだ」だ。こちらとしては知らないアベックだかカップルを邪魔なんぞして、そいつらがもしまずい人たちだったとして、修羅場になったらどうしようとかいろいろ考えていたのにだ。もし相手がいわゆる青潟近隣の筋金入り不良グループだったりしたらとか、大立ち回りにでもなればこちらに勝ち目はないしどうやって回避しようとか、短い間にもいろいろ考えたのにだ。

「別に都築先生を驚かそうなんてなんでそんなこと考えたんだとか、今先生はどこいっちゃったんだろうとか、疑問はあるけどこれ以上聞かなくてもいいし」

「これ、あとで説明するよ、だからさあ、機嫌なおしなよ」

一生懸命笑顔で機嫌を取ろうとする更科にも、もちろん愛想を振りまく気なんてない。

さんざん騙しやがった天羽、更科兩人に対しても同様である。上総の様子に怖気づいてか、それ以上話しかけてもこない。さっさと上総は持ってきた花火の袋を手探りで探し、天羽の持ってきた懐中電灯で照らした。

「あ、俺も懐中電灯あるある、出すよ。それとお詫びの印にこれ食べようよ」

やたらとでかい箱を抱えて持ってきたと思ったら、どうやら小型のアイスボックスだったようだ。更科がシートにおいて蓋を開くと、よく冷えたアイスクリームが四パック保存されている。ちゃんとへらつきだ。

「まずは食べてさ、それから始めようよ。それとアイス食べ終わったら持って来た缶ジュースとかこの中に入れとこうよ。きっと冷たく飲めると思うよ」

事の発端が自分であることを自覚しているのか、更科は細やかに動き回っていた。

いつまでいじけていてもしょうがないのはわかっている。

——けどあれはないだろ？

四人でシートに座り、それぞれ四つ角を陣取り、まずはアイスクリームに取り掛かる。暗くて見えなかったがバニラ味ばかりだったようだ。難波が、

「俺はモカが好みだったんだが」

とかわけのわからないことを口走って無視される以外、その間何も会話はなかった。

——だってさ、ひどいよな。最初から更科に頼まれて、わざわざ脅かしに行くってのもあまりいいこととは思えないけどな。せめて一言俺に言えよな。あの後びっくりして都築先生どっか行っちゃったじゃないか。更科とどういう話、していたかわからないけど、それなりに、まあ、いろいろあっただろうし。それを無神経な野郎組がわざわざ脅しに行くなんて、趣味が悪すぎると

言われても仕方ないことだよな。かわいそうなのは都築先生さ。まがりなりにも更科と付き合っているんだし、あんなこと普通されたくないよな。

女心なんて知らないし、気遣いなんて見当もつかない。ただああいう行為を喜ぶタイプの女性はそういないんじゃないかと思う。もし清坂美里だったら？ もし杉本梨南だったら？ 例外がひとりいる。古川こずえだとしたらそれなりに何か反撃が期待できるかもしれないがそんな特殊例を想定したってしょうがない。

「あーあ、うまかった！ サンクス、更科」

難波が満足げに叫んだ。すぐに三脚カメラに向かい、なにやらいじり始めた。

「でさ、先生どこに行った？」

「わかんないけど、たぶん大学時代の友だちがファミレスに集まって騒いでるって言ってたからそっちに合流したんじゃないかな」

「先生の制服を脱ぎ捨てて、ひとりの、少女にか」

「まあそんなとこだと思うよ。夏休みだもん、先生になんてなりたくないよね」

更科がしみじみと言う。続ける。

「天羽たちのおかげで少しは覚悟してもらえたと思うしね。しばらくご機嫌斜めかもしれないけど、しょうがないよ」

「お前もずいぶんサドっ気あるやり方するよなあ。その面こいて」

「やるなら早めの対処が必要だよな」

難波がカメラに熱中している間、天羽は楽しげに更科と語らっている。上総だけが背を向けてその会話に耳を傾けている。

「どうせ決まってることなんだし、早めにお互い覚悟決めておいて、あとは楽しく過ごせればベストだと俺、思うんだけどね。やはり、まだ受け入れられないのかなって気はするんだ」

「お前らも今年で何年目だ？ 四年目に突入か？」

「実質出会ってからと計算すれば四年目だけど、正式にはまあ、二年目かな」

——え、中三の時なのか？

上総の記憶だと、更科はかなり早い段階で「都築先生は俺のものだよん」とかわけの分からないことを口走っていた記憶があるのだが。

「立村がすげえ心配してたけど、法律の方とかどうなのよ」

「法律、ね。俺があと二年で十八歳になれば、あとは何とかなる」

あっさりとして更科は答える。上総が聞いているのを意識してだろうか。声が高い。

「選択の余地なんてないんだから、受け入れる準備をしとかなないとまずいと思うんだ。もちろん、いろいろ不安はあって当然だと思うよ。俺もまだまだ大学に進学したりとか、就職したりとかいろいろあるしね。でも、避けられないんだったらせめて前向きに行くしかないよ」

どうもひっかかる。問いかけたいがあえてこらえる。聞いては絶対にいけないような気がする。天羽はかまわず続ける。

「避けられねえとか言ったって、その、今はどうなんだよ。今はお前とそれなりとは言え、将来のことはそれなりに話してるのかねえ。やっぱり向こうさんあれだけ年が離れていたら、付き合

いのひとつやふたつ、してねえとも限らないしなあ」

「わかってるよそんならい。俺も最初からそれは言っている。形がそうなるまでは、好きなようにしていいからって」

——おい、それ、更科、お前が言う台詞なのか？

齒を食いしぼる。息を飲み込む。展開についていけない。

「そりゃあそうだよ、それなりに彼氏いたって不思議じゃないよ。実際、いろいろこれまであったって聞いたことはあるしね。もちろん俺も、面白いわけじゃないけど、しょうがないよ。十歳も離れてたらそんな束縛なんてできない。向こうだってガキの相手なんてしたくないよね。けど、決まったことなんだから、それを動かすわけには絶対に行かないんだ。そのことも、きっとわかってくれていると俺は信じてるんだ」

更科の口調には相変わらずの脳天気な軽やかさがある。何も恐れていないかのようだ。その語る内容が実に重たく、常識離れしている内容だったとしてもそのままあっさり話がまとまるんじゃないかと思えるほどにだった。

「俺が今できることってのは、ひとつだけなんだよね」

きっぱり言い切った。

「どうせ避けられないことだったら受け入れて、その代わり一緒に楽しく生きて行こうって。そのことだけはいつも言ってる。さっき天羽に頼んだことも、俺なりのメッセージなんだよ。すでに友だちにはばれてるし、学校側にも受け入れられてる。うちの親も相手の親も諸手を上げて大歓迎だよ。ただ、彼女の気持ちだけなんだよ。たまたま許婚が生徒と先生だったことと、年齢が離れすぎて、それと、絶対に避けられない運命だってこと」

——なんだろう、その「絶対に避けられない運命」って。

いきなり難波が割り込んだ。上総を怒鳴りつけた。

「おい立村、そこでひとりいじけてるんじゃないやねえ！ 早く出せよ花火！ これからとことん撮るからな。今年はこれで、自由研究完成させるんだから早く協力しろ！」

「難波、写真で自由研究なんてやるのか？」

怒るのも忘れて振り返り尋ねた。暗闇と懐中電灯の光の中、不気味に難波がカメラと一緒に浮かび上がる。

「俺が何をテーマにしようが勝手だろ！ な、更科、お前、そこの線香花火つまんで、どんな感じに映るか試してみろ」

「いいよ、じゃあマッチとろうそく、準備しようか。バケツの水もセット済みだしね」

そそくさと更科が動き出し、次いで天羽が花火の中からねずみ花火を取り出した。

「じゃあ順番はロケット花火からにするか、それともねずみ花火からにするか？」

「もうちょっと暗くなってからの方がいいだろ。最初は線香花火で行こう！」

上総は辺りを見渡した。海辺にはちらほらと、花火を目的とした人々があちらこちらに見え出した。中にはロケット花火ならぬ爆竹を鳴らしている奴もいる。自分たちがすでに、よくある海辺の集団のひとりに紛れ込んでいるのを感じていた。

火付け役は天羽。カメラマンは難波、更科と一緒に上総は手元にある花火を一本ずつ引き出して、普通にろうそく経由で点火した。

「ほらほら、お前ら、もっと花火をこっち向けろ」

「いやそんなことしたらあぶないよ」

「黙ってる、絵にならないっていつてるだろ！」

相変わらず頭から煙をもうもうと立てている難波に逆らうことなく、上総は花火の噴き出す先をカメラの三脚に向けた。もちろん近づけない。カメラでなんとかしてくれるだろう。

「あのさあホームズ、悪いけど次は大物だよ」

「ロケットか」

「いや、ねずみ花火」

更科がねずみ花火の塊を手に取り、天羽に渡す。手馴れたしぐさで天羽は花火を持ったまま火をつけてすぐに足元へ放り投げた。

「ねずみってんだからもう少し走れって感じだよなあ……。ん？ これ結構来るぞ。おいおい、足元まで走ってるぞ」

大げさに盛り立ててはみるものの、ねずみ花火とは名ばかりの、ほんの少しくりんと回るだけの期待はずれもの。あきらめず、残りの花火も全部取り出して、

「そいじゃあやっぱ、場所広いとこで複数走らせるってのはどうだ？ おい立村、お前少し離れて火、つける。更科は反対側。そうそうそんなくらいがよろしよ。んで俺がここ。正三角形、同時に火をつけるってことにするか。んで、難波、お前が撮る」

「つべこべ言っていないで早くつけろ！ 俺も集中力なくなっちゃうだろう！」

それぞれ順番にマッチで火をつけて、すぐに手放す。場所を少し広げたせいか、ねずみ花火はちよろちよろと足元を回りつつ、黄金色の火花を散らした。時々赤や緑も混じっているようだったがあっという間に終わる。果たしてカメラマン難波がどこまでしっかり撮影できたかは微妙なところでもある。

「まだあるかな、よーし、次は三人整列してみっか。難波、なんでもいいからポーズのリクエストなんでもよこせよ。ここには青大附中の誇る元評議委員メンバーがそろってるんだからな。モデル代高いぞ」

「ただでも釣りが来るだろが。脳天気なこと言っていないで早く、火をつけろ！」

天羽と難波のかけあいに笑いながら、渡された花火を軽く手元で回してみた。大回しすると飛び火が怖いのである程度ルールは守る。別のグループのように花火を複数持って振り回したり、ねずみ花火らしきものを魔球のごとく放り投げたりとこれはまずいんでないかといわれそうなことは、しないことにしている。しなくたって十分騒いでいられる。

「さーてと、次はそろそろロケット花火といくか！」

遠くでは爆竹の音も響く。後ろの車道にはバイクの軍団も現れつつある。暗闇の中、比較のおとなしく花火で盛り上がりはいたけれども、そろそろフィナーレに向かう必要があるのではと

なんとなく感じていた。天羽もそれに気づかないわけがないとも、

「天羽、じゃあ四本とも一気に火をつけるか。どうせ音がでかいだけだろうがな」

「まとめて打ち上げるのもまあいいよな。円陣組むか。少し離れて丸く置こうか。そいで、それぞれが火をつけて、真ん中に集まって、打ち上げられる花火を眺める。乙だねえ」

半径一メートル程度の話を描き、十字になるようにロケット花火を置く。難波に馬鹿にされたとおりしょせんスーパーの花火セットで買ったものだから期待はしていない。少しだけ火花が派手に噴き出して終わりだろう。

天羽の指示通り、四人それぞれ自分の分となるロケット花火の先にろうそくで火をつけ、すぐに中心へ集まった。背を互いに向け合う格好になる。火の付いたろうそくをすぐ吹き消した。蠟の焦げた匂いがする。

笛を思わせる音が甲高く鳴り、同時に火花を天へ吐き出す筒それぞれ。

それほど高いわけではない。出の悪い噴水のようにも見える。

「なんかな、こうやってみると、寂しいねえ」

しみじみと天羽がつぶやく。けらけら笑うのは更科だった。

「これでも小学生の頃は怖かったんだよ。今じゃこうだけど」

「次回はもうちょっと派手なのでやろう。全然絵にならねえじゃねえか」

「悪かったな。どうせ近所のスーパーで買った代物だよ」

互いに言葉をぶつけ合って、しばらくやりあう。最大二十センチ程度伸びた火花では満足できなかったのだろう。難波はしばらくひとりでぶつくさつぶやいていた。今夜一番の被害者と自覚している上総は、難波に言い返した。

「そんなに花火が気に入らないんだっただっかの花火大会観にいけばいいのに。何が気に入らないのかわかんないけど、何八つ当たりしてるんだよ」

「誰もそんなこと言ってねえだろが。お前がひとりとりとろしてるから教えてやっただけだろ」

「何がとりとろだよ、失礼だな」

一瞬、別の意味で火花が立ちそうになるところを割って入るのは更科だった。

「ほらほら、ホームズも立村もそうっかするなよ。それよか、疲れたからさ、なんか飲もうよ」

「おおそうだ、アイスクリーム待ってればよかったなあ。ほら、行くぞ行くぞ。腹空いたら人間いらつくもんだし、さ、行こ？ 立村ちゃん」

更科は難波に、天羽は上総に、それぞれひつつく。押し戻されるようにレジャーシートに連れていかれた。それぞれ気まずさもそれなりにある。自分の分のウーロン茶を更科が持って来たアイスボックスから取り出して半分飲んだ。

「まあなんだ、この四人で馬鹿やんのが一番気楽だわなあ。どう思いますかい、更科の坊ちゃん」

波の音が聞こえる中、天羽がシートに寝そべりながら更科に問う。穏やかに答える更科。

「ほんとほんと。やっぱりこういう花火は女子混ぜちゃだめだよな」

「同意」

「別に、どうでもいいけど」

上総も別にひねて答えたわけではなかった。青大附中評議委員会でたまたま同期だった四人とのつながりが深いことは言葉に出さなくても分かりきっていることだった。その一方で、上総の離れたところでさらに強い絆をこしらえているように見えるのが、どこことなく違和感あるだけだった。

「しかもこの四人だと、夜の海辺にかわいい女子をナンパしようとする奴が誰一人、いないと、そういう健全な集まりでもある。ま、女子には互いに飢えてねえから言えることかもなあ。

どうっすか、更科」

「そうだね、何が楽しいって感じだよ。手元で間に合うことを何故またって感じだし」

難波はそれには答えず、カメラと三脚の片付けに入っていた。

「こういうのどかな気分がいつのまにか、なんででしょうねえ、うちのがっこにはだんだん少なくなってきたんでしょうねえ」

「そうそう、それは思う」

太鼓もち更科の本領発揮、難波もつぶやいている。

「なんか、間違ってるよな」

上総は何も答えなかった。膝を抱えたまま、夜の海辺と爆竹の音を聞いていた。

——思えば、中学一年の頃からずれていたのかもしれないな。

更科のことからしてもそうだ。難波が言う通りとっくの昔に知っていても不思議ではない話だったはずだ。それを今までずっと知らずにいた。理由はひとつ、一年時はひたすら本条先輩にべったりだったから。二年に入ってから少しづつ距離を縮めていったとはいえ、スタートダッシュの段階での違いというものは、今からだとなかなか難しいものがあるのかもしれない。その一方で、接近して縮めようとも思わない。更科をとっ捕まえて、年上女性のよさについて熱く語ってもらおうとも思わない。

ただ、この場にいさせてほしだけだった。共感なんかしなくていい、二学期に入ってから天羽たちと同じ価値観をもてないかもしれない。ただ今だけは、こうやって、言いたいこと言えてやりたいことやれて、むかつくことも平気でぶつけ合えるこの四人で、夜をもう少しともにしたかった。

「立村、お前手つけてねえだろ、食えよ」

難波がスナック菓子を押し付けてきた。更科も誘う。

「そうだよ、食べておかないと後片付けで面倒だからさ。一緒に片付けちゃおう」

「そうだね」

ポテトチップスの袋に手を突っ込みながら、上総はそれでも言葉を控えていた。これ以上何かを口にしたら、三年間の記憶も霧散してしまいそうだったから。

父との約束は守った。ちゃんとぎりぎり夜九時台の汽車に乗り込み無事に家へたどり着いた。風呂も焚いたし、父が帰宅前にちゃんとご飯を温めるだけの余裕もあった。一風呂浴びてさっさとベッドにもぐりこみ、泥のように眠るのは仕方ない。夢ひとつ見なかった。

——少し寝坊してもいいよな、一日くらい。

今日は父も会社が休みのはずだった。暗黙の了解でたいてい食事は遅くてもよいことになっている。目が覚めた順に自分で適当にコーンフレークかバタートーストかそのあたりで軽く済ませ、あとは自室でのんびり過ごす。昼近くにようやく顔をあわせて挨拶を交わす、そんな日々だった。

窓を開け放したままで眠ってしまったのがまずかったらしい。ずいぶんと冷える。タオルケットをかぶったまま薄目を開けて見る。しとしと窓辺の音がしたたるように聞こえるのはきっと、雨だろう。上総が床に就いた時にはまだ小雨の気配すらなかったから、きっと真夜中あたりから降り始めたのだろう。花火を昨夜のうちに済ませておいてよかった。

——今日は思いっきり部屋にいるか。

手帳はかばんの中だから手が届かない。予定を組み立ててみる。明日は例のゆかたざらい手伝いで駆り出される予定なので早起き厳守、次の日は自由研究の追い込み、さらに次の日は関崎とバドミントンだか何かする予定。ずいぶんと盛りだくさんな夏休みだこと。考えてみればこうやって家族……父のみだが……と過ごす日というのはほとんどなかったと考えてよい。まあ父は完全に空気と同化した存在なので、食事の時のみ顔を合わせるくらいでちょうどいい。

壁の時計を見やる。まだ七時だ。学校に通っている時期なら遅刻で青ざめている頃だが今日は幸い夏休み、まったく余計なこと考えなくてもよい。洗濯物も一日くらいなら溜めておいてもいいだろう。少しはのんびり過ごしたい。

上総はもう一度目を閉じたまま、雨の音に耳を澄ませた。どこかからか、かすかに風鈴の音が聞こえてくる。

——更科の事情にはほんと驚いたよな。

疲れ過ぎてすっかり考えることを放棄していたが、やはりこびりつくものはある。

——花火片付けてから子犬みたいに駆け出してっただけで、本当にあれが「運命」なのか？ 「しかたない」ことだから「明るく受け入れる」のか？

天羽と更科それぞれの言葉からつむぎ出すしかない。話を少し整理してみると、更科は本人の意思とは別のところで、都築先生と結婚することを義務付けられていたということになる。その理由がどこからくるのかまでは聞かせてもらえなかったけれども更科は青大附中入学前からその現実を受け入れ、保健室の先生である都築先生を自分のフィアンセと意識して一生懸命求愛し続けていた。年齢差十歳および、同年代の中学生よりもはるかに見た目幼く見えがちの更科を都築先生が恋愛対象にするとは考えづらいが、それなりにいろいろあったのだろう。更科が中学三

年に上がった頃には無事、禁断の恋ならぬ暗黙の了解が出来上がっていたということになる。

——けどさ、やっぱり腑に落ちないよな。学校側の対応がどう考えても不思議だよ。

説明をそれなりに受けても納得できない。養護教師と男子生徒との恋。本人が開けっぴろげにしているほとんどの生徒が知らないものない関係。学校側になんらかのメリットがあって、あえて温かく見守っているのか、そのあたりも不自然だった。もともと青大附中という学校はいろいろな意味で法律を緩めに認識しているところがある。

——更科、何度も言ってたよな。「そうなることは決まっている」って。けど本当に決まっているのかな。あいつがひとりで思い込んでいるだけなんじゃないかな。

上総の謎集中ポイントはそこだった。年上好みのならそれは個人の趣味だし尊重されなくてはならない。あの場にいた野郎どもが更科の趣味を責める権利なんてない。もちろん上総を含んでいるが。だが、更科は会話の中で繰り返し「絶対に変えられない」と断言していた。都築先生との関係を大人たちの事情でセッティングされてしまった以上、その運命に逆らわず、むしろ楽しんで受け入れようとする姿が、更科の明るい笑顔とは裏腹に息苦しさすら感じさせる。いや、あの脳天気なはしゃぎっぷりすら、演技に見えてくるのは穿ちすぎだろうか。

——更科なりに、何か思うことでもあるんだろうか。どういう事情かわからないけど、きっと口に出せないいろいろなものあるんだろうな。天羽も、難波もそのことみな把握してあんなやり取りしてたに決まっている。俺が昨日まで全然知らずにいたのはしょうがないさ。どうせ俺は本条先輩べったりだったからな。

他の連中だったらそれも仕方ないと割り切れるだろう。

評議連中だったということだけが、どうにも上総には引っかかり続けている。

——やっぱり俺とは、違うところで連絡取り合ってたんだろうな。

考え続けているうちにまた眠くなり、枕に顔をつけて目を閉じる。

うたたねしてはまた目を覚まし、どうでもいいことを思う。

——「絶対」なんて、どこにもないのに。

八時過ぎ、ようやく身を起こす。

パジャマのまま部屋を出るのもなんとなく抵抗があり、濃い緑色の布帛シャツに着替えてみる。やたらと大きいのは父のお下がりだから。色も襟元に赤のチロリアンテープがあしらわれていて恥ずかしくなるほど派手だが、家にいる分にはそれでいいだろう。さすがに腹が空いたので、ひとりで食べられる何かを台所へ探しに行く。面倒だし、毎度のことだがコーンフレークにしようと思う。冷蔵庫から牛乳を取り出し、片手で一握りレーズンとピーナッツを混ぜ込み、冷たいままひたひたにかけた。しけらないうちに一気に食べきるのが上総の好みだった。自分なりに、うまくできた。

——それにしても父さん遅いな。かなり遅かったんだろうな。

たぶん父のことだ、皿は台所に下げっぱなしだろう。どうせ二人分だし食べ終わった後に片付ければいい。一人も二人もさほど違いはないのだから。

上総が一通り朝食を終えて立ち上がり、台所に向かい改めて洗剤を取り出した。

——あれ？

皿が二枚ある。昨日は蒸し鶏のサラダを適当にこしらえて冷蔵庫に入れておき、ご飯だけ保温ジャーに入れておいたはずだった。当然、一人分の用意だ。貴重な食材、無駄にはしない。相当腹が減っていたのか、二人分食べたのだろうか。ちなみに上総は自分の食事を終えた後はすぐに洗って片付けないと気がすまない性格だ。投げっぱなしにして休むなんてことは決してしない。

もう一度凝視してみる。

皿は確かに二枚。ドレッシングが皿に浮いたまま。

——二枚、だよな？

フォークも二本、箸も二膳、茶碗も二客分。

——まさか。

自分の皿も置いたまま玄関に走る。靴箱を確認する。黒いパンプスがちんまりと靴箱に納まっている。つややかだが地味過ぎてあまり見かけたことのないデザインだった。

——母さんのか？ いや、あの人は派手なものしか選ばない人だからな。でも、そうだったら誰の靴だろう？ 母さん以外？

血がどくどく逆流しそうになるのを心臓で感じる。音が喉元まで鳴り響いている。

靴が置きっぱなしになっているということは、まだ、その靴の主人が家のどこかにいるということだろう。母ならいい、いきなりでもしょうがない。だが、あんな地味でおとなしいタイプの靴を履いて我が家に現れる女性とは思えない。

——まさか、父さん、誰かを連れ込んだ？ いやそんなばかな。いくら俺が死んだように寝ていたからといっても、同じ部屋にその、誰かを誘い込むなんてそんなことしてたら気づかないわけじゃないよ。そりゃ、母さんとは法律上別れているし、誰かそれなりの相手がいたとしても浮気になるわけじゃないし、父さんには父さんなりにそういう相手をこしらえることは自由だけど、でも、いくらなんでも、それはないだろ？

ありえない、絶対にありえない。第一言ったではないか。上総の前で父は「母さんの仕事に影響があってもその時にはうちに帰ってくればいいことだし」とか。上総の認識では、父はいまだに母へぞっこんだ。浮気……いや、新しい恋人を作るなんてことは、まず考えられないはずだ。

「上総、朝ご飯すんだのか」

落ち着くため自分の部屋に戻ろうとした時だった。父の部屋の扉が開いた。

言葉もなく上総は振り返った。まだ寝起きの格好というのがありありとわかるランニング姿と、その肩の向こうにいる白い下着姿の女性を認めた。後姿のみ、シュミーズといわれるものだろうか。ベッドに腰掛けたまま髪を整えている姿はしか見えなかった。髪の長い人だった。急いで目を逸らした。父も気がついたのかすぐに戸を閉めた。頷きながら上総を食堂へ押し出した。

「とりあえず、二人分、コーヒー入れてもらえるか」

「わかった」

顔を背けてポットにお湯を沸かす。あとで麦茶も作らなくてはならない。台所の洗物を優先しようとした。出しっぱなしの水道を父が締めた。

「気づかない振り、してくれるか？」

「そうするつもりだけど」

誰が知らない女性の下着姿を目撃してしまい、挨拶なんて出来るものか。言葉がこわばる。もう一度水を流そうとしたが父に制された。

「母さんもきっと、ああいうところを息子のお前に見られたくはないはずなんだ。男の情けで、なかったことにしてもらえるか」

「嘘だろ？ あれ、本当に母さん？」

朝、短いスパンで三度目の衝撃だった。

はかなく細く、たおやかな後姿の女性。

あれが、日頃より上総のことをさんざん馬鹿息子扱いして罵倒しまくり、四年前までは共に生活し、さらに一ヶ月に一度は泊まりにきて我が物顔で女王様ぶるあの人とは。

「誰だと思ったんだ」

「だって、まさか」

裏の意味を読まれてかむっとした父にそれ以上言い返せず、上総は改めて蛇口から水を流した。母が父の部屋であのような格好でもって過ごしている姿を上総は物心ついたときから見たことがなかった。つい三週間前に現れて上総の看病をしていたあの母と、シュミーズ姿のあの女性とが同一人物とは思えなかった。

「年頃の息子がいる家に、そんな非常識なことするような親だと思ったか。まったく」

洗物に専念している上総を横目に、父は沸いたばかりのポットで丁寧にドリップコーヒーを注ぎ、静々と自室へ戻っていった。

「客」がいるのならこちらもそれなりの対処をする。

洗濯を終えてさっさと部屋に戻り、ヘッドホンに耳を当て、ノートを開く。朝から気のめいる中、明日に向けてさっさと数学の宿題を片付けることに決めた。もちろん正しい答えが導き出せるとはこれっぽっちも思っていない。ラジカセをサイドテーブルに置き、ボリュームを大きめに流す。深夜にFMで放送されたシンセサイザーミュージック特集テープを予約録音しておいた。ゆっくり聞き入るのもいい。ぴりぴりする電子音の祭典を耳に流し込みながら、上総はプリントを一枚ずつめくり返した。

——何考えてるんだろ、あの人たち。

父の言動も不可解だったが、不気味に静かな母の様子も気にかかる。たいていの場合その予感は悪い方に当たる。上総なりにいろいろ想像はしてみたのだが、行き着く答えが自分でも考えたくないような下劣な内容だけに、あえて蓋をしているところもある。

いや、決してあっていけないことではないのだ。いくら両親が離婚しているからとはいえ、憎しみ合って別れたわけではない。現に一ヶ月に一回はこのこあらわれて泊り込んでいくような母のことだ。こういうことが日常でも決しておかしくはない。

上総はシャープの芯を追加して、何度か先を出してみた。長く芯を出しては、指で押し込み、出しては押し込みの繰り返しだった。

——部屋でだらだらしているくらいだったら、さっさと食堂に行って自分で朝ごはん食べてさっさと帰ればいいのに。

目を閉じる。こめかみをつついてみる。音楽も妙に勘に触る。ずいぶんと雑音が混じっているようだ。かえって眠くなる。アイスコーヒーをしっかりと飲む。

——こんなわけのわかんない関係の親って俺くらいじゃないか？ 普通離婚したらきっぱり縁が切れるよな？ 会いたくなんかないよな？ 母さんなんて何考えてたのか、うちを出て行ってからまたすぐ戻ってきては泊まり、用が済んだら帰り、の繰り返しなんだからな。俺何度親戚の人たちに嫌味言われたら気が済むんだよ。普通親権は母親に行くはずなのになんで父さんとこにいるんだって。単純に母さんが全部決めたことだとしか言いようがないのにさ。こんな生活だったらなんで母さん、別居だけにしといて籍なんて抜かなければよかったのに。だから羽飛や清坂氏に苗字のことでいろいろ突っ込まれたりするんだ。無理に名前変えないで立村姓にしておけば周囲を混乱させなくてもいいのに。もういやだよ、時辻さんって誰ですかって聞かれるの。

いきなりヘッドセットが外れた。いや、はずされた。振り向いた。

「上総、あんたなんでこんな音がんがんにして曲聞いているの。難聴になるからやめなさいよ」

「俺の勝手だろ。勉強の邪魔するなよ」

頭が軽くなったとたん、何が起こったかすぐに理解した。こんな非常識な行動をする人間は世界でひとりしかいない。目の前の相手を睨みすえた。紺の袖なしワンピースに白いカーディガン姿、やはりどこかに出かける格好にも見える。

「いつ来たんだか知らないけど、ノックくらいしろって前から言ってるだろ」

「したわよ。あんた返事しないからしかたないじゃないの。それにしてもずいぶん湿気がひどいわねえ。カーテン開けなさいよ」

雨はざあざあ降り。この調子だと無理に外にも出られやしない。母がぐるりと上総の腰掛けている椅子をまわした。向かい合わせになるように無理やりさせた。

「親の顔を横目で見るのは何様のつもりなの。あんた、ほら、こっち向きなさい。それとなんなのこの派手なシャツ。季節外れのクリスマスカラーなんて何考えてるのよ。趣味悪いわねえ」

「俺が自分で選んだんじゃないよ。悪いけど、父さんのお下がり」

「和也くんが？」

母が上総を見下ろしながら、まじまじと濃緑のシャツを観察している。自分でも派手すぎることは承知している。続けてやった。

「こういう服あまり着ないからしてもらったけど、俺もあまりこういう趣味ないし。どっかの誰かと違って派手な格好好きじゃないんだ」

「あっそう。どこかのチンピラかと思ったわよ。悪いけど上総、こういう格好でいるのはこの家だけにしてよ。冗談じゃないわよ。ズボンも茶色だし、気分はクリスマスツリーなんて季節感なさ過ぎよ」

こてんぱんに上総のファッションセンスを叩きのめした後、母はベッドに腰掛けた。ぐるりと部屋の中を見渡した。

「あんた、毎日外ほつつき歩いているって聞いたけど、宿題はどのくらいすんだの」

「自由研究だけでももう終わり。ちゃんと七月から手をつけたし、無理に最終追い込みなんてしないですむんだ。ご心配なく」

「自由研究ねえ。何でも羽飛くんと美里ちゃんと一緒なんですってね」

——なんで知ってるんだろう。

問い返せばどつぼにはまるのが目に見えている。無言を貫く。母は気づかぬように続ける。

「成績も和也くんに見せてもらったけど、そこそこのようじゃない？」

めずらしく罵倒してこない。用心せねば。口を閉ざす。机に向かいなおす。

「せっかく褒めてやってるのになんなのその態度。まあいいけど。あんたのやりたい放題ぶりは、悪いけど逐一報告が上がってるんだから、覚悟しておきなさいよ」

「だったらなおさら分かってることだろ」

実際、上総の成績は文系順位だけで言うならば五番以内に入っているのだから、それなりにがんばっているつもりだ。ただし理数の足ひっぱり具合が常識はずれなものだから、結局総合順位は中の中あたりをうろうろする羽目になる。

「上総、あんたもそろそろ、子どもじゃないんだから将来のことも考えてもう少ししっかり勉強しないとまずいわ。よそさまのお坊ちゃんお嬢ちゃんたちはすごいわよ。将来は法律家かもしくは医者か、さらには教師か政治家か、とにかく目標を持って毎日受験勉強に勤しんでいるそうだし、そうそう、なつめちゃんも来年中学卒業だし、そろそろいろいろと本格的に芸に取り組む気でいっぱいなのよ。それにひきかえなんなの、あんたのその体たらくは！」

また椅子を回された。反抗する気もない。わざと膝を組んで見上げてやる。母の髪型はいつものように丁寧にアップで仕上げられている。父の部屋で覗き込んだ限り、髪を解いていたはずだからすぐに自分で整えたのだろう。化粧も相変わらず濃い。真っ赤な唇がやはりきつい。あの姿と同一人物と思えたって、無理だ。きっと幻だ。もしくは父がどこぞから調達してきた可能性もある。絶対にある。

「上総、あんた将来、何になりたいとか考えてるの」

「別に考えてない。まだ先のことだし。そんなこと今決める必要あるのかよ」

ぼそっと言り返してやる。夏休みに入り何度も考えていることだけど、もし目標があったとしても母になんか死んだって言うものかと決めている。かえってつぶされるのが目に見えている。

どやされるかと覚悟していたが、母の表情は変わらなかった。こしかけたまま、珍しく静かに上総の様子を見守っていたようだった。調子が狂いそうになるが、過去の騙された記憶を思い起こしてあえて警戒を解かないでおく。

「ところで、今度の旅行のことなんだけど、少し相談があるのよ」

沈黙が続いた後、母が切り出した。

「明日のゆかたざらはずいぶんいつものパターンだしあんたも慣れていようからそれはそれでいいのよ。問題は来週の旅行のことなんだけど、結洲での会、早めに行かなくちゃならないのよ。打ち合わせがかなり長くなりそうなのよね。あんたの面倒見ている暇ないってことよ。少しでも時間あれば私も観光したかったけど」

「別に面倒見られたくもないよ。俺が行く必然性もいまだ感じてないんだけど」

そもそも、結洲という街は観光など出来る場所なのか、それすら把握できていない。

「とりあえず、私は一日早く宿に入る予定なのよ。あんたには予定通り前日に入ってほしいんだけど、せっかく一日空くんだったらひとりで少し街の中歩いてなさいよ。宿に戻るのにはできれば七時頃。夕食は頼んであるから。上総、あんたひとり旅なんてしたことないでしょ。少し自分で街を散策するとか、そのくらいのことしておきなさいよ」

——本当か！ つまりそれってことは、汽車と一緒に乗り込まないで済む、というわけか！

母の前で感情は出さない。絶対に。たとえ躍り上がりたくたって。

「その代わりに、特急で三時間かかるんだから、車酔いの薬だけはしっかり持っていきなさいよ。あとで宿の地図も渡すからちゃんと見ておきなさい。まあね、宿は劇場のすぐ側だし、普通の人ならちゃんとたどり着けると思うけどね。上総、ほら、何にやにやしてるの。あとで地図とお勧めの場所がまとまったガイドブックも渡しておくから、ほら、見ときなさい。それにしてもあんた、無事にたどり着けたらそれこそ奇跡よねえ」

母の毒舌なんか知ったことじゃない。頬が緩んでいるのは母と三時間も顔をあわせてののしりあう必要がないからというわけではない。その結洲という街がどんなところだか興味があるわけではない。まるまる一日、自由時間でお散歩三昧にスリルを感じているわけではない。

「わかった、ちゃんと予習しとくから。それと当日は、きちんと仕事するから何かあったら言うてくれればいいよ」

心なしか、やわらかく聞こえた自分の言葉。本心隠すにはまだ修行が足りなさそうだった。父がいなくてよかったと思う。また「週刊アントワネット」の編集後記に突っ込まれたりしたら たまったもんじゃない。

「上総、お昼できたからいらっしやい」

部屋で様子を伺っていたが、やはりこの日ばかりは母が昼食を受け持ってくれたようだ。遠慮せずにこのあたりは甘えることにする。料理が嫌いなわけではないが、たまには手を抜きたい。そう思うことくらい許されるような気がする。

「今、行くから」

返事して、ノートを机の引き出しに押し込む。日記ではない普通の勉強用だからそれほど神経質になる必要はない。もしかしたら自由研究のことで美里との関係に突っ込みが入るかもしれないが、その辺りは無視しておけばいいことだ。

雨はなかなか止まない。やはり今日は家に籠るしかなさそうだ。

もともと母の料理はおいしいと思う。物心ついた時から母に料理の仕方を仕込まれてきたから言うわけではないが、上総の味覚と一般的な「おいしい」感覚とはほぼ共通ではないだろうか。少なくとも上総が人に食事を振舞ってまずいと言われたことは一度もない。また母の料理についても同様だった。

まだ父は食堂の席についていない。テーブルには夏らしくレースのテーブルクロスが広げられている。汚れがつかないようにその上にビニールのシートが重なっているのだけが興ざめではあるけれど、実用的でもある。乳白色のカップと大きめの洋皿、取り皿あり。

漂ってくる匂いでだいたい何を作っているかは予想がついた。台所でオーブンを覗き込む。予想通り、ピザを焼いているとみた。母が振り向き、機嫌よさげに微笑んだ。あぶないあぶない、こういう時こそ用心せねば。

「ピザにしたんだ。具、何にしたの」

「あんたが冷凍庫で凍らせていたホタテと海老、ミートソースをかき集めてシーフードピザにしてみたわよ。ピザシートとチーズはいいもの使ってあるから、それなりにおいしいわよ」

「そろそろ焼きあがりそうだし、皿持ってくるよ」

「そうね、悪いけどお願いしますわ。それと、和也くんまだ来てないのかしら」

「呼んでこようか？」

そうしてほしそうな顔をするので、さっさと台所を出た。本当は盛り付けから何から全部自分でやりたくてしかたないのだろう。母はそういう人だ。任せておけばいい。

父の部屋に向かい、扉をノックする。

「父さん、食事できたよ。来ないの」

「上総か、入りなさい」

言われた通り扉を開けて入る。今朝のなんとも言えない雰囲気もすでに消え去っている。女性の影などみじんもない。父は机に向かい、ノートを片付けていた。

「母さんがピザ焼いてる。そろそろ焼けるから早く行かないと怒られるよ」

「ああ、そうだな。そういう匂いがする」

「わかってるなら早く」

背を向けて出ようとする、父が再び、「上総、ちょっと待ってくれ」そう呼びかけた。

「少し話しておきたいんだが、いいか？」

「あんまり母さん待たせるとまた角出すよ」

「いやたいしたことじゃない、ただな」

無理やり上総をベッドに座らせ、辺りを見渡しながら、

「母さんの様子だが、いつもより疲れたように見えなかったか？」

「別に。いつも通りだけど」

どう考えても、「まるでチンピラかと思った」とか「あんたがたどり着けたら奇跡よね」などと嫌味を撒き散らす姿はごくごく普通の母の姿だ。

「そうか、さっきお前の部屋の様子伺いに行ったようだが、何か話してなかったか？」

「別に。来週の旅行のことで少し話したけど。結洲とかいうところに、行きは俺ひとりで行ってことくらい。俺もそれの方が気楽だしいけどさ」

「母さんの相手をするのは疲れるか、そりゃそうだな」

笑うが、どことなく力が抜けている。いつも通りと言え、父もそうだ。

「そうか、お前ひとりで行かせるんだな」

上総をじっと見つめつつ、何度か細かく頷いた。思い出したかのように、「あ、そうだ」とつぶやき、

「母さんも、最近かなり仕事で根詰めていて疲れ果てているようなんだ。お前もいろいろ言いたいことはあるだろうが、少しはおおらかな気持ちで受け止めてやってくれよ」

「それ俺の方が言いたいよな」

ばかばかしい。立ち上がり今度こそ部屋を出ようとする。父が追いかけるようにささやく。

「それと、父さんのライフワークのことなんだがな」

一瞬立ち止まり、思い出した。そうだ、「ファビアン」のことだ。

「あれ、母さんに内緒ってことだろ。わかってる、そのくらい」

「そうか、ならいいんだ」

それ以上は止められなかった。上総はすぐに席につき、熱々に焼き上がったピザの出来栄にただただ見とれた。自分で作るよりも人に焼いてもらった方が断然、おいしい。

「父さん、そろそろ来ると思う。呼んできた」

「そう、それならいいの」

——ふたりとも、同じこと言うな。

二枚ピザが並び、三人で切り分け分け合った。母よりも男ふたりの食欲がはるかに上なのは当然のことで、あっという間に消化された。まったく、残らない。りんごが細かく刻まれたポテトサラダと付け合せのレタスを食べ続けつつ、いわゆる親子水入らずの時を過ごした。「家族の団欒」が非日常だとなんとも和やかに過ごせるのがなぜなのだから。小学校時代の食卓を思い起こ

すと背筋が寒くなるのは、刷り込みか。

「上総、あんた何ひとりで頷いてるの」

「なんでもない。いや、久々に食べたなあって、それだけ」

父が口を挟む。もちろん、サラダを山盛りにしながら。

「母さんの料理はやはり、いいよ。上総に作らせているのと全然味が違う」

「そりゃ当たり前じゃないの、私の腕をそう超えようたって無理よ」

「超える気さらさらないからどうでもいいけど」

おそらく、上総の読みからすると、父はありとあらゆる手を使って母を家に連れ戻そうとしているかのようだ。浮気なんてもうまったく持って頭がない。上総にほんの少し誤解されたと感じた時の慚然とした表情ったらなかった。

「それと、さっきから気になっていたんだけど、和也くん」

「なんでしょうか、沙名子さん」

名前呼び合う。無駄なこだわり。母は上総を一瞥し、いきなり半そでシャツの腕の部分引っ張った。真っ赤なチロリアンテープでかたちどった部分だ。

「何するんだよ」

「黙ってなさい。さっき上総に聞いたんだけど、このシャツ、和也くんのお下がりなんですってね」

「うーんと、まあ、そんなところだ」

上総に父が今度は目を向ける。責めている。「なんでこんなのよりによって今日着てきたんだ」と言わんばかりだ。知ったことかと無視をする。

「夏に着るものはほとんど私が見立てているはずなんだけど、どうしてかしら、こういう趣味のよくないもの、自分で買ったの？ 和也くん自分で服を選べないくせに」

——いいのかよ、ちょっとまずいよそれ。

牛乳のお代わりを取りに台所に向かう。この場にいるのが危険だと信号ありだ。冷蔵庫に張り付き、呼吸をひとつ。母の甲高い声が響く。外に聞こえそうだ。

「まあ、確かにそれはその通りなんだが」

「それになんなの、あのどぎつい緑。和也くんにああいう濃い色似合わないわよ。もちろん上総にもだけど、でも妙ね、どうしたの？」

——母さん、なんでそんなどうでもいいこと拘るんだよ？ たかが服だろ？

まったくもって意味不明だった。かっとなって叫んでいるわけではない。ただちくちく皮肉っているような匂いがする。父もとぼけている様子だ。何も父の古着を息子がもらったからといって、たまたまそれが母の趣味じゃなかったからといって、そこまでがあがあがる必要ないだろうに。

「ああ、思い出した。あのシャツは会社で誕生日プレゼントとして、会社の女の子からいただいたんだ」

「会社の子？ 誕生日？」

そんなこと聞いていない。上総も耳をそばだてる。

「単純にお礼だよ。仕事の関係でね」

「そう？ でも普通お礼に服を選ぶなんて、ずいぶん大胆ね」

「色は確かに、大胆だな。あまり僕の好みではないよ。沙名子さんの言う通り」

「だから上総に流したの？」

「そうそう。まあ、せっかくいただいたんだから一度は袖を通したけどね」

「ほんと、そうなの。それにしても最近の子ってずいぶん、大胆なのね」

母はそれ以上何も言わず、台所にいる上総に、

「上総、あんたそこにいるなら、コーヒーを淹れてちょうだい。二人分ね」

甲高い声で呼びかけた。

——これは素直にコーヒー淹れたほうがいいな。それと。

コーヒーポットを取り出しながら上総は呼吸を整えた。

——この服、着替えた方がいいな。平和のためにも。

コーヒーを運びさっさと部屋に逃げ帰ろうとしたが、甘かった。

「何そう慌ててるんだ。少しここで話でもしていきなさい」

「そうよ、さっきも言ってたわよね、とっくに宿題はすんだって」

——どうでもいいこと覚えてるなよな。

仕方ない、一日だけだ。ぐっと息を飲み込み、上総は自分のカップにもコーヒーを注いだ。一杯くらいならなんとかなる。窓を眺めるとまったく止む気配のない雨。図書館に逃げ込むことも今はできそうにない。

両親はきわめて和やかに会話を交わしている。まるで仲のよい夫婦のように、だ。

——だからなんで別れたんだか。

「結洲市といえば、だいたい特急で三時間くらいか。上総、お前ひとり旅は今回が初めてかな」
母の仕事について父がいろいろ話を引き出している。

「そう、かな」

「初めてに決まってるじゃないの。上総あんた自分の記憶そんないい加減なわけ？」

まぜっかえす母に、父はいつものような穏やかさで相槌を打つ。

「青大附属は学校でのイベントや旅行は結構多いんだが、意外と友だち同士で泊りがけというのは少ないかもしれないな」

「それで間に合ってしまうってのはあるかもしれないわね、確かに」

母はコーヒーカップを口に持っていきながら、ふっと上総を見つめた。

「旅館でもやはり、中学生くらいの旅行客は歓迎されないからそれは仕方ないわ。でも、そろそろ十五歳過ぎたら修行の旅に出てもらわないとね」

「そんなお金どこから出てくるんだよ」

そっぽ向いて言い返す。言われた通り、今まで上総はひとり旅をしたことがないが自分だけではないと思う。唯一、難波が「日本少女宮」のおっかけ旅行のため結城先輩の助言の元旅立ったことは知っている。例外中の例外でまねる気もない。

「昔のヨーロッパでは、ある程度年齢がいくとひとりで武者修行の旅に出たものなのよね。今の日本ではそんなことなかなかさせられないけれど、せめてそろそろひとりで自分のことを考える時期にきたんじゃないかと思うのよ」

「どうだろう、まだ早いという気もするが、まあいいか」

——意見が分かれてるんだな。

よけいな口を挟まずに、上総はポテトサラダの残りを皿に取った。おなかはいっぱいだが、食べているふりするだけで会話に入らないですむ。

「まあ、いい機会よね。本当は私も同じ日に入るつもりだったんだけど、先方から舞台監督との話し合いがあるから、早めに来てほしいと頼まれてしまったの。青潟とかなりやり方が違うみたい。衣装やかつらのこともあるし、またいろいろ独特の習慣もあるようなのよ。スケジュール

はそれなりにあけてあるからな なんとかなるけどもね」

「宿は、上総の分もよく取れたな」

「そう。前から向こうの先生たちに上総のことは話してあったから、この機会に息子さんもどうぞとか誘われていて、ありがたいことにね」

——本当にいいのか？

黙る。口は絶対突っ込まない。

「結洲には最近行く機会がないが、やはりあの穏やかなまな街なのかな」

「典型的な大学街よ。青潟と一番違うと感ずるのはね、やはり高校生以下の子たちがほとんど街をうろついでいないこと」

ふたりともその「結洲」という街をそれなりに思い浮かべているらしい。

「言われて見るとそうだな。大人の町並みという気は確かにする」

「そうですね？ 青潟だと駅前あたりで買い物しているととにかくうるさいの。子どもが多いの。制服着ている子たちの群れで頭が痛くなるくらいよ。その割りに大学生が少ないのよね。青潟大学を始め短大含めてもっとたくさん学校あるはずなのに、なぜか目立たないの。みんなどこで遊んでいるのかしらって感じよ」

——そうかな？ 青潟大学の人結構見かけるけどな。

反論したいが黙っている。とにかく結洲という町の個性について耳を傾けてみることにした。せっかく棚ぼたで得たひとり旅、楽しまないでどうする。

「結洲と青潟の違いは、大学の種類がとにかく多いことだな。それは感ずるよ」

「そうなの。青潟大学は総合大学だから市外からもたくさん学生が来るし、持ち上がりでほとんどの生徒が入学するし、いわゆるマンモス大学よね。一極集中タイプの学校だけど、結洲の場合は単科がほとんど。その分、専門に特化するから勉強しがいがあるとも聞いているけど、どうなのかしらね。そうそう、文系でトップは今のところ結洲大学らしいけど文学部だけなのよね。附属高校もあるけどほとんど他の学校に流れるらしいわ」

「じゃあ、どういう生徒が集まってくるんだ？ その、結洲大学は」

たんたんとうちが尋ねる。仕事柄、知らないわけがないと思うのだが。

「地元でそれなりに成績がよくて結洲から出られないとか、指定校推薦、それと圧倒的に多いのが結洲という街にひきつけられてという生徒らしいわ。あの街、日本文化と同時に新しいものもどんどん流れ込んでくる町だからそれなりに活気はあるの。青潟よりも今どきの文化を取り入れる気質はあるし、さっきの話に戻るけどとにかく学生がたくさんいるの。大学生が複数の大学から集まってきたいろいろなイベントを企画して盛り上げたりして街を活性化しているところは、すごく感ずるわ」

「青潟にはあまりない雰囲気ではあるよな」

違和感がある。ふたりの会話は結洲という街についての個人的感慨にとどまっている。実際の街がどういう雰囲気なのかはいまだ把握し切れていない。学生街で新旧の文化がブレンドされた空気が流れているらしいということ。青潟と違って大学生が多いとのこと。わりと落ち着いた街

なのかもしれない。

——けど、父さん知らないわけないよな。

まるで初めて旅行する人のごとく話を聞く父の姿勢がどうもぴんとこなかった。

母の語りは止まらない。

「青潟だと少し変わったことをすると村八分になることがあるけれど、結洲の場合それはないらしいわね。私も打ち合わせで何度か行っているけど、そこのお嬢さんたちはびしっとしつけられていて、実に礼儀正しいの。本当に、これで大丈夫なの、ってくらい」

「それどういう意味かな。礼儀正しいことは沙名子さん、褒め言葉だろ？」

「青潟だと礼儀正しい＝子どもらしくない、とされてしまうけど結洲は違うのよ。きちんと子どもの頃から世界文学を読んでいても、時代に左右されないかっちりしたスーツで暮らしていても、全然違和感がないの。テレビもほとんど観ないわね。たぶんあの子たち学校で浮いているんじゃないかしらとか思って聞いてみたんだけど」

母はここで言葉を切った。上総にまた視線を向け、逸らした。

「公立の小学校だし貧富の差はそれなりにあるけれども、ちゃんといろいろな人の個性を大切にしよう教育されているらしいのよね。すべての学校とは言わないけれど、さすが学芸都市と呼ばれるだけあるわ。上総があそこで育っていたら、またいろいろ違っていたかもしれないわ」

——確かに。

少しだけうらやましさがなくもない。でも打ち消した。

——青大附属に來れたんだし、別にそれでいいよ。

「青潟大学はいい学校だが、いろいろな意味で安定志向であることはあるな。学生たちと話をしてみてもそれは感じるよ」

父はしみじみつぶやいた。

「あまり飛びぬけた学生に來られても困るといのは正直あるが、やりたいことをもう少し押し切ってもいいんじゃないかなと思うときはあるね」

「でしょう？ ある意味保守的なものよね。だからこそいまだに花街が残っていたりするけれども、うまくなじんでいないという雰囲気はどうしてもあるの。同じ地方都市であっても結洲の場合は、外部の文化を面白がって受け入れてくれるような風土が育っていて、イベントなども若い子たちに伝えやすいというのは、あるわよね」

一方的な母の言葉を聞き流しながら、上総はコーヒーを飲み干した。

「ごちそうさま、おいしかった」

「あらあんたもう行くの」

「自由研究がまだ残ってるから、雨のうちに片付ける」

言い残し部屋に向かった。頭に残っているうちに書き付けたい。ついでに辞典で調べたい。結洲という街が、母の語るような「古きも新しきも受け入れる」夢のような風土の街なのかを。そんな街が存在するならば、ふるさとを蹴って飛び出したとしても決して不思議なことではないの

だから。

うまく頭の中がまとまらず、やはり外に出ようと思いつく。もともと家族団欒が心地いいと思わずに育った自分だけに、両親がともに家の中でうろうろしているのは落ち着かない。かと言って外の雨は激しくなるばかり。学校の図書館で借りた本を読んだり、音楽を聴いたりしているうちに時間は経っていく。

——どんなとこなのかな。

百科事典で調べてみても、あまりにも小さな都市のため概要しか載っていない。母の言う学芸都市という言葉もない。結洲市という街は青潟よりも学生がたくさんいて、活発に学校同士の交流が成されているというが、

——青潟だって中・高校はそうじゃないかな。大学の話は俺もよくわからないけど、中学に関しては水鳥中学との交流会もいろいろやったし、その他文化祭での交流もあるらしいし。この前狩野先生からも聞いたけど、地元の人たちとのやりとりも本条先輩たちが入る前には行われていたらしいし。母さんたちが馬鹿にするほど、青潟の人たちも引込み思案なことないと思うけどな。

ただ納得できるところもある。

青潟大学がこの辺りにおいてエリート扱いされていることもあり、極端に他大学への流出が少ないこと。他地域からの流入が多いため、大学以降はまったくの別文化となってしまう、附属の生徒たちもかなり戸惑うことが多いとか、そのあたりはよく先輩たちから聞いている。青大附属という六年間は、いわば究極の温室であり、そこから飛び出した時のカルチャーショックで立ち直れなくなる人も多いとは聞く。

——保守的、というのは父さんの言う通りかもしれないな。

頷けるのは父の言葉になる。確かにみな、何かに挑戦しようとする気迫が薄いのはあるのかもしれない。例外はもちろん存在する。たとえば中学でいうと奈良岡や水口。このふたりは将来医学への道を志すため、青潟大学には存在しない学部を求めて出て行った。そして最近だと金沢。学校の支援よりも自分で道を切り開くべく、「ファビアン」でど響き買いながらも人脈を切り開いていく。あれはあれでまたあっぱれだと思う。

そういう奴もいないことはないが、基本としては保守的、これは正しい。

——俺も青潟大学の英文科に推薦で切られたら生きていけないもんな。公立の奴みたいに受験勉強なんて全然してないし。関崎はどうするつもりなのかな。やはりあいつは青潟大学へ進学するつもりだろうな。俺の知る限り、成績や学校内のとてつもない問題を起こした奴以外はすんなり進学させてもらっているような気がするんだけど。

羽飛は、美里は、こずえは、みんなどの学部に行くつもりなんだろう。

——杉本は？

ドロップアウトではないけれど、すでに高校進学を閉ざされた杉本梨南のことを想う。

成績優秀、学年一の才媛であっても学校の価値観にそぐわなければあっさり切り捨てるのが青

瀧大学附属の文化でもある。

どちらにしても母とは明日のゆかたざらいについて打ち合わせをするつもりではいた。

いつも通りの内容とは聞いていたし、せいぜいバックの背景を運んだり片付けたりする程度だろう。プログラムを見た感じだと、あまり大がかりなものを用意する必要はなさそうだ。夕方過ぎ、母の声で、

「上総、そろそろご飯だから席について」

と呼び出しがかかるのを待ち、食堂へ向かった。相当ご機嫌よろしいようで一安心だ。

テーブルに着くと、白い和紙のランチョンマットの上にお吸い物、伏せられた茶碗、箸置きの上にちょこんと先を載せた橋、たくあん、かつおのたたき、などなど夏らしい料理がずらりと並んでいた。品目は少ないがそれなりにおなか一杯になりそうな量ではある。

自分でカップに牛乳を注ぎ、自分の席に座る。

「久々に刺身にしたくなったのよ」

聞いていないのに母が一方向的に続ける。

「疲れているのかしらね」

「疲れているんだったらもっと肉とかそういったもの食べたほうがいいのに」

「男と女とは違うの。覚えておきなさい」

言いながら母は、冷蔵庫から赤ワインを取り出した。

「せっかくだし、今夜は飲むことにするわ」

「あれ、うちにあったっけ」

「持ってきたのよ。昨日、いただいたのだけど。もちろん上総、あんたにはまだ早いわよ」

——一生飲むことないって分かってるけどさ。

酒が一滴も受け付けられない体質だということを、中学入学の段階で思い知っている上総にはちょっともうらやましくなんてなかった。勝手に夫婦で飲めばいい。

父も今日は一日中書斎に籠ってなにやら書きものに専念していたらしい。今度は呼びにいかなくても自分から顔を出してきた。

「今夜もまた、豪勢だな。かつおの叩きか」

「そう、いいのがスーパーに安く入っていて、思わず衝動買いしちゃったわよ」

「見る目があるね」

またさりげなく褒め言葉。男同士の視線だといかに父が母の歡心を引くために努力しているかがよくわかる。母もまんざらではなさそうなのだが、なかなかなびかないのはなんでだろうか。とにかく腹も空いたことだしさっさと食べたい。おひつに入ったご飯を父の分から盛り付けようとするが、制された。

「沙名子さん、ご飯盛ってもらえると嬉しいなあ」

「上総にやってもらいなさいよ」

「味が違うんだ。こればかりは僕のがままで申し訳ないんだけど、いいかな」

てっきり「何男尊女卑なこと言ってるの！」とか怒鳴りそうなものだったが、意外にも母はあっさりと、

「今だけよ」

そっと、真っ白い手でしゃもじを手に取った。相変わらず手入れされた長い指先だった。父が楽しげにその動きを眺めている。

——さっさと再婚してしまえばいいのに。

取り立てて何が、というわけではないがそれなりに会話も弾み、さっさと後片付けに入った。さすがに夫婦団欒の時を邪魔する気にはなれず、洗物は上総が請け負うことにした。ふたりのんびりとソファに並んで語らっている。社会問題やら政治問題やら、またいつものようにのんきなことばかりだった。上総からしたら自分の進学やら成績やらをあげつらわれるよりはましなので、そのまま聞き流しておく。

——明日はこの雨上がるよな。

洗剤をスポンジにつけ直し、油もの皿に取り掛かる。

——明日は屋内だからいいとして、あさってはどうしようか。清坂氏も図書館か、もしくはどこか外でとか話していたけど。天気が悪いと図書館も混むだろうし。

今日のごろごろでだいたい最終的な構想はまとまった。この点だけは母に感謝だ。あとで羽飛と美里に、結洲市と青潟市を比較する形で語ってみようと考えている。ただしそれがふたりに共感してもらえるかどうかはわからない。こういう考え、とだけでもまとめておけば、自由研究としての体はなされるだろうから、それで許してもらいたい。それさえ終わればあとは数学宿題の回答をコピーさせてもらって終了。なんと夏休み一週間前に宿題が完成するという素晴らしい結末。笑うしかない。

——これも青大附属のつながりあってこそだよな。

思わずひとりで頷いてしまう。天羽たちが訴える通り、外部連中にさんざんお株を取られているとはいえ、こういった協力体制は内部上がり同士だから通じるもの。せっかく三年間の蓄積があるのだからこういうところは先んじたい。このあたり、今度関崎に会った時にでもさりげなく力説してやろうか。

「あ、上総。言い忘れてたんだけど、いいかしら。明日のゆかたざらいのことなんだけど」

何でもないかのように母が呼びかけてきた。

「プログラムの中なんだけど、一番、間に入ることになったから、それだけ覚えておいてちょうだい。『松の緑』なんだけど」

「だったら金屏風出すだけだろ」

「それだけわかってればいいのよ」

『松の緑』はご祝儀ものの比較的短い演目だ。出演予定にない人が途中でプログラムに追加されることはよくあることだった。

その十二 高校一年夏休み十八日目・立村上総の思わぬ三つ巴に巻き込まれる日々（1）

母の言う通り、「おちうど」でのゆかたざらいはいつも通りの流れで行われていた。母の車で朝九時に「おちうど」に到着し、座敷を片付けたり舞台を片付けたり、テーブルを並べたりと男手が必要な仕事を率先して片付けていくうち時間はすぐ経つ。最初は母と上総しかいなかったが少しずつ志遠流のお弟子さんやら先生たちやらが集まってくる。直接浴衣を着てくる人もいれば、洋服姿で現れ着替え準備をする人とか、さまざまだ。

「今回は出る人が少ないのよね」

「そうだね、番数もそうだけど、ひとり二番ずつ持っているし」

水場の手伝いは特によいとのことなので遠慮し、一番後ろのテーブルを陣取る。座布団を一枚もらって座る。母も今回は早めの仕切りが幸いしたのか、あとは他のお弟子さんたちに任せることにし、上総と並んで足を伸ばした。

「受験で忙しいのと、青濁を転勤で出てしまった人とかもいるし本当にここ最近はこの出入りが激しいわよ」

「学生さんはあまりいないのかな」

B5版の和紙にプリントアウトされた文字を読む。気になっていたことを聞く。

「藤野さんってもうやめたの」

「ああ詩子ちゃんね。あの子は今、お休みしているけれど時間に余裕ができれば始めるつもりみたい。完全にやめるつもりではないよね。ただ、あの子なりに高校の部活動が面白いみたいらしくて、しばらくはそちら中心にするようよ」

——清坂氏と連絡取り合っているのかもな。

気になっていたことではあるが、そのあたりはあえて触れないことにした。

「夏休みなのにめずらしいな」

「もう少し若い子が増えてくれれば活気も出るのだけど、でも、本当に気心知れた人たちとのんびり過ごすのも悪くないわ。最近はその思うようになったわね」

ずいぶんと角が取れたものだ。上総は母の横顔をじっくり観察した。

昨日の朝から感じていたことだが、母の様子は今までになくやわらかい。もちろんぴりぴりしているし、チンピラだとか無能だとかさんざん罵倒されることは確かにある。だが、自分の母としてべったり張り付かれていた頃に比べると比較的穏やかには見える。

——父さんも心配するよな。病気になったんじゃないかって、不思議に思うのも無理ないよ。

病気にでもならなければおとなしくなるわけない。これも発想としてはかなりすごい内容だと思う。今日の母は絹の白地に紺色の緋が入った着物に、紺色の博多帯でまとめていた。珍しく和服を選ぶ母も久々に見た。

「特に手伝うこと、あまりなさそうだな」

こまこま働いているお弟子さんたちを眺めながらつぶやくと母も同意した。

「最近、あの人たちも自分でどんどん仕事を作っていくと意識しているみたいよ。偉

いわ。ついこの前までは私が指示を出さないと全然動かなかったけれど、今は反対に、指示を出されること自体を嫌がっているみたいね」

——まあそりゃあそうだよな。

母のヒステリックなわめき声を聞くよりはそちらのほうがいい。それに気づいたのならお互いハッピーだ。

「でも、見終わった後のテーブルを片付けたりとか、そのあたりはあんたの仕事だから頼んだわよ」

「そのくらいなら」

熱いお茶が用意された。菓子皿もテーブルに二皿ずつ。まだまだ手は伸ばさない。せっかくなのでお茶だけお礼を言っていた。志遠流の先生にもご挨拶をしにいくと、

「時辻さん、いつもありがとうね、上総くんも本当に大きくなったわ。会うごとに男の子は成長するわね」

改めて

「まだまだですけど、みなさまのおかげでなんとかここまで参りました。来週の結洲の会にはこの子も連れて行くつもりです。少しは外の風に慣らしておかないといけない年頃ですし」

「上総くんならどこに出しても大丈夫よ。品があるから」

——褒めてるんだかけなしてるんだかわからないよな。

このあたりぴりぴりしてもしょうがないので微笑んで受け流す。「おちうど」のおかみさんが店の合間に様子を見に来て、上総に声をかけてきた。

「かあさくん、今日はびっくりすることがあるから、楽しみにしててね」

「え、何ですかそれ」

誕生日は来月だ。別に思い当たる節はない。

「お楽しみ、お楽しみ。沙名子さん、それとこのことはまだお伝えしない方がよくって」

何か含みを持った言い方でおかみさんは母に確認を取っている。

「この子の驚くさまを久々に見てやりたいんで、内緒にしといてくださいな」

全く想像がつかないが、大げさに言っているだけのような気もする。おかみさんと母が顔を見合わせて頷きあっているのを、上総は横目でにらんだ。

客は出演者の家族のみ。手分けして音響用のラジカセアンプと家庭用ビデオカメラ、それぞれを用意して十一時から始まった。「おちうど」の座敷ではそれほど派手な大道具が必要というわけではないが、一応背景などは貸してもらえる。その出し入れ程度はさすがに女性の手ではきついので上総の出番となる。

「あれ、『松の緑』どこで入るんだっけ」

昨夜母が食事の席で話していたことを思い出し、確認してみた。

「確かプログラムにはなかったから途中で入れるって」

「あああれね。さっき先生に確認したら、たぶんぎりぎりになるだろうから彼女が来てから決めるわ。途中で二十分くらい休憩入れるつもりだし、お弁当も出るしね」

しばらく演目に見入っていた。ゆかたざらいというものは、内輪の発表会のようなもので、いわゆる舞台上で拵えをしたり鬘をかぶったりというものではない。流派で毎年定められるおそろいの浴衣をまとい日頃の成果を発表するものなので、比較的敷居は低い。ただそれなりに舞台上で踊ると、通常の劇場舞台と異なり細かなところに目が届いてしまうのもまた確か。後ろで先生が、振りを忘れたであろう踊り手に身振り手振りで踊って教えたりとか、アナウンスで思い切りとちったりとか、そういった「全校集会のイベント」的な雰囲気も漂っている。むしろそれをおおらかに捕らえて楽しんでいるといったところもある。

今回は母の言う通り、番数も少なく演目も小曲が多い印象ありか。

「短い曲が多いな」

「小唄振りが比較的多いかもしれないわね。こういう短い曲ほど一瞬で印象が決まってしまうから難しいのよね」

言われてみるとなるほどそうだ。長丁場だと失敗を取り返すチャンスがあるが、二分以内で終わってしまう曲だとそれも難しい。分数だけでは価値を計れない。確かにそうだ。

母とこうやって曲の印象を静かに交換しあうことも、これまでになかったことだった。罵倒の嵐だった今までと、やはり様子が違う。

「そろそろかしら、上総、悪いけど一階に行っておかみさんに昼の用意をお願いしてもらえる？」

「わかった」

演目が半分進んだところで母に頼まれ、上総は立ち上がった。痺れもすぐに引いたところでエレベーターを使って降りた。

「あの、そろそろお昼の準備をお願いします」

たぶん「おちうど」特製のお弁当が出るのだろう。腹の虫もそろそろ鳴り出した頃だ。そのためにあえて皿の菓子に手を出さなかったのだ。

「ちょうどよかったわよ、かあさくん、こっちいらっしやい」

おかみさんと顔を合わせ、腕を引っ張られた。店奥に連れていかれた。ソファー席だった。志遠流の花柄風浴衣姿で髪もアップに結び、ビー玉風のかんざしを挿している女性が振り返った。

「ほおらびっくりでしょ？」

三味線らしき包みを抱えている姿でもっと早く気づくべきだった。素直にシャッポを脱ぐしかない。お見事、驚かされました、と。

「立村先輩、お久しぶりです。相変わらずですねえ」

「……花森さんか」

「これから三味線と踊り両方させていただきますので、どうぞよろしくをお願いします。それと」

小声で花森なつめは上総の耳元にささやいた。

「杉本さんのことで少し気になることがあるんですけど、終わったらお時間いただけますか。時辻さんには内緒で」

その十二 高校一年夏休み十八日目・立村上総の思わぬ三つ巴に巻き込まれる日々（2）

せっかくの休憩時間ということもあり、二階に上がって食事を共にすることにした。

「まあ、お似合いねえ」

などと冷やかされるがそれも気にならないのは、互いわかりあっていることだから。むしろ母の方がはらはらする様子で、

「上総、あんたなつめちゃんにでれでれするんじゃないの。もう、冷静に考えなさいよ。あんたと歳、一歳しか違わないんだから」

「わかってるよ、何あせってるんだか」

上総があっさり流して、それでも花森なつめの隣に座り、プラスチック漆器に盛り込まれた和風弁当に箸をつけてからも、母の視線はやたらときつかった。

「踊りも始めたんだね」

「そうです。三味線だけだといろいろ無理がありますし、少しずつ稽古はしているんですよ。本当は音楽だけの方がいいんですけどね」

話を聞いて見ると、花森なつめの事情は上総の想像していた内容とかなり異なっているようだった。てっきり芸者修行のため青大附中を退学し、地元の公立中学に進学し、そのあとは店デビューという流れだと思っていたのだが、

「そのつもりだったんです。私はもうやる気まんまんだったんですけどねえ」

「何か事情が変わったの」

「面倒くさいっらないんですよ。周りの人たちからこのまま中卒だと将来問題あるから、芸大に行くことも視野においてとにかく高校行きなさいってうるさいんですよ。私に今更高校受験するだけの根性あると思います？ ないですよねえ」

「でも青大附中に合格したんだからそれなりには行けるんじゃないかな」

「よしてくださいよ、先輩。もう公立の中学ではな一んもやってませんから。周りの友だちにも、私は勉強の頭を青大附中にすっこーんと置いてここに来たんだって言っちゃったくらいですよ。まあ、青大附中よりもはるかに居心地いい環境ではありますけどね。同じような子もたくさんいるし、どっかの誰かみたいに成績いいからって勘違いして威張り腐る馬鹿男もいないし」

やはり、と思う。花森の性格を考えれば青大附中のカラーは明らかにそぐわなかったと思うし、自主退学という形で転校するのももちろん正しい判断だったと感じる。別の視点から上総は、できれば花森なつめにもう少し長く青大附中にいてほしいとは考えていたけれど、彼女の判断を否定することはできない。

「でもいまさらどうしろってんですかって言いたいですよねえ。私、もう参考書なんか捨てちゃいましたし。いくら公立高校の勉強しろって無理っちゃ無理ですよ。定時制も考えましたけど、ほら、夜が勝負でしょ。無理です無理。先輩も、ほら、そう思いますよねえ」

「私立の推薦とかは」

「ああ、それもあります。私も成績が落ちたのでやるならそこですよ。腐っても青大附中合格実績ありますから、いざとなったらそっちで私立単願するしかないかなあ。でもこの辺の私立って行きたいってところないし」

いろいろと受験の話で盛り上がる中、上総は味付け玉子を口にしながら改めて花森なつめの横顔を観察した。去年の秋頃には本格的に花街デビューもという話と聞いてたが、いろいろ現実的な問題も露出してきたのだろう。詳しい事情はわからないけれど、せめて高卒、できれば芸大で勉強することを薦めるのは大人の判断としては正しいことなのかもしれない。

「ところで立村先輩、いろいろ噂聞いてますけどどうなんですか。卒業式に英語で答辞読まれたそうですね。私英語思いっきり落ちこぼれてますけど、よくそんなことができましたね。尊敬しちゃいますよ」

「ずいぶん昔のネタを出すよな」

杉本から聞いたのかと問い詰めたが、すぐ隣のテーブルに母が先生たちと語り合っている様子が伺える。あえて控える。

「時辻さんが自慢げに話してましたからね。杉本さんのこと名前出して称えてたって聞いた時にはもう、しびれちゃいましたよ。さすが立村先輩、って。さぞあの馬鹿男子連中や能無し女子連中は悔しがったでしょうね。ざまあみろって言いたいですよ。その瞬間だけは青大附中生に戻りたくなりましたね」

「いや、花森さんが想像しているような展開じゃない」

残念ながら、と伝えざるを得ない。事実として半年前の卒業式で、確かに英語答辞は読んだ。得意分野だったので自分なりはやり遂げたし、いろいろ面倒な事情を片付けたくて小細工もした。杉本を称えた、というのもそのひとつには入る。しかし誰一人叩きのめしたわけではないし、いまだに杉本の立場は不安定なままだ。上総は相変わらず「伝説の出来損ない評議委員長」としてささやかれるのみだ。

「立村先輩は相変わらず謙虚ですね。謙虚って褒め言葉じゃないですよ。卑下、って言ったほうがいいかもしれません。もっと威張ったっていいんですよ。あんなわけわかんない言葉を暗誦してべらべらしゃべることできるって、貴重ですよ。うちにもお客さんでたまに来ますよ。外国人のみなさまが。こういう時、立村先輩がいれば楽だろうなあってつつい思っちゃいますし」

「語学が出来るからって、何もかも話が伝わるわけじゃないよ。俺は何にも知らないし、聞き取れることは聞き取れてもその意味を理解できているわけじゃない」

お吸い物も一緒にいただく。松茸の匂いがする。澄んでいる。

「ただ、杉本の意見があったから、自分なりに工夫はできたしやりたいことはできた。あの答辞で言えることはそれだけかな」

「杉本さんには直接聞いてませんが、きっと喜んだと思いますよ。先輩、お礼は言われませんでしたか」

少しだけ考えた。口を紙ナフキンで拭く。

「言われたよ」

会場で、全観客の前で。

「それならそれでいいじゃないですか。杉本さんは形だけのお礼を言わない人です。嘘を言えない人です。それで答えが出てるじゃないですか」

「ところでさっき言った杉本のことって、何かな」

食事も一段落し、まだ舞台再開まで間もある中、上総は花森なつめに問いかけた。三味線をくるんできた風呂敷の結び目はずし、糸をはじきつつ音の調子を整えている。

「母さんもまだ来てないし、終わったら終わったら手伝いしないといけないしで時間取れないかもしれないから、もしよければ聞かせてもらえると助かる」

「ああそうかも、じゃあさっさと聞いちゃいますね」

花森もすぐ納得し、上総の側に寄り添った。袖で口を隠すようにして耳元にささやきかける。

「杉本さんが青澗を出て別の女子高に進学するって噂、聞いたんですけど本当ですかそれ」

下げられた弁当を見送りながら、上総は花森wの顔をまじまじと見た。

また片手を肩に当てられ、ひそひそと。

「私、来週杉本さんに会うつもりなんですけど、本人は公立進学のもりでいるんですよね。手紙でもずっとそういうこと書いてましたし。でも、周りから強く、すっごい山の中の女子寮に入れられるかもしれないって話、聞いてます。さすがに聞けないし、どうしようかなって思って、立村先輩ならもっと詳しいこと聞いているかなと思って」

大人びた風情の花森が、この時ばかりは寂しそうで俯いた。

「噂では聞いているけど、杉本からは何も」

「そうですか。ならやはり、あの学校のやりそうなことですね。裏でまた手を回そうとしてるんでしょうね。やだやだ、まったく」

「どこでそんな噂、流れてきたんだろうな。俺もたまたま知り合いからちらっと聞いたんだけどさ。あまりにも非現実な話だったんで本気にはしてなかったんだ」

「そうですよねえ、いくらなんでも『なずな女学院』なんて」

思わず顔を見合わせた。「なずな女学院」と確かに言ったから。

「今、なんて言った？」

「先輩の聞いた噂も、同じ名前の学校で、ってことですか」

頷いた。見つめ合った。ため息を吐いた。

その十二 高校一年夏休み十八日目・立村上総の思わぬ三つ巴に巻き込まれる日々（3）

「かっぱれ」と「夕立」「岸の柳」の三曲を演奏した後、ようやく花森なつめは舞台に立った。幕を引いてから小振りの金屏風を広げるだけが上総の仕事だった。ひとりでも問題なし。下手から戻りふたたび母と隣り合って曲が流れるのを待つ。テープから流れる音は言葉を選ぶならば「ビートが利いた」といった感じか。迫力がある。

「なつめちゃんにはいい曲ね」

「意味あるの」

「あるわよ、観てなさい」

言われるまま黙って正座していた。今までこうやって母に付き合い見てきた舞踊だが、同じ演目でも人によって全く雰囲気異なるのが不思議でならない。ある人が踊れば当人の年齢とは関係なく子どもっぽく見えることもあるし、また別の人であればはっと空気が変わっていくのを感じる時もある。ここ一年くらいその差がはっきり見えてきて驚くことがある。

幕担当のお弟子さんが開けると、舞台中央には花森が両手をついて頭を下げている。前には結界としての扇子。鳴り響いていた三味線の音が一瞬ぱたりと止まると同時に、花森が静かに頭を上げる。視線ははるか向こうにあり、静かに扇子をとり立ち上がる。そのしぐさには雑音やまじりけのあるものが何一つない。曲が進むにつれ動きも激しくなり、膝を割ったりするポーズもあるのだが、見せるべきところがはっきりと見分けられる。

「写真を撮りやすい踊りだね」

母にささやいた。

「どういう意味よ」

「いや、きちっとメリハリがあるっていうか。ここで留めるべきところってとこで決まっているし、乱れたところがないとか、うまく言えないけどさ」

「あんたの言いたいことはだいたい分かるわ」

言葉短く母は答え、そのまま見入っていた。派手な小道具があるわけでもない。すべては松の絵が描かれた黒塗りの扇子のみで表現されていく。髪形でだいぶ年上に見せているようだけれども、食事中に交わした会話は上総と同年代のものばかり。そのギャップがまだ受け入れられなかった。

「いい踊りだわ。よくがんばったわね」

約五分から七分程度の踊り。一般的な日本舞踊の演目としては普通の長さだったが、観ているうちに自然と終幕、観ている側としては一番心地のよい終わり方だった。金屏風を畳みに行こうとすると母に制された。

「いいわよ、どうせ師匠の『蓬莱』で幕だし記念撮影もしなくちゃいけないからそのままにしときなさいよ」

もっともだ。会のあとの全員撮影ならば屏風があるほうが見栄えがいい。

特に何事もなくゆかたざらいは幕を下ろし、さっそく上総が写真撮影係としてカメラを携えた。先生や他のお弟子さんからも、

「上総くんも入れば」

などと声をかけられるが母から、

「いいんです。こういう時くらいこき使わなくちゃ」

などとわけの分からないことを言われ、幸い入らずにすんだ。もともと上総は写真が苦手なのでそれはそれでいい。

すぐにテーブルを口の字型に並べ替え、一緒に座布団も並べたりして後片付けに入る。これから一時間程度の「なおらい」と呼ばれる打ち上げがある。テーブルに並んだお菓子をもう一度集めたり飲み物を用意してもらったりする程度なので、それほど大掛かりなものではない。ただ締めには必ず、「おちうど」の杏仁豆腐が振舞われるので上総としてはそちらの方が楽しみだった。周囲の計らいで「若い人同士」隣り合わせとなった上総と花森は、先生たちから離れた席に陣取ってのんびりと茶を飲んでいた。

「まだ先生たち揃ってないけど、先輩、乾杯します？」

「そうだね」

誘われるままに茶碗を打ち鳴らす。誰かが見ていたら非常識と怒られるかもしれないが、幸い誰もこちらに興味を持っていないようすだった。

「あーあ、でもやっぱり弾いているほうが楽ですね。私としては。踊るのってほんっと疲れる！」

「細かいことはわからないけど、『松の緑』はいい踊りだと思ったけどな。何度も観たことあるけど、花森さんの踊りは飽きなかったよ」

「まじめな曲ですからねえ。なんでも、作曲者の娘さんが名披露目した時に作った曲らしくって、禿が松の位の太夫さんになるようにっていう御祝儀ものですし。私みたいなヤンキーにはちょっとね、って感じです」

「俺の感想はともかく、うちの母さんは褒めてたよ。あの人、それなりに目が肥えてるから、そう考えると自信もっていいんじゃないかな」

「ま、うれしいです。ありがたくうけとっちゃいますよ。褒められたら調子に乗っちゃうのが私の生き方なんで、あとで取り消しても知りませんよ」

ふざけつつも軽やかに語る花森。この人が青大附中を出て行き自分のやりたい道を選んだことは正しかったのだと、改めて感じる。上総の記憶する限り花森は杉本梨南同様明らかにクラスから浮いていた。唯一杉本の見方だったのが花森だった。また花森も入学当初から不良じみたファッションやら大人びた価値観、何よりも恋愛観など周囲から偏見をもたれていて、杉本とセットで問題児扱いされていたはずだった。

「今日の面々はほとんどが大人ばかりなんで、子どもチームはやりたい放題しましょってことでどうでしょう」

「そうだね。俺も部外者だから好き勝手に食べよう。ただ、締めの杏仁豆腐の入る場所は作っとかないとまずいよ」

「そんなのが出るんですか？」

知らなかったのか、花森が嬌声を上げる。

「自信持っていうけど、ほんとおいしいんだ」

話が進んでいくにつれて、花森の置かれている現状がだいぶつかめてきた。

「さっきも言いましたけどね、私は青大附中をやめる段階で、絶対芸者になるって決めてきたんです。そりゃ、義務教育残ってますからそれはしなくちゃあいけませんけど。でもずっと店出しを指数えて待っていたのに、法律で禁じられてるからとりあえず高校行ってくださいとか、せっかくだから芸大行ってはどうですかとか、ちょっと話がおかしいと思いませんか、立村先輩？」

相当煮えくり返ってるのだろう。何度も繰り返す。上総も頷く。

「話が違うのは頭来るよな」

「そうですね！ ダーリンとも相談したんですけど、どうもおんなじ考えのようで私の気持ち全然わかってもらえないんですよ！ おかみさんだって私がさっさと戦力になってもらったほうが、店も潤うし絶対いいと思うんですけどね！」

まとめてみると、花森の将来を巡って大人たちの意見としては、「一般的な進路をまずは進んでもらいたい」という結論らしい。法律の問題とかいろいろあるらしいが、婚約者の母でもある店のおかみさんからも強く言われているという。

「私は芸に生きたいんです！ って何度も繰り返しても、無駄なんですよねえ。どうしたら大人を説得できますか？ 先輩、どうでしょうねえ」

「こればかりは、自信もった答え出せないよ。俺のほうがむしろ知りたいよな」

芸大進学も、おそらくだが花森の腕を見込んでというところがあるのではないかと思う。

「たぶんさ、別の世界を見てからでも十分間に合うよってことなのかな」

「私は青大附中でいやってほど見てきました！ あの一般社会のむかつくヒエラルキーもうたくさんって感じです！ 成績がいいってそんなに威張れるもんなんじゃないかな。あ、例外として杉本さんみたいな人もいますしそれはそれですけどね。あーあ、もうあんなグループに浸かるのはもうたくさんです！」

「俺よりも杉本と話したほうがきっといいアドバイスもらえるんじゃないかな。俺の知る限り杉本は、ものすごいバトルの経験大だしさ」

「もっともです。じゃ、来週にでも甘えてこようかな。先輩も杉本さんのこと、よろしくお願ひしますよ。杉本さんっていい子だけど、面食いなのが玉に瑕。男は顔じゃないんだってことをよくわかってもらうよう伝えときますよ！」

——いや、たぶん、あまり効果ないと思うな。

杏仁豆腐もしっかり平らげ、そろそろお開きの一声が上がろうとしたその時だった。

「よかった、間に合ったわよ。なつめちゃん、ちょっといらっしやい。皆さんもぜひ一緒にごらんになってちょうだいな」

先生が花森を呼び寄せた。「はい、ただいま」とすぐ立ち上がり、楚々と向かう花森を見送り

つつ、襖が開いたのを見た。細く、遠慮がちに。母がすぐ迎えに立った。

「どうも、お手間おかけしましたわ。どうぞ、お願いいたします」

夏とは思えない黒スーツ姿の男性が現れ、両手をついてお辞儀をし、膝詰めで入った。続いてもうひとり、小柄な男性が続いた。

いや、男性というよりは。

二度目の驚きだった。

「立村先輩！」

「……霧島、なんで」

上総が末席で呆然としている中、霧島が目を輝かせてこちらを見ている。ついでに母も驚かせている様子だった。

「お坊ちゃま、うちの息子を、ご存知なのかしら」

「沙名子さん、こちら、いつもうちでひいきにしている霧島さんとこのご主人よ。それとお坊ちゃんも、そうそう確か、お子さんおふたりとも青大附中だったわよね。すっかり忘れてたわ。実は私の古い着物をなつめちゃんの丈に仕立て直してもらって、今日ぜひ袖を通してもらいたくて、お招きしたのよ。これからもお世話になることですしね」

——まずい、霧島の奴、学校用猫かぶりしてないよ。あーあ来ちゃったよ。

父親に耳元へ何かをささやき、上総の母には、

「初めまして。立村先輩には日頃よりお世話になっております。今後もなにとぞよろしくお願ひします」

などと折り目正しい挨拶をし、上総が近づく間もなく飛びついてきた。

「先輩、前もって教えていただけなかったのですか」

「なんでそんなこと、お前に言うんだよ」

「僕は知ってましたよ。先輩が今日この日、『おちうど』にいらっしゃることを。ちゃんとお話があるものだと思って待っていたんですが全然連絡ないのでどうなさったことかと。さ、こちらにいらしてください。改めて父に挨拶をお願いします」

——「おちうど」のおかみさん、もしかして本当にびっくりさせることって、このことだったのか？ さすがにうちの母さんも霧島のこと走らなかつたみたいだし。

ぽかんとしている花森なつめをよそに、霧島は上総の手首を取ってずりずりと引きずっていった。また霧島に振り回される午後が待っている。

その十二 高校一年夏休み十八日目・立村上総の思わぬ三つ巴に巻き込まれる日々（4）

霧島の猫かぶりがどんなものか、果たして気づいているのかいないのか。

少なくとも今まで霧島の本性を見たことのある奴はせいぜい同伴の父上のみであろう。

当たり障りのない自己紹介を終わらせた後、和やかに仕立て上がりの着物をたとう袋から取り出し、花森なつめに着せ掛けては褒め称える流れと相成った。「子どもチーム」たる上総と霧島に出番はなく、ただ正座して眺めているだけだった。

「本当に、素敵な付け下げですね。ありがとうございます。すぐに着させていただきます！」

お世辞ではなく本気で気に入ったらしく、花森は三枚の付け下げと一枚の訪問着をそれぞれ受け取り頬を赤らめながらお礼を伝えていた。

「いいのよいいのよ。なつめちゃんは背が高いから丈を出さなくちゃならないことはわかっていたし、なんだか古いもので申し訳ないのだけど。でも、霧島さんのお見立てでいいものを選んでいただけたから、こうやって次の世代へと引き継がれるのがもううれしくて」

「こうやって丁寧に引き継いでいただけると、手前どもも商売冥利につきます」

霧島父の穏やかな口調にみな頷くのみ。ふと、上総と母を交互に見た。

「こちらこそうちの息子がいろいろと時辻さんのお坊ちゃんによくしていただけているとは存じませんで、どうも失礼いたしました」

「いいえ、私も今日始めて知りましたわ。諸事情で息子とは距離を置いておりますもので、本当であれば同じ中学ですしいろいろとお話させていただく機会もありましたものを」

なんだか白々しい言葉に聞こえる。母に限ってそれはありえない。上総の知る限り、同学年の生徒たちに関する情報を母は早い段階でかき集めていたはずだ。別居していようが関係ない。また、霧島弟は別としても姉が評議委員の同期だったことも、おそらく連絡網使っていれば気づくはずだ。よって、あえて知らない振りをしておくべきという判断となる。

母はまた、上総をちらと見ながらはったりを続ける。

「ほら、苗字が違いますとなかなか。この子の父親にあたる人にすべて預けておりますもので。でも世の中本当に狭いものですね。確か中学二年、でしたよね、そちらのお坊ちゃんは」

「はい、この親に似ずなぜか仕事熱心なところがありまして、こういう機会がございましてと修行がてら、みなさまにご迷惑をおかけしてしまうというありさまでございます」

「本当に、うちの息子と比較しても賢そうなお坊ちゃまですわね」

——なんとも言えないよな。この白々しすぎる応酬って。

あえて霧島姉のことに触れず話が続いているのだが、その間も当の本人、霧島弟はべったり上総に張り付いている。言葉は発しない。それなりの猫かぶりをする必要は感じているらしい。ただそれ以上に上総の母の方を興味深そうに観察している。

——まさかと思うがこいつ、いや、それはありえないよな。

脳裏に思い浮かぶのはかの、怪しげな赤いスーツの写真集。

あのモデルが霧島のストライクゾーンだとしたら、おぞましいことではあるが母もその範疇に

は入ることになる。

お開きを待ちくたびれたお弟子さんたちが、先生の許可をいただいて少しずつ帰り支度をしていく。その一方で母、霧島父、先生の三人が和服に関する話題を交わして時間を忘れかけている。花森が一声、かけてくれた。

「先生、もしよければ、下で私たち子どもチームでお茶飲んでていいですか？ 今日私、時辻さんに送っていただく予定ですし、それに久しぶりに青大附中の同窓会気分も味わいたいですし。いいでしょうか？」

「そうね、わかったわ。おいしいもの頼んでしまいなさいね、沙名子さんもそれでよろしい？」

母に先生が問いかけた。そうだった。これから品山まで車で送ってもらう予定だった。話からすると花森も同じことらしいので、まだ話が続くとなるとそれは賢明な判断だ。

「恐れ入ります。ではなつめちゃん、うちの馬鹿息子のお相手よろしくね」

「行ってきまーす！」

それを合図に花森は上総の肩を軽く叩き、追いやるように外へ押し出した。霧島父に対してはきちんと礼をしたが、霧島弟に対しては軽く会釈のみだった。

「それではゆっくりしてらっしゃいね、かあさくん」

「おちうど」の席は空いていた。夏は比較的客が少ないのだろうか。子どもチーム三人組も問題なくソファー席に座らせてもらえた。冷たい抹茶をいただくことにした。

「花森さん、初対面かな」

「ええ、一応ね。お噂はかねがね」

様子を伺ってみる。一年で退学したとはいえ、花森の進路については学校内の教師生徒ともに衝撃を与えたはずだ。また入れ違いで入学してきた霧島についても、それなりに情報は得ているだろう。もっと言うなら和服のつながりが明確にある業界なのだから、それなりの情報は得ているのではなかろうか。このあたりは上総も全く把握できていない。

「僕も同様です。一年下ではありますが、それなりに花森さんのお話は伺っておりました」

やはりぴりぴりしたものが消えないようだ。また胃が痛くなるのだろうか。上総なりにまた気を遣わねばならないと考えると頭ががんがん鳴り響きそうだ。

「どなたからかしら」

皮肉っぽく、それでも品よく。

「僕は生徒会副会長でして、現在会長である佐賀先輩からです」

「あっそうですか」

——花森さん、言うなよ、ここで切れたらおしまいだからな。

さりげなく目で伝える。花森も上総の視線に気づいたのかあえて手厳しい言い方を控えてくれた。勘がいい。

「霧島、悪いけど、ここではあまり学校の話をしないう方がいいよ。今日はほら、全く関係のない場所なんだからさ」

たしなめるように声をかけ、すぐに話を切り替えた。花森に振った。

「それにしてもさ、俺もあまり着物の価値わからないけど、花森さんに似合いそうなものばかりだったな」

女性を褒めるのは苦手だが、花森にだけはなぜかするする言葉が出てくる。誰が、というよりも褒めやすい和服の柄というのがあるのかもしれない。

「ほんと、あれはほんとううれしいですよ！ 洋服だとちょっとこれ、やだとか、いったい何年前のファッションなのよって突っ込みたくなる時ありますよね？ でも和服ってそういうのがないんですよ。古くても新しくてもそれぞれのよさがあって、帯や帯締めで雰囲気も変えられるし。だから、私は和服のお下がりもうめっちゃくちゃ好きなんです」

「洋服だと、匂が求められるというのはあるかもな」

「そうですよ。私、青大附中にいた頃は派手なカッコばっかしてましたけどね。今は普段着ほとんどTシャツとジーンズしか着てなくて、和服だけ思いっきり拘っちゃってます。そういうもんです」

——伝説の不良少女だった人が、今はこうだもんな。

つまらなそうにふくれている霧島にも呼びかけてみる。

「以前の着物を仕立てなおすというのもよくあることなのかな」

「はい、常識ですよそんなの」

かなり機嫌を損ねてしまったらしい。これは面倒だ。ただ何が気に入らないのかがわからない。しばらく無言でお茶を飲むことにした。こういう時こそ早く母に戻ってきてもらい、自分と花森を回収していただきたいのだが、いまだに話が続いているらしい。

その十二 高校一年夏休み十八日目・立村上総の思わぬ三つ巴に巻き込まれる日々 (5)

少しでも会話が続けばなんとかなるのだが、いかんせん二人とも青大附中関係者としては非常にきつい性格だということを上総は知っている。当たり障りのない話題でつないだりはするものの、すぐに沈黙が続く。もともと上総もそれほど話を取り持つことが得意なわけでもなく、果てしなく長い時間が経っていった。

といっても、実際は十分程度だったのだが。時計は知っている。

「おちょうど」のおかみさんにはかわいらしい風車柄の菓子包みをそれぞれ頂戴して店を出た。それぞれ先生に挨拶をし、霧島父子にも礼をして母の車に乗りこんだ。

「お待たせ。じゃあ上総くん今日はどうもありがとうね。それとなつめちゃん、本当によい出来よ。三味線もそうだけど、踊りはよくがんばったわね。ゆっくり休んで頂戴ね」

去り際に霧島本人から、

「先輩、またあとで電話いたしますのでその節はよろしく願いいたします」

と、いつものしゃちほこばった挨拶も、もちろんのことである。

「俺の方からかけるから、今夜は無理しないでいいよ」

エンジンをふかし、すっかり蒸し風呂状態となった車の中をクーラーで冷やし、上総が助手席、花森が運転席後ろに腰を下ろす格好となる。それぞれシートベルトを締め終わったのを確認の上、ゆっくり車が滑り出した。

「まったく、驚かされるったらないわよ。ねえなつめちゃん？」

母がため息交じりに後ろの席にいる花森へ声をかけた。

「世の中には偶然がありすぎますよねえ。私も本当にびっくりしました」

「何にびっくりしたの」

ハンドルを握っているからはたかれない。母はきっと上総を横目で見据えて言い放った。

「あんたがまさか、霧島さんとこの息子さんとお友だちだとは思ってなかったってこと！」

「母さん知ってたと思ってたけど。あいつもそうだけど、中学時代あいつのお姉さんにあたる人と、評議委員会で一緒だったよ。話に出なかったから言わなかっただけであって、今彼女は可南女子高校に行ってるよ」

「ああ、知ってる、あの、すごく成績の悪いことで有名だった霧島先輩のことでしょう？」

大きな声をあげる花森。ここにいる三人だけならば、安心して話を進められる。

「そのくらいは知ってたわよ。でもそんなに仲良しってわけでもなかったでしょ。あんたの元彼女は美里ちゃんだったし」

「話逸らすなよ。霧島は中学で生徒会副会長しているし、俺も一時期評議委員長だったし、そんなこんなでつながりあってもおかしくないだろ」

「でもあんなにべったり張り付いてくるとは思わなかったってことを言いたいだよ、私は！」

信号待ち。エンジンをふかしながら母がぶつくさ続ける。

「たかが同期だとか、たかが後輩だったらそれほど気を遣わないでもすむけど、あそこまであなたにあの男の子が懐いてたらどうするのよ。ほんとこれから霧島さんところとの付き合い考えないといけないのよ。本当に大変なんだから、わかる？ それ？」

「わかんないよ。たかが友だち関係で母さんにどう関係あるんだよ。まあ変わった奴だとは思いますが、そんな蛇蝎のごとく嫌われているわけでもないし」

思わずかばってしまう。霧島の目の前では絶対に言えない。花森がまあまあと割って入る。

「立村先輩、ちょっといいですか。この話には少し面倒くさい因縁があるんです。今日いただいたお着物の件なんですけど。あ、時辻さんこれ、立村先輩に言ってもいいことですか」

一応は確認を取る必要があるのだろう。母が青信号を見ながら答える。

「いいわよ。上総の性格上何言われても、あのお坊ちゃんとのお付き合いは絶対にやめる気なさそうだし。しかたないわよ」

「母さんの言う通り、それ事実。だったら花森さん、聞かせてもらえるかな」

霧島呉服店と母とのつながりが面倒なことになりそうな予感正直あった。だからあえて何も口にしなかった。しかし現実がどんどん上総の予想を追い抜いている以上覚悟を決めるしかない。あれだけ懐かれた弟分をかばわないで、どうする？

「実は、今回先生が私に一枚、夏向けの紵の着物を誂えてくれるというお話があったんです。三味線の方でちょっとしたお祝い事があってその関係もあってなんですけど。ほら、今日の『松の緑』みたいなものです。自分の娘の名披露目のお祝いに曲を作るのと同じような感覚で、ってことで」

「そうなんだ、すごいな」

花森なつめはあっけらかんと続けた。

「私はいただけるものは喜んでもらっちゃうタイプなのでわくわくしてたんですけどね。先生のご贔負があそこの、ほら、霧島呉服店だったというわけです」

「なんかそういう話だったよな」

母にも確認の意味で横顔を覗きこむ。返事ひとつしやしない。運転に集中している振りをしている。

「ただ、こう言ったら申し訳ないんですけど、霧島さんところのお着物で提案していただくものがですねえ、今ひとつ、毒花っぽいていうか、サイケデリックっていうか。変な意味で現代的なんです。今はやりなんでしょうけど、いまいち私にはぴんときないですよ。紫の地に濃いピンクと黄色い花とか。私の普段の雰囲気こそうだったといえは言い訳できませんけど、洋服と和服との色センスはやっぱり私も分けて考えてますって」

「青大附中の学校内での観察結果なら言い訳できないよな。悪いけどそこは俺も同意するよ。今の花森さんだったら、もちろん気持ちはわかる」

「立村先輩、私の暗い過去をご存知ですからねえ。まあいいですよ。せっかく誂えていただく以上わがまま言っているものかどうか迷ったんで、時辻さんに相談したんです」

ここで初めて母が口を切った。

「私もうちの先生からいろいろなつめちゃんに合う着物を相談受けてたからね。まあ、霧島さんところからしたら、まだまだ若い今時の中学生なんだから派手目のものがないのではと思っただけだよ。でも、上総、あんたからしたらどう思う？ 似合うと思う？」

少し考える。やはり、花森なつめには淡い卵色とか、鶯色とか、パステルカラーの方が品よく見えるような気がする。

「そうだね、俺も花森さんには着物限定で言うなら、原色向きではないような気がするな」

「そう思うわよね。男の目から見てそうなら間違いないのよ。そこで先生に話したの。せっかくだったら先生が若い頃に着ていた派手目のものをなつめちゃんにあげたらどうかしらって。ここだけの話だけど、霧島さんところの着物は少し前まで落ち着いたものが多かったようで、その頃にそろえたものがだいたい先生のところにあるのよ。代替わりしてからだいたい変わったようだけど、うちの先生の好みを踏まえてお勧めしているようだし。うちの先生は全然気づいてないの。でも、ねえ、やはり細かな感覚の違いというのはあるようで今のものを眺めるよりは、古いものをして直したほうがいいんじゃないかしら、って気がするのよね。それで、こうなったというわけ」

指さされ、花森の席脇においてある風呂敷包みと三味線包み。肩越しに覗き込む。

「そういうことなんだ」

「先生から話すのも角が立つから、私がいろいろ説明してこういう流れになったんだけど、やはりあまりいい気持ちじゃあないわよね。向こうさんは愛想良く接してくれたけど。こちらは特になんかつながりもなんもないしビジネスライクに話を進めればよかったわけなんだけど、そこであんたが出てくるってわけ」

「やっと俺につながるってわけなんだな」

「先輩やっとわかりました？ そうなんですよ。せっかく時辻さんに泥をかぶってもらって私のわがままを通してもらいめでたしめでたしで終わるところを、実は霧島さんとこのあのむかつく生徒会副会長と立村先輩が仲良しだったなんてことが判明しちゃったら、ねえ、立場ないですよ。ねえ、時辻さん？」

またため息を吐く母。首を振ってハンドルを軽く叩いた。

「ビジネスライクにいかないでしょ。あんたのかわいがっている後輩くんだったら、親としても大切にしないでしょ。大切にすることはその子だけじゃなくて、その親御さんにも失礼に当たることはできなくなっちゃうでしょ。そういうわけでこれから、どうお付き合いしていけばいいのかを、考え中というわけなのよ。わかったここまでの展開、上総、聞いてる？」

——まったく持って面倒くさいよな。

上総はきっぱり答えた。芯は変わらない。

「悪いけど、俺はあいつの家族と友だちなわけじゃないから。本人と仲がいいだけだから。その辺の切り分けはきちりしてるつもりだよ。だから、母さんがビジネスに徹したいんだったらそ

れでいいじゃないかと思うけど」

「そういうことができるような息子だったら、私も苦労しないのよ。ったくこの、馬鹿息子！」
運転中にぶち切れられたら事故の元。上総はこれ以上母に口答えしないことにした。最初から母は上総の考えを見切っているのだから、やりたいようにやらせてもらえれば、それでいい。

その十三 高校一年夏休み十九日目・立村上総の自由に未来を研究しあう日々（1）

母はしばらく泊まっていくらしい。父の誘いに素直に乗り、結洲旅行出発するまでここにいることにしたそうだ。

「最近疲れてるんじゃないか。それだったらここで上総を使って楽したらいいと思うんだけどな」

「そうね、夏休み取るのもいいかもね」

のんびりした声で答える母に、上総は仕方なく昨日から食事当番を甘んじて受けた。同時に次の日の朝はふたりがのんびり過ごしている中さっさと外に出た。

「上総あんた朝っぱらからどこに行くのよ」

まだ眠そうな顔でもって父を、そして自分を見送る母に答える。

「自由研究の追い込みだから今日は少し遅くなる予定なんだ。羽飛と一緒にだからそんな危険なところに行ったりしないし、その点は安心してもらっていいよ」

美里も一緒だということはあえて言わないことにした。うすうす気づいているとは思いますがそんなこと知ったことではない。

朝十時少し前、待ち合わせ場所の美術館に到着した。久々に自転車を濃いだのが気持ちいい。しばらくは親の命令でずっと自動車で行き来していたから正直遠回りがまどろっこしかったのだ。これで思いっきり気楽に遊ぶことができるわけだ。

「立村くん、おはよ！」

背中から声をかけられた。すぐ振り向いた。美里が橙色のシンプルなワンピース姿で自転車を引っ張りながら近づいてきた。

「清坂氏も、いつ頃来てた？」

「今さっきよ。たぶん貴史もそろそろくるはずよ。どっか寄るところがあるみたい」

「そうか、なら、今日はどこ行こうか」

自転車漕ぎながら考えていたことだった。ぐずついた天気も今日は回復したようで、久々の猛暑日と相成った。あまり外に出たくない日差しだし、できれば図書館かもしくはどこか日陰のある場所にいたかった。

「涼しいところだとどの辺がいいだろうな」

「そうね、私も考えていたんだけど、せっかくだったらいろいろお店はしごして歩こうかなって。公園でもいいけど、やっぱり遊んじゃいたくなるしね。もう私、今日で自由研究かたして、残りの夏休みをな一んも考えないで過ごしたいんだ！」

「気持ちはよくわかる。そうだな、今日で完成目指すよ」

「立村くんはそのことよくわかってくれるからいいんだけどね、もうひとりが、ほーら」

その目線の先には羽飛がいた。猛スピードで走り抜け、またUターンしてふたりのもとに戻ってきた。日焼けした顔で、ジーンズと黄色のTシャツ姿。よく目立つ。

「よ、おっはよ、立村もはええなあ。美里、今日なんだがな、どうする？」

「みんな顔合わせるやいなや、おなじこと聞くのね。ほんとどうしようね」

「だってあっちいだろ。やっぱあれか、学食が一番か」

上総も賛成しかけたが、美里にあっさり却下された。

「今更学校行ってどうすんのよ。私、もう夏休み終わるまで学校なんて行く気ないからね！ で喫茶店めぐりも考えてたんだけど、やっぱりお小遣いそろそろきついしどうしようね」

堂々巡りで埒が明かない。とりあえずはジュースと菓子パンを買って公園の日陰を探すことにした。上総の提案でレジャーシートも通りすがりのスーパーで購入しておいたので、よさそうなところがあればすぐ広げてくつろげる態勢は整えた。

「ね、ここよくない？ ちょうどタイミングよく、木陰だし。運よかったね、これだけ大きな木が丸ごと入らないなんて」

公園に入り、いつもならピクニック客で溢れかえっている広場に向かうと巨大な榆の木の木陰がちょうどよく空いていた。人もいるにはいるのだが、遊んでいるか日差しのもと寝転がっている奴か、のどちらかだった。

「じゃあこの辺にシート敷こうぜ」

「了解、何か大きな石あれば、重石にしようよ」

広げて三人座り、手元のお菓子やジュースを真ん中に置き、一休みする。木陰の適度な暗さとささやした風とが心地いい。まず三人でジュースのプルトップを空けた。

「あーあ、まじうまいなこりゃ」

羽飛がしみじみ、コーラを飲みながら天に叫んだ。

「まじ極楽じゃねえ？」

「人もそんなにいないし、ここで片付けるか」

「そうだね。でも勉強って雰囲気でもないよね」

みな好き勝手にしゃべるだけ。靴を脱ぎ、みな適当に座った。

「せっかくだし、涼しいうちに終わらせちまおう。それからゆっくりなんかやろうな」

仕切り役は羽飛。みな足を崩したままノートと原稿用紙をそれぞれ取り出す。三人、誰ともなしに隣にいる相手へ自分の原稿を渡し、読み終えたら次にまわすといった風に目を通した。上総が最初に受け取ったのは羽飛の美術論が溢れかえっている文章。次に美里の時代背景を捉えた分析。

「正直なところ、どうよ」

「やはり羽飛、本気で書きたいこと書いたなって思った」

「そうなの？ 貴史、この前話した内容をやっぱり参考にしたの？」

「そりゃあまあなあ。書きたいように書けて言われたら、やっぱそうするっきゃあねえだろ。それはそうと、美里もすげえ細かいとこ調べたなあ。俺、ここまでやらねかったぞ」

「うん、私はあんたや金沢くんと違って美術に情熱ないからね、立村くんのように想像力もあんまりないし。だったらいろいろな情報を集めて分析する方が面白いかなって思ったの。立村くん

も読んでみてどう思う？」

「感情を出してないよな。清坂氏じゃないみたいだ」

「ひどーい、立村くん私、そんなに感情丸出し人間だと思ってた？ それってすごい偏見だよ。もう、あつたまくる！」

ぶんむくれる美里を貴史がなだめる。

「今までが今までだからしゃあねえだろ。でも、まあ立村の言いたいこともわかる。今までこんなに美里、数字での分析に徹したことねえだろ」

「そうだね。いくらいくらでこの絵が売れたあの絵が売れたとかいう分析はしたことなかったなあ」

ふたりともそれぞれの個性が出ていて面白い、と言えればそれまでだが、上総から見ると普通の性格とは正反対でそこに戸惑いがある。たとえば羽飛だが、確かに絵に関する情熱をもっと見たいというリクエストはした。しかしここまで熱く絵のこだわりについて自由自在に語るとは思わなかった。同じことは美里にも言える。おしゃれミーハーな切り口を予想していたのだが全く持って違う。ひたすら、過去の競売落札額と当時の海外絵画の実情を丁寧に分析し、その上で事実関係のみを重ねている。

——こんなに羽飛って、情熱的だったか？こんなに清坂氏って論理的だったか？

今、目の前でけらけらふざけあっている二人には想像ができない感覚が隠れている。

「けど、一番びっくりしたのは立村くんだよな、そう思わない？ 貴史？」

「お前なあ、会うたびそればっか言ってるだろ」

それほど長い文章ではない。原稿用紙二十枚程度にまとめたものだった。結局は妄想の世界にとどまる。日本を飛び出したきっかけについての上総なりの考察に過ぎないのだが、

「けどお前もすげえな。これ本当だったら大変なことになるんじゃないかねえの。まさかなあ、日本の中に自分の居場所がなかったことが悲劇だったとか、自分が認めてほしいものをこの世界では認めてもらえなかったとか」

「私ね、思うんだけど」

遠慮しながら美里も頷き上総の顔を覗き込む。

「立村くんって、自分の思ったことを、そのまま素直に書くのって苦手なのに、どうして架空の話になるとこんなに生き生き書くことができるんだろうってほんと不思議に思うの。立村くん、一人称嫌いでしょ？」

予想とは違うところを突かれて腰砕けしそうになる。サイダーで口を潤す。確かにそう。

「言われてみるとそうかもな」

「でも三人称で書くと、すごく気持ち楽になったりしない？」

「するする、それはある」

「だから、たぶん、私思うんだけど立村くん、こういう風に書くほうが自分の書きたいことを綴れるタイプなのかなって。いわゆる作文とか、日記とか、手紙とかそういうんじゃないかなって。全然架空の話を書いていくことによっていろいろな話が出来た人なんじゃないかなって。やだな、何言ってるんだろ、自分でも何言ってるかわかんなくなっちゃった。でも、なんとなく、わかる

よね？」

ふたりの視線が上総に突き刺さる。やんわりと。痛みはなく、ただちりちりと焦げる感覚が心地よい。

「清坂氏の言う通りかもしれないな。一人称苦手だし、むしろこういう風なテーマでいろいろ考えていってまとめていく方が俺に向いているのかもしれないな」

その十三 高校一年夏休み十九日目・立村上総の自由に未来を研究しあう日々（2）

ほぼ完成している内容をこれ以上とやかく言うのも面倒くさい。いやこの気持ちよい夏の午前中に、勉強だけで時間が流れるわけがない。

「ってことでだ。自由研究はこのまんま、始業式に提出ってことでいいよな」

「賛成！」

「でも誰が提出する？」

今回の自由研究がグループで行ったものだけに、誰か三人のうちひとりが自分の担任に渡さねばならない。

「できれば貴史、あんたにお願い。だってさ、私も立村くんもはっきり言って担任との関係最悪だもん。貴史ならあんた評議委員だし、受けだっていいでしょ」

「俺もできればそうしてもらえると助かるな」

美里と顔を見合わせて頷きあった。

「お前ら、なんだよその、こういう時だけ俺を頼るのかよ。元気なやつちゃ」

あきれたように羽飛もつぶやいたが、あっさり承諾した。しるしにさっさと手元の原稿一式をまとめた。

「んじゃ、俺が出しとくからあとで原稿の綴じ紐と表紙買いに行くぞ」

提出する際には黒い専用表紙を用意する必要がある。生協に行くことができればすぐに手に入るのだが、美里の言う通り「始業式まで近づきたくない」のであれば別の店で買わねばならない。少し手間ではある。

「さーてと、じゃあここでそろそろまっとうなもん食いに行くか。それからどっかで思う存分遊ぶとすっか。そういやあこのメンバーでは夏休み中一度も遊んでねえもんな」

上総も数えてみた。確かにそうだ。夏休み中いろいろと動き回ってはいたし、羽飛たちともそれなりにつるんでいたつもりだったけど、中学時代のような行動は取っていなかった。

「そうだ、じゃあ、こうしない？」

美里が提案した。

「この辺にお勧めの喫茶店あるからそこでお昼食べて、そこからすぐその遊園地行ってコーヒーカップかメリーゴーランドかそのあたり乗ってまない？」

「ガキじゃあねえんだから。んなもの乗って楽しいか？」

羽飛にまぜっかえされるが美里はめげない。

「いいじゃない！ 年齢制限なんてないんだから。ボートもいいかなって思ったんだけど二人乗りだと誰か一人あきらめなくちゃいけないから、それだったら三人で遊べるものの方がよくない？」

「よくないとは言わないけど、メリーゴーランドは基本として一人だろ」

「立村くん、あんた知らないの？ 馬車は四人席よ」

近所の遊園地には動物園と児童遊具が用意されていて、数百円程度で遊ぶことができる。どちらにしても上総には今まであまり縁のない場所であることには変わりない。気乗りは正直しなか

った。何より車酔いしそうなのが怖い。

「あっそっか。立村くん乗り物酔いしやすいもんね。うーんと、でも、メリーゴーランドくらいならいいと思うんだけどなあ」

結局美里に押し切れ、美里お勧めの喫茶店へと連れて行かれることになった。貴史もそこでは反対しなかった。

「さ、ここ、雰囲気いいでしょ」

「景色は確かにいいよな」

「それより食い物はどうなんだ？ うまいのか、まずいのか」

三人三様の意見を好き勝手言いながら入っていったその喫茶店は、いかにも女子好みの雰囲気漂わせていた。白木のいわゆるカントリー風で、かわいらしく赤チェックのテーブルかけやディベア、素朴な手製の人形、さまざま飾り付けられていた。これをいわゆる、

「『赤毛のアン』の世界、とも言うのかな」

「立村くん、お見事、さすが鋭い」

美里に褒められるということは外れていないということだろう。なんとなく美里の趣味がこの系統だということは中学時代から知っていた。

「なんか、かゆくなりそうな環境だわな。お、メニュー来たぞ。まずはめしだめし」

「貴史、あんたほんっとデリカシーないよね。でもね、ここおいしいのよ。特に焼きカレーグラタンとか、シーフードスパゲティとか」

三人でメニューとにらめっこし、結果美里はそのシーフードスパゲティに、貴史は焼きカレーグラタンに、上総はシーフードグラタンに、それぞれ決めて注文した。水をもらっておしぼりて手を拭き、まずは一息つくことにした。

「清坂氏、こういうところによく来るの」

「中学の時はね、よくみんな遊びに行ってたよ。でも最近はね、こずえも忙しいしみんないろいろ用事あるみたいだし。ほんっとに久しぶりなの」

「古川さんは図書館があるもんな。評議委員会もあるし」

美里は頷きながら頬杖を突いた。

「そうなのよね。みんな高校に入ってから妙に忙しくなっちゃったの。私も私で規律委員会あるし。でもあまり規律のみんなと仲良いわけじゃないから前の評議委員会みたいに一緒に遊んだりとかしなくなっちゃったな。貴史は？」

「ああ、俺も、あまり学校の外では連中とあわねえな。むしろ、小学校の頃の連中と遊ぶか、だな。お前も知ってるだろが」

羽飛が小学校時代の友人たちと良好な関係を保っていることは知っていた。美里は不満そうな顔をして頷いた。

「だからこうやって、みんなでしゃべるのってほんと、懐かしくなっちゃうな。前はいつでもこうだったよね？ 立村くんも」

「確かに、そうかもな」

そう答えては見るものの、中学時代と比較しても今年の夏休みは外へ出かけることが圧倒的に多いため共感はしかねるところがある。女子の場合は詳しいことがわからないが、上総の場合は友だちに誘われていろいろな場所に連れて行ってもらったり、学校の先生とのつながりがあったり、家にお邪魔したりとかそういう関係が非常に多い。

「なんか意外。立村くん、結構夏休みは外で遊んでるのね」

「誘ってくれる人もいるし、親の手伝いもあるし。今週末には結洲に二泊三日で出かけるし。だから今日中に自由研究終わればほんと楽になるんだ」

「へえ、夏休み最後の最後に旅行かよ」

羽飛が身を乗り出してきた。まだ伝えていなかったことを忘れていた。かいつまんで説明した。

「うちの親が関係している日本舞踊の会があって、それが結洲で行われるんだって。それで男手が足りないからってことで俺も駆り出されることになったんだ。でも、全然わけわかんないし、せいぜい荷物運びとかその程度だと思うけどな。一日早く行くから、その日は自由に観光してていいってお許しは出てる。でも、そんな観光するような場所なのかな」

ふたりに尋ねてみても、今ひとつぴんときない顔をしている。

「私も、結洲ってどういうとこだかわかんないな。特に名物ってあったっけ？ 貴史、知ってる？」

「俺もわからねえなあ。なあ、立村、食べ物でなんかお勧めあったらみやげ頼むな」

ということは、ふたりともあまり興味のない話題らしい。すぐに切り替えた。

「結局、学校の個人面談どうだった？」

ふたりに問いかけてみた。

それぞれ日も別々で行われたと聞いていた。なかなか連絡が取れなかったので気にはなっていたのだ。さて誰なんだろう。興味津々でふたりの顔を覗き込む。

「えーっと、貴史どうする？ 言う？」

「どうせばれるだろ、隠したってしゃーねんもん」

上総をちらちら見ながら相談し合っている。じらすなと言いたい。

「そんな俺に知られたらまずい内容なのかな」

「まずいってわけじゃないんだけど、ねえ」

美里が両手をテーブルの上に乗せ、「じゃあ、行くわよ、貴史」声をかけた。

「実はな、二人とも」

ためてから、

「麻生先生だったんだよ、まじで」

——二人とも？

言葉と同時に並べられたそれぞれの料理、漂う匂いで空腹はもう限界だ。

「とりあえず食べていいか。それから詳しい話聞きたいな」

「そうね。立村くんおなか空いてそうだもんね」

「食べ物かねえと人間は凶暴になるからなあ。ほら、美里、早く食え。ってか少し俺に味見させる」

「人のこと言えないじゃないの。ほら、食べな」

仲良くスプーンとフォークを使って取り合う二人を眺めながら、上総は香ばしいホワイトソースの焦げ目からすくって口に運んだ。牛乳がたっぷり含まれていて、それでいてさっぱり感もある。とにかく、おいしい。

上総の分には手を出そうとしなかったふたりは、水を飲みながら口にほおぼりながら、

「ね、ほんっとおいしいでしょ？ 私のとおきおきの場所なんだから」

「お前、よくこういう店調べてるよなあ」

「まあね、お店の雰囲気がかわいくて覗いてみたら、味も大満足で今めちゃくちゃ幸せなのよね。いやなことあっても忘れられるし。そうだ、紅茶もおいしいのよ」

「味がいいことは認めるが、カロリー高そうだなあ、太るぞ」

「ちゃーんと運動するからご心配なく。あ、立村くん、どう？ おいしい？」

上総に問いかけてくる美里に言葉を返さず頷いて伝えた。水で喉を潤す。

「俺ひとりだったら絶対見つけられない店だな。女子専用っぽくて。清坂氏のおかげだな」

「わーい、褒めてもらっちゃった、うれしいな」

こうやって雰囲気を盛り上げようとする美里も、それなりに上総を気遣っているのだろう。何せ麻生先生と上総との険悪な関係は、ふたりもよく知っているはずだ。最近知った裏事情については説明する気などさらさらないが、これからの三年間とことん戦っていく覚悟を決めているこ

とくらは気づいているだろう。見返してやるため意地でも三年間英語トップは守っていこうと思っていた矢先に不戦敗を喫してしまったのはくやしゅうたらないが、気を取り直すつもりではいる。

「ところで、さっきの話の続きなんだけど」

半分食べ終えたところで、上総は無理やり話を戻した。

「麻生先生と面談って、どんな感じだったんだろう。想像つかないんだけどな」

「いや、それがなあ、お前の話聞いてたせいか俺も先入観あったんだけど」

「それ、私も」

美里も羽飛の話のところどころ割り込もうとする。

「率直に言っちゃまうと、すげえいい先生じゃねえのってことなんだよなあ」

「私もおなじ。あ、でも立村くんの好みじゃないなってことは、なんとなくわかった」

「俺もだ。ありゃあ、我らがひしもっちゃんの二の舞になるんじゃないって気がするぞ」

——やっぱりそうか、そうだよな。

だいたい想像した展開だった。上総はそ知らぬ顔でふたりの会話を促すことにした。

「そうなんだ、それで？」

「個人面談したらどんな話になるんだろって思ってたんだがなあ。最初にバスケ部やめた話から始まって、美術部の話とか、中学の時なんで帰宅部だったんだとか、将来どの学部行くつもりなんだとか、まあ結構しゃべったぞ」

「そうか、清坂氏は？」

「私もそうね。結構お世辞うまいもんだからついつい乗せられちゃったって感じかも。貴史と同じく、なぜ部活しないんだって言われちゃったから、委員会命ですって答えちゃったもんね。そしたら、生徒会に立候補したらやりたい放題できるぞって言われちゃったんだ」

「生徒会？」

少し来るものがある。上総は美里に微笑んで促した。

「聞きたい？ 私も今まで評議委員会だったから、生徒会についてはあんまり詳しいこと分らないって答えちゃった。そしたら、高校の場合は生徒会のほうが学校内だけではなくて外の交流も積極的にできるし、今まで私たちが評議でしてきたことをもっと長く続けていけるかもしれないから、もしクラスに不満あるんだったら思い切ってやっちゃえって」

「それなら清坂氏は、生徒会に立候補したいと？」

美里は首を降った。フォークを置いて、水を飲んで答えた。

「考えたことないもんそんなこと！ 生徒会っていうとなんだか先生たちの御用機関っぽいじゃない？ 中学ってそういう雰囲気だったし、私も格式ばったのってすっごくいやだし。でも、麻生先生ずいぶんしつこかったなあ。B組で私がくすぶってるってこと、きつとうちの担任から聞いたのかもしれないね。野々村先生は私がクラスにいること自体がいやみたいだから、さっさと生徒会に消えてクラス運営邪魔しないでって言いたいのかも」

「いや、それはないと思うよ」

かなり美里も野々村先生に対して偏った見かたをしているような気がする。

「でもいいのよ。どうせ！ このクラス一年でさよならでしょ？ 無理して反抗する気も今はないわよ。最初は静内さんといろいろあって女子たちともぶつかったりしたけど、もう今はほんっとに仲良しが側にいればそれでいいやって気になったんだ」

上総と羽飛をちらちら見ながら、

「こうやって、おいしいもの食べながらおしゃべりできる友だちがいるんだもの、私、すっごく今幸せよ。この瞬間がね！」

——清坂氏、よかった。本当に。

改めて思う。笑顔で咲き誇っている美里が戻ってきたことを。

——でも、生徒会か。

「清坂氏、あの担任に共感する気はないんだけど、生徒会のことは俺も考えてみた方がいいかもしれない。秋以降、クラスの雰囲気があれば、そっちに行ったほうが向いてるような気がするよ」

ホワイトソースをを隅から隅までスプーンで掬い取った後、思い切って言ってみた。

「え？ なんでそんなこと思うの？」

「例えば、会計とか、よくないかな」

続いて食べ終えた羽飛もびっくり眼で上総を見る。

「美里が会計？ いや、それありえねえ」

「どうしてそう思う？」

「こいつがそんな地道な作業得意と思うか？ やめとけやめとけ、やるなら生徒会長だろ」

まぜっかえす。スプーンを振り回す。美里に叱られる。

「貴史！ テーブルマナー違反だよ！ それと、なんで私が会計に向いてないって決め付けれるわけ？」

「お前小遣い帳どのくらい続けられたか覚えてるのかよ？ たいてい三日坊主だろうが！」

「うるさいわね。自分でつけることと、予算立てたりすることとは違うわよ」

「いや、そういう小遣い帳の話じゃなくって、俺が言いたいのは」

話が思いっきりそれていく。上総はメニューをひっぱりだし、

「飲み物、頼もうか？ 俺はコーヒーほしいな。清坂氏は、ジンジャーティーあたりどうかな、羽飛は」

「俺もコーヒーにするわ。それよか立村、なんで美里が生徒会向きなんだよ」

妙につっかかってくる羽飛に、上総は手早く答えた。片手でもちろんメニューを差し出して注文を続ける。

「清坂氏が書いた自由研究の内容見たら、いろいろなものを分析して調べる仕事が向いてそうな気がしたんだ。なんとなく、それだけ」

「なーんだ、それだけかよ。安易じゃねえの。こいつが生徒会なんてつまらん組織で盛り上げられるような玉じゃねえことくらい、お前も知ってるだろ？ やめとけやめとけ、美里はとりあえずだ、評議委員会復活を目標にしとけばいいと思うぞ。あ、俺もしばらくは美術部と評議だけで

のんびりやるつもりだけだな。立村、お前、やっぱり規律にもぐるつもりなのか？」

羽飛のおしゃべりと美里のかみつきぶりを眺めつつ、上総はひそかに決めた。

——生徒会という選択肢が、清坂氏にはある。それと、羽飛にも。

「なあやっぱし、これからボート乗りに行こうぜ」

腹もいっぱいになったところで羽飛が空を見上げながら提案してきた。

「遊園地なんてなんかがきつぽすぎるだろ？ 美里が見た目余裕で小学生料金使えるのはわかるけど俺たちそれじゃ保護者扱いされちまうだろ」

「いや、それは失礼だよ」

「貴史、単純にあんたが小学

生だと勘違いされたくないからって人のせいにするのはやめなよ」

理由はともあれ貴史が遊園地に興味がないことだけはよくわかった。上総も本音を言えば積極的に行きたい場所ではない。しかし替わりにボートの提案とは、

「俺が乗り物に弱いのはわかってるだろ。殺す気かよ」

「だったらお前がボートこげばいいじゃねえの」

羽飛はさらりと言い切った。美里をのぞき込むようにして、

「そうすりゃあ気も紛れるし、あっそう

だ、美里、お前立村と組めよ。そうすりゃあ立村が倒れても替わりで漕げるだろ」

「貴史、あんたさあ」

てっきり美里も貴史に言い返してくれるものかと思いきや、

「でもそうだよ。立村くん、じゃあ一緒にボート乗ろうか。貴史、あんたひとり寂しいのわかるけどあきらめて時間つぶしてよね」

ときた。思わず上総も啞然としたまま顔を見返すと、

「だって、今まで一度も立村くんとボートに乗ったことなかったもんね。おもしろそうじゃない」

「そういう問題じゃないと思うけど、本当に」

「いいのいいの。せっかくいい天気だもの、ね」

結局言い合っているうちに青潟市立公園の前まで来てしまった。ここでは少し大きめの池があり、ボートでのんびりとデートを楽しむことができる。オールで漕ぐタイプその他、足漕ぎタイプのものもある。選べることは選べるが、

「やっぱりどっちかいうと、オーソドックスなボートの方が雰囲気だるだろ」

「そうね。立村くんのためにもそれがいいかもね」

「それ、まるっきり嘘だろ」

もう上総に反撃することはできそうになかった。

「じゃ、乗ろうよ、ね！」

羽飛がひとり、ボート乗り場から手を振るのを思い切り無視して、上総はオールを握り締めた。強引にでも断っておけばよかったと思わなくもないのだが、幸い何度かボートのオールを漕ぐ経験はしている。要領はだいたいわかる。ゆったりと漕ぎながら上総は、美里の横顔に向かい話

しかけた。

「あまりボート乗ったことないの」

「あるよ。しょっちゅう。旅行行ってボート乗る機会あれば必ずね。この前貴史のうちと一緒に行った時も乗ったし」

「ってことは、羽飛と組んでか」

「そういうこと。だから今日は立村さんと組みたかったの」

さりりと言う。こういうさりげなさが心地よい。

「それに立村さんとふたりで久々におしゃべりする機会も最近なかったし。貴史を入れないでいろいろ聞きたいことも

あるし。あ、大丈夫だから。変なこと聞かないよ。もしまづかったら、漕ぐことに専念してもらえればいいからね」

ほっとする。なぜだろう。

「わかった。言われてみるとそうだよな」

上総は普段なら心の奥にしまいこむ言葉を、改めて発した。

「気分悪くなったら言ってね。私、代わって漕ぐからね」

美里も笑顔を保ったまま池の向こう側を指さした。

___付き合ってた頃もこういうことなかったしな。

とにかく池の中側まで力いっぱい漕いだ。途中、同じくカップルと思われる男女にちらちら観られて気が散ったりもしたけれど何とか全体を見渡せるあたりまではたどりついた。

「少し休んでいいよ、立村くん、やっぱり私代わろうか？」

「いいよ、ただできれば少し手を休めたいな」

揺られてもまだ平気だったから言える言葉でもある。

「ほら、貴史があそこのベンチでのんきに寝てるよ」

「ほんとだな」

しっかりベンチに横たわって

る羽飛の姿を眺めやる。のんきなものだと改めて思う。

「さっきうちのクラスの人とすれ違ったでしょ」

「そんなのいたっけ」

「あれ、立村くん気づいてるかと思った。なんか私たちの方指さしてたから」

とすると、さっきの相手ということか。

「ごめん、全然気づかなかったよ」

「ううん、大丈夫。ただ夏休み終わってからいろいろ言われるかもしれないな。もし変なこと言われたらちゃんと言り返さなくちゃね」

すぐ同意しようとして、言葉を飲み込んだ。美里がかえって傷つきそうで怖い。その美里は落ち着いた表情で上総に問いかけた。

「どうしたの立村くん」

「いや、なんでもない」

_____どう言い返せばいいんだろう。

曲がりなりにも付き合ってきた相手なのだ。

東堂にも言われたことだけど、すでに美里は「過去の交際相手」に過ぎない。本来ならもっと距離があっても不思議ではない。前提に「友達」というものが存在し変化なしと説明したところで理解してもらいづらいことではあるだろう。

ただ上総なりに考えることがあるとすれば、

「友だちにもどったからこそ身近に感じるところもある」

それだけは譲れない。

「立村くん、誰もいないから聞いちゃっていい？」

「いいよ」

しばらく手を休め、緑の濃い景色を眺めていると美里が問いかけてきた。

「終業式の日のこと、今更なんだけど、どうして私にあんなことするように言ったのかなって」

足をボートの中で伸ばし加減にし、美里はさらに畳みかけるように、

「私なりにこういう理由かなって想像はしてたんだ。けど、立村くんから直接聞きたかったの」

「羽飛は何も言ってなかったのか」

逃げ出したくなる質問だが、陸からは離れている。泳げるわけがない。上総は周囲を見渡した

。

「大丈夫、誰もいないから。立村くんが私のことを大切な友だちだと思って言ってくれたことはわかってるつもりなの。ただね、やっぱり、一時期私たち付き合ってたわけじゃない？ それと、関崎くんのことを今も杉本さんが」

「違う、それとは全く別だって」

急いで美里の問いを断ち切った。思わず早口になる。

「杉本のこととは全く関係ない。それは本当だから」

「けど、もし私が関崎くんとかっついたとしたら、杉本さんは振られちゃうって形になるよ。結果としては今のところ私も相手にされてないけど。私と関崎くんがうまくいったとしたら、立村くんは安心して杉本さんをつて思っても不思議じゃないでしょ」

「違う、そんなこと考えたことないって」

オールを握りしめ首を激しく振る。振動でボートが不安定に揺れる。

「関崎とは中学の時からつきあいがあるし、今では英語科でも一緒の関係だからさ。少しうっとおいしい時もあるけど、何をやるにも一生懸命で誠実な奴だとは思っているんだ。だから、清坂氏があいつに興味を持つのも自然なことだと思ってたし。本当にそれだけなんだ。ただ、いろいろな面倒なことがあるのも知ってるから、あいつがどう受け止めてくれるのかは俺も正直わからない。けど、嘘だけは言わないと思うんだ」

「そうなんだね。けどそれ、杉本さんにも同じこと言えた？」

「杉本には何を言っても無理。あいつは自分のしたいことしかしないよ」

声をあげて美里が笑いだした。水音に反射するように気持ちよく響いた。
「立村くんさすがよね。杉本さんのことよくわかってるんだ」

羽飛には上総の考えを一通り述べたつもりだった。
てっきり羽飛が美里にそのことを話したものだと思いこんでいた。
__話せるわけないか。

すぐに美里は話を切り替えてくれた。

「そうだ、立村くん、杉本さんとは会ってるの」

「夏休み中になってことだったら」

うなづいて返した。それなりに考えていることがあるんだろうが。裏があるとは思わないので素直に答える。

「元気だった？」

「相変わらずだった。あのままかな」

「よかった。私、何にもし

てあげられなかったから、気になってたんだ。立村くんがそう言うなら安心だよな」

美里は微笑み絶やさずに続けた。

「清坂氏は杉本のこと、一生懸命かばってくれてたんだって噂では話聞いてた。あの、ほら、修学旅行の」

「こずえから？」

「それもあるけど、それなりにいろいろと」

おそらく視聴覚教室でのいろいろな出来事は美里の耳に入っていないと思う。その点を前提に話を進めていくことにした。

「そうか。私ね、

立村くんが杉本さんのことものすごく心配してたこと知ってたし、学校側の態度もひどいなって思ったからね。あることないこと全部杉本さんのせいにするのって許せないよね」

「うん、それはそう思う。俺も杉本から詳しく聞いたし」

「そっか。立村くんが信じてくれてるんだったら、きっと杉本さん大丈夫だね。よかった」

素直な笑顔が橙色のワンピースに映える。だいぶ日焼けしているが羽飛や関崎ほどの黒さではない。こんなま

ぶしい女子に一時期本気で想われていたことが自分でも信じられない。受け止めるだけの器がなかったことが悔いとなって残っているけれども、それでも大切な友だちとしてそばにいてくれるそんな女子を、どうして嫌うことができるだろう。東堂にもそのことをこと細かく説明してやりたい。そのためだけに、規律委員に潜り込むのもいいのかもしれない。

またボートが揺らいだ。軽くめまいがする。すぐ美里に声をかけられた。

「立村

くん、大丈夫？」

「うん、まだ大丈夫」

「ならいいけど。なんかね、立村くんとかうやっていると、聞きたいこといっぱい出てきて困る。ほら、関崎くんのことさうだし、杉本さんのことさうだし、最近噂で流れてることさうだけど二学期以降の規律委員のこととかね。すっごく気になるんだけど本当のところどうするつもりなの」

ちょうど考えていたところとつながる質問に、思わずオールを握り直す。同じ答えを返す。

「A組の状況にもよるけど、話が出たら受けると思う」

「状況って、関崎くんが評議委員になったらってことだよな」

食い入るように問いかける美里。その顔を見つめていれば酔いも消える。

「そうだよ。今のA組評議は藤沖で、あいつがこれから応援団を立ち上げることになればそこが空席になる。そこで関崎が入ることになれば誰も文句は言わないと思う」

「確かにそうよね。関崎くんこの一ヶ月で実績作ってるし。A組のみんなもその点は納得してるの？」

「まだ確認したわけじゃないけどさ。雰囲気見た限りは問題ないだろうな。そこで空いたポストに誰が入るかってことでもしかしたらってのは、あるかもしれない」

「評議委員長を遊ばせておいていいかってこと、天羽くんたちがかなり大きな声でみんなに話してるみたいよ。元評議の男子たちは立村くんになんとしても戻ってきてほしいっていつつも言ってる。私にもね」

となると、天羽たちは本気で外部組た

ちと戦うつもりでいるということだろう。それを受け入れていいのか正直上総は迷っている。その一方で、また委員会に戻ることもいろいろなところから悪くはないかという気もしている。

「俺もあまり規律については詳しくないんだけど、やることっていったらいわゆる週番と違反カード切りがメインだろ」

「それもそうなんだけどね。南雲くんが来たことによってもっと別のこともやりたいって雰囲気にはなってるみたい。東堂くんと一

緒に組んで計画は立ててる様子だしね。ただ、他の委員はあまりやる気なさそうなの。私も詳しいこと聞きたいんだけど、東堂くん私のことものすごく嫌ってて避けられているし」

「ああ、それなんだけどさ、あいつの彼女のことで揉めたって聞いたけどあれ、どういうことなのかな」

「だって、わかるでしょ！ 桜田さんって子、とんでもないことしてた子なんだもん。いくら東堂くんががんばっても無理なものは無理！」

美里らしくない口調に聞こえた。いつもの美里なら人を一方的に決めつけたりはしない。杉本に対しての態度を知っていればこれは当然のことだ。

「俺も桜田さんとはあまり顔あわせたことないけど、杉本とはすごく仲良しだって聞いているんだ。人に教えることがものすごく上手だとかさ」

「立村くんも騙されてるの？ たばこ吸ったとかシンナーとかそういうことなら人の心も変わるかもしれないよ。でもね、そういうことじゃないんだもの」

——つまりは、売春だもんね。

言葉に出せない美里の気持ちを思いやることを忘れてくはない。上総はすぐに察することにした。話を別方向に持っていくことにした。

気を遣わずにすむのは楽だった。しばらくボートを漕いで、また休み、また漕いで。お世辞に

も上手とは言えない漕ぎ方にも美里は文句を言わず機嫌よく会話を楽しんでいた。

「あのさ、清坂氏」

「どうしたの」

「まだ先のことだけど、大学の学部どこにするとか考えてるのかなと思って」

誰もいないからこそ、問えることだった。オールを漕ぐ手を止め、前かがみで聞いてみる。

「もちろん考えてるよ」

「たとえばどこ」

「うちの両親は絶対文学部行けとか言ってるけどね」

さらりと美里は言い放った。

「私には無理。だって本を読んでから感想書く程度で精一杯だもん。万葉集とか古今和歌集とか読んで研究して楽しい？ 舞姫とかこころとか読んで作家論したいと思えないもん」

「それ、俺が美術に対して思っていることに非常に近いんだけどな。言いたいことはわかる」

「あっそっか。そうだよな、立村くんは文学に強いもんね。私はおもしろければそれでいいってタイプ。だから絶対、文学研究するには向いてないの。むしろ商学部か経済学部あたりがいいなって思ってるの」

美里も向かい合い、上総に首を傾げて問いかけた。

「卒業したらどういう会社に入ろうとか、思ったことなあい？」

「会社？」

思わず戸惑う。今まで企業名について考えたことなんてない。

「うん、私、よくお父さんに言われるんだよね。同じ仕事でもそれぞれの会社カラーがあるから、今のうちからよく観察しておくようにって。もちろんいろいろな仕事があるしどうなるかはわからないけど、学校でいう校風ってのかな、それが合わない大変だよって」

「そうなのかな。俺はまだ、職種のほうありきだな。この前もさ、狩野先生や本条先輩といろんな話をして

ていろいろ考えたよ」

「え？ そうなの？ 聞きたい聞きたい、教えて！」

全身で上総の言葉を求める美里。

——ちょっとくらい、いいよな。

だいぶボートで揺られっぱなしだが、もう少しふたりきりでいたい。羽飛もそのくらいは許してくれるだろう。

「本条先輩は？ 元気だった？」

「相変わらず。今、マイコンというのにはまったみたいで、プログラムを作って雑誌に投稿して、ものすごく高い評価されているんだ。

たぶん話の内容からして将来はコンピューターの世界に行きそうな気がするんだ」

簡単にまとめてしまったが、本当はもっと熱く語りたい。美里ならどうだろう。杉本みたいに怒ったりしないだろうか。

「雑誌の有名人？ 本条先輩らしいね。青潟の大学行くのかな？」

「どうなんだろうな。わからない」

あえてごまかした。たぶん本条先輩は青湊から出ていくだろう。でもそこまで話していいのかすらわからない。

「それで狩野先生はなんて言ったの？」

「うん、狩野先生にはいろいろアドバイスされたんだ。大まかに言うと、語学につながってない仕事も考えろと言われてたよ。俺は語学しか能力ないからそれ関係の仕事しか思いつかなかったけど、見方を変えればもっと可能性広がるんじゃないかって」

「たとえば？」

「日本伝統文化に関することとか、書くこととか」

「狩野先生、やっぱり立村くんのことよく見てる。私もきっと同じこと言ったと思うな。立村くん、自分で思ってるほど語学馬鹿じゃないよ。それで、立村くんはその話一通り聞いてどうしようと思ってるの？」

「俺が？」

逃げ場のない場所で問われると、答えるしかない。たとえ固まっていなくても。

「うん、このままうちの大学の英文科にしようと思ってたけど、もう少し別の学部も考えてみようかなってそのくらいはある。国文も選択範囲に入るかもな。もともと俺は清坂氏と反対で、文学をいろいろ深く追求したり書き手の考えを妄想したりとかそ

ういうのは好きな方だしさ。でも職業となると、今はまだ全然思いつかない。翻訳者とか、通訳とか、ものすごく偏ったイメージしかないからこれからの二年半はそれを探っていく時期になりそうな気がするんだ」

一気にしゃべり続けてしまった。

「立村くんがこうやってしゃべるの聞くのって久しぶり。けど、わかる、すっごく言いたいこと伝わってくるよ」

美里が満面の笑みで何度も頷いた。腰を屈めるようにしてオールを片方つかみ、

「ね、もう少し立村くんの話聞きたいから、私が漕ぐ。立村くん、向こうに回ってくれる？ 私、ひたすら聞くから、どんどん話してほしいの」

漕ぎ手交代を提案してきた。

美里の漕ぎっぷりは見事だった。思ったよりも先に進む。それでも時間稼ぎのために池の中央まで出る。

「立村くん、最近噂聞いてない？ 大学のこと」

ちろちろ周囲を眺めやり、美里は手を休めた。どんぶりこどんぶりこ揺れている。

「大学のことっていうと、推薦のことかな」

「わかる？ そうなの。私もうちの親からい

ろいろ噂聞いてるんだけど、推薦の基準が変わるかもって話」

——やはりそうきたか。

普通科と英語科とはカリキュラムが全く異なることもあり詳しい話をするのは意外と少なかった。同じクラスの男子連中との情報交換がほとんど、講習の真っ最中のささやき声に自分の苗字が含まれて驚いたりとか、せいぜいその程度だ。羽飛ともあまり深い話はしていない。美里ももちろん含まれる。

「俺たちが中学に入学した年にいろいろ実験的なことが行われていてその結果をふまえてって聞いたことがあるけど、それかな」

「そうなの。私も詳しい話聞いたわけじゃないんだけどね。高校への推薦はそれほど面倒なことなかったけど大学についてはものすごく厳しくなるんだって！」

ここで自分の知っていることを一気に言い放つよりも、美里側の情報をもらったほうがいい。上総は座り直して促した。

「この調子でいくとダメージが一番受けるのは俺になりそうだって気がするんだ。清坂氏、もっと詳しい話教えてくれると助かる」

「うん。あくまでも私がお父さんたちから聞いた話の範疇だけだね。今まではひとつの科目が苦手でも別の科目の成績がよければ問題なく推薦もらえるはずだったんだけど、それが変わっちゃうらしいのよね。ここでしょ、立村くんが心配していることって」

頷いて待つ。

「でもまだ決定しているわけじゃないんだってば。この点についてはまだ父母会や偉い人の委員会とか通さなくちゃいけないらしくて、意見はまっぴたつに分かれているらしいのよ。それこそ一芸に秀でてるってタイプの人からしたらこの改革って困っちゃうし、その一方で平均点組の人からするとずるって思っちゃうし。いろいろ大変みたいなの。私とか貴史とかなら特別にできる科目ないし問題ないかなと思ってたんだけど」

「まあ、俺をねらい打ちってとこだろな」

自嘲したくなる。美里は大きくかぶりを振った。

「そんなことないってば！ 立村くん英語科でずっとトップなんだよ？ そんな生徒を追い出そうなんてことしたらひんしゅくじゃない？」

「いや、わからないのがうちの学校のパターンだし」

「うんとね、もうひとつ、これは私たちに関係なさそうなんだけどね」

美里はすぐに話を切り替えた。

「うちの学校と提携している大学同士での交換留学という方法も考えているらしいって、聞いたよ。さっきの話に関連しているんだけど、姉妹校に推薦することでの対応もするって」

——姉妹校ってあったっけ。

「そうだよ、わかんないよね。私もお父さんから話を聞くまで知らなかったよ。結構いろんなところにあるらしくって、どうしても外に出さなくちゃいけない生徒の場合にはそういう風にするってこともあるみたい。ただよっぽどの場合みたいよ。相手の学校だってこういっちゃなんだけど無理矢理追い出された生徒を押しつけられるのっておもしろくないと思うんだけどなあ」

「姉妹校提携している大学ってどこだろうな」

「結構あるみたいよ。青潟ではないみたいだけど。どちらにしても青潟からは出る形になると思うけど。でもせっかく入学させてもらったのに、なんでこんなわけわかんないことするんだろう？ 最近私もうちの学校の方針に頭きちゃうこと多すぎるもん！ 杉本さんのことにしてもそうだけど！」

美里はオールで水をぱちゃんとはじいた。

——姉妹校提携か。清坂氏の話が正しいと

するならば、うちの学校側で面倒見切れなくなった生徒を追い出すために姉妹校へ押しつけるという方法をとるわけか。

美里は上総に限ってそんなことはないと言ってくれたけれども、むしろその裏で語っている美里の父親の言葉の方がはるかに真実味ありだ。複数のルートから流れてきていて、かつ「週刊アントワネット」の記事なども考えればほぼ確定路線と考えていいのではないだろうか。

「じゃあさ、清坂氏、絶対ないと思うけどさ」

少しかまをかけてみようと思った。

「もしも、姉妹校に行けなんて言われたらどうする？」

「そうよねえ、私もそれ考えてたんだ。あんまり他の人に話したことないけど。一人暮らしはちょっと惹かれるところあるけど、勉強したい学部がそこになくっちゃ意味ないよね。そうすると、どうしようかな。浪人して別の大学を受けるか、青潟大学を受け直すか、そんなところかなあ」

「商学部か経済学部は絶対ないって感じか」

「そ、疲れなかった？」

確認するように尋ねた。

「全然。楽しかった」

「よかったあ。じゃあどうするこれから」

美里の問いに上総も少しだけ考えた。

「そう！ 行きたくないところ進んだって意味ないもんね！」

美里は両方のオールを握り締め何度も頷いた。

「そろそろ戻ろっか。少し勢いよく漕いでくから、しっかり捕まっててね立村くん」

空を眺めながら、ゆったり流れる雲を目で追い続けた。

「羽飛、何してるかな」

「寝てる、あいつ、ベンチであのまんまよ」

ボート乗り場に到着しゆらゆらする足場から手をひっぱられ降りた。美里が大きく伸びをして

「立村くん、疲れなかった？」

確認するように尋ねた。

「全然。楽しかった」

「よかったあ。じゃあどうするこれから」

美里の問いに上総も少しだけ考えた。

「そうだね、じゃあ今度は羽飛と一緒になんか遊園地で乗り物乗れば。俺はさすがにこれ以上乗り物辛いからさ」

「わかった！　じゃあ貴史を起こしてこよっか！」

橙色の膝丈ワンピースをひらめかせながら、美里は羽飛の寝転がっているベンチに立ち上がり、顔の真上で蚊を取るようにばしりと手を打った。

「貴史起きなさい！　あんたこのままだと日射病になっちゃうよ！」

ふたりの相変わらずなやりとりを一步引いたところで眺めながら、上総はゆっくりとさっきまでボートで漂っていた池の水面を眺めた。風もゆるやかで、時折白い水鳥が浮かんでいるのが見える。まだまだボートもたくさん揺らいている。

——ほんと、どうなるんだろうな。

未来のことなど、二学期以降のことすらわからないのに大学の推薦問題などまだまだ先のはずだった。もっと先の仕事のことなんて全く持って霧

の中。みなそれぞれに将来のことを真剣に考えている。

——俺みたいに何にも考えていない奴はいないんだな。

霧島のように、中学二年の段階で自分の将来を決めて進む奴もいる。南雲のように親と同じ道を選ぼうとする奴もいる。美里のように自分のやりたい学部をすでに決めている奴もいる。

「おおい立村、お前どうしたんだよ。ひと

り黄昏やがって。まだ時間あるだろ。これから遊園地だろ、ほらほら早く行くぞ」

羽飛が上総の肩に手をかけた。

「わかった、次は羽飛、お前が清坂氏とコーヒーカップに乗ってこいよ」

「ああそうだな、わかったわかった。さ、行くぞ」

せかされてそのまま歩きつつ、上総は羽飛の真っ黒く焼けた顔を見やった。

——羽飛も、美術の方面に行きたいんだろうな。もう自分の絶対やりたいこと、見つけてるんだろうな。

みなやはり、一步、いやそれ以上上総のいる場所～離れて歩いている。追いつけなくなりそ

うだった。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（1）

あと五日で夏休みも終わる。宿題も昨日の帰りに美里から数学と理科一式の答えをもらいすでに書き写しを終わらせた。となるとあとは明後日の結洲旅行のみ。

「上総、今日はどこに行くの？」

まだ母が料理を受け持ってくれる。トーストにフルーツサラダとシンプルではあるけれど、十分腹一杯になる。

「朝十時に、友だちと会う予定、たぶん夕方には戻る」

もちろん絶対戻る。早めにあがれたらそれでいい。

「あんたほんとに友だち多いわねえ」

母はあきれたように皿へみかんとリンゴ、キウイを取り混ぜたフルーツサラダを取り分けた。

「明日の荷造りとかはどうなのよ。私は食事したらすぐ出発するけど、あんたひとりで本当に大丈夫なの？」

「大丈夫。すでにすんでる」

事実だ。せいぜい二日分の着替えと財布のみ。筆記用具と財布程度ですむ。あとはせいぜい酔い止めくらいか。

「それならいいけど切符は大丈夫なのか」

父が口を出す。

「ちゃんと財布に入れておいてる」

「悪いんだけどあんたの荷物確認させてもらえる？ 向こうで忘れ物に気づいてもあとの祭りなんだから。私もあんたの面倒見ているほど暇じゃないんだから」

「だから大丈夫だって！」

朝からいらついでしまう。上総なりにパッキングしたつもりだし、あまり見られたくないものもある。本も何冊か入っているし正直その内容は母にのぞかれたくないものだった。いや、決して妙な趣味のものではない、決して。

「沙名子さんやめておいたほういいよ。上総ももう、女親に見られたくないものもあるだろうしな。切符と弁当、財布だけはきちんと今日の夜と明日の朝、僕が見るから大丈夫だよ」

「でもねえ」

まだ不満げな顔を続ける母をなだめるように、父は食べ終えた皿を台所に運んでいった。

「上総も、あそこまで啖呵切ったんなら、完璧な格好で出るんだぞ。着替えのスーツとワイシャツ二枚、ネクタイ、靴下はあるんだな」

「当たり前だって、そんなの。多めに持ってくよ」

「それとプログラムとかもか」

「もちろん。地図だって持ってるし、電話番号も手帳に書いてあるし」

突如母が立ち上がった。寝室から封筒を持ち出してきた。いやな予感がばりばりする。

「あのね上総、万が一ということがあつたらこの名詞持って行きなさい。後ろには私の住所がある

けれど、念のために宿の電話番号も入れておくわ。駅についたらとにかく最初にここへ電話しなさい。私はいないと思うけど、だれかかしらにつながるようにはしておくよう頼んでおくわ。あとはあんたひとりで街をうろうろするもよし、さっさと宿に入っただのんびり寝っころがっているもよし」

「ご心配なく。ゆっくり街を散歩するつもりで来ているから。最初の予定通りで十分問題ないと思うな」

憎まれ口をたたきつつも、名詞を受け取る。

肩書きがない。

「母さん、この名刺さ、なんで肩書きないの」

疑問に思い尋ねると、

「当たり前じゃないの。フリーで動く以上はそんなもんないに決まってるじゃないのよ。世の中会社に守られてのほほんとして過ごしている人間だけじゃないのよ。上総、あんたもよっく覚えておきなさい」

言いたい放題言い放った後、母はさっさと台所へ残り物を運んでいった。父もすでに出勤準備を始めている。上総も朝十時青潟駅前改札での待ち合わせにそなえて早めに家を出たほうがよさそうだ。

母にあんなことを言われた以上意地でも忘れ物なんてやらかしたくない。念のために部屋の中で旅行用鞆を開き直した。普段着や下着類、靴下に手伝い当日に着るためのスーツ。ネクタイも用意しておく。薬もある、筆記用具も再度確認しておく。問題ないとたぶん思う。

上総が家を出る時にまだ母はいた。

「それじゃ明日また」

「気をつけてきなさいよ」

母に見送られる居心地の悪さを忘れるため一気に自転車を濃いだ。もちろん今日も青潟駅まで自転車で突き進む。

青潟駅の自転車置き場に留めて、約束通り改札口へと向かった。真っ正面で改札口を見据えているであろうと予想して近づいてみたら、やはりそうだった。あしおと忍ばせて近づき、自然に声をかけてみた。

「関崎、待たせて悪かった」

ぎょっとした顔で振り返った関崎に上総は余裕を持って微笑んだ。

「お前、汽車でくるはずだったんじゃないのか」

「今日、想像以上に天気よかったから」

「だったら電話連絡しろ。それだったら待ち合わせ場所をもう少し近い場所にしておけばよかったじゃないか」

「どこか、行くつもりだったのか？」

誘われた時に聞いた限りでは、よい公園があるとかでそこで球技関連の何かでもやりながら、自由研究やらなんやらを語り合うのが目的のはずだった。上総も関崎とは学校と離れた場所で心

おきなく話したい気持ちは確かにある。

関崎はすぐに気持ちを切り替えたのか、上総に向かい、

「俺も家に戻って自転車を取りに行ってくる。もう一度戻ってくるから、悪いがここで待っていてくれ。行き先は決まっているからすぐだ」

「何か昼食べるものも買っておこうか」

公園なら、飲み物が最優先で必要だろう。

「それも大丈夫だ。うちで弁当と飲みものくらいは用意してある」

——こんなに暑いのか？

むしろ近

くの自動販売機で何か用意したほうがいいような気がするのだが。関崎に言い返すのは面倒くさいので、まずはやりたいようにやらせておくことにした。

自転車置き場でいつでも動けるような状態にし、上総はぼんやりと空を眺めた。なんだかいつまで経っても夏が終わりそうにない。あと五日間で本当に普通の学校生活に戻るのだろうか。まだぴんとこない。いつでもそんなことを考えているけれども気がつけばちゃんとたどり着いているのだから、気ままな妄想といえればそれまでなのだが。

「立村、待たせたな。行くぞ」

五分もしないうちに戻ってきた関崎は、自転車のサドルに巨大なボストンバックをくくりつけて現れた。またバドミントンセットで用意してあるのだろうか。

「それもあるが、食べ物もある。二人分入っているから安心しろ。それと飲み物も、親が水筒出用意してくれたものがある。余裕でふたり分入っている」

——それでいいのかな。

三人

兄弟の次男で水鳥中学時代は「シーラカンス」と呼ばれるほどの堅物ぶり。その一方で青大附高入学後の人気ぶりには誰もが驚くという。もっとも関崎本人は戸惑いこそすれ天狗になることもなく鷹揚にそのことを受け止めている。天羽たち内部進学組の冷ややかな視線がないわけではないが、全くそんなことなど意に介せずといった感じでもある。

中学時代からいろいろと話すことも多く、時には——学年別男子リレーの際など——助けを借りたこともある。決して嫌いな相手ではないし、朴訥ながらも真面目な性格は上総も交換を持っていた。その一方で押しつけがましさを感じることもないわけではなく、夏休みに入る前にはいったん上総なりのしっぺがえしをしてやったこともある。その結果がどうなったかは、相手の美里からの報告でだいたい把握はしていたけれども、関崎本人を見る限り上総に対する複雑な感情は全く感じられない。その点が上総とは全く異なる。悪く言えば「単細胞」なのだろうか。

「ほら、行くぞ。自転車だとすぐそばだ。まだ昼には時間もあるしな。立村、お前、ミニテニスってやったことあるか？」

「何、それ」

長いバドミントンの柄が見えないのが正直気になってはいたのだが、上総は尋ね返した。

「バドミントンだと羽根が軽すぎて風がある時はなかなか面倒だ。本格的なテニスではないが、柄が比較的短めのラケットで打ち合いする程度なら、いいんじゃないかと思った

いたのだが、上総は尋ね返した。

「バドミントンだと羽根が軽すぎて風がある時はなかなか面倒だ。本格的なテニスではないが、柄が比較的短めのラケットで打ち合いする程度なら、いいんじゃないかと思ったんだ。どうだろう、立村、ひとまず手合わせしないか」

——断るという選択肢、ないな。

上総はあっさりと頷いた。いわゆるラケット持ちの勝負だったらあんまり情けないことにはならないだろう。

「いいよ、でもあまり得意じゃないんだよな」

「お前、噂では卓球が鬼だと聞いたんだが本当か」

「一応中学時代、球技大会では卓球にだけ出てた」

あまり納得しそうな返事ではなかったけれども、関崎はそれ以上細かいことを尋ねてこなかった。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（2）

人通りの多いところでいったん自転車を降りた。関崎の判断だった。

「時間もあるから少しゆっくり行こう」

青大附属に向かう十字路を右に曲がる。小さな店が立ち並んでいるが商店街といったほどではない。たいていは車道を通して突っ切ってしまうのだが。上総も急ぎではないのでそのまま言われたまま従う。

「それにしてもだ、自由研究なんだが」

「もうほとんど終わったよ」

誇らしく言い切ってやる。事実なのだから。

「早いな。俺は最後の追い込みだ。仲間と装丁とかなんとかいろいろ拘っているんだ」

「大学生の論文を出すような感じで黒い堅表紙つけて提出するのみだけど、どんなとこ拘ってるんだ？」

「写真を構成したり、細かい不備を直したりとかなりチェックするところが多いと思うんだが、お前らは違うのか？」

尋ね返されて考え込む。結局上総は羽飛と美里に分析の部分を任せ、自分は想像を勝手にはためかせて文章を綴ったに過ぎない。不備なんて山のように出てくるだろうがそんなこと知ったことではないと割り切る気持ちもある。

「テーマによるだろうな」

軽く流し、上総は関崎に問いかけた。

「関崎のチームは、確か青潟市内の記念碑のようなものを研究しているんだっか」

「そうなんだ。ひとり拘りを持つ奴がいて、もともと詳しいんだ。俺も知らなかったんだが、うちの近くに郷土記念館があって夏休み中はずっとそこで集合していろいろ話し合っていた。灯台元知らずとはよく言ったもんだ。おかげで俺たちはあそこの常連扱いときたぞ」

「そうなんだ、すごいな」

狩野先生も足を運んだことあるのだろうか、ふとそんなことを思いながら自転車を引き、横断歩道を渡った時だった。

「あ、どうも」

渡ったと同時に車道を一台の自転車が突っ走ってきた。歩道に鋭くUターンし、上総たちを呼び止めた。

「お久しぶりです」

「新井林か」

上総の呼びかけには目礼のみ、すぐに自転車の主、新井林健吾は隣にいる関崎に対し、降りてきっちり礼をした。

「関崎さん、お久しぶりです」

——なんだよ露骨だよなこいつも。

思わなくもないが今までの過程を考えればしかたのないことでもある。上総は一步引いたところでふたりを観察することにした。

「ああ、久しぶりだな。元気だったか」

なんとも言えない関崎の朴訥な返事。こういう奴なのだ。本当は。

新井林はしっかり笑顔を作って答えている。「尊敬する」先輩への礼儀は欠かさないのがこいつの性格でもある。見事にはじかれた上総としてはただ見守るしかない。

「青大附高にいらしてどうですか。だいぶ慣れてきましたか」

傍から見るとはらはらしそうな質問ではあるけれども、関崎は鷹揚に答える。

「学校文化が違い過ぎて戸惑うこともたくさんあるが、周りに支えられてなんとかやっている。いや本当に面白いことが多いな」

「面白いことですか。俺も関崎さんの活躍している話を上の人たちからいろいろ聞きますが、やはりそうなんですね」

「いや、そんなではない。残念ながら成績がついていかない」

そういう問題ではないと思うのだが、関崎らしい謙遜の仕方でもある。

「『みつや書店』でもアルバイト続けていらっしゃるんですか」

「ああ、夏休み中は少し休みをもらっているが、今も毎朝五時半に出かけている。ただ朝八時には一段落するから、昼以降はのんびり過ごしてられる」

「高校野球とかも見てますか」

「観た観た。この前の決勝戦観たか？　すごいバックホームだったなそういえば」

上総には全くついていけない話題で盛り上がっている。自転車を隅に寄せて語り合うといった気遣いはもちろんしているのだが、それ以外は全く外に丸聞こえ。関崎がどんな高校生活を送っていて外部生として一身に人気を背負っていることや、古本屋でのアルバイト、高校野球、などなど理解できないことではない。ふたりとも体育系そのものの性格なのだから気が合うのは当然だ。ただ、上総とは全く別の次元の語り合いであることには変わりがない。

「そうだ、新井林。これから俺たちは公園で身体でも動かそうかということで向かっているんだが、どうだろう、お前も暇なら来ないか？」

いきなり関崎が、はっと目が覚めたような顔で提案した。

「え、これからですか？」

「お前、暇か？」

「ええ、まあ、それなりに」

「関崎、ほら、宿題とかもいろいろあるだろ」

上総なりに気遣ったつもりで助け舟を出したつもりだが、かえってまずかった。口に出した後で気がついた。新井林がきっと上総をにらむような目線で射たからだ。

「いえ、とっくに宿題なんか終わってるから関係ないです。あ、それで関崎さん、すぐその公園ですか」

「いや違う。もう少し先なんだが自転車で行けばすぐなんだ」

「いいですね。わかりました。俺も付き合います」

新井林はまたちらと上総の様子を見るようなしぐさをし、あっさりと答えた。

まるで上総の気持ちを逆撫でしたくてならないかのように。

——なんだよこれ、本気かよ。

卒業式の段階で、新井林とは完全和解したつもりではあった。一応は青大附中評議委員時代の後輩だし、いろいろあったにせよ向こうは上総を「立村さん」と呼んでくれるようにはなったのだから、上々の出来ともいえる。しかし、いわゆる一線を引いた先輩後輩の付き合いのみであり、たとえば上総と本条先輩、上総と霧島、といったような密接なつながりは全くない。杉本梨南・佐賀はるみを巡る因縁も関係しているためか、心を許しあうような付き合いではない。できれば上総としては、付き合いも距離を置いておきたい相手ではある。

その一方、関崎と新井林が初対面の頃から気の合う関係だったということも聞いている。中学二年の冬、交流準備の集まりで青大附中に関崎が現れた時、まず最初に行ったのは体育館で新井林とランニングし続けたことだった。元陸上部長距離ランナーの血が騒ぎ、現役バスケット部部長とさしの勝負をしたくなったということだ。その後、杉本梨南に惚れられてどたばた事件が起こった時も、新井林の関崎に対する好感度は高まる一方。意外なことだがその関崎の親友でどう考えても裏で糸を引いている佐川に対しても、新井林は礼儀を忘れない。そこが上総には理解しきれないところでもある。

どちらにせよ、あまり歓迎したい相手ではない。

ないのだが、しかたない。歓迎したがっているのは関崎だ。

——まあいいか。合わせるしかないよな。

ふたりが熱く高校野球決勝の話題で盛り上がっている中、上総は後ろの方からゆっくり自転車を押して歩き始めた。当然のことだが関崎も、新井林も、すでに上総の存在は忘れていた。ため息ひとつついても気づかれそうにない。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（3）

かなり孤独な気分も、目の前のふたりが車道に出て自転車を漕ぎ出してからはだいぶ紛れた。関崎が先頭で案内する先は、公園というよりも青潟ではそれなりの史跡だが意外と足を運ぶ人の少なめな場所だった。

「関崎さんずいぶん地味な場所知ってますね」

新井林がしみじみとつぶやく。関崎も答える。

「ああ、ここは自由研究のために結構足を運んだんだ。昔の戦争で使用された要塞とか土手とかが残っていて、それなりに関係者の石碑も残っている。かなり写真も撮ったぞ」

「そんなのあったんですねえ」

あまり興味を持っていないらしい。新井林はしばらく感慨深げに緑濃き原っぱを眺めやっていた。天気もそれなりによいので、ビーチボールで遊んでいたり、バドミントンに燃えたりとさまざまな球技に勤しむ人々がほとんどだった。昨日出かけた青潟市立公園と雰囲気似てないわけではないのだが、いわゆる売店や自動販売機のようなものはひとつもない。ちゃんと途中で買っておいてよかったと改めて思う。

「じゃあとりあえず、何するんですか」

「まだ昼飯には早い。立村、それじゃ、やるか」

誘いをかけられる。さすがに自転車で息を切らした直後にミニテニスなどやる気力はない。

「少し休んでからにしないか」

「時間が勿体ないだろう。疲れているのなら、そうだ、新井林、よかったらこれやらないか」

あっさり新井林に切り替え、関崎は袋を地面にどたっと置いて、かき回し始めた。すぐに取り出したのはいわゆる小ぶりのフライパンを思わせるようなラケットが二本、それに黄色いテニスボールだった。

「本式ではないが、この辺で遊ぶにはちょうどいいだろう」

「いいっすね、やりましょう、関崎さん！」

もう完全に上総のことなんておよびじゃない。ふたりはいきなり握手をした後、勢いよく広い場所へと走っていった。できるだけ早く場所を押さえてエキサイティングスポーツに燃えたいと、そんなわけだ。

あとから紅茶のペットボトルを片手にのろのろ歩いていく上総。息はだいぶ落ち着いた。改めて誘われたら勝負してやってもいいくらいだ。だが関崎にその頭はないだろう。

——なんだかな、まあこちらは見学者に回ってれば一番楽かもな。

すでにテニスボールを跳ね上げて打ち合いに興じている関崎と新井林を尻目に、上総は側の楠に寄りかかった。どでかい樹木に甘ったれていたい気分だった。ところで昼ごはんはどうするつもりなのだろう。関崎なりに考えていたりもするのだろうか。こういっちゃなんだが、この史跡付近には目立った売店とかスーパーとかはあまり見かけないような気がする。ただひたすらだ

っ広く緑が広がっているだけ。ところどころに濠が設けられていて、登れば青潟市内を広く見渡せそうな気がする。

「関崎、悪いが少しその辺歩いてきていいか？」

「どうした立村？ 次はお前とやりたいと思っていたんだが」

「いや、なんとなくさ」

適当に思いついた言い訳をつないで見る。

「ここ、関崎の自由研究に関係のある場所なんだろう？ そちらに興味があつてさ。テニスはまた後でもできるし、それに飲み物とかもどの辺にあるか確認しておきたいから。大丈夫、十五分くらいで戻るよ」

額に汗だらだらのはたきが怪訝そうに上総を見る。疑っているのかもしれない。

「それに、昼、どうするかも決めてないだろ。もし可能ならそのあたりも確認してみるから。ふたりはまず、とことん試合に専念してていいよ」

「それじゃ立村さん、お願いします」

あっさりを受け答えたのは新井林だった。たぶん上総がいない方がいろいろと気安いのだろう。そのくらい読めないでどうする。

「だが、立村、それはあとで一緒に」

「いやいいよ。時間がもったいないし。それなら、あとはよろしく」

背を向け、思い切り走った。口に出した通り、昼ごはんの場所と調達先だけでも確認しとくに越したことはない。また店探しで三人うろうろするのはごめんだから。

後ろの方から、

「それじゃ、行きます！」

と新井林が勢いよく叫ぶ声が聞こえてきた。

一度史跡の外に出て、車道沿いの少し先に雑貨屋が並んでいるのを見つけた。近づいてみると菓子パンの類が並んでいる。たぶん三人分は手に入るだろう。さらに自動販売機も確認した。コーラやサイダー、清涼飲料水などは問題なしと見た。

——それなら心配しなくてもいいか。関崎たちの試合が一段落したら買いに行ってもいいしな。

だが、疑問も正直ある。史跡に戻りながら上総は考えた。

——しょっちゅう自由研究のため、外部三人組でちょくちょく尋ねていたんだったら、昼ごはんあそこでしか手に入れてなかったんだらうか？

余計なことはあえて無視し、上総は次に史跡の案内地図をとっくり眺めた。

上総の苦手分野ではあるが、トイレの場所くらいは押さえておかないとまずいだろう。幸い数箇所に点在していることを確認した。次に現在地。関崎が道に迷うとは思えないが念のために。最後に、歴史に残ると思われるいわゆる石碑などの場所を探した。

——何かの記念碑というよりも、この場所自体が歴史的意味のある場所ってことなんだろうな。

木で作成された地図には一切細かい内容が記載されていない。しかたないので上総なりに直感頼りにして濠の上を歩いて見ることにした。地図を見る限り、関崎たちがエキサイトしている広場のすぐ真上あたりの濠から、青潟市街地が広々と眺められるらしいので。

広場から細い階段状の道を登っていく。少し息が切れる。

——昔の戦争に関係してこれだけの濠が必要だったらしいけど、ずいぶんたくさんの人の手が必要だったろうな。

当たり前のことを思う。もともと上総は歴史に関して可もなく不可もなくの興味しか抱いていない。それなりに青潟の歴史などを授業で学ばされたり、遠足などで歩いたりしたけれども、社会の歴史授業にかじりついたりとかそういうことはない。もっとも歴史の「授業」という点においては全く別方向の嫌悪する理由もあるのだがそんなことどうでもいい。上総は過去の石碑を探ったり、青潟市の成り立ちにロマンを感じたりとかそういうことに関心が持てないタイプの人間だった。

——けど、関崎はそういうのに興味あるんだよな。

むしろ上総としては、そういうことに「興味を持つ」関崎の思考の方を突き詰めてみたいと思う。知る限り関崎も歴史マニアで入学したとは考えにくい。理科や数学のような理詰めの世界がこいつ向きなのではと、同級生ながらなんとなく感じていた。作文の試験に関崎がかなり難儀していたことも知っている。

そんな関崎がなぜ突然？

階段を昇り終え、また別の原っぱが広がっている。数人、年配の女性客が写真撮影に興じている。その背の方向に向かいじっと先を見据える。

はるか向こうに、海が見えた。

すぐ足元に、見慣れた屋根が幅広く連なっていた。

雲と小さな汽船が真っ白い光に包まれているように見えた。いやあれは船でもないのかもしれない。ただ灰色の点が朝の生まれたてほやほやな光に包まれているように見えてならなかった。

上総はただ、その点だけを目で追っていた。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（4）

何かを思うわけでもなく、ぼんやり眺めた後、上総は濠を一周した後関崎たちのいる場所へと戻った。だいたい二十分程度。関崎に伝えた時間よりも若干ずれていたが、まあそんなものだろう。ふたりとも飽きもせず白熱した戦いを続けている。

まずはと、ペットボトルの紅茶を口にした。うまく身体に吸い込まれていかないような感覚がある。喉は確かに乾いているのだが。

新井林がボールを打ち損ねたかわりに急いで拾いに行くのが見えた。関崎は片手を上げて上総に向かい歩いてきた。

「どうだった」

「石碑は見えないけど、濠から眺めた景色がきれいだったからよかったよ」

「景色だけなのか？ もっと見るところあるだろう。俺が案内しようか」

「いや、いいよ。関崎も疲れているだろうし、俺も少し休みたいから」

散歩程度だけでも、やはり土の上を踏みしめて歩くと足に響くものはある。関崎がミニラケットらしきものを差し出す。受け取ってみる。

「コンクリートの打ちっぱなしの台などあればまた面白いのかもしれないがな」

「そうだね。それだったらひとりでやってられるしな」

「立村はいつもひとりが好きなのか」

「そういうわけじゃないけれども、気楽ではあるよ」

関崎は額の汗をポケットから出したタオルハンカチでぬぐった。

「それはそうと立村、次はぜひお前と勝負したい」

「いいよ。少し息を整えてからでいいから」

ふたり大きな木の下に腰を下ろした。新井林が走ってくる。ボールを片手に、関崎の隣に腰掛けた。自然と上総とはさみあう格好となる。

「いやあやっぱり関崎さん、パワーありますね」

「いや、陸上やめてからはだいぶ鈍ったな。これでも毎朝ジョギングはするようにしているんだが」

「青大附高では何か入らなかったんですか。まじで？」

「考えてはいたんだが、バイトで授業料払わないとまずいからあきらめた」

嘘ではない。バイトに関しては消極的な青大附高においてあえて正面から訴えた結果がこれである。さまざまな武勇伝はどのくらい青大附中に流れているのだろう。知らない振りして耳だけそばだてる。

「でももったいないですねえ。関崎さんにはぜひ何か運動部に所属してほしいと俺は真剣に思っているんですが、もう考える余裕はありませんか」

「こればかりはしかたないんだ。幸いこの学校は球技大会や体育祭やいろんなイベントがあるからそれでストレス発散するつもりだ」

「球技大会だけですか。もったいないですよ絶対に」

新井林にしては珍しくしつこく拘っている。現在青大附中バスケット部キャプテンでかつ評議委員長という肩書きは、葵の御紋として十分通用するものだろう。公認の彼女が生徒会長という落ちはともかくとしても、新井林健吾という男子は青大附中の堂々たる漢として高く評価されている。

——相当、関崎のことを買ってるな。

横目で覗き込みまたペットボトルをごくりと飲んでみる。全然おいしくない。

——新井林にしてはほんと、めったに見ないよな。こんなに男子連中と楽しくはしゃいで懐いているところなんか。俺以外の青大附中評議男子連中にもここまで親しげにしゃべりあうことなんて、あまりなかったような気がするよな。

霧島ほどの暴れっぷりではないにしても、新井林はゆるゆると気持ちを関崎に対して開いていることがよくわかる。どうでもいいが、上総の存在は眼中になし。そうでなければ誰がこんな言い方するだろうか。

「こう言ったらなんです、うちの学校の球技大会なんてろくでもないレベルです。俺も中学に入学してからすっげえ頭にきてたんですよ。闘争心ってもんが全然ないです。適当に疲れたところで手を抜く連中ばっかですよ。有名な話として、おととしまで中学の球技大会では卓球ってのがあったんですよ。それでいつも同じ奴らが決勝に残るんですが、どちらも似たり寄ったりの力量なんでたいていいただけるんです。いつまでたっても結果が出ないってことで、結局どちらかがさっさと手を抜いて終わらせるってありさまなんです。これ、運動やってる奴なら絶対手抜きの分かりますから、観客としても頭きますよ。どう思いますかそれ」

——絶対こいつ、俺に対して嫌味言ってるよな。

卓球が存在していた頃青大附中の球技大会で二年連続決勝に勝ち登ったのは紛れも上総だった。新井林がそのことを知らないわけがないと思う。それでありながら、関崎をはさんだ状態でしゃあしゃあとやってのける。こいつ喧嘩売ってるのかと詰め寄るのも一手だが、残念ながら上総は新井林の言葉を否定できない。そう、その通り。文句あるか。

——現役卓球部の川田に下手して勝ったら、あいつの立場なくなるだろ。俺だって卓球部になんか死んだって関わりたくないし。当然の話だろ。

それまで黙って耳を傾けていた関崎が、突然上総に向き直った。

「立村、お前、卓球得意だと言ってたな」

「他のスポーツよりは割と」

「それなら、今新井林が言ったようなことしていたなんてことはないのか」

「否定はしない。あまり競い合うのは好きじゃない」

「それは間違っている。立村、お前とはこのこともきっちり話をしたかったんだが」

——まずい、関崎に火が点いた。

ざわざわと頭の上で木立の揺れる音がする。関崎が座りなおし、上総に正座せんばかりに詰め寄った。

「相手は真剣に立ち向かってきているというのに、なぜそれを真剣に受けようとしらないんだ」

「そんな、いや、別にそういうわけじゃないよ」

ここで逐一丁寧に上総の球技大会に対する価値観を説明してやってもいいのだが、面倒なのはその後ろにいる新井林だ。新井林の後ろにはあの佐賀はるみがいる。佐賀はるみと新井林健吾の刃の先には杉本梨南がいる。言葉を慎まざるを得ない。

「卓球は俺ひとりが勝負すればいいからさ。それにその二回、勝ち上がった時だって相手は卓球部の第一人者なんだし適当にやってる俺が勝てるわけそもそもないんだよ」

「いや、それは絶対違いますよ」

追い討ちをかけるかのごとく、新井林が関崎の肩越しにつぶやく。

「俺は入学したての球技大会卓球決勝しか見てませんが、どうみても立村さん優勢だったでしょう。それをなんであんなやる気ない球を返してわざとアウトとインの境目にとしたんだか、ほんと不思議でなりませんよ。大人が子どもをあしらうようなやり方に見えて、当時の俺は、すっげえむかつきました。いや今でもあんなことされたらぶち切れますよ」

「川田は別に切れなかったけどな」

「いや、真剣に向かってもらえない相手に対して、スポーツ人たるもの、頭にこない奴はひとりもいやしません」

一応、先輩に向けての言葉遣いをしている。過去二年間の戦いで得た勝利の記録か。

「そうだな、新井林の言う通りだ。ということで、やろう、立村」

「何を？」

愚問だ。関崎の片手にあるミニラケットと、新井林から反対側の手で受け取った黄色いテニスボール。上総の手元にもあるラケットを関崎はじっと見据え、

「お前は集団競技のためなら自分のプライドをへし折ってでも努力する奴だ。それは俺もよく知っている。だが立村、お前はもっと、ソロの勝負の時も本気でぶつかっていいはずだ。ちょうどいい。誰もいない。一对一の勝負だ。さあ、立つんだ」

当然、立つだろう？ そう言いたげな眼差しで、関崎は手を上下させた。

座ったままコーラをラップのみする新井林は、知らん振りのまま。

さっき上総が関崎と新井林との会話を無視していたのと同じポーズだった。

「わかった。テニスはあまりやったことないから、そう買いかぶるなよ」

——さっさと負けて、さっさと終わらせとこう。

上総は木の幹にもたれて立ち上がり草を払った。木陰から出た。太陽の日差しがやたらと暑過ぎた。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（5）

目の前で面白そうに新井林が観戦している。露骨に手を抜くわけにもいかなかったが打ち返してくる関崎も本気面を丸出しにしてくる。ラケットを持つ競技はなんとかなることもあって上総なりに適当に返すのみ。ラインなんて引いていないのでインもアウトもそんなの知ったことじゃない。

お互い、息が切れたところでまた休むことにした。久々に運動での汗をかいたような気がする。ハンカチで額と首筋をぬぐった。本当はぬれタオルが欲しい。シャワーを浴びたい。もちろんこんなところで言える台詞ではない。

「立村、お前本気出してたか」

「本気かどうかわからないけど、球を落とさないようには気を遣ったよ」

「それにしてもスピードが半端じゃないんだが、やはりお前運動何かやったほういいんじゃないか」

「ありがたいけどそういうの好きじゃないんだ」

関崎に対しての尊敬あらわな新井林の面なんて見たくないの、そっぽ向いてもう一度根元に座り込んだ。昨日、今日とボートやらテニスやらで結構身体を動かしている。明日、こんな調子で疲れ果てて汽車の中で寝込んでしまったりしないだろうか。うっかり寝過ごしたらことだ。気をつけようと誓う。

「それにしても関崎さん、やっぱりいつでも本気ですね」

「ああ、俺はいつでも本気だ。手抜きは嫌いだ」

あっさりに関崎は答える。また熱心にかじりつく新井林。

「俺、ずっと不思議に思っていたんですが、水鳥中学生徒会だとほんと大変じゃなかったっすか」

「楽ではなかった」

「生徒会だけじゃなくて、クラスとかでも、苦勞されたんじゃないんですか」

「否定はしない」

——なんせシーラカンスだからな。

上総なりに心で相槌を打っておく。

「うちの学校に中学から来ればよかったのって思うんですが、どうですか」

「来たかったんだが、落ちたんでしょうがない。もっとも水鳥の奴もまた面白い奴ばかりだったし、結果はオーライだ」

——関崎だって触れられたくないだろうに、新井林も無神経だよな。

上総からしたら心臓ぱくぱくものの発言が続く。

「陸上部、なんでやめたんですか。もったいない」

「水鳥中学は上下関係がいびつだった。先輩だというだけで威張ることが正しいとされていた。納得いかないことはきちんと筋を通すべきだと考えていたんだが、対話にならずに結局生徒会

に入ったことで決裂したんだ」

「へえ、すごいっすね。上下関係なんてうちの学校どこまであるんだかって感じなんですけど、公立は相当厳しいんでしょうね」

「青大附属の上下関係の方が俺からしたら珍しいと思うが」

——確かにそれは言えてる。

会話に入らないでいいのでその点かなり楽だ。好き勝手に心の中でつぶやくのみ。

「けど、先輩殴ったりしなかったんすか」

「腐ってても先輩は立てなくてはならない。礼儀は守ったつもりだ」

「それって、しんどくないっすか」

「しんどくなる前にやめたからな。俺も本当は陸上を続けたかったんだが」

——じゃあ今からでも入ればいいのに。うちの学校の陸上部そんなに強くないし。関崎のことだからすぐレギュラーじゃないか。

「今からでも遅くないですよ！」

上総の言葉を読み取ってなぞるような発言をする新井林。

「うちの学校はほんと軟弱な奴が多いってか、とにかく本気出して勝負をしようとしねえ奴が多すぎるんですよ。運動部なんてまさにその標本みたいな内容です。もちろん先輩だからって後輩をむやみやたらにいじめるとか、こき使うとかそういうのは間違っていると思います。ですが単純に楽しくのんびり過ごそうみたいな乗りが多すぎて、俺は何度かぶっちぎれそうになりました。今は三年なんで好き勝手に怒鳴ってますが、それも本気を出して欲しいってことなんです。全力を尽くして完全燃焼する、これが大切なんですよ」

——そういえば青大附中のバスケ部、今年珍しく地区大会二回戦まで進出したらしいな。

弱小運動部青大附中にとっては実に奇跡的なことでもある。

「俺はそのことを毎日、口うるさく言い続けてました。よっく観察してみるとバスケ部に入ってきた奴、最初はやる気溢れてるんですよ。秀才のぼんぼんばっかじゃねえんです。ところがだんだんぬるま湯に浸かっているうちに闘争心の牙みたいなのが抜けてしまって、仲良しクラブな乗りになっちゃいます。もしくは戦うのがいやになって委員会活動に逃げるか、って感じですよ」

背を向けていたので気づかぬ振りをする。なんとなく上総の背中を指されたような感覚がある。

「青大附中は委員会活動も独自の進化を遂げているからな」

「俺も関わってますから大きいことは言えません。ただ俺なりに思うのは、一度ぶっ殺すと思うくらいの気迫がない限り、試合では勝てないってことを後輩たちにはわかってほしいってことです。もちろん、試合から離れたところではのんびりおちゃらけるのも悪くはないですよ。俺もまあ、同期の連中とはそうやって遊びますから。けど、試合は気迫ですべて決まります。才能とかそういうもんも否定はしませんが、一か八か勝負かけてやるって気持ちがない限り、何事も突き抜けられないと思うんです」

「新井林、すごい、よく言った」

やはり予想通り、関崎の感嘆の声が上がる。

「俺も同感だ。俺はチームプレイというよりも自分との戦いで同じこと考えている」

「そうか、関崎さんは長距離専門だったんですね」

「そうだ。長距離は時間配分もそうだが、息が苦しくなる時や相手が一足先にスパートをかけようとしてかく乱しようとした時とか、さまざまな部分で自己コントロールを求められることが多いんだ。周囲に惑わされずに、自分のペースを守り、勝負どころを見極めるためにもまず自分とのぶれない気持ちが大切なんだ」

「そうです、そうです」

「たとえゴールで最下位だったとしても、自分で自分を見失わずに全力尽くしたと実感できれば、多少なりとも納得できるんだ。手を抜いてへらへらしてゴールするよりも、死に物狂いで戦って燃え尽きる、それこそ自分に勝利したということじゃないのか。たとえ順位がたいしたことなかったとしても、だ」

「共感します。関崎さん、青大附中にあなたは来るべきだった人ですね本当に」

また、背中、首筋に痛いものを感じる。とことんしらばっくれることにする。

——死に物狂いで燃え尽きる、か。

全力を尽くす、その言葉に嘘はない。

一気に飲み干した紅茶のペットボトルを手で支えながら上総は木漏れ日を眺めた。

——確かに、それはそうだけださ。本当に全力尽くしたという「だけ」で満足できるんだろうか。もちろんそれは関崎が全力尽くした後に結果を出したから言えることであって、本当の本当に最下位だった場合、それ、受け止められるものなのかな。

それに、とも思う。

——得意分野で勝負できる人はそれでいいかもしれない。でも苦手分野で、それこそずっと最下位で、いじけるしかない相手に「全力尽くしたから誇りを持って」といわれて感嘆に受け入れられるとは、どうしても思えない。手に入れたくてならないのに、どうして届かない、そんな絶望感が「全力尽くした」という自己満足だけでぬぐえるものかな。

「そうだ新井林、これから一周ランニング人しないか！」

「え？ 今からですか？」

話がどんどん進んでいて、どうやら関崎は新井林に広場を一周大回りするつもりらしい。

「水もたっぷり補給したことだし、これからゆっくり景色を眺めながら身体こなしするにはちょうどいい。立村、お前も来るか」

「いや、いい。荷物見てるから、お前ら行ってこいよ」

丁重にお断りさせていただいた。「全力」尽くした後なのだから、もう少し休息したい。上総はふたり仲良く駆け出していく様を見送ることもせず、かばんからノートを取り出した。関崎に自由研究の話を促されたら説明するため持って来た研究ノートだった。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々 (6)

ひとり木陰で過ごすのは心地よい。特に風が吹き抜けていく天気の内ならば。

——そろそろもう一本飲み物買ってこようか。それともそろそろパンでも買ってくるか。

十一時半を少し回ったところだ。そろそろおなかも空いてくる。

——あいつらが帰ってきたら、聞いてみようか。

それにしても皮肉なものだ。

——杉本のタイプの野郎ふたりが揃ってるんだもんな。

ノートを開いたまま膝に置く。まだ戻ってくる気配はない。脇においてあるミニテニスのラケットを手に取り、はじいてみる。本当はそろそろ、杉本と桜田ががんばって家庭教師活動している様子を先生たちと覗きに行くはずなのだが、連絡がまだ来ない。たぶんこの調子だと夏休み明けになるのかもしれない。連絡が来ても三日間留守だし間に合いそうにない。

——杉本は、またあのマイコンショップに行ってるのかな。

きっと例のプログラムとやらをキーボードに根性入れて打ち込んでいるのだろう。どこまで進んだのか、こっそり覗いてみたい気もする。明日の旅行では幸いひとり歩きできるし、早めに土産を購入しておいたほうがよさそうだ。母と一緒にだとまた余計なかんぐりされるのが目に見えている。結洲市の名産とはなんなのだろう。もう少し調べておいてもよさそうだ。

上総は木の根に手をかけそのままもたれて目を閉じた。本当に気持ちいい。

「おい、どうしたんだ、目、覚ませ。日射病か」

関崎の声と同時に揺さぶられる感覚とで上総は目を覚ました。視界には当然関崎が、その脇で突っ立ったまま、新井林が見下ろしている。

「なんだ、寝てたんですか」

「ずいぶん早くもどったんだ」

つい寝ぼけてしまった。関崎が軽く肩を叩く。

「いや、俺たちも走った後のんびり話をしながら来たからかなり時間経っているはずだ。もう十二時を回っているぞ」

「あ、ほんとだ。そろそろ昼ごはんの時間だな」

まだ完全に覚めやらぬまま上総が答えると、

「あっそっか。そうですね関崎さん。せっかくだしなんか買ってきますか」

新井林がさっさと話を奪い取って関崎に話しかける。完全に上総のことは無視である。

「ひとつ提案があるんだが」

上総が口を開こうとするのを即、関崎は遮った。

「自由研究で一緒に出かけた奴らといつも休憩していた場所があるんだ。屋根はある。そこで適当に食べてからまたここで勝負するってのはどうだろうか」

「休憩って、このあたりに店、あるのか？ さっき俺も歩いてみたけど、小さな雑貨屋くらいし

か見当たらなかったよ」

無理やり話しかけて見るが関崎はあっさり首を振り、新井林相手に話し続けた。

「自転車で少し青潟の方に向かうとあるんだ。俺も最初は校則違反かと気をもんだが、たぶん大丈夫だろう。シンナーとかたばこか吸うわけじゃないし、なによりも禁煙だ」

「へえ、付き合いますよ。関崎さん」

実は答えを知っていそうな新井林が、にやりとして関崎の後に続いた。自分らの荷物はさっさと担ぎ、座ったままの上総には何も言わない。

「わかったよ、言われたところにする」

もう上総も、関崎に逆らうのも面倒になってきていた。だって夏だから。

——いったい何、話してたんだろうな。

あっという間に仲良しの先輩後輩つながりを午前中で完成させてしまったような目の前の二人。そのうしろをとぼとぼと歩かざるを得ないのが上総の立場。

三十分近くも眠りほうけていた間、何を語り合っていたのか全く想像がつかなかった。ふたりとも体育会系な熱血野郎であることは承知しているが、部活や一般スポーツの話題だけでそんなに持つものだろうか。気が合う、ただそれだけなのかもしれないが。

——でも、ふたりとも共通点はあるな。

杉本梨南を全くもって興味を持たない、もしくは嫌悪していること。

突然笑い声が聞こえ、新井林が面白げに手を叩いているのが聞こえた。

関崎を先頭に自転車のペダルを踏み、数分走ったところで止まった。

「関崎さん、まさかこれ」

「まさか？」

上総と新井林が同時に言葉を発した。

「まさか、パチンコ屋で時間つぶししてたとかいうんじゃないよな」

恐る恐る問いかける。目の前には「あみゅーずめんとぱーくあおがた西店」とかでかできるときらびやかな看板が立っている。駐車場が広がっているがかなり車で埋まっている。昼過ぎ、すでにけたたましいじゃらじゃら音が外に洩れている。

ふたりの視線を慄然たる表情で首ふる関崎。

「俺が校則違反をすると思うか？ ギャンブルは決して学生のすべきことではない」

「だったら、なんで？」

さらに問いかけると、関崎は黙って自転車をパチンコ屋の奥まで押して入り、その隙間の小路にもぐりこんだ。ひとひとり通れる程度の隙間はある。ちゃんと通路ではある。そのままどっぴと、外には複数の物置に似たものが立ち並んでいた。見た目でわかる。青潟でよく見かけるこの形は、

「関崎、お前、まさかさ」

言いかけた上総を無理やり黙らせるように、新井林が尋ねた。

「カラオケ、ですか」

「その通りだが、昼間からそれだけで過ごすわけではないんだ」

関崎は自転車を店入店口前につけて、ふたりにも同じようにするように案内した。

「ここは昼から三時にかけて、弁当が三百円で買える。さらにそれを持ち込んでカラオケボックスに入れば、歌い放題で一時間五百円。たいてい三人で入るから二時間くらいこもっていてもせいぜいあわせて三百円を切る程度で時間が過ぎせる。一休みして盛り上がるにはちょうどいい時間だ」

「そうだけど、関崎なんでこんなところ見つけた？」

確かに関崎の歌唱力が素晴らしいことは認めるが、嬉々としてカラオケに通うような性格とは想像していなかった。修学旅行濡れ衣事件の打ち合わせで古川こずえも含めて三人で籠ったことはあるけれども。あれでまさか目覚めたなんて言わないだろうか。いや、それ以上に新井林は関崎の隠れた趣味をどう受け取っているのだろうか。

関崎は堂々と答えた。

「たいしたことではないんだ。ほら、お前と古川、三人で品山近くのカラオケボックスに入ったことがあったらろう。あの時だ」

「やはりか」

「あれ以来家族でよくカラオケボックスめぐりをするようになったな。大人がいれば何時間いても校則違反にはならないから精神的にも楽だ。ただ大人相手だとマイクの奪い合いがいろいろと面倒なので、できるだけ健全で万が一先生方に見つかっても問題ない場所を開拓していたんだ」

「開拓って、けど、それでここか？」

「そうなんだ。この辺りは確かに喫茶店らしきものが少ない。しかも高い。だがカラオケボックスだったら一度弁当をもらってそのまま部屋に籠ってればそれで澄む。学生にとっては一番楽だ。歌わなくてもここで自由研究の相談も出来る。俺たちが集まった日は雨のこともあったから、こういう屋根のある場所は非常に助かるんだ」

一番興味あることを尋ねてみた。新井林のことは無視した。

「関崎、やはり、歌うのか？」

「当たり前だろう。カラオケボックスで歌わないというのは、店のポリシーに対しても失礼だ。そうだ、立村、お前なんで歌わないんだ？ 新井林、お前はカラオケやったことあるか？」

顔をしかめる新井林だが、ふと何か思ったことがあったのか、

「わかりました。関崎さんとだったら間違いはないでしょう」

ひとりごち、やはり上総をするっと無視したまま関崎の後ろについていった。

——悪いけど、誰が歌うかよ。勝手にやってろだ。けど、ここは使えるかもな。

上総はカラオケボックスの名前と料金だけ、頭にメモしておいた。内密の打ち合わせが出来る場所をストックしておくのは評議委員長時代、本条先輩に叩き込まれてきたたしなみだった。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々（7）

はっきり言ってカラオケボックスの中はひたすら息苦しかった。

関崎の言う弁当も、やはり三百円程度だけあって、いかにも冷凍食品を無理やりレンジで温めたようなもので、味の感覚が残っていない。グラスに注いだウーロン茶が冷たく喉越しよいというそれだけだ。

——まあそうだよな。カラオケボックスで味をどうこう言うのも間違いだよな。

それでもうまそうに食いついている関崎と新井林を横目に、上総ひとりでウーロン茶を啜っていた。ここではカラオケが最新式のレーザーディスクで曲にあわせてドラマが繰り広げられる。むしろそれで楽しめた。関崎たちが嬉々としてマイクにかじりついているのもまたものめずらしい珍獣を眺めるような気分であらまあよしだ。なお、奴らの選曲についてはあえて知らん振りを決め込む。邦楽ばかり、知らない曲ばかり。上総の日常リスニングミュージックは洋楽メインだと改めて思い知らされた。

「立村、お前全く歌っていないが」

「だから言ったろ。俺は歌うことが大嫌いなんだ」

「なら合唱コンクールどうするんだ」

「中学時代は指揮者で通したからそれでいい」

そこまで言い切ってはっと気づく。

——そうだ。今俺は、評議委員じゃないんだ。

「関崎さん、青大附中の合唱コンクールは二年生のみ。一年と三年はすべて聞き役なんです」

新井林が丁寧に注釈を入れる。すでにロックを熱くがなりたてた後で喉がいかにしているに違いない。

「なんでも三学年全部のクラスが合唱やろうもんならいつまで経っても終わらないんで、いつの頃だかかそういうことになっちゃったみたいなんです。それでそん時に評議やってれば自動的に指揮者にまわされるということなんです」

「でもそれだとつまらないか」

いたってまじめなことを関崎は口にする。関崎にとってはたぶんつまらないんだろう。

「いやあ、合唱コンクールの時期はとにかく面倒くさいったらねえっす。放課後ひたすら練習で残されるし、ちょうど俺も評議とバスケット部の二束の草鞋履いてたもんだからもうめまぐるしいったらねえ。それでもまあ、相棒があいつだったんでだいぶ楽ではありましたが」

——生徒会長だな。

杉本梨南を排除したあのクラスで実にはのびのびしていられただろう。去年の合唱コンクールの優勝クラスではなかったはずだが。

「そうなのか。妙なところで効率化なんだな」

関崎はよくわからない反応を返した後、

「俺が知る限り、高校ではすべての学年が参加するはずと聞いたぞ。確か藤沖からだ、二学期の九月末に合唱コンクール。中間試験が終わってから学校祭」

「だいぶ中学とスケジュールが違うんですねえ」

ふむふむと新井林が頷きつつ、片手で曲本をめくっている。関崎に見せている。

「アニメソングかなりありますねえ。俺、歌っていいっすか」

「ああ、いいぞ」

完全に空気と化した上総は、黙ってブラウン管に表示された、ふわふわパーマの女子高生といかにも野球部のピッチャー面した少年との青春ドラマに見入っていた。歌にかぶさる形なので台詞がない。歌詞だけで想像して楽しむ、それでよい。」

——九月になると合唱コンクールの時期なんだな。

新井林の言う通り、今まで上総は青大附中評議委員の立場を利用して、無条件で指揮者の地位を勝ち取ってきた。それぞれのクラスにおける男子評議が救いようのない音痴でない限りはそのまま受け入れられてきたことだった。天羽、難波、更科も当然のごとく指揮者に納まった。ちなみに伴奏者はピアノが弾けないと話にならないこともあり、それなりに稽古を積んでいる生徒が担当する。男女問わず、である。

——となると俺も今回ばかりはあきらめて声張り上げて歌わないとまずいつてことかよ。なんか胃が痛くなるよな。指揮者だったらそれなりにタクトの振り方覚えればなんとかなるけどさ。

たぶんあの麻生先生のことだ。きつといやというほど盛り上がるだろう。

関崎と藤沖のふたりも熱く燃えるだろう。

女子もたぶん、古川こずえがめいっぱい盛り立てるだろう。

上総は静かに「歌う振り」をしていればいい。

それにしても新井林は元気に歌うものだ。すっかりブラウン管にかじりつき、歌詞をにらみながら拳振り上げがなっている。正直、お世辞にも上手とは言えない。

拍手なしでどんどん進んでいく。男子連中ののんきなところは、カラオケでお義理の拍手なんかしなくてもいいということだった。

「じゃあ次、関崎さんいきますか。あ、主題歌で行っちゃいますか」

何を選んだのだから、やたらとささやき声で新井林と盛り上がっている。

「ああ俺なりに、この歌は人生の応援歌みたいなもんだからなあ。親と合唱する」

「親と、ってまじっすか」

さすがに新井林も引き気味につぶやく。上総も横目で見つつも流れてくる曲が全く見当つかないのでリアクションに困るのみ。珍しくゆったりとしたメロディで、よく響く声できっちりと歌いきる。その前にもアニメ主題歌やら演歌やら文部省唱歌やらありとあらゆるメロディを歌いまくっていたが、どれもすべて関崎が自分なりに消化しているのが感じられる。詳しいことを聞いたわけではないのでよく分からないが、関崎は心底歌うことが好きなんだろう。もう合唱コンクールのことを考えるだけで胸がわくわくして寝られない遠足前の小学生状態なのだろう。付

き合わされ方はたまったものではないが才能が動かすものなのだからしょうがない。

——ほんと、曲知ってればもっと楽しめるのかもしれないけどさ。

レーザーディスクのドラマは、夕日の燃える中ひた走るひとりの青年の姿。ただそれだけなのだが景色が変わっていくだけでも観ている方を飽きさせない何かがある。

二時間たっぷり歌い終えた後、やっとカラオケボックスから脱出した。「脱出」と感じていたのは上総のみで、おそらくあのふたりは未練がありげだったはずだ。一時間につき十曲程度、対話もなくただひたすら歌うのみ。その間上総は酸欠状態すれすれで息を殺していた。いくら外が太陽燦燦とまぶしくても、今はどうしようもなく恋しくてならなかった。

「そいじゃ、関崎さん、俺、これから用あるんで先に帰ります。楽しかったです。また一緒に歌いましょう！」

てっきりまた「勝負しましょう」くらい言うかと思っていたが、まさか「歌いましょう」とは。上総にはほとんど見向きもせず新井林は自転車でさっさと青濁方面に向かい走り去っていった。残された上総に、関崎がほっとした表情で話しかけてきた。

「お前には、予定変更で悪いことをしたな」

「いやいいよ」

「本当は、そういうつもりではなかったんだ。立村、お前とじっくり話したいと思っていたんだが、新井林が面白くてついつき合わせてしまったんだ」

「いや、本当に気を遣わなくたっていいからさ」

妙に重たい。車道に出て自転車を引く。もう二時過ぎだし早めに帰るのも手のような気がしてきた。それを察してか関崎がさらに追い討ちをかける。

「せっかくなら、駅前まで戻って俺のうちに来ないか」

「え？」

「俺の家は兄貴と弟と一緒にの部屋なんで、むさくるしいかもしれないが茶の一杯くらいは出せる。せっかくだしそこで自由研究の話もしたい。そういえばさっきお前が膝に広げて寝ていたノート、自由研究だったんだな。お前の話ももっと聞きたい」

もう、逃げられそうになかった。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々 (8)

関崎の家は青潟駅前商店街から少し奥行った住宅地の一角にあった。二階建てで三角屋根。ほとんど近所の家と見た目変わらない。

——絶対、俺ひとりならたどり着けないな。

関崎の後ろについていくのみ。自転車を塀の中につけるスペースはある。

「狭いけど、入ってくれよな」

「ありがとう」

玄関の引き戸を開き、関崎は「ただいま！」と大きな声を張り上げた。

「あーら、おとひっちゃんお帰り」

すぐに母親らしき人の声が返ってくる。

「あんたも早かったのねえ。あら、お友だち？」

「今朝言ったろ。英語科の同級生で、中学時代にいろいろと俺にテープ送ってくれた奴」

——なんかそんなことしたか？

上総が頭をひねるうちに、関崎の母親らしき人はにこやかに、

「ほら、あんたも早くお友だち呼びなさい」

とささやきかけている。ふっくらした、かなり年配の女性だった。いわゆる上総の知る「母親」とは違うイメージではある。

きちんと挨拶をして二階の部屋に案内される。決して家が小さいわけではないのだが、階段がとにかく細く急だった。

「兄貴ら出かけてるな」

だだっ広い部屋をカーテンと襖で区切っている。上総の見る限りほぼプライバシーがゼロに見える。しかも今日はほとんど開けっ放しと来ている。関崎が案内してくれた方にはカーテンが用意されていて、覗く机の上にはトンカチやら鉋やらが放置されていた。

「うちの兄貴は、工業の建築なんだ」

自慢げに関崎が語る。

「だから、うちの家具とか最近は全部兄貴にまかせっきりなんだ」

「関崎は確か三人兄弟だったよな」

「ああ、弟もいるが、あいつはひたすらゲームにはまってるんだ。不健康だと思うよな」

もう一部屋は完全に襖で仕切られている。様子を伺うことはできなかった。

「ほら、ゆっくりしてってくださいねえ。ええと立村くんだったかしらねえ」

「はい」

正座して、関崎の母が運んできたサイダーを受け取る。ビニールに包まれたお饅頭も一緒だ。

「青大附中のお友だちが、うちのおとひっちゃんにいろいろよくしてくれたって聞いてたけど本

当にねえいい子ばかりねえ。おとひっちゃん、いつも話してるわよ」

「事実だからしょうがない」

照れているのか、あっさりと答える関崎。母親が続ける。

「一学期の時もね、うちのおとひっちゃんが熱出した時もお友だちが男の子も女の子も連れ立ってお見舞いに来てくれたり、ほんとみんな思いやりのあるいい子ばかりねえ」

「母さん、早く下、行けよ。俺はこれから立村と自由研究の打ち合わせがあるんだ」

うるさそうに関崎が追い払おうとするが、ふっくらぼっちゃりの関崎母はしつこく居座る。上総を観察したいわけではなさそうだが、やたらと青大附中出身者に対する褒め言葉をちりばめてくる。その中に上総も当然含まれるから、受け取れと、そういうわけだ。

「本当にねえ、みんないい子ばかりね。やはり頭のいい子たちが集まる学校は、いじめとか仲間はずれとかそういう品のないことしないのねえってお父さんとも話をしていたのよ。ほら、なにせこの子、こういう性格でしょう？ おぼっちゃまって顔してないからねえ。みんなに嫌われてしまうんでないかって本当に心配してたのよ。それをみんなこんないい友だちに恵まれて、本当に、本当に」

——いったい何度「本当」って言ってるんだらう。

関崎の母が感極まる様子を静かに受け止めながらも、一方で上総は関崎の顔が完全に紅潮しているのを面白く眺めた。この親子もまた、いろいろと裏でバトルがあるに違いない。

しばらく母親を追い払うのに難儀していた関崎だが、三度目の、

「だからこれから、勉強しなくちゃいけないんだ」

たる優等生的台詞でもってなんとか二人きりにしてもらえた。

「悪かったな。うちの親はやたらと人なつこすぎるんだ」

大きくため息をつき、関崎はまずサイダーの入ったグラスを手にした。

「すっかり炭酸抜けてるな」

「そんなことないよ」

いや、実際ほとんど単なる砂糖水と化していた。あえて何も言わない。触れないのが礼儀。上総は話を逸らした。

「うちのクラスの連中が、わざわざ見舞いに来たんだろ」

「ああ、藤沖、古川の評議委員コンビだ。それと」

ここで口をつぐむ。分かっている。気にするなと言いたいが一步間違えると上総もどつぽにはまる可能性があるので、あえて飲み込む。

「そうか。なんだか想像以上に青大附属の連中は受けがいいってことなんだな」

「きっかけはお前だ。わかっているだろう」

関崎はきっぱりと言い放ち、

「まず食え。この饅頭、あんこが詰まっまっていてうまいぞ」

言うより先にぱっくり割って口に押し込み始めた。上総も同様に試したが、だいぶ硬くなっていて正直味は今ひとつだった。もちろん、そんなこと一言も口にしない。

とはいえ、砂糖水のサイダーを口にして饅頭を食い終わるとだいぶ気持ちも和む。

扇風機を部屋の真ん中に置き、関崎は自分の机を指差した。

「とりあえずなんだが、俺の自由研究を見せたい」

「どれ？」

机の上はお世辞にも片付いているわけではないのだが、それでも散らかし方に法則があるように見える。うまく言えないが、机の上で世界地図を広げているような感覚だ。関崎はすばやくノートを積み重ねた山の真ん中から抜き出した。

「写真はほら、これですべて撮影した。三枚ずつ現像するから結構金はかかる」

「なんで三枚も？」

上総が尋ねると関崎はノートをぺらとめくった。

「一枚は提出用だ。二枚目はもうひとりの仲間が自分用にまとめるためだ。それで最後の一枚が俺というわけだ」

「自分用にも作るのか。下書きみたいな感じかな」

「いや違う」

関崎は言い切った。受け取ったノートをめくると、がっちりした四角い文字で「青潟市に点在する多くの石碑に関して」などとさまざまな記録が綴られている。あまり面白そうなものではない。石碑そのものは真四角なものもあれば、自然の石を取り入れて見せたものもある。個性がないわけではないのだが、上総にはあまり心惹かれるものではない。

「提出する分は、青潟の歴史研究も踏まえたうえでまとめてあるんだ。ひとり、歴史マニアがいるからそいつに推敲は任せる。だが俺は歴史よりもむしろ別の方面で何かを残したいんだ」

「それって何を？」

「わからない」

またきっぱり答える関崎。

「例えば石の種類とか、その時の天気とか、いろいろなものだ。俺はあいつらと一緒にぐるぐる街を廻っているいろいろなことを知ることができて有意義だと思っているが、やはりこういう形よりもっと別のことをやるべきなのではという気がする。ただそれが何なのかわからないんだ。しょうがないんで、こうやって歩いた記録だけノートに残しておく。そう決めた」

——関崎、いやそれわかるけど、そんなことさらけ出さなくたってさ。

引け目らしきものは全くなし。わからない、そう言い切れる強さ。やはり関崎乙彦は上総にとって謎の人物に違いなかった。

正直、関崎たちが企画した「青瀉の石碑に関する研究」については、上総に響くものを感じられなかった。誰かがとっくの昔にやっていることにも思える。

「どういう風な構成にするつもり？」

控えめに尋ねて見ると関崎は振り返って答えた。

「そうだな、俺のイメージとしては図鑑のような感じでまとめたんだけど、仲間の一人がもっと歴史を細かく研究した内容を載せたほうがいいのか言い出したし、もうひとは大人が読んでもいい内容にしないとまずいとか、意見は分かれていたんだ。俺もよくわからないので結局ひとりに押し付けた形になってしまった」

「やはり意見は分かれるよな」

互いに笑いあった。三人というメンバー数は微妙なところである。

「でも、関崎はあとで自分のやりたいようにまとめるつもりなんだろう？」

「そのつもりだが、正直、いつになるかわからない」

「実はあまりやる気なかった？」

「いやそんなことはない」

どうも上総の直感では、関崎のやりたい放題パワーが感じられなかった。うまく言えないのだが「本当にやりたいこと」ではないような気がする。仲間と連れ立っていろいろな場所で盛り上がるのが楽しいだけで、自由研究そのものをしていようには見えない。附属上がりの連中と話している時と比較して、関崎とはどうもその違いを感じる人が多い。

「そうだ、立村、いいことがある」

しばらくなんだかんだと関崎と取り留めもない話を続けていた時だった。

「こんなところでうだうだしているのも時間をもったいない。俺の自由研究についてもっと知りたければ、家の中よりは外がいいに決まっている」

「決まって、いる？」

戸惑う上総を置いてきぼりにして、関崎はすっと立ち上がった。

「食うものは食っただろうし、さあ行こう。お前を連れて行きたいところがあるんだ」

——本当に関崎も相当の気まぐれ野郎だよな。お似合いじゃないか。

思わずつぶやいてしまう。

「じゃあ、行って来る！」

「おとひっちゃんまた出かけるの？ 来てくれたばかりなのに？」

母親の声も無視して関崎は勢いよく外へ飛び出した。すぐに自転車の鍵を解除して、

「お前は俺の後ろについて来い。すぐ側だが自転車だと少し遠回りなんだ」

「どこへ行く？」

上総が問いかけても、関崎は聞く耳を持たない。聞こえない振りをしているのではなく、熱中

しすぎていて声が聞こえないだけの様な気がする。

「とにかく来い！」

——相変わらず命令かよ。

それでもなんとなくそののりにあわせてみるしかない。今のところ上総に特段害はない内容なのだから。上総なりに判断し、すぐ自転車のペダルを踏んだ。住宅地を回りつつたどり着いたのは「青潟市立郷土資料館」の看板だった。

すたとんと納得した。

——口で説明するのが面倒なんで、ここに入って納得しろと、そういうわけか。

上総もこの「青潟市立郷土資料館」がどういう場所だか知らないわけではない。

青潟の歴史をたどった小さな資料館なのだが、一応は有料で二百円の入館料が取られる。品山育ちの上総には縁がない場所だけど、青潟の子どもたちなら一度は校外授業の際に連れて行かれるなじみの深いところではないかと思う。ただし、上総は一度も入ったことがない。

「家の近くにあるなんてすごいよな」

「たいしたことじゃない。俺も今回の自由研究に参加するまでは自分から立ち寄ろうと思ったことはなかったんだ。だが、青大附属の連中は結構ここを知ってる奴多いぞ。たまに俺の友だちとも顔をあわせることが多いしな」

「例えば誰が」

「いろいろだ。お前の知らない奴も多い」

言葉を濁す。まあ、歴史好きな奴も青大附属関係者にはたくさんいるだろう。もしかしたら若き日の狩野先生も立ち寄っていたかもしれない。今度聞いてみよう。

入館料二百円を支払い、中に入って見る。そのまま奥に進むと展示室が大まかに五部屋ほどあるようで、「青潟市のなりたち」から始まり、「青潟市の産業・商業」「青潟市を襲った天災」などなど、一応習いはするがすぐに忘れてしまった歴史資料がたくさん並んでいる。古文書や古地図ばかりで、息が詰まりそうになる。

「こういうのが好きなのか」

「自由研究だからな」

あまり答えになっていないような返事をする関崎に、上総は自分の直感がかなり正しいことを確信した。本当に、実は関崎、歴史になんて興味ない。きっと今回のテーマを選んだ理由ば別のところにあるはずだ。絶対に。

三部屋めの真ん中あたりに長いすが用意されている。来館者が足を休めるためのスペースだろう。上総は腰を下ろした。関崎も付き合いで座った。

「お前はこういう環境好きじゃないのか」

「嫌いとは言わないが、俺は青潟の歴史そのものに関心がないんだよな」

本音だった。自分にとって「青潟市」＝「品山」ではない。青潟という街の風土と異なる匂いが品山にはもともと存在していて、その違いにいつも違和感を感じている。それがどこなのか自

分でもわからない。

「そうなのか、めずらしいな」

——お前に言われたくないよ。

ふっと心でつぶやく。関崎だって似たようなものだろう。もしこいつが本気でやりたいことを自分で選んだとしたらどういうことをしたかったのだろうか。聞いてみたかった。

「もしさ、関崎。今度の自由研究でさ、自分ひとりでやれって言われたら何を選択してたか？俺だったら、あの担任のこと無視して、まだ翻訳されていない本を訳してやろうかとか思うけど。それだったら比較対照ないからいかにも勉強したように見せられるし」

うっかり自慢げに話してないか、意識して慌てる。関崎は怒るところか大きく頷きつつ微笑んだ。

「もし俺だったらか。考えたことなかったな」

「本当に？」

「いや、俺は正直驚いてるんだ。青大附属の自由研究に」

「なんで？」

恐る恐る尋ねて見る。

「ふつう、自由研究とは、先生たちが何かルールを決めるだろう。俺の知る限り普通はそうじゃないかと思う」

「え？」

思わず絶句。ルールってなんだ？

「普通だったらそうだ。生徒に丸ごと決めさせるようなことはしない。てっきり今回も何かテーマらしきものがあるってそれに添って自由研究するもんだと思っていた」

「それって自由研究にならないような気がするよ」

相槌を打ちつつ、答えを迷う上総。やはり、こいつは外部生だ。

「いや、普通自分でテーマなんて見つけれないわけがない。それがいきなり丸投げされてしまい、正直俺は混乱している。普通そうじゃないか？ どう思う？」

「いや、俺としては」

言い返そうとして、ふと目線を入り口に向けた。

凍りついた。

——あいつ、もしかして？

真っ赤なTシャツを着て出口に走り去った男子の姿に、上総は釘付けとなった。

その後ろに、またひとり、ピンクのワンピースを着た長い髪の子学生らしき後姿も。

——ちょっと待て、まさか。

「おい、立村どうした」

衝動に駆られたのは、今度は上総の方だった。

「悪い、資料もらってくる」

驚く関崎を長いすに放置したまま、上総は立ち上がりその後姿を追った。

その十四 高校一年夏休み二十日目・立村上総の関崎乙彦に引きずられていく日々 (10)

まさに本能で動いている。

——あいつはやはり、あいつだ。

それほど館内は広くないのだが、それなりに人の出入りもある。関崎も展示物を眺めつつ、「今日珍しく人が多いなあ」

とかつぶやいていたくらいだった。入れ違いとなっている可能性もある。

だがしかし。

——あのピンクの服着た人、やはりあの、あれだよな。

関崎には言えない。憶測でものを言いたくない。いや、人間として絶対に口にしたくない。まさか、あれだけ大切にしている自分の弟分を、

——実は裏で青大附中の生徒会長とつるんでさまざまな小細工をしている張本人。

などと暴露するのは、上総としても出来かねる。

出口まで走ったがすでに赤いTシャツの男子とピンクのワンピースをまとった女子のふたりはどこにも見当たらなかった。気のせいだろうか。幻を見たのだろうか。

「立村、どうした。資料欲しいならこちらの図書室だろう」

立ち尽くす上総を呼び止める声、関崎がゆったりと近づいてきた。

「そんなのあるのか」

「ある。俺が案内してやる」

目的がそちらではなかったこともあって、全く話を聞いていなかった。腕をつかまれ引きずられるようにして連れて行かれつつ、上総は関崎に尋ねてみた。

「関崎、お前、気づかなかったか」

「何をだ」

「さっきさ、お前の友だちがその辺にいたような気がしたんだけど、声かけようかなって思ったんだけどさ」

あえて、ピンクの服を着た誰かのことは匂わせなかった。

「ほら、ええと、あの、誰だったか」

「お前、雅弘のことを言ってるのか？ 立村、お前まさかとは思うが」

「いやあの、もしかして」

思いっきりどもってしまった。もうお見通しか。関崎にしては珍しく勘が働くものだ。どうやってごまかせばいいか急いで考えた。

「いやさ、俺ももう少し資料読んでからもう一度観て回ろうと思ったんだ。そうしたら、赤いTシャツを着た見覚えある奴が歩いてて、それでもしかしたらって」

「立村、お前に聞きたいんだが」

関崎はいきなり向き直った。

「立ち話で終わらせることではないだろう。雅弘とお前との間に何があったかは俺も知らないわけじゃない。だがなんで、お前、あいつを追いかけようとしたんだ」

「それは」

言葉に詰まる。確かに関崎の言う通りなのだ。一年以上前にもなる佐川との諍い。もう二度と顔も合わせたくない相手のはずでは、確かにある。関崎がそう思い込んでいても決して間違いではない。ただ、全く別の意味合いで上総はどうしても佐川と関わらなくてはならない一点が存在している。そのことをもちろん誰にも言えない。どうすればいいんだか。

——一応あの野郎と関崎とは親友なんだよな。

「親友」の定義がどのようなものであれ、自分にとってかけがえのない存在であることには違いない。上総には全くふたりのつながりが想像しがたい。今日の前にいる関崎の朴訥さと、計算高い佐川のしたたかさとがどう結びついたのかいまだに理解できない。それでも、もっと大切なつながりがあるのなら、上総は決して否定できやしない。

さて、どう伝えるか。

黙りこくった上総を、関崎はじっと見つめていた。ガラスケースの中に納まった青湍市古来の書物と印鑑をちらと見やった後、

「このことは、俺も話すべきか迷ったが、伝えておく。さっきの席に戻ろう」

背中を押されるようにして再び長椅子のある展示室へ押しやられた。

「まあ座れ」

立ったまま指示され、素直に腰掛ける。関崎は上総の隣に腰をかけ、青湍市古地図をゆったりと眺めた。

「こうやって眺めると、みな、生活がひとつにつながっているんだなと思う」

「え？」

いきなり関崎には似合わない言葉が飛び出し、思わず顔を覗き込む。

「俺はな、立村」

また改めて姿勢を正し、向き直った。しかたなく上総もそれに従う。

「雅弘が妙な動きをしているとお前らが思っていることは前から知っている」

——気づいてるのかよ？

いや、慌てて食いついはならない。上総は言葉を飲み込み関崎の続きを待った。

「だが、それは誤解なんだ。それはよくわかってほしいんだ」

「何、それ」

「実は四月の半ばごろだったか、雅弘がここで女子と会っているところを見たことがある。お前もよく知っている、あの女子だ」

「まさか、佐賀さんのことを言っているのか」

息が止まりそうだ。関崎の持ち出す爆弾には限りがない。真正面から勝負してどうやったら勝てるのか、想像がつかない。

「そうだ。俺も前のことがあったから気になって声をかけたんだ。雅弘は決していい加減なこと

をする奴じゃない。ただ、女子に親切にしすぎたあまり周囲から誤解されるとかそういうことはよくあるんだ。お前もたぶん、それでひっかかったと思うんだがあいつは純粋に、人間として心配してそういう行動をしているだけなんだ」

——関崎、お前本当に、そう見えるのか？

問いかけたい気持ちを必死に抑える。朗々と語りかけてくる関崎。

「話を戻すとだ。雅弘はその女子から、いろいろな相談を受けていたらしい。あいつの家はお前も知っている通り本屋だし、雅弘もしょっちゅうレジ家を手伝っている。それで顔見知りとなり、相談にのってやったと考えて不思議ではない。だがそれは純粋なあいつの気持ちからきたものであって、色恋沙汰では決してないんだ。その証拠にその女子は、俺に向かってさまざまな頼みごとをした」

「どんな頼みごとなんだろう」

いやな予感がする。それ以前に関崎は白状するだろうか。

「それは言えない。だがはっきりしていることは、その彼女も雅弘を妙な意味で慕っているわけではないんだ。たぶん相談する相手がいないんだろう。女子同士の面倒ないざこざを解決するには同じ学校の友だちだと難しいところもあるに違いない」

「あのさ関崎、まさか」

予感的中だ。上総はゆっくり、その名をつぶやいた。

「杉本のことを、佐賀さんに頼まれたのか」

関崎は頷かなかった。ただそのまま、壁にかかった巨大な青潟市の古地図を見上げていた。イエスもノーも口にしない。ただそれだけが答えだった。

——やはりあいつが仕組んでいたのか！

握りこぶしが堅くなっていくのが分かる。想像していないわけではなかった。例の「修学旅行濡れ衣事件」でなぜ佐賀はるみが杉本梨南に妙なことを話しかけたのかとか、ずいぶんもって杉本の立場が危うくなるような言動をしているのかが気にはなっていた。もちろん佐賀はるみが賢い女子であることを否定はしない。ただ、それがすべて佐賀はるみの頭から出たものなのかが疑問として消えていなかった。

——俺の見抜いた通りだ。このままだと杉本は、またあいつに糸を引かれて足をすくわれる。桜田さんのこともあるし、それにもしかしたら、その、他の学校にとってことだって噂だけでも流れたらまたことだ。どんどん杉本の立場が悪化するだけじゃないか。

隣でひとり、感じ入っている関崎の横顔には悪意などひとかけらもない。純粋、まさにそう、関崎の頭の中には佐川雅弘という奴は「純粋でひたむき」な性格の男子として存在している。

——関崎は本当にいい奴なんだけどな……。

「わかったよ、ごめん。変なことしゃべらせてしまって悪かった」

上総は作った笑顔で語りかけた。

「それにしても、関崎の言う通りだな。本当に、すべてがつながってるんだ」

——本当に。

「次は、ゆうしゅう、結洲です。お降りの方はご準備願います」

朝七時出発の汽車に乗り込み三時間の間、酔い止めを飲んで死んだように眠りほうけていた。絶対寝過ごさないように、父から折りたたみ式の日覚まし時計を持参し胸ポケットに入れていたのでなんとか目を覚ますことはできた。が、まだ瞼が重い。腕時計を覗き込むとまだ十時少し前。いつもだったら食事を終えて家でごろごろしているか、もしくは友だちと遊ぶため自転車のペダルを漕いでいるかのどちらかしているはずだ。

——珍しく頭が重い。どうしたんだろう。

昨日関崎たちと遊んで帰った後、はっと見るとすでに母の手により荷造りがすべて手直しされていてぶち切りたい思いで一杯になった。母に文句を言いたくともとっくの昔に出発した後だし、父はこれまた遅く帰ってきたりで、結局自分ひとりで枕に当たるしかなかった。今朝もほとんど父と話をしていない。無理やり切符と財布の有無を確認させられ、ついでに父の名刺を数枚渡され、

「万が一のことがあってお母さんにも連絡がつかない時にはここに連絡しなさい」

と余計なお世話までされてしまう始末だった。さんざん子ども扱いされている自分に腹が立つ。意地でもしくじるものかと心に誓う。

——そういえば景色見損ねたよな。

荷物といっても大振りの旅行かばんと肩掛けショルダーのみ。なんとかなる大きさではある。小腹も空いてきた。駅についてから何か食べに行こうと思う。立ち食い蕎麦にしようかそれともどこかでパンでも買って食べ歩きしようか。

窓辺の景色を眺めるとそこには建物が多々連なった、ほとんど青濁と変わらない街並みが続いている。目につくものがあるわけでもない。遠くの水色に光る山々もまた同じだった。

隣の席にいる男性には頭を下げて通してもらい、列車から降り立った。今朝は思ったよりも涼しく感じたのだが、結洲のホームに立ってみると思ったよりも厚ぼったい空気が漂っている。三時間でここまで天気が変わるものだろうか。薄いジャケットを脱いで大きいかばんに押し込んだ。冗談じゃない。長袖なんて着てられるか。荷物を背負い直し、多くの人たちと一緒に改札へと向かった。

想像以上に向かう人の数は多い。やはり都会なのだろう。若者もいれば年寄りもいる。ただ子どもが思ったよりも少ない印象を受けたのは気のせいかな。一足先に通り過ぎた学生グループの集団がやたらとうるさかった。

——ちゃんと切符は忘れなかったからな、なんとでも言えよ。

切符を駅員にしっかり渡し、改札を出た。天井の高い駅の中、まずは何か飲み物が欲しくて自動販売機を目で探していると、肩越しに声をかけられた。

「立村くん」

振り返ると、上総よりも背が首ひとつ高い青年が静かに見つめていた。口元に微笑みを浮かべ

ているようにも見える。半そでのデニムシャツにチノパンという、きわめてオーソドックスな姿だった。

「時辻さんの息子さん、ですよ」

重ねて尋ねる彼に、上総は頷き、すぐに答えた。

「確かにそうですが、僕のことをなぜ」

「あ、そうか」

青年は自分の頭を軽く叩くようにしてこくりと頭を下げた。

「俺のこと覚えているわけないか。そうか、そうか」

改めて名乗った。

「矢高と言います。本日は時辻さんの命で、立村くんをご一緒させていただきます」

——母さん、まさかかよ！

顔はポーカークフェイスを保つのに必死だ。上総はゆるゆると微笑みを返しつつ、どこにいるかわからない母に向かいとことん悪態を吐いてやった。

矢高君夫、それが彼の名だった。わざわざ学生証を見せてくれた。

「失礼しました。始めまして。立村です。よろしく申し上げます」

受け取ってまじまじと見入る。矢高君夫、結洲大学文学部国文科四年。目の前の姿とほぼ変わらないモノクロ写真で映っている。一重瞼のいたって物静かそうな表情が印象的だった。

見ているだけではかえって失礼だろう。上総は自分の学生証を生徒手帳ごと手渡した。苗字はともかく名前を名乗るのはやはり抵抗がある。

「ありがとう、確か、ああ、そうだ。かずさ、くんだったか」

——だからこういうの苦手なんだよ。

母に関係する人たちと接する時はいやおうなしに名前と呼ばれる羽目となる。仕方ないことと割り切ってはいるけれども本当であればできればやめてほしい。無駄とは分かっていると言いたくなる。

「あの、母とは苗字が違いますから、苗字の方で呼んでもらってかまいません」

「いやそれは失礼だよ。上総くん」

——どつぽかよ、ったくなんだよこれ。

初対面からしくじりまくり。舌打ちしたくなる。返してもらった生徒手帳をかばんに押し込み、上総は矢高さんの後についていくしかなかった。

「いきなりで驚いたかもしれないけど」

駅構内から出て、矢高さんは上総に振り返った。やわらかく微笑みを絶やさなかった。

「今回、時辻さんから息子さんも来るという話を聞いていたんだ。時辻さんとの打ち合わせを昨日の段階でいろいろしていたんだけど、ひとりで迷子にならないだろうかってものすごく心配していたから。電話で連絡とかなかったのかな」

「全くありませんでした。正直本当に驚きました」

できるだけ穏やかに答えるようにはしている。矢高さんは悪くないのだから。悪いのは息子を子ども扱いにして満足げに高笑いしている母だけだ。

「いろいろ忙しかったようだからな。とりあえず今日は会の前日ということでみなしばしの休息中というところらしい。僕の母も明日の準備で気持ちを整えたいらしく、時辻さんたちと最後の打ち合わせに向かったよ」

「あの、矢高さん、うちの母とはどのような」

——ご関係で、は誤解招くよな。

言い方を迷いつつも顔を覗き込んでみる。すぐ得心したのか矢高さんは答えてくれた。

「時辻さんが立村さんだった頃からうちの母がお世話になっていたんだ。昔、うちの母が結婚する前青湊に住んでいてその頃からの縁らしいよ。上総くんは覚えていないかもしれないけど、俺は君と何度か会ったことがあるはずなんだ。そうだな、確か僕が十歳くらいの時に時辻さんが上総くんを連れて母の初めての会の手伝いをしてくれた時だよ。一緒に遊んだの覚えてないかな」

「そんなこと、ありましたか。覚えてなくて申し訳ないです」

とぼけたわけではない。たぶんあまり楽しい記憶ではなかったんじゃないかという気がするから、忘れていたほうがよさそうな気がする。

「いや、当然だよ。計算してみると俺と上総くんとは七歳違うんだよな。まだ三歳になったかならないかだったら、記憶ないのも当然だよ」

——覚えてなくてよかった。一生忘れておこう。

確実なのは「泣き虫」だった自分を矢高さんがよくよく記憶しているということ。

上総自身はそんなことすべて塗りこめてしまいたいこと。

冗談じゃない、思い出すきっかけなんて必要ない。

「とりあえずどこかで何か食べようか。いいところあるから案内するよ」

気さくに、それでも穏やかなまま矢高さんは上総に語りかけ、路面電車の停留所に向かった。レールが車道にぴたりとはめられていてその上を一両の路面電車がオーケストラの失敗したような音色を奏でつつ曲がっていった。空を見上げると電線が目一杯広がっている。上総があまり見たことのない光景がそこには広がっていた。

その十五 高校一年夏休み二十一日目・立村上総のさまよえる旅日記（2）

ほとんど年配者しか乗っていない路面電車に乗りこむ。矢高さんが二人分払ってくれた。財布を出そうとすると、

「いいよ、ここは俺が払うから」

横に長い椅子へ腰掛けた。かなり空いている。ゆっくり過ぎるくらいのんびりとカーブを曲がり、微妙な揺れと共に電車が進んでいくのを感じる。

「結洲に来るのは初めてなのかな」

「はい」

「聞いているかもしれないけど、結洲はいわゆる観光地じゃないから景色とかそういうものは期待できないと思う。ただ、面白いところはたくさんあるから、せっかくだしその辺りに行ってみようか。上総くん、行きたいところあるかな」

「いえ、お任せします」

そうとしか言いようがなかった。母から聞いていた通り、大学生が比較的多い街らしいというのはなんとなくすれ違う人々の層から想像はついた。ただそれ以上の何か、というものは特にない。青潟とほとんど変わらない空気のように思えた。

「まだ昼飯にも時間があるし、行き着けの喫茶店でトーストでも食べようか」

どことなく矢高さんも上総の扱いに戸惑っているようなところが感じられる。気を遣わせてしまっているのかもしれない。それとも幼児時代の上総とのギャップを感じているのだろうか。

——三歳の、手のかかりすぎるガキ相手だったのと今の俺とじゃそりゃあ違うよな。

ここはきちんと大人の対応をしなくてはならない。上総は質問を整理して尋ねることにした。「両親から、結洲がいわゆる大学の多い学生街だと言う話は聞いていました。日本文化を始めとするさまざまなものに寛容な街だからきっと楽しめるだろうということでした」

「そうか、時辻さんそんなことを言ってたんだな」

ひとりごち、矢高さんはほっとした風に肩を楽にした。見ていればわかる。こわばっていたのがすっと落ちたのだから。

「君のお母さんの言う通り、この街はいわゆる学生街だよ。大学の数が街の大きさに対して異常なほど多い。四大だけで七校、短大も五校。少し多すぎるだろう？」

よく分からない。青潟も同じくらい、いや若干少なかったような気がする。

「青潟はね、青潟大学という総合大学があるからまた別だよ。結洲の場合はほとんどが単科だから雰囲気は全然違うと思うよ」

——そうか。青潟大学は文学部から経済学部、理工学部、いろいろあるよな。

あまり考えたことがなかったが言われて見るとなるほどと頷ける。

「上総くんは今、高校一年だっけか」

「はい」

「青潟大学附属高校だったか」

たいてい「青大附高」とか「青大附属」の四文字で片付く学校名がやたら長く聞こえて戸惑う

。

「はい。英語科です」

「英語が得意なの」

「たぶん、理系よりは」

「そうか、僕も一緒だよ」

ひとりで笑い、矢高さんは立ち上がった。窓際の停車ボタンを押した。鈴の音らしきものが響いた。同時にレールの軋みが悲鳴を上げる。

「そろそろ降りようか。目的地はすぐ側だよ」

降りてみるとそこは繁華街だった。雰囲気としては青潟の駅前とほとんど変わらない賑わいだ。違うのは降り立った駐車場のすぐ脇に七階建てのデパートが向かい合っていることくらいだった。スーパーではなくデパートというのは、やはり迫力が違う。

「うちの学校はここからすぐなんだ。せっかくだからあとで案内するよ」

「学食とかあるんですか」

てっきりそちらに連れて行かれるものかと思って尋ねてみると、

「いや、一応なくはないんだけどね。小さすぎるのと食事あまりおいしいとは言えないので近所の喫茶店でたいていは賄うんだ。サークルもそちらでやってるし、とりあえずは腹を満たすだけならそちらのほうがいいと思うんだよな」

「お任せします」

今日、何回この「お任せします」を口に出しているだろう。気がつく。みっともないったらない。矢高さんには気づかれないように上総なりの気遣いをしておく。

「サークルと、喫茶店ですか」

「そう。あ、そうか。青潟だとあまり喫茶店でサークル活動とかしないんだよね」

「よくわかりませんが、ただ僕が見た感じですが大学の学食テーブルに皆ノートを置いてそれだけでやりとりしているみたいです」

青潟大学の学食でよく見かける光景を伝えた。

「青潟大学くらい大きいとそれも出来るよな。うちの大学はそれ無理だよ。一応学生会館もなくてないけれども学校公認のところでない無理だし」

のんびり歩きながら矢高さんは続ける。

「それに、こういっただけで大学内だと人の出入りも少ないからあまり面白くないね。せっかくだからどういう雰囲気かを見てみようか」

——小さい大学？ どんな感じなんだろう？ 小さいって感覚が全然わからないな。

似ているはずなのだが微妙にどこか異なる。ずれているところが確かにある。

賑わいも路面電車通りをそのまま沿って歩いていくとだんだん落ち着いてくる。いわば青大附属に向かう道の商店街とほぼ同じ光景が続いていく。

「このあたりが学芸地域と呼ばれるところで、大学が終結している場所なんだ」

「大学、ですか」

「そう。結洲の特色としては、中学・高校がものすごく少ないんだ。あることはあるんだけどほとんど地域枠で区切られているから、ほぼ高校までエスカレーター式と考えた方が近いかもしれない。真剣に受験するのは大学だけだね」

「附属中学とかも、ないんですか」

恐る恐る聞いてみる。矢高さんは頷いた。

「ないな。昔はあったらしいけど今は全然ない。高校だと若干あるけれども進学とはあまり関係ない。みな、行きたい学校を選んで進学するよ」

「行きたい学校って、たとえば」

「もちろん結洲の大学を選択する人もいるし、行きたい学部がなければ外に出る人もいる。青潟は少し遠いから少ないかな。でも、文系の勉強をしたい場合はほとんどがここにとどまる傾向が強いな。黙っていても人が流れ込んでくるから無理に新しい場所に行かなくても刺激が得られるしね」

——無理に新しい場所行かなくても？

全くわけがわからない。上総は相槌を打ちつつさらに尋ねた。

「うちの学校だと、附属中学卒業の段階で結構他の高校に進学したり転校したりする人が多い傾向があります。同級生でふたりほど、医者になるための専門高校に進学したり、成績がついていなくて他の女子高に進学したりとか、その他いろいろです」

「中学の段階で選抜している学校だからね、青大附中は」

穏やかに、それでもきっぱり矢高さんは答えた。

「どちらがいいとも言えないけれど、中学入試でがんばってその後よっぽどのことがなければこのまま大学までエスカレーターで進学できる方がいいという人もいるだろうね。やりたいことに打ち込めるし、受験以外の勉強もできるし」

——確かにそうだな。

上総の心中での頷きに気づいているのかわからない。矢高さんは続けた。

「ただ、大学受験の段階で初めて自分のやりたいことを見出せるというのもあるから、俺はどっちがどっちとも言えないなあ。中学卒業の段階で自分の未来を判断する勇気は正直、なかったよ」

そこまで話したところで、矢高さんは赤い三角屋根の建物の前で立ち止まった。

「ま、ここに入ろうか。まだ奴らも来てないようだし」

入りがけに「喫茶 夕愁茶房」の文字を戸口で確認した。戸口から強いコーヒーの香りが漂ってきた。

店に入るととにかくたましい笑い声と煙草の煙で溢れていた。思わず咳き込むと、
「煙草、苦手？」

矢高さんに問いかけられた。苦手も何も吸ったことがない。

「高校生なのに珍しいね」

「珍しいですか」

未成年は煙草禁止じゃなかったろうか。言い返すこともなく上総は促されるまま入り口側のテーブル席に着いた。矢高さんも向かい合って腰掛け、メニューをめくらずに、

「いつものセット、それと二人分」

ウェイトレス相手に呼びかけた。ウェイトレスも特に愛想を振りまくでもなく、「かしこまりました」の一言でさっさと引っ込んでいく。

「喫茶店に来るのも初めて？」

「いえ、よく行きます。ただこういう雰囲気のところはあまりないかもしれません」

素直な感想を述べた。

「すれてないなあ。まあいいや。ここで軽くおなかを満たそうか。ここは大学の側だから便もいいし、うまくしたら車を使えるかもしれないから少し待っててもらえないかな」

——車を使う？

意味がつかめない。改めて思う。上総は今まであまり大学生の先輩と話をする機会が少なかったような気がする。他の連中よりは、たとえば大学の特別講義に参加させてもらったりなどする機会もあったはずなのだが、交流するのは教授だけに限られていた。遠めでグループを作って語り合っている大学生たちとは、用事がない限り話すことはない。

「どうしたの、鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「いえ、でも車ですか」

からから矢高さんは笑った。

「こんな暑い日に歩いてうろうろしたら、干からびてひっくり返ってしまうよ。せっかく遠くから来てくれたんだから、少しでも楽しいところでないと」

「いえ、そんなお気遣いなく。そんな対して、そんな」

どもりながら恐縮してしまう。なんとなくこの場所が息苦しく、本当はすぐに飛び出したい気持ちで一杯だった。雰囲気というよりも、物理的空氣が。失礼にあたるだろうからということで必死に咳をこらえている。こんな煙草くさい環境は初めてだ。コーヒーの匂いで緩和されてはいるけれども、やはり喉が詰まる。

「ということで、トースト来たよ」

コーヒーとトーストセット、サラダのほかにナッツも並んでいる。分厚いトーストにかぶりつく。可もなく、不可もなく。ごくごく普通のパンの味。ナッツもつまんでみるが取り立てておいしいわけでもなくまずくもない。最後にコーヒーに口をつけてみる。ものすごく濃いけれど。正直、

——青瀉の喫茶店の方がおいしいな。

正直な感想を心にメモする。

「どう、おいしいかな」

「はい、おいしいです」

店内のけたたましいしゃべり声はあちらこちらから響いてくる。女性同士でなにやら盛り上がっている様子。その一方で教科書を開いてひたすらノートに書き込みを続けている人もいる。共通しているのはほぼすべて、矢高さんと同様の学生らしき風情ということ。

「ここは、どういう場所なんですか」

「ごめん、説明忘れていたよ。この辺大学街ということもあって、こういうような溜まり場的な喫茶店がうじゃうじゃあるんだよ。僕はここが一番落ちつくので毎日朝から晩まで暇さえあれば立ち寄っている。今はまだ午前中だからいないが、他の大学の友だちとも知り合えるし、暇さえあれば誰かをとっ捕まえて語り合ったりしているんだ」

「他の学校の人たちとですか」

「そうだよ、うちの学校はさっきも話したけど単科大学で学生数もほんの少し。少数精鋭といえればそれまでだけど知り合える人たちの限界がどうしてもあるよね。その点、こういう場所で顔見知りになるといつのまにか語り合えるきっかけができて、夜になったら飲み屋で騒いだり真夜中にドライブして羽目はずしたりとか、やりたいことができる。人と出会うことは自分の幅を広げる意味でも大切だよ。俺も、大学の中だけでつるんでいたら絶対に出会うことのない人たちと星の数ほど語ることができたからな」

しみじみ、コーヒーを啜りながら語る矢高さんの話に聞き入りながら、上総はナッツをつまんで口に放りこんだ。

「講義が終わってほしい夕方あたりに来ると、たいてい誰かが暇をもてあまして待っている。ひとりの時もあればたくさんいる時もあるんだ。そこで夜どうやって遊ぶかを考えると、そんなわけなんだ」

「どうやって遊ぶんですか」

「やはり居酒屋だろうな。女の子たちが多い時は喫茶店かファミリーレストラン、カラオケ、スナック、野郎同士だとまあいろいろ行くけどね。あとは仲間の家に転がり込んだりとか。高校と違って大学だと最低限の授業に出ておけばのんびり過ごせるし」

「そういうものなんですか」

想像がつかない。目の前で煙草を取り出し吸い始める矢高さんの顔には語るほどのやさぐれた匂いが感じられない。母の知り合いの息子という先入観もあるのだろう。上総からするとごくごく普通のまじめな学生さんに見える。

「矢高さんは明日、いらっしゃるんですか」

「もちろんだよ。おふくろにこき使われるだろうな。君もだろう？」

「はい、たぶん」

思わず笑い合った。同じ環境、やはり伝わるものがある。

それをきっかけに上総も少しずつ口を開いていった。矢高さんがうまく引き出すように進めていってくれていることがなんとなくわかる。

「時辻さんには昨日ご挨拶したけれど、相変わらずパワフルだね。君にもああなの」

「もう、どこからあのエネルギー出てくるんだかよくわかりません」

「だね。今はお父さんのところにいるんだよね」

「はい。小学校卒業してから別居してますけど、しょっちゅう泊まりに来てますからあまり変わらない感じです」

「相変わらず仲がいいとは聞いたことがあったけど本当なんだな。立村姓を名乗っているんだよね」

「はい、だから、母の苗字にはいまだに慣れません。知らない人には、嫁いだ姉とか思われて迷惑することもたびたびです」

膝を叩き大笑いする矢高さんをやれやれといった思いで眺めた。上総からしたらちっとも笑い話ではないのだが。

「でも、家で親と顔をあわせないですむのもなかなかいいことあるよ。上総くんはどう？ 思い当たる節、ある？」

「あります、山ほどあります！」

「たとえば？」

「テストの点数すぐ確認されないですむし、本買っても詮索されないし、何買っても怒られないし、何食べても文句言われないし」

「いいことづくめじゃないか」

「はい。友だち呼んで、思い切りいろいろな話ができるし、昼は父がいないので怒られないし」

「それなら彼女連れ込むのも平気だろう？」

——え？

あまりにもさらっと言い放ったので、言葉に詰まる。

矢高さんはけろりとした顔で上総に暴露し始めた。

「昨日もうちでいろいろとおしゃべりしていたけど、時辻さんとうちのおふくろ。盛り上がっていたよ。上総くんには長年の付き合いのかわいい彼女がいて、何をしでかすか心配でならないから見張ってなくちゃいけないって。のびのびやっても、結構見ているもんだなって怖くなったよ。もちろんその辺りはきっちりと抜け目なくやると思うけどね」

「あの、俺は、あの」

「中学生で彼女を作るなんてませてるなあとか思ったけど、かえってそのくらい自然に付き合う方が楽しいかもしれないね。大学生でいろいろ始めるとさ、大変だよ。いろんなもの背負わなくてはならなくなるから。恋愛するなら今のうちだよ」

自分の顔がどのくらい赤くなっているか想像するのも怖い。わかっている。たぶん夏の熱気よりもはるかに、熱い。

「それにしても珍しく今日は誰も来ないな」

煙草の吸殻が灰皿で増えつつある中、矢高さんが腕時計を覗き込んだ。

「ここにいると大抵、誰かかしら集まってくるんだ。ひとりかふたりは車で来るし、せっかくだから君をどこか案内したかったんだけどね」

「車だなんて、いえそんな」

「僕が運転できたらいいんだけど、残念ながらすねかじりの身なので免許取得からしてペケなんだよ。就職したらさっさと自分の金で獲るつもりなんだけどね」

——車の免許か。そういえばクラスでも誰か、原付の免許取りたがってる奴いたな。

もちろん青大附属では高校卒業まで運転免許取得は特別な理由がない限り禁じられている。大抵は卒業後の夏休みにみな教習所に通うとか聞いている。

「結洲のお祭りは先週終わったからだいぶたそがれているけれど、他の場所では今たけなわのものもあるんだよ。青潟はどうなの、盛り上がるの？」

「あまり参加したことないし、わかりません」

本当は苦手を超えて嫌っているといいほどだが、あえて何も言わない。

「いつまでもくすぶっててもしょうがないし、じゃあ行こうか。公共交通機関ならまだまだあるしね。行こう、行こう」

——やっとか。

「それなら、トイレに寄って来ます、すみません」

一言断って立ち寄り、すぐ席に戻ってきた時だった。

上総の座っていた席に別客がいる。

「あの」

言葉が出てこず、ハンカチで拭いたはずの手をついかばんにこすり付けたくなる。

「この子？」

目の前にいる女性が、にやにやしながら上総を見やり、矢高さんに話しかける。目線を逸らさず、上総をまじまじと観察している。なんだか身体の中を覗き込まれているようでかゆくなりそうだ。

「ああ、上総くん。ちょうどタイミングよく車が調達できたよ」

のんきな声で、矢高さんも上総を自分の向かいに座るように指示をした。

「彼、青潟から来たんだ。高校生で、立村上総くん。高校一年。こちらは、この店でのだべり仲間の」

言いかけたところで北原さんはすぐに割り込んだ。お尻を矢高さんに擦り付けるように見えたのは気のせいだろうか。

「初めまして、ってまずはあたしからご挨拶？ いいわよ、私は北原ふーみん、よろしくね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

声がこわばっている。目の前の女性がだいたい何歳くらいかも正直見当がつかない。さほど矢高さんと違いはないのだろうという気はするが、座高が妙にある。髪を細かな編みこみにしてべったり頭に貼り付けている。肌は浅黒いが地だけではないようだ。目のあたりのアイシャドウや、やたらと長すぎるまつげ、黒っぽい口紅、そしてなによりも、

——なんでこの人、こんな格好してるんだろう。

おへそが丸見えのオレンジ色タンクトップ、その上に黒の子ども用開襟シャツを羽織り、裾をわざわざ臍を出すような場所で結んでいる。しかもそこから巨大なくだもののようなものが二個、溢れている。ジーンズもすっかり洗いざらし、太ももあたりから形をなぞるような格好で脱色されたものをぴっちりはいている。

「私もアイスコーヒー！」

声を張り上げ、コーヒーを注文する北原さん。少し太い声だった。

「ふーみん、それでさっきの話なんだけど」

メニューをうちわ代わりにして扇ぐ北原さんに、いたって普通に矢高さんが話しかけた。また煙草を吸う。他人事ではあるのだが、この煙なんとかしてほしい。咳き込むのを必死に耐えるしかない。せめて外に行って、上総から離れた場所をお願いしたい。その願いもむなしく、今度は北原さんが自分のバックからシガレットケースを取り出した。ふたりぶんの煙が目の前を揺らぐ。

「しけたお祭りよりも、むしろカルチャーショック受けてもらったほうがいいんじゃないの？ たとえばさあ、ここよ。今夏休みだから路上でみんな踊ってるしさあ。君夫も久々に踊りたくない？」

「今日はやめとく。明日ちょっと面倒なことがあるんで体力温存しときたい」

「あっそう。お坊ちゃまねえ。まあいいわ。でも見るだけでも面白いよ。ねえ君、上総くんだったっけ？ フォークダンスとか好き？」

条件反射で首を振る。急いで「いえあまり」だけ答える。

「すれてないよねえ。青潟の子ってこんなにマジなの？」

「どうだろう、彼が特別かもしれないよ」

せっかく助け舟を出してくれると思いきや、あっさりと流される。目の前で会話に入れない息苦しさもそうなのだが、上総の目の前でやたらと胸をどんと突き出したり、脇の下に指を入れて匂いをかいだりと、全くわけの分からないしぐさを見せ付けるのはやめてほしい。矢高さんもこの「ふーみん」とはどういうつながりなのだろう。今まで話をした限り、多少遊んでいるようには見えるが基本としてまじめそうな印象がある。とてもだがこの北原さんとお似合いには見えない。

「じゃあさ、せっかくだから少しドライブ、しょ？ 青潟も都会だろうけどたぶん私たちのやってるような路上ダンスってそうそうお目にかかれるもんじゃないし。それに自然も楽しめちゃういいじゃんね。てなこと、私、眠気覚ましコーヒー飲んで即出発よ！」

両手を挙げて高らかに言い放つ北原さん、おへそが丸見えどころか、胸のぎりぎり下までタンクトップがたくしががった。目をできるだけ矢高さんに向けたまま、上総はもう一度かばん

のチャックを開け、すばやくピルケースを取り出した。この中に、飲み慣れた酔い止めが入っている。

「ねえ何、出してるの」

「あ、いいえ、あの、すみません、もう一度トイレ行ってきます」

何あせってるのだから自分でも訳がわからない。つい五分前に行ってきたばかりなのに不自然過ぎるったらない。でもそうしないと自分を押しえつけられそうになかった。

「純情で可愛い！ 刺激的だったみたいねえ、君夫もこんな可愛い時あったのよねえ」

——頼むからやめてくれ！

絶叫したい思いをこらえ、足早にトイレに逆戻りした。幸い空いていたので何はともあれピルケースから一錠、そのまま飲み込んだ。つばだけで飲み込むタイプ。喉にひっかかったままなかなか落ちていかず、思わず歯を食いしばった。

——なんなんだよ、あの人。

矢高さんとは子どもの頃一度会ったことがあるとはいえ、上総にとってはほぼ九十九パーセント初対面だ。つい一時間前に会ったので会話もまださほど盛り上がっているわけではない。母に頼まれて上総の相手をするため足を運んでくれたことには素直に感謝しなくてはならないと思っている。その点、礼儀は守るつもりだ。

ただあの人は。北原「ふーみん」とかいう人は。

——いったい何者なんだろう？ だべり仲間ってことは何か。ここで矢高さんがいろいろな人と知り合ったとか言ってたけどその一人なのかな。

やっと薬が喉を通るが、呼吸が上がってしまってまだ動けそうにない。

——そんな山になんて行かなくたっていいって！ だからひとりで歩きたかったんだ！ ひとりでのおんびり街を歩きたかったんだ！ 母さんが俺の方向音痴を心配してるのはわかるけど、何もあんな知らない人たちとわけのわからないところ連れて行かれるよりはましだよ。まったく母さん何考えてるんだよ！

誰にぶついたらいいかわからない憤懣は、とりあえず母をターゲットにしておいた。

酔い止めを飲んでおいたのは正解だった。北原さんの車には脂の匂いがこびりついていて、いくらクーラーを利かせてくれても消えなかった。しかもふたり、相変わらずヘビースモーカーぶりを露にし、窓から煙を逃がしている。必死に歯を食いしばり、喉から溢れてきそうなものをこらえた三十分間近く。車から転がり降りた時に上総の体力はほぼ限界を迎えていた。

「辛そうね。大丈夫？」

意外にも優しく声をかけてくる北原さん。なんだかんだ言って三人密室に閉じ込められたような環境だったこともあって、最初の印象よりはやわらかく感じた。

「すみません。車に弱いんです」

「まあ山だからな。かなりがたがた行ったからな」

けろっとした顔でふたり頷いている。口をハンカチで押さえつつも新鮮な山の空気を吸っていくうちに胃のもたれもだいぶ落ち着いてきたようだった。とりあえず吐かなくてよかった。

「じゃあさあ、この辺でなんか飲もつか。十二時半頃に始まるって言ってたしね。ねえねえ君夫、あんたほんっとに飛び入りする気、ないの？」

たどり着いた場所は結洲山の七合目あたり、それほど標高のある山ではないらしい。車でもロープウェイでももちろん徒歩でもすんなり登ることができるという。

「昼間だろ。家族連れのいるところでそれは無理だよ」

しつこく北原さんが誘うのを、やんわり矢高さんが断っている。話の内容をつなぎ合わせてみた限り、どうやら北原さんは「ダンス」がらみのイベントをこよなく愛する人らしく、そのつながりで矢高さんとも共感するところがあるようだ。日舞師匠の息子である矢高さんのことだ、踊るという点でもってつながったのかもしれない。

「あ、上総くん、説明してあげよっか」

息を殺してベンチに腰掛けている上総に、北原さんは話しかけた。

「ここね、私が子どもの頃遠足で毎年登らされる場所なのよ。広いでしょ。この時期なのになぜか黒つめ草なんか咲いてたりするのよね。ここでお弁当食べたりお菓子交換したりいろいろしたよ。で、ほら、向こうの広場、あそこでしょっちゅうみんなで踊るのよね」

「何の踊りなんですか？」

「ここでは『結洲群舞』と呼ばれているんだ」

矢高さんがジュースを二人分売店で買ってきてくれた。レモンスカッシュがありがたい。

「それほどメジャーなものではないんだけどね。俺が大学に入る一年くらい前あたりからか、地元の学生たちが街を盛り上げるためにオリジナルで作り上げたオリジナルの群舞なんだ。旋律はここで生まれ育った奴なら誰もが知っている「結洲賛歌」って歌。それをメインにしてロックやジャズ、いろんなバージョンでただひたすら踊りまくるんだ。あ、踊るなんて上品イメージじゃないよ。昼間のディスコだよ」

「昼間の、ディスコ？」

イメージが全く湧かない。ディスコには行ったことなくとも、足を踏み入れた奴たちからの情

報は得ている。が、どう考えても昼間の太陽とは不似合いだろう。

「ここだったら別にね、許可もらわなくても好き勝手に踊れるし。ラジカセとスピーカー持ってくれば音も出せるし。うわあ今日はギャラリーも多そうだし！ さっすが夏休み半ば、いいねえこんな雰囲気！」

北原さんが甲高い声で叫ぶ。叫んでも外なのでさほど目立たない。周囲を見わたせばどこも緑濃き原っぱで、少し下には観光バスがたくさん並んでいる。いわゆる遠足気分でレジャーシートを引いている人もいれば、写生に勤しむ人もいる。

「その、『結洲群舞』は何か大会とかあるのですか」

「そんなのいない。誰かかしら五人以上集まったら、ラジカセと小ぶりのスピーカーを用意してセットし、ひたすら大音量で慣らして踊り続けるんだ。タイミングは電池が切れた時。音楽もみな好き勝手にアレンジするし。まあどちらにしても盛り上がることには違いないよ」

「でも、いきなりそんな公共の場で踊ったりしたら騒音買ったりしませんか」

よく歩行者天国でいきなり踊り出す中・高校生たちの集団が存在するという話を耳にしたことがある。青潟よりもはるか遠くの人々だった。それに近いのだろうか。矢高さんは首を振って微笑んだ。

「最近は宴会芸の一種で、いきなり踊ってもかえってやんやの大声援だよ」

「でも誰もいないですね。まだ来ないんですか」

家族連れ、子ども連れ、ファミリー層は多そうだが、いかにもこれから派手な格好して踊りまくりたい人とは顔をあわせなかった。

「まだ開始まで時間があるしな。ぎりぎりだろ、ふーみん」

「そうよお。あ、そうだ、なんかお菓子、買っておかなくちゃね」

北原さんは矢高さんの肩に手をかけ、隣にいた上総に、

「じゃあ、上総くん、始まる前になんかお土産買ったげるから待っててね。君夫も付き合っよ」

すっかり名前と呼ぶのが普通という顔でもって話しかけた後、手と手を取り合って売店へ駆け出した。矢高さんもすっかり釣られて走っているのが驚きだった。

ぐるりと見渡してみる。やたらと騒がしい二人組がいなくなると、上総の腰掛けているさびたベンチの周りも静まりかえる。

——子ども、多いな。

上総は矢高さんからもらったレモンスカッシュを少しずつ飲み干した。すっぱいものだと言口の中がさっぱりする。気持ちいいくらいすっきりしていく。

——いかにも学校の遠足で人気ありそうな場所だよな。

思い切り横たわってねっころがったら気持ちよさそうだ。さすがに今日はそんなこと無理だけど、いつか気心の知れた友だちとごろごろするのも楽しそうだ。空が高く、青い空がまぶしい。それでいて空気がひやりとして気持ちいい。山中はかなり冷え込みそうだ。

——あれ、もしかしてあの集団ってもしかして。

五分も経っていない。下のバス乗り場あたりからぞろぞろと、はっぴ姿の老若男女が列を成して姿を見せ始めた。一人二人ではない。たぶんバス二台分は。頭に鉢巻を締めていておそろいの格好でいる集団もいれば、大きな旗……漁船の大漁旗に近い何か……を背負ってくる集団もいる。太鼓をたたきながら、みな緊張した面持ちのまま行列が続く。

——あれが北原さんの行った、知り合いの何か？

てっきり北原さんのつながりだったら、露出度の高い激しい格好した人たちばかりかと思っていたがごくごく普通の祭りの格好に過ぎない。拍子抜けした。サンバカーニバルの熱気を想像していただけに。

上総の隣にいつのまにか知らない人たちが座り込み、その前にまたあんざで座る集団が、どんどん詰め掛けてくる。子どもたちを連れた親たちの集団もいるがベンチには近寄らないで別の場所でグループをこしらえている。

はっぴ集団が全員揃ったらしい。みなぴたりと人と人の間隔をぴったり合わせつつまっすぐ立っている。先頭の男性がメガホンで呼びかけている。

「ええと、本日は私たちの『結洲群舞』にお越しいただきありがとうございます。結洲山山頂での演舞は今年で四回目。今年も天気に恵まれたことに感謝。そしてたくさんのお客様に私たちの演舞を見てもらえることがまた感謝。まだ発展途上の私たちではありますが、どうか最後までお楽しみいただけますようお願いいたします！ それでは最初に、みなさんおなじみの『結洲群舞』です。若い人たちがいろいろなアレンジで踊っているようですが、私たち年寄りには基本的に忠実に、きっちり踊らせていただきます。お見苦しい点もごさいますでしょうが、どうか最後までお付き合いのほどお願い申し上げます」

長いながらも情熱のほとばしる挨拶の後、先頭の男性は準備してきたらしいラジカセとスピーカーの側に近づき、なにやら操作をしていた。ラジカセはともかく、小さいながらもスピーカーがあるということは前もって予約なり準備をしてきたのだろう。

上総はそのままレモンスカッシュのペットボトルを握り締めたまま、曲が流れるにしたがって始まるきびきびした「結洲群舞」にひたすら見入った。笑顔で溢れんばかりの縁者たちには申し訳ないのだが、「結洲群舞」の曲には全くなじめなかった。

——こういうのがいいと思ってるのか。こういうのがはやってるんだ。学生たちが発案したって言ってたけど、そんなに盛り上がるものなのかな。信じられないよ。

上手下手の問題ではない。終わったあとは心を込めて拍手をした。

よく神社やお祭りで見かけることのある奉納芸能のようなものらしい。最初の『結洲群舞』はあまりぴんとこなかったが、その他続いた民謡踊りは見ていてかなり心浮き立った。「北海盆歌」「ちゃっきり節」「かっぽれ」などなど聞きなれたメロディばかりということもあり、観客たちからは拍手喝采手拍子も加わる。もちろん上総もそれに従った。

——こうやって集団で整った踊りを見るのも面白いよな。

一糸乱れぬ手の動かし方、目線がみな統一されているところ。よく見ると就学前の子どもも四人くらい混じっているのだが、それなりにきっちりとポーズを取っている。ぐずったり騒いだりする子はいない。

——さっき、北原さんが言っていた仲間のイベントがこれなのか？

正直信じがたいところもある。上総はもともと日本伝統芸能に目が慣れていたこともありすんなり入っていったけれども。

十五分くらい前に矢高さんと一緒に売店に向かったはずなのにまだ戻ってこないというのも正直謎だ。トイレに寄ったのかもしれないが行列でもない限りそんなにかかるとも思えない。まさかとは思うが取り残してふたりでさっさと降りていくなんてことは……まずないだろう。明日の段階で上総が母に言いつけでもしたらことである。

——ほんと、ふたりともどこ行っちゃったんだろうな。ほんとなんでこんなところ連れてこられたんだか。

気を紛らわしたくて、次の「天竜下れば」を手拍子打ちながら眺めていた。少し離れたところで低学年の小学生らしき三人組が楽しげにまねして踊っている。ほとんど気分は盆踊り。踊っている人々の表情にも笑顔がこぼれている。

突然、真後ろでけたたましいマイクのハウリング音が響き渡った。耳をふさぎたくなる悲鳴の音だ。

——機械、何かおかしくなったかな。

全く関係ないかのようにはっぴ姿集団は踊り続けている。いたって冷静だがざわめき立つのは観客の一部だった。さっきまで両手を広げたり片足けんけんしたりして踊っていた小さな子どもたちがぼかんとしたまま音のする方向を見つめている。

再び、また雑音がチョークひっかく音のようなものと一緒に聞こえる。同時に流れたのは、スピーカーが壊れんばかりの破壊音だった。

観客たちがざわめく、立ち上がる。さすがにはっぴ軍団の老若男女も手を止める。

上総も立ち上がり、振り返った。

いつのまにか十人くらいの大学生軍団が固まってスピーカーと音響機器らしきものを運び込み、だいたい十メートル程度の位置で騒音を流し続けていた。ときおりかちりと何かを操作する気配も感じられる。広場で元気に踊っている人たちとは場所が切り分けられているようにも見え

るし、音が邪魔する程度の近さとも言える。

——何するつもりなんだろう？

ここに来てから「何」ばかり繰り返しているような気がする。上総の隣りに腰掛けた何名かの観客たちが小声でささやいている。

「また、ここで『爆弾群舞バトル』やらかすつもりなのかしらね」

「何もねえ、わざわざ山にまで登ってやることないじゃないの。かわいそうに。誰か止めないのかしら」

——自分たちでは止めない、ということか。

耳を澄ます。なんとなくいやな予感がする。矢高さんたちが戻ってきていないのがさらに輪をかけてくる。話はまだ続いている。

「学生さんたちが遊びでやっているならいいけど、今回は毎年一回楽しみにして踊っている人たちなのに、なんでつぶしにかかるのかしらねえ」

「本当よ。好き勝手に踊りたいなら、もっと別の場所でやるとか。学校の中とか、人のいない原っぱとか。ここでも本当はいいんだらうけど、せめてこの人たちが終わってからでもいいのねえ」

——つぶしにかかるって、何をだよ。

すでに雑音は別の楽曲に変わっている。いわゆるテクノサウンド風のぴりぴりした音楽が流れているがどことなく聞き覚えがある。すぐ気づいた。はっぴ軍団の人たちが最初に踊った「結洲群舞」のメロディだ。編曲は今時っぽくアレンジされているが、旋律がはっきりしているのですぐ気づく。

雑音びりびり入る中、突如学生集団のうち五人が立ち上がった。見た感じ、インコのような華やかな衣装を身にまとっている。服、というよりも巨大な布のマントのようなものをかぶって、ディスコダンスのようなものを踊り出す。ディスコダンスというのがどんなものか実際観たことがないので上総のイメージのみだが、両手を上げて腰をくねらせ、みなアンバランスな動きでもって全身を痙攣させているように見えた。「踊り」とか「ダンス」とかの整ったものがない。そのうちひとりがそのマントらしきものを脱ぎ捨てた。

——まさか！

ぴちぴちのオレンジTシャツに裾縛りのシャツ。おへそ丸出し。だが髪の毛がポニーテールなので北原さんではない。ほぼ同じ格好をしているが、似て非なるもの。少しふっくらした感じの彼女が身体をくねくねさせて、時折腰を突き出すようにして、さらに踊り続ける。そのうちまたひとりが同様にマントを脱ぎ捨てるが、その人はジーンズのチャックを開けたまま、少し下げた格好で踊り続けている。思わず目を逸らした。特に下着を見せ付けているわけではなさそうだった。踊っているうちにそのジーンズを足元から取り去り、ふとももぴっちりショートパンツ姿へと変身した。またひとり、次にひとりとみな似たようなパフォーマンスをしながらひたすら激しく踊り続けている。

「早く止めるよ！ やめさせろっての！」

「ガキが大人の邪魔するんじゃないねえ！ お前らはホコ天行ってろ！」

「この人たちは一年に一度なんだぞ！ お前らみたいに時間つぶしたくて来てるんじゃないんだ！ 早く誰か、やめさせろ！」

叫んでいる人もいるにはいるが、誰もが呆然として眺めているだけ。なぜこんなわけのわからない踊りをしているのか、統一感など一切ない謎の格好でセクシーな部分を見せ付けているのか、そもそもその音楽がなぜ「結洲群舞」のメロディなのか。普通の歌謡曲を使うんじゃないのか。なぜつぶすのか。つぶしたがるのか。はてなマークの嵐で息が詰まる。そしてなぜ、ここに矢高さんと北原さんが戻ってこないのか。

先頭で仕切っていたはっぴ軍団の年配男性が駆け寄っていき、集まっているメンバーの一人に激しく食って掛かっているようすが見えた。声は聞こえない。ただひたすらうるさいだけ。それをいなすように学生らしき男性が首を振っている。なおも激しくもみあいになりそうなところを、ようやく売店から出てきた男性たちによって取り押さえられていた。その間もひたすら踊り続けている五人の女性たちは、近づいてくる抗議者をつらっと無視したまま、お尻を突き出したり胸もとを顔に近づけようとしたり、昼間には向いていない振りを繰り返している。

——なんで邪魔するんだろう。いったい、なんなんだろう。これ。

いきなり肩をつかまれ、腕をひっぱられた。振り向くと矢高さんが厳しい表情のまま後ろに突っ立っていた。

「矢高さん、あのこれ」

「ごめん。わけはあとで話す。とにかくこちらに来てくれないか」

「でも、北原さんは」

「あんなのどうでもいい。行くぞ」

厳しい言葉で切り捨てて、矢高さんは上総を群衆の中から引きずり出すようにして、すぐ駐車場へ降りるよう案内した。

「これからタクシーで降りて、これからどうするか相談したいんだけど、ただお願いなんだけどね」

舗装された駐車場の脇にはタクシーが数台付けられている。まだ誰も並んでいないタクシー乗り場。促されるままに乗り込んだ後、隣りに座った矢高さんにささやかれた。

「今日のことだけど、君のお母さんをはじめ、他の人には内緒にしてもらえないかな。理由はあとで話すからさ」

「北原さんのこともですか」

答えず頷くだけの矢高さんを、上総はつばを飲み込んで観察し直した。

こわばった表情の陰に何が隠れているのか、確認したかったからだった。

その十五 高校一年夏休み二十一日目・立村上総のさまよえる旅日記（7）

タクシーの中では一切口を利かなかった。緊張を保持していたためか酔わずにすんだ。そのまま市街地に向かい、矢高さんが、

「すみません、結洲大学前でお願いします」

と目的地を告げた。

「せっかく来てくれたのに、いやな思いをさせてしまい申し訳なかった」

「いえ、めったに観られないもの観ましたから」

嫌味を言ったわけではないのだが、やたらと矢高さんが恐縮している。

「本当にごめん。学校の中で少し話していこう。それから、どこか博物館とかそれともどこかに行こうか」

「いえいいです。でも、関係ない人間が学校の中入ってもいいんですか」

「夏休みは大学下見の生徒も多い時期だし、大丈夫だよ」

赤い煉瓦で積み重ねられた校門の前で降り、そのまま矢高さんに連れられて中へ入っていった。蝉がけたたましく鳴いている。風がそよぎ、石のベンチでランニング姿の男子学生が仰向けになり寝入っている。途中、男子学生たちが五人くらい集まって合唱の練習をしている。またなぜか座禅している奴もいる。さまざまだ。

「夏休みはサークル活動くらいしかすることないからな。あとは図書館くらいだけど、さすがに学生証がないとそこには入れない。小さいけど学食が空いているからそこで少し話をしようか」

時計を覗き込む。思ったよりも時間が経っていない。二時少し前だった。

「今朝はトーストだけだったし、何か食べたいの頼んでいいよ」

「ありがとうございます」

上総の本音を見抜いてか、学生食堂のメニューサンプルを眺めながら矢高さんがささやいた。青澗大学学食ほどの種類はないが、それでも手軽なランチやとんかつ、カレーライスなどそれなりのものhじゃ揃っていた。

「Aランチがとんかつだね。ありがちだけどそれにする？」

「はい」

もうなんでもいい。疲れた、腹が空いた。喉が渴いた。事情を確認するのはそれからだ。三百五十円のセットをお盆に受けて最奥の席まで向かった。二教室連結した程度の広さだが、客はぼつりぼつりとしかいなかった。

——揚げたてなんだ！ さっくりしてる。

青大附属の学食レベルと思ってさほど期待していなかった。しかし切れ目が最初から入ったとんかつを一切れかじったとたん、想像以上のかりかり感と心地よい甘みが口の中に広がった。ソース付けていないのに、じんわりと舌がぬくもる。勢いよくふた切れ、三切れと口に押し込む。お吸い物もだしがしっかり利いていて、甘すぎず薄すぎず。ご飯もつやつや光っている。

「あまりいいところじゃなくて悪いんだけど」

「いいえ、ここの学食、めちゃくちゃおいしいです」

水で流し込みながら、それでもひたすら食べ続ける。

「うちの学校にも学生食堂ありますけどここまでおいしいメニューはそうそうありません。教職員食堂というところだとまたレベルがぐんと上がりますが、でもそれでも、やはりここのとんかつが一番おいしいと俺は思います」

狩野先生たちに連れて行ってもらった教職員食堂の味にも感動したけれど、はるかにそれを上回る。たまたま当たりを引いただけなのかどうかはわからないが。

「うちの学校は手作り学食をモットーとしているから、出来立てのよさはあるかもしれないね。ただメニューが少ないのと狭いこともあって、あまり利用されてはいないんだ。そうだ、上総くん、コーヒー飲むかい」

「ぜひお願いします」

普段なら遠慮するが、こんなに舌がとろけそうな学食ランチを出す学校なら、きっとコーヒーも相当な味わいなのではないだろうか。無駄な期待と分かっているけども食べてみたいと思う。まだ残っているさくさくキャベツにかじりつく。穏やかな表情に戻っていた矢高さんが、シンプルなコーヒーカップにコーヒーを運んでくる。すぐ口にした。思ったよりも薄さを感じるけれどもするすると喉に染み渡った。

「おいしいですね！」

思わず声が出てしまう。矢高さんがびっくりした顔でまた上総の様子を伺う。

「そんなに、うちの学校の学食がおいしいのかな」

「はい！ このくらいおいしい学食だと、外に出るのが面倒くさくなるような気がします」

少なくともあの煙もうもうたる「結洲茶房」に足を向ける気にはならなくなりそうだ。友だちとの溜まり場という事情もあるけれど、腹を満たすのであれば学食で十分事足りるのではないだろうか。

「それじゃ、腹いっぱいになったってことで、さっきの話の続きなんだけど聞いてもらえるかな」

「はい。喜んで」

おごってもらった以上、何でも言うことを聞く。特にこんな美味な食事をご馳走してもらったからには、母になんて告げ口する気、さらさらない。

矢高さんもコーヒーを飲みながら、気持ちを落ち着けるかのように胸を何度も叩いた。煙草は取り出さなかった。灰皿がない場所だった。

「結洲にはオリジナルの『結洲群舞』と呼ばれる曲があり、それにあわせて踊るのがここ数年の流行なのはさっき説明した通りなんだ。上総くん、君が最初に見ていた、年寄りのはっぴの人たちが踊っていたの、あれ、どう思った？」

——若い人、子どももたくさんいたけどな。

思ったことは特に伝えず、質問にだけ答えることにした。

「はい、曲を初めて聴いた時はあまりぴんときななかったのですが、二曲めのいわゆる民謡パート

になってからは」みな、生き生きして楽しくなりました。たぶんこの街に住んでいて聴きなれていたらまた違った感想だと思います」

「確かにそうだね」

さらりと流された。矢高さんは続けた。

「大学生が街の流行を引っ張る形で広まってきた『結洲群舞』の踊りだけど、本来はあの、二番目に踊り出したあの集団がやったような形するのが常識なんだ」

「常識ですか」

どう考えても反対のような気がする。首をひねりたくなる。

「説明が難しいな。いわゆる盆踊りや奉納舞踊の一環として演ずる分にはお年寄りのみなさんが踊るような格好でいいんだけど、本来の『結洲群舞』は一種のバトルに近いものになるんだ。たとえば、あの場に誰かが『結洲群舞』をけたたましく踊っていたとする。そこへ派閥が異なる連中が現れた場合、そのまま踊らせておくということは絶対無い」

「なんでですか？ 終わってから交代するんじゃないんですか？」

「そう。普通はそうなんだ。あのお年寄り軍団に対してはそうすべきだったんだ」

「普通じゃないってことですか」

言葉を選んでいる矢高さん、かなり悩んでいる様子だ。コーヒーカップを持ち上げて、口に運ばずまた置いた。

「イメージとしては先に踊っている軍団を邪魔するため、強引に自分たちの曲を流す。『結洲群舞』の場合、曲と歌詞が同じならばオリジナルの音源を作ってアレンジすることは許されている。大抵の場合、同じ曲をまるまる使うなんてことはないの、どこかかしこにアレンジが施されている。相手が踊っている間に大音量でかぶせて自分らも同じ場所で踊り、観客の視線を全部奪う。相手が曲と踊りをやめて尻尾巻いて帰ればそれでおしまいだし、けんかを買うのであれば、改めて仕切りなおしてひたすら同時に曲を流して踊りまくる。そこで観客たちがどちらにたくさん味方して踊ってくれるかで勝敗が分かる」

「それ、面白いんでしょうか」

うまく言えないが、決闘ごっこのように思えてならない。相手が楽しく踊っている時に妨害して無理やり決闘を申し込むとは、フェアじゃないだろう。人間としての礼儀にも反する。好みの有り無しはともかくとして、決して褒められた行為とは思えない。

「それでここからが大切なんだ。その『結洲群舞』のルールは、同じ価値観を持つグループ相手ということに決まっている。僕がさっき『普通は』と言ったのは、あのお年よりグループに対して決してやってはいけないことだという意味なんだ」

「なら、俺を何故連れ出そうとしたんですか」

言葉に詰まったのか、悩みこむそぶりを見せる矢高さん。上総の目をちろちろ見る。

「あの場にいたら、君をはじめとするたくさんの人たちに迷惑がかかるんだ。ああいう、非常識な行為が許される場所に上総くん、君はいるべきではない。連れていった俺が間違えていたんだ。すまない」

ぐっと頭を下げた。上総は首を振りつつ、何か飲み込めないものを感じていた。

「北原さんは、まだあの場にいらっしゃるんですか」

「いるだろうね。たぶん事情聴取くらいされてるだろ」

吐き出すように、目を逸らしつつ矢高さんは答えた。

「楽しければなんでもいいんだ、あいつはしょせん、そんな女なんだ」

こちらから頼んだわけでもないのに、矢高さんのボルテージは上がるばかり。

「彼女はね、結洲の専門学校生なんだけどほとんど学校には通わず、ひたすら『結洲群舞』の活動に情熱を燃やしているんだ。今日は煽り立てる側に回っていたけれども、普段のバトルではほぼ先頭で立ち向かうタイプなんだよ。君も見ただろ？ 彼女の今日着てきた服と同じ格好の女子がいたことを」

——確かにいたな。

上総が頷くと、拳を握り締めつつ矢高さんは語った。

「彼女はある界限ではスターだからね。どんなに盛り上がった祭りであっても彼女が引き連れた軍団でぶつかれば、勝ち目はない。大抵飲み込まれる。僕は以前、五グループほど集まったダンスバトルの席で、彼女ひとりが踊り狂ったあげく観客全部持っていかれた場面を見たことがある。すごいよ。ひとりでサンバカーニバルやってるようなもんだからな」

——やはりサンバか。

第一印象と同じところだったのに、思わず納得する。

「これは学生のグループ相手に盛り上がるためにやるものだから、後腐れなく最後はみんなで騒げばまるく納まる。だが問題は相手が今日のような、全く関係のない人たちに絡んだ場合なんだが、あれはまずい。本来ならば、絶対にやっちゃいけないことなんだ。仁義ともいうな。かたぎの人間に迷惑をかけてはならない、って言うものに近い」

「任侠映画の世界ですね」

「渋いこというね上総くん。実際、『結洲群舞』の世界はそれに限りなく近い。趣味で楽しく踊っているグループもいれば、相手をつぶすためにけんかを売るようなやり方をする連中もいる。北原さん、彼女は後者側だな。本来であれば大事になる前に止めるべきだったんだが」

「あの、矢高さんは止めなかったんですか」

「止められるわけないだろう。君がいたんだから」

いつのまにか上総のせいになってしまっている。不本意ではある。

「だが、どちらにせよ、あれが結洲の姿といっても過言ではないんだ。君にはいろいろと不安な思いをさせてしまったかもしれないけれど、これが結洲という学生街のリアルな姿なんだ。参考になったかい」

——参考にたって、なるわけないよ。

心とは裏腹な言葉で、上総はお礼を言った。

「はい、ありがとうございます。青潟では絶対に見られないものでした」

どこか行きたいところがないか尋ねられたが、すぐに思いつくものがない。食事を終えて三時半過ぎ。宿には七時頃到着すればいいと言われている旨伝えと、

「そうだったね、しかし中途半端だな。これから美術館なり博物館なり観に行くにしてもすぐ閉館になってしまうしな」

首をひねって考え込む矢高さんに、ふと思い立ち上総は切り出した。

「それなら、お願いなんですが」

「行きたいところ見つかったかい？」

「大学の中を案内していただけますか」

ぎょっとした顔をなぜかする矢高さんに畳みかけた。

「今まで、うちの学校以外の大学を見た事ありません。たぶんこの機会を逃したらもうそのチャンスはなくなると思っていますので、矢高さんがよろしければお願いできますか」

「別に、いいけど、何もないよ。君の面白いようなものは」

「かまいません。学校の中がまずいなら、この近くをぐるっと散歩するだけでもいいです。なんとなく雰囲気を感じられればそれで十分です」

しばらく矢高さんは考え込んでた。目を上げて食堂の天井を眺めつつ、腕時計を覗き込んだ。

「君がそれでよければ、案内するよ。そうだね、それがいいかもしれないね」

いきりたった時の表情とは全く別人の微笑みを浮かべ、矢高さんは立ち上がった。上総も皿を下げた後、その後に付き従った。

調べておいたところによるとちょっとした日本庭園とか公園とかそういうものは結構あるらしい。リクエストしても本当はそれでよかった。でも、結洲大学の学食を口にして、見事に胃袋を掴まれてしまったのかもしれない。これ以上動きたくなくなった。厳密に言うと、

——ここから、なんとなく出たくない。

そんな気持ちが湧いてきた。上総にとってそれほどしょっちゅう感じることはない。すれ違う学生たちがみな、開襟のシャツを着ていること……もっとも外のベンチでひっくり返っている人は除く……も好感を抱いたひとつだった。

矢高さんは最初に、「学生事務室」なる部屋に向かった。

「ここでパンフレットもらってくるよ。君も来たほうがなにかといい」

黙って付いていくと、矢高さんは学校職員の男性に声をかけ、

「すみません。学校の見学をしたいという高校生を案内したいんですが、パンフレット一部もらえますか」

分厚い封筒ごと受け取り、上総に手渡した。上総も矢高さんと、用意してくれた男性職員にきちんと礼をした。

「ありがとうございます」

「夏休みに学校見学ですか。ご苦労様です。どちらの高校から？」

上総が答える前に、矢高さんが説明してくれた。

「青潟です。僕の母が主催する日舞の会で手伝いに来てくれました。確か高校一年だろ？」

慌てて頷いた。するとその男性職員も格好を崩し、

「そうですか、青潟ですか。ずいぶん遠くからありがとうございます。せっかくだからゆっくり見学してってください。青潟だと、東、西、南、北、どこの高校ですか？」

「青潟大学附属高校です」

「ああ、青大附属ですか。あそこは勉強がえらく大変と聞いてますが」

「なんとかやっています」

「あそこは確か普通科と英語科がありますが」

「英語科に在学しています」

そこまで答えると、学校職員の男性はふむふむと聞き入るようなしぐさをし、

「それであれば、矢高くん、いい機会だから図書館も案内してあげてください」

さりりと提案をした。矢高さんも驚いた顔をしたが、すぐに納得したらしく、

「ありがとうございます。では外部入館証をいただけますか」

「どうぞどうぞ」

ふたりの間でやり取りが行われ、すぐにまた一礼して廊下に出た。矢高さんがしてやったりといった風になりにやりと笑った。

「たぶんこう来ると思ったよ。それじゃ図書館行こう」

「なぜ、そう来ると？」

歩きながら上総が尋ねると、矢高さんは小声でささやいた。

「うちの学校は優秀な学生に集まってきてほしいもんだから、見学者にはやたらと優しいんだ。君、学校名を口にした瞬間のあの人たちの顔、見たかい？」

「ご存知だったようですね」

「そうだよ。青潟ではエリート高校だということをうちの学校の職員たちはみな知っているということなんだ。できるだけ優秀な学生を取り込むためにね。下見でうちの学校を気に入ってくれて、その上で受験して合格してくれたら、学校の名も挙がる。君にはそんな気持ちさらさらないかもしれないけれどね」

——いや、それ考えすぎじゃないかな。単なるサービスだよ。

聞き流した。図書館に入ることが出来ることだけがうれしかった。

「そんなに図書館が気に入ったのかい？」

三階建ての図書館に案内してもらい席を押さえて手当たり次第読みふけっているうちに夕方五時近くとなり、矢高さんにせかされる形で立ち上がった。

「はい、本を読むのは子どもの頃から好きなんです」

「けど、上総くんその本、英語ならともかく、ドイツ語だよ」

「ドイツ語とフランス語程度なら文法似てるしそれなりに読めるかなと思って」

それほど難しい本ではなかった。児童文学の比較的分かりやすい作品を手に取り、自分の記憶に残っているストーリーと照らし合わせながら目を通しただけだった。さすがに世界文学の難しい奴なら手も足も出ないと思うが。

「噂には聞いてたが、さすがだな」

階段を下りて、図書館受付に仮入館証を返してもらった後、ふたり外に出た。

「時辻さんが話していたよ。君の語学能力は驚くべきもので、英語なら大抵吹き替えなしで聞き取れるし原書そのままかじりついているってね」

「そのくせ日本の古典は読めなくせにと文句言われてます」

「そりゃそうだな。日本語の方が難しいよな」

からから笑いつつ、空を眺めやった。まだまだ明るい。昼間といって差し支えない。

「夕飯にはまだ早い時間だし、せっかくだからこの辺を歩こうか」

「はい、それの方がうれしいです」

上総はまだ太陽の高い中、ゆっくりと歩き始めた。かすかに涼しげな風が吹き抜ける。蝉の鳴き声はヒートアップしていく。矢高さんものんびりと、ポケットに手を突っ込んだまま校門の柵に沿って歩き始めた。

校舎を改めて眺めると、木造の部分と煉瓦の部分が重なり合っていて、どこの国だかわからない雰囲気をかもし出しているように見えた。青潟にはあまり見かけない建物だった。

「青潟だと、はっきりした和風か極端の洋風か全く味も素っ気もない建物か、そのどちらかですけど、結洲は違いますね」

「和洋折衷っぽい建物は確かに多いかもしれないな。それも最近の建築物で多いというのはあまりないことかもしれないね」

結洲大学の校舎も、矢高さんに教えてもらいはじめて知った。つい数年前に改築したばかりだという。

「もちろん古いものは守るけれども、新しいものを受け入れないわけじゃない。そういう風土かもしれないな。他の街から来た人たちは大抵戸惑うね」

「そうだと思います」

なにせ上総自身もそうだったから。

「結洲大学は附属の学校がないからみな、全国から集まってくるんですか」

「まさか。せいぜい結洲市内か近郊が中心。ただ縁があってわざわざ探し当ててくる学生も思ったよりいる。校風に惚れて、っていうのかな」

「校風ですか」

「いわゆるお坊ちゃまお嬢様学校ってところなのかな。それにしてはずいぶん雰囲気は庶民的だと俺は思うけど。教職員が学生たちの顔を完璧に覚えているとか、教授がほとんど中学の熱血教師化しているとか、ある意味高校の延長みたいな感じで大人扱いしないとか、いろいろあるけどね。俺は正直ごめん蒙りたい校風だったけれども、そういうほうが向いている奴も中にはいるんだらうね」

「そうなんですか」

青瀧大学の学生たち、および校舎を頭に思い描いてみる。高校までは確かに青大附属としてかなり面倒見よい学校と聞いているが、大学に進学してからはみな自由すぎてぐーたらしすぎとの噂も聞く。上総が週三回の特別講義で通う時にも思うのだが、語学の授業をのぞいてみな、死んだように寝ている。勉強するよりも、一息つくためにといった雰囲気が確かにする。

「大教室の授業が多いのかな」

「それはあるかもしれません」

「そうなるといわゆる大学のイメージと異なってしまうのも無理はないかもな」

矢高さんはポケットから財布を取り出し、中からテレホンカードを抜いた。

「ちょっと電話掛けて来るから、少し待っててもらえるかな」

通りすぎたばかりの電話ボックスに駆け出していった。

——一番充実していたのが大学図書館だなんて、いいんだらうかそれで。

街並みはそれほどひきつけられるものもなく、最初に連れて行かれた喫茶店も煙草の煙で閉口したし、あの北原さんにはめまいするほど振り回される始末。決していい印象の残る街ではなかった。

それが大学の学食で舌がとろけそうなほどのとんかつランチにかぶりつき、校舎の規模にしては立派過ぎる図書館でページをめくり、やっと気持ちが落ち着くといったこの展開、本当にいいんだらうか。もっと楽しむべき場所があったのではないだらうか。

上総は矢高さんを待ちながら、街路樹にもたれた。

——俺ひとりでうろちょろしていても、せいぜい博物館とか美術館とかそういうところ回って、せいぜい庭園めぐりとかして、それで終わりのような気がする。

それを考えると結局は、矢高さんに振り回される展開でよかったのだらう。山になんか登ることもなかつたらうし、「結洲群舞」などというダンスバトルの存在なども目の当たりで楽しむことができたわけだ。少なくともあさって青瀧に帰り、土産話にははりそうな内容ではある。

——いや、待てよ。

ここで慌てる。

——話せないんだよな、これ。矢高さん、秘密にして欲しいって言ってなかったか？

「お待たせ。それではこれからすぐ、宿に行こうか」

「え、もうですか？」

晴れ晴れとした顔でもって、矢高さんが戻ってきた。開口一番それはないだろう。

「まだ五時半になるかならないかですけど。母は確か七時までにとということだからまだ一時間以上間があると思いますが」

「いや、さっきうちに電話かけたら、ちょうど君のお母さんがいらしたんだよ。せっかくだし宿で食事をしようということになってね。俺も含めて三人でお弁当を注文しようということになったんだ」

「宿で弁当ですか？」

あの母が何を考えているか分からないのはいつものことではある。だが、わざわざ宿で用意してくれた食事ではなく弁当というその発想が理解できない。

「きっといろいろ考えるところがあるんだろうね。とりあえず、ここからすぐだから案内するよ。時辻さんはやり手だから、明日の準備もいろいろあるだろうし」

——それで俺の相手をさせられたということなのかな。

いったい何がなんだかわからないが、あの母が裏にいる以上は何も文句を言うことはできない。一応自分でコントロール可能なところを確認した。

「矢高さん、いいですか。今のうちに」

「なにかな」

「山での出来事ですが、僕は決して話すつもりありません。ただどこにも行っていないと怪しまれると思うので、結洲に着いたらすぐ大学の図書館にいたことにしていただけますか」

絶句する矢高さんに説明した。

「そのほうがたぶん、うちの母にもしつこく突っ込まれなくてすむと思います」

しばらく無言でいた矢高さんは、ふうと息を吐いて両手を合わせた。

「助かるよ。この礼はいつかする」

——超高級旅館じゃないか、ここ。

矢高さんに案内されたその旅館は、市街地から少し奥に入った路地に隠れていた。すぐ近くとか聞いていたけれども大嘘だ。方向音痴な上総には絶対ひとりでたどり着けそうにない。矢高さんをつけてくれたのは悔しいが母の英断だ。

「いぶき亭」と銘打たれた木目の板にひたすら見とれていると、

「まあ、中に入ってからにしようか」

促されて玄関に進む。白い砂が細かく広がり、箒の跡がくっきりと残されている。飛び石を踏みながら庭を眺めると、奥には樹齢百年以上は確実に思われる松がいかにもめでたそうな顔で枝を伸ばしている。

「立派な宿ですね」

矢高さんはそれに答えず、迎えに出てきた仲居さんらしき若い女性に二言三言、何かを伝えた。すぐに笑顔で、

「ようこそ遠方よりお越しいただきました。さあ、どうぞこちらへ」

上総に向かいスリッパをそろえてくれた。

「ありがとうございます」

礼を言ってすぐに履き替える。靴箱にしまう前にその仲居さんがすばやく下足箱らしきところにしまってくれた。紺の和服姿だがそれほど暑そうには見えなかった。思わず上総も背を伸ばし、荷物を抱えた。

「ご連絡いただければお迎えにあがりましたのに」

「いえ、本当はもう少し遅く着く予定だったのですが」

すべて矢高さんが答えてくれるので上総としては非常に楽だ。別の仲居さんが現れて上総の荷物を軽々と運んでいってしまったのでまた手ぶらでもある。

「おふたりの部屋はこちらになります」

「ふたり？」

思わず問いかけると、矢高さんはにやりと笑った。

「そうなんだ、ここ、二人部屋なんだよ」

「え、ってことは、俺と母と一緒に」

親子だからそうするのが自然と言われればそれまでだが、あまり考えたくない。

「違う違う。そうか、話してなかったよな。悪かった」

荷物を十畳ほどの和室に置いてもらい、座布団を自分で引き出した後、

「今夜は俺も泊まることになったんだよ」

——そんな、なんでいつのまにかそんな話になってるんだよ？

まさに呆然、ぼかんとしたまま口がふさがらず。そんな上総を尻目に矢高さんは胡坐をかき靴下を脱いだ。

「君のお母さんと上総くんとで一部屋ずつ用意するとうちの母が話したら、それは贅沢すぎるか

ら僕もぜひと誘われてね。どこでもそうだと思うけど、地元の宿に泊まる機会ってそうそうない。いきなりで驚いたかもしれないけれど、僕はさほど君の邪魔をする性格じゃないと思うし、まあ二日間、付き合ってもらえると助かるよ」

「いえ、こちらこそ、かえって迷惑をかけてしまうかもしれないのは俺のほうかもしれないし」

てっきりのんびり好き勝手に寝転がれると試算していたのは甘かったということか。母と同室ということはまずないだろうとは思っていたが、朝会ったばかりの人と二日も一緒の部屋で過ごすということがまず、現実味ない。友だちならまだわかる。でも、矢高さんとはそもそも七年間のジェネレーションギャップがでかすぎる。思い切り沈黙が続きそうな気がする。一日行動を共にしたけれども、正直、矢高さんの人柄がどういうものなのか掴みかねている。穏やかな人だろうとは思う。だがヘビースモーカーなところとか、北原さんに関わる謎の部分とか、簡単に判断できるタイプの人ではなさそうだ。

「遠方からお疲れさまでした。それではどうぞ、こちらで一服」

迎えてくれた仲居さんが、今度は抹茶を運んで来てくれた。

「恐れ入ります。さあ、いただきますか」

また矢高さんに促され、上総は素直に茶碗を手にとり、作法通りゆっくりと飲んだ。三回半回し、口をつける場所に気を遣う。涼しい部屋のせいか温かいお茶も心地よく染み渡る。

「お菓子もそちらにご用意しておりますので、どうぞお召し上がりくださいませ」

「恐れ入ります」

「お風呂も湧いておりますのでどうぞお好きなだけお入りくださいませ」

上総はただ頭を下げるだけですんだ。

夕方六時前、本当ならそろそろ食事したくてならなくなる時間帯だが、

「弁当を用意してくるからという話でしたよね」

念のため確認をした。

「そうなんだよ。たぶん時辻さんは明日の仕出し弁当の味見をしたいんだと思うよ」

「味見って、明日のですか」

毎回、おさらい会では仕出し弁当を用意して招待客にお渡しするのが常だった。上総も知らないわけではないのだが、今回に限っては見当がつかない。尋ねると、

「そう。僕の母とも十分打ち合わせしているはずなんだけどね。やはり心配らしいんだ。直前の弁当が一番明日のものに近いだろうから、きっちりと食べてみてどんなものか確認したいと話してたよ」

「まずいのは避けたい気持ちわかりますけど、そこまでこだわるものなのですか」

「そりゃあ拘るに決まっているよ。上総くん、結婚式の招待客が一番記憶に留める点が何か、聞いたことあるかい？」

分かるわけがない。首を振る。

「美しい花嫁さんでもなく、ゴンドラでもなく、ケーキカットでもない。その時出た料理の味、ここに尽きるんだよ」

「確かに」

子どもの頃何度か連れていかれた結婚式での記憶を重ね合わせて納得した。

「日本舞踊の発表会といえども近いものがあるよ。もともと好きで観に来る人もいないとは言わないが大抵はお付き合いなり言い方悪いけど、義理というパターンが多い。それでも、せっかく足を運んでいただけたからには喜んでもらいたい。いい記憶として残してもらいたい、それはあるよな」

「あります。わかります」

「そうすると、当然弁当にも力が入るだろう？ もちろん結洲では老舗の店から注文することに決めているし味に不足はないと思う。だが時辻さんとしては念には念を入れて確認したいという希望をお持ちのようなんだ。それで、これからその、誇り高いお弁当を俺たち三人が味見して、大満足すると、そういうわけなんだ」

一番の重要点を上総は確認した。

「もちろんそれは、おいしいということですよ」

「君、意外と食べ物にうるさい方？」

「そうでもないと思いますが」

「うちの学食に妙に食いついてきているし、なんとなく気にはなっていたんだけどな」

矢高さんはいたずらっぽく笑いつつ、提案をしてきた。

「できればあまり変更したくないというのが本音なんだ。上総くん、悪いんだけどさ、お弁当がでたら何も考えず一気に食べ終えて、満足した顔して終わらせてもらえないかな」

「おいしければもちろんそうします」

まあ、まずいということはないだろう。あっさり承諾した。

「まだ時間もかなりあるし、いったん風呂に入ろうか。疲れているだろうし君から先に入りなよ。部屋風呂だし、景色もいいよ」

「ありがとうございます、そうします」

とにかく少し一人になりたかった。部屋風呂なら一日二回入っても不思議には思われなだろう。その間に矢高さんと次、何を話すかを考えておかねばならなかった。上総は着替えと浴衣を用意し隣の風呂場へと向かった。

「お風呂はどうだった」

「夕暮れの景色が本当にきれいで」

それ以上何も言えず、上総は浴衣に着替えて座椅子で足を伸ばした。温泉ではないと聞いていたが目の前に広がる橙色の淡い夕暮れとかすかに広がる桃色の光にただ見とれていた。語彙が追いつかない。

「そうか、ならまだ俺も間に合うかな。時辻さんがいらしたら少し待っててもらふことになるかもしれないけど、ここは失礼させてもらふよ」

「それがいいと思います」

まだ日は落ち切っていない。絶対に間に合う。たぶん今頃は敷き詰められた夕日のじゅうたんで湯船も染まっているはずだ。

矢高さんが風呂に向かった後、一杯水を飲み干し、首を座椅子の背に持たせかけた。

——やっと人間らしい気持ちに戻ったよな。

やはり自分にはひとりの時間が必要なのだと思う。

目を閉じてぼんやりうたたねしていると、廊下をばたばた歩いてくる音がする。すぐにはだけた裾を整え、正座して待つ。本能だ。入り口で、「恐れ入ります」と挨拶する声で確信した。とうとう襲来だ。襖が静々と開いた。

「上総、あんたなんて格好してるの」

開口一番それはないだろう。当然言い返す。

「早めに着いたんだから、文句言われる筋合いないよ」

「君夫くんは？」

「今、ここのお風呂入ってるよ」

「なんていうか、もう、なんでその寝る格好しているのよ。まだこんなに外、明るいのに」

母の格好をまじまじと見る。半そでのワンピースで水色が、歳を思い切りごまかしている。化粧は比較的地味なのでなおのこと。

「いろいろ歩いたからしょうがないよ。暑かったし」

「暑いことは否定しないけど。まあしょうがないわね。あんたが迷わず無事にたどり着けただけでもよしとしなくてはね」

母はため息をつきつつ、上総の隣りに座布団を引っ張り出して座った。

「ほら、お茶注ぎなさいよ」

「自分でやれば」

「あんたのように遊びでぼたぼた歩いている子どもとは違うのよ。お仕事よ。毎日の仕事がんばっている人たちにはねぎらうべきなの。ほら、早く、注ぎなさい」

「わかったよ、一度言えばわかるから」

駄々っ子のような母には無理に逆らうと面倒なことになる。特に今日は家族だけではない。矢

高さんの前でこっぴどかしい思いをさせられるのはたまったものではない。もちろん矢高さんも母の本性を知らないとは言い切れないが、上総の扱いを幼年時代以来観たことはないはずだ。変な先入観植え付けたくない。

「ポットにちゃんとお茶入ってるからそのままもらえればいいわ」

「ほんとだ、冷たい」

「あんた熱湯入ってるのかと思ってたの？」

文句言い合いながらも湯のみにお茶を汲んで渡す。てっきりお湯だと思ったので手をつけていなかった。母の言葉が凶星だったのは知らん振りしておく。

おいしそうに飲み干し、母は上総の顔を隣りでまじまじと見つめた。

「君夫くん、いろいろ気を遣ってくれたみたいでありがたいわ。あとでお礼言っておかなくちゃ」

「けど俺に一言くらい言ってくれたっていいのに。驚くに決まってるだろ」

「ああそうね、悪かったわ。あんたがもう一人旅でわくわくしすぎて羽目はずすのが目に見えていたから、お目付け役がいないとまずいと親の私が判断しただけよ。で、どうなの、どこに行ってきたの」

思った通り質問攻めと相成った。さあどう出ようか。矢高さんとも約束したとおり、事実をしゃべる気はさらさらない。上総も自分のためにお茶を汲んだ。一口飲み干した。ひやりとして喉越しよし、香ばしい麦茶の味が広がった。まさに極楽。

「着いてから、矢高さんの大学に連れてってもらって、案内してもらったよ」

事実ではある。一部割愛しただけだ。

「大学？ ずいぶんまじめなところね」

「そう。あまり面白そうなところなかったし。暑かったしあまり歩きたくなかったし。でも学食おいしかったし、図書館にも入ることできたから十分楽しめたけど」

「公園とか美術館とか博物館とか、そのあたりにも行かなかったの」

「行かない。面倒だから」

尻尾を捕まれないように、できるだけ間抜けな顔して続ける。湯船に浸かりつつ考えたのだが、やはり矢高さんと北原さんとの間には尋常ならざる不気味な関係があるような気がする。下種のかんぐりといえはそれまでかもしれないが、清潔さはない。矢高さんの見た目いいとこのぼんぼんな雰囲気と不釣り合いな関係を、おそらく誰にも知られたくないのかもしれない。もちろん、この母にも。

母は両手で湯飲みを抱くようにして、ほっとした風に息を吐いた。

「君夫くんもまじめな子だし、そうね。あんたには合うわね」

「どういう意味だよ」

「あんたが道踏み外しそうになったら引き戻してくれるってことよ。まったく」

意味がよくわからない。上総も頭の中を整理するためにいったんここで黙ることにした。

「聞きたかったんだけどさ、矢高さんは母さんの友だちの子どもだって話だけど」

無理に沈黙を終わらせたかったわけではないのだが、上総の方から思わず言葉がもれた。

「俺のこと知ってたみたいだけどもさ」

「一度か二度、うちの先生の会であなたの面倒見てもらったことあるからね、本当に大変だったと思うわよ。あなた、しょっちゅう何かあると泣き出してたしね。自覚あるでしょ」

言われなくてもわかっている。意地で黙る。母は続けた。

「君夫くんは面倒見よかったからあなたを一生懸命なだめて、だっこしたりアイスクリーム買ってくれたりして、可愛がってくれてたのよ。今だから言えるけど他の女の子たちがあなたのこと手余してた時も、君夫くんが全部背負ってくれてほんと助かったわ。あなたどこまで記憶あるんだかわからないけど。覚えてる？」

「覚えてないよそんな昔のこと」

「あっそう。けどそうね。君夫くん、中学に入ってからには全く青濁に顔を出さなくなったから、あなたが覚えてないのも無理ないわ。私はしょっちゅう結洲で会っていたから全く違和感なかったけれども、そうね、あなたはもう記憶ないも同然よね」

「そういう人にいきなり再会させて連れ歩けてというのがそもそも失礼だよ。いろいろ遊んでもらって申し訳ないってさ」

全くその通りだ。矢高さんだって迷惑だったろう。昔の面影がどのくらい自分に残っていたかはわからないがほとんど初対面に近い状態で、いったいどこを案内しろというのだろう。母の発想はやはりいまさらながらぶっ飛んでいる。いくら息子がどうしようもない方向音痴だったとしても、だ。

「まあ、でもあなたひとりでふらふら盛り場繰り出して変な人に騙されて身包みはがされるよりはましって事よね。上総、あなた自分で自覚してないだろうけど青濁しか知らない世間知らずなんだから、もう少し知恵付けなさいよ。今回は君夫くんがついてくれたからよかったけどね。結洲歩いてみてわかったでしょ。青濁が自分の世界だと思っていたら大間違いだってこと、よくわかったわね」

「わかってるさ、そのくらい」

二杯目の麦茶を自分の湯のみに汲むと、母も黙って自分の分をテーブルにとんと置いた。わざとらしく音を立ててざあざあ淹れてやった。

「お待たせして申し訳ございません。お先に一風呂浴びてきました。時辻さん、こんばんは」

矢高さんが現れたのはその湯のみを飲み干した後だった。絶対様子を伺っていたに決まっている。ドライヤーで乾かした髪の毛がしっかり整っていることがその証拠だった。

てっきり夕食は例の弁当を分け合って食べるものかと思っていたが、母にまた馬鹿にされた。「何馬鹿なこと考えてるの。上総、冷静に考えなさいよ。せっかくこないお宿にいるんだから、ありがたく部屋でいただかないでどうするの。お弁当は若い男の子なんだから夜食にでもできるでしょ」

「でも、悪くならないかな」

心配しながらつぶやくと、矢高さんは首を振った。

「冷蔵庫にもう入っているんでしょうね」

「当たり前よ君夫くん。さあさ、まずは私の部屋に二人とも来てちょうだいな。ゆっくりと顔を合わせて、いろいろと打ち合わせしたいこともあるし」

三人揃って部屋を出た。貴重品と言えるものはさほどないけれども、一応は財布だけ持っていくことにした。矢高さんが上総の手元を覗き込み、

「ずいぶん用心深いなあ」

感心したようにつぶやいた。

ようやく夕暮れも落ち着いたが蝉はまだうるさく鳴いている。

「まだ、蝉の時期なのね。鈴虫はまだかしら」

「さっき風呂場で鳴いているのが聞こえましたよ」

母が上手に、向かい合う格好で矢高さんが座り、その隣りにちんまりと上総が正座する。目の前で山菜や魚を中心にてんぷらを揚げてくれて、それぞれの皿に用意してもらえる。まさに揚げたてのかりりとした味わいで、油っぽさもない。

「てんぷらじゃないみたいだな、この味」

「あら、ずいぶんあんた妙なこと言うわね。上総、あんたてんぷらうちで食べてたでしょ」

「だから、丸ごと魚とか野菜みたいで、衣を食べてるって感じがしないだけだって。別に母さんの料理まずいなんて一言も言ってないだろ」

「お黙り。そういう裏にこもった嫌味を言うのがあんたの癖なのよね。もっと礼儀正しくしなさいよ。女性に対してはレディーファーストだってこと、口ずっぱく言ってきたでしょ。まったくねえ、君夫くん、どうしてこうも違っちゃうんでしょうね」

「いえ、僕も今日、一日上総くんに付き合いましたが、自分の高校時代と比較して出来すぎなほどしっかりしているなあ舌を巻きましたよ。お世辞ではなく本当に、驚きました」

どう考えてもお世辞としか思えない褒め言葉を矢高さんはてんぷらにかぶりつきながら言う。てんぷらのたれはあっというまに衣へ吸い取られていく。

「これでも十年以上前は女の子たちにいじめられてひっくひっく泣いていたのにねえ。君夫くん、覚えてる？ うちの先生の会の時、上総が小学校の女の子たちに騙されてけたたましく泣きじゃくった時、あっという間にこいつの機嫌をとってにこにこさせてたことあったわよね。覚えてる？」

子どもである以上忘れたくても、親の記憶には刷り込まれている恥の記憶。会話に加わる気なんてない。白身の魚ををあっさり揚げたてんぷらを口に押し込み、冷えた番茶を飲む。矢高さんはちらと上総を覗き込み、何度も頷いた。

「僕もあの頃は十歳かそこらでしたから何が出来たというわけでもないですが。ただまあ、女子の中で一人だけ男子というのは寂しいものがあったし、その中で同じ男子が小さいにせよいたのはうれしかったですよ」

「そうか、そうよね。あの頃うちの先生の会に入ったりしていた男の子って君夫くんだけだものね。でも、踊りはやらなかったわけか。もったいないわ。お姉さんには何度も言うんだけど、最初からする気、なかったの？」

「一応、サッカーやってましたし、中学入ってからは剣道部でしたから、そういう日本伝統芸能が入り込むスペースがなかったというだけなんです。ただうちの母は、無理じいしませんでしたから今、こうやってのんびり手伝いをしてられるのかもしれないね」

——運動部だったのか、すごいな。

全く見た目そんな匂いしないのだが。

母と矢高さんはなおもてんぷらとビールを互いに注ぎながら思い出話に興じていく。

「私も、結局上総には何も習い事させないできたけれど、今思えば何か形になるものやらせておけばよかったと思うことあるわよ。君夫くんはスポーツマンだからいいかもしれないけれど、こいつ全然、運動も何にも興味なし。伝統芸能関連も全然興味なし。無理やり目を慣らさせているところだけど、全然このまんま。私の教育間違えたかしらと思うわよ。ちょっと上総、あんた聞いているの」

「聞いているよ。それよりなんでビールなんか飲んでるの」

すでにビールが空になりつつある。早い。もちろん上総は未成年かつ酒アレルギー持ちの自覚があるので手を出しはしない。

「いいじゃないの前夜祭よ。まだ七時前じゃないの」

——二日酔いになっても知らないよ。

酒が入ると饒舌になるのは誰も同じことらしい。上総がよく売れたメロン一切れにかじりついていると、

「かぶりつくのもいい加減にしなさいよ」

「うるさいな」

「あんたにはこれから夜食の仕事が待ってるんだから」

「どうせ夜食だろ。まだまだ時間あるよ」

やり取りしながらも矢高さんと話す内容は堅い。

「ところで、お姉さんから伺ったけど、君夫くん、おめでとうございます」

いきなり母が改まった口調で丁寧に頭を下げた。矢高さんも驚かずに正座し直してから、
「いえ、恐れ入ります」

お互い頭を下げ合っている。結婚でもするのだろうか。まじまじ見つめると母にまたあきれた

口調で、

「何かあんた妄想してるでしょう」

ゆっくり説明に入った。

「あのね、君夫くん内定が決まったのよ。結洲銀行よ。銀行マンよ」

「すみません、知らなくてごめんなさい。おめでとうございます」

会話の中には全くその話題など出てこない。知らなくて当然かと思うのだがここは合わせておく。矢高さんはまんざらでもない顔で母からビールをさらに注いでもらっている。

「いや、たまたまだよ。これで来年は食いつぶぐれないですみます。しんどい就職活動でした」

「夏までかかったのよね。大変だったでしょう」

「はい。いろいろ受けたのですが結局はなじみのある地元にお世話になることにしました。結洲大学のブランドが通用しないことをいやと言うほど思い知りましたよ」

「ブランド、ですか」

恐る恐る尋ねると、矢高さんは上総に向き直りにこやかに答えた。

「君も知っているかもしれないけどさ、銀行業界を一通り訪問していろいろ悩んだけど、大学名だけで切られるケースも多いし、地方大学というだけで見下されることもあった。でも、結洲銀行だけはありがたいことに俺をえらく買ってくれて、一番最初に内定をくれたんだ」

「内定、って、まだ内、ということですか。決まっているんですか」

よくわけのわからない漢字に戸惑う。決定、ではないのか。矢高さんと母がけたけた笑っている。

「上総、あんた自分でお笑いやっていること自覚してる？ 全くもう、就職活動の常識も全然こんなですからね。君夫くん、あきれるでしょ？ 就職協定というのがあってその前ははっきりと採用なんて言えないの。だから内定なの。分かる？」

「わかるわけないよそんなこと」

「あんたも高校一年なんだから少しは意識しなさいよ。全くもうね、本当にこの馬鹿息子にはあきれるといふか笑わされるといふか、予想できないこと平気で言うのよ。でもねえ、君夫くんがこういう堅いところに決めるとは、私も思ってなかったわよ。お姉さんも君夫くんが金融業界に進むなんてどうしてそういう発想し出したのかわからないって頭抱えていたわよ」

「もう、遊んでいられる歳でもないですから、まじめに決めました。大学時代は好き勝手できましたけれども、社会人になると趣味にふけるわけにもいかなくなりますし」

「いい心がけよ。上総、覚えときなさい。」

上総はひたすらオレンジ色の果肉を隅から隅まで掬い取る作業に専念していた。やっぱり自分の役割は、母のネタにされることなのだろう。猿回しの猿だと思えば、たぶん、きっと、腹は立たない。そう信じたい。

——けど、本当に信じられないよな。この矢高さんが。

ちろり、満足げに笑う矢高さんを覗き込んだ。

——銀行員、なんだな。

母と矢高さんとはお膳が下げられた後もしばらく話をしていた。舞台の段取りもあるし、それぞれ思い出話も尽きないらしい。

「まだ気の早い話だけど、君夫くん、いい人いないの？」

完全ほろ酔いで足も横に伸ばして尋ねる母に、矢高さんもつらつとした顔で答える。

「仲のよい女友だちはそれなりにたくさんいますが、特定するとなるとまだまだですね」

「あら、もてそうな雰囲気なのに。お姉さんも話してたわよ。クラスの女の子が一生懸命アピールしてくるらしいとね。電話もかなりかかってくるらしいけれども、そこのところどうなのかしら」

「うちの大学、クラスに男子が五人くらいと、かなり少ないんですよ。だから王子様扱いされてしまうんですよ。男子学生というだけで。たまたまですよ」

「でもそういう子の中で素敵だなと思う人の、ひとりかふたりは、いるでしょ」

ずいぶんねちっこい。矢高さんが顔色変えずに返しているのを観つつも、上総の頭の中には北原さんの肉感的なボディーがちらつく。

「見た目はね、それはありますよ。僕も男ですから。でも、一回お茶を飲んだりしてみると大抵相手の考えとか狙いが見えてきてしまい、こちらが冷めてしまうというのはありますね」

「例えば？」

母がテーブルの上に身を乗り出す。もうビールは切れている。

「たとえば、待ち合わせ場所でとりあえずお茶でも飲むとします。そこで薄暗くて小汚いけれども味はなかなかという店に連れて行くと大抵の女子はふくれつつらになりますね。僕のイメージを勝手にこしらえているのか、早速おしゃれなカフェか高級そうなレストランにでも連れて行くとも思っているんでしょう。わざとここで期待を裏切ってやると、概ねここで本性を現します。不機嫌になるわなんだで面倒です。でもご機嫌斜めになればこちらもやりやすいので、さらにお試しでラーメン屋で留めを刺します。そこも結洲では名店なんですが」

「あとでそのラーメン屋教えて頂戴。上総にメモさせるから。でもそんな女の子を試すようなことをしたら、かえって悪い評判立たないの？」

ふきだしながら母が尋ねる。

「気難しいとは思われているでしょう。それを繰り返してから中途半端な女性は近づいてこなくなりました。大学に在学している間にいいお嬢さん探しをしたいと考えている女子学生が多い中、大抵の場合目を付けられるのは僕の性格にあらず、財産目当てです。まあ、僕もたいして裕福とは思えないのですが、両親の肩書きなどもあるので誤解はされやすいのでしょうか。何も知らないお坊ちゃんを捕まえてあわよくば妻の座を射止めたいと言うわけです。最初は騙されたこともありましたが、だんだん場数を踏んでいくと危険な匂いがするところで尻尾巻いて逃げ出せるようにはなりましたよ」

「君夫くんの前途洋々ぶりを考えれば、クラスの女の子たちが騒ぐのも無理ないわね。でも、いつまでも一人身でいるわけにはいかないでしょ。お姉さんも心配してたわよ。誰かいい人見つけ

て早く身を固めて、可愛いお孫さん見たいって」

「縁があれば、ですね」

ここまで矢高さんはきわめて紳士な対応を取り続けた。上総の感じる限り特に引け目を感じている様子はなさそうだ。本心から来る言葉なのかどうかが正直気にはかかるのだが。母にいきなり話を振られる。

「上総、あんたもよーく今の話、肝に銘じておきなさいよ。幸いあんたは性格のいい美里ちゃんみたいな女の子に好かれていたんだから今の矢高くんのような相手がいるなんて想像つかないだろうけどね」

「過去形にするのかよ」

「そうよ。今の学校はみな、損得関係なくみな仲良く友だちでいられるけれど、大学に入って将来のことを考えるとみな、いろいろ策略練ったりするものよ。中学高校のあたりは好きになってくれる第一要因は性格だけど、大学以降は結婚相手としての判断になるからなおさらよ。上総、あんた聞いているの」

「そんな先のこと言われても俺にはどうしようもないよ」

「だから、今のうちにちゃんと意識しときなさいって言ってるの！ 顔が可愛いとかスタイルがいいとかそういうところばかりで惚れるのではなくて、将来その子と一緒に過ごして幸せだろうかってこと考えろってこと。あんたはもともと、変わった趣味を持っているようだし私も人のこと言えないけれど、君夫くんのように相手を冷静に見極めるだけの落ち着きを持ちなさいとそう言いたい」

酒が入っているとたちが悪い。こんなところで美里の話まで持ち出すとはあんまりだ。あえて答えない。しかし矢高さんが顔を覗き込む。

「そういえば僕も聞いたかったんだ。上総くん、君の彼女ってどんな子？」

「いえ、今そんなの、いませんが」

事実なので否定する。しかし母がいる。

「そうそう、君夫くん聞いてよ。こいつ、中学時代に本当に性格のよい可愛い彼女がいたのよ。どういうなり染めかは知らないけれど、中学二年から三年までみっちり付き合っていたのよ。担任の先生もほほえましく見守ってくれていたようで、純情プラトニックだったんだけどこの馬鹿息子がねえ」

「やめろよ母さん」

止めるが無理だ。母の気質に酒が注入されていればもう叶うものなし。

「何を血迷ったのか別の女の子に熱を上げて、結局振られてしまったってわけ。それもね、その女の子というのが、先の子と比べていろいろ問題のあるお嬢様だったようで、私もいったいなんでそういう子に惚れたのかわからないんだけど」

「母さん、これ以上言ったらここにある麦茶頭からかぶせるからな」

手元にポットを用意し威嚇するが勝ち目なし。

「何威張ってるの。事実なんだからしょうがないじゃない。しかも極め着けがその問題児の女の子に卒業式の答辞を読み上げた後全校生徒および父母の皆様の前で公開告白してしまったんだか

らもう、どうしろというのよねえ」

「それはすごいな。君もなかなかやるじゃないか」

「いい加減にしてください！」

自分でも何を言っているのかわからない。本当だったら脅し通りにポットの冷たい麦茶を浴びせかけたっていいのだが、ここにいるのが家族だけではないのが縛りとなっている。

「そう顔真っ赤にして怒らなくたっていいじゃないの。ねえ上総、あんたに言いたいのはね、少年恋をしちゃいけないってことじゃないの。足元のことばかり考えないで、もっと先のことを踏まえて行動しなさいと、そう言いたい。あんたいつもそうよ。目の前に何か起きた時、本能でなんでもやらかしてしまいその後の跡片付けのことを全く考えないのよ。それして、あとでどれだけ困ってもどうしようもないのよ。わかるあんた？」

「今夜は説教のためにきたのかよ。悪いけどもう打ち合わせ終わった先に寝る」

「あらあら逃げ帰ってどうするのよ。ほんと、あんたはガキなんだから。まあいいわ、未成年者はともかく、もう少し矢高くん話しましょうか」

「母さんこそ、男女ふたりきりで語り合うなんてうちの父さんに知られたらただじゃすまないよ。法律上はともかく、あの人も俺と同じ本能で動くからさ。今から電話かけてくるけどいい？」

「いいに決まってるじゃないの。そうそう、和也くんも心配してるわね。私もかけてくるわ」

立ち上がり、そそくさと母が部屋を出て行った。着替えていないのでまだまだ外に出られる格好ではある。

「すみません、なんだかみっともないところ見せてしまって」

「いやいや、面白かった。ああいう乗りなんだね。時辻さんと上総くんの会話は漫才見ているようで楽しかったよ」

——別に楽しませるために話しているわけじゃないけど。

改めて座りなおし、上総はポットでお茶を注いだ。矢高さんのコップにも注いだ。

「ただ、君のお母さんが言うのは正しいよ」

「何がですか」

言葉を飲み込むようにして、口をお茶でしめした後、矢高さんはつぶやいた。

「先のことを考えてこれからは行動しなくてはならない。それを俺ももっと早く気づけばよかった、そう思うことが多々あるからさ」

打ち合わせの段階で修羅場になることは予想していたが、朝五時置きの八時会場前集合、その後一階から三階まで荷物運びのため昇ったり降りたりの繰り返し。出演者が到着し始めてからは弁当配りやら舞台道具の運び込みなど男の腕力が求められる仕事をひたすらし続けるしかなかった。もう時間の感覚などどこかへ行ってしまった。

「時辻さん、すみませんこの荷物、楽屋にお願いします」

「かしこまりました」

——時辻じゃないんだけどな。

詳しい事情はあまり確認していないが、結洲のお稽古場のお弟子さんたちは上総の苗字を「時辻」だと思い込んでいるようだ。訂正する暇なんてありゃしない。

荷物運びが終わって気がつけば十二時少し前。上演開始が一時ということもあり、受付の券もぎりにも入らなくてはならない。矢高さんと並んでひたすらちぎり続け、指を軽くすってしまった。

「本当に疲れたね」

幕が上がってから一時間ほど経ち、受付担当の女性たちから労われた後上総は矢高さんとふたり、楽屋へと戻った。

「これから舞台の人は大変でしょうけど、俺たちはもうこの段階で燃え尽きましたね」

「全くだ。うちの手伝いだからしょうがないことだけど、男手がいかに貴重なものなのかよくわかる。弁当もらって二階のロビーで食べようか」

「はい、そうします」

朝一番に挨拶した矢高さんの母親こと、今回の会主である先生よりやたらとどでかいお重の弁当をいただいた。母専用の楽屋に置きっぱなしだったので取りに行った。あわただしく走り回っているのか母の姿はなかった。貴重品はちゃんとロッカーに預けているようなので上総が見張り番になる必要もなさそうだった。すべては「君夫くんにしたがってちょうだい」だったので、矢高さんが昼食を提案してくれるのであれば問題ないはずだ。

「それにしても豪華なお弁当ですね。昨日うちの母と分け合ったものとは大違いです」

「ああ、これなんだけどね。結局時辻さんが夜九時過ぎに電話で変更申し入れたみたいなんだ。さっき話していたよ」

「まさか」

あっけにとられてあらためて開いた弁当に目を留める。豪華な散らし寿司だ。

矢高さんが続ける。

「俺たちがいる間は別に何も言ってなかったけどね。やはり考えるところがあつたんだろうな。まあ俺たちからしたら、豪華な食事になる分には文句なしだけど」

「でも高いんじゃないでしょうか」

「今回の会はどちらかというと、めったに結洲になんか来ないえらい人もたくさん招待している

から、格式の上でもいろいろあるんだろうな。全く俺たちには関係ないけどさ」

——格式ってなんだろう。

さめているのにふっくらして味もさらりと深い。付け合せの焼き魚も中がふんわりやわらかい。昨夜食べたものとは確かに質の違いを感じる。

「矢高さん、ひとつ聞いていいですか」

「なんだい」

上総は箸を休め、一呼吸置いた。二階のロビーは一階と違いふたりだけで長いすを占有できる。声を潜める必要もさほどない。

「母の仕事って、いったいどういうものなんですか」

「君、知らないの？」

「具体的には何も」

誰かに聞いてみたいことではあった。前から青瀧の先生のところで手伝ったことはたくさんあるし、荷物運びなどの裏方も一度や二度の経験ではない。母にヒステリックに怒鳴られるのもよくあることではある。ただ、いつも考え込んでしまうのは、

——離婚してまで、やりたい仕事はこれなのか。

この問いである。

「俺が小学校卒業した時に母は家を出て行きました。理由が仕事に専念したいためとは、あとから聞きました。父も円満に許したらしいです。ただ、その後もふつうの家族のようにうちに泊まりに来てますし、ごくごく自然な生活リズムを刻んでいるように見えます。そんなに伝統芸能を追う仕事って、家族を犠牲にするしかないものなのかなと、たまに思うので聞いてみただけなんです」

「犠牲にされたと本気で思ってる？」

「いえ、全然。俺はひとりの方が落ち着くので全く気にはなりません。ただ父が」

続けていいのだろうか。迷う。矢高さんが頷く。

「お父さんのことか。時辻さんはご主人お気に入りだからな。最高のパートナーだと思っているみたいだよ」

「そんなこと、母、あの人、言っていましたか」

すっとんきょうな声が出てしまう。口を片手で押さえてむせそうになる。

「言ってる言ってる。今回の会の打ち合わせで時辻さんよくうちに泊まってくれたんだけどね、お酒が入るとめろめろにのろけ話してるから。息子の君に話すべきことじゃないかもしれないけれど、うちの母も俺と同じく不思議に思っているようだよ。なんで再婚しないのかなとかね」

「そう思いますよね。絶対に」

力を込めて問いかけてみる。やはり自分だけではなかったのだと思う。上総は今、矢高さんに話した通り母の恋しさとかそういうものは感じない。むしろひとりでのんびり過ごしていられて、夜中にエロ本欲しくなったら自転車で抜け出して買いに行けたり、休みの日は親の顔気にせず居間で友だちとぐーたらしたりと、そういう生活の方が合っている。もちろん父が上総を信頼してくれているからというものもあるだろうが、もし母が家の中にいて監視していたら、とてもだけ

どういったのびのび生活は出来ていないと思う。

ただ、元気がなくなっていく父を見続けるのは正直きつい。幼心にも父と母は円満な関係に見えたとし、ここだけの話だがそれなりの夜が存在したらしいことも気づいていた。先日、両親がひとつの部屋で独特の雰囲気をかもし出していた時も性的な匂いこそ感じたけれども嫌悪感はなかった。やはりそうか、程度のものだった。父と母が今だに男と女の関係でいることを、どこかで受け入れている。だったらなおのこと父は母が上総以上に恋しいのではないだろうかとも思う。少なくともこの四年間で、父が他の女性の影を漂わせたことはなかった。

「これ、君に話していいかわからないんだけど」

少し黙った後、矢高さんは微笑みながら続けた。

「時辻さんと俺の母が青潟に住んでいた頃からの姉妹弟子同士だったことは知っているよね」

「なんとなくですが聞いてます」

「時辻さんは十代の頃から、教育に関して深い関心を抱いていて、さまざまな人たちに議論を吹っかけていたと母から聞いたことがあるんだよ」

想像はつく。さぞ迷惑だったことだろう。

「子どもの頃からさまざまなお稽古事をしていて、将来についてもいろいろ考えていたからかもしれないけれど、ただ、時辻さんは口癖のように自分は教師向きではないと話していて、その上で言ってたらしいんだ。本当に、上総くん、君とほとんど変わらない歳の頃らしいんだけどね」

箸を握り締めた。頷いて促した。

「子どもはある程度の年齢に達したら母親から手放さなくてはならない。特に男子の場合は、思春期を迎える段階でいったん母親から引き離し、男親の手で育てる必要があると言い切っていたらしいんだ。もちろんうちの母や他の女性陣は反発したらしいよ。中学生なんてまだまだ子どもだしこういう難しい時期だからこそ母親が必要なんだと反論したらしいんだ。でも、時辻さんは持論を一切曲げなかった」

「母が高校時代に、ですか」

「そうなんだよ。早熟だよ。自分がまだ母親必要としてるんじゃないのってつっこみたくなるけれどね。結局立村さんと結婚してすぐ君が生まれ、時辻さんは自分の頭の中にある理想の子育てに没頭し、大学卒業してからは就職せずに専業主婦一筋だったわけなんだ。時辻さんは頭のいい人だったからキャリアウーマンを目指すだろうと誰もが信じていたようだけど、君が小学校卒業するまではそのまま、母親業のみに徹していたんだ。彼女なりの教育観だろうね。でも」

「でも？」

言葉が棒のようになる。

「今の所、時辻さんは理想の子育ての一環として、家を出て行くことを選んだような気がするんだ。これはうちの母も同意見だよ。立村さんにはとんだとばっちりだけど、時辻さんがそう簡単に持論をひっくり返すとも思えない。仕事のことなんて後付けだよきっと」

——いや、まさか、そんなことありえない。

矢高さんの顔をまじまじと見つめながら、上総はぼんやりと紅しょうがを口に押し込んだ。

——やはりあの人、絶対おかしいよ。

しばらく矢高さんと無難な話を続けた。とりあえず話題としては矢高さんの高校時代の思い出や就職活動、その他結洲という街独特の学生気質など事欠かなかった。

「それだけ部活動に熱心だったら、委員会に走る人少ないでしょうね」

「委員会？ そんなの一部の連中が盛り上がるだけだし、体育系の俺たちには関係なかったな。上総くんは部活やってなかったんだっけ」

頷き答えた。

「はい、うちの学校はもともと委員会が部活の代わりになっている傾向が強いです」

かいつまんで説明した。

「最近はずいぶん変わってきましたけれど、評議委員会というのが実際学校の主だったイベントを仕切っていて、ほとんどメンバーも顔が変わらなくて気分としては部活そのものでした。もっとも俺は部活したことないので比べようないんですけど」

「生徒会ならまだわかるが、委員会がか。青大附属ってかなり変わってるね」

「自分でもそう思います」

「高校でも同じなのかな」

痛いところではあるが、どうせ分かるわけがない。適当に答えた。

「いえ、中学時代にやるだけやってきたので、高校は別のことやりたいなということで、今はフリーです。さすがに三年間評議委員会に関わっていると、いろいろ疲れます」

本当のこととは言えないが、まあ、間違っていない。矢高さんは相変わらず笑みを浮かべて上総の話の話を聞いている。

「クラスをまとめるのはまあ、疲れるよね。いくら仲間が部活動感覚だったとしてもなんとも言えないよね」

「結洲はどうなんですか？ うちの母から聞きましたけど、結洲大学は附属高校があるらしいという話ですが」

評議委員時代の思い出はやはり語るのが辛い。わざと話を逸らした。矢高さんは首をかしげて頷いた。

「まーあ、なんていうのかな。一応は附属高校あるし、若干は内部進学している人もいる。けれどもほぼ八割から九割は他大学に進学してしまうみたいだね。俺は公立高校から入ったけれど、内部進学者は結構肩身狭そうだったよ。行くところないからしかたなくって雰囲気になってしまうんだろうね」

「青大附属なんて、みな、進学できなかったらどこにも行けないと思ってます。たぶん、よっぽどのがない限り別の学校に行こうなんてことは考えないと思います」

「上総くん、君は？」

即答した。それしか言いようがない。

「俺も一緒です。なんとか中学入試でもぐりこんだからなんとかなってますけど全然着いていけてません。エスカレーターに乗るしか道が残されていません」

「そんなまだ高校一年なのに、寂しいこと言うなよ。でもまあ、君の立場だとそうかもしれないな」

矢高さんはそれなりに理解を示した。

「ところで、塾には通ってないのかな」

「いいえ、今まで一度も行ったことはありません」

本当だった。母の方針もあって中学入試までの日々はひたすら自宅学習だったし、中学進学後は見事に学校側が面倒を見てくれた。上総の知る限り外部の塾に通っている生徒は数えるほどではないだろうか。もっとも放課後は補習やら委員会やらで大抵埋め尽くされてしまうのだが。

「それは珍しいな。そうそう思い出した。結洲が特殊な教育環境なのかもしれないけど、学校ごとのまとまりはどこもあまり目立ったものはない。上総くんの青大附属のように学校内での熱い結束も部活に入らない限りそうそうない。ただね、この街はやたらと塾が多いんだ。大手もそうだし小さな私塾も含めると数え切れないほどにね」

——普通そうなんだろうな。けど、青澗も似たようなものだよな。

上総が意味をつかめずに聞き入ると、

「まあそうだ。塾なんてどこにでもあると言えばそれまでなんだけどさ。主に高校生たちの溜まり場はいわゆるその塾が基準なんだ。学校は適当に終わらせて塾に集って、そこでも形ばかりの勉強をすると同時に、一種の部活動のような役割を果たす。そんな場所なんだよ」

「塾が部活動みたいなものなんですか」

ますます分からない。矢高さんは上総の混乱を思惑通りとばかりに満足して眺めている。

「そうなんだよ。塾だって夜九時まで勉強し、その後街を二時間くらいうろついて帰るわけだからほとんど第二の学校みたいなもんだよ」

「でも夜遅くまで勉強するなんて、すごいですね」

素直な感想を述べると、矢高さんはさらに反り返る。

「違うよ。勉強好きで塾に行くなんて物好きがどのくらいいると思う？ 僕は残念ながらサッカー一命だったので塾には行き損ねたけれども、ほとんどの場合それは勉強の場ではないんだ。言い方は悪いけどそうだね、学校という枠をとっぱらった形での高校生サークルがあちらこちらにどっさりあるとイメージしたほうが近いよな」

「サークルって、部活動のようなものですか」

それとも委員会だろうか。上総には掴みきれない。

「そんなお行儀いいもんじゃない。一番近いのはそうだな、あれだ。さっき君が見た、『結洲群舞』のあの集団だな。あんなのが夜の街にうじゃうじゃしていて、しょっちゅうたむろってけんか沙汰やらかしているんだ。しかも、ややこしいことにオリジナルの仁義まで切って行いうらしいんだ」

「ほんとに、かなり昔の映画の世界ですね」

任侠、とは絢爛なロビーに似合わなさそうなのであえて控えた。矢高さんも笑った。

「そう、例のあの映画だよ。『結洲群舞』も、二チームが同じ場所で踊る場合には独特のエールを交換するしきたりがあるんだけど、どうもそれに近いらしい。それぞれの塾グループがわざわざ

ざ名乗りあって仁義を切って、けんかやら度胸試しやらはたまた『結洲群舞』の真似事やら、とにかく小競り合いばかり遣り合っているんだよ」

——夜の街で小競り合いって、即、補導されるだろ？

なんだか特殊なグループのみのような匂いがする。まさか塾に通っている連中みんながみんな戦っているわけではないだろうに。上総の納得できかねる顔を見て取ったのか、矢高さんは続けて例を挙げた。

「これはかつて噂に聞いた話なんだけど、ある私塾では授業なんてそっちのけ、お姫様役の女子を守るため、親衛隊を結成し夕暮れの街をうろつく集団がいるらしいんだよ。そいつらはひたすら彼女を守ることで頭が一杯なもんだから、ほんの些細なことでかっとなってしまうと小競り合いが耐えない集団という評判が立っている。特に一番のナイトとか言われている男子については、めっぽう腕っ節が強いらしく周りからも恐れられているとかね。確か君よりひとつ年上のはずと聞いたな」

「本当ですかそれ、なんか、現実とは思えないな」

「と、結洲を知らない人たちは大抵驚く。俺も自分で話していてドラマのあらすじ話しているような気分になるよ。でも、残念ながら本当なんだ。最近はその女子のライバルとなる相手と無駄な戦いをしているとか、そのお姫様が実は対して美人じゃなかったとか、なんだかわけのわからない話になってきているよ」

——つまりなにか。非合法的な新井林のことか。

学校の中でのみ騎士が存在している我が青潟大学附属。きわめて安全な場所で盛り上がり、優等生的な結末で幕が下ろされる。結洲のように、学校の外でバトルを繰り広げるなんてことはまずない。すべては学校の中での出来事。

「うちの学校も、たまにバイオレンス映画のような出来事が起こったりしますが、大抵は学校の中で片がつきます」

「バイオレンスって例えば？」

「例えば」

指折って数えてみた。あるある、たくさんある。

「学内での人間関係が入り組みすぎておきた傷害事件とか、自殺未遂とか、駆け落ちとか、下着泥棒事件とか。いろいろありますけど、でも、学校外に洩れたことはほとんどないんじゃないでしょうか」

矢高さんは笑い出した。周囲の和服姿の女性陣が怪訝そうに二人に目を留める。膝を叩いて何度もうんうん頷いた。

「そっか、それならもう、結洲の仁義つきバトルなんて可愛いもんだよな。上総くん、君は本当に修羅場を乗り越えてきているなあ」

大抵は一番か二番程度客席に戻って観るのが常なのだが、今回に限ってそれはなかった。二階ロビーから楽屋に戻ってからはひたすら玄関との往復が続く。いつまで経っても運び終える気配がない。靴を履き替えなくてはならないのが一番面倒だ。夕方以降は踊り終えた人たちの荷物をそれぞれの車に運び込む仕事が残っている。どの人もとにかく荷物が多すぎる。

「本当に助かるわ。うち、旦那が今日来なかったものだからほんっとに」

「こんなにお花もらったら持ち帰るのも大変よね」

中には早めに蒔物の山をダンボールに詰込んで、配達業者を呼んで引き取ってもらう人もいる。確かに和服姿で両手に抱えきれぬ荷物を持って歩くのは、お世辞にもエレガントとは言えない。

気がつけば会主の演目も無事幕が下りたらしく、今度は楽屋の中が大混乱だった。女性がほとんどの中、みな、一斉に和服から洋服に着替えるのだから。

「自分の番が終わってからだいぶ間もあるし、その間に着替えればいいのに」

上総がつぶやくと、矢高さんが首を振った。

「最後の会主挨拶、それと三本締め、出演者全員が舞台にあがらないと様にならないだろ」

言われてみればその通り。上総は余計なことを頭から振り払い、ごみ袋を五袋ほど抱えて駐車場へと向かった。持ち帰らねばならないのでお弟子さん同士分け合って処理する予定なのだそう。お弁当の空箱が溢れている。

多くの出演者、および関係者はこれから「なおらい」と呼ばれる打ち上げパーティーに向かう。早めに本当は宿に戻って一眠りしたいのだが、そうも行かないだろう。覚悟はしていた。矢高さんも当然、出席予定だという。

「さすがに母も、この日ばかりは盛り上がりたいと思うしね。上総くん、とりあえず荷物が片付いたところで先に会場向かってようか」

「え、でもまずありませんか。荷物運んでほしいとか言われませんか」

少なくとも母であればそのくらいは言いそう。矢高さんは笑った。上総の肩を軽く叩いた。「心配なら、一声断ってこようか。きっと今頃母さんたちはお客様の挨拶の嵐でえらいことになっているよ。僕らふたりが消えても対してなんとも思わないよ」

——矢高さんがいてくれてほんとよかった。

会主の息子の力の偉大さにただ感服した。腕時計を覗き込み、すでに夜八時を回っていることに今更ながら気がついた。

会場は会場脇のシティホテルだった。五階のイタリアンレストランを借り切っているという。かなり豪華な匂いがする。

「今回ばかりはね、母も気合を入れたからね」

矢高さんに連れられエレベーターに乗り、ようやく一息ついた。ありがたいことに誰もいない

。「めったにこんな派手な会開いたりしないんだけど、ちょうど教え始めて二十周年、きりもいいところだしてことで思い切ったらしいんだ」

降りて、すぐにレストランの入り口へ連れて行かれる。入り口が狭いのでてっきり小さな店かと思いきや、中は豪華なソファが並んでいる。いわゆる「レストラン」の雰囲気ではない。前、何かの雑誌でちらと見かけた「ナイトクラブ」とか「キャバレー」とかどことなく色っぽい匂いがする。

「年配の人たちが多いから、できるだけゆったり座れる場所がいいというリクエストだったので、本日は貸切にしたんだよ。俺が選んだんだ」

「貸切ですか」

「意外とかからないよ。もうだいぶ揃ってるね。上総くん、この辺で野郎組はゆっくりお茶でも飲むとしようか」

慣れた風に矢高さんは、早めに到着した女性陣にひとりひとり丁寧に挨拶をし、すばやく扉側の席を押さえた。巨大な柱の形をした花瓶の陰に隠れるかっこうとなる。実は死角かもしれない。

。「母や時辻さんたちはたぶん一番奥の席で盛り上がるから、俺たちはこの辺にしよう」

「賛成です」

やはりこの人は慣れている。女性中心のグループでどうやって動いていくか、どうやってご機嫌よくすごしていくか、そのあたりをよく把握している。上総も時々観察していたのだが、矢高さんはどの女性にも押しなべてやさしい。とにかく親切だ。その一方で相手に気づかれないよう上手に席を離れるテクニックはまさに見事。見習いたい。

すぐに水が運ばれてきた。他の女性陣もそれぞれ、隅っこから席を埋めていき、仲良しグループで固まって語り合い始めた。声が大きすぎてすべて聞き取れてしまう。

「もーやだ！ 思い切り間違えちゃったもん。どうしよう」

「大丈夫、誰も気づいてないって！」

「それよか私、蒔物あれだけ用意してきたのに友だち誰も来てくれないんだもん。どうしよう、あんな荷物。これからバスで帰らなくちゃいけないのに、もう最悪！」

「私もよ。うちの旦那なんてさ、ひどいのよ。時間の無駄だからってうちの息子と一緒に野球観に行っちゃったのよ。そっちの方が楽しいからって。娘は母に預けてきたからいいけど、家族誰も来ないってなんなのよねえ」

「うちなんてもっとひどいわよ、旦那の両親が来なくてもいいってのに、わざわざ恩着せがましく現れて、ねちねち批評していくのよ。何よねえ。所詮『結洲群舞』の真似事みたいなことやってるだけなのに、なあにが、『手の動きに表情がないのはもったいないわよ』ですってよ！

ああ、ありがとうございます、ペって感じよね！」

よくわからないが、みなストレスを抱えているんだろうということは予想がついた。上総たちが後ろで水を啜っているのに気づいていないのだろう。

「よろしければ、ジュースとウーロン茶、ワイン、ビール、それぞれございますので」

案内の男性が上総のもとにジュースを、矢高さんには赤ワインのグラスを用意してくれた。露骨ではある。矢高さんに尋ねられる。

「君も、歳ごまかしてビールなんていかがかな」

「いえ、俺は酒が本当に飲めないんです」

「まるで今まで、飲んだことあるようなことあるような話だな」

「中学一年の時、一口だけビール飲んで、それで倒れました」

小声でささやき、オレンジジュースで喉を潤す。本当は母たちが揃って乾杯をするまで待たねばならないのだが、もう喉がからから、たぶんもう、水分補給しないと動けない。

「それにしてもまあ、無事に幕が下りてよかったよ。裏ではいろいろどたばたあったようだけど、誰も穴を開けなかったし全員顔をそろえて無事踊り納めたし、倒れた人もいなかったし、怪我もしなかった。何よりだよなあ」

「あの、矢高さんいいですか」

恐る恐る尋ねた。

「舞台上そんな、大事件起こることなんて普通あるんですか」

「あるよそりゃ。体調崩して舞台上倒れて起き上がれなかった人もいたし、鷺娘の引き抜きがうまく行かなくてえらいことになったとか、舞台当日になって救急車で運ばれたとか。みな、身体張って踊っているよ。特に衣装を着ているとなおのこと、いろいろあるよ」

「そんな、信じられないことってあるんですか」

「あるある、よくあるよ。人生と一緒にだよ」

いきなり話が大きくなる。矢高さんは首筋を書きながらつぶやいた。

「君も時辻さんによく言われていると思うけど、『無事に終わる』と『無事に幕が下りる』ことは簡単に見えて一番難しいことなんだ。ひとりひとはそれ扇子落としたほれ出番間違えたほれかんざし刺さらなかったとかいろいろ反省しているけれど、それもこれも無事に終えたからこそ言えることなんだ。上手下手よりも、無事に終わってほっとできることの素晴らしさを、うちの母はいつも、挨拶の時に話しているんだ」

言葉を切り、入り口の騒がしい気配に顔をしかめた。

「と、言いつつも無事に終わらせたらそれで文句を言いたい御仁が現れた様子だな。上総くん、もしものことがあれば、悪いが君も道連れにするから覚悟しとけよ」

——頼むからここのお弟子さんたちの前で罵倒しまくるのだけはやめてほしいよな。

おとなしくしていよう。どうか、このなおらいも無事に「幕が下りる」ことを祈るのみ。

母は入ってくるなりちらと一瞥し、すぐに最奥の上座席を分捕って他の先生たちと一緒に腰掛けた。先に席についていた女性陣がすぐに立ち上がり、ぞろぞろとご挨拶に動き始める。同時に上総たちが座っている場所の脇あたりに、イタリアンバイキング料理がずらずら並び始めた。スパゲティ、ピザ、カレー、デザートなどなど種類は十分にあり。

「早く乾杯始まらないかな。やはりエネルギーが欲しくなるよ」

「同感です」

昼にお重の弁当を平らげたとはいえ、消費エネルギーを考えると全く見合っていない。特に男子二人にとっては一刻も早く皿持って飛びつきたい気持ちで一杯だ。

「さあさ、みなさん、お待たせしました。では先生より、ご挨拶ですよ」

母と同じテーブルに着いたうちの一人が皆に呼びかけた。同時にみな立ち上がる。

「今日は朝から本当にお疲れさまでした。みなさんにはいろいろとご無理を申しましてご負担をかけてしまいました。無事に幕も下り何よりです。袖からみんなの踊りを拝見しておりましたが、みな、まことに、よくできました！」

拍手が沸く。まだ会主……矢高さんのお母さん……の挨拶は続く。

「私も、結洲の地で小さな教室を開いて気がつけば二十年。お稽古の合間にやれ子どものおやつだ、やれ幼稚園から子どもが熱を出して電話がかかってきた、とか、お弟子さんたちにはご迷惑をかけたものでした。決してよい先生とはいえなかったとも思うのですが、それでもずっとお稽古を続けてくれたたくさんの門弟のみなさん、そして今回青湯からわざわざ駆けつけていただいた大先生と、妹弟子で今回段取りをすべて担当してくれた時辻さんはじめお世話になったみなさま、頼りない会主である私を支えていただき心から感謝です。どうぞ、今夜はささやかですがたくさん召し上がってゆっくりと舞台の疲れを癒してくださいね。ありがとうございます」

母が静かに一礼している。また拍手が小さく響いた後、

「それでは大先生に今日は、乾杯の音頭をとっていただきます。それでは先生」

しばらく「いやなんなの、他の人にやってもらいなさいよ」とかいろいろやりあった後、結局志遠流の大先生……上総もよく知っている人だ……がシャンパングラスを片手に、

「それでは、結洲の地での志遠流日本舞踊の発展を願い、乾杯！」

ようやくみな、グラスに口をつけることができた。同時に勢いよくみな、料理の並んだテーブルに礼儀正しく並び、白い皿とフォークを持って大量に取り分け始めた。

「それにしてもすごいよな。みな、なんでこんなに統制取れてるんだ」

レディファーストで女性たちに先を譲り、上総と矢高さんは列の後ろで待ち続けた。

「ひとりにはスパゲティ、ひとりにはピザテーブルの人数分、みな料理を分けて運んでるよ」

「あ、本当だ」

てっきりみな自分の分だけ取って席に戻るものだと思っていたのだが、いつのまにかみな担当する料理が決まっている。確かに効率はよい。ひとりずっと待っていて全料理をまとめて取るよりは楽だろう。

「まあ俺たちは男子らしく好きなものを山盛りもらっていこう」

「そうします」

上総は皿にカレーライスを盛り、もう一皿にピザを一枚、春雨サラダをほんの少し、まずは持って席に戻った。もちろん全部自分で平らげるつもりでいる。

味は申し分なし。ただでさえ空腹だったせいもあって、ひたすらふたり無言で食べることに専念していた。女性たちの会話や笑い声はけたたましく、また途中で入れ替わり立ち代り場所を替える人もいる。気づかぬうちに別のテーブルでは遅く現れたらしい男性の集団もいる。母たちと挨拶をしていたのでなんらかの関係者ではあるだろう。

「まだあるな。パスタも今度はカルボナーレが追加されてるよ。ずいぶん張ったなあ」

独り言をつぶやきつつ矢高さんが二回目のバイキングに向かう。上総も続いてパジリコと海老のパスタを少しだけ盛った。少しずつでも全部食べておこうと言う魂胆だ。デザートとコーヒーまで平らげたい。

「ああ、でもやはり、こういうのは裏方でもうれしいね」

ほおぼりながら矢高さんが語る。

「一番しんどいのが実は前日なんだ。当日は勢いで何でも出来てしまうから意外と疲れないんだよ。昨日は上総くんと一緒に過ごせたからだいぶ楽だったけどね」

「こちらこそありがとうございます」

「俺はもともとイベントの裏方を手伝うのが、子どもの頃から好きでね。踊っている人たちを観るよりは、大道具や衣装、鬘をいじっている様子を覗き込む方に興味があったんだ。反抗期で親とどんぱちしていた頃も、裏方さんたちの姿を観たくてわざと興味ないふりしてもぐりこんだりしたよ」

「表舞台にはあまり興味ないんですか？」

「ないね」

言い切った。少しひっかかった。

——矢高さん、「結洲群舞」で踊っているとか、北原さん言ってなかったかな。

上総が黙り込むのもあまり気にしないようで、矢高さんは続けた。いつのまにかワインは二杯目。昨夜も思ったのだが、矢高さんはかなりいける口なのではないだろうか。ただ煙草は昨日の夜から今まで一本も吸っていない。それはまたそれで辛そうだ。

「上総くん、今日は本当に一日ありがとうございますね。沙名子さんの言ったとおりだわ」

母より明らかに年上だが和服姿のせいか年齢の差が読めない女性が、上総たちのテーブルに近づいてきた。わかってる。矢高さんのお母さんだ。すぐ立ち上がり、九十度の礼をした。

「こちらこそ、素晴らしい機会を頂きありがとうございます。貴重な体験をさせていただきました」

少しは気の利いたことを言わないと母にぶん殴られるだろう。微笑んでみる。続いて志遠流の先生が現れ、

「上総くん、青潟でもよく手伝ってくれるのよ。しっかりしているし、賢いし。ほら、今、青大附高の英語科ですってよ」

「すごいわね。さすが沙名子さんが全身全霊で育て上げただけあるわ」

褒められている感覚が実はあまりない。居心地が悪い。できればまだ皿に残っているカルボナーラを平らげたいのだが、どんどん女性陣が男子二人離れ島に集まってくるのでどうしようもない。側のテーブルにいた女性たちは、その隙に矢高さんへ話しかけている。どうやら上総と男子話にふけている間は、気を遣って声をかけられなかったらしい。

会主の先生は薄い藤色の紹をまとい、改めてまじまじと上総を眺めた。

「沙名子さんからいつもお話伺っているわよ。まだおちびちゃんだった頃にしかお目にかかっていないけれども。うちの君夫も昨日電話で話してたわ。自分と同じ歳の頃を比較して、こんなに大人びてなかったって」

でもね、と誰にも聞こえないように小声で、

「あの子ども、昔はこうだったのよね」

誰に話しかけるでもない、ちらと矢高さんに目をやりつぶやいたのみ。

——いろいろあるんだろうな。

何も考えず微笑みでごまかしていた。視線を母の居場所に向けると、後から入ってきた男性グループのテーブルに腰掛け、やはり熱く会話を続けている様子だった。幸い、矢高さんと道連れでえらい目に遭うことはなさそうで、一安心した。

二時間、食べ続けてあっという間にお開きの時間と相成った。

「さてと、これで終わった終わった。明日からはまた修羅場が待っているというわけか」

矢高さんとふたり、荷物を抱えて女性陣たちが先に退席するのを入り口付近で眺めていた。もちろん挨拶はする。やたらとみな、口々に本日の感想を語っていくのでなかなか先に列が進まず。まだまだ帰ることができそうにない。もっとも宿は歩いてすぐだし、迷わなければなんとかかゆくり過ごせるはずだ。

「上総くん、君夫くん、本当に助けてくれてありがとう。助かったわよ」

志遠流の先生たちも今夜はこのホテルに泊まるらしく、ゆくり歩を進めながら上総たちを労ってくれた。母も一緒かと思いきや、まだ男性チームと語らっているらしい。

「沙名子さんもどうしたのかしら。今夜はさすがに帰るわよね。二次会はないわよね」

「さすがに今夜はもう十時過ぎだし遅いから」

他の先生たちが心配そうに奥を眺めやる。特に会計を行う必要はないらしく、店の従業員たちも静かに整列して見送ってくれている。

「そろそろ出ないと次のお客さんが入って来れなくなるし、ねえ、君夫、沙名子さんと呼んできてもらえる？」

会主の先生が矢高さんに声をかけた。ずっと気になって仕方ない風に何度も爪先立ちして母の様子を伺っている。

「わかった、じゃあ上総くんも」

肩をつつかれ、言われたとおり矢高さんに従った。やはりここは息子たる自分が着いていかないとまずいような気がした。用事があるのは分かっているが、まだ話し合いする必要あるのならとあえずここを出たほうがいいに決まっているのだから。

——仕事関係の人なのかな。雰囲気違うよ。

矢高さんが母に近づき、

「あの、出口でお待ちしてましたが」

と声をかけると、

「そうそう、そうなの。申し訳ないのですがまた、別の機会にゆくりとお話させていただけるとうれしいですわ」

父の前では見せたことのないような、どこかのお姫さま雰囲気を漂わせて挨拶をしてのけた。グレイのスーツに襟のないシンプルなブラウスをまとった母は、この場にいた女性たちの中でもきわめて地味に見えた。確か劇場入りした時には和服だったが、なおらいのため着替えたのだろう。目の前にいる男性三人はおそらくかなりの年配という印象あり。なかなか話が終わらなかったらしい。

「いえいえ、こちらこそ。時辻さんのようなお美しい方と今夜は実のある対話ができ、僕も実に嬉しい。このご縁を大切に、またよろしく願いいたしますよ」

「こちらこそ、光栄です」

母はちらと上総に目を留めた。露骨にいやな予感がした。矢高さんの後ろに隠れようとしたが無駄だった。つかつか近づいてきて、上総の手首を無理やり取った。力づくで引き寄せた。人前だから当然、反抗できやしない。

「ちょうどよいところでしたので。先ほどお話いたしました、この子が上総です。ご心配おかけしましたが、無事に今年青潟の高校に入りました」

——なんだよいきなり、挨拶する間もないののになんでだよ。

ここですべきことが、「初めまして」の一言だけであることは承知している。

ただ「立村」の苗字を名乗っていいかは判断できなかった。

上総は黙って三名の紳士たちに一礼し、静かに様子を伺った。

「そうか、あの時おなかにいたお子さんがこんなに大きくなったとはなあ」

三人ともほのぼのした表情で上総を見つめやり、手を差し出した。握手を求められているのか、よくわからない。ためらっていると、

「上総、ほら」

促す母の小声あり。恐る恐る両手で受け止めてみる。くすりと笑われた。

「なんなの上総、選挙活動みたいなことして。全くこうですから、ずっと青潟の中だけで育ってきているものですから、社会の常識のようなものがまだ足りないところがあるのではと、日々はらはらしてばかりおります」

「沙名子さんもあれから十五年経てば、そりゃあ大人になるよなあ。あなたのお母さんの気持ち、これで少しはわかったんじゃないのかな」

「全くだな、ほんとになあ。しかし、こんな大きな息子さんがいらっしゃるとは存じ上げず失礼いたしました」

——さっき俺の話でもりあがってたとか言ってなかったか？ この人たち矛盾してるよ。

ばつの悪い思いで、黙って母の隣りに立つ。田舎者とでも言いたいのか。悪いが青潟と結洲を比べてみても都市としてはどっちも同じくらいのレベルだと思う。

「それでは、私もこれから母親の仕事をするため、ここで失礼いたします。せっかくお話が盛り上がってきたところですので残念でありませんが、ぜひまたお仕事のことでも連絡させていただければと存じます」

「こちらからまた連絡しますよ。沙名子さん、またぜひに」

繰り返しの多い挨拶が終わり、上総も再度丁寧に頭を下げ、そそくさと母に従って出口に急いだ。母がまた遅れているようなので後ろを振り返ると、三人の紳士たちに付き添ってまだ語り合っている様子だった。いつのまにか矢高さんが脱出しているのに気づかなかった。

また果てしない挨拶の続きがホテルのタクシー乗り場まで続き、ようやく三人で「いぶき亭」に戻ったのは十時半を過ぎていた。また明日、今度は会主の先生……矢高さんのお母さん……と志遠流の先生たちと一緒に昼食をいただいた後別の仕事のため現場に直接出かけるとのことだ

った。当然、上総は入らない。昼過ぎの汽車でひとり帰ることになる。

「ということは、四時前には家に戻れるかしらね」

「たぶん。十二時ちょうどの汽車だから。三時過ぎに着いてそこから品山に戻るし」

「寄り道するんじゃないわよ。あんた、疲れてるんだから早く帰って寝なさいよ。そろそろ夏休みも終わるんだから体調調整しておかないといけないんだから」

「大丈夫。言っただろ、宿題とっくに終わってるって」

さっきの三人紳士が何を目的で母と語っていたのか、聞いてみたい気が正直する。年配の三人組だしそれぞれ家族もありそうだ。妙な勘ぐりをするつもりはない。ただ、母のおなかにいる頃から知っているということだと、いろいろ上総には想像のつかない事情がありそうだった。

矢高さんは母の荷物……着替えた和服、および大量のお弁当と蒔物をすべてひとかかえにして運んでいる。軽々と、さほど苦勞でもなさそうにだった。上総もそれなりに両手がふさがっているので手伝うことができない。申し訳ないことである。

「君夫くん、青柳さんたちもよくいらっしゃるの？」

「はい、母の会にはいつもいらっしゃいます。お世話になりっぱなしです」

「そうなの。いつかお会いできると思っていたけれど、今日とは思わなかったわ」

しみじみとつぶやく母。後姿のみ。ようやく「いぶき亭」にたどり着き、すぐに仲居さんたちがその荷物を運んでくれた。廊下をゆっくり歩きながら、髪の毛だけ和服用に結い上げた頭を振りながら、

「でもよかったわ。上総を見せることが出来たし」

「見せるってなんだよ」

母の部屋にすぐ入り、襖を閉めてすぐに尋ねた。矢高さんが先に男子部屋に戻ったのもタイミングよしということ、すぐに問い詰めた。

「挨拶が下手だったのはあやまるけどいきなりひっぱり出すなよな」

「あの人たちは若い子のやんちゃんには慣れているから平気よ」

答えになっていない返事をし、母はすでに用意されている布団の脇にバックをおいた。

「あの方はね、青柳さんと言って、私が昔大変お世話になった方なの。あんたが生まれるはるか前からね。当然、あんたのこともおなかにいる頃から知っているわよ。さぞ驚いたでしょうね。十五年も経っててこんな大きな息子がいるなんて」

「踊りの関係？」

「それもあるわね。上総、悪いけど麦茶ポットからついでちょうだいな」

話を無理やり終わらせるような言い方で母は上総に指示を出した。と同時に襖越しに、

「恐れ入ります、よろしければシャーベットお持ちしますがいかがいたしましょう」

担当してくれている仲居さんのやさしい声が邪魔をした。

「ちょうどよかったわ。ぜひお願い。ねえ上総、あんたも食べるでしょ。ちょうど喉もからっからだし。もう疲れたからあんたたちは自分たちの部屋に持ってきてもらいなさい」

体よく追っ払う口実として、さらに襖の向こうへ呼びかけた。

「お願いします。それと息子たちの分ですが、隣の部屋にもよろしくお願いします」

「かしこまりました」

——あんまりつまらないほうよさそうか。

おやすみの挨拶もそこそこに上総はすぐ退散した。廊下で背を向けている仲居さんに呼びかけ

、

「すみません、お風呂に入ってからでいいですか。三十分くらいあとでいいです」

一言頼んでおいた。まずは一風呂浴びてからにしたかった。

まさに「泥のように眠った」としか言いようのない一夜が明けた。

——あれ、にわとりが鳴いた？

目覚めたのはかすかに聞こえる鶏の鳴き声か。まだ隣で矢高さんが布団を半分肩からはがした格好で熟睡している。窓辺の障子ごしに透けている日の光はまだ朝焼けでだいたい色が濃い。

——夕焼けと変わらないよな。

上総は目をこすりながら起き上がった。かなり身体に疲れが残っているかと思ったけれども思ったよりそうではない。むしろ気持ちよく眠れたせいか、早く布団から飛び出したいくてならない。こんなところでなんだが、

——関崎も同じ気持ちだったのかな。

ちらとそんなことを思いつつ、テーブルにおいてある麦茶の残りをポットから汲んで飲んだ。だいぶぬるいけれどもまだ飲める程度の冷たさではある。

ハンガーにかけたままのスーツをたたまねばならないことを思い出した。

——そういえばまだ荷造り終わってなかったんだ。

荷造り、と言えるほど荷物が多いわけではないけれど、やはり想像以上に服は消耗品だった。何度も風呂に入るとは思っていなかったこともあって、下着類もそれほどつめてこなかったのだがたぶん母がこっそり何かしてくれたのだろう。間に合った。

——もう少し明るくなったら、食事前にシャワーだけでも浴びようか。

さすがに朝五時前だとちょっと気が引ける。上総は浴衣のまま、窓辺の景色を眺めることにした。障子の向こう、腰掛けてくつろげる椅子が向かい合わせに用意されている。麦茶をもう一杯汲んで少しずつ飲み干した。ついでにかばんから手帳を取り出し、メモをじっくり眺めた。

——十二時台の汽車だとまだ午前中のうちにお土産買う余裕はあるよな。

本当は着いたらさっさと買い置きしておくつもりだったのだが、予想外の出来事がてんこ盛りにつき結局気がつけばこんな朝になってしまったというわけだ。

旅行に行くことを伝えている友だちだけに絞ってはいるが、それでもかなりいる。

たとえば羽飛貴史、清坂美里、このふたりははずせない。となると古川こずえも含まれるだろう。本条先輩には言うもがな当然のことだし、霧島に忘れようものならねちねち嫌味を言われ続けるのは目に見えている。元評議男子三羽鳥もそうだし、狩野先生や駒方先生にもいろいろ世話になったのでご挨拶を用意する必要がある。南雲に持っていくとなると流れで東堂にもか。

いやなによりも。

——杉本、どんなの喜ぶだろう。

意外とここは悩みどころだ。最初に名前をあげた奴らに関しては、極端な話お菓子でいいと思っている。それほど観光都市ではないのだから。ただ杉本だけには食べ物のような消えてなくなるものを渡したくない気がどうしてもする。どうして？と聞かれても困るが、なんとなく、と答えるしかない。

去年の修学旅行でも、西月小春に相談しつつ小さな手鏡を用意して、喜んでもらえたと聞いている。もっとも「西月先輩のお見立て」と思い込んでいたからかもしれない。上総の好みで押し切ったなんてことは言えないわけだ。

妙なものの渡すときつい言葉で突っ返される可能性もある。少し考えよう。まだ時間は少しだけある。

それにしても。

——青柳さんとか言ってたけどあの人、ずいぶん母さんに張り付いてたよな。

昨夜の湯船でも、その後眠り込む直前までずっと頭の中を離れなかつた光景。

——俺の気のせいだといいたけどさ。なんかやたらとあの人、母さんになれなれしくなかつたか？ 何かの商談してたのかな。

母の説明を丸ごと信じたわけではない。かつて母が女学生だった頃を想像することは非常に難しく、自分よりひとつかふたつくらいしか違わない頃に、未来の子どもに対する教育論を暑く語っていた姿など考えるのも頭が拒否反応を起こしてしまう。その結果生まれたのがこの自分だという現実を見つめるのはさらに辛い。

ただ「昔、お世話になった方」という言い方がどこかひっかかる。

——母さん昔から、どういう関係者かってことはこっちが聞かなくても一方的にべらべらしゃべる人だよな。それがなんだろ、持って回った言い方。

めったにない母の口調のあいまいさが、まどろっこしくて何か聞き返したくても言葉にならない。どう説明すればいいのかわからない。

朝焼けが少しずつ水色を帯びたごくごく普通の夏の空に溶けていく。宿の人々が動き出す気配なのか、誰かが戸を開けてたような物音もする。決して静かではないのだが、まだ寝ていてもよさそうな程度のざわめきではある。

「上総くん、もう起きたんだ、早いね」

障子をするする開く音がする。矢高さんが頭を書きまわしながら立っていた。

「おはようございます」

「まだ五時ちょっと過ぎか。もう少し寝ててもいいのに」

「すみません、起こしてしまったようで申し訳ないです」

「いやいや、そういうわけじゃないよ。俺もうちではこのくらい早くたたき起こされていたからね。慣れてる慣れてる。君もその口かな」

「小学時代は母にそうされてました。そのくせがいまだに抜けません。学校が遠いのもあるんですけど」

「せっかくだし、今日のスケジュールでも立てようか」

向かい合わせに矢高さんも腰掛けた。上総はすぐ、ポットの中の麦茶を茶碗に入れて運んだ。すぐに差し出した。

「ありがとう、それにしてもここの麦茶、何杯飲んでも飽きないよな」

「同感です」

「飯もうまいし、夜に食ったシャーベットも絶品だったしな。シャーベットというよりありゃカキ氷に近いよな。俺たち男子組に気を遣ったのかもしれないがな」

「本当に驚きました。でもあつという間に食べてしまえました」

風呂あがりを持ってきてもらったおいしいシャーベットは、観た感じ「本当に食べられるのか？」と不安になりそうなほどガラスの器にてんこ盛りだったのだが、結局喉が渴いていたせいもあってこれも完食。なんだかひたすら食べ続けているような気がする。

「ところで、いいですか、矢高さん」

「なんだい」

ここなら声を潜めなくてもいい。上総は正面から尋ねた。

「昨日いらっしゃった、青柳さんという方なのですが、何かの日舞関係の方なんですか」

「何でそれ、知りたい？」

逆に問い返される。思わずぴくりとする。

「たいしたことじゃないんですが、昨夜母がずっとその、青柳さんとそのお連れの人たちと話しこんでいたので、また何か新しい仕事でもしようとしているのかなと気になっただけです。また仕事で忙しくなるとうちに来る回数も減るし、それだと母とまた余計な口げんかしなくてすむから気が楽かなとか、そんな感じです」

「仕事、か。そうかもな、そうだよな」

ひとりごち、矢高さんは首を振った。

「ごめん、俺はあまり知らないんだよ。母の会にはちょくちょく顔を出してくれていて、いろいろな意味で協力してくださった方だしお世話になっていることは確かだよ。時辻さんとのつながりについてはよくわからないけど、たぶんお稽古していた頃に大きな会かなにかで顔をあわせる機会が多かったんじゃないかな、その程度だよ」

「それだけなんですか」

「疑う？」

また問われる。言葉に詰まる。すぐに言い訳で穴埋め。

「そういうわけじゃないんですが、普段そういう関係者の人だったらうちの母はべらべらしゃべり続けるはずなんです。うちの父とも仕事の話で、こんなこと本当に話して委員だろうかと思うくらいしゃべってます。でも、昨日は何か聞かれたくなさそうな顔してたからなんかあったのかなとか思っただけです」

「大丈夫だよ、なんでもない。本当に安心していいよ」

矢高さんは微笑んだ。少しはだけた浴衣をそのままにして、

「ドラマみたいなことはないからね」

——ドラマみたいなこと？

さすがにそこまで想像はしていなかった。

「矢高さん、六時前にもう一度風呂に入ってもいいでしょうか」

「君も好きだね。いいよ。さっぱりしてくればいい」

本当にこれは、頭を洗ってすっきりしてこないはずい。

風呂から上がりいつ出発してもいいように着替えだけ済ませ、少しだけ横になった。二度寝はしない。朝食まで少しだらだらしたかった。

「お土産かあ、これは難しいなあ」

上総からみやげ物の相談をされて困った顔をする矢高さん。そうだろう、確かにここは観光都市ではない。

「たいしたものじゃないけど、学生同士で人気の高い飲み物で結洲限定の抹茶ジュースというものがあるけどどうかな。水に溶かして飲むタイプなんだけどね。実はこれ、ケーキやアイスに振りかけて食べるのがはやりなんだ」

「聞いている限り怪しげですね」

上総が想像しつつ答えると、

「いやそうでもないんだ。俺たち学生は金がないから水で割ってそれでおしまいなんだけどね、結構これがいける。甘すぎず少し濃い目で飲むと疲れも取れる。うちの母もいつだったかゆかたざらいの蒔物に使ってたよ」

「蒔物だったら箱に入ったりしますか」

「いや、透明の袋に入れてモールで結んでいた。そんな高くないし、ちょっとしたみやげものだったらそのあたりがいいんじゃないかな。粉末パックだから荷物にもならないしさ」

——荷物にならない、それはそうだ。

他にもどら焼きとかようかんとかおせんべいとかさまざまなお菓子の提案があったが、結局は「持つのに楽」なものが一番と言う判断となった。まだ実物を見ていないので、汽車に乗り込む前に矢高さんにどこかデパートに連れて行ってもらうことにした。

「

「それにしてもほんと、いろいろ会ったけど楽しかったなあ。俺もこんなに母の会でリラックスできたのは初めてだよ」

そろそろ母の部屋で一緒に食事をしなくてはならない。身支度を整え、髪の毛を撫で付けた後、矢高さんは上総に微笑みかけた。初対面と同じ穏やかな表情だった。

「君も知っていると思うけど、親が会主だといろいろ挨拶をしたり、気を遣ったりと結構疲れるものなんだ。母も忙しいからきついこと言うしね。こちらだって文句言いたくたって飲み込まなくてはならない。ガス抜きいつするんだって感じがするだろ」

「します、します」

おいに共感した。まだ午前中で涼しいこともあり、白いシャツの上に茶色のベストを着ることにした。袖を通しながら答えると、

「そんなわけでいつも母とは舞台の前夜から大喧嘩しまくりとかそういうことばかりだったんだ。それもあって俺としてはできれば距離を置きたかった。そんなことを話していたら、時辻さんに薦められたんだよ。せっかくだったら上総くんの面倒見る代わりにここでゆっくり過ごしたらどうかってね」

「そうでしたか。でも、俺の方がいろいろ迷惑かけてたという気がします」

「そんなことないよ」

横顔を鏡に映し、ひげの剃り跡を確認しながら、

「ほんとに男同士は楽だよ。実感した。女性グループの世界にずっと納まっていると、時々わあっと叫びたくなる時が、普通あるだろ？」

「はい、それはいつも」

「だったらなおのことだよ。手足伸ばしてゆっくり風呂にも入ることができたし、豪華な料理もご馳走してもらえたし、いいことばかりだったよ」

「こちらこそ、三日間本当にお世話になりっぱなしです」

何かを渡したい気持ちはあるのだが、いかんせん土産なんて用意しているわけがない。青潟に帰ったら何か土産の品物を父と相談して送ろうかと考えた。

「矢高さん、青潟の名物で何か食べたいものはありますか」

「え、なんだよいきなり」

「俺がひとりお世話にありっぱなしだし、せっかくなら青潟で何かおいしいもの送りたいなとか思ったんですが。希望ありますか」

「いいよそんな気を遣わなくても。上総くんはずいぶん細かいところ気を遣うなあ」

上総はベストのボタンをはめ、矢高さんの後ろ姿を眺めた。水色のシャツ一枚だ。カジュアルではあるけれども、普段着っぽくはない。

「和菓子がいいですか、それとも洋菓子がいいですか」

「いやいいよ」

何度か断っていた矢高さんだが、鏡の中に映っている表情が突如、輝いた。

「上総くん、それなら、ひとつお願いがあるんだけどね」

すぐに見慣れた静か眼差しに戻った。そのまま、

「青潟市の観光資料をまとめて手に入れてもらえないかな」

「観光資料、ですか？」

「そう。ガイドブックがほしいんじゃなくて、市役所とか観光施設とかが配っている資料とか、あるだろ？ できれば青潟近郊の、少し車で行かねばならないようなところで、民宿とか観光地とか、いろいろあるだろ。そういうところの情報がほしいんだ」

——イメージとしては、子辺とか、黄葉山とか、あの辺りのこと言ってるのかな。

矢高さんのお母さんは青潟出身のはずだ。聞けばいくらでも生の情報を教えてくれそうな気がする。それを伝えると首を振って答えた。

「違う違う。そりゃ俺も親から聞いた程度の青潟のイメージは掴んでいるよ。子どもの頃はよく行ってたからね。でも、俺が今知りたいのは、観光する街としての青潟なんだ。たとえばさ、上総くん、今回のようにゆっくり二泊三日で青潟に泊まりに行ったとする。どこかお勧めはあるかい」

少しだけ考える。思いついたことを答えてみる。

「俺が連れて行くんだったら、いいところあります」

「ほほうどこだろう」

「子辺って知ってますか？」

首をひねる矢高さんに上総は、空に地図を描いて説明した。

「青瀧から鈍行で一時間程度なんですが、男子修道院があるんです。入り口までしか入れないんですが、坂をゆっくり昇っていくとなんというか、空気がだんだん透明になっていくっていうか、理屈でなく本当に心地よくなってきます。五分から十分くらいかかってたどり着くと、牧草地や遠くの山々とか、あと修道院の建物とか、もう見てるだけでいいなって雰囲気です。それにそこで育てた牛からとった牛乳で作ったらしいソフトクリームやクッキーがまさに絶品で、お土産にはお勧めです」

「ずいぶん詳しいなあ」

「夏休み行ってきました。修道院から下りていくと、レストランとか食堂とかそういうところも結構あるし観光客もたくさんいますし、市内だと物足りないのであればそれもお勧めかなと思います」

「子辺、か」

矢高さんは小声で繰り返した。

「それなら宿もあるのかな」

「そこまでは調べてません。ごめんなさい。あとは、黄葉山というのがちょうど今の時期、きれいな山々の景色が眺められていいかもしれません。宿泊研修で行ったことがあります。近くには現代美術中心の明星美術館というところもありますし、矢高さんが美術好きならいいかもしれません」

伝えてはみたが、矢高さんはすでに「子辺の修道院」のことしか頭にない様子だった。何度も「そうか、修道院か」とつぶやいているのみだ。

「でもそれだけでいいんですか。そんなただでもらえるような資料だけで。うちの父に頼めばもう少しマニアックなものが手に入るとは思います」

「いや、いいんだ。上総くん、君にだけしか頼めないことなんだ」

振り返り、矢高さんは自分に言い聞かせるように答えた。

午後七時。母の部屋に向かい、静かに立って待つ。

「入りなさい」

襖を開けるとすでに布団はしまわれ、三人分の朝食が準備されていた。ざっと見るにご飯、焼き魚、お吸い物、サラダ、豆腐、さらにデザートフルーツポンチまで用意されている。一般的旅館の食事としてはかなりゴージャスだ。

「おはようございます」

礼儀正しく挨拶をする。奥の席を矢高さんに、自分は入り口に近い席に座る。おひつのご飯は自分が盛ることになるだろうがそれはしかたないことだ。

「本当においしそうね。さあ、温かいうちにいただきますよ」

母もメイク完璧、すっかり身支度を整えこのまま劇場に向かってもおかしくない格好でいる。今日は紺色のスーツで行くらしい。ジャケットは脱いでいるが白い半そでのブラウス姿で、真っ白い腕が光っている。

最初にお吸い物を口にする。蛸汁だった。さっぱりしておいしい。頷くと、

「あんたもこういう和食の味がわかるようになったのねえ」

そんなこと一言も口にしてないのに勝手に感慨にふける母。無視してご飯を口に運ぶ。こちらもつやつやした米粒がとろけるようだ。鮎もから揚げもナスの漬物もすべてが身体に吸い込まれていくようだった。

黙々と食事を続けていたが、ふと思い立って尋ねた。

「これからしばらくうちには来ないってことと考えていいかな」

「あら、来てほしくないの。ええそうよ。しばらくは仕事がメインになるから、あんたの面倒見られないの。ちゃんと宿題はひとりで済ませなさいよ」

「何度も言うようだけど、とっくに終わってるからご心配なく」

いつもの舌戦を繰り広げそうになったところで、矢高さんが間に入った。

「これから後片付けの処理がまだ続きますよね」

「そうなのよ、君夫くんわかるわよね。これからが本番よ。会計からお礼状から、昨日のお礼を劇場とかあとその他もろもろ頼まなくてはならないものだから、もう大変よ。それでもまあ、無事に終わったことだしそれはそれでほっとしているんだけど」

「これから上総くんを駅前案内して、それからすぐお手伝いできると思います」

「そうしてくれると助かるわ。君夫くんはこういうの慣れてるからひとりでも手伝ってくれる人がいるとね。救われたって気になるわ。うちの馬鹿息子みたいに役立たずならともかくも」

またここでけなされるわけだが、あえて食事に集中することで耐える。耐えられるだけの味わいだからそれほど苦痛ではない。

「ところで、君夫くん」

ようやくデザートに取り掛かったところで、母がふたたび矢高さんに尋ねた。

「まだ先のことだけど、来年以降はお住まいどうなさるの」

「研修期間はたぶん銀行の寮に入ることになると思います。結洲市内ですけどね。それが終わってから赴任先によっては一人暮らしすることになりそうです」

「お姉さんお寂しいでしょうに」

「いえ、大丈夫です。父もいますし、まだまだ母も若いですから」

話の内容からすると、矢高さんは大学卒業後、一人暮らしすることがほぼ確定らしい。もっともそれは独身寮というものらしいので一般的な「ひとり暮らし」とは異なるのかもしれないが。

「それに、僕も完全に親離れするいい機会ですしね。お恥ずかしい話ですが、うちでは親の手伝いらしきものは一切しないでわがまま放題して過ごしましたから。親の助け借りずに暮らすのは、正直かなり緊張します」

「親元暮らしだとどうしてもそうよね。まあうちの息子みたいなのもいるけど、さほど大人って顔してないけどねえ」

また上総の顔を覗き込む。知るか。それにしてもりんごのさくさく加減が絶妙だ。しかも時間が経っているのにちっとも赤くならない。何でだろう。矢高さんがすぐ答える。

「いえ、時辻さんにたてつくようで申し訳ないのですが、上総くんは高校一年生にしては大人び過ぎというくらい、大人の考えをしていると思います」

「そう？ ほら、上総、あんたどう思うの」

ちらっと矢高さんだけ見る。穏やかな微笑みはそのままだ。他意はなさそうだ。

「彼に会う前に時辻さんから上総くんの人となりやいろいろ聞いてましたから、おとなしい子なんだろうなとは想像してました。実際会ってみて外れてはいませんでした。それ以上に沈着冷静だし臨機応変に振舞えるし、何よりも人前できっちりと礼を保った行動が取れる高校生というのはそうそういません。いや、俺の同級生を想像してみても、上総くんほどしっかりしている奴は、思い当たりませんね」

「ずいぶん褒めてもらって光栄だけど、親としてはどうなのかしらと思わざるを得ないわね。こいつはほんと猫かぶりだから」

——失礼だな。猫かぶりというのは霧島みたいな奴のことを言うんであって。

もちろん言い返さない。イチゴもみかんも、熟れるぎりぎりの甘さがたまらない。

「ただ、学校の教育方針がかなり自由なこともあるのかもしれないわね。いい友達も多いし、こういったら何だけど、いわゆる道を踏み外した子はあまり見かけない学校なのよね」

「青大附属ですか」

さらりと答える矢高さん。上総としてここは言い返すべきか悩む場面でもある。「道を踏み外した」というのがどういう意味合いかによって、「そりゃ違う」になる。

「君夫くんもまじめだからあまり妙な友だちと付き合うことないかもしれないけれど、やはり高校生くらいになるとたちの悪い友達が増えてくること多いみたいよ。上総と同じくらいの子どもを持った人と話すけど、まあ大変。夜はディスコに繰り出すとか、止めると大バトルだとか、部屋の中が大荒れだとか」

「そういう奴も全く知り合いにいないわけじゃないですが、学校の中だけだとやはり数は少ない

ですね」

——矢高さん、今頭の中にもしかして北原さん浮かべてないか？

言えない言葉をさくらんぼと寒天と一緒に飲み込む。後に残らない甘さだ。

「まあ、青大附属という場所が純正培養のお坊ちゃまお嬢ちゃま的雰囲気のを漂わせているというのは確かにあるし、親としては楽園の中に籠っていてくれればアダムとイブのように永遠の幸せが続く、とか思ってしまうのだけど、どうかしらねえ。正直なところ君夫くん、どう思う？」

いきなり振られて戸惑っている矢高さんの顔を覗き込む。母は続ける。

「このまま楽園で仲良したちと過ごすのと、いろんな価値観を持つ人たちと接していくのと、どちらが自分自身のためになると思う？ 君夫くんなら分かると思うけど、ひとつの世界観の中だけで十代を過ごすことというのは、とても怖いと思うのよ」

「確かにそうですね。俺も大学に入るまでは運動部一筋でしたから、ずいぶん頭の中が筋肉質になりました。ただ、結洲はいわゆる雑居の大学街ですからいろいろな人たちと出会いが多かったのはありますよ。学生だけではなく、社会人のみなさんと語らって自分の人間形成が行われていたところは確かにあります。そう考えると、毒薬かもしれませんがさまざまな人たちとできるだけ早い段階で出会っておく必要はあるんじゃないかと思います」

「そうよね。結洲という街はそれができるのよね」

なんだか妙な雲行きになってきた。フルーツポンチを二杯目お代わりしながら上総は耳を傾けた。話の内容は前々から両親に言われてきたことで決して新味あることではない。ただ、矢高さんというモデルがいて、明らかに自分の生きてきた世界とは異なる人々と接してきて得たものがあるというのを見ると、やはり上総自身振り返らざるを得ない。

「上総、あんたずっと私たちの話、無視しているくせに聞いていると思うけど、どう思うの。このまま、青澗で何にも考えないでたらたら過ごしてていいと思うの？」

「こんなところでそんな話持ち出さなくたっていいだろ」

言い返す。こういうことは、自宅で話すべきことだし、第一いきなり話を振られた矢高さんが困る。

「君夫くんがいるから教えてもらえばいいじゃないの。いい、上総、あんたずっと与えられたレールの上をそのまま進んでいけばいいと思っているみたいだけど、狭い世界の中でずっと過ごしてきて、視野が狭いまま生きてて本当にいいのかって聞きたいのよ」

「狭くないよ。いろんな人たちと話、してるよ」

詳しいことは説明したくないが、特にこの夏休みは意識しなくてもいろいろな人たちと語り合っている。同級生、友だち、後輩、あまり親しくなかった友だち、さらに尊敬する先生とも。十分視野は広がりつつあるんじゃないかとも思う。

「それに、この三日間、矢高さんと過ごして、俺としてはすごく刺激受けたよ。母さんがどういう目的で紹介してくれたのかわからないけど、これだけは伝えとく。矢高さん紹介してもらえて、すごく感謝してる。それだけは嘘じゃないから」

「なんなのいきなり下手に出たわね」

笑いたいのを押さえるような表情で母は上総を見返した。矢高さんにはちらと上総なりに頭を

下げておき、言い返す。

「けどさ、母さんにそこまで、ガキ扱いされる筋合いはないと思うんだ。純正培養の学校かもしれないけれど、学校内では表沙汰にならないいろいろな問題も起きているし、誰もが裕福な家庭の生徒じゃないことも俺は知っているし。それに誰もがあっさりエレベーターに乗ることが出来るとも思ってない。最近、噂になっているしさ。青潟大学が附属高校からの推薦基準変更するかもしれないってこと」

「あんたの耳にも入ってたわけ」

ぽそとつぶやく母。驚いてないということは、やはり情報を仕入れていたということだろう。父なら「週刊アントワネット」の記事を知らないわけがないのだから知っているだろう。ということは、二人とも上総の進学問題について相談している可能性が多分にあるわけだ。もしかしたら、今回の旅も仕組まれたことなんてことはないだろうか。勢いよく頭の中がフル回転して、思わぬ結論に達しそうだ。

「そりゃ知ってるよ。英語科にいるからあっさりと英文科に優先推薦してもらえとも安易なこと、考えてないしさ。ただそれなりに先のことについては考えてるよ。どうすれば推薦してもらえるかとか、英語だけじゃなくてもっと別の勉強もしたほうがいいかなとか。そういうことは先生たちとか、友だちとかとしょっちゅう話してるよ。母さんの知ってる友達の中にもいるしさ」

一気にまくし立てた。隣りで矢高さんが真剣な顔で上総を見守っている。

「じゃあ上総、あんたに一言聞きたいんだけど」

母はフルーツポンチのさくらんぼの種を懐紙で受け止め包んだ後、

「そのために、あんたは具体的に、何してるの」

「え？」

「だから進路について、考えてるだけじゃなくて具体的に何、してるのかを聞きたいのよ」

「さっき言っただろ。いろいろな人と話してるって」

「お黙り。あんたが自分なりに情報を集めていろいろ考えていることはよくわかったわ。羽飛くんや美里ちゃんたちともきつと語り合ってるんでしょよね。でも、話しているだけじゃ何にもならないことはわかってるわよね。あんたはこれから、何をしなくてはならないか、そこまで突き詰めてるの？ どうしようどうしようと頭抱えているだけじゃなくて、たとえば数学の成績を上げようとか将来なりたい仕事についてももう少し調べてその勉強を突き詰めてみようとか。ただやってるやってるってだけでは何にもならないの。夏休みにいろいろな人と出会えて、特に君夫くんから将来に役立つ話が出来たのはよかったと思うわよ。でも、それであんたは何をしなくちゃいけないか、そこまで考えたの？」

「今、いきなり言われてもさ」

言い返そうとするも、母にきっぱり切られる。

「あんたのことだから、空想の中でああしようこうしようとはいろいろ考えているかもしれない。でもね、結局それを始めないとどうしようもないのよ。刺激を受けて、勉強しようと思った、先のことを考えようと思った、それだけじゃだめなのよ」

「わかってる。だから青潟に帰ってから考えるよ。せっかくおいしいご飯をそういう変な話でま
ずくするなよな」

とうとう堪忍袋の緒が切れた。隣りに矢高さんがいようがかまうものか。上総は手を合わせて
ご馳走様の礼をし、食べ終わった皿を重ねた。矢高さんの分も合わせた。母の分については、迷
ったが仕方なく手に取った。もうこれ以上何も話す気などない。

「あらあら、もうこれがどこ、大人びてるって言うんだか。笑っちゃうわよねえ。君夫くん、こ
れがこいつのいつものパターンなの。すぐかっとなってこうやっていじけてしまうのよね。この
癖直したいとかねがね思うんだけど、どうすればいいんでしょうねえ」

「今の話、お言葉ですが、上総くんの方が正しいと思いますよ」

笑いを浮かべつつも矢高さんは援護射撃をしてくれた。

「いきなり具体的に何をすればいいかなんて、ふつう決められませんよ。俺が上総くんの立場だ
ったらきっと同じお返事をしたと思います」

「あらあら、上総のこと本当によく買ってくれてるのね。しょうがないわ、ほら、上総、悪かつ
たわ、お母さんが言い過ぎました。ご機嫌直してちょうだいな。そうよね、せっかくこんなおい
しい朝ごはんをいただいたのにねえ」

——知るかよ。勝手にすればいいんだ。

矢高さんにだけ小さく頭を下げ、上総は背を向けたまま食器を片付け続けた。

本当に忙しいらしく母は食事後すぐに荷物をまとめて宿を後にした。

「十時チェックアウトだから、まだ時間があるわ。あなたたちは少しゆっくりしてらっしゃい。駅前の店は十時過ぎないと開かないからちょうどいいんじゃないかしら」

そのつもりだったので、上総も頷いて見送った。朝食時の説教対決がまだ尾を引いているが、どうせしばらくは顔を合わせなくてすむ。どうせすぐ忘れているだろう。

「君夫くん、では午後よろしくね」

「はい、駅に上総くんをきちんと送り届けてきます。ご安心ください」

微笑を絶やさずに矢高さんが答える。七歳も離れているわけだししょうがないとはわかっているのだが、やはり子ども扱いされるのが堪える。

仲居さんたちも笑顔で母を見送った後、上総たちに向かって、

「よろしければまだ時間もありますし、ゆっくりなさってはいかがですか？ よろしければお茶をお持ちしますよ」

また、丁寧なおもてなしを受ける羽目になる。まだ朝八時半を回るか回らないか。

「十時少し前に出ようか」

「はい」

そのつもりだった。母に割り込まれないですむのなら、もう一泊したいくらいだ。

荷物もまとめ終わり、冷たい麦茶と一緒に用意されたふわふわした落雁を口にする。

「なんかなあ、口がばさつくよなあ」

「いえ、でも、あつという間に溶けますよ」

よくお盆時期に見かける食紅色の落雁よりも、はるかにあっさりしていて気がつくときの中ですりつぶれている。その後でお茶を飲むとほんのりした甘さが広がる。

「いかにもこれ、お茶の席で出そうですね」

「上総くんは茶道もたしなんでいるの」

「学校の授業に入ってます。もっとも、目的は菓子の奪い合いですが」

笑いながら矢高さんは落雁の載った自分分の皿を上総の方に押ししてきた。

「僕にはお上品すぎて口に合わなかった。上総くん、全部食べていいよ」

「いいんですか。遠慮なくいただきます」

なんだかひたすら意地汚く食べ続けているような気がするが、余計なことは考えないことにした。十五歳は育ち盛りなのだからしょうがない。そう言い訳だ。

「それにしても、青潟と比べて結洲はどうだった？」

「どうだったと言われると少し困ります」

小声で返事をする。もうひとつさいころ型の落雁をいただく。

「なんとなく青潟と似ているところもあるし、でも大学の賑わいとか見るとやはり違うなとか思うし。いろいろです」

それに、と続ける。

「今朝、母が話していた通り大学生の人たちが想像以上に多い街なんだということはすごく感じました。ここに来る前、両親が話していました。青潟には高校生ばかりで大学生が少ないけれども、結洲はその反対だって。ぴんとこなかったけど実際観てよくわかりました」

「なるほどな、時辻さんそんなこと言ってたか」

お茶だけはがぶ飲みする矢高さん。蝉が鳴き始めた。けたたましい。

「思えば俺も高校時代はくそまじめな三年間だったからな。公立高校で受験を控えていたというのもあるけれども、実際自由を堪能したのは大学時代からだしな。青潟はその反対だろ？」

よくわからない。上総は大学生の経験がないから想像がつかない。感じているのは大学生のほうが全く勉強しないのはなぜなのかと言う疑問だけだ。

「たぶん、俺のいる環境が母の言う通り温室の楽園というのは当たっていると思います」

上総は懐紙をたたんでテーブルに置いた。矢高さんに語りかけてみた。聞いてくれている。

「中学に運良く受かって、落ちこぼれてはいますけどいい友だちもたくさんいるし、中にはむかつく教師もいますけど尊敬できる先生もいます。たぶんこのまま普通に過ごせれば推薦もらって英文科に進学できるかなくらいは期待しています。でも」

思わず言葉がこぼれる。慌ててお茶を飲む。冷えた麦茶が濃くておいしい。

「たまに考えます。俺は、本当にここにいてよかったのかなって」

軽く話したつもりだった。矢高さんが戸惑った風に「ここにいて？」と問い返す。

「はい、俺の成績だと本当は青大附属に受からなかったんじゃないかっていつも感じます。もともとうちのクラスが賢い連中多かったというのもあるんですけど、数学や理科でいつもついていけなくて、でもみんないい奴だからいじめるなんてことはしないし助けてくれたりするけど、でも、時々なんだかなって思います」

「なんだかな？って、上総くん、面白いこというね」

もう止まらない。言葉がとろけてしまう。

「しつこいようですが、俺は青大附属に不満はありません。多少、学校側の一部生徒たちに対する仕打ちに腹立てたりはしますが、少なくとも俺に対しては何もありません。ただ、俺が受験した年は少し特殊な合格基準を設けていたらしく、どう考えても算数で点数を稼げたと思えないのに合格できたってことは、やはり何かあるんじゃないかとは思っていました。実際、算数から数学に進学しても着いていけてません」

「でも、高校には進学したわけだろ」

「はい。でもそれは、俺の運がよかっただけだと思います。ほんとにたまたまです。俺の友だちでひとり、成績がどの教科もずば抜けて優れているという奴がいますがそいつは学校や友だちとうまくいなくて、附属高校進学を断れてしまいました。不良でもなんでもなし、警察のお世話になったわけでもないのにです」

「学校側もずいぶんもったいないことするなあ。成績のよい生徒は学校の宝のはずなのに」

「いったいどういう基準で青大附属の推薦基準が定められているのかわかりません。ただ明らかに進学してもいい生徒がはじかれて、俺みたいな鳥頭な奴が生き延びている環境ってやっぱりお

かしい、そういう気はします」

「上総くん、自分を卑下しすぎだよ」

首を振った。どうしても言っておきたい。誰か、自分以外の誰かに断言したい。

「本当にそうなんですよ。俺は、あんなとこいちゃいけない。青大附属になんている権利なんてない、絶対に」

もし他の同級生連中がいたら、本条先輩がいたら、狩野先生がいたら、全力で拒否してくれるのはわかっている。でも、ずっと前から心の奥底で湧いていた気持ちがあふれ出てしまうのを押さえることがどうしてもできない。泣きたいわけじゃない。ただ、聞いてほしいだけだった。矢高さんなら余計なこと言わずに、ただ黙って流してくれるだろう。ほんの数日一緒に泊まっただけの相手だ。すぐ忘れてくれるだろう。あとくされのない相手だからこそ。

「あ、上総くん、安心してくれ。今君が話したこと、時辻さんには言わないよ」

——あとくされ、ありまくりじゃないか……。

一瞬のうちに自分の激情を後悔しいた上総に、矢高さんは頷きながら答えた。

「自分に合う場所かどうかなんて、他と比較しないとわからないものだよ。まずはいろんなものを見て、いろいろな人と話をして、それからでも遅くはないんじゃないかな。それにね」

煙草をポケットから取り出した。

「外で一服してくるよ。真夜中に耐えられなくて吸ってきたんだけどね、そろそろニコチンが切れてきたようだ」

何かを伝えたかったようだが、結局煙草の力に負けたらしい。矢高さんはすすと襖を開けて出て行ってしまった。

「いぶき亭」を出たのが九時半過ぎで、気持ちよく宿の人々に見送られた。

「君は渋いものが好きだね」

上総の手元を、よくわからないといった顔で矢高さんが見やる。

「結局、あの落雁を買ったんだな」

「はい、友だちでこういうのが好きそうな人がいるので」

宿の売店に同じものが小箱で販売されていた。値段もそう張らない。三百円でお釣りがくる。よく聞くと宿のオリジナルらしい。

「その友だちも相当変わった奴だな。喜ぶのか不安にならないか」

「たぶん、受け取ってもらえると思います」

それ以上説明せず、上総はいったん旅行かばんを置いて、隙間に押し込んだ。まだお土産など何も買っていないので、見た目よりもすかすかだ。

「十二時にはだいぶ間があるし、さっさとみやげ物の準備ができれば、どこかで早いけど最後のランチにしようか。駅前ならいろいろいいところあるよ」

「ありがとうございます」

歩いて駅まで向かうことにした。矢高さんの通っている大学を通り過ぎ、賑わいある商店街も足早にすり抜けた。ちょうどデパートも開店したばかりでそれほど客入りもよくなかった。冷やかすには販売員たちの目がかなり厳しそうで入るのもためられた。それに買いたいものもさほどない。

「矢高さん、今朝話していた例のお茶はどの辺で扱っているんですか」

お茶なら誰でも飲めるしかさばらない。粉末のお茶で水に溶かして飲むもよし、もしくはそのままご飯に振り掛けるもよし。とりあえずはたくさん買って置いて、状況に合わせて配ろうと思っていた。味見しないのだけは気がかりだがしかたない。たぶんあまるだろう。

「それならスーパーでいくらでも売ってるよ。ちゃんと袋詰めもされているしね」

デパートではなく大型スーパーに向かい、食料品売り場でまとめ買いをしたらあっという間にみやげ物も片付いた。まだ十時半にもならない。時間余りすぎだ。

「俺も本を買いたいから、少しだけ待っててもらえるかな。生協で扱ってない雑誌を見つけたんで、忘れないうちに買っておきたいんだ」

「わかりました。俺も少し見て回ってます」

待ち合わせを十五分後エスカレーター前に定め、矢高さんはスーパー二階の書店へと駆け上がっていった。上総も立ち読みしたい気持ちはあるのだけれども、時間を忘れてしまいそうな予感があったのであえて控えた。どうせ食料品売り場を眺めているだけでも面白い。広い店内をぐるぐる回ってみた。

——何か展示会でもやってるのかな。

いかにもどこかの店が閉店して空き地状態となっているような白い空間に手芸品がたくさん並

んでいた。雰囲気としては学校の文化祭、家庭科教室の飾りつけのような感覚。白い布で覆われたテーブルの上にはフランス刺繍のクッション、クロスステッチ、フェルトのマスコット人形、その他民芸品っぽいバックなど多々さまざま。見ている人たちもかなり多い。女性がほとんどだが買い物の途中といったよりも、わざわざ立ち寄った風のきっちりしたファッションの年配女性がほとんどだった。

入り口のプリントを手取る勇気がなく、そおっと遠くから覗き込んで見る。

——こういう細かいことできる人ってすごいよな。

手芸イコール規律委員会の主活動と変換されてしまう自分の凝り固まった価値観に笑えてくる。いつも規律委員の女子たちが暇さえあると作っていた姿を何度も目にしていた。さらに言うなら評議委員会の「ビデオ演劇」においてもそれぞれの衣装を完成させてくれたのは規律の女子たちだった。

上総を不気味そうな目で見つめてきたのは、数少ない若い女性だった。全く男性がいないわけではないのだが、大抵はお連れ様扱いされている。上総くらいの年齢は全くいないと言っていい。もしくは、就学前の子どもたちか。

手先の器用な人、もしくは綿密な作業が得意な人、単純に尊敬するだけで終わってしまう上総としては、あまり興味を持つことのない場所だったはずなのだが、たまたま出口あたりに鎮座ましていた、とあるふたつの目に呼び止められた。

——え、あれなんだろう。

つい引き寄せられた。たまたまそこには人がいなかった。

白い粘土で形作られた女性の姿。その上に伸び縮みするような紙をふんだんに使い、フラメンコのような衣装をまとわせている。紫色と白をあしらったドレスは見た感じ、やせたフランス人形のイメージに近かった。ただフランス人形の場合はスカートの下がペチコートと呼ばれるもので膨らまされているため、今の時代の人間とは思えないものがある。今、目の前においてある三十センチ大の人形は、髪の毛こそないけれども両手を伸ばす格好で何かの踊りを舞っている。

——フラメンコかな。それとも、何か別のものかな。石像に見せているみたいだな。

まじまじと眺めて見る。なんでこんなに興味を惹かれるのか自分でもわからない。ただ、こういう感じの人形を見て、もし隣りに杉本梨南がいたらどういう感想を持っただろうかと、それだけ感じた。

「この子がお気に召しましたか」

後ろからいきなり声をかけられた。振り返ると気品のある年配の女性が穏やかに上総を見て微笑んでいた。一緒にいる男性はおそらくその人のご主人に当たる方だろう。知らず知らず顔が赤らむのを覚える。逃げ場がない。

「あの、いえ、たまたま」

「この子はですね、かなり手間がかかりましたよ」

聞いてもいないのに、老婦人が語り始めた。付き添いの男性も頷いている。仲よさそうなお夫

婦ということだけはなんとなくわかった。

「まず、少し小ぶりの瓶を見つけるのが本当に大変でした。作る前に土台となる瓶を用意して、そこに粘土で肉付けしていくのですが、この子のようにほっそりした身体つきに似合ったものが見つからなかったのです」

「土台？」

問い返すと老婦人は力強く頷き、いとおしそうにその人形を見つめた。

「たまたま旅行先で老舗の酒造見学をさせていただき、そのお土産にちょうどいい丈のお試し品を頂戴しました。お酒は大変おいしかったこともありましてすぐにいただき、中を乾かしてからすぐに拵えをしまりましたの」

「あの、これ、フラメンコですか」

一番気になっていたことを尋ねた。

「みなさん最初はそうおっしゃいます。でもね、違うんですよ」

いたずらっぽく笑みを浮かべながら老婦人はご主人と頷きつつ、

「去年の夏でしたか、素敵な踊り手さんを見かけましてね。そのお嬢さんをイメージしてこの衣装にしたんですよ。この前のお祭りで一等賞を取った、『結洲群舞』チームの中で一番お上手な方。お若い方でしたけれども」

「『結洲群舞』ですか」

矢高さん以外からは聞いていない。上総も観たことはあるけれども感動のイメージは残っていない。強烈な北原さんのへそ出しファッションのみ。

「そうそう、そうなのよ。私の感性ではあのお嬢さんの踊りをそのまま再現することはできませんでしたが、その雰囲気だけでも少しは残せているのではと置いていたところなんです。衣装も、ペーパーフラワーで使うクレープ紙を使いましたので、適度にふわふわした雰囲気もかもし出せたかしらと、思いました」

しゃべり続ける老婦人。上総は時計を覗き込んだ。年上の女性たちと接するのは慣れていないこともないが、いかんせん今は矢高さんと待ち合わせだ。すぐに結洲を出発しなくてはならない。話を打ち切る言い訳はできる。

「すみません、なんか友だちがこういうの好きそうかなと思って、拝見させていただきました。きっと僕よりもこの人形みたらその友だちの方が感動すると思います。これから、汽車に乗るのでまた、機会がありましたら」

ここまで言い切って上総が背を向けようとする、いきなり男性が呼び止めた。

「お友だちに見せていただけますか」

「いや、あの、でも、うちは青濁なので」

「それは遠いですね。ではせっかくですので少々お待ちください」

鷹揚に今度は老紳士……だいたい七十は超えてると思われる……がかばんから大きめのカメラを取り出した。いわゆる「インスタントカメラ」と呼ばれるものだ。上総の知り合いに持っている奴はいない。老紳士がそのカメラを持ちかがみこみ、方向をそれぞれ変えて二枚、派手な音をさせて撮った。すぐにほぼ真四角に近い黒い写真が切り出されてきた。すぐにそれを上総に渡

した。

「あの、これは」

「せっかくよいご縁をいただいたのですから、そのお友だちに見せてあげてください。きっと、この子も喜ぶことでしょう」

「でも、そんなもったいない」

「少し待っていただければ、すぐ画像が映し出されますよ。この子を見てくれて、本当にありがとうございます。感謝します」

最後に握手を求められ、上総は遠慮がちにその手を握った。

「こちらこそ恐れ入ります。きっと、その友だち、喜ぶと思います」

——あとで杉本に、この話しながら、渡してやろう。

「ずいぶん遅かったなあ。さあ、行こうか」

矢高さんはやはり上総を待ちわびていた。紙袋を抱えていたところみると、そうとう買い物したようだ。上総は手元の写真をそっと手帳の隙間に押し込んだ。写真の黒い部分はいつのまにか鮮やかな紫色に浮かび上がっていた。

矢高さんが以前交際希望の女性をふるいにかけるため利用したというラーメン屋に立ち寄り、あっさりと食事を済ませた。しょうゆ味のだしが濃い目だったが重たくない。汁まですべて飲み干した。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

「だろう？ やはりこの味はわかるよなあ」

こぎれいな食堂の雰囲気、長居はできそうにない。十一時半過ぎでそろそろ人も混みそうだった。最後まで矢高さんが支払ってくれた。

「そろそろ駅に行こうか。十二時出発だと、十分前には改札終わらせておかないとね」

「はい。本当にこの三日間お世話になりました。ありがとうございます」

「だがまだ少し間があるな、ちょっと失礼」

駅の前で矢高さんは喫煙者が集まっている角にすすと走っていき、ポケットから煙草を取り出した。ライターで火を点け、ほっとした表情で煙を吐く。

——相当煙草がまんしてたんだな。

遠目で眺めつつ、上総は少し雲り加減の空を見上げた。建物も通日も、オーケストラのような車音を立てる路面電車も、目には慣れてきたけれどもまだまだ未知のままだった。

——青潟とそんなに違うって感じもしないけれど、でも、やっぱり違うのかな。

高校生以下の生徒が少ない代わりに、大学生がたむろう街。確かにそうかもしれない。最初に連れて行かれた「結洲茶房」のようなたばこの煙漂う独特の場所もあれば、いきなり群舞でもってさしの勝負をかけようとする奴らもいる。同時に、なぜか仁義を切って夜の街で大喧嘩する塾の生徒たちといった想像を絶する展開もあるという。

——青潟とは違う。というよりも、俺が知らないだけなのかな。

ほんの少し覗き込んだだけで決め付けるのも怖い。

「お待たせ。上総くん、お土産はこれでいいのかな」

「はい。十分です」

煙草の匂いを身にまとい矢高さんが戻ってきた。そのまままっすぐ駅に向かう。だいたい二十分前。すでに駅の改札口には人がたかっている。早すぎることもなさそうだった。遅れるよりはまし。上総は矢高さんに向かい、深くお辞儀をした。

「矢高さん、本当に、何から何までお世話になりました」

「そんなに最敬礼しなくたっていいよ。僕も楽しかったよ」

「いえ、でも」

やさしく微笑みを浮かべつつ矢高さんは首を小さく振った。

「時辻さんの仕事とは関係なく、また結洲に遊びに来ればいいよ。来年ともなると俺も今回のように案内はしてあげられないかもしれないけれど、飯くらいはご馳走したいしさ」

「あの、ではぜひ、青潟にもいらしてください。俺もそれなりに案内できる場所は知ってます

から」

「ありがとう。いつかお世話になるよ」

思い出したように念を押した。

「青潟の観光資料、頼んだよ」

「もちろん用意します」

頷いた。上総はもう一度会釈をした後、改札口に向かい歩き出した。チケットはなくしていない。ちゃんと指定席だ。席についたら酔い止めを飲んでさっさと寝てしまおう。どうせ青潟が終点だ。乗りすごしなど考えなくてもいい。

振り返ると、もう矢高さんの姿は見えなかった。見送っていないのではなく、客が多すぎて埋もれてしまっただけと思うことにした。

窓際の席に着き、急いで薬を飲み込んだ。曇り空が遠ざかり、景色の山々が増えてくるころになると窓辺には水滴が張り付き出す。隣の席の女性が寒そうにカーディガンを羽織っている。上総はまだ半そででも十分暑いくらいなのだが。ペットボトルのお茶を口に含みさっぱりさせてから、上総は目を閉じた。さすがに、そこから先は記憶がない。

——三時過ぎには青潟到着だろうな。それから、乗り換えて、それから。

気がつけばやはりあつという間だった。隣の席にいたはずの若い女性はすでに降りたらしく空席となっていた。気がつかなかった。目をこすりながら外を見やると、見慣れた青潟の景色がするすると展開されていく。

——あれ、さっき雨降ってたはずなのにな。天気がいい。こんなに天気って違うものなのかな。

全く夏の衰える気配のない太陽が窓辺を刺す。目を閉じているのもなかなかきつい。上総はもう一度お茶を飲んだ。宿で出してもらえた味わい豊かな麦茶と比べると、下がマイナスサインを出している。口が奢ってしまったのかもしれない。まあ、高校生が普通立ち寄れるような場所ではないのに、母の顔で二日も泊まらせてもらったのだ。分不相応ということは承知している。

これからまたいつもの日常が待っている。明日、あさってで夏休みも終わる。また学校に顔を出して内部入学者と外部三人組との不毛なバトルを仲裁しなくてはならないのが頭痛いところだ。さらに言うなら関崎がやたらと燃えていた合唱コンクールもなんだか嫌な予感がする。いやいや、何よりも関崎と美里の駆け引きはどうなるのだろう。羽飛はちゃんと自分の仕事をするのだろうか。他人のことばかり考えてしまう。

——俺も、二学期始まったら野々村先生と個人面談なんだよな。どうなるんだろ、いったい。またいろいろ聞かれるのかな。まあいいか。あの先生狩野先生と先輩後輩だと言ってたし隠してもばれるだろ。

ふと思い出して土産のお茶が何袋入っているかを確認したくなった。多めに買ったつもりだけど、やはり一対一である以上野々村先生にも渡さなくてはいけないような気がしてきた。

青潟に到着してからすぐ、品山行きの鈍行に乗り換えた。ちっとも涼しくない。上総が帰って

くるのを待ち受けたようにがんと暑く照り付けてくる。車内の冷房もあまり期待ができない。まだ酔い止めの眠気が残っているのか、身体を動かすのも重たかった。自転車を置いてきたのはこの荷物ゆえしかたないのだが、やはり歩くのはしんどい。結局到着したのは夕方四時少し前だった。

三日ぶりの我が家。車は車庫にない。当然父は仕事だろう。汗だくだくのまま靴を脱ぎ、荷物を部屋に押し込んだ。まずはベッドに転がるためペットボトルの残りを飲み干し、ふと机に目を留めた。一枚、紙がおいてある。父の筆跡だ。

——青大附中の駒方先生より連絡あり。夕方六時以降に以下の番号へ折り返し連絡を希望とのこと。

——青大附中の霧島君より連絡あり。後日かけ直すとのこと。帰宅日は伝言済み。

——青大附中の杉本さんより連絡あり。後日かけ直すとのこと。折り返し連絡は不要との強い希望あり。

それぞれ、最初に日付とかかかってきた時刻も残っている。

——しまった！ 家に電話一度もしなかった！！

額を思い切りひっぱたく。そうなのだ。本当は上総も、旅行中一度は家に電話をかけて誰かから連絡がなかったかどうかを確認するつもりでいたのだ。親しい友だちには旅行計画を伝えてはいたが、駒方先生には話していなかったし杉本にも具体的な日取りは伝えていなかった。霧島がしつこく掛けまくるのはすでに習慣なので気にはしないが、それでも三日間留守にするのだから、そのくらいは考えておくべきだった。

「杉本から連絡してきたのかよ、ほんとに」

思わず口からこぼれた。まさかその電話を父が取ったのか。父と話して「強い口調」で折り返し不要と伝えたのか。その口調とは、上総がいつも目の前で聞いているあのまっすぐな言い方なのか。思い出したくもないが、そういえば父は中学の卒業式に父母席であの英語答辞を聴いていたはずだ。

——杉本、ったら気づくよな、絶対。

心臓が溢れんばかりに騒いでいる。上総は紙をひっくり返してそのまま机につっぷした。頼むから、鈍感でいてほしい。余計な記者魂など自分の息子のために反応させないでほしい。ただの伝言、それだけでいい。いいんだ、本当に。

夏休みあと二日で終わる。朝の雨はどしゃぶりだった。

——なんでよりによってこんな天気なんだろう。

結洲旅行中は車窓の窓辺に水滴がついた程度だった。青潟から品山に着いた際もまだ気温は高く天気の崩れる気配なんて全く感じなかった。なのになんだろう。たたきつけるような雨音でいやおうなしに目が覚めた。まだ薄暗い。四時を回ったところだ。

上総は窓を半分閉め、カーテンの隙間から外をのぞいた。屋根が打ち抜かれそうな雨音が天から地から響いている。

——昼前には止むのかな。

どうかやんでほしい。これから青潟に出かける身としては。

上総は布団にもぐりこんだ。目だけ覚めたとはいえ、まだ身体がかなり疲れている。横になって癒したい。その前に喉がからからだ。麦茶一杯飲もう。

台所に向かい、夜沸かして冷蔵庫に冷やした麦茶ポットを取り出す。

ちょうどよい具合に冷えている。口にする。結洲の旅館で出されたものにはかなわないけども冷え方で相殺できる。おいしい。一気に飲み干した。グラスでもう一杯おかわりしようと汲みかけた時、誰かの足音が聞こえた。誰なんてすぐわかる。父しかいない。

「お前早いな」

「喉渴いたんだ」

短く答え、父にポットを指差して尋ねると、

「悪いな、ちょうどいいところだった」

半そでパジャマ姿の父は、すぐ受け取ってこくこく飲んでいる。

「今日も仕事なんだね」

「その通り。徹夜明けともいうな」

父は首を何度か回して無理やり目を覚まそうとしている。

「まだ無理してもなんとかなるがな。やはりだんだん歳を取るよ」

「早いかもしれないけど何か食べようか」

父を気遣う台詞に聞こえるが何のことはない、上総も目覚めてから猛烈に腹がすいていたに過ぎない。タイミングよく男ふたりで朝食を平らげられればそれでいい。どうせ作るたってせいぜいトーストかコーンフレークに、生野菜プラスドレッシングで終わりなのだ。楽である。

「そうだな。上総、悪いが珈琲もあるか」

「沸かすよ」

引き戻された日常の朝、いつものようにコーヒーカップを用意しいつでも注げるように準備する。コーンフレークの入った缶を取り出して二人分の皿に盛りわけ、干しぶどうを一掴み混ぜる。これだけでいい。あとは適当に冷蔵庫のトマトを盛り付けて終わりにしよう。準備を進めているうちに、眠気も飛んだ。

「結洲はどうだった」

父が帰る前に昨夜はさっさと風呂に入り寝てしまったので、まだ旅行よしなについて語ってはいなかった。水に溶かして飲むお茶の粉をテーブルにおいておいたので、一応土産を持って来たということはわかってくれただろう。

「よかったよそれなりに」

「母さんは？」

「相変わらずだけど、思ったより落ち着いてた」

「めずらしいなあ」

本当は意味不明の説教をかまされたことを思い切り父に告げ口してやりたいのだが、返り討ちを受けることも考えるとそれは避けたい。言葉を濁した。

「で、お前、確か矢高さんの息子さんと一緒に行動してたんだろう」

「どうして知ってるの」

「母さんが電話で連絡してきたからだよ。当たり前だろ。親なんだから」

そういえばしていたしていた。上総の行動をすべて逐一確認しあっていたのだから。もう終わったことだからどうでもいいが。隠さねばならないことなどしてないし。

「よくしてもらった。いろんなところ連れてってもらったし」

「どこら辺だ？」

「大学とか、あと」

山とか、とか思わず口走りそうになるが慌ててこらえる。機密事項だ。

「喫茶店とか。青潟と違って結洲だと喫茶店がたくさんあるからそこからって。トーストと珈琲をご馳走してもらったけど、正直青潟のほうがおいしい店多いかなって」

「大学街だからな。溜まり場はそりゃあるな、長居するためのものだし味に期待してどうする」

たいして反応がなかったのでほっと胸を撫で下ろす。続けた。

「結洲大学に連れてってもらったよ。矢高さんそこの大学生だからってことで、学食でとんかつランチご馳走してもらった。たぶん今まで俺が食べたとんかつの中で一、二を争うおいしさだったな」

「上総、お前食べたことしか考えてないのか」

あきれた風に父がつぶやく。

「もう少し何かきれいなものとか、舞台の印象とか、そういうものとか伝えるべきことないのか？」

「舞台たって、ほとんど見てないよ。ずっと楽屋走りっぱなしだったし、荷物運びばかりだったし。でも衣装は豪華だったよ。刺繍の着物が圧倒的に多かった。出たお弁当もお重だったし」

「あのな、お前」

何か言いたそうな顔をしていた父だが、気を取り直してさらに問いかけてきた。そろそろ珈琲が沸いたようなのでいったん立って父のために注ぐ。

「そうだ上総。打ち上げはどうだった」

「打ち上げ？ ああなおらいのこと？ 会場のホテルの中のイタリアンレストランを貸切にして、そこでやったよ。バイキングで食べ放題で、矢高さんとひたすら食べるしかすることなかったけどさ」

「わかった、上総、本当に食べることにしかすることがなかったんだな」

別にそういうわけでもないのだが、父が勘違いするのならそれでもいいような気がした。実際、ほとんどおごられっぱなしでおいしいものばかりご馳走してもらったのだ。食べ物の恨みならぬ恩は忘れないというものだ。

「父さん、そういえば青柳さんって知ってる？」

他意はなかった。あまりにも父が、上総を食い意地の張った奴といった目で見るとものだから一矢報いてやりたかっただけだった。父がコーンフレークをスプーンですくったまま上総を見た。何も言わなかった。

「なおらいの間ずっと、その青柳さんと言う人と、あとふたり男の人と熱心に話をしてたよ。かなり昔からの知り合いと聞いたけど、父さん、聞いたことある？」

「青柳さん、か」

返事になってないつばやきを父がもらす。

「仕事の関係の人だと思うけど、俺が生まれる前から知ってたとか言われて、無理やり挨拶させられたけど、何かあったのかなとか思って」

「いや、特にない。母さんの仕事の関係だろう。それかいろいろお稽古事していたからそのあたりでの付き合いもあるんじゃないかな。父さんも母さんの大学入学以前の話は全く知らないから、なんとも言えないよ」

それだけ答えた後、父は立ち上がりそのまま珈琲を飲み干した。立ち食いは立村家でのご法度だが、そんなこと教えたことすら父は忘れていたようだった。

出勤前、父に尋ねられた。いつものことだ。

「今日はどうするんだ」

「駒方先生に呼び出されたから、学校に行く」

「なんだ、今度は何やらかした」

「なんもしてないよ。失礼だな」

むかっときて言い返した。

「二学期に向けての授業見学会があるから来いってこと。それだけだよ」

「変わったイベントだな。聞いたことないぞ」

「呼ばれている生徒少ないから」

あまり詳しい説明をせずにすんだのは、父がさっさと家を出てくれたからだった。あまり突っ込まれたらまずかった。幸い、杉本梨南の電話の件については一言も問われなかったのが救いだった。きっと何か感づいているに違いない。こちらでも「折り返しは不要」ときっぱり断られている以上は杉本の目的もつかめない。

——上総は今日帰ってきたのかい、いい旅行してきたかい？

昨日の夕方、駒方先生に電話をかけて確認したところによると予想通り例の「杉本梨南の家庭教師見学」のご案内だった。

——あと二日で宿題を片付けるのに余念がない時期だとはわかっているんだけどなあ。ちょうど梨南たちも教え子のみんなの手伝いをしている時期らしいんだ。たまたまこの日は愛子と一緒にいらしいんで、せっかくだし陣中見舞いに行くのはどうかと思ったんだ。

いきなりとは言わない。ただ、やはり、足がすくむのも確か。

「狩野先生はいらっしゃるんですか」

——狩野先生は学校で用事があるから今回はお休みだよ。ああ、ただな、愛子の兄ちゃんは来るぞ。お前の同級生だ。

一発で分かる。東堂はとうとう桜木愛子の「兄ちゃん」にされてしまっている。

——まあ上総ひとりじゃないし、男女比もまあ、三対四で、まあとんとんだろうし。そんな引け目感じることはない。上総も得意の英語で最後の見直し手伝ってもらえないかな。

「あの、それで、杉本さんはなんと」

一番気になることを尋ねてみる。どう考えても杉本梨南がこの展開に一発OKを出したとは思えない。

——お前に電話するとか言っていたが、かかってこなかったのかな？

「前の日に連絡がきたので、僕は出てません。代わりに出た父に、絶対かけなおさないようにと頼んでみたみたいなので、あえて折り返しはしませんでした」

——梨南もそんなかたくななこと言わなくてもいいのになあ。あの子なりに気遣ったつもりなんだろうな。どちらにしても梨南もよくよく分かっているから、いきなり訪れても角出して怒る

ことはないよ。もし上総が梨南に叱られたら、ちゃんと間に入って説明するから、その点も安心しなさい。

いったいこの扱いはなんなのだろう。上総は完全に杉本梨南の僕扱いである。

「それと、東堂も、ですか」

——ああ、あいつはもう大喜びだったよ。上総ともいろいろ話したいことがあるようだし、女子たちが集中している間はふたりでおしゃべりしてなさい。

肝心の杉本が歓迎してくれているのか、それともいやいや受け入れたのか、そここのところがわからないと上総も正直対応のしようがない。いくら駒方先生が間に入ってくれたって、杉本の性格上それをすんなり受け入れるとは絶対い思えない。なんだか迷惑がられておっばらわれそうな気がする。二日前の電話ももしかしたら、

——いい加減やめてもらえませんか、のメッセージだったかもしれないしな。

待ち合わせは十二時。まだ余裕だ。なにせまだ八時を回っていない。夏休み恒例の家事タイム到来で、まずは旅行中溜まったものを洗濯機で回し、同時に台所の洗物を片付ける。掃除機をかけて以上終了。雨は全く止む気配なしだった。

——土産もの、忘れないようにしないと。

多めに用意しておいてよかった。七袋分用意しておき、あと旅館で購入した落雁の小箱もかばんに押し込んでおいた。手帳を放り込もうとして、開いて気づいた。そうだこの写真も渡さねばなるまい。いやこれが本命だろう、どう考えても。

——杉本、この人形写真みて、どう思うかな。

家事がひと段落すると次は忘れないうちに礼状準備だ。

今回は母も絡んでいるので一刻も早く出しておかないとあとで面倒になる。矢高さんにはもちろん封書でお礼を伝えるつもりだが、その他矢高さんのお母さん、および宿にも出さないとまずい。母の教えでは旅行先に必ずお礼状を出すのが常識、なのだそう。もっとも上総の知る限りそれを行っている知り合いはほとんどいない。母だけの常識なのか一般的なものなのかはわからない。ただ、しれないことがばれたらその後の母対策が面倒だ。保身のためともいう。

部屋に戻り、絵はがきを引っ張り出す。これも母の教えでいやいや守っていることなのだが、青潟の絵葉書をこまめに用意しておくように言われている。アドレス帳を見ながら最初に矢高さんのお母さん、いわゆる会主へ、次に「いぶき亭」へ、最後に便箋を用意して矢高さん本人に綴り始めた。

——拝啓 結洲の青空とは打って変わって青潟ではどしゃぶりが待ち受けていたこの頃です。矢高さん、先日は三日間もの間、僕のためにお時間をいただきありがとうございます。初めて伺った結洲という街は、僕にとって全く未知の世界でしたが、矢高さんのおかげで少しずつ身近なものとなりました。特に結洲大学の図書館内や学食など、僕が今まで知らなかった大学生活を感じるきっかけとなりました。ありがとうございます。

ここまで書いてみて、手を止めた。本音書いていいのだろうか。

——矢高さんから教えていただいた「結洲群舞」の世界ですが、初めて見た時は今ひとつぴんとはななかったところがありました。曲になじみがなかったからかもしれません。ただ、青潟にそのような群舞がないことや、学生の人たちがそれでもってぶつかり合ったり勝負し合ったりするという独特の文化がどうして生まれたのか、むしろそういうことに興味を惹かれました。

両親から聞いたところによると、青潟が高校生以下の子どもたちが街の主流であるのに対して結洲は大学生たちの街だそうですが、実際結洲を歩いてみると納得できるものがありました。青潟では学食や大学構内でこそ結構大学生を見かけますが、いったん街に出るとほとんどが僕らと同世代かもしくは中学生がほとんどです。矢高さんが連れていってくれた「結洲茶房」のような溜まり場も外にはなく、ほとんどは学食で完結している印象があります。他の大学もあまり近くにないので、交流も特になさそうです。

比較して結洲の場合は、高校生の姿こそ少なかったようですが、代わりに塾といった場所での交流が盛んで、大学生たちも学校内だけではなく外でのつながりを強く求めているようですが、僕はそちらの方に強く惹かれます。

できればもっと矢高さんと大学についてもっとお話したかったのですが、また別の機会を待ちたいと思います。これからもどうかよろしくお願いします。

なお、お約束の青潟市の観光資料ですが、後ほどまとめて送りますので今しばらくお待ちください。

最後になりましたが、僕にとって矢高さんとの出会いは、非常に大きなターニングポイントになりました。就職なさってからはお忙しくなるとは思いますが、これからも末永きお付き合いをお願いできると嬉しいです。本当に、ありがとうございました。また会える日を楽しみにしています。

敬具

矢高君夫様

立村上総

最後に日付を入れ、封をした。書き出す前はこんなこと一切考えていなかったのに、何かに取り付かれたかのごとく筆が走り出す。自分でも何を書きたかったのかわけがわからない。ただ嘘ではないことは確かだ。

——けど、ターニングポイントってなんだろう？

自分で書いてみて、その意味がどうもぴんとはななかった。

みやげものの包みも携えて、上総が家を出たのは十一時少し前だった。雨は早朝よりも少しだけ落ち着いたけれども、傘不要のわけもない。水色の傘を広げて徒歩で駅へと向かった。ひまわりがまだめいっぱい咲いている。雨にぬれてめげていない。

——狩野先生来てくれると思ったんだけどな。

冷静に考えれば、あと二日で中学も始まる。高校と同じタイミングである以上、ただでさえ準備で忙しいだろうし、家庭の事情だってそれぞれあるだろう。もともと青大附属の場合、教師を過剰にこき使いすぎているんじゃないかと上総も思う時がある。

汽車に乗り込み席を押さえて窓を眺めながら上総は、かばんの中のお土産をもう一度手で確認した。多すぎて少なすぎることはたぶんないと、思う。

待ち合わせは学校だった。駅から出てすぐに青潟大学行きのバスに乗る。思ったよりも向かう人の数は多く、やはり夏休み終わる時期が近づいていることを思い知らされる。

「上総か、よかったよかった。連絡がついてほっとしたよ」

中学に到着し、校門の前で駒方先生に呼び止められた。

「連絡が遅くなり申し訳ございません」

まず一礼すると、笑顔で駒方先生は首を降り、傘を持ったまま学食の方を指差した。

「まだまだ時間もあるしなあ。準（ひとし）が来たらいったん昼ごはんにしよう。少し作戦会議もしなくてはならないしな」

「作戦会議ですか」

戸惑い尋ねると、駒方先生は答えずに空を見上げてつぶやいた。

「がんばりやさんたちが揃っているのはいいことなんだがなあ。なかなか難しいんだよ」

杉本と連絡が取れない以上どういう展開が繰り広げられているかは駒方先生の話に頼るしかない。上総なりに想像はしてみたが、直接杉本たちの私塾会場で公開授業を見せてもらうことになるのか、それともいきなり乗り込むつもりなのか、全く想像がつかないままだ。

「先生、どういうことになったんでしょうか。杉本とも連絡がついたということでしたが」

「ああそうなんだよ。もうそろそろ宿題を片付けないとまずい時期なんだろうなと思ってだね、梨南がたまたま学校に来ていたと聞いたから、狩野先生に話を聞いてもらったんだよ。せっかくだったらその頃にでもいったん、どこかで集まって勉強会したらどうかなと私の方から提案したんだ」

「どこかって、どこですか」

なんだかいやな予感がする。上総は顔を斜に向けたまま何気なく聞いてみた。

「準が来てから説明するよ。あいつも愛子のこと心配でならないと見えてなあ。今回の計画には大賛成なんだ。上総もいると聞いたら、そりゃあ喜んだ」

「東堂とは同級生ですし話す機会もあります」

南雲の家でハンバーガーに食らいついたことは言わずにおいた。

「そうかそうか。それにしても雨が止まないね。梨南たちも雨の中大変だろうが、来てもらうことにしたよ」

ということは、会場がいわゆるその公立中学に通っている女子たちの自宅ではないということか。杉本と修道院ツアーで出かけた時は、直接駒方先生が手土産つきでやってきたと聞いたのだが。上総なりに自然に尋ねてみることにした。

「実は、昨日出かけてきた結洲ではやっているという、粉末のお茶をお土産に持ってきました。お湯があるところならいいんですが」

「おお、そうか、ありがとうありがとう。熱いお茶のほうが身体にいいから、みんなで飲もうか。それはそうと上総、旅行は楽しかったかい？」

少し話が逸れてしまい読みをしくじったが、まあ仕方ないことだ。東堂が来ればどちらにしても軌道は元に戻るだろう。上総は語り始めた。

「母の仕事で日本舞踊の大きな会が結洲で行われていて、そこに荷物運びの手伝いに行きました。あまりいろいろなところ回ったわけじゃないんですが、結洲大学に連れてってもらい学食を食べたり図書館に入れてもらったりはしました。あと、『結洲群舞』と呼ばれる地元オリジナルの集団舞踊も見ることができました」

「ほお、それなら結構楽しんできたみたいだねえ。そのなんだ、学校に連れて行ってもらって、どうだったかい。青潟大学の雰囲気とは違ったのかい」

にこにこ、楽しそうに話を促す駒方先生に上総もつい口滑らかとなる。

「はい、とにかく学食がおいしかったのと、それと図書館の雰囲気が全体的に落ち着いていて本をいくらでも読んでいられるような雰囲気でした。夏休み中ですし学生が少なかったせいかもしれません。それと、『結洲群舞』という踊りですが、さまざまな集団が地元で誰もが知っているメロディを元にしてさまざまな形でそろえて踊るものらしいんですが、整然と踊るグループや今っぽいテクノのリズムで踊ったりするグループとか、本当にさまざまな人たちがいるようです。大学生の間でも人気があると聞きました」

母がいる前ではしゃべれないことではあるが、まあ、駒方先生と母が接する可能性は比較的低いしそのくらい話してもいいだろう。

「そうかそうか、結洲は少しここから遠いし、学生気質も少し違っているだろうなあ。私も仕事で何度か行ったことがあるが面白いところだったよ。その「結洲群舞」というのは初めて聞いた。いやあぜひ、それは見てみたいねえ」

この前狩野先生や本条先輩を混ぜて話した時も思ったのだが、駒方先生は失礼ながらお歳のわりには新しいことに興味を示してくることが多い。本条先輩が関心を持っているマイコンプログラミングの話にしてもそうだし、コンピューターグラフィックなどの言葉にも敏感に反応してくる。はたして本条先輩は約束通りそれらの情報を渡しているのだろうか。なんとなく気になって聞いてみると、

「ああ、そうそう。里希にはこちらから電話して、持ってこさせたよ。すっかり忘れていたみたいだが、やはり面白いねえ。今度は里希の空いている時間にでも教えてもらいたいと頼んでいる

ところなんだよ」

「先生はなんでそんなに新しいことに興味をお持ちなんですか？」

思わず口から出てしまった。失礼なのは承知しているが、やはり驚きだ。雨音が響く中、穏やかに駒方先生は答えてくれた。

「まずは試してみないとね、合っているかどうかわからないだろう？ おじいちゃんだからといって今までのやり方で通すのはいささかもったいない。まあ、新しいからいい、ふるいから悪いとは言わないがなあ。まずは、自分の頭で受け入れられるかを試す意味で、一度はやってみるんだよ。この前のほら、コンピューターグラフィックについても里希が目輝かせて語っていたから、さぞ面白いんだろうと思って聞いてみた。あいつもちゃんと資料を用意して事細かに教えてくれたんだ。詳しいことは専門家の範疇だろうが私もできれば一式マイコンを用意して、いじってみたいと思ったよ。里希がその時は先生やってくれると約束してくれたので、まあ壊さないですむだろうなあ」

楽しげに笑った。

「たとえばこういう雨の景色を、コンピューターの絵だとずっと、点を上中下とずらして表示するようプログラムすることにより、アニメのように表示できるそうなんだ。なかなか里希の説明には難しいところがあって私も把握しきれていないんだがね。動く絵本のようなものを作るのはどうかな。筆で絵を描くのが苦手でもキーボードから打ち込んで描けるのならそれはそれでうれしい人もいるはずだよ。その他、物語をゲームでこしらえていけば、難しい小説も分かりやすく分解されて楽しめるんじゃないかとかね。いろいろなことが思い浮かぶよ。こういう話、梨南にしたらそれこそしっかりと食らいついてきたよ」

——杉本にも話したのか。いや、待てよ。ということは、あの日のこともとっくの昔にばれてるってことか？

「おい、どうした上総。熱でもあるのかな」

わかってる。風邪なんかじゃないということくらい。

「いえ、何でもありません」

俯くのみ。話し合いならぬ一種のデートと誤解されそうな行動を杉本と共に一日取ったことを、駒方先生にばれているなんてこと、考えたくもない。

東堂が現れたのは雨が再び土砂降りに変わった頃だった。傘の揺れ方が半端でhな買うそろそろ先に移動するかと駒方先生と相談していた矢先だった。

「どうも、どうもすみません。立村も早いなあ」

「早くないと思うけど」

すでに二十分くらい立ちん棒していたのだからそのくらい言ってもいいだろう。全く意に介せず東堂はまず最初に、駒方先生に頭を下げた。

「今日はどうもです。お声がけすいません」

「いや、準もえらいよ。この雨で大変だったろう。さあ、まずは上総とも話していたが作戦会議といくかね」

——何が作戦会議なんだろう。

あえて杉本梨南の話せず時間をつぶしていた。たぶん東堂が動かないと先に進まない話なのかもしれない。今のところ二方面でいろいろ情報を集めたけれども、実際桜田愛子に関する具体的な情報は噂話のみ、ほとんどないに等しい。

「とりあえずだなあ。女子たちの登場は一時半にお願いしているんだ」

「あの、それでどこで」

上総が問いかけるのを、すぐに引き受けるのが東堂。

「大丈夫大丈夫、あそこでしょ。先生、すぐ側の『いこいの家』だったか。あそこで先生、いつも絵の教室やってるんですよえ」

「よく知ってるなあ。お前も来るか？」

「ご遠慮ときます。俺は絵が苦手なもんで」

軽快に語らう東堂と駒方先生を上総は後ろからそっと眺めた。あえて一歩、ひっこんだところで着いて歩いた。

——作戦会議は俺のほうでひとりやらずにちゃいけないことだよな。

「あおがたいこいの家」が候補に挙がっているであろうことは上総もある程度は予想していた。狩野先生が何も考えずに上総を連れて行ったとは考えにくいし、大人の目が届きやすい場所という心積もりもあるのだろう。

——けどさ、あの部屋、大部屋だろ？ あそこで子どもたちが遊んでいる中でできるのかよ。杉本、第一、OKしたのかよ。

桜田さん側の考えについてはこれから東堂も含めて話が出てくるだろう。ふたりの歩いていく先はいつもの学食で教職員食堂ではなさそうだ。学生たちの数もだいぶ増えている。やはり夏休みは終わりに近づいているということだろう。

「立村、ちょいと来いよ。ひっこんでねえでさ」

学食の入り口で傘を畳みつつ、東堂が上総を招いた。

「とりあえずなんだけど、なんか食ってからにするだろ」

「向こうでは食べないのかな」

「いやなあ、梨南たちの意見で、お前らが揃ったらすぐ、授業を始めるから目をひん剥いてみるようにとご沙汰ありなんだ。多分食べる余裕はなさそうだなあ。愛子も力が入っているぞ」

「そんなに意地になってどうするんですかねえ」

あきれたように東堂がつぶやく。ここで口を挟んだほうがいいのか、それともしばらく様子見をしたほうがいいのか、正直上総としては悩んでいるところではある。

「数学の授業を物語風にして教えるとか聞いたけど」

「俺が聞いた限りだと、家庭教師と教え子のこっぴどかしいラブストーリーをしゃべり続けてるって話だなあ。どこが数学と関係あるんだかな」

「それ、数学の話は全くついていけないから俺もよくわからないけど」

思ったよりがら空きの学生食堂で、先生は四人がけのテーブルを押さえた。荷物をまとめて置き、傘を椅子にひっかけた。

「いやいや、今日上総が来ることを梨南に教えたら、あえて数学や理科の話はしないと伝えてくれて言い切ったよ。むしろ、今日のテーマは読書感想文の手伝いなんだそうだ」

「どういうことですか？」

なぜそういう展開なのかがわけわからず問い返すと、

「上総が来る以上、ごまかすようなやり方をしたくないんじゃないかな。梨南はそういう子だろ？ 難しいことをいっぱい並べて、それでああすごいすごいで終わらせるのではなくて、今日来てくれた全員を納得させたいんだよ。きっと自信があるんだろうね。愛子と一緒にいろいろ学んでいるみたいだよ」

——まったく訳、わかんないよ。

杉本が何を求めているのかだけは理解できる自信がある。ただし、今、何をやりたがっているのかだけはどうしても見抜けない。

駒方先生が塩ラーメンだったこともあり、上総もしょうゆラーメンに、東堂はみそラーメンに、それぞれした。どうも学食だと誰かの選択したものに乗っかってしまいたくなるなにかがある。それを言うと、

「だってなあ今日はとんかつって気分じゃないだろ」

お盆に味噌の匂いたっぷりのラーメンを乗せて運び、一気にすすりながら東堂が答える。「女子たちだっていることだし」

「それって関係あるのか」

「あるだろ、そりゃあ。あまりエネルギーな顔して乗り込んだら女子の場合、確実に用心するに決まってる。経験者の俺がよーく知ってるってわけ」

——乗り込んだこと、あるのか。

この辺もよくわからないが、たぶんあるのだろう。上総は自分の分のラーメンに向かいながら、そっと駒方先生の顔を覗き込んだ。幸せそうに塩ラーメンを味わっている。

「ラーメンの美味しい店はたくさんあるかもしれないが、やはり昔風味のここのラーメンが一番

だなあ。癖がなくて、毎日でも食べられるよ。よそさまのだとその時はおいしいと思っても、二回目がな。こういうあきが来ないのが一番だよ」

——あまりにもあっさりしすぎてると思うけどな。

正直な感想はさておいて、上総は急いで食べ終えた。できれば座っている間に準備をしたい。

「先生、早速ですが、今日僕たちは『あおがたいこいの家』で何をすればいいんでしょうか」

「そう急くな。急いで食べたら消化に悪いだろう。まあ、今日はこんなお天気でもあるし部屋の中でゆっくり、梨南たちの手伝いをするだけだよ。お前たち男子ふたりは、様子を伺いながらお茶を出してやってもいいしなあ。忘れていたが、ちゃんとお菓子は用意してあるから、心配しなくていいよ」

「お茶汲みっすか」

またばかにしたように東堂が四角い顔を真ん丸い目見開いたままこちらに向ける。

「愛子もな、準が来ること聞いてかなりやる気まんまんらしいから、覚悟しとくんだよ。まああれだ、ふたりとも先生たちに叱られるんでないかと思ってハリネズミのようにぴりぴりしているだけなんだ。こちらとしては、誤解されそうなところで籠ってなにかするよりも、周りの人たちが安心する場所で堂々と勉強してくれればそれでいい。それだけなんだよ」

「結局あれでしょうが。我らが妹ちゃんたちが不良化の兆しにはまらないように、大人の目の届くところにいてほしいというそれだけの話ですか」

「準の言う通りだよ。今回は青大附属だけの話ではないんだ。公立の先生たちも心配しているから、大丈夫大丈夫と証明したいだけなんだよ」

それに、と付け加えた。

「梨南の話だと、愛子には人に教えるという意味での才能があるらしい。どう思う？」

「そうですかね」

露骨に否定する言葉を投げかける東堂。駒方先生は笑いながら箸をおいた。

「これからどういう授業をあのふたりが行うのかはわからないがな。それを止める必要が出てくるかもしれない。間違ったことを教えていたらそれを直すのが大人たちの務めだしな。ただ、別の方法で愛子の才能を生かす方法なら青大附属にももちろんあるはずなんだよ。その手伝いを二学期以降、準にしてもらおうというのが私としては一番いいことだと思うんだよ。そのための準備だな、今日は」

「そんなに賢いとは思えませんがねえ。俺が言ってること全然言うこと聞かないしなあ、立村、どう思う？」

「俺は桜田さんと話したことほとんどないからわからない。全部杉本から聞いたことだから」

「あっそっか。お前はそっちだもんな」

納得顔で東堂はラーメンの汁をすべて飲み干した。慌てて駒方先生が止める。

「塩分の取りすぎは高血圧のもとだよ。若いからといって調子に乗るんじゃないぞ」

——いや、塩分取りすぎたら喉が渇くと思うな。

他人事のように上総は聞き流していた。どちらにしても上総が来ることを杉本梨南は気づいて

いるし、そのためにわざわざ国語の読書感想文手伝い光景を見せつけようとしている。少なくとも追い出されはしないだろう。なんとかしてここで、杉本の名誉を傷つけない形で収束できればいいのだが。そのためにどう動けばいいのだろう。

「作戦会議はこの辺にして、さあさあ行こうか。お前たちの妹がお待ちかねだぞ」

両手をテーブルについて、駒方先生が立ち上がり笑顔でふたりに呼びかけた。

「ほんと、手のかかる妹がいると、お互い苦勞するよな」

小声でささやく東堂に上総は目で合図だけ送っておいた。顔きはしなかった。

全くもって雨が止まない。学校裏の雑木林を潜り抜け、そのまま「おちうど」を通り過ぎ、「あおがたいこいの家」に到着した時にはすでに着ているものがほとんど湿っている状態だった。ぬれているわけではないのだが、やはり気持ち悪い。ハンカチで拭いた。

「まったく、タオルかお絞りよこせって感じだよなあ」

「そういうところじゃないからしょうがないよ」

どうも東堂との会話はかみ合わない。同じクラスだった時もそれほどしゃべったわけではないのだししかたないことなのだが、一応南雲の取り持ちもあるのでそれなりに気遣っているつもりではいる。向こうも上総に対して好感を持ってくれていることはなんとなくわかるのでありがたく受け取ってはいるが、自分自身がどう対応していいかわからないというジレンマがある。

旧家のような一階の大広間に向かう。駒方先生は慣れているようだが東堂はきょろきょろしながら、

「こんなところでやるんですか。どうやって」

「いや、机はちゃんと用意するよ」

怪訝そうに周りを見渡す。気持ちはわかる。今日もやはり子連れ客だらけで広間を思いっきり跳ね回っている子どもたちの叫び声がうるさい。無料だし食べ物持込可だし、一応は座る場所もあるしでメリットはあるのだろうが、こんなところで本当にできるのだろうか。

「まだお嬢さんたちは来てないなあ。そうだ、上総、その水に溶かすお茶とやら、出してもらえないかな」

「はい」

かばんから取り出した。透明ビニールに包まれた一袋ずつにしようかと思ったが面倒くさい。閉じていたモールをはがした。

「でも水は」

「水道の水だともったいないか。それならペットボトル買ってきなさい。お金は払うよ」

上総の代わりに東堂が立ち上がり、すぐに自動販売機から水を三本買ってきた。

「その中に入れて飲むといいかもなあ」

すぐに一パック、駒方先生はペットボトルに入れて軽く振った。その上で一口含み、

「いや、さすがだ。これはうまい」

感嘆の声を挙げた。驚いたのか東堂も慌ててまねをして緑色の粉末を流し込む。

「よく振らないと口に緑色のひげがつくから気をつけたほういいぞ。漢方薬みたいになるからなあ」

上総も同様に混ぜ込んでみた。最初に少し水を飲んで減らしておき、その中に薬を調合する気持ちで入れてみると、あっという間に溶けた。緑色の淡い色とがふんわり広がった。

「かなり細かい粒なんですね。すぐ溶けるんだ」

「これを考えた人は偉いよ。上総、結洲ではこういう飲み物がはやっていると言うのかい」

「はい、僕に教えてくれた人が言うには、結洲の大学生たちの間ではやっているんだそうです。」

水に溶かすだけですむのでお金もかからないし経済的だからということですが、よくわかりません」

そこまで答えて飲んで見ると、一気に抹茶の濃い味わいが先に来た。水で薄めたというのではなく、いわゆる茶筌で立ててどろりとさせたような濃厚さが喉にくる。それでも水に溶けているからひっかかるほどではない。確かにこれは中毒になりそうだ。

「立村、お前には悪いけど、なんか砂糖入れてのみたいんだけどな」

信じがたい味覚の持ち主、東堂がそれでも半分飲み干した後にのたまった。

「なんか中学の時の茶道の授業で、こういう時むしように和菓子が欲しくなったりするよなあ。これだけだと、口が苦いばっかで耐え切れませんわ」

「でも砂糖を混ぜると甘ったるくなってしまいそうな気がするけど」

聞き流しつつ上総は三分の一程度飲んだ。まだ杉本たちの姿はない。

どうも東堂相手だと調子が狂う。上総はしばらく飲み物を口にすることで時間をつないでいた。時計の時刻は一時十五分過ぎ。そろそろ女子たちが現れてもいいころだ。

窓辺から少し甲高い女性の声が聞こえてきた。語らう声はどこかぴりぴりしている。

「おや、そろそろだね」

胡坐をかいて庭を眺めていた駒方先生は立ち上がり、そっと玄関を見やった。つられて上総も、東堂も続いた。

「やはりお連れさんも一緒かい」

「お連れさんですか」

公立中学の女子たち、のことだろう。上総が尋ねると先生はにこやかに首を振った。

「違う違う。今日は老若男女の日なんだよ」

わけの分からぬことを言われる。どうも妙だ。その甲高い声の持ち主が杉本でないことだけは確信しているのだが。本当に杉本たちなのだろうか。

「あいつ、来たな」

それだけつぶやき迎えに走る東堂も、この瞬間だけはまじめな顔していた。なんだかくっついていくのも面白くない。座り直すのもわざとらしい。本が山積みの床の間をなんとはなしに眺めた。

「失礼いたします」

はっと振り返った。確かに、そうだ、その声は。

すでに側に駒方先生はいなかった。東堂と一緒に玄関へ迎えにすすと出て行ったのだろう。

——杉本がいるのか、やはり。

上総は床の間と向かい合う形で正座した。

意地でも混じるつもりなど、ない。

廊下を歩いてくる音も、けたたましく響く他の女性たちの声も、側ではしゃぐ子どもたちの騒ぎも、上総の耳には入ってこなかった。

「おお、上総、早くこちらにきなさい、ほらほら、梨南も愛子も、そちらでまずは机を借りようか。それとおふたりさんも今日は暑いところ大変だったね」

四人の女子たちを上総のいる床の間前まで案内しながら、駒方先生がにこやかにテーブルの置いてある場所を探し始める。

「事務室で貸してもらってきます」

上総はすぐに反対側の廊下に出た。女子たちが静々と現れるのを見るには見たが、その顔を静止することがどうしてもできない。目が拒否をしているかのようだ。その中に杉本梨南が混じっていることも認識することがどうしてもできない。

「ああありがとう。準はこちらの方で椅子を用意してもらおうか」

——テーブル、二卓あればいいのかな。往復するか。

上総が一階の事務室らしき窓口に声をかけようとした時だった。

「恐れ入りますが、テーブルを二卓、お願いいたします」

先客がいた。

ポニーテールに髪の毛を結い上げて、まっすぐな目線で事務の男性に伝えている。紺色のワンピースに白い半そでのボレロを羽織っている。差し出された書類にさらさら何かを書き記している。こちらを見た。きりりとした眼差しだった。

「立村先輩」

「あの、テーブル持つの、手伝おうか」

「結構です。一人で持てます。そのくらいは」

言いかけた杉本に、係の男性がガラス窓の向こうで大きくかぶりをふった。

「そんなの無理無理。ふたりでも大変だよ。角がとがっているから手を切ったら大変だ。さあ、一卓ずつ運んでいきなさい」

ふたり顔を見合わせた。どちらともなく頷いた。事務室の男性が二人がかりで持ち出した長テーブルを抱え、上総は杉本に何を言いたかったかを忘れた。

——本当に今日は、どうするつもりなんだろう。俺はどうすればいいんだろう。杉本は何、考えてるんだろう。

蝉がけたたましく鳴き始めた。子どもたちのはしゃぎ声にも負けないほど、大広間いっぱい響き渡っていた。

気味悪そうに上総を見つめている三人の女子。杉本梨南と一緒に机を運んできた時に、すぐ気づいたその視線で、身体がぎゅっと締め付けられる思いがした。

——そりゃそうだよな、初対面だもんな、こんな展開だもんな。

ひとりは桜田愛子、彼女はもちろん初めてではない。話したことも一応はある。ただし、会話にはなっていないような記憶がある。髪の毛の先っぽをパーマで膨らませ、ポニーテールに結い上げている。同じポニーテールでも、ひたすらまっすぐな杉本の髪とは全く違う。意外と肌は白いがどことなくメイクの匂いがする。

「立村先輩、早く脚を立ててください」

杉本に叱られ、急いで引っ張り出し、床の間と向かい合うように並べる。すぐに駒方先生から注意される。

「あのなあ、上総、これだと床の間に用がある人が通りづらいだろう。横にしたらどうかな。それの方が邪魔にならないよ」

「わかりました」

言われたとおり、今度はひとりで直した。すぐさまもう一卓と思いきや今度は桜田愛子と東堂が仲良く運んできてくれた。ありがたい。正直、結構運ぶのに手が痛かったのだ。

「指先大丈夫か」

「このくらいは普通です」

杉本は言い捨てて、テーブルを二卓向かい合わせるように並べた。真向かいに苔の生い茂った巨大な石と灯籠が見える。

「ねえねえ、杉本さん。今思ったんだけどさ」

せっかく運んできてくれた東堂をあっさり無視して、桜田が杉本に語りかける。

「このテーブルなんだけど、隙間空けない？ 通り道作らない？」

「どういう風に？」

「向かい合うと距離あるじゃん？ なんかやなんだよねえ。ここでさ、私たちもあっこもりりあんもぴたっとくつつくようにしたいじゃん？」

「そうね、桜田さんの言う通りにするわ」

まっすぐな感情の籠らない杉本の台詞だが、その「あっこ」と「りりあん」と呼ばれた二人の女子もなれているのかにこにこ顔を崩さない。駒方先生にも、また付き添いらしき女性のことも無視して、さっさと最奥の席を分捕った。もちろん、上総の顔なんか全く気にしない。

——挨拶って、したほういいのか？

タイミングを逃してしまったせいか、うまく話すきっかけがつかめない。その間にも駒方先生は東堂を引き連れて付き添いの女性に何度も頭を下げていた。東堂も愛想よく振舞っているようだが何を話しているのかわからない。

水色のチロリアンテープがアクセントとなった白いかばんから、杉本はノート一式と大きめの封筒を取り出し、テーブルに乗せた。あっこ、りりあんのふたりが小声でしゃべっている様子を

眺めながら、最後にペンケースを取り出した。クロスステッチの刺繍が施されたかわいらしい雰囲気のものだった。

「この刺繍、杉本が刺したの」

「はい。夏休みにこしらえました」

赤とピンク、白の花柄が交互に並んでいるかなり手間のかかった代物だった。褒めるのもほどほどにして上総は尋ねた。横で邪魔そうな顔で桜田がにらんでいるが知ったことじゃない。一応は先輩なんだから多少は後輩から頭下げられるのを待ったっていいだろう。というのは言い訳で、どう挨拶すればいいのかわからないのが本音でもある。

「おととい電話くれたのこのことなのか」

「はい。その通りです」

「電話掛けたらまずいかなと思ってかけなかったけど、やっぱり連絡したほうがよかったのかな」

恐る恐る尋ねると、杉本は心外といった風にかぶりを振った。にこりともしなかった。

「きちんと立村先輩のお父様には必要ないとお伝えいたしましたので不要です。どうせ連絡がついたからといって何かが変わるわけでもありませんから」

「その言い方ないだろ。まあいいけどさ。それよか、今日はなんで読書感想文なんかにしたのか知りたいな。この前も杉本話してたけど、数学の授業が絶品なんだろ？ そっちの方が面白そうなのに」

「お分かりにならないとは、立村先輩も本当に幼児化なさってますのね」

相変わらずの一本調子な言葉で杉本は答えた。

「立村先輩に理数系の授業をごらんいただいても意味がございません。きっと途中でうんざりされて、おそらく先生たちの言い分に丸め込まれて、結局終わりです。ただでさえ本日は狩野先生がいらっしゃらないのですから、いくら桜田さんがベストを尽くしても伝わるものではありません」

「悪かったな。どうせ俺は数学のセンスなんてないよ」

「お分かりであれば繰り返しません。私は立村先輩に最初から期待などしておりませんし、助けていただけるとも力になっていただけるとも思っておりません。ただ邪魔をなさらないでいただければそれで結構です。私がおとといお伝えしたかったことはそれだけでございます！」

「ちょっと待てよ、杉本、いくらなんでもそれは言い過ぎだろ」

声を荒げてしまいそうになるが、床の間側で三人……すでに桜田愛子は「あっこ」と「りりあん」と語りつつ、ちろりと上総だけを不気味そうに見つめているためこれ以上何も言えない。杉本のことを心配しているまなざしだ、あれは。下手したら「杉本さんに付きまとう変態先輩」くらい言われているかもしれない。

「杉本、それよりさ、あの女の人なんなんだよ」

「おふたりの関係の方です」

なぜか、杉本は言葉を濁した。

「関係って、先生とかか」

「いいえ違います。彼女たちの同級生のお母さんです」

把握しかねている上総に、杉本はため息をついて続けた。

「今回、濡れ衣を着せられるきっかけとなったのは、あの方が青大附中に連絡なされたからでもあります」

——まさか？

東堂が一生懸命語っているのが聞こえる。胡散臭そうに桜田がにらみつけ、また女子たちと語らっている。

「いえ、そんな褒められるほどでもないんですが、うちの学校は先輩後輩、あと男女関係なく仲良いのが校風なんです。運動部はぼろぼろで負けっぱなしですが、やはり後輩たちがなんかやらかしてるんでないかとか思ったらすぐに注意したり、結局は守ったりするのがいつものことなんです。だから、今回も、しっかりと俺たち先輩の兄ちゃんたちが監督しますから、安心してほしいなと、そんなわけです」

「青大附属の生徒さんともなると、しっかりしているわね。さすがだわ」

ねえ、といった風にその女性は頷き、駒方先生に話しかけている。

「私も決して愛子ちゃんたちを責めているわけじゃないんですよ。詳しいお話を聞かせていただいて、こういった助け合いの精神が生きているのは素晴らしいと感動すら覚えましたから。ただ、場所がまずい、というそれだけなんです。大人のいない部屋で長時間ただらしてれば誰もが心配するのは当たり前のことなんですから。晶子（あきこ）ちゃんと凜ちゃんにはもう辛い思いして欲しくないという、それだけなんです」

ジーンズ姿のウルフカット、たぶん上総の母とほぼ同年代に見える。いや、もう少し若いかもしれない。野々村先生よりは年上に見えるが、子どものいるタイプには見えなかった。都築先生の三年後、に近い。

「いやいや、そうでしょうそうでしょう。自分は自分、人は人、そう割り切っている社会になりつつある中で、こうやって見守ってくれるご近所さんの存在は貴重ですよ。私たちもあのふたりが一生懸命なのは応援したいのですが、やはり人間は弱い存在ですからね。せめて楽しく過ごせるように導きたいのは当然のことですよ」

相変わらず穏やかに語りながら、

「まあ、こちらへどうぞ。大人たちはここで」

と座るよう勧め、目が合った上総に向かい、

「そうだ、上総、さっきのお茶、ペットボトルに入れて持ってきてくれないかな。せっかくだし茶碗を借りて、みんなで仲良く分け合って飲もう。梨南も手伝ってやってくれるかな」

「かしこまりました」

きりきりした眼差しで杉本は駒方先生と、かの女性、ついでに東堂をにらみつけ立ち上がった。そのまま桜田愛子、および「あっこ」「りんりん」に声をかけた。

「お茶を用意したら、始めましょう」

無言で三人、にっと笑って親指を立てた。頷き、杉本は次に脇で座っている上総を見下ろした

。冷ややかに、

「お手伝いしていただけますか」

告げた。上総は駒方先生にだけ、

「わかりました。用意してきます」

と伝え、すばやく粉末茶の包みを取り出して廊下へと出た。どうせ杉本は黙ってても着いてくる。湯のみを運ぶ手伝いをしてくれる。水場で準備をする間はどうせふたりきりだ。お茶を味見させて納得させるだけの時間はある。

一応上総の顔も見つけたらしく、例の女性は明るく挨拶をしてきた。

「どうも、お邪魔しますね。どうか気にしないでね」

——それ無理だよ絶対に。

無言で頭を下げ、上総は反対側、ちょうど真向かいに庭が眺められる一番端の席に陣取った。そこには駒方先生も、東堂もちんまり座っている。

「よくわからねえけど、お手並み拝見だな」

小声で東堂がつぶやく。上総も頷いておいた。

「大掛かりなことになってるな、なんか」

「まあ、特に悪いことしてるわけでもないんだし、堂々としていればいいってことだろ。俺もさっき聞いたけどな、いろいろ楽しいことたくさんでるみたいだしなあ」

「なんだろそれ」

杉本たちがなぜ、一番授業として成り立たせにくいと思われる「読書感想文」を面倒な大人たちに向かって公開しようとしたのか、その辺も正直わからない。子辺行き汽車の中でちらとそれらしきことは聞いたが、頭の中にイメージが湧かない。ただ言えるのは、「同級生のお母さん」なる相手に対し杉本が並々ならぬ闘志を燃やしていることだろうか。敵と定めて戦いを決意した時の杉本は、たとえ一度心許した相手であっても容赦はしない。とことん叩きのめす。もっともその後倍返しされてつぶされてしまうパターンではあるのだが。

「それでは、よろしいでしょうか」

呼びかけたのは杉本のまっすぐな声。杉本はすでに桜田愛子、および「あっこ」「りりあん」と共に反対側の床の間前に鎮座している。原稿用紙と紙袋に詰込んだ封筒らしきもの。筆記道具一式のみ。ノートはない。

「それではあ、悪いんですけどさっさと始めちゃいますよ。私たちが普段なにやってるかってこと、ちゃんと見たいってことなんで、ここで公開授業はじめまーす！」

桜田も同級生お母さんに対してきつとした目で見据えた後、力抜けたかのように授業開始を宣言した。どうやらふたりとも、仮想敵を定めてとことん戦うつもりらしい。

「はい！」

わざとらしく明るく手を上げて答えるふたりの女子たちも、ちらとその同級生お母さんをにらんだ。四人か、戦闘員は。

「さーて、とっくの昔に宿題なんて終わっちゃったわけなんですがあ、みなさん」

桜田が立ち上がり、紙袋を抱えて駒方先生および東堂に言い放った。

「あとひとつ、読書感想文だけ残ってるんですねえ。東堂先輩、やりましたか？」

「あ、いけねえ、忘れてた。やべえわ、手伝ってくれるか？」

また脳天気な口調で答える東堂は、すでに胡坐をかきくつろいでいる。上総が用意したお茶をまたごくごく飲んでいいる。

「私たちはさっさと片付けたんですけど、思ったんですよね。わかります？ 先生」

「なんだろうな、愛子もじらさないで、言ってくれよ」

茶を啜りながらのんびり声をかける駒方先生。次は自分かと思わず上総も身構えたが、
「では、さっそく始めちゃいます。杉本さんと三日間一緒にこしらえたんで、よかったらどうぞ持ち帰ってくださいな。コピー機は学校のもの使いましたけど、別に悪くないですよ」

「かまわないがどんなのかな、どれどれ」

桜田が綴じたコピーの束を一部ずつテーブルに流していく。回して受け取る方式だ。上総が受け取り、真後ろで仁王立ちしている「同級生のお母さん」に渡すと、

「あら、素敵」

いきなり歓声を挙げた。こちらとしたらそちらのほうがびっくりだ。無視して今度は上総が受け取り、次に東堂、最後に駒方先生が受け取った。

「ほお、『舞姫』か。森鷗外とはずいぶん大人の選択だなあ。誰が選んだんだ？ 梨南か？」

「ふたりです」

冷たく杉本が答える。ちらと上総に視線を向け、すぐに「あっこ」「りんりん」に頷き返す。すでに打ち合わせ済みなのだろう。杉本を除くふたりは勝ち誇った表情でもって微笑みすら浮かべている。

「んとだ、これって、おい、もしかして」

上総より先にページをめくった東堂が、本気の雄たけびを上げた。反対側でかたまっている子連れの若い親子連れグループがぎょっとしてこちらを見ているのがわかる。

「おいっ、これ、、お前、まじで描いたんか？」

「文句ありますう？」

両手を腰に当て、反り返ったまま桜田は、パーマで膨らんだポニーテールをぐいと振った。チアガールのぼんぼんのような見た目だ。

「さんざん私たちが煙草やってるんじゃないかとか、男子連れ込んでるんじゃないかとか、シンナーやってるんじゃないかとか、ありとあらゆる疑いをかけられたわけなんですけどお、そんなことやってる暇、悪いんですけどないんですよ私たちは」

いやみったらしくお上品ぶる桜田の口調が、ねちっこい。

「まあ、一通り読んでみてくださいな。言っときますけど今回鷗外の『舞姫』で、りんりんとあっこの二人は、読書感想文最優秀賞狙ってますから、そこんところよろしく。どっかの誰だかがこの子たちに対して、『どうせ振り仮名振ってないと読めないなら国語の教科書に載っている話でいい』とかご親切なことをおっしゃったと聞いてますが、ご心配後無用。ちゃんと言語も読めるしちゃんと文章も書ける。読解力たんまりありますからね、ご安心を」

皮肉たっぷり、目の前で対峙している「同級生のお母さん」に言い放った。付け加えた。

「あ、それと、この『舞姫』なんですけどね、私が絵を描いて、杉本さんがストーリーや構成をまとめたんです。どっかの漫画家が描いた本を丸写しなんて全然してませんからね。ちゃんとふたりで『舞姫』のふざけたストーリーととんでもない身勝手野郎のことについて話し合い、その上でダイジェストにしたもんですから。間違ってますよ！」

「おい、これさ、三日間でほんとに仕上げたのかよ？」

東堂がページを熱心にめくり、ため息を吐く。呆然としている上総にも、

「とにかく読んでみろよ。もうすげえわこれ」

勧めて来た。もちろん読む。返事の前にページがどンドンめくれてしまう。

桜田のアジケーションすら、もう聞こえない。

森鷗外の「舞姫」といえば日本近代文学の代表作でかつ、高校現代国語においては教科書に何らかの形で取り上げられることの多い作家ではある。上総も「舞姫」がどういう話で、桜田の言う通り、「とんでもない身勝手野郎」の悲恋ものであることはよく理解しているつもりだ。もっとも上総にはそこに描かれた「恋愛」そのものが理解できずそのまま記憶の片隅に追いやったような気がする。鷗外の作品なら、最近引き込まれたアンデルセンの翻訳「即興詩人」の方がずっとはまると思う。

そんなことはもちろん言わず、ただページをめくった。

ページの構成は左ページに漫画が、右ページに作品の説明および言葉の解説がまとめられている。大まかなあらすじも載っている。桜田が担当したという漫画もいわゆる四コマ漫画で「舞姫」のストーリーをまとめたものだが、きわめてオーソドックスだ。内輪受けパロディのようなものは含まれてなく、ただひたすら、物語そのものに寄り添っている。するする読んでいけるので、合計四十枚のコピー誌を読み終える頃には曲がりなりにも「舞姫」のストーリーと時代背景、なによりも主人公豊太郎の最低男ぶりが印象に残るようなまとめとなっている。

——ほんと、これ読むと弁護しようないよな。好きな相手を出世と引き換えに捨ててドイツから日本に逃げ帰ったって展開だもんな。けど杉本もきつと、解説のところ私情挟みまくってるよな。『身ごもった女性を見捨てるとは最低極まりない性格の豊太郎だが、結局は官僚の道を歩み、助けてくれた友達を恨んでいるという。人間として腐りきっている主人公を描くのが、日本文学の特徴ともいえる』とか。まずいよこれ。

ふと笑い声が聞こえて後ろを振り返ると、「同級生のお母さん」がひたすら頷きながら、嬉々として読みふけている。完全に、一読者と化している。

「さすが愛子と梨南、いいものをこしらえたね。これを自由研究にしたらどうかな」

「この一冊だけで私たちを評価されたら困ります、ね一、杉本さん？」

桜田の言葉に杉本も頷いて、あっことりりあんが拍手で見送るなか、封筒から何冊かコピー誌を取り出した。丁寧に駒方先生の前に並べ、正座して座った。上総の目の前に横向きで座っているかっこうとなる。

「理科編、数学編、英語編、いかがでしょうか」

にこりともせず、脇で見守る上総に視線をやるでもなく、抑揚のない口調で続けた。

「夏休み中、私と桜田さんはこのようにしてテキストをこしらえて参りました。これらのどこが、不良化の兆しなのでしょうか。よくごらんいただければと存じます」

拍手喝さいが床の間三人組から沸いた。杉本は上総を一切無視したまま、また床の間のグルー

プに混じり、静かに座り直した。

杉本の並べた他教科のコピー誌は、「舞姫」の作りとほぼ同じだった。

見開き左側にかわいらしい四コマ漫画が並んでいる。「舞姫」と比較するとコメディ色が強いのは、狂言回し役の登場人物がやたらと冗談を飛ばしているからだろう。上総からすると全く笑えなかったのは、苦手な数学の方程式を説明する台詞が全く理解できなかったからだ。作品の質ではない。

右側は大きな文字で丁寧に数式の説明がまとまっている。これも上総には是非が判断できずにいるのは同じ理由だった。普段杉本のノートを覗き込んでいる時に見かけるものとほぼ同じだとは思う。このあたりはやはり、

——狩野先生に評価してもらえないんじゃないかな。

理科はまだ上総の頭でもなんとか先を掴む事ができた。ページ構成はほぼ一緒なのだが、漫画のストーリーが打って変わってラブストーリー風に味付けされている。

——理科の先生と女子生徒との、実験を通してのラブコメと思ったらこいつらなんだよ、最後に卒業式で、理科実験室で結婚式かよ！

思わず目の前で正座したまま済ましている杉本の横顔をのぞき見る。なぜか杉本は上総のすぐ側に身動きせずにいる。床の間方面の三人組がわあきゃあ騒ぎながら、「舞姫」の感想について熱く語っているところからは距離を置いている。

「いかがでしょうか」

「いや、すごいな。さすが梨南、分かりやすくまとめてあるなあ」

「私はどうでもよろしいのですが、桜田さんの漫画はいかがですか」

ぎろりとにらみつける相手は東堂だった。さすがに自分の想い人を自分から無条件で称えるのは抵抗があるのだろう。わざとらしくあら捜しをしている様子だった。

「なんかなあ、女子っぽってか、これで言っちゃあなんだけど通じるのかなって気、するんだけどどうですか、駒方先生？」

「ほらほら、もっと愛子を褒めてやらなくちゃなあ」

「いや、それはわかるんですがね」

——出来がよすぎるからかえって困るんだよな。

東堂のなんとも言えず迷う気持ちは、上総もわからないではなかった。本音を言ってしまえば上総も、この見事な名コンビぶりに歯噛みしたくなることもある。なんでこんなに分かりやすく……それでも上総の頭では数学の内容は理解できなかったが……ドラマ仕立てでいろいろな展開を想像できるのだろうか。頭の中をかちわらんばかりの数学方程式を、ぼけとつっこみ展開の物語にどうやって構成できるのだろうか。その発想が着いていけない。いやなによりも、上総が言いたいのは、

——このめちゃくちゃな乗りになぜ、杉本がためらうことなく乗っかってるんだ？

感想なんて言えやしない。どう考えてもこのラブストーリーとかギャグ四コマ漫画とかを受け入れる杉本ではない。上総の知る杉本梨南ではない。

「我らが妹ちゃんたちのがんばりには拍手ですよ。これはもうほんと。杉本さん見直しましたよさすが学年トップ。立村がひいきするだけあるわ。ただなあ、俺言いたいのはね、このエネルギーをもっとなんかそう、明るくさわやかな方向に生かそうとか、そういう発想なかったのかなと思うんだ。無理に狭い部屋の中で籠らなくたってなあ。な、立村？」話を振られてもしょうがない。上総としては何も答えようがないのだから。ひたすら読むふりするしかない。

「だからあ、私が言いたいのはね、この『舞姫』ってこの豊太郎って馬鹿男がむかつくってことなのよ、わかる？ エリスだって赤ちゃんいたんだよ？ 口先ではエリスと一緒にクラスとか言いながら結局、気がつけば親友にすべてやなこと押し付けて、泣いてる振りしてさっさと日本に逃げ帰ったじゃん！ 結局結論そこじゃん！ いくら昔のかわつこいい文体で描いてて日本の不朽の名作だったって、皮はがしてみればそういうことよ。馬鹿な男は言い訳が上手、馬鹿な奴は臆病者、ってこと。なんなの最後の一言って。結局僕は悪くない、悪いのは親友だって恨み言言ってるのよ！」

「うん、わかるなあそれ。こういう男子っているいる。この前もさ、うちの学校の先輩の彼氏がこんな感じなんだよねえ」

りんりんと呼ばれている女子が笑いながら自分の恋愛話を一くさりする。東堂が少し顔をしかめている。

「先輩、この前できちゃったんじゃないかってすごく心配しててさ、私たちもいざとなったらカンパしなくちゃって言ってたんだよね。そうしたらそれ気のせいだったってわかってみんなよかったねって泣いてたんだ。けどそれははっきりする前に先輩の彼氏が友だちがさ、そんなのお前のせいだろ俺には関係ねえよとか言いやがってさ。結局別れたよ」

「あ、それあたし知ってる！ そんなことあったよねえ」

あつこと呼ばれる女子も相槌を打つ。

りんりんとあつこ、だが上総にはいまだに二人の顔の区別がつかない状態だった。正式に挨拶したりすればまた別なのだろうが、ふたりとも髪を茶色く染めているところ以外は髪型もウルフカットだし、顔立ちも何か忘れられない強烈なものはない。杉本と桜田というコンビが目立ちすぎていると言えればそれまでのことかもしれないが、とにかく印象が薄い。騒いでいる女子、というひとまとまりの認識でしかない。

よく目立つパーマのポニーテール女子・桜田が散らばりかけた話をまとめていく。

「そうよそうそう。私さあ、あつこから読書感想文の話聞かされてむちゃくちゃ頭来たんだよね。なんなのあれ。なんであつこやりんりんだけが教科書読むだけでいいっての？ あれだよね。夏休みの読書感想文ってさ、コンクールやるんだよね。そんなところでうまく進めたとしてだよ。教科書の奇麗事っぽいお話を感動した振りして書けて無理無理」

「ばかにしてるよねえ、私たち頭悪いかもしれないけど、日本語はちゃんと読めるよ。一応新聞もヤング欄くらいは読んでるよねえ」

「だからなのよ！ んでね、杉本さんがそれだったら誰もが文句言えない日本名作の『舞姫』で感想書いてやってあつこと言わせてやったらどうなのって提案だったのよ。あんたらも、ほら、こ

れならわかるでしょ？ 鷗外先生の古文だか文語だか落語だかわからない文章なんて読みたかないけど、こんな風にわかりやすくまとめられてたら、ほら、要点つかめるじゃん？」

「うん、私初めて、まともな日本文学読んだような気、する」

りんりんが頷く。

「杉本さんもすごいよねえ。てか、もうこの話愛子と杉本さんの作品でいいと思うよ。本屋で売っちゃえ売っちゃえ！ で、そのお金でぱーっと花火大会しようよ！」

「いいなそれ、花火したいね」

どんどん話がそれていく。てっきり桜田もそれにつられていくのかと思ったがさにあらず、さりげなく、りんりんとあっこが気づかぬうちに話を戻していく。

「じゃあさ、もうさっさと片付けちゃお。あっこが言ったじゃん、その女子の先輩の話。まあ生ものことだからあまり露骨には書けないけど、『中学生でもこういう奴はいる』て風には書き出したらどうかなって思うんだ。どうせ難しいこと書いたって先公たちのほうがわかってないよきっと。それだったらいかにも自分の身近な話題に近づけたように見せかけて、『私は『舞姫』を読んで、いつの時代も豊太郎みたいな身勝手に物事押し付け野郎はいるものなんだなと思いました』って書き出せばどう？」

「それいい！ 愛子、超、超、超天才！」

りんりんが絶叫し、畳に転がりながら笑いこける。あっこも続いている。杉本だけが無言で見守っている。にらんではない。

「でね、次はりんりん。ふたりとも同じ書き出しだったらまた、写してるとかかんぐられるから、『読書感想文をあっこと一緒に相談しながら書きましたが、ふたりともやはり同じ見方をしているんだなって思いました。男って馬鹿です』とか書いてやったらどう？」

「きゃあ、それ猛烈大うけ！」

今度はあっこが手を打ち鳴らして、ついでに桜田の頭をぽかりと叩いた。

「そう、そうよ、そうなのよ！ なあにが奇麗事の読書感想文コンクールよ。あんなわからない言葉で書かれたって感動なんてしないっての。でもね、こうやってストーリーだけでも拾い上げれば、よくあるラブストーリーだってことわかるじゃん？ この話だったら、いくらでもネタできるよね！」

「うん、わかるわかる！」

騒々しい三人組だが、確実に読書感想文「舞姫」は二人分、着々と書き綴られているのがわかる。原稿用紙二枚分。十分、桜田愛子の指揮により全くカラーの違う作文が形作られていくのを目の当たりにしている。

「いかがでしょうか、東堂先輩？」

杉本がまた、まっすぐな眼差しで東堂に問いかけた。

「これでも、桜田さんが何もできない不良少女と決め付けられるのでしょうか？」

脇にいる上総の方は一切目線を向けなかった。

「いや、あのさ、それはそうなんだけどね、いやあ、立村、お前何とかしてくれよなあ」

——何とかしようもないよ。こっち見てくれないし。

杉本は上総の側から離れない。本人がどう思っているかはわからないが、上総のすぐ側で正座したままにいる。斜め前に向かい合う形だが、一切顔を見ようとしない。

「でもほんとこれ、面白いわ。ねえねえ、これ本当に愛子ちゃんと一緒に書いたの？」

「その通りです」

首だけ直角方向に向けて杉本が答えた。「同級生のお母さん」たる彼女の名前を上総はまだ聞いていない。聞く必要もないだろう。ただジーンズの脚を崩して、一冊、また一冊と食い入るように読み込んでいる姿を見る限り、「やってるつもり」とは思えない。

——かなり読み込んでるな、この人も。

母のことをふと思う。上総が小学校の頃、一度も漫画らしきものを読んだことがなかったのは母の確固たる教育方針からだ。今ではさすがに友だちから借りて読むこともあるけれども、全く面白いと感じないのは感性の劣化だろうか。杉本と同年の子どもがいる親とはどうしても思えない。漫画なんて、大人が読むものじゃないとどこかで決め付けている自分の感覚がおかしいのだろうか。

「いやあ、ふたりともこっそりすごいことをしているなあ。梨南も愛子も、仲良しでよかったよかったと思っていたんだがなあ、ちゃんとまじめに勉強にも精を出しているし、友だちを助けようがんばってるし、本当にいい事づくめじゃないか」

——当たり前だろ。だから最初から言ってるだろ。

別に上総が文句を言うところではないのだが、つい心で叫びたくなる。

駒方先生は今にも杉本の頭をなでたくてならない表情で手をひらひら動かしている。もちろんそんなことしたら杉本から攻撃されるに決まっている。東堂だけがなんだか腑に落ちない顔でもぞもぞページをめくっている。

同級生のお母さん女性は晴れやかな笑顔でもって、床の間前の三人組に呼びかけた。

「ねえ、そんな隅っこいなくてもとこっちにおいでよ。雨もだんだん止みそうだよ。これだけ降ったら、これから虹が見えるよ、きっと」

確かに怒濤の大降りだった今朝からの雨も、ようやく落ち着いたしずくの音に切り替わりつつあった。上総は横から庭の濡れ具合を眺めた。すっかり灯籠も大きな石も、鉛筆の芯の色に染まっている。

——文句のつけようないはずなんだけどな。

なんだろう、妙な胸騒ぎがする。仲良し三人組の中にあえて入ろうとしない杉本の正座姿がどうも気にかかる。かなり長時間座っているのだが、足がしびれたりしないのだろうか。

——駒方先生も、俺に最初話を持って来た時はかなり大事っぽいこと言ってたけど、結果としては杉本たちがまじめに参考書まで作って勉強の手伝いしていたってことで、褒めこそすれ心配する内容じゃないだろ？

そんな力づくで止めるような内容でもない。狩野先生も同じことを言っていたけれども、そん

なに大人が心配して明るみに出すようなことなのだろうか。しかもいわゆる告げ口をしでかした張本人の女性も、ちっとも責めずに楽しんでいる様子だ。ますますわけがわからない。杉本はそのことをそういうもんだと受け入れているのだろうか。変だと思ったりしていないのだろうか。

少し静かになった三人組が、まじめな顔して原稿用紙に向かっている。小声で一生懸命桜田愛子が、辞書を片手に語りかけている。声は聞こえない。経った時間からして、そろそろ清書に入ったのだろう。原稿用紙一枚程度ならなんとかなる。

上総はかばんに手をかけた。杉本に呼びかけた。

「杉本、あのさ」

「はい」

「この本、まだ残りあるかな」

「いいえ、ございませんが」

「俺もこれほしいんだけど」

じっと杉本は上総をにらみすえた。

「別に先輩に差し上げるためにこしらえたものではありません」

「いや、それわかってる。でも、うちでもう少しじっくり読みたいなって思ったんだ」

「コピーするにも時間がかかりますし、今日は原本持って参りませんでした」

「いや、いいよ。コピーじゃなくたって」

上総は立ち上がった。かばんも一緒に小脇にかかえた。驚いた風に床の間三人組と東堂先生、駒方先生も上総を見上げた。

「まだここにいるだろ？　こんなすごいのかしらえられるんだったら、もっとみんなに見てもらったほうがいいなとも思うんだ。それで今思いついたんだけど」

杉本にだけ、見下ろす格好になるが語りかける。忌々しそうな顔しているが知ったことじゃない。泣かせるつもりはない。

「この前、関崎と話しててさ、自由研究の内容、見せてもらったんだ。アルバムで整理するんじゃないかって思うくらいたくさん写真撮っててさ。学校に提出するものとは別に、自分用にも取っておきたいからってことで用意したらしいよ」

別に狙ったわけじゃない。決して、誓って、絶対に。

「コピーだと製本するの面倒だけど、一ページずつ見開きで写真撮っていけば、きれいなまま保存されるし、フィルム残しておけば引き伸ばせるしいいかなって思ったんだけど、どうかな」

「カメラなんて誰がお持ちですか」

「いや、買ってくるんだ、これから」

ぎょっとした顔で見上げたのは東堂だった。

「おい、立村、買うって、カメラをか」

「まさか、違うよ。すぐ側にコンビニあるだろ。あそこで使い捨てカメラが置いてあったような気がするんだ。そこで三十六枚入りのもの二台買ってきて、それで一枚ずつ撮っていけば効率的かなとか思うんだ。杉本、どう思う？」

「おいおい上総、ずいぶん発想がぶっ飛ぶなあ。第一その、軍資金はどうなんだい」

からかうように駒方先生が呼び止める。上総が本気でそんなこと思いつくわけがないと言いたげだ。かえって火がついた。無視して杉本にだけ話し続けた。

「たぶん七十二枚分あれば十分保存できると思うんだけど。それでプリントアウトして、アルバムみたいにして、保存したいんだけど、そうだ杉本、これから買いに行くの手伝ってもらえないかな」

ここまで一気にしゃべり続けた。目の前の杉本がただあきれ果てた顔でもって見上げるのを、上総はたっぷり堪能した。魔法の言葉をちりばめたかいたった。

「わかりました。立村先輩が何をお考えかはよく理解いたしかねますが、ご自身でお求めになるのであれば、私には文句を言うことなどありません」

「それならすぐコンビニ行って来るから、杉本も来てくれるよな」

「当然のようにおっしゃらないでいただけますか。私はまだ、桜田さんたちをお手伝いする必要があるのです」

「いや、なさそうさぞ、梨南」

上総が言い返す前に駒方先生が手を打ち鳴らしながら杉本を促した。

「どうやら愛子が鷗外もびっくりの超名作読書感想文を用意してくれそうだなあ。梨南も少し、上総の手伝いしてやったらどうかな。これから本の撮影会というのもまた面白そうさぞ。上総はずいぶん面白い発想するなあ」

「発想と言うかなんというか」

不承不承ながら杉本も立ち上がり、先生たちに一礼すると上総の後に従った。文句は飲み込んだようだった。空いた席にすぐ、「同級生のお母さん」女性が滑り込み仲間に加わったようだった。上総の背に東堂がほざくのが聞こえた。

「なんてっかその、立村、あいつ、分かりやすすぎるよなあ。なぐっちの言う通りだわ」

——余計なお世話だ。いや、あいつらいったいどういう俺の噂してたんだ？

——虹が出てる。

タイミングよく雨が止んだ。同時に空の向こうが青々と輝き、かすかに色づいた放射線が浮かび上がっていた。杉本が立ち止まり、静かにそれを眺めていた。

「行こうか」

「はい」

言葉少なに杉本が付き従う。文句たらたらで罵倒の嵐かと思っていたがそれもなく、黙って空を見つめたまま歩いていた。コンビニなら向かいの道路沿いで見かけたのでそこで使い捨てカメラを買うつもりだった。

「立村先輩」

「どうした」

「ごらんになりましたか」

まっすぐ、形式的な杉本の言葉。感情がないように見えて、実は身いっぱい詰まっている。ふれるときっとぶるんと揺れる。上総は答えた。

「一通りは読んだよ。それと、確かに見た」

「ちゃんと見ていただけたということによろしいのでしょうか」

杉本が何を意味しているのかがわかるようで確定できない。上総は頷いて自分の感じたことだけ告げてみた。

「杉本が何か気になってることあるんだろうな、というのだけは感じてた」

「それはつまりは」

横断歩道を渡り、ゆっくりと歩いた。水溜りだらけの道を、杉本は靴をぬらさぬよう途中軽く飛び越えつつ歩いた。

「全く非の打ちどころないってことはよくわかったし、あれだけ参考書こしらえられるのなら何も悪いことしてないと断言したっていいと思うよ。でもなんで、駒方先生があんなに心配するのかが俺にはぴんと来なかったんだ」

「東堂先輩は」

「あいつは単純だよ。桜田さんが心配でなんないだけ」

——何がわかりやすい、だよ。お前の方だろ。

行きがけのつぶやきを思わず根に持ってしまった自分がいる。杉本が上総の横顔を見上げているのがわかる。もちろん表情は硬いままだ。

「でも不思議なのは、あの、同級生のお母さんって人だけど。杉本たちの作った参考書読んで思い切り笑いこけてたし、満足してたみたいだし。いわゆるPTAのお偉方ではなさそうな雰囲気だけど、あの人なんなのかな。なんでわざわざ見に来る必要あるんだろう」

「立村先輩にも、それは伝わったのですね」

頷いて同意する。さっきからどうもひっかかる違和感を、誰に伝えたらいいのかわからなか

った。少なくとも駒方先生ではないと思っていた。話すなら杉本しかいない。実際、虹を見上げて語るしか、今の疑問を伝えることはできそうにない。

「もしよかったら聞きたいんだけど、あの人はなんでお前たちのこと、学校側に告げ口しようとしたんだろう。文句あるなら直接乗り込めばいいのに」

「実際いらっしやいました。ちゃんと今のように私たち真面目に勉強してました」

「じゃあなぜ、学校側に知られるほど大事になったんだ？」

杉本は首をかしげたまま、目の前のコンビニ入り口を見つめた。

「とりあえず買うべきものを用意いたしましょう」

使い捨てカメラは思ったより高かった。それでも二台購入するだけの小遣いは残っていた。杉本もしばらく考えていたが、

「私もいただきます」

止める間もなく手に取りレジ台へと向かった。

「フィルムがあまれば、また別の機会に使えばいいことです」

そのまま外に出て、ビニール袋を差し出した。

「学校始まってからでよかったら、俺ちゃんと払うから」

「いいえ、私も写真を撮ってアルバムで保存するというアイデアは素晴らしいと思います」

——どうせ関崎の発想だからだろ。

狙ったことではあったけれども、杉本の口で肯定されるとやはり認めたくない。

「さっきのご質問ですが」

杉本はいきなり話を元に戻した。わざとゆっくり歩いているようだった。上総も依存はない。歩数を合わせた。

「今のうちにお話しておきますと、あの方は確かにかつて桜田さんの同級生だった方のお母さんです。その同級生にあたる人は現在、晶子さんと凜子さんと同じクラスにいまして、学級委員長を勤めているそうです。つまり、青大附中における評議委員長と同じ扱いをされているとのこと」

「そうなんだ。絵に描いた優等生ってことか」

杉本はポニーテールの根元を押さえるようなしぐさをし、リボンを片手で調えた。

「彼女とは会ったことがないので私はよくわかりません。ただ桜田さんがおっしゃるには、非の打ち所のない人気者だそうです。いばりくさったところもなく、思いやりのあり、天使のような方との評判です」

「それと今回のこととどう関係あるんだよ」

意味がつかめない。杉本は続けた。

「彼女はいろいろ問題をかかえたお二人を仲間に入れようとして、いろいろケアをなさっていらしたそうです。クラスになじませる努力ももちろんのことですが、過去のことをネタにしようとする男子連中からも守ろうとしていたようです」

「いいことづくめじゃないか」

吐き出したくなる。皮肉でもある。

「そうです。よいこと尽くめ、その通りです」

杉本は立ち止まり振り返った。虹はもう消えていた。

「問題は、その彼女を晶子さん、凜子さんはお好きでなかった点です」

——そういうことか。

ピースがぴたりとはまったような気がした。

「杉本、つまり、押し付けがましい親切だったってことなのかな」

「立村先輩にしては鋭いご指摘でございます」

嫌味としか思えない言葉で肯定された。

「優等生が嫌いなおふたりが、なぜ私を友だちとして選んでくれたのか正直わかりません。桜田さんと四人で集まっているうちに、おふたりが周りから見下されて面倒見られる屈辱的な扱いをされ憤っていることに気づきました。そこから先は立村先輩にこの前お話したとおりですが、彼女のお母さんである方はそれが面白くなかったようです」

「まあそうだな。せっかくよかれと思ってしてきたことが跳ね返されたからな」

「駒方先生のところには、過去の過ちをまた犯すのではという恐れの連絡があったようですが、実際様子をごらんいただいてそうでないことについては理解していただけたようです。それはあのお母様も一緒です」

「わかってるなら、なんでまたしつこく念押しする必要あるんだ」

ますます理解できない。杉本は立ち止まった。まっすぐ先を見据えた。横断歩道の一步手前だった。

「私たちがふたりの成績をよくしてしまうと、同級生の彼女の立場がなくなるからでしょう。完璧な彼女が私たちのような青大附中のごみ扱いされている人間に負けてしまうことがどうしても許せないのでしょうか」

「杉本はごみじゃないと思うけど、まあいいや」

「今回集まっていたいたのは納得していただきたいからです」

杉本は言い切った。

「同級生の彼女が懸命に学校で面倒を見ようとしていることは人間として素晴らしいことかもしれませんが。しかし晶子さんと凜子さんにとってはいやなのです。彼女がしようとしていることは私たちがお手伝いいくらでもできます。その証明さえできれば、二学期以降彼女はよけいなおせっかいをせずにすむでしょう」

横断歩道の信号が緑色に変わった。

「青です、参りましょう」

言葉も出ない上総の前を、杉本はすばやく遮り走っていった。

——杉本、気づいているんだろうか。

ゆれるポニーテールを見つめながら、空に言葉を飛ばしてみる。

——かつて、同級生の彼女と同じことをして跳ね返されたのが自分だってことを。

ふたりが買い物に出かけている間にほとんどの読書感想文作業は終わっていたようだった。というよりも散歩時間が長すぎたようで、すでに単なるおしゃべり会と化していた。

「上総も梨南とゆっくり話ができたようだね」

「買い物してただけです。これから写真を撮ります」

上総が返事するよりも先に、杉本がきっぱり答え、「舞姫」のコピー誌を一ページずつ見開きにした。その上で上総に預けたビニール袋を引ったくり使い捨てカメラの操作を始めた。すばやい。手馴れたものだ。上のねじを数回巻いた後どんどん撮影を進めていく。

「杉本さん上手だよねえ。こういうのまねできないよ私。ねえ」

三人娘が上から覗き込むようにして杉本の手業に見入る。うちひとり……たぶんりんりんの方だろうか……が杉本の右肩あたりにしがみつこうようにしてしゃがみこんだ。

「こんなに頭いいのに、杉本さんって面白すぎるよね」

「うん、そう思う」

褒めているのだから失礼なのだから分からない説明だが、杉本は気にせずにページをめくっていく。あっという間に一冊分の撮影が終わり、次に理科のコピー誌を用意した。すでに一台分のフィルムは消化済み、どんどん進めていく。

「コピーでもいいのになあ。学校始まってからでも悪くはないだろ」

東堂が声をかけるが杉本に一切無視されている。代わりに桜田が馬鹿にしきった表情で言い返している。

「何言ってるんですか先輩。いいですか、コピーなんて時間無駄なことしてる暇ないし」

「目的はあります」

杉本がいったん手を留めて、上総に向かい言い放った。

「コピーですと日付が入れられません。もちろん手書きでメモすることは可能ですが、もちろん使い捨てカメラだと入れることは難しいですが、その代わりに現像日を記録に残すことができます。それを考えると本当はふつうのカメラがよろしいのですが」

——なるほどな。このまままっすぐコンビニに行って現像してもらえばいいもんな。そうしたらレシートなりなんなりもらえるから、いつ現像したかの記録は残ると、そういうわけか。けどそれに意味あるのかな。

上総からしたら単に永久保存版として利用するにあたり、コピーよりも確実な方法ということで提案しただけなのだが、杉本には自分なりの思惑があるらしい。

「そうだ、梨南。ここから先、ひとつ頼みがあるんだ」

三台分の使い捨てカメラをすべて使いきった後、駒方先生が一声かけた。上総もそっと杉本にお茶を汲んで渡した。

「いったいなんですか」

「お前たちが外に行っている間に相談していたんだが、せっかくの参考書だ。お前たち四人だけ

だとどうももったいないような気がするんだよ。そうでしょう？」

「同級生のお母さん」も笑顔で頷いた。杉本だけが身構えている。

「みんなでじっくり目を通していううちになあ、せっかくなら他の人たちにも読んでもらったらどうかな、というご提案があったんだよ」

「私たちは、彼女たちのためにだけ作りたかったのです。他の人々のことは一切考えておりません」

「いや、もちろんそれはわかってるよ。梨南も愛子も、大切な友だちを守りたくてがんばっただけなんだからなあ。ただ、今これをざっと読ませてもらって、本当によくできると感心してしまったんだ。ほら、理科室のミステリーなんて、よく考えるよなあ。大笑いしたよ。これを本当は自由研究に提出してもいいんじゃないかと思うくらいになあ」

「別のテーマで私と桜田さんとは自由研究終わらせてます」

「いやそれもわかっているよ。愛子もそう話していたしな。ただ、これだけ分かりやすい内容を独り占めするのはもったいない。それを今、お母さんと話していてなあ」

東堂も特に何も怪しむ気配なく、にこやかに頷いている。ということは、上総たちが外に出て行っている間になんらかの相談が成されていたのだろう。上総も少し用心することにした。

「同級生のお母さん」は微笑みながら杉本に語りかけた。いかにも友だち風に、

「そうなのよ。本当にすごい！ 私が中学時代こういう参考書作ってもらえていたら、きっと理科好きになってたと思うんだ。私、典型的な文系人間でね、理科はいつも赤点ばかり。いつも居眠りばかりしてた。でもね、こういう風楽しく勉強する副教材があれば、きっと人生変わってたんじゃないかって思う。うちの『みよし』にも読ませてみたいの」

その名が出てきた瞬間、三人娘の表情がこわばった。少なくとも上総の目にはそう見えた。

「私はふたりのために作ったものを、他の人たちに回すことに対しては反対です」

杉本はかたくなに跳ね返した。

「最初から目的が異なります。私は、学校側から失礼極まる扱いをされ続けている晶子さんと凜子さんをなんとしても守りたい思いがございます。そのためにこしらえたものを、なぜ彼女たちを敵とみなす学校側に渡す必要があるのですか」

「違うのよ。学校の先生たちには見せない。それは約束するわよ」

食い下がる「みよしさんのお母さん」。

「私も、みよしからいろいろ聞いていて、学校側の対応には問題があるんじゃないかということをやというほど感じてるわよ。がんばっている凜子ちゃん晶子ちゃんがクラスであんな扱いされているかってこと、よくわかる。みよしもなんとかしなくちゃってがんばっているのは、親の欲目かもしれないけれど伝わってくるの。もちろん、いい子ちゃんぶった発言があるかもしれないけどそれはちゃんと親として、私が注意するつもり」

冷やかな眼差しを杉本は彼女に投げた。一言も発しない。

「でもそれとはまた話が別なの。この参考書、もちろんふたりのために作ってくれたものかもしれないけれど、少し手を加えればきつとうちの学校のみんなが救われるんじゃないかって気がする

るの。同じように読書感想文書くのに苦労している生徒だってたくさんいるし、私の中学時代みたいに理科アレルギーだったりとか、きっといるはずなの。その人たちを救ってあげるきっかけになるんじゃないかなって、本気で思うのよ」

杉本の表情がこわばったままなのに対して、東堂は笑顔で何度も頷いている。桜田愛子をちらと見て、誇らしげに冊子を眺める。少し態度が和らいできているようだ。

「俺も、それは同感です。俺の友だちに英語がからっきしアウトな奴がいます。ここにいる立村はもろそっちの方面ではエキスパートなんですけどまさに正反対なんです。長文がまずだめ。読んでいるうちに頭が痛くなっちゃって挫折しちゃうらしいです」

——南雲ってそうなのか？

具体的に聞いたことがなかった。単純に苦手なだけかと思っていたが、長文がだめなのか。単語力が足りないというわけではなかったわけだ。東堂はさすが親友、語る語る。

「さすがに文法はなんとかなるんですが、うちのがっこの授業ってやたらと長文読ませるんですよ。それでめげてしまうんだそうです。絵とかもう少しエンタメ 雰囲気のものでないと本気になれないとかで。まあそいつはビジュアルバリバリなので、絵とか写真とかそういうもんは得意なんで、できれば英語の漫画なんかテストに出してもらえねえかなあとか愚痴ってますよ」

——ほんとか？ 南雲ってそんなこと考えてたのか？

すでに前提は南雲で考えている。信じられない。上総に対し、予想通りとのメッセージなのか何度も頷きつつ東堂は続ける。

「そういうわけで俺としては、こういう感じで英語の教科書とか作ってもらえると、そいつみたいな英語に落ちこぼれている奴を救ってやれるんじゃないかという気は確かにするんですよ。我が妹ちゃんたちのことですからまだまだ見落としや問題点はあるとは思いますが、きっとこれを原点にしていろいろ工夫したりすれば、いいんじゃないかって気します」

——まあ、南雲なら、喜ぶかもな。

なんとなく杉本と上総以外の温度差が著しいような気がする。まだ唇を結んだまま表情の重たい杉本と、駒方先生を中心とする朗らかな軍団。そして飲み込まれそうな桜田愛子たち。上総は杉本の横顔だけに集中した。それが答えだ。

「ねえ杉本さん。そこまで私たちに頭下げてくるんだったら、いいじゃん？」

桜田がささやいているのが聞こえる。りんりん、あっこも続く。

「そうだよ、これで一泡噴かせてやったんだから、これでOK」

「愛子と杉本さんがどれだけすごかったかってことを、学校のばかどもに見せ付けてやれるんだもん、最高じゃない？」

大人たちの言う通りかもしれない。上総も自分が杉本の立場だったら頷いているかもしれない。しかし判断するのは杉本だ。何か、不穏な動きを感じ取っているのだろう。それが何かはわからない。ただ杉本が警戒しているのだけはわかる。

——杉本、どう出るか。

「わかりました。どうせもう用がないものです。また私たちは新しいものを作ります。好きなよ

うになさればよろしいのです」

しばし熟考した後、杉本は厳しい表情のまま告げた。

「ただし、今撮影した写真は、本日中に現像します。立村先輩にこちらは預かっていただきます。ちゃんとレシートも保存していただきます。そういうことになりますので、これから一緒に現像付き合ってくださいませんか」

「え、今すぐ？」

正座をきっちりしたまま、杉本は上総に向かい合った。自然とかしこまった雰囲気となる。

「そうです。立村先輩であればきちんと保存していただけるでしょうし、本日すべて立ち会っていただいたこともありますので何かあった時にも証人になってくださるでしょうから」

「証人ってなんだよ。そんな大事かよ」

思わず突っ込むが、杉本は説教する親のような顔のまま微動だにしない。

「今言えることはひとつだけです。ここにある参考書は、すべて桜田さんと私が凜子さん、晶子さんのために作ったものです。決して変わらない真実です」

誰ひとりその言葉の意味を追求しようとはしなかった。上総だけが真正面から紺色のワンピース姿で見つめる杉本の瞳に、ふつうとは違うものを感じていたようだった。

「そうかそうか、梨南がわかってくれればそれでいい。そういうわけで、じゃあせっかくだからこちらをお持ち帰りいただくかね。それともあとでコピーしようかね」

「コピーはこちらで用意いたします。きちんとお送りいたします」

杉本は立ち上がった。すばやく三人娘に語りかけた。

「私、これから現像してきます。今日はもう遅いから、先に帰ってて」

「杉本さんひとりで大丈夫？」

ぽかんとした顔であっこが尋ねる。即答した。

「立村先輩に手伝わせるから大丈夫。そのくらいの能力はある人だから心配しないで」

上総はあきらめて立ち上がった。杉本に頷き、あらためて大人たちに頭を下げた。

「まあ、立村、あさってゆっくり飯でも食いながら、なぐちも交えて今後のこと相談しような。しかし、お前も可愛い妹ちゃんとはいえ、苦労するなあ」

喉まで「人のこと言えるか」と出かけたがあえて耐えた。

「大丈夫。三年間こんな調子だから」

——役立たずとののしられなかっただけ、今日はまだましかな。ご指名いただいた以上は手伝うとするか。

雨上がりの街を歩くと、どことなくさっぱりした風が吹いて来るのが分かる。

「だいぶ涼しくなったよな」

「もう夏も半ば過ぎてますから」

感情のない声で杉本が答える。

「どこで現像しようか」

「学校の生協はいかがでしょうか」

夕方だがまだ開いているようであればそこがベストだと上総も思った。元来た道をそのままゆっくり戻っていった。「おちうど」を通り抜け、雑木林に差し掛かる。夕方近くでありながらまだ暮れの色はつかない空だった。

「杉本、聞きたいんだけどいいか」

「どうぞ」

「お前、最近どうした？」

突拍子もない質問だとはわかっていても、完全に人気のない二人きりであれば聞きたいことも出てくる。

「いきなりどうしたと聞かれましても」

「変だよ絶対にさ。一学期からそうだった」

「私が変わっているという評価は元からではないでしょうか」

「そういう意味じゃない。最近だって言ってるんだよ」

いらだってしまいそうで、あえて目を逸らす。自分でもなぜ、こんな言い方をしてしまうのかわからない。杉本は足を止めて上総に振り返った。

「もっと分かりやすく説明していただけますか」

「修学旅行で濡れ衣着せられた時だってそうだったし、今だって同じだろ。いつもの杉本が選ぶ選択肢じゃない」

「私の選択肢とはなんでしょうか」

たとえば、と頭をめぐらす。

「去年までの杉本だったら、間違っている連中に対してはためらうことなく叩きのめしていただろ？ たとえどんなに自分が不利になったって。終わったこと今更言うのもなんだけど」

「本当に女々しいですね」

皮肉も聞き流して言い募った。

「渋谷さんと藤沖の一件だって、全くの無実なんだから公の場で制裁加えたってかまわないことだと俺は思う。たとえ渋谷さんが自殺未遂で手首切っていたとしても、杉本がそれを背負おう義務なんてない。学校側が杉本に罪を押し付けて恥をかかせる必要なんてない」

「今更ながらその通りです」

「けどなんで杉本、このまま見下される立場に降りることにしたんだよ。二学期が始まってからどういう扱いされるか想像はつくだろ？」

「それもすべて考えました。その上での決断です」

「それだけじゃないさ。今だってそうだろう。どう考えてもあのお母さんにあたる人、何かたくらんでいるようにしか見えないし、駒方先生もただお人よしでお前たちを褒めているようには感じられない。東堂たちはあっさり騙されていたようだけど、杉本はなんとなくわかるだろう」

杉本はしばらく口を閉ざしていた。

「今回のことに限って申し上げれば」

周囲をみわたして他人がいないことを確認した後、

「立村先輩の観察力には同意します」

「だろう？ でもなんで」

「この前お話した際には明確でなかったことなのですが、あの同級生のお母様に当たる方は、どうやら私たちの作った授業のやり方をそのまま取り込もうとしているようです」

「取り込むっていったい何を。それこそお前らの作った『舞姫』のコピー誌を学校の副教材に使うとかか。ぎりぎりそれはセーフだと思うけど」

「いいえ、それだけであれば私も納得します。ここから先は私の憶測になりますが」

杉本は言葉を切り、かばんの中の使い捨てカメラを取り出した。

「たぶんあの方は自分の娘にあたる方に、その資料を持っていかせて私たちではなく自分たちが提案したものだと言いはるつもりなのではないでしょうか」

——そういうことかよ。

言葉がすぐには出てこなかった。

「今までの流れを申しますと、晶子さん凜子さんは去年までのさまざまな問題を乗り越えて現在のクラスにいます。優等生であるそのお嬢さんがいろいろと面倒を見ていたようですが、どうも親切がピントをはずしているようで抵抗がおありのようです。たまたま私と桜田さんと意気投合して一緒に勉強会を始めて盛り上がるようになりました。実際効果も上がっています。それが、彼女たちには面白くないようなのです」

「そう考えると話がつながるな」

「私たちはそんなこと考えたこともなかったので本日の集まりを設けました。あくまでも今日は駒方先生と東堂先生に見せ付けるためです。まさか、彼女のお母さんが現れるとは私たちも思っていなかったのが現実です」

「完全にサプライズだったのか」

「その通りです。私も彼女のお母さんがどう出るか用心していたつもりですが、やはり想像していた通りコピーを求められました」

「だから杉本は、手放したくなったということか」

「その通りです。ただ、桜田さんたちは自分たちを認めてもらえたことで舞い上がっています。私はそれを責めません。気持ちがわかるからです。ただその代わり、このカメラですべて撮影し、本日この場で現像を出すことによって、少なくとも今日の段階で私たちが作成したものである

ということを証明できます。私が保存するのではなく、部外者である立村先輩が持っていてくださるのであればなおのこと。先輩は仰いました」

上総の目をじっと見据えながら、

「他のみなさまにもお見せしていただけると伺いました。清坂先輩古川先輩にもぜひお見せいただければ証人はもっと増えます。噂が広がればさらに、さらに」

「わかった。そういうことか」

杉本の言葉を押し留めたのはうるさいからではない。上総はかばんをまさぐった。用意してきたものがあるはずだ。誰も通らない、雨上がりの夕暮れ時にだから渡しているものがあるはずだ。

「カメラ、まとめてもらってくよ。俺が全部プリントアウトする。それと生協ついたらばたばたしてたぶん忘れてしまうと思うから、ここで渡しとく」

真四角の小箱、そして手帳に挟み込んだ二枚の写真。差し出した。

「これ、ご褒美だと思って」

「ご褒美？」

杉本が首をかしげて、そっと受け取り写真に目を落とした。

「結洲に行った時に買った落雁。それと、帰り際に見かけた、手芸か何かのイベントでもらったポラロイド写真。これ、瓶に粘土を塗ったくって作っているらしいけど、そう見えないだろ？」

「きれい、です」

言葉を切りながら、杉本は片手で写真をかざして眺めた。

「何かの舞踊でしょうか」

「『結洲群舞』と呼ばれる地元の人たちの踊りらしいよ。俺も見たけど、この人形でみるような感じじゃなかった。よくわからないけど。人形の方がずっとリアルだと思う。これを作った人と話をしたけどさ、実際こういう衣装を着て見事に踊った人がいたらしいんだ」

「いつなのでしょう」

「わからないけど。杉本も観たいか？」

杉本は答えずそっと胸元にその写真を押し付けた。そのまま自分のかばんからハンカチを取り出した。真っ白いレースのものだった。丁寧に包んだ。

「ありがとうございます」

喜びの色など全くない、平たい口調のまま礼を言われた。上総が隣りに回って歩き出すと、杉本はじっと上総を見上げ尋ねてきた。

「これをお求めになられたのはいつなのでしょう」

「昨日の午前中。杉本好みかなと思っただけ」

唇をかみ締めるようにして杉本は俯いた。小声で、

「その通りです」

それだけつぶやいた。

いよいよ夏休みも最後の一日。しつこいようだが宿題は終わらせた。自由研究はもちろんのこと苦手分野の数学・理科のプリント集も友だちから答えをもらって手写しして完了した。国語の読書感想文も英語の長文翻訳も、すべて完璧だ。

——休みも最後だし寝てようかな。

朝六時に目が覚めた。上総にしては比較的遅い目覚めだが、明日からどうせ五時起きに切り替えなければならないのだから少しくらいとろとろしてたっていい。カーテン越しのあっさりした青い空はなんとなくのんびり散歩するにはよさそうだった。

——のんびり過ごすのもいいよな、たまには。

ずいぶんいろいろ出歩いた夏だった。旅行もしたし友だちとも遊んだしおいしいものを食べ歩いたし、充実していたの一言だ。結洲旅行では全くもって新しい出会いにも恵まれた。青潟という楽園の中でゆらゆらしていた自分にとっては、母の言いなりというのも悔しいがいい刺激になったと思う。

——あ、そういえばそうだ。

結洲の街を思い起こしながら、気がついた。

——戸高さんに約束のもの、送らなくちゃな。

上総はすぐ飛び起きた。

身支度を整えた。朝の涼しいうちに青潟駅に行くことに決めた。たぶん駅ならば観光案内のパンフレットなど置いてあるんじゃないかと思う。もし足りなかったら、歩いて市役所に寄ってもよい。一、二箇所くらいだったら直接どこか回るのもいい。そうだ、昨日大量に使った使い捨てカメラ、もう一台用意して青潟の街並みなど撮って送ってもよさそうだ。矢高さんもお母さんが青潟の人なのだし、それなりに自分のルーツに興味があるのだろう。

薄い生地の濃い青シャツを羽織り、ほぼ同色のベストも重ねた。あまり砕けた格好だとお堅い場所では浮き上がりそうだし、さすがにジャケットというのは暑さでまいりそうだ。万が一母と顔を合わせても「どこかのチンピラ」と罵倒されないだけのコーディネートはしたつもりだった。

「どうした上総、朝からめかしこんで」

朝が早い父は、自分でコーンフレークに牛乳をかけて勢いよく食べている最中だった。夏休みなど関係ない。平日の朝だった。

「別にそんなわけじゃないよ。少ししたら駅に行って来る」

「また友だちと遊ぶのか？」

「違うよ。観光関連のパンフレットとかまとめてもらってくるつもりなんだ」

理由をかいつまんで説明した。

「結洲でお世話になった人がパンフレット欲しがってたから送ろうかなと」

「ああ、矢高さんの息子さんだな。お前も本当に世話かけたようだからなあ。パンフレットだけ

でほんとうにいいのか」

首をひねる父。もっともだ。そんな無料の紙の束を送りつけるだけで礼を尽くしたことにはならないような気が上総もする。もちろん続けて説明した。

「それだけにはしたくないから、お菓子も用意するよ。カステラとか、栗饅頭とかそのあたりがいいのかな」

「二十歳過ぎだろう？ その矢高さんも。母さんから聞いたが今年地銀に就職が決まったと聞いたがな。優秀な息子さんなんだろう。お前の気持ちだけでもいいような気はするが、いかんせん親としてはそれだけでは落ち着かないな。そうだと上総。何時頃出るつもりだ？」

自分の分のコーンフレークを盛り付け、ブロッコリーとイチゴを混ぜ合わせて牛乳を最後に流し込んだ。今朝はなんとなく、生ものが食べたかった。

「朝のうちにいこうかな。涼しいうちがいいしさ」

「急ぎじゃないんだろう？ もしかまわらないのなら、昼過ぎにでもお父さんと待ち合わせしないか。午前中に取材があってそれから夕方五時までちょうど時間が空いてるんだ。せっかくだし昼飯を食べてそれから少し青潟の街並みを見て歩こうか」

「父さん、それ、会社をさぼるってこととイコールだよな」

不良社員でいいんだろうか。子としては認めたくない父の一面だ。

「いや、それは心配するな。定食屋で食べるくらいの時間はあるんだよ。お前がいろいろやらかした時にはいつも融通利かせてくれていた会社だ。お前の事情でと伝えておけば、あうんの呼吸で受け止めてくれるよ」

——父さん、あんまりそんないい加減なことしてたら、会社首になるよ。

決して不真面目な社会人と考えたくないのだが。かなり不安がよぎる。

「それなら、青潟駅の待合室で十二時前に待ってなさい。その頃には仕事も一段落するだろう。腹いっぱい食える場所に連れて行くから余計なもの食べたりするんじゃないぞ」

——父さん、完全に俺が食べ物に意地汚い性格だと誤解してるよな。

さりげなくプライドが傷ついた。

まだ時間もだいぶある。父が車で出かけたのを待ち、ベストだけ脱いで洗物をさっさと済ませた。結局家事作業も夏休み中は全く手抜きせずに行ったので、普段よりも部屋がきれいになったくらいだ。洗濯物もあつという間に終わらせて脱水まで完了したので、すぐに全部干しておいた。外に干しっぱなしにしておけば 出発前には乾きそうなくらいの風が吹いている。

——父さんと出かけるんてめったにないな。

母を含めて、であればしょっちゅうだが、父子でというのはめったにない。

たまに親戚筋へ挨拶に出かける際は母抜きのこともなくはない。ただほとんど車での往復なので食事をして、顔をつき合わせてといったおきらかなムードではない。

——別にいいのに。なんだかかえって面倒だよな。

とは思うが、さすがに小遣いのことを考えるとすべてを賄うのはきついのも確かだった。昨日、杉本から預かった三台の使い捨てカメラを現像するにあたり、予想以上の金額が飛び出してい

ってしまったため、今月は経済しなくてはならない。

——昼ごはん、豪勢なところに連れて行ってくれるとか言ってたけどほんとかな。

少なくとも父と一緒に出かけるということは、いくばくなりとも昼ごはん代が浮くということになる。まさか学食レベルということはないだろうから、完璧に胃袋を空にして出かけていいと思いたい。ああ見えて父の舌はかなりうるさいのだ。母の料理を基準としているので、中途半端な外食は好まない。上総が作る日頃の食事も、「母と同じ味付け」の点だけは評価してくれているが、それでもかなり物足りないらしい。

——と、いうことは。昼ごはんは期待していいってことだよな！

気づいた。やはり父は自分の息子をよく観察している。食べ物で釣られる自分が情けない。

その十九 高校一年夏休み二十五日目・立村上総の天敵と対決する日々 (2)

青潟駅に着いたのは十一時半過ぎだった。もちろん自転車を持ち出した。朝方に比べると多少気温も上がっていたが、ふらふらになりそうな暑さではない。久しぶりに思い切りスピードを上げて車道脇を走り、髪もぐしゃぐしゃにしたまま駅裏の自転車置き場につけた。もちろん、だいぶ腹も空いた。

念のために待合室を覗いて、父が到着していないかどうかを確認する。

——よかった、まだ来てないや。

次に駅構内のきっぷ売り場をうろつく。今までまじまじと観察したことはなかったのだがここには青潟市の観光名所や公共施設を取り上げたパンフレットがたくさん並んでいる。五種類のラックを眺めると、子辺の男子修道院あたりの地図も用意されている。今更ながら気づいたのだが、パンフレットの中には結洲市にまつわるものも混じっている。

——最初からここに来ていればよかったんだな。

何度も駅には出入りしていたというのに。これこそ灯台もと暗し。でも今の目的にはぴったりだ。用意しておいた大きめの封筒に、一部ずつパンフレットを引き抜いて詰込んでいく。夏休みの旅行客もかなりうろうろしているので上総ひとりが悪目立ちすることもない。

二袋分つめたがまだ足りない。父がどういうところへ連れて行ってくれるかはわからないが、かなりの分量になるのは覚悟せねばなるまい。矢高さんもさぞ驚くことだろう。さらにお菓子もセットとなるのだから大荷物になるだろう。

——それだけのことしてもらったんだから、当然だよな。

すっかりぱんぱんになったかばんを抱え、上総は待ち合わせ場所の待合室へ向かった。だいぶ椅子が埋まっている。どこか空いているところを目で探し、壁際の一角にいた家族連れが立ち上がったのを見つけた。タイミングを逃すものか。すぐに隅を陣取った。

時計はまだ四十五分を回ったところ。父の仕事が時間通りに終わるものとも思えない。一応は雑誌記者なのだからインタビューが長引いたとか取材でてこずったとかイレギュラーな出来事がないとも限らない。

——何か飲み物欲しいけど、食事まずくなるのもあれだよな。

結局、食べ物にすべて釣られている。しょうがない、これこそ健康な十五歳の少年なのだからと自分で自分を慰める。上総がかばんから文庫本を取り出そうとした時だった。

「よお、こんなところでどうしたんだ、いいところに会ったなあ」

——ちょっと待て、その声もしや。

背中を何千匹もの蛭……見たことないけど……がよじ登ったような感覚が蘇る。

夏休みに入ってから一度も耳にしたことのなかったその声。

厳密に言えば、終業式で強引に連れて行かれたファミリーレストラン。

まさか、そのまさかだ。

「あの、お久しぶりです」

覚悟を決めて顔を上げる。唇をかみ締める。かばんにつっこんだまま本をぐっちゃりと握りこむ。

「明日から学校だな。どうした、今日はこれからどこか出かけるのか？」

「いえ、これから父と」

口を開きかけすぐ閉じた。まずすることは、立ち上がって一礼。それのみ。弟子は師匠を敬うのが勤め。どんなに目の前で脳天気になっている奴が夏ど真ん中の青春勘違い野郎教師であったとしても、だった。

「菱本先生、先日はご馳走様でした」

結局、食べ物のお礼でごまかすしかできなかった。

取りすがりでさっさと駅からとんずらしていただきたかったのだが、上総が腰を低くして接した来たのを誤解したのか、菱本先生はわざわざ隣りに座り込んできた。肩掛けかばんをぶら下げている。青大附中も高校と一緒に二学期始業式を迎えるはずだから、教師ともあろうものがこんなところで油売っていいとはどうしても思えないのだが。

「お父さんとか。旅行か？」

「いえ、調べ物がありその手伝いをしてくれるという話だったので、それに甘えるつもりできました」

あいまいにぼかすのも骨ではある。自由研究とか言えばおそらく羽飛や美里との話題につながってしまうだろうし、「友だちと会う」ともなれば下手したら杉本との誤解を招く交際疑惑までわきあがってしまうだろう。幸い霧島とのつながりについてはばれていないと思いたいがわからない。霧島に張り付かれている件についてはどうだろう。狩野先生が担任となると言うことは教師である以上知らないわけがないだろうし、そうなる最近霧島が上総にくっついていることも情報取得済みの可能性が高い。よって、余計なことは口にしたくない。

「お前のお父さんは穏やかそうな人だからなあ。お母さんと違っていろいろ話もよく聞いてくれるだろう？」

父親になったばかりでまだ舞い上がっているのか、勘違いしたことを聞いてくる。鈍い振りをして聞き流した。

「よくわかりません。あまり家では話をしないので」

「いやいやそれはないだろう。よく学校でお会いするが、やはりお前のことを心底気にかけているありがたいお父さんだろう。もっと感謝しないとだめだぞ」

——あのさ、この暑さで早く溶けてもらえないかな。

手をかばんの中につっこんだままだったのに気づいて抜いた。汗ばんでいるのが分かる。時計をさりげなく眺めたがまだ五分も経ってやしない。父が時間通りくるという期待など一切しっちゃあいないが、この時ばかりは念力で時間の早回しをしたい気分だった。

「夏休みはどうだった。充実してたか」

「はい、それなりに」

愛想は振りまかずに事実だけを淡々と述べるに徹した。

「どこか行ったのか？ 今日とは言わなくても」

「おとといまで結洲に用事があって二泊三日で出かけてきました」

「結洲か、ずいぶん地味なところだなあ。墓参りか」

——親戚なんていないって。それとうちはお盆七月なんだよ。一緒にするなよ。

心では激しく毒づきつつも、顔は穏やかに整える。いわゆるポーカーフェイス。

「母の仕事の手伝いです」

「お母さんか！ お前もあのお母さんだと大変だろう。裏表のない人だからかえってやりやすいかもしれないが、いいか。女性はすべてがお前の母さんみたいなタイプじゃないってことは覚えておけよ」

——そうやってさっさと相手をはらませるといふわけか。順番間違えて。

自分に矢が戻ってくるのは承知していてもむかついてくる。カンガルーの袋から飛び出してきた可愛い我が子の話をでれでれしながらしゃべらないだけまだましだ。

「ところでお前のお父さんはいつ来るんだ？」

「そろそろ来ると思います」

言えばさっさと退散してもらえるんじゃないか、そう考えた自分が甘かった。

「仕事の合間に可愛い息子とコミュニケーションをとろうとするというのは、そうそうかんたんにできることじゃないよな。特にお前のお父さんのようにマスコミのいろいろ厳しい仕事だったらなおのことだ。そうだ、せっかくだし俺も挨拶しておこうかな。なかなかゆっくりとお話することも難しいこの頃だったし、せっかくお前と顔をあわせたことだからいろいろ伝えておきたいこともあるしな」

「あ、でも先生」

とんでもない方向に進みつつある。胸に金のエンブレムが施されたポロシャツをさわやかに着こなした、とてもだが生後半年以上の子を持つ父とは思えない青年教師・菱本守。さぞ、巷の女性たちからは人気を博したことだろう。上総も何度となく他クラスの連中から菱本先生の担任という立場をうらやましがられたことがある。喜んで交換してやりたい気持ちになったことも数しれず。自分では善意の塊のような顔をして上総の生活に土足で踏み込み、正義感ぶって張ったおすわ説教するわ、極め付けが卒業式英語答辞中のあれときた。全力でのろってやりたいが超能力に恵まれないわが身にはやりきれないことである。

「たぶん父は仕事を終えてから来るはずですし、インタビューなどですとかなり時間も押すんじゃないかと思います。先生もお忙しいでしょうから今日は」

丁重にお断りしたつもりなのだが、まずかった。火に油を注いだのと一緒だった。

「いやいや、今日はすでに朝一番で用事があって学校に行ってきたんだが、あっさり終わったんだ。当番の先生もいらしたし、明日に備えて鋭気を養うため散歩でもするかと思っていたところだったんだ。いや、なんとベストなタイミングだ。ほら、お前の父さんじゃないか？ あの人は」

言うやいなや菱本先生は立ち上がり、晴れ晴れとした笑顔で手を上げた。

——父さん、十二時までまだ五分もあるってのになんでだよ。
夏休み最後の一日、最悪のピリオドが打たれる予感がした。

——あいつとうちの父さんとの年齢差ってどのくらいだろう。

最初はびっくりしていた父だが、すぐに社会人の礼儀でもって丁寧に挨拶をした。その後ハブのようにくらくつく青春勘違い熱血教師を無碍にあしらうこともできず、結局、

「いやあ、ここの海鮮丼は初めてですよ」

うに・いか・たらこがてんこ盛りのどんぶりを目の前にしてため息吐きながら食事をする羽目となった。

「本当は早朝が一番いいんでしょうが、なかなかそうもいかないもので」

「それでもやはりうまいものはうまいですな」

——ひとりで食べるんだったらどれだけおいしかったんだろう。

上総も無言でオレンジ色のつややかないくらの粒を箸で掬い、ご飯と一緒に口へ運んだ。値段を見たが、ほとんど学食価格と言ってよい。それでいてご飯よりも海鮮のほうが圧倒的に多い。はみ出しそうだ。舌でぶちつつぶれた時の甘さにご飯のやわらかさが溶け合い、まさに口福感で溢れたひととき、本当はそう思いたい。

——うにもこんなにたっぷり入ってるのって見たことないな。

たっぷり盛り込まれた濃い目の黄色見があったうにも、もちろん一気にほおぼる。母には生ものを食べる時は気をつけるよういつも注意されていた。せいぜいこのどんぶりの三分の一程度食べられればいい方だった。

「いかも新鮮ですね。今度家族と来よう」

「これも本当は朝イカが一番適度な甘みがあり、歯ごたえ含めてお勧めなんです」

ずいぶん父もこだわりを持っているものだ。菱本先生と父との会話はほとんどが駅前近辺の食事処に関する情報交換のみ。実のある会話は全くしていないように聞こえる。実際一番意味があるのはこの海鮮丼につきる。

——父さん、早くこの暑苦しい奴、おっばらってくれないかな。

すばやく頭の中で計算した。今年父は三十六歳、ということは担任菱本よりも五歳は上のはずだ。五歳といえば、小学一年と五年生の差。なんとかならないものか。

とはいえ男性三人ともなれば、食欲旺盛も当然のこと。あっという間に平らげた後、追い出されるように店を出た。

「こういう場所はあまり長居ができませんね」

「そういうものです。我々はたまたますぐに座れましたが、ほら、まだ行列ができていますよ」

父が落ち着いて、今さっき出てきたばかりの食堂前を眺めて言う。

「なかなか息子を連れてゆっくり飯を食うという機会もないものですからね」

「こちらこそいい店を発見できました。ありがとうございます」

会話が成り立っていないような気がする。上総なりの観察眼で判断する限り菱本先生の暑苦しい会話を父は適度に聞き流し、それでいて相手を立てるような言い方でもって終わらせているよ

うに見える。さすが同じ血が流れているだけある。このテクニックは盗まねばなるまい。

「先生は、これからどうなさるご予定ですか。明日から学校ですし、いろいろご準備で大変でしょう」

さりげなく父が問いかける。うまく追っ払ってくれるきっかけとなればいいと願うが、

「いえいえ、さっき彼にも話しましたが、僕は今日午前中担当でしたのでこれからゆっくり過ごす予定です。子どももまだ小さいですからオムツを替えたりなんんりの手伝いもしないと、嫁さんにどやされます」

「この時期の育児を手抜きすると一生恨まれますよ」

「もっとも」

また意味もなく笑い合う始末だ。そろそろ親子の時間だと認識してさっさと消えてくれればいいのだが、菱本先生は汗をタオルで拭きながらにやつき顔で上総をちらりと見た。

「申し訳ないのですが、あと三十分程度お時間いただくことは可能ですか？」

父に向かい、また丁寧な口調で尋ねている。そりゃそうだ。五歳違いだ。礼儀である。

「ああ、でも先生こそお忙しいのではないですか。私は別にかまわないのですが、それこそ家族サービスも大変でしょうし」

「いえ、この機会だから早めにお伝えしておきたいことが一点ございまして。上総くんのことです」

「上総のことですか？」

少し驚いたのか、父も立ち止まった。もちろん上総も硬直したままあとに続く。待合室でも確かそんなことを話していたような気がする。すっかり忘れていた。もちろん嫌な予感もセットでくる。

菱本先生はまた上総をちらりと見て、父に対して頷き返した。

「オフレコの部分もありますので、よろしければどこかお茶を飲めるスペースなどあればよいのですが」

——おいおい、まだこいつ張り付いてくるのかよ！

一人息子の教育問題で、「オフレコ」扱いまで求められるとなれば、ふつうの親なら誰もが菱本先生の言いなりになるだろう。残念ながら父は「ふつうの親」だった。いつもは常識はずれの価値観で立村家をきりもりしているくせに、こういう時に限って「よくある高校生の父親」に戻ってしまう。

結局父は、駅前ロータリー商店街の喫茶店を選んだ。

上総からすれば、「なぜ」と言いたくなることの連続だった。

——まさか、父さんここ、行きつけにしてるなんていわないよな。

確か真向かいには「佐川書店」があり、その二階からは入っていくところまで丸見えだったという話を関崎から聞いた。雑居ビル二階の珈琲専門店だった。

二階まで階段で昇り、そこからガラス戸を押す。この前と同じく、つとんげんな態度のウェイトレスが迎えてくれた。ただ上総の顔は覚えていなかったらしく、先日よりは愛想よく、「

いらっしゃいませ、お三方ですか」と確認している。もちろん父相手にだった。。

「奥の席は空いてますか」

様子を伺うようにして、ウェイトレスはすぐに案内してくれた。

「珈琲を三人分。ブレンドで」

「かしこまりました。ミルクはお付けしましょうか」

父が上総に向かい、「どうする？」と尋ねる。もちろん首を振る。

「先生はいかがですか。この珈琲は濃いので砂糖があったほうがいいのかもかもしれませんね」

「では遠慮なく、砂糖とミルクで」

——甘いのが好きなのかこいつ。

ブラックで十分おいしいと思える自分の舌に、少しだけ誇りを持つ。

「それにしてもずいぶんよいお店をご存知ですね。さすがです」

「仕事の打ち合わせで利用する喫茶店は開拓しておかないといろいろ大変ですからね」

また無駄話で時間を持たせている。父からしたら自分の息子が中学三年間へまばっかりやらかしていて、五歳下の担任に対して頭が上がらないのだろう。その張本人たる上総としては何も言い返すことはできない。高校入ってから、麻生先生まで交えて上総を常識はずれのスパルタでしつけようとする母に対し懸命にかばってくれたとも聞く。そんなの感謝する気、さらさらしない。ただ父が恐縮することには申し訳なさすら感じる。

すぐに三人分のブレンド珈琲が運ばれてきた。父の目線で一礼し、

「いただきます」

すぐにカップを持ち上げた。杉本梨南と隣り合いながら珈琲とケーキを食べながら……でもちっとも腹の足しにはならず……過ごした赤い皮の椅子は座り心地がよい。ただ右隣に父が、まん前にあのにつっき天敵野郎のお気楽面ときては、せっかくの珈琲もただの泥水に代わってしまう。

「それでは、先生、うちの息子の件と伺いましたが」

ウェイトレスが席から離れたのを父は確認し、すぐに周囲の席空白状況を把握した。

「近いうちに麻生先生からもお話があるかと思われませんが、できるだけ早いうちに対策を取っていただきたいというのが僕の所存です。彼の、将来のためにも」

言葉を切り、菱本先生は上総を真正面から射すくめた。鋭い眼差しで思わず上総もたじろいだ。

「大学推薦の基準に関する噂が、最近いろいろと流れているかと思われませんが、立村さん、その件についてはご存知でしょうか」

「存じております。小耳には挟んでおります。仕事の関係で御校の改革に関するさまざまな噂は、いやおうなしに入ってくるものです」

五歳差の父は、見事打ち返した。

——なんだか最悪な展開だよな。

珈琲が冷めていく。菱本先生が熱気を漲らせて身を乗り出してくる。

「さすがです。僕も教育現場にいる傍らそれなりにアンテナを張っているつもりではおりましたが、まだまだ箱庭意識が抜けない体たらく。すでにご存知のことも多いと思われそうですが、まずは教師としての説明をさせていただきますか」

「ぜひに、お願いいたします」

静かな笑みを漂わせつつ父が促す。

「青大附高のシステムはご存知でしょうが、今までは附属持ち上がりの生徒たちを青潟大学へ進学させる形がメインでした。中学入試で絞込み、それぞれの生徒に対して心からいつくしみ、独特のカリキュラムによって人間形成を培っていくといった形です」

「確かに。私も連れ合いも、その校風に惚れて息子を受験させたようなものです」

「恐れ入ります。開校以来その伝統は守られてきておりましたが、最近その方針を変更しなくてはならないという動きが出てきております

「方針とは」

短く父が切り込む。

菱本先生はまた上総の顔をのぞくようにして見た。もちろん無視したいが、父の前ではそんな礼儀知らずなことができるわけがない。神妙に話を聞くのみだ。

「かいつまんで申しますと、これまでの青潟大学における教育方針は、それぞれの個性を生かし、生徒たちの特性を伸ばしていくために学業を始めさまざまなカリキュラムを用意してきました。生徒会や委員会、部活動、その他もろもろです。しかし近年の社会を巡る状況の変化もあり、特出した個性よりも全人格をバランスよく育てるための授業態勢へと舵が切られているこの頃です」

「つまり、そういうことですか」

父は頷きながら話をまとめた。

「お気遣いいただき恐縮なのですが、先生が仰ることはすなわち、うちの息子がこれから先学んでいくに当たっての覚悟を求めている、ということでしょうか。いえ、私も以前より仕事の関係もあって御校の教育方針転換には関心を持っておりまして、上総のように全体のバランスがあぶなっかしい生徒たちには少し厳しい環境になりつつあるのかと、感じていたものですから。凶星でしょうか」

——父さん、あっさり結論に行っちゃったよ。

菱本先生の回りくどい言葉と違い、父はすでに答えを用意していた。隣で上総は父の横顔を覗き込み、穏やかな笑みが全く消えていないことに驚いていた。いつか読んだ「週刊アントワネット」の教育記事は、やはり父もなんらかの形で関わっていたものなのかもしれない。

「すみません。きちんとお話ししたかったのですが、そこまでお考えであればもう僕が説明するの

も蛇足になりますね」

「いやそういうわけではないですよ、菱本先生。私としては、あれだけ中学三年間ご迷惑をおかけした息子に対して、卒業した今でも気遣っていただけるといったことに、深い感謝の念を抱いております。連れ合いも同じ意見でありましょう。私どもも上総にどのような教育を施していけばよいかという件は非常に悩ましいものでありまして、むしろこういう機会を設けていただけたおかげでこの子にも何か、よい影響が出るのではと期待しておる次第です」

「あ、ええ、そんな、恐縮です」

何、どもっているのだろう。父のばか丁寧すぎる言葉で舞い上がっている菱本先生を上総なりに冷ややかな目で見据えた。いつのまにか汗が滂沱に流れている。父は落ち着いてさらに言葉を重ねた。

「上総もここにいることですし、よい機会です。親としての意見を申し述べさせていただきますが私もこの子にとって青大附属高校の教育方針変更がプラスになるのかマイナスになるのか、判断しかねているところがございます。バランスの取れた生徒を育てるといっているのであれば、上総のような成績にむらのある、こういってはなんです性格的にもいささか難しいところのある子どもはかなり悩みどころなのではと感じずにはおれません」

——難しい性格に育てたのどこのどいつだよ。

心で罵倒するがもちろん顔には出さない。

「できれば大学まで出したい気持ちも山々なのですがいかんせん、こればかりは努力するのが私ども親ではなく、この子ですのでこれからどうなることやらといささか心配なところもありますね。最近、連れ合いともよく話すのですが、青大附属の先生たちは本当に働き者だと。先生もせっかく早く学校が引けたのならばすぐにお帰りになりたいでしょうに、私ども親子のためにお時間を割いていただき、その上で貴重な情報まで伝えてくださる。これは誰にでもできることではありません」

——こいつが無駄すぎるエネルギーの持ち主なだけだっただけなのに。なんで父さんこうやって褒め称えるんだろう。褒め殺しか？

「父母会でもよく伺いますよ。青大附属の先生たちにはプライベートというものがほとんどないのではないのでしょうか？」

「いえ、それは、やらされてやっているものではないんです。僕は物心ついてから素晴らしい教師たちと出会い、それにインスパイアされる形で聖職の道を選びました。そりゃあ、生徒たちは成長しますしさまざまな事件も起こります。プライベートのお話が出ましたので白状しますが、家族に関しても身を固めざるを得ない場に立つまでは全く考えたことがないという情けない奴でもあります。ですが、僕はこの青潟という街で、この学校という小世界の中で、誰よりも子どもたちが成長していくさまを追いかけ応援しているその瞬間がたまらなく好きなんです。僕にとって教師とはまさに天職。神が与えし職とも言えます」

いきなり熱く語り出す菱本先生。この話を三年間、うっとおしいほど聞かされてきた上総たち元D組の連中。また始まったと鼻で笑いたい。しかし父はペースを崩さずに、

「素晴らしい教師陣の愛情に包まれて育つ子どもたちは幸せものです。そのことを翻す気はあり

ません。ただ、先生、これだけはどうしても人生の先輩としてお伝えしたい。出来のよしあしはともかくとして、一人息子を育てた者としてですが」

ゆっくりと、何かをかみ締めるかのごとく、それでも笑みは絶やさない。どこか不気味だ。

「先生は、もっとご自身のご家族に時間を割かなくてはなりません。本来であれば私は立村上総の父親としてありがたく先生のご助言をいただくべきでしょう。いえ、ぜひお伺いしたい。これからうちの息子がどのように青大附高で過ごしていくべきかの道しるべを見出すためにはいくらでも情報が欲しい、やまやまです。しかし」

また言葉を切る。今度は父が上総をじっと見つめた。笑ってはいなかった。

「今日に限って申し上げれば、先生、明日からまた教師としてのあわただしい日々が始まることでしょう。先生のご気性であればこそ、『聖職者』として、全力投球なさることでしょう。子どもたちにとってはありがたいことです。ですが、先生の背中をできればもう少し振り返り、今が可愛い盛りのお子さんの側に付き添ったり、すっかり疲れ果てているであろう奥様を労ったりと、本来最優先して行うべき仕事があなたにはたくさんあるはずですよ」

「あの、お言葉ですが」

空気を何度も飲み込むようにして言葉を発しようとする菱本先生だが、父は動じない。

「学校に関するお話については休みが終わってからぜひ、この前と同様連れ合いおよび麻生先生も交え四人で膝を突き合わせて語り合いたいところです。私にも親としての考えがございますし、連れ合いにもそれなりの価値観があります。また上総もこの夏いろいろな経験を重ね多少は、まあ親の鼻真目ですが大人になったのではと思うところが見え隠れしています」

そうか？と言わんばかりの顔で菱本先生が上総を覗き込む。目を逸らしてやる。珈琲を勝手に飲んで知らん振りをする。

「今までのようなエレベーター式進学方式が大幅に変わるであろうことは私も把握しておりますがもう少し状況が固まってからでもよいのではないのでしょうか。先生、どうか今日ばかりは全力でご自宅にお戻りいただき、大切なご家族のために時間を使ってあげてください。そうしないと、必ず、後悔することになります」

最後の留めは、

「私の父親としての後悔は、この子の可愛い盛りに母親へすべて育児を任せてしまったことにありますからね。その分今はたっぷり子育てを楽しんでおりますが、もったいなかったと時々ため息が出てくることがありますよ」

父は座ったまま一礼した。それが合図だった。菱本先生が顔を真っ赤にしたまま立ち上がった。

。

「すみません、いや、ありがとうございます。恐れ入ります、あ、あの」

感極まったのか、激しく腕で顔をこすった。どう見ても教師の姿には見えなかった。

「僕は、全力で家族を愛します！」

——父さん、ほんと、魔法使いかもしれない。

丁寧に礼をして背を向けた菱本先生を見送りつつ、上総はすっかり冷えたブラック珈琲をゆっ

たりと飲んだ。

菱本先生の姿が消えた後、ウェイトレスの女性が再度注文を取りに来た。

「お代わりはいかがですか」

すぐに父が、

「ではもう一杯ブレンドで」

「承知いたしました」

注文を済ませた後、深い息を吐いた。

「お前が露骨に嫌な顔するから先生にお引取り願ったわけじゃないんだからな」

「でもなんであんな言い方したの」

「あれじゃあ家庭壊すぞ、あの先生も」

すでに珈琲を飲み終えていたのか、カップの中は空だった。再度ウェイトレスによりゆっくりと継ぎ足される。ふんわりと濃い珈琲の香りが漂う。

「菱本先生がお前たちみたいな悪ガキどものために全身全霊で働いていることはよくわかるし、それはありがたいことなんだが、人間は身体が資本だろう。せっかく休みだというのにわざわざ子どもの進路について時間を割くというのは、過剰労働だろう」

——そうだよな。と、いうか、してほしくないよな。

父は改めて珈琲カップを持ち、上総の手元にあるかばんに目を留めた。

「それにしてもずいぶん膨らんでるな」

「父さん来る前に駅で、矢高さんに渡す資料まとめてもらってきたんだ。無理に歩かなくてもいいよ。このままうちに帰ってもいいし」

「明日から学校だしそのほうがいいな」

そう言いながら、両手を組んでテーブルに置いた。また上総の顔をまじまじと見つめた。

「せっかくだからお前の質問に答えておくか。つまりだな、今日先生がわざわざお前のために時間を割いてくださったのは、お前も耳にしていた通り青大附属高校の教育方針が大幅に変わることと、それに伴う大学推薦の基準の件を少しでも早く知らせたかったのだろうな。お前がどれだけあの先生に迷惑かけているかは自覚しているだろうから繰り返さないが」

——向こうから仕掛けてくるからだよ。

今回に限り父に一方的説教をさせておこうと思う。上総は黙っていた。

「もちろん先生は純粹にお前の将来を心配して、矢も立てもたまらずに呼び止めたのだろうし、お父さんがたまたま側にいたこともあって対策を一緒に練りたいと真剣に考えていたんだろう」

「なんとなくわかる」

「学校でもそのあたりの話は出てきてないか？」

知らん振りを通すのもうそ臭いのできっちり答えた。

「あくまでも噂止まりだけ」

「生徒たちの間でもそういう話になってきているのならそういう方向で動きつつあるんだろうな。父母への説明はまだ行われていないし、あるとすれば二学期以降だろう。父さんとしてもこの

ままお前がすんなり推薦で青潟大学にあがれるのかそれ以外の選択肢を考えねばならないというのは、大きな問題だよ。学費などいろいろあるのは想像つくだろう？」

「わかってるよそのくらい」

「どこまでわかってるんだかなあ。まあいい。お前にはできれば大学まで進学してもらいたいというのは、父さんも母さんも一致している。もっと言うなら青潟に住んでもらえれば大学進学してからもお前の語学力で翻訳の手伝いしてもらったり、母さんで言えば外国人のお客さんの通訳してもらったりといろいろ助かる部分もある。このあたりは便利屋扱いだろうがその辺は大目に見とけ」

「ただ働きかよ」

「文句あるか」

噴き出さざるを得ない雰囲気思わず笑った。

「とにかくだ。お前の中学時代とはだいぶ推薦の基準が変わってきている以上、親としてもこれからお前の将来を真剣に考えねばならない時期に来ていることは確かだよ。今日の話でなんとなくつかめたか」

「前から知ってる」

「公立の高校生たちは早い段階で受験勉強を始めているし、もし青潟大学の推薦が難しいとなった場合の対策として、他大学の受験も視野に入れておく必要がある。このあたりも、わかるな」

「わかってる。考えてるよそのくらいは」

——いや、考えてなかったかもしれない。

父には承知しているようなことを言ってみたけれども、まだ現実味がない。噂は確かに学校内で飛び交っているし、はずされる対象のひとりが自分であることもうすうす感じてはいる。でも、さすがに英語科トップをキープしていればなんとかなるのではという気もしている。

「お前見たいに学科にばらつきのある成績だと国公立は難しいだろうから自然と選択肢は私立大学になる可能性が高い。そこからうちで捻出できる学費と、場合によっては仕送り代、その他いろいろ入用なものを考えると父さんの細い腕だけではなかなか厳しいぞ」

「それもわかってる」

不意に思い出した。「ファビアン」を巡る会話を。上総は自分の分の珈琲カップを飲み干した。完全にアイス珈琲化していて味わいもなにもない。

——父さんも書きたいテーマがあるんだよな。

具体的にそれが「何」なのかはいまだにつかめないまま。父も「ライフワーク」とかなんとか話しているし、下手したら上総や母の生活にも影響してくるものなのではと危惧しているくらいだ。相当なタブーなのだろうと予想はしている。

いきなり破産するとか生活できなくなるとかそういうことではないにしてもこれから先、今まで通りののんびりした生活ができなくなる可能性は多分にある。青潟大学に進学するのであれば少なくとも下宿代は発生しない。アルバイトも可能だろう。しかし、他の大学に進学なんてことになれば予想もしない出費がかさむのは上総の頭でも想像するのはたやすい。

——あの勘違いアットホーム野郎の押し付けがましい親切はさておいても、父さんの言う通り学校側の方針転換については本気で考えたほうがいいのかも说不定な。

父だけではない。この夏休み、狩野先生、野々村先生という二人の教師と語り合うことによりなんとなくだが「語学オンリー」の自分を耕していこうとする動きが感じられる。偶然の一致だとは思。何か動いているとは考えにくい。それでも自分の直感を信じるならばそれはひとつの答えだと思う。

「父さん、ひとついいかな」

思い切って口を開いた。父もゆったり微笑みながら答えた。

「言いたいことあるか」

「進路のことだけど、よくわかった。調べて見る。けど、少し時間がほしいんだ」

「それはもちろんそうだよ。父さんたちももちろん必要だ」

「もしかしたら語学以外の方向で見つかるかもしれないから、少し探ってみたい気はするんだ」

「たとえばどんなのだ？ 英語以外にか？」

にやにやする父を上総は少しにらみつけた。

「わからない。けど、先生たちからは日本文化にも興味を持ってとか言われている」

「そう怒るな怒るな。先生たちというと狩野先生とかあのあたりかな」

「狩野先生だけじゃないけどさ。でも、青潟大学英語科以外の進路もこれから探ってみようという気はしてる。もちろん、一番いいのは推薦で英語科に進学できることだから、できるだけ他の科目も本気でやるつもりだけさ」

「本当にそうしてくれたらありがたいんだがな」

「けど、もし他の私大に行くしなくなったら、その時はなんとか父さんに負担かけないような方法があるかもこれから調べてみるよ。うちの学校には特待生制度があるけれど、そういういわゆる奨学金をもらえるかどうかとか、いろいろあるから」

言うべきか言わないべきか迷ったが、思い切って口に出した。

「少なくとも父さんのやりたいことを邪魔するようなことはしない、約束するよ」

父はしばらく黙り込んでいた。珈琲のソーサーを指で動かし、時折上総の横顔を見つめては小さく頷いていた。

「青大附属はいい学校だよ。泣き虫だったお前をここまできっちり大人にしてくれるんだから」

その上で大きくため息を吐いた。

「本当はこのまま大学まで面倒見てもらいたいところなんだがな」

喫茶店を出た。すでに一杯目の珈琲支払いは菱本先生の手で行われていて、父のお代わり分だけ払えばよかった。

「それとだ上総。今日のことなんだが、絶対に他言するんじゃないぞ」

「なぜ」

「はっきりしたことは分からないが、菱本先生がお父さんたちに話そうとした内容は、学校内の

機密事項である可能性があるんだ。特に父さんは小さいにしろマスコミの一員だ。全くの善意の塊だとは承知しているが、やはり痛くない腹を探られて職が危なくなる可能性だってある。余計なことは言うなよ」

「わかってるよそのくらい」

頼まれたって言うものか。思い出したくもない。上総は駅のロータリーに向かった。父も腕時計を覗き込み、

「これからお前を連れて行きたいところがある。自転車で来たんだろう？ ひっぱってきなさい」

少しまじめな顔で指示を出した。

父に促されて自転車を押したまま、青潟市立図書館まで歩いた。駅からさほど遠くない。公園のど真ん中ということもあり人もそれなりに多い。ちょうどひまわりと彼岸花がそれぞれの場所を陣取って咲き誇っていた。その裾根には小さな露草の塊も見受けられた。

「お前、あまりここに来ることないだろう」

「そうだね。ほとんど学校の図書館で片付くし」

「もっともだ」

自転車置き場につけて、上総は父と一緒に建物の中に入った。戦前の由緒ある建物をそのまま生かしたもののことで歴史が漂っているのは感じるが、それ以上に雰囲気为重たくうっとおしい。入りたくないのにはこの空気感覚にも理由がある。

「建て直さないのかな」

「予算がままならないんだろう。二階に行くぞ」

大理石の階段を昇る。こういうところにはふんだんに金をかけていると見える。一階が一般書籍、雑誌中心で二階が児童書と専門書中心にまとめられているようだ。

「どの本棚が目的なの」

「行けばわかる。もっとも今日はほとんどの学校が夏休みも終わりだから、混みあっているかもしれないな」

嬌声が響き渡る児童書ルームを横目に父はまっすぐ、最奥の専門書棚に向かう。

「歴史なんだ」

「想像できなかったか？」

「そういうわけじゃないけど」

あまり関心ないし、とは言えなかった。窓際の閲覧席には学生たちが私語もなくひたすらノートにシャープペンシルを走らせている様子が伺える。その一方でかなりの年配者も目立つ。

「ここの棚を見て、どういう本が多いか大体見当つくか？」

「郷土史が中心だということくらいはわかるけどさ」

『青潟市史』と銘打たれた金文字の分厚い書籍が数冊並んでいる他、青潟の街に関する懐かしいエッセイや写真集、その他青潟ゆかりの人々を綴ったものも多い。

「他に共通点見つけられるか？」

「ええと、ほとんどが青潟新聞社で出版した本ばかり、くらいかな」

いわゆる地元に着した出版社が出しているということくらいだろうか。ジャンルも幅広く単なる旅行記録や子辺の修道院に関する記念誌らしきものも混じっている。

「もしかしてこういう本があるってことを矢高さんに勧めろってこと？」

「いや、そういう話じゃないんだ。上総、このページを看一看」

父は「青潟いまむかし」なる写真集を取り出した。大判だが思ったよりも軽い。手馴れた調子でページを繰り、上総の鼻先に突き出した。受け取って眺める。

「二十年くらい前の、青潟の写真？ 青潟というか、品山？」

「よく気づいたな。今と比べてどう思う？」

「何にもないね」

もともと青潟市内と比較すれば田舎っぽいところがある街ではある。今に比べると店らしきものも個人商店の看板ばかりで、コンビニやスーパーらしきものが見られない。ページ見開き一杯にカラーの品山のスナップ写真が並んでいたが、ここまで静かな雰囲気とは思わなかった。

「まあ、確かに、何もなかったな。ここに家を建てた時はそうだったよ」

本を受け取り、父は改めてその写真を眺めやった。

「今は比較的品山も拓けてきたし、マイホームを建てる人も増えてきている。地元の人たちだけではなく、青潟市内からわざわざ引っ越してきた人も多い」

「うちは、父さんも母さんももともと品山だったっけ」

「違うよ。どちらも縁がない。たまたまこの土地に家を構えただけだ。だからこの街の気質や風習に慣れるのには、かなり時間がかかった。苦労したのはお前だけじゃないんだ」

やはりそうだったのかと納得する。

「ただ、今まで接してきた世界とは全く別の文化が育まれていたこともあって、ジャーナリストの端くれとしては興味深いものがあったのも確かにある。そのこともあって、十年くらい前から仕事の合間にいろいろ取材などもして情報を集めていたんだ。お前や母さんには内緒でな」

「母さんにばれなかったの？」

上総からしたらそちらの方が奇跡である。父は頷いた。本を閉じた。

「その点は抜かりなかったよ。母さんはお前の学校のことで苦労していたからな。無駄な心配はさせたくなかった。取材といってもお前の父親ということがわかればいろいろと面倒なことも出てくるから、その点はいろいろ工夫をしていたつもりだ」

全く上総の記憶では思い当たる節がない。上総は父に向き直った。

「今も品山のこと、調べているの」

「もちろんだ。それで今、いろいろと打ち合わせをしていたところお前に見つかったと言うあれだ」

——「ファビアン」か！

すべてがひとつにつながった。

——そういうことか。父さんのライフワークってこういうことか！

慌てて尋ねる。頭の中から溢れる疑問。押さえきれない。もちろん声は潜める。

「けど、それ、母さんに隠す必要ある内容なの？ この前言ってたよな。いろいろな問題が起きるかもしれないとか、母さんの仕事にも影響するとか、それから、タブーとか。そういうのって、品山のことに関係するものなのかな」

「詳しく話すと夜が明けるからはしよるが、その通りだ」

父は言い切った。

「今、父さんが調べていることは個人的興味の範疇なんだ。だからみな重たい口を開いてくれるんだよ。昔、小さな子どもたちの連続神隠し事件が起きてからいろいろと面倒なことが増えた

とか、その他いろいろ事情があることも聞いている。でもそれはすべて、誰にも話さないと言う前提で集めたものなんだ」

「でもそれ、本にするってことが前提だろ」

「最終的にはそうしたい。品山の現代史としてまとめたい、それが父さんの願いだ。誤解されることの多い品山と言う街を知ってもらうきっかけとして、なんらかの形で出したい。でもな、それは父さんの意気込みだけにすぎない。できれば寝た子を起こしたくない、そのまま静かに過ごしたい、そう考えている人たちだってたくさんいる。その狭間でこれからさあどうしようか、と毎日考えているというわけなんだよ」

「下手したら青澗から出て行かないといけなくなるとか、そういうこともありえる、ということ？」

「最悪の場合はそうだろうね。村八分になるかもしれない。その辺りの覚悟は必要かもしれない」

かなり深刻な話をしているはずなのに、父の口調は軽かった。笑いすら浮かんでいた。

言葉を失ったまま本棚を見つめている上総に、父はゆっくり語りかけた。

「なぜ、いきなりこんな告白めいたことを話したかと言うとだ。別に家がなくなるかもしれないから覚悟しろとか、母さんがショックを受けて卒倒してしまうとか、そういうことを想像したからではないんだ。たぶんそのあたりは母さんもお前も大丈夫だろう。楽観はしているよ」

「楽観ってたって、それ」

言いかけた上総を押し留め、父は笑顔で続けた。

「自由研究でお前もいろいろ勉強しているようだし、先生たちからも身になるアドバイスを受けている様子もよくわかった。友だちからもいい刺激を受けているようだし、それは喜ばしいことだと思うよ。ただ、さっき菱本先生がおっしゃったように進路の方針がいろいろ変わってくるとお前もさぞ、落ち着かなくなることだろう。英語だけじゃないからな、世の中は。お前の性格上高校三年間でやりたいことをピンポイントで見つけ出すなんて器用なことが出来るとも思っていない」

凶星なので黙っていた。

「父さんとしては、ライフワークの品山研究をもうしばらく続けていきたいと考えているんだ。まあ、お前が高校を卒業するまでは熟成させたいところだな。ただ大学に進学してからはそろそろ野心を丸出しにして動くのもいいかもしれないと心積もりしている。できればそれまでにお前がどんなことが起きたとしても やっていけるだけの力をつけてほしいんだ。それこそ品山を追い出されるようなことがあったとしても、父さんと自分とは違う価値観の持ち主だということを鑑みて、堂々と生きて行ってほしい」

厳しいことを笑顔でさらりと言う父の顔に見入る。照れくさそうに自分の耳をひっぱっている。

「ま、難しいことだがな。三年間なんとかしよう」

「それより、そういうことにならないように三年間、下地作りをしたほうが良いと思うけどな。」

とりあえず母さんには言うつもりないけど、このままばれないままでいけるとはとてもだけと思えない」

「どうでもいいところでお前は鋭いな」

褒められたのかなんのかわからないが、とりあえずは笑ってみた。

何も借りずに図書館を出た。もう時間は三時半を回っている。

「今夜の食事はどうしようか」

「夏休み最後だしなあ。お前も少し手抜きしろ。今日は早上がりできるから、父さんが帰ってからピザでも注文しようか」

「賛成」

仕事場に急ぐ父をハンドル押さえて見送りつつ、上総はゆっくりと駅前に向かい自転車を押して歩いた。今からなら四時半前に家に着くだろう。風呂の準備をして、何か適当に菓子でも食べてようかと思う。矢高さんに送る予定の書類もまとめねばならない。父と話し込んでしまい、適当な菓子を用意するのも忘れてしまった。

——あの、熱血馬鹿教師さえ来なければ。

正直、時間を浪費させられたような気がしてならない。とは言うものの、もし菱本先生が割り込まなければ父から「ライフワーク」の秘密話を聞かされることもなかったわけで、それはそれでよかったのかもしれない。そう考え直した。

——父さんもこれからどうするつもりなんだろうな。

舗装された道に出て自転車を漕ぎ始めた。まだまだ明るい。夕日の気配すら感じられない。このまま朝につっぱしてもいいくらいの太陽がてかっている。

——母さんがどれだけ仰天するかは見て見たい気もするけど、でも、そんな品山のタブーを取り上げるような本を書いたりしたら絶対に修羅場だよ。秘密なんて誰だって暴かれたくないじゃないか。父さんもなんでそんなことに興味もったのかな。そこまで言うなら俺にその原稿か資料かなんか見せてくれたっていいのにな。父さん帰って来たらもう少し詳しい内容聞いてみよう。どうせ母さんに告げ口なんてする気ないし。。

ふと、上総は自転車を歩道に寄せて一度立ち止まった。人通りは幸いほとんどない車道沿い、住宅街を通り抜け青々とした田んぼの連なりを眺めやった。

——まだ先のことだよな、まだ三年間あるし。

頭によぎった瞬間、目の前に広がるごく当たり前の青濁の景色が身体にぐいと食い込んでくるようでめまいがした。まぶしすぎる太陽を瞼とじたまま見上げ、上総はそこに見える薄赤い闇を見つめた。言葉が入れ替わった。

——俺にはあと、三年しか残されてないんだ。

振り回される夏

<http://p.booklog.jp/book/78121>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78121>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78121>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ